平安京跡研究調査報告

第 20 輯

平安京右京六条三坊

財團法人 古代學協會

京 都

平成 16 年

1．ＳＲ 0001 獣骨出土状況

1．調査地遠景　（南西から）

2．調査地遠景　（北東から）

1．Ⅰ・Ⅱ区全景（南より）

2．Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区全景（北より）

1．ＳＥ 670 井戸枠（東から）

2．ＳＥ 670 遺物出土状況（北西から）

1．ＳＸ 820　（北東から）

2．ＳＤ 4206　（北から）

1．ＳＥ 1842 出土浄瓶

2．ＳＲ 4200 出土灰釉陶器壺

3．ＳＸ 820 出土須恵器甕

4．ＳＸ 820 出土越州窯系青磁瓶

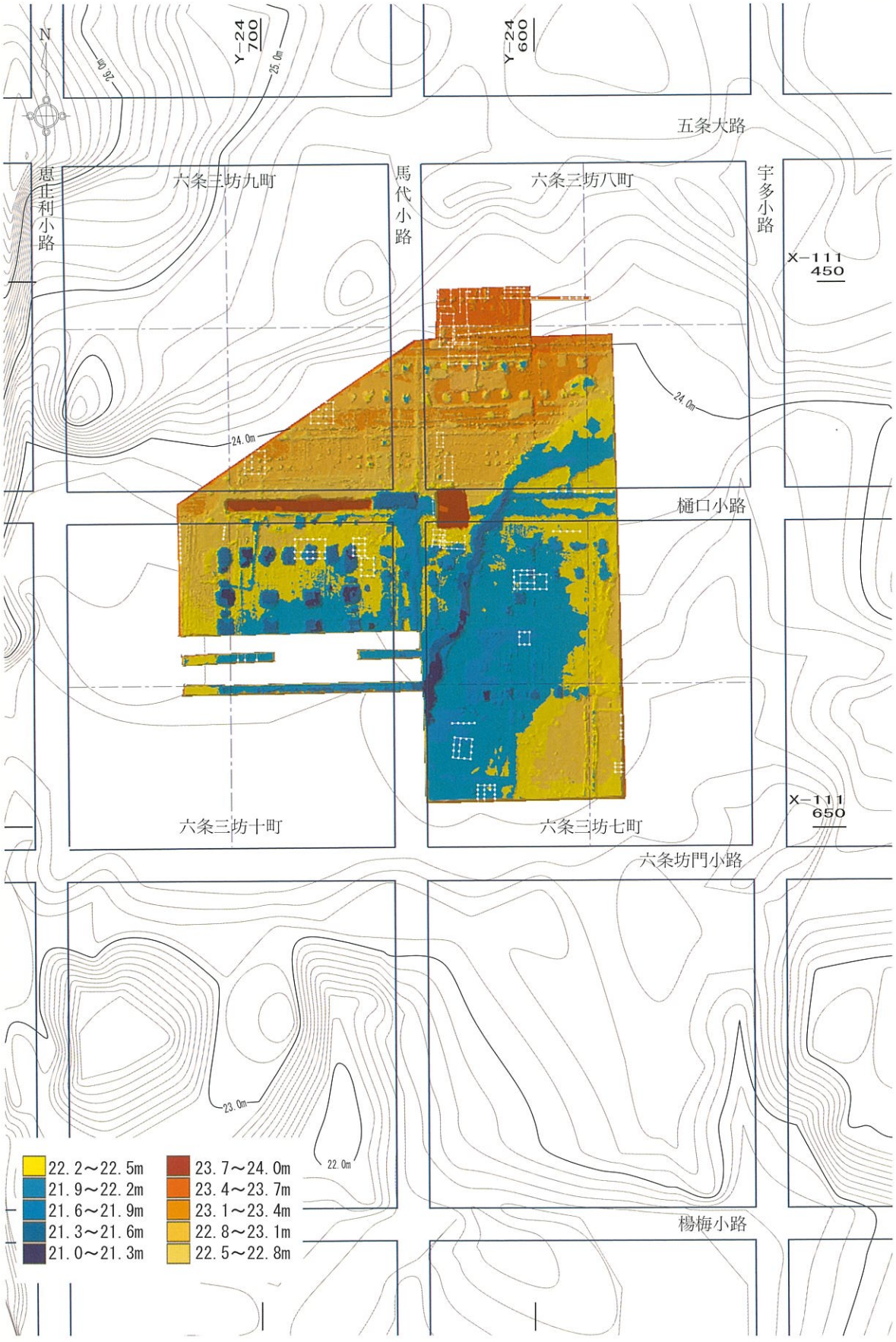
1．ＳＲ 0001 出土鳥紐蓋

2．九町宅地内出土越州窯系青磁合子蓋

3．ＳＥ 670 出土鎌

4．ＳＲ 4200 出土木印

巻頭図版第八



1．周辺現況地形・調査区旧地形図（1/2000）

序

財団法人古代学協会・古代学研究所は，昭和32年平安宮勧学院跡の発掘調査を開始して以来，今日まで平安京に関する調査を数多く実施してきた。それらに関して調査研究が終了するごとに，その成果を『平安京跡研究調査報告』として上梓してきた。この度，京都市右京区西院追分町に所在した平安京右京六条三坊の研究調査報告書に序文を草する機会に至ったことは，洵に欣快に堪えぬ次第である。

私は，昭和38年，『古代文化』第10巻第2・4号（当協會刊）に，『右京の侍従池領』という一文を寄せた。それを記述するに際し，『今昔物語』にみえる羅城門の記載などから，平安時代中頃の九条・朱雀大路の辺りが如何にも淋しく荒れ果てた，盗賊の棲家などにふさわしい場所であったかの印象を受けたことによる。しかし実状として右京職は，15世紀まで存続していたことが知られており，右京が実際どのような状態であったかを究明する必要に駆られた。それを知る手立てとして「侍従池領」に注目したのであった。その結果，右京は概して南半部には湿地が多かったが，乾燥した地域にはまだまだ貴族の邸宅や庶民の舎屋が建ち並んでおり，京内にある土地が放任されていたのではないことを明らかにした。その最も著しい例として「侍従池領」などの空閑地における庄園化を指摘したのである。

財団法人古代学協会・古代学研究所としては，平安京右京を具体的に調査する機会にこれまであまり恵まれなかった。それが平成12年，株式会社島津製作所の五条工場跡地での平安京右京六条三坊の発掘調査を手がけることになった。それは，平安京の発掘史上，一度の調査において，最大の面積（約21,000㎡）を占め，上述の論文で注目した「侍従池領」と六条大路を挟んだ北側に位置している。まさにそれは今から40年ほど前に書き起こした拙稿を検証すべき内容を含んだ遺跡の実態を明らかにできるものであった。この調査は，平安京に関する研究のみにとどまらず，律令制都城の京域に対しての再考を促すものであり，都城制研究に計り知れない貢献をなすものと言えよう。それだけに本書の刊行は待ち望まれた感がある。本書は短期間の限られた整理時間のなかで，論述，編集されたため，意を尽くしきれない点も多々指摘されるかも知れない。しかしながら深夜に及んで心血を注ぎ，整理作業に励んだ全員の努力に対し，敬意と満腔の感謝の意を表したい。

更に感謝に堪えないのは，自然科学の分野で活躍されている奈良文化財研究所の松井章，京都大学大学院の丸山真史，株式会社京都科学の西口裕泰の三氏が，共同研究者として研究に参画することを快諾され，その成果を寄稿して頂いたことである。

平安京に関する研究は，これまで文献史を中心に進められ，近年考古学の成果により従来知られていなかったことが次々に明らかにされつつある。しかしながらその研究は，漸く本格化した感がある。当協會は，これまで平安京に対して強い関心を抱き続け，それなりに業績を公にしてきたが（『平安京提要』，その他多数参照），向後もその究明に絶えることなく微力を捧げる決意である。

なお，調査期間中，並びに整理・報告書刊行に際して関係各位から御厚意，御尽力を賜わることが多かった。ここにその芳情を銘記し，謹んで篤く御礼の辞を申し述べる。

平成16年初春

財團法人　古代學協會
理事長　角　田　文　衛

例　言

1．本調査は，株式会社島津製作所五条工場跡地の再開発にともない，財團法人古代學協會・古代學研究所（理事長角田文衛）が事業者負担金によって実施したものである。

2．本書は，京都市右京区西院追分町 25-1，25-2 に所在する平安京右京六条三坊七・八・九・十町の発掘調査報告書である。

調査は，財團法人古代學協會・古代學研究所第２研究室室長堀内明博を調査主任として，同助手桐山秀穂，同非常勤助手の坂本範基を調査員として現地調査をおこない，整理作業には非常勤助手坂本範基の協力をえた。

調査期間は，平成 12 年（2000）11 月６日から平成 13 年（2001）10 月 15 日までの本調査，2002 年９月 24 日から 11 月８日までの設計変更にともなう追加調査のあわせて約一年を要した。なお，現地調査に際し，土地所有者である株式会社島津製作所，工事施工者である株式会社竹中工務店に多大な御協力をえた。記して感謝申し上げます。

3．現地調査にあたっては，つぎの方々の協力をえた。

青木貴宏，家原圭太，石田由紀子，猪原三晴，岩切真由美，岩本行二，上田育子，魚津智克，大原瞳，岡崎（旧姓柳原）志保，奥田寛美，加藤幸子，狩谷雅子，桑宮慶一，児島正弥，坂根由紀子，白瀬順子，水津真実，須田佑子，張漢賢，デミデンコ･セルゲイ，冨永里菜，中村晃子，中西美世，長谷川由佳，船越信，細川敏寛，前岡孝彰，松原卓史，真鍋（旧姓佐々木）淳子，森杉伊津子，山中信人

4．現場の写真撮影に際しては，村井伸也･幸明綾子･本田憲三（財団法人京都市埋蔵文化財研究所）の協力をえた。また主な遺物の写真については，安孫子雅史・坂本範基がおこなった。

5．作業は，株式会社発掘建設 LINK（宇治市伊勢田町大谷 53 － 1），有限会社 TSK トレイドサービス（大阪市西成区南津守７－ 19 － 3）の作業員の方々にお世話になり，とくに有限会社 TSK トレイドサービスの安孫子雅史には数々の協力をえた。

6．報告書作成にあたっては，つぎの方々の協力をえた。

青木貴宏，安孫子雅史，石田由紀子，市川創，岩本崇，上田育子，上野亮子，岡崎（旧姓柳原）志保，岡本沙千代，加賀谷央，垣内拓郎，川端玲子，北口聡人，桑宮慶一，小池智美，白瀬順子，水津真実，須田佑子，デミデンコ・セルゲイ，中井勝治，中村晃子，西澤昌樹，細川敏寛，松原卓史，森杉伊津子，四元敬子 ，矢野潤也

7．本書で扱う方位は，昭和 43 年，建設省によって公示された平面直角座標第Ⅵ系にもとづき，座標北を北として記述をおこなう。記載する座標数値は，新座標系（測地成果 2000）には合致しない。本書における瓦の部位及び名称については，とくに断らないかぎり下記文献による。

『平安京古瓦図録』（平安博物館編『平安京古瓦図録』，東京，昭和 52 年）。

奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅰ～Ⅷ瓦編』１～８，（奈良，昭和 48～55 年）。

奈良国立文化財研究所『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』（奈良，平成８年）。

古墳時代の須恵器の分類・型式名はとくにことわらないかぎり下記文献による。

田辺昭三『須恵器大成』（東京，昭和 56 年）。

木製品の分類・型式名はとくにことわらないかぎり下記文献による。

奈良国立文化財研究所 『木器集成図録　近畿古代編』（奈良，昭和 60 年）。

出土した木製品の保存処理は，大型の井戸枠について株式会社島津製作所の援助をうけた。

このほか，財団法人住友財団ならびに財団法人高梨学術奨励基金の助成金を受け，木製品の保存処理ならびに調査をおこなった。

8．現地調査ならびに報告書作成の過程で，つぎの方々から多くのご教示とご助力を賜った。記して感謝申し上げます。（敬称略）

網伸也，磯野浩光，石田志郎，石部正志，伊藤幸司，今津節生，岩本正二，入江文敏，上原真人，植山茂，内田俊秀，梅本康広，浦上雅史，大平聡，岡崎晋明，小田桐淳，小野正敏，尾野善裕，朧谷寿，梶川敏夫，金子裕之，鎌田元一，北野信彦，國下多美樹，久米雅雄，黒板伸夫，坂誥秀一，定森秀夫，佐藤隆，神野恵，金田明大，沢田正昭，高橋章司，高橋康夫，瀧浪貞子，玉井哲雄，辻広志，冨井眞，永井信弘，長尾充，中島信親，中谷雅治，楢崎彰一，西口裕泰，西山良平，長谷川行孝，平澤（旧姓蓮沼）麻衣子，藤沢良祐，松井章，南孝雄，宮原晋一，望月精司，百瀬正恒，森内秀造，山中章，吉川聡，吉川真司，吉川義彦，和田萃

財団法人大阪市文化財協会，香川県教育委員会，奈良県立橿原考古学研究所，財団法人京都市埋蔵文化財研究所，兵庫県教育委員会，独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所

9．本書の執筆分担は，つぎのとおりである。

序言　角田文衛

第Ⅰ章　堀内明博

第Ⅱ章　堀内明博

第Ⅲ章　第１節　堀内明博，第２・３節　安孫子雅史・坂本範基，第４節　坂本範基

第Ⅳ章　第１・２・３節－１　堀内明博，第３節－２　堀内明博・小池智美・中井勝治，第３節－３　坂本範基　第３節－４～６　安孫子雅史・堀内明博　第４節－１　堀内明博，第４節－２・３　石田由紀子

第Ⅴ章　　堀内明博

付章　１　京都大学大学院　丸山真史，奈良文化財研究所　松井章

　　２　株式会社京都科学　西口裕泰

－目次－

序…… i
例言…… iii

調査報告書

第Ⅰ章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯…… 1
第２節　調査経過…… 2

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　地理的環境…… 7
第２節　歴史的環境…… 9

第Ⅲ章　遺構

第１節　基本層序と概要…… 13
第２節　平安時代以降の遺構…… 14
第３節　平安時代の遺構…… 17
１．平安時代後期の遺構…… 17
２．平安時代前期から中期の遺構…… 19
第４節　平安時代以前の遺構…… 38

第Ⅳ章　遺物

第１節　遺物の概要…… 41
第２節　平安時代以降の遺物…… 42
第３節　平安時代前期から後期の遺物…… 45
１．瓦類…… 45　２．土器類 …… 52
３．木製品……108　４．土製品 …… 118
５．金属製品・金属加工関連遺物…… 124
６．石製品…… 127
第４節　平安時代以前の遺物
１．弥生時代から古墳時代の遺物…… 129
２．縄文時代の土器…… 131
３．石器…… 134

第Ⅴ章　まとめ

第１節　遺跡の立地…… 137
第２節　条坊と建物配置…… 140
第３節　遺物の特徴…… 154
第４節　祭祀…… 157
第５節　結語…… 160

付章

１．平安京右京六条三坊七・八・九・十町出土の動物遺存体…… 169
２．木製品の保存処理と分析…… 181

英文目次 …… 187

英文要旨 …… 189

付表

図版

付図　平安京右京六条三坊七・八・九・十町　平安時代遺構平面図

－図版－

巻頭図版第１
　１．ＳＲ 0001 獣骨出土状況
巻頭図版第２
　１.調査地遠景（南西から）
　２.調査地遠景（北東から）
巻頭図版第３
　１．Ⅰ・Ⅱ区全景（南より）
　２.Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区全景（北より）
巻頭図版第４
　１．ＳＥ 670 井戸枠（東から）
　２．ＳＥ 670 遺物出土状況（北西から）
巻頭図版第５
　１．ＳＸ 820（北東から）
　２．ＳＤ 4206（北から）
巻頭図版第６
　１．ＳＥ 1842 出土浄瓶
　２．ＳＲ 4200 出土灰釉陶器壺
　３．ＳＸ 820 出土須恵器甕
　４．ＳＸ 820 出土越州窯系青磁瓶
巻頭図版第７
　１．ＳＲ 0001 出土鳥紐蓋
　２.九町宅地内出土越州窯系青磁合子蓋
　３．ＳＥ 670 出土鎌
　４．ＳＲ 4200 出土木印
巻頭図版第８
　１．周辺現況地形・調査区旧地形図（1/2000）

図版第１　　調査区地区割図
図版第２　　ＳＢ 22・23 遺構実測図
図版第３　　ＳＢ 1・29 遺構実測図
図版第４　　ＳＢ 2・3，ＳＡ 13 遺構実測図
図版第５　　ＳＢ 4・20・21 遺構実測図
図版第６　　ＳＢ 19・13・24 遺構実測図
図版第７　　ＳＢ 25・26・34 遺構実測図
図版第８　　ＳＢ 9・10・27 遺構実測図
図版第９　　ＳＢ 11・35 遺構実測図
図版第１０　ＳＢ 12・14 遺構実測図

図版第１１　ＳＢ 15・16 遺構実測図
図版第１２　ＳＢ 18, ＳＡ１遺構実測図
図版第１３　ＳＡ 3・5,　ＳＢ 17・31・33 遺構実測図
図版第１４　ＳＡ 2・7・8・19 遺構実測図
図版第１５　ＳＡ 6・9・10 遺構実測図
図版第１６　条坊側溝・ＳＲ 0001・4200 断面図
図版第１７　ＳＤ 2429・4340・4350・5409・5412 断面図
図版第１８　ＳＥ 670・1846 遺構実測図
図版第１９　ＳＥ 2067, ＳＫ 889・1842 遺構実測図
図版第２０　ＳＸ 820 遺構実測図
図版第２１　ＳＤ 4206 遺構実測図
図版第２２　ＳＫ 4351,　ＳＸ 3401・3402・3406 遺構実測図
図版第２３　瓦１
図版第２４　瓦２
図版第２５　瓦３
図版第２６　瓦４
図版第２７　瓦５
図版第２８　瓦６
図版第２９　瓦７
図版第３０　ＳＲ 4200①
図版第３１　ＳＲ 4200②
図版第３２　ＳＲ 4200③
図版第３３　ＳＲ 4200④
図版第３４　ＳＲ 4200⑤
図版第３５　ＳＲ 0001①Ⅰ・Ⅲ区
図版第３６　ＳＤ 655・656
図版第３７　ＳＤ 663
図版第３８　七町①
図版第３９　七町②
図版第４０　七町③・八町
図版第４１　ＳＸ 820
図版第４２　九町
図版第４３　十町①
図版第４４　十町②
図版第４５　ＳＥ 1842①
図版第４６　ＳＥ 1842②
図版第４７　ＳＥ 1842③
図版第４８　旧河川
図版第４９　ＳＲ 4200⑥

図版第５０　木器１
図版第５１　木器２
図版第５２　木器３
図版第５３　木器４
図版第５４　木器５
図版第５５　木器６
図版第５６　木器７
図版第５７　木器８
図版第５８　木器９
図版第５９　木器１０
図版第６０　木器１１　井戸枠
図版第６１　木器１２　井戸枠
図版第６２　古銭
図版第６３　縄文土器１
図版第６４　縄文土器２
図版第６５　縄文土器３
図版第６６　縄文土器４
図版第６７　石製品１
図版第６８　石製品２
図版第６９　石製品３
図版第７０　石製品４
図版第７１　七町全景（北から）
図版第７２
　１．ＳＦ 5408・ＳＫ 5429 遠景（北から）
　２．ＳＦ 5408・ＳＲ 0001・4200（北から）
図版第７３
　１．ＳＫ 5429 遺物出土状況（北から）
　２．ＳＫ 5429 遺物出土状況近景（北から）
図版第７４
　１.七町北端建物群・ＳＤ 663 遺物出土状況（東から）
　２．ＳＢ 21・ＳＡ３（北から）
図版第７５
　１．ＳＢ 24（東から）
　２．ＳＢ１・29（東から）
　３ ＳＥ 2067 遺物出土状況（北西から）
　４ Ｐ 3337 断面（北から）
　５．Ｐ 674 遺物出土状況（真上から）
図版第７６
　１．ＳＸ 4001 出土状況（東から）

２．ＳＸ 4001 出土状況（北から）
３．ＳＸ 4001 遺物出土状況（北東から）
４．ＳＸ 4001 棺台検出状況（東から）
図版第７７
１．ＳＥ 3365（真上から）
２．ＳＥ 3365 断割（北から）
図版第７８
１．Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区　七・八町遠景（北から）
２．Ⅰ・Ⅱ区　七・八町東側遠景（北から）
図版第７９
１.八町建物群（真上から）
２.八町建物群（西から）
図版第８０
１．ＳＢ 10（南から）
２．ＳＢ９（東から）
３．ＳＸ 4004 遺物出土状況（北から）
４．ＳＫ 889 遺物出土状況（北から）
図版第８１
１．ＳＸ 820 南半部（北東から）
２．ＳＸ 820 池尻（北から）
図版第８２
１．Ⅰ・Ⅲ区　ＳＸ 820 遠景（東から）
２．ＳＸ 820 西肩洲浜・ＳＤ 4206（北東から）
図版第８３
１．ＳＤ 4206 近景（北から）
２．ＳＤ 4206 全景（北から）
３．ＳＤ 4206 近景（西から）
図版第８４
１．ＳＢ７（東から）
２．ＳＢ８（北から）
図版第８５
１．馬代小路・樋口小路交差点部遠景（北から）
２．馬代小路・ＳＲ 0001 南北部（北から）
図版第８６
１．ＳＥ 670（北から）
２．ＳＥ 670 遺物出土状況（北から）
図版第８７
１．ＳＥ 670 井戸枠（東から）
２．ＳＥ 670 井戸枠細部（南東から）

3．ＳＥ 670 遺物出土状況細部（北西から）
図版第８８
1．ＳＢ 15（北から）
2．ＳＢ 14（東から）
図版第８９
1．十町全景１（西から）
2．十町全景２（西から）
図版第９０
1．ＳＤ 658・ＳＤ 2429（西から）
2．ＳＢ 18（南から）
図版第９１
1．ＳＸ 3400（西から）
2．Ⅷ区　ＳＲ 0001・ＳＤ 4340（東から）
3．Ⅵ区　ＳＢ 33（東から）
図版第９２
1．ＳＥ 1842 遺物出土状況（北西から）
2．ＳＥ 1842 完掘状況（北から）
図版第９３
1．ＳＥ 1846（南から）
2．ＳＥ 1846 断割（南西から）
図版第９４
1．ＳＲ 0001 東西部遠景（西から）
2．ＳＲ 0001 東西部北肩土器出土状況（南西から）
図版第９５
1．ＳＲ 0001 東西部獣骨出土状況（北から）
2．ＳＲ 0001 獣骨・陽物出土状況（南西から）
3．ＳＲ 0001 獣骨・木簡出土状況（南から）
図版第９６
1．Ⅲ区　ＳＲ 0001・4200 東西部（東から）
2．ＳＲ 4200 南北部北端　獣骨出土状況（北から）
図版第９７
1．ＳＲ 4200 南北部西肩　木器出土状況（東から）
2．ＳＲ 4200 南北部西肩　獣骨・土器出土状況（北東から）
図版第９８
1．ＳＲ 4200 南北部西肩　大型人形・手箱・獣骨出土状況（北東から）
2．ＳＲ 4200　人形六体出土状況（西から）
3．ＳＲ 4200　籠編物出土状況（南から）
4．ＳＲ 4200　楕円形曲物出土状況（南西から）
5．ＳＲ 4200　人形・獣骨等出土状況（北から）

図版第９９
　１．馬代小路西側溝ＳＤ656断面Ａ（南から）
　２．馬代小路東側溝ＳＤ655断面Ａ（南から）
　３．馬代小路西側溝ＳＤ656断面Ｂ（南から）
　４．馬代小路東側溝ＳＤ655断面Ｂ（南から）
　５．ＳＤ2429断面（南から）
　６．ＳＤ4350断面（北から）
　７．ＳＲ4200南北部中央断面（北から）
図版第１００
　１．ＳＸ3401遺物出土状況（南から）
　２．ＳＸ3401遺物出土状況細部（西から）
図版第１０１
　１．ＳＫ4351断面（東から）
　２．ＳＫ4351完掘状況（北東から）
図版第１０２　軒丸瓦
図版第１０３　軒平瓦
図版第１０４　ＳＲ4200①
図版第１０５　ＳＲ4200②
図版第１０６　ＳＲ4200③・ＳＲ0001①
図版第１０７　ＳＲ4200④
図版第１０８　ＳＲ4200⑤・ＳＲ0001②
図版第１０９　ＳＤ655・663・七町①
図版第１１０　七町②・八町①・ＳＸ820①・旧河川①
図版第１１１　七町③・八町②・九町・ＳＸ820②・旧河川②
図版第１１２　十町
図版第１１３　ＳＥ1842①
図版第１１４　ＳＥ1842②
図版第１１５　ＳＥ1842③
図版第１１６　ＳＥ1842④
図版第１１７　ＳＥ1842⑤
図版第１１８　平安時代以降
図版第１１９　旧河川③
図版第１２０　硯
図版第１２１　土製品（祭祀関連遺物）
図版第１２２　土製品（その他）
図版第１２３　金属加工関連遺物
図版第１２４　石製品・金属製品・竈・埴輪
図版第１２５　古銭
図版第１２６　木製品①

図版第１２７　木製品②
図版第１２８　木製品③
図版第１２９　木製品④
図版第１３０　木製品⑤
図版第１３１　木製品⑥
図版第１３２　縄文土器①
図版第１３３　縄文土器②
図版第１３４　縄文土器③
図版第１３５　縄文土器④
図版第１３６　縄文土器⑤
図版第１３７　石器①
図版第１３８　石器②
図版第１３９　ＳＥ 670 出土井戸枠
図版第１４０
　1　ＳＲ 0001・4200 出土獣骨
　2　ＳＲ 4200 出土種子

－挿図－

第１図　平安京条坊図 …… 1
第２図　調査区配置図 …… 3
第３図　調査地位置図 …… 7
第４図　土層模式図 …… 13
第５図　ＳＢ 28　遺構平面図・断面図 …… 14
第６図　中世以降　遺構概略図 …… 15
第７図　ＳＢ 32　遺構平面図・断面図 …… 16
第８図　ＳＸ 4001・4004　遺構平面図・断面図・立面図 …… 17
第９図　ＳＢ 7・8　遺構平面図・断面図 …… 18
第 10 図　七町遺構概略図（1/800） …… 20
第 11 図　ＳＡ 4・17・18・20　遺構平面図・断面図 …… 21
第 12 図　ＳＥ 3365　遺構平面図・断面図 …… 22
第 13 図　八町遺構概略図（1/800） …… 26
第 14 図　九町遺構概略図（1/800） …… 30
第 15 図　十町遺構概略図（1/800） …… 32
第 16 図　ＳＸ 3400　出土状況図 …… 33
第 17 図　祭祀関連遺物出土分布図 …… 35
第 18 図　ＳＢ５　遺構平面図・断面図 …… 37
第 19 図　ＳＢ 30　遺構平面図・断面図 …… 38
第 20 図　平安時代以前遺構概略図 …… 40
第 21 図　平安時代以降の出土土器実測図（1/4） …… 42
第 22 図　泥メンコ実測図（1/2） …… 43
第 23 図　丸瓦・磚実測図（1/4） …… 50
第 24 図　ＳＲ 4200 南北部最下層出土土器実測図（1/4） …… 63
第 25 図　遺物出土分布図 …… 64
第 26 図　ＳＲ 0001 南北部出土土器実測図（1/4） …… 71
第 27 図　ＳＤ 655 出土土器実測図（1/4） …… 72
第 28 図　ＳＤ 658 出土土器実測図（1/4） …… 74
第 29 図　ＳＫ 5409 第４層出土土器実測図（1/4） …… 80
第 30 図　ＳＫ 5429 出土土器実測図①（1/4） …… 82
第 31 図　ＳＫ 5429 出土土器実測図②（1/4） …… 85
第 32 図　ＳＥ 1842 下層出土土器実測図（1/4） …… 104
第 33 図　ＳＲ 4200・ＳＥ 1842 法量分布図（単位：cm） …… 105
第 34 図　ＳＥ 1846 出土土器実測図（1/4） …… 106
第 35 図　挽物に残る焼印・轆轤の爪痕 …… 111
第 36 図　黒漆塗手箱実測図・写真 …… 112
第 37 図　人形法量分布図 …… 114

第38図　硯実測図（1/4）…… 118
第39図　祭祀関連遺物実測図（1/4）…… 120
第40図　土製品実測図（1/4）…… 121
第41図　竈実測図（1/4）…… 122
第42図　製塩土器実測図（1/4）…… 124
第43図　金属加工関連遺物実測図（1/4）…… 125
第44図　金属・石製品実測図（1/4）…… 127
第45図　ＳＥ1842出土凝灰岩実測図（1/4）…… 128
第46図　ＳＤ4206出土土器実測図（1/4）…… 130
第47図　埴輪実測図（1/4）…… 131
第48図　ＳＫ4351出土遺物実測図（1/2）…… 135
第49図　調査地周辺既往調査配置図（1/5000）…… 147
第50図　右京六条三坊四町遺構配置図（1/600）…… 149
第51図　資料像 …… 182
第52図　木印に使用された赤色顔料のXRFスペクトル …… 182
第53図　紐繊維の顕微鏡写真（透過）…… 183
第54図　紐繊維のFT-IRスペクトル …… 183
第55図　顕微鏡写真（×60木口面）…… 184

—表—

第1表　ＳＲ4200東西部砂礫層 …… 58
第2表　ＳＲ4200南北部砂礫層 …… 65
第3表　ＳＲ0001東西部第２層 …… 68
第4表　ＳＤ655 …… 73
第5表　ＳＤ663 …… 78
第6表　ＳＫ5429 …… 86
第7表　ＳＸ820　Ⅰ・Ⅱ区３層 …… 88
第8表　ＳＸ820　Ⅲ区２層 …… 90
第9表　ＳＤ4340 …… 97
第10表　ＳＥ1842　上層 …… 101
第11表　ＳＥ1842　中層 …… 103
第12表　主要遺構時期区分表 …… 154
第13表　調査地周辺既往調査一覧 …… 162～167
第14表　出土動物遺存体種名表 …… 171
第15表　出土動物遺存体一覧表 …… 172～179

—付表—

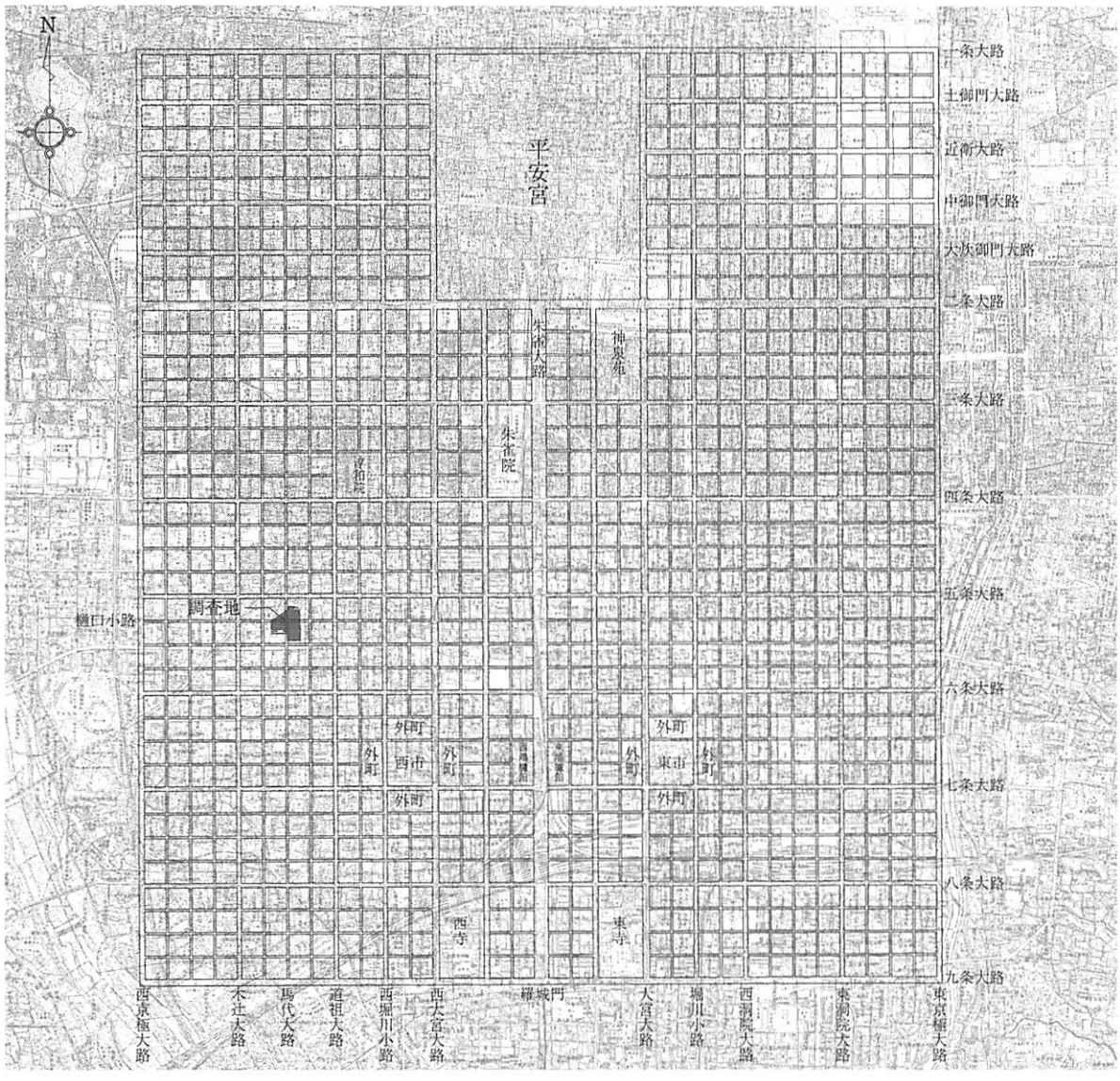
遺物観察表

第Ⅰ章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

この調査は，京都市右京区西院追分町 25-1，25-2 に所在する株式会社島津製作所（以下島津製作所と略称）五条工場（昭和 17 年６月操業）跡地の再開発にともなう発掘調査である。当地は，延暦十三年（794）に桓武天皇が遷都した平安京の南西部にあたる。その条坊復原によると，東を道祖大路，西を木辻大路，北を五条大路，南を六条大路に囲まれた「右京六条三坊」にあり，右京六条三坊七・八・九・十町に相当する。

平成 12 年（2000）８月，本事業の設計施工を担当する株式会社竹中工務店（以下，竹中工務店と略称）より，当該区の発掘調査の依頼があった。財團法人古代學協會は，調査に際しておこりう



第１図　平安京条坊図

る問題について京都市埋蔵文化財調査センターと協議をおこなった。その際建設範囲に遺跡がどのような状態で残存しているかが課題となった。それを確認するため，京都市埋蔵文化財調査センターの行政指導に従い，既存施設の解体による基礎撤去作業に並行し，本調査に先立ち立ち会い調査を実施した。その結果，既存基礎掘形の断面観察により，建設予定地内には平安時代並びにそれ以前の遺構が残存していることが判明した。

この調査結果にもとづき，改めて京都市埋蔵文化財調査センターと協議した結果，同センターは本調査の必要を認め，土地所有者である島津製作所並びに工事施工者である竹中工務店に通達した。それを受けて竹中工務店は当協會に発掘調査を依頼し，島津製作所を含めて協議した結果，当協會はこの発掘調査を引き受けるところとなった。

調査範囲は，複合商業施設建設予定地で，逆Ｌ字形を呈した東西 162 m，南北 125 mの約 19,400 ㎡を対象とした。

これにもとづき，平成 12 年 (2000) 10 月に竹中工務店と発掘調査の業務委託契約書を取り交わし，文化財保護法第 57 条第 1 項による発掘調査の届け出を京都市埋蔵文化財センターに提出した。なお調査に際して，島津製作所並びに竹中工務店には，調査期間中，定期的に調査の進捗状況を報告し，また重要な遺構や遺物の発見時には，行政機関を含めた協議をその都度おこなうことにした。

第２節　調査経過

発掘調査の実施に先立ち，竹中工務店により，具体的な建設範囲の提示を受け，調査開始前の全景写真撮影をおこなった。調査範囲が広大なので一度に全域にわたって調査することが容易でないため，調査範囲をⅠ～Ⅳの４地区に区分し，Ⅰ・Ⅱ区，Ⅲ・Ⅳ区と２度に分けて調査をおこなった。調査は，平成 12 年 11 月 1 日より，Ⅰ区からⅡ区の予定範囲約 12,400 ㎡の現代盛土，旧耕作土・床土を機械力によって排土する作業から開始した。掘削終了後，11 月 20 日から，国土座標にもとづく４m方眼の割付を調査範囲内に組んだ。同時に随時遺構検出をおこなった。その結果，調査区のほぼ中央，樋口小路と馬代小路の交差部とそれより東と南の小路に，中世耕作溝に切られた，幅約４m 前後の川を確認した。そのため，この範囲の確定をおこなうとともに，川を切る中・近世にかけての遺構をまず調査していくこととした。

作業が進行するに従い，川からは多量の獣骨とともに，荷札木簡，人形，斎串，墨書人面土器など，祭祀に関わる遺物群を確認した。獣骨の鑑定は独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所松井章氏に依頼し，同年 12 月 15 日，22 日の２度現地にて実見いただいた。12 月末までに，川から発見した遺物の写真と出土状況実測図を作成したのち，遺物の取り上げ作業は完了した。

翌年１月から，これまで他調査区で進行していた中・近世遺構群の調査も進み，それらに切られた平安時代の遺構について，様相が次第に明確になっていった。

Ⅰ区の北側では，複数時期にわたる平安時代の建物群や井籠組の井戸などを確認した。南側には，東西路である樋口小路が存在していることも明らかになった。Ⅱ区においては３基の井戸や建物な

ど多数の平安時代の遺構が存在することが判明した。

２月から，こうした平安時代の遺構の掘り下げを本格的におこない，３月末頃からは建物群や井戸の写真撮影，４月２日から４日にかけて飛行機による全景写真撮影と写真測量をおこなった。

Ⅰ区からⅡ区にかけて，遺構の全容が明らかになったため，４月５日に報道関係者を集めて遺構の概要を発表し，４月７日に市民を対象にした現地説明会を開催した。

また，４月13日には，立命館大学教授家根祥多氏（故人）に，Ⅱ区の南西部で確認された縄文時代の遺構・遺物の実見いただいた。

こののち，調査区内の補足的調査をおこない，調査区の西側より順次，埋め戻し作業をおこなった。この段階で，Ⅱ区の東側には，平安京時代初期に遡る川が，さらにもう一条宅地内に存在することが判明。この部分の調査は旧河川との関連につながるⅢ区調査時に全容を把握することとし，埋め戻しをおこなわないよう調整をはかった。

平成13年５月14日からは，Ⅲ・Ⅳ区の範囲約7,800㎡の現代盛土，旧耕作土・床土を機械力によって排土する作業を開始した。また，随時並行して遺構の検出をおこない，２条の川の東側延長と旧河川の広がりの全容解明に努めた。

湿地が900㎡と非常に広範囲に及び，初期の川は樋口小路を西流し，小路交差部手前で前述の川

第２図　調査区配置図

と重複していた。さらにそれは，そこで折れ曲がり，七町宅地内を南西流していたことが判明した。折れ曲り部よりやや南方で，４～５頭分の獣骨，人形などが出土したことにより，改めて当地が祭祀に関わる，重要な遺跡であることを再確認した。同時に，川の南側からも，多数の獣骨，祭祀にかかわる遺物が出土した。

６月に入り，悪天候により調査がしばしば中断。周辺からの雨水の流入が著しく，多くの水中ポンプを常時稼働して対応しなければならなかった。

７月初旬には，中世から近世にかけての遺構の掘り下げが一程度完了し，平安時代の遺構の全容がほぼ判明してきた。同月 11 日には，Ⅰ区北端で確認されていた複数時期にわたる建物群の全容確認のため，北側へ調査区を約 680 ㎡拡張の必要性を痛感し，竹中工務店ならびに京都市埋蔵文化財センターと協議し，これを島津製作所へ打診した。

同社より調査面積の増加にともなう追加費用負担及び調査の遅延のないことを条件に承諾を得た。そして８月９日より拡張部Ⅴ区を機械力によって排土する作業を開始した。ここでも順次遺構検出をおこない，Ⅰ区の北端で確認されていた建物の延長部分を検出。更に新たに，６棟の建物が計画的に配置されていることが判明した。しかもこれらは，平成２年に京都市埋蔵文化財研究所の調査で確認されていた建物と同一軸線上にあり，一連の建物群の可能性が極めて高いことが明らかとなった。

９月６日から８日には，確認した遺構群の写真測量・写真撮影をおこなった。新たに判明した遺構や重要な遺物の発見により９月 12 日に報道関係者を集め，調査の成果を発表した。

翌 13 日，天候の不順により延期していた飛行機による全景写真撮影をおこない，翌日には，再び市民を対象にした現地説明会を開催した。

９月 20 日には，調査最終の全景写真撮影をおこなった。そののち，部分的な補足調査，遺構実測をおこない，10 月 15 日をもって予定範囲内全ての調査が完了した。

また，平成 14 年６月初旬に計画建物の設計変更にともない，未調査部分ができ，そこを対象に９月 24 日より発掘調査に着手した。

調査地区は，Ⅱ区の南側に計画建物の基礎部分によって破壊されるおそれのある部分を東西方向に幅４m，東西 31m のⅥ区，その東に幅４m，東西 21m のⅦ区，さらに９m 南側に幅４m，東西 90m のⅧ区の合計 574 ㎡を設定した。ここでの主たる目的は，川の延長部分を確認すると共に，当区域が十町に及ぶ宅地の中心部にあたることから，その関連遺構の確認，Ⅱ区の南西隅で確認された縄文時代中期末の遺構の範囲確認の３点にあった。９月 24 日より現代盛土，旧耕作土・床土を機械力によって排土する作業を開始し，26 日に終了。その後，国土座標にもとづく４m方眼の割付を調査範囲内に組んだ。

調査は，順次遺構の検出をおこない，Ⅶ・Ⅷ区の東端でそれぞれ川の延長部分を確認した。またⅧ区では，調査区のほぼ中央に東西方向の幅約 1.6m，深さ 0.6m の素掘溝を確認した。溝内からは，平安時代の遺物が多数出土し，そのなかでも緑釉瓦や灰釉陶器の毛彫輪花皿など重要な遺物を確認した。一方，この溝の西側に，Ⅱ区で確認された南北溝の延長部分を確認し，これまでの調査を補

足する成果がえられた。10月29日には，調査区の全景写真撮影をおこなったのち，調査区の補足作業と，Ⅷ区の東西溝の下層で確認された旧河川の部分的確認と掘り下げをおこない，11月8日に調査は完了した。

整理期間は，平成13年10月から平成15年11月まで行った。調査終了と同時に，多量の木製品の洗浄，遺物の洗浄，接合をおこない，随時遺物実測を進めた。この段階で，Ⅰ区で確認された井戸枠に残る番付のある墨書など，木製品の保存処理を要するものが多数あり，特に井籠組の井戸枠については京都市埋蔵文化財センター，島津製作所，古代學協會により保存費用捻出について協議した結果，島津製作所より全面的に費用負担の援助を受けた。また，このほかにも急を要する木製品については，処理機器および薬品類を購入し当協會で処理をおこなうこととなった。その際，奈良県立橿原考古学研究所 保存科学研究室 今津節生氏並びに財団法人大阪市文化財協会伊藤幸司氏より技術的指導を受けた。また，処理過程において，保存処理を委託した株式会社京都科学西口裕輔氏には，随時指導を頂いた。さらに平成15年4月に財団法人高梨学術奨励基金並びに財団法人住友文化財団の助成金を受け，重要な遺物の保存処理を委託し，その対応にあたった。

保存処理すべき木製品については平成15年11月末に一応終了した。

整理期間中，右京六条三坊出土の遺物群について，各分野の関係者と様々な検討をおこなった。まず，平成13年11月26日に京都大学埋蔵文化財センター冨井眞助手と縄文土器の検討をおこない，格別なるご高配を頂戴した。また，平成14年6月17日に立命館大学文学部矢野健一郎助教授とも縄文土器の検討をおこない，格別なるご高配を頂戴した。平成15年9月11日に京都府京都文化博物館植山茂主任学芸員と瓦の検討会をおこない，格別なるご高配を頂戴した。

なお整理作業が進行するなか，写真撮影用に土器を復元する必要がでてきた。そのため，同年8月26日に財団法人京都市埋蔵文化財研究所調査部資料課中村敦係長，同村上勉主任に出土土器の復元についての研修を受けた。

同年10月24日に加西市教育委員会永井信弘氏，兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所森内秀造主査と播磨産須恵器について比較検討をおこなった。

同年11月14日に独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所において，同研究所埋蔵文化財センター国際遺跡研究室巽淳一郎室長，同平城宮跡発掘調査部考古第二調査室金田明大文部科学技官，同神野恵文部科学技官と須恵器について比較検討をおこない，格別なるご高配を頂戴した。

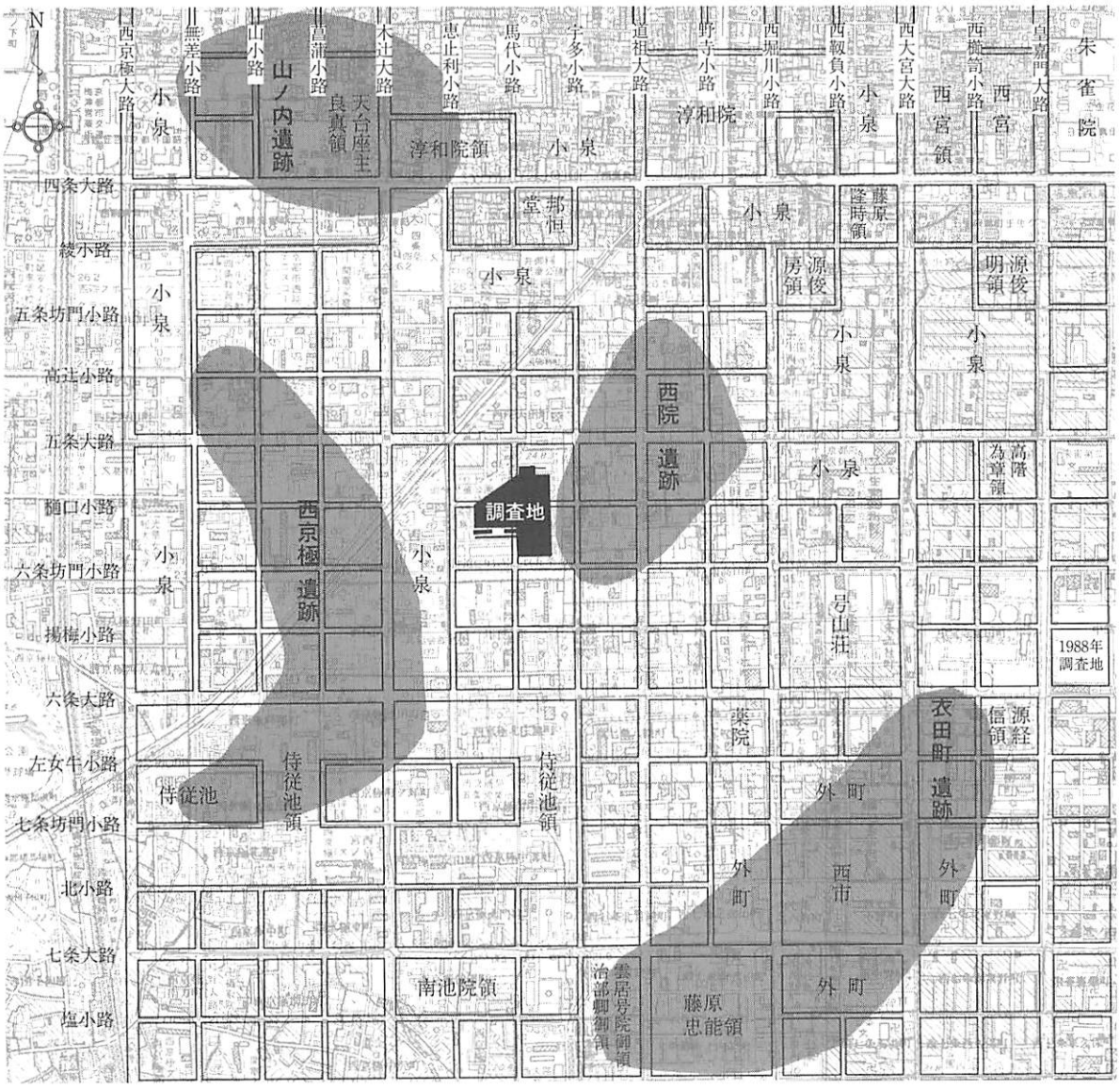
同年12月25日に立命館大学文学部木立雅明助教授と須恵器甕の製作技法ならびに壷頸部接合法について検討をおこない，格別なるご高配を頂戴した。

平成16年2月3日京都大学埋蔵文化財センター冨井眞助手，京都大学髙橋章司研修員と縄文時代石器について検討をおこなった。

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　地理的環境

当調査地は，京都盆地の西北，盆地西南に南流する桂川が嵐山から大きく東に蛇行し，再び南に流れを変える左岸に相当する。そして，左岸東に展開する宇多野から南に広がる天神川の扇状地につながる緩扇状地の南縁，標高24ｍ前後に位置する。現在みられるこれら扇状地の多くは，最終氷期に，川が山から平野部に流れ出たところに形成されたと考えられる。宇多野から嵯峨野にかけて，東から紙屋川，天神川，御室川，有栖川などの河川によって形成された扇状地が山麓部に分布する。これらの河川は土砂の運搬能力が大きく，洪水時以外には，川は地下に伏流水となったり，扇状地上を無数の複雑に分流する流路となっていた。１万年前以降になると温暖化現象にともない



第３図　調査地位置図

海面は急上昇したため，河川の運搬能力は，衰え始め，勾配も変化していった。川は扇状地を削り込み，河筋はその中や周縁部分の限られた範囲にのみ分布するようになる。扇状地の南には，緩扇状地，谷底平野，開析谷が広がる。一方，緩扇状地と桂川の間には，後背湿地，自然堤防，旧河道が複雑に分布する。これらは桂川によって形成された自然の幅広い河原の中に堤防が作られ，それが逆に河道幅を狭めていった。堤防の内側は河川による土砂堆積で天井川が形成されやすく，その外側は後背湿地になりやすい[1)]。桂川左岸の自然堤防上には下嵯峨，梅津，郡，川勝寺などの中世から存続する古い集落が点在する。これらの集落と重複して，古墳時代から平安時代の集落である西野町遺跡，飛鳥から奈良時代の墓域である東衣手町遺跡，室町時代の平城である梅津城，郡城，川勝寺城等が点在する。一方緩扇状地には，北に弥生から古墳時代の散布地である山ノ内遺跡，東に弥生から古墳時代の集落である西院遺跡，弥生から奈良時代の集落である西京極遺跡，弥生から古墳時代の散布地である衣田町遺跡などの分布が知られる。このように桂川沿い及びそれ以東では遺跡の種類や性格が異なり，以東の遺跡では広範囲を占める。

延暦十三年（794）桓武天皇は，長岡京から平安京に遷都する。当該地は，平安京右京六条三坊七・八・九・十町に相当し，平安京の西南に位置する。右京は歴史的にみて，湿潤な地であるといわれ，それが右京衰退の一大要因であったとする見解が通説化している。それは上述した大小さまざまな河川によるものと考えられ，これらはいずれも桂川に流入することから後背湿地になりやすかったと考えられる。右京は現状では平坦な地形となっているが，緩扇状地以南は，これらの河川の河道の変化によって，至るところに開析谷が形成され，後背湿地の分布とあいまって，複雑な地形を呈していたと考えられる。

現状における調査地は，阪急京都線西院駅の南方，南側には京都の東西の大動脈である国道９号線，東には国道 171 号線につながる西大路通，西には阪急京都線に囲まれた地域の西寄りに位置する。その西には盆地西部で主要な河川である天神川が南流する。

当調査地はこのような地理的環境に立地する。それらを傍証するような調査事例が，周辺部で明らかにされつつある。調査区の東および北東では，平安時代の宅地が多く確認されている。それに対して北西，西および西南では湿地や流路，河川の氾濫などが確認され，平安時代の遺跡の確認事例が少ない傾向にある。しかしながらそのなかでも，三坊十五町での古墳時代の溝[2)]や四坊二町での弥生時代後半から古墳時代の竪穴住居の存在[3)]などがしられる。このことから調査区西方に河川や湿地が広範囲に分布するすることがうかがえるが，そのなかでも平安時代およびそれ以前の遺跡の存在は，単純な地形でなかったことを物語っている。このことについての検討は後述する。当調査区は，西院遺跡の南端に相当し，それにかかわる遺構群の存在が予想された。

註

1）石田志朗『京の水脈賀茂川の流路をめぐって』（『週刊朝日百科 51　日本の歴史　古代から中世へ①平安京』所収，東京，平成 15 年），26 頁。

2）京都市文化観光局『京都市内遺跡試掘調査概報　平成 12 年度』（京都，平成 13 年），23 頁。

3）上村和直・西大條哲『平安京右京六条四坊・西京極遺跡』（財団法人京都市埋蔵文化財研究所『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』所収，京都，平成６年）。

第２節　歴史的環境

京都の市街地の西方，右京から嵯峨野にかけて，戦後間もない頃まで，広々とした水田や畠がみられた。とくに扇状地や緩扇状地では水はけがあまり良くないことから，竹林や茶畑，桑畑や普通の畠などに利用され，広く分布し，古代からの「野」の景観を呈していた。近年では植木の栽培も盛んに行われている。このような景観がいつ頃から成立したかについては，さまざまな議論がある。しかしながら，当地域の開発は，京都盆地の中でも古くから行われていたことは間違いあるまい。

昭和31年，北嵯峨菖蒲谷池畔で旧石器が発見されたことは盆地の歴史を書き換える出来事であった。さらに昭和47年西院小学校改築に伴う事前調査[1]や平成２年の西院月双町の調査[2]でナイフ型石器が出土し，この時期の遺跡の存在をより高めることになった。縄文時代の遺跡には，前期まで遡る蜂ヶ岡中学校遺跡があり，土器などが出土した。そののち当該地周辺には明瞭な遺跡がみられなかった。弥生時代になると京都市内で唯一の銅鐸出土地，御堂ヶ池北側丘陵斜面に位置する梅ヶ畑遺跡がある。ここからは銅鐸４点が出土した。ただ，これに関連する遺跡はあまり知られてなかった。しかし近年の京都市街地でのさまざまな調査により，弥生から古墳時代の散布地である山ノ内遺跡や衣田遺跡，弥生から古墳時代の集落である西院遺跡，弥生から奈良時代の集落である西京極遺跡などが次々に発見された。そのなかでも西院六反田町付近で，下水西部幹線工事に伴う立ち会い調査[3]や昭和55年の立ち会い調査[4]により，弥生時代中期の壺，水差しなどが出土し，集落の一部が発見されたことにより，弥生時代の状況が徐々に明らかにされつつあるのが現状である。

当地域が活況を呈するのは，古墳時代になってからである。扇状地において集落遺跡や遺物散布地が広くみいだされ，規模も拡大する傾向にある。とくに広隆寺の北側に位置する常盤仲之町遺跡は代表的なもので，６世紀後半から７世紀の大規模な集落である[5]。それは竪穴住居で構成されることは知られるが，現段階では集落を囲繞する堀などの存在は確認されていない。一方，山麓部や扇状地に全国的にしられる嵯峨野古墳群がある。天塚や蛇塚などのやや大型の前方後円墳や大型円墳，小形の円墳からなる群集墳など180基ほどの古墳群からなる。これらはいわゆる葛野を本拠とする最大級の氏族であった秦氏との関連が十分うかがわれる遺跡である。

さて，秦氏の特徴として，大規模な治水による灌漑や水田造営など，土木事業に卓越していた氏族であったことが指摘できる。平安時代中頃，惟宗允亮により編纂された『政事要略』に引用された『秦氏本系帳』にみられる「葛野大堰」や，それ以外の文献史料にある「大裂」がそれに相当する。この事業は洪水防止と用水確保の二大課題を達成するものであり，それにより葛野郡での農業生産は著しく増大したことが予想される。葛野川は度重なる洪水により，堤，堰，溝はその都度改修を重ねてきた。こうしたことからも，当地域に秦氏が果たした役割が如何に重大であったかを測り知ることができる。桂川右岸にある大井神社は堰神社とも呼ばれているが，これは秦氏による治水の守護神であったと考えられている。遺跡としては明らかではないが稲原堤や嵯峨樋口などは，その造堤の一部と思われる。

梅津は丹波国からの材木を陸揚げする津としての役割を帯び，平安時代に至って京の外港として

栄え，貴族の山荘も数多く造営された。当時の状況を示す資料として『葛野郡班田図』が伝えられている。この図は各坪ごとに地種と里名が記され，中心には棲霞寺（後の清涼寺）が位置し，檀林皇后橘嘉智子建立の檀林寺，大堰川も記されており，条里地割りが施行されていたことがうかがえる。昭和10年修正の陸地測量部による三千分の一図によると，天神川以東には，平安京条坊による一町の，以西には条里の一坪の，各々方格地割りが明確に確認できる。さらに今日までおこなわれてきた種々の考古学的調査の成果においても条里地割りを含めて集落などの状況が明らかにされつつある。

このような地割りが施行されたなかでの政治的な核となったのが，南山城から移され，現在の嵯峨野神ノ木付近に所在したといわれる山城国府であった。ただし同国府は長岡京，平安京へと遷都がおこなわれるなか，最終的に大山崎へと移っていく。

延暦十三年（794）十月二十二日，桓武天皇は葛野郡宇多村の新京に遷都する。そして十一月八日には，山背国を山城国と改め，新京を平安京と名付けた。天神川以東の地は，平安京の右京に編入されたのである。当該地は，右京六条三坊の条坊制による呼称名となった。周辺での宅地班給の実態は不明な点が多く，確定できない。九条家本『延喜式』巻四十二に載せる平安京左右京図，天文二十三年（1554）三条西公条の奥書のある『拾芥抄』「右京図」には，六条三坊のなかで十三町から十六町は「小泉」と記載されている。さらに周辺部一帯にも「小泉」の分布が数多く見られる。これについては杉山信三による研究[6]があり，鎌倉時代以降の「小泉庄」とする見解もある。しかしながら現在まで定説化していない。これについても後述する。周辺については，四条二坊十一～十四町までの四町には，淳和天皇の離宮である淳和院があった。当初は南池院と呼ばれていたが，天長十年（833）仁明天皇に譲位すると，南池院を淳和院と改称し，仙洞と定めたのである。近年西南隅で調査がおこなわれ，数度に変遷する建物群や鍛冶工房の跡などが確認された[7]。四条三坊十二・十三町にはこの淳和院の所領地があった。五条二坊七町は源俊房の「左大臣家領」としている。左大臣とは，「堀河の左大臣」といわれた源俊房のことで，五条三坊八町には「前帥堂」，その横には「邦恒堂」とある。前帥とは平安時代後期の大宰権帥藤原季仲，邦恒はその外祖父にあたる藤原邦恒のことで，両人は晩年この地に阿弥陀堂を建立して隠棲していたことが知られる。七条三坊の大半は「侍従池領」，「左大臣家領」という荘園になっている。これには諸説あり，天文本『拾芥抄』には「右大臣家領」（右大臣とは源顕房をしめす）もみられる。「侍従池領」とは藤原信家の所領であった。このように当該地周辺は，「小泉」や左右大臣が所領する荘園があったのである。しかしながらこれらはいずれも平安時代後期以降のものである。そのことからしても中期以前の右京における宅地班給の状況については，考古資料から分析する必要があり，その成果を待たなければ解決できない問題である。

調査地周辺や梅津，並びにその以南では中世，田園が広がっていた。その南端川勝寺村には，丹波から京都に通じる丹波道が通じていた。そのような立地からこの辺りは京都の西郊における交通の要衝として重要な地域であった。そのため戦乱時には，京都を目指す軍勢と，それを防ごうとする軍勢が衝突する場となったのである。歴史上著名なのは，大永七年（1527）二月，川勝寺を主戦

場とした柳本賢治と足利義晴･細川高国の戦いである。この衝突で両者に多数の死者が出たことが，『言継卿記』などに記されている。また天文二年（1533）十二月には，法華門徒により，梅津･西院･郡の村々が放火に遇うが，これは，丹波道の覇権をめぐることによる放火と考えられている。このような争いは以後も繰り返され，そのような状況のなかで，郡村には郡城，西院村には小泉城，梅津村には梅津城，川勝寺村には川勝寺城が相次ぎ構築されていくのである。しかしながらこれらの城は本格的戦闘に備えるようなものではなく，あくまで丹波道の監視と掌握するためだけの城であった[8)]。

天正十八・十九年（1590・1591），織田信長の跡を継いだ豊臣秀吉は，京都の大改造をおこない，本格的な政権作りを前提とした都市計画が開始された。それは洛中に対し，長方形街区の設置による短冊形地割りの施工，寺院の移転と寺町の形成，公家屋敷の再整備，洛中を取り巻く御土居の構築などそれまでの景観を一変するような造営事業であった。そしてこのような巨大都市の出現によって，周辺農村は都市に居住する領主達の所領として位置付けられ，年貢を収奪される対象となったのである。ここに近世における近郊農村の景観が決定されたと言え，当該地周辺の村々も同様に対応させられたのである。そして近代における産業育成による工場設置と都市機能の充実と再開発が図られるまで，この状況が変わることはなかった。

註

1）小澤嘉三編『西院の歴史』，(京都，昭和58年)，11頁。

2）山下秀樹『平安京右京六条四坊九町。五条大路　京都市右京区西院月双町』（京都文化博物館『京都文化博物館調査研究報告第8集』，京都，平成3年），21・22頁。

3）財団法人京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和55年度』（京都，昭和56年），23頁。

4）加納敬二『右京六条四坊跡立会調査報告』（財団法人京都市埋蔵文化財研究所『昭和55年度京都市埋蔵文化財調査概要』所収，京都，昭和56年），62頁。

5）杉山信三『平安京右京の湿地について』（『古代文化』第四〇巻第九号掲載，京都，昭和63年）。

6）財団法人京都市埋蔵文化財研究所『常盤仲ノ町集落跡発掘調査報告』（京都，昭和56年），9～18頁。

7）関西文化財調査会『淳和院跡発掘調査報告』(京都，平成9年)。

8）下坂守『右京区概説　中世』（京都市編『資料京都の歴史14右京区』所収，東京，平成6年），35・36頁。

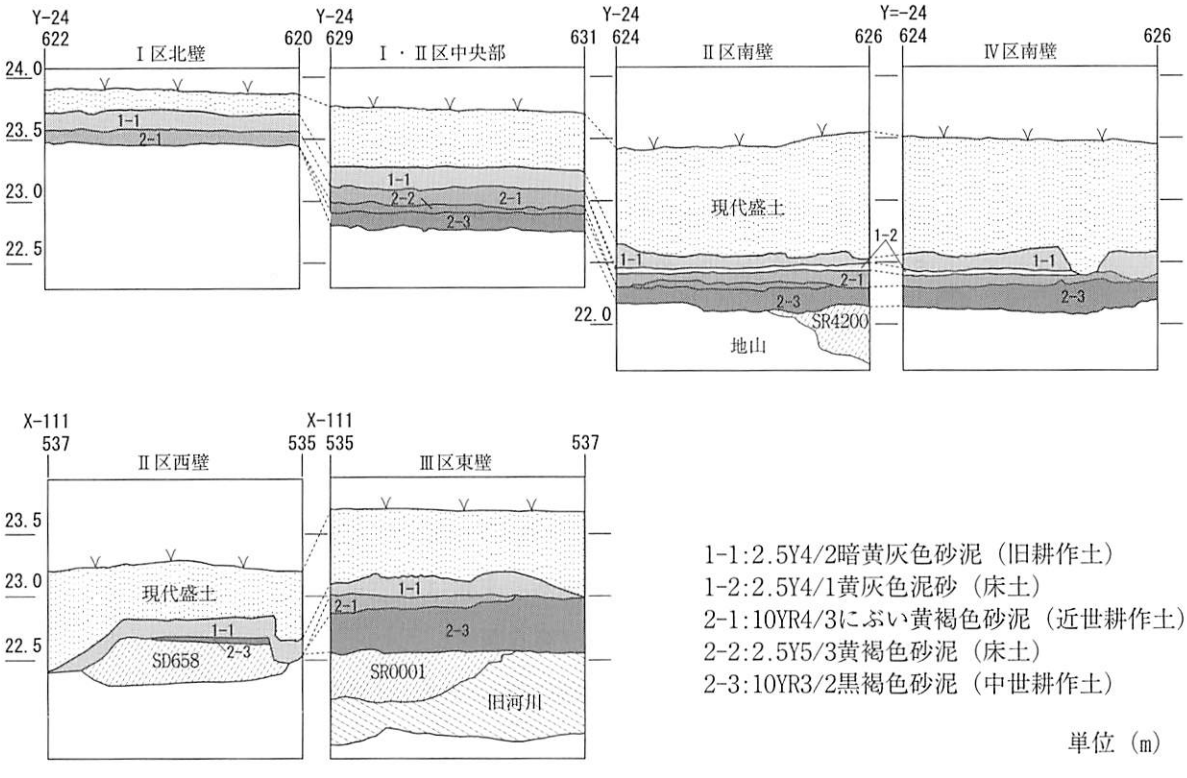
第Ⅲ章　遺構

第１節　基本層序と概要

本調査区は非常に広範囲に及んでいるため，基本層序は，詳細に分層すると必ずしも一様ではない。各々の地区では，整地土などの間層を挟んでおり，それらを基本層位として把えると，煩雑になる。そのためここでは，一定範囲にわたって広域に認められる層を，基本層位として扱った。

現地表面の標高は，南北間では，調査区北端が 24.4 m，中央付近が，24.0 m，南端が 23.5 mとその間 190 mで，約 0.9 mの高低差がある。東西は約 160 mで，東端 22.43 m，西端 23.07 mとほぼ平坦となる。このことから現地形は，北から南へ緩やかに傾斜する面をなしている。

まず現地表下１m前後が現代盛土で，島津製作所五条工場の施設建設時（昭和 17 年６月操業）のものである。その下第１層は，厚さ 10 ～ 20cm（暗灰黄色砂泥，2.5 Y 4/2）で，建設時以前の旧耕作土となる。その下位には，部分的に厚さ２～４cm の床土が確認され，近現代の遺物が出土する。第２層は，厚さ 15 ～ 40cm の旧耕作土（にぶい黄褐色砂泥，10 Y R 4/3）で近世に遡る。この層は，調査区東端中央付近で最も厚く堆積する。第３層は（黒褐色砂泥，10 Y R 2/2），平安時代の遺構面をなす。平安時代の遺構は主に調査区北西部（標高約 23.4 m），南東部（標高約 22.5 m）の微高地に立地する。また，調査区の北東から南西にかけて旧河川（縄文時代中期末から奈良時代）が確認された。この旧河川の北西肩部では，砂礫層の高まりが部分的に露呈し，八町宅地で確認された建物群はこの部分をさけるように配置されていた。なお，この旧河川は平安時代においても低



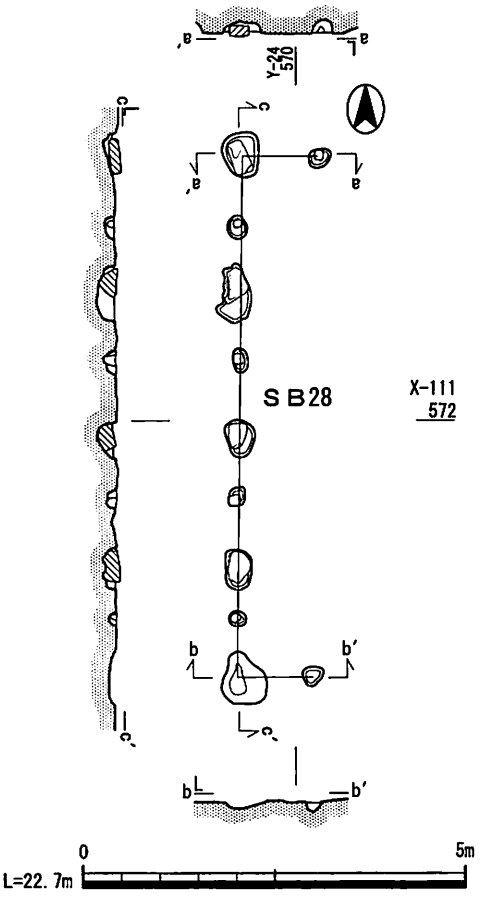
第４図　土層模式図

地として存在し，川や池として利用され，平安時代以降の耕作地化にともない次第に埋没していったことが確認できる。

本調査により確認された遺構総数は，4497基を数え，縄文時代中期末から江戸時代前期にいたるが，これらは継続するものではなく，江戸時代，鎌倉から安土桃山時代，平安時代，古墳時代，縄文時代晩期～弥生時代中期，縄文時代中期末の５時期に大別され，各々性格の異なる遺構であることが判明した。以下に各時期の主要な遺構について概観する。

第２節　平安時代以降の遺構

調査区の全域に，建物・柱穴・溝などがある。各町ごとにそのあり方は異なり，偏る傾向にある。建物・柱穴は七町の東三行北七門付近と，八町の東四行北七～八門で確認され，微高地に立地していたことがうかがえる。一方溝群は，ほぼ調査区の全域で確認され，これらはその方位からいくつかの変遷をたどれるが，時期ごとに，その傾きは一様ではない。また，その密集度や，東西及び南北方向の組合せが地域ごとに異なり，重複関係の著しい箇所も認められる。溝内からの出土遺物は極微量で，埋土の相違も判別し難く，時期ごとの変遷をたどることは容易でない。とくに，低地においては一層複雑な様相を呈する。このことから，この時期でも低地を耕作地，微高地を宅地とする土地利用のあり方に違いが見られる。



第５図　ＳＢ28　遺構平面図・断面図

ＳＢ28（第５図）

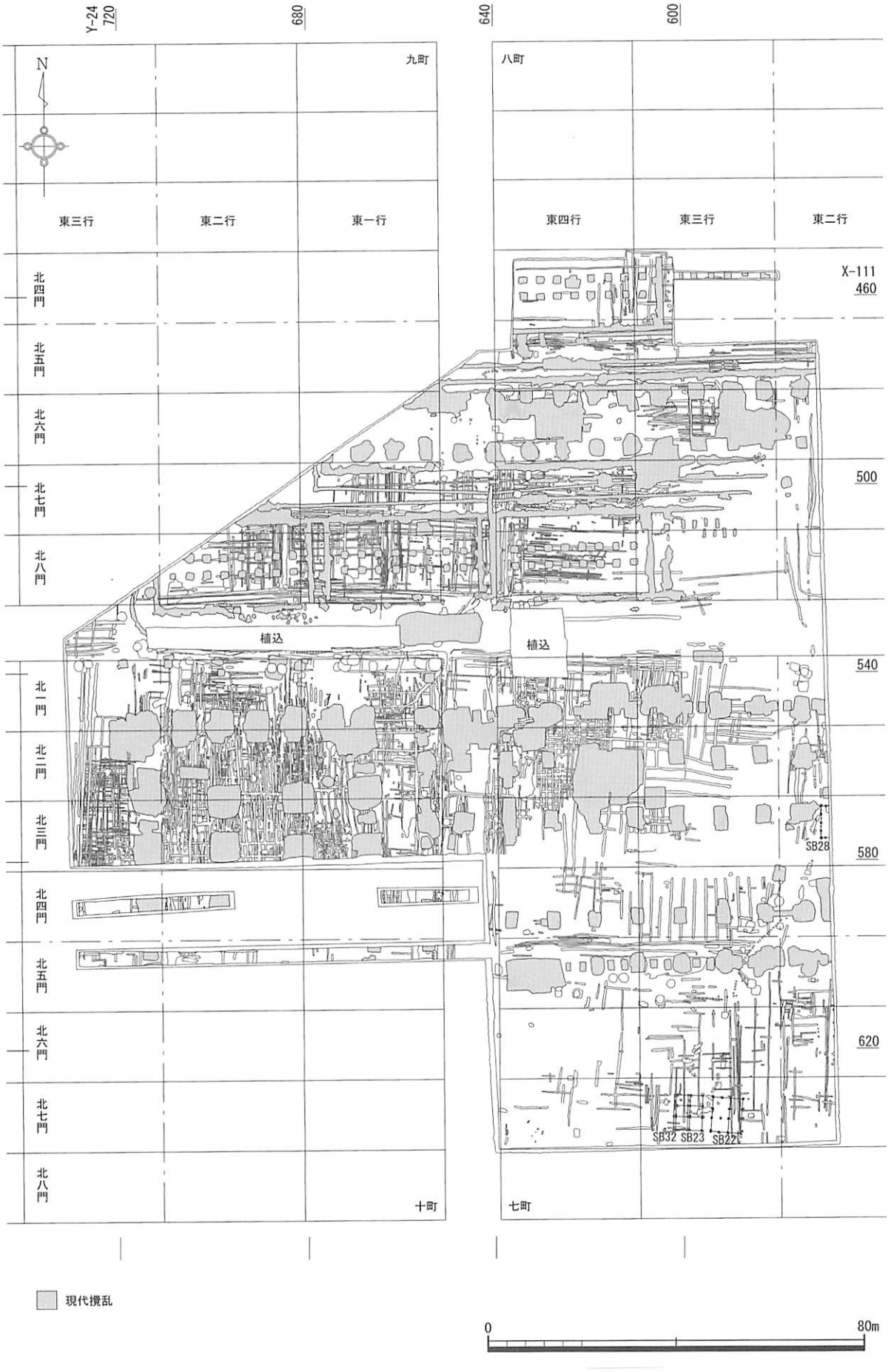
七町の東二行北三門に位置し，礎石建建物で，西端の柱間４間を確認した。約６尺等間となる。主柱と見られる礎石間には直径約20cmの円形を呈し，深さ約20cmを測る小柱穴が１つあり，束柱と考えられる。礎石据付掘形は長軸約75cm，短軸40cmの長楕円形を呈し，深さ約25cmを測る。礎石は30cmほどの扁平な花崗岩である。掘形内には，粗砂と直径２～５cmの礫が充填されていた。

ＳＢ22（第６図）

七町の東三行北七門に位置し，３間×３間の南北棟である。柱間は桁行約6.5尺等間，梁行約５尺等間となる。柱掘形は長軸40cm前後の円形～楕円形を呈し，深さ約30cmを測る。主軸は北で東に約４°振れる。

ＳＢ23（第６図）

七町の東三行北七門に位置し，２間×３間総柱の南北棟である。柱間は桁行が北から7.5，7，８尺と不規則で，梁行約10尺等間となる。柱穴は柱筋が通りにくい配列

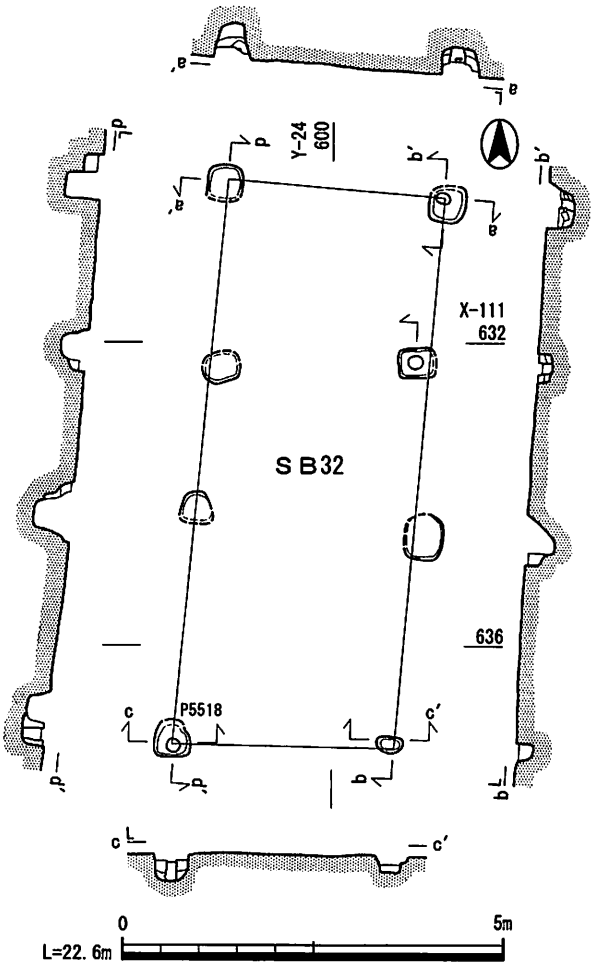


第６図　中世以降　遺構概略図（1/1200）

である。柱掘形は長軸50cm前後の円形～楕円形を呈し，深さ約40cmを測る。主軸は北で東に約2°振れる。

ＳＢ32（第７図）

ＳＢ23とほぼ同位置にある１間×３間の南北棟である。柱間は桁行が北から7，8，9尺，梁行約9.5尺となる。柱掘形は長軸30～50cmの円形から楕円形を呈し，深さは20cm前後を測る。主軸は北で東に約4°振れる。



第７図　ＳＢ32　遺構平面図・断面図

第３節　平安時代の遺構

遺構の重複関係及び出土遺物から，大きく前期と後期に分かれる。

１．平安時代後期の遺構

遺構は，七・八町のごく限られた地区にしか認められない。

ＳＢ７（図版 84 － 1 第９図）

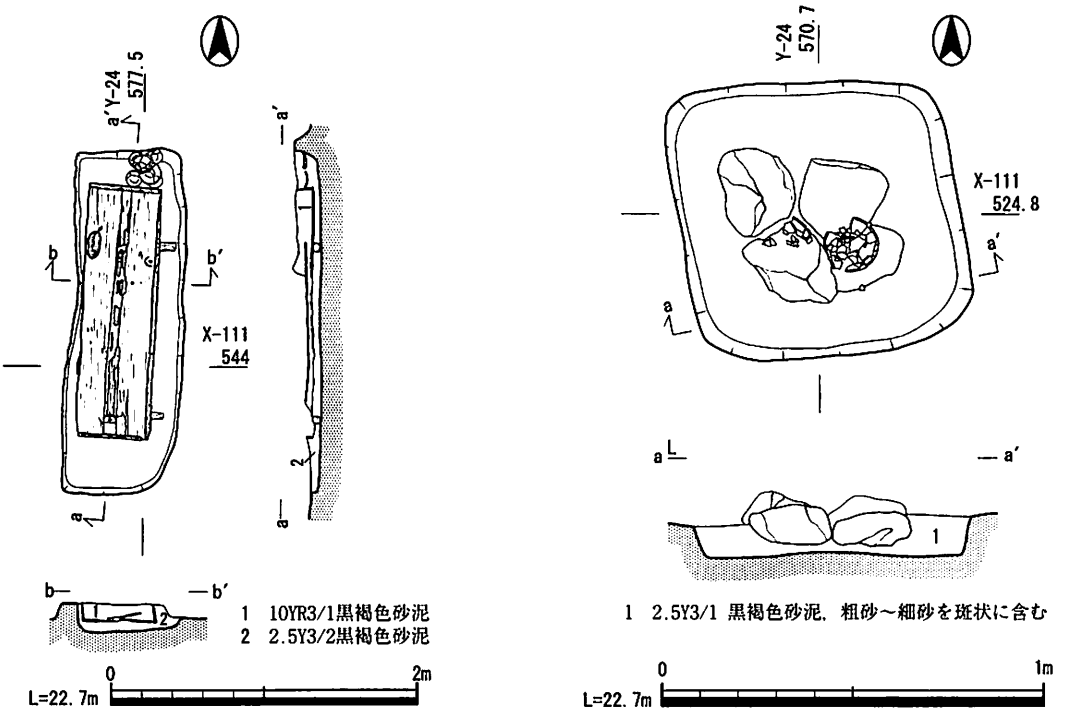
八町の東四行北八門の西側に位置し，２間×４間の南北棟である。柱間は桁行約 6.5 尺等間，梁行約５尺等間となる。柱掘形は一辺 40cm 前後の方形を呈し，深さ 30 ～ 50cm を測る。主軸は，ほぼ正方位である。

ＳＢ８（図版 75 － 5 ・84 － 2 第９図）

八町の東四行北七～八門の西側に位置し，２間×４間の南北棟である。柱間は桁行約 6.5 尺等間，梁行約５尺等間となる。柱掘形は一辺 40cm 前後の方形を呈し，深さ約 20cm を測る。Ｐ 674 の掘形は，ほかのものに比べ深く約 55cm を測り，底からほぼ完形の土師器皿二枚が出土した。これは，五個体と考えられる破片の上に並んで正置する。主軸は北で西に約 4° 振れる。

ＳＸ 4001（図版 76 第８図）

七町東二行北一門の東端において，木棺墓１基を確認した。木棺は南北方向に置かれる。掘形は南北長 2.2 m，東西幅 75cm の方形で，深さ 20cm を測る。木棺の規模は，長辺 1.65 m，短辺約 50cm，高さは 20cm となる。上面は後世の削平により破壊され，天板と見られる板材が一枚棺内に落ち込んだ状態で確認された。板材は，長側板・短側板の一部と底板を確認した。底板の下には，

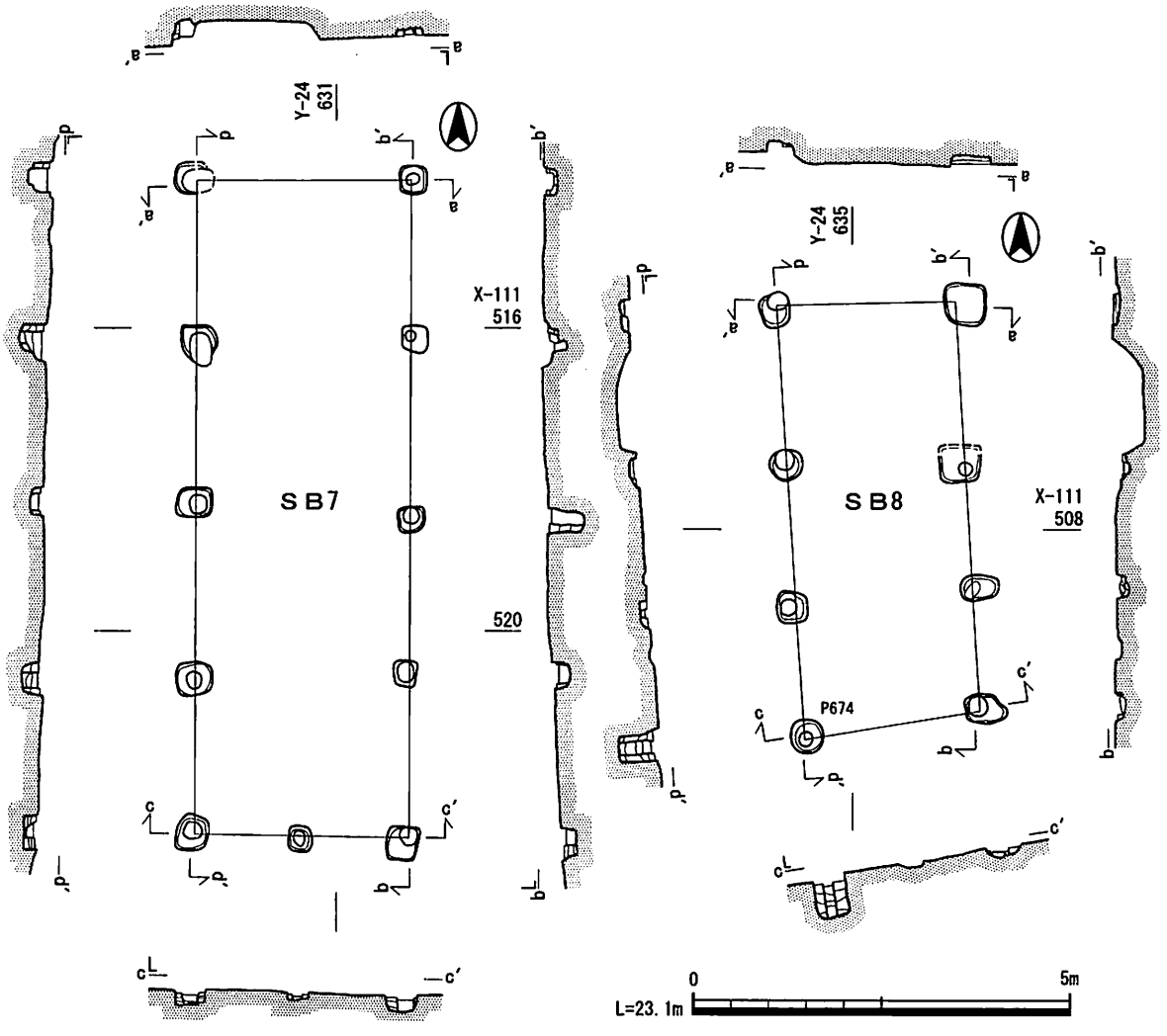


第８図　ＳＸ 4001（左）・4004（右）　遺構平面図・断面図・立面図

棺台用の横木が２本，約 1.1 m離れて設置される。副葬品は，棺内の北西部で漆器を１点確認しただけである。残存状態が悪く器種を特定できなかった。このほか，掘形の北東部棺外で完形の土師器皿６枚を正置した状態で確認した。まず２枚ずつ２列に据える。それに加えて東が下がるよう斜めに２枚並置していた。11 世紀末頃に想定される。

ＳＸ 4004（図版 80 － 3 第８図）

八町の東二行北八門に位置する。掘形は一辺約 70cm の方形を呈し，深さ約 10cm を測る。掘形中央に 20cm 大の川原石を４個確認し，その上に土師器皿１枚が正置され，残りの１枚は石と石の間に落ち込んでいた。後者は，一部が残存しているだけである。そのため，後世の削平により移動した可能性がある。



第９図　ＳＢ７・８　遺構平面図・断面図

２．平安時代前期から中期の遺構

各町ごとに，宅地規模を示すものや，建物群など屋敷地を示す遺構群が認められた。

A　七町（図版71・74－１・78）

宅地内を東西二分する路ＳＦ5408，掘立柱建物20棟と柵列８条，土器溜（ＳＫ5429），井戸（ＳＥ3365）を確認した。

ＳＢ１（図版３・75－２）

東三行北二門に位置し，３間以上×２間の南庇付東西棟で，中心的な建物と考えられる。柱間は桁行約８尺，梁行７～7.5尺，庇出９尺となる。柱掘形は一辺60cm前後の方形を呈し，深さ約40cmを測る。西半の柱穴群は後世に削平され，規模は確定できない。主軸は北で西に１～２°振れる。

ＳＢ29（図版３・75－２）

ＳＢ１とほぼ重なる４間×２間の東西棟である。柱間は桁行約８尺，梁行約8.5尺と各々等間となる。柱掘形は一辺60cm前後の方形を呈し，深さ30～50cmを測る。Ｐ3469には，径約15cmの柱痕が遺存し，掘形底部には，こぶし大よりもやや小さい川原石が据えられていた。また，Ｐ3464にも径約20cmの柱痕が遺存。主軸はほぼ正方位を向く。

ＳＢ２（図版４）

東四行北一門に位置し，３間以上×２間以上の南北棟である。柱間は，桁行6.5尺等間，梁行が西から，８尺，6.5尺となる。柱掘形は長軸約60cmの楕円形を呈し，深さ20～40cmを測る。主軸は北で西に約２～３°振れる。このほか同位置にＳＢ３とＳＢ４が重複し，建替えられたと考えられるが，切り合い関係がないため，時期差は判別しえなかった。周辺にも，いくつか柱穴があるが，まとまりにはならず，さらに調査区外北側へ延びると考えられる。

ＳＢ３（図版４・75－４）

ＳＢ２西側に位置し，西側柱筋は交錯する。南端は現代攪乱により削平され，北端は調査区外に延びる。規模は３間×２間以上の南北棟で，東西庇付建物の可能性もある。柱掘形は，長軸約70cmの楕円形を呈し，深さ約50cmを測る。柱間は南北８尺等間，東西は西から５，13，９尺となる。Ｐ3327・3333・3337には，径13～16cmの柱痕が遺存。主軸は北で西に約２～３°振れる。

ＳＢ４（図版５）

ＳＢ２の南側に位置し，西側柱筋は交錯する。切り合いが認められないため，ＳＢ２との前後関係は不明とせざるを得ない。南端は，現代攪乱により削平され，北端も調査区外へ延びることから，１間×１間以上の南北棟と考えられる。柱間は９尺等間となり，柱掘形は，長軸約55cmの楕円形を呈し，深さ約50cmを測る。主軸は北で東に約２～３°振れる。

ＳＢ19（図版６）

東二行北五～六門に位置し，西端の柱間３間分だけを確認した。柱間は北より10尺，９尺，９尺となり，各々の柱穴は西半のみ確認したにすぎない。このため，柱掘形は一辺30～50cmの方

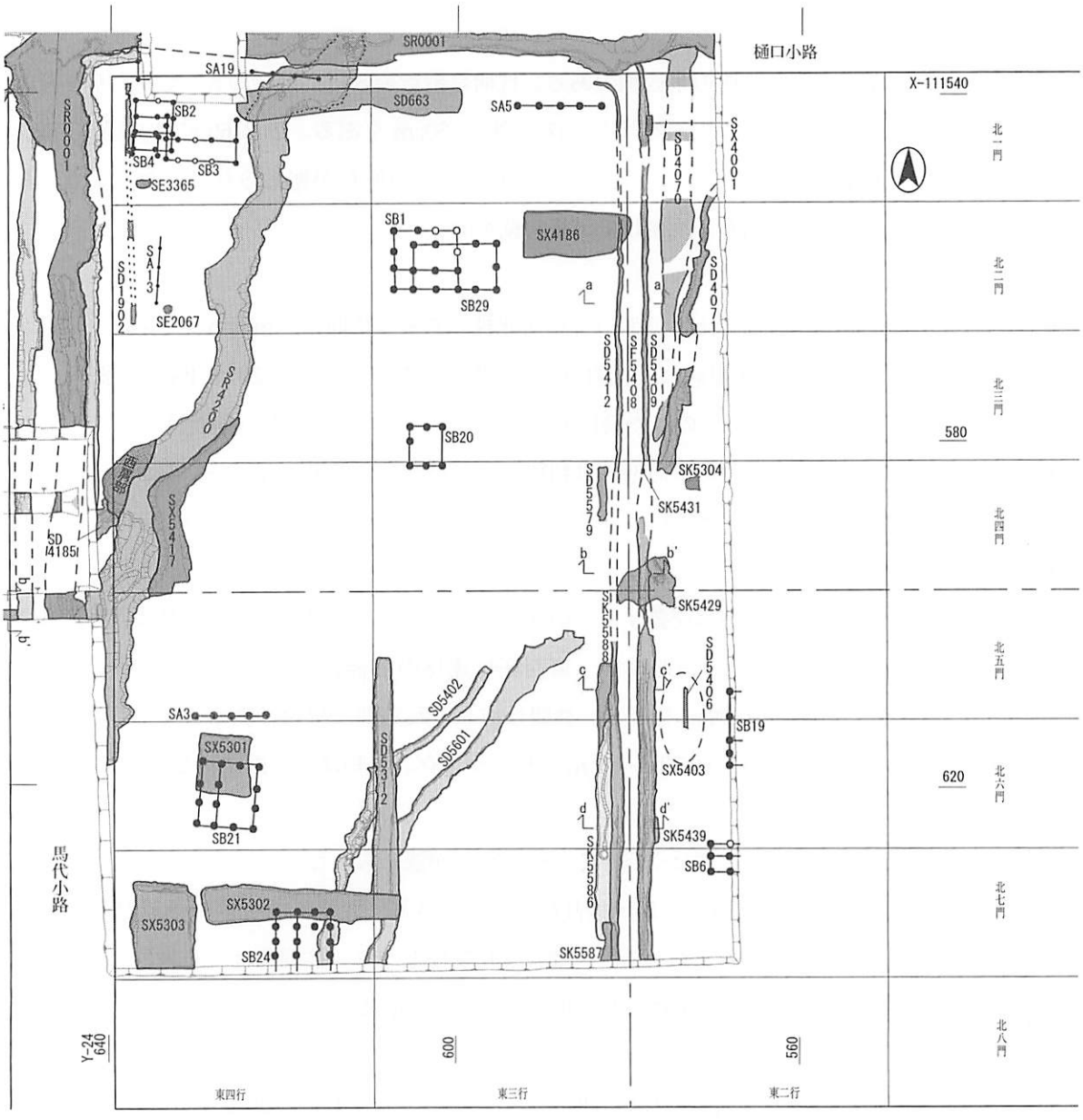
形もしくは長方形を呈し，深さ 40cm を測ると考えられる。ただし，北端の柱穴は，楕円形の可能性がある。南１間には間柱と考えられる柱穴を１基確認したが，他の柱掘形よりも規模が小さく，深さ 20cm ほどを測る。建物の主軸はほぼ正方位を向く。

ＳＢ 20（図版５）

東三行北三～四門に位置し，２間×１間の南北棟である。柱間は桁行約 15 尺，梁間北側が６尺，南側 6.5 尺となる。柱掘形は一辺約 50cm の方形を基本とするが，楕円形や長方形を呈するものを含む。深さ 30 ～ 40cm を測る。Ｐ 5563・5565・5567・5569 では柱抜取り痕を確認した。主軸はほぼ正方位を向く。

ＳＢ 21（図版５・74 － ２）

東三行北六～七門に位置し，２間×３間の西庇付南北棟である。柱間は身舎が約８尺等間で，庇



第 10 図　七町遺構概略図（1/800）

の出は７尺となる。柱掘形は一辺約 60cm の方形を呈し，深さ 30 ～ 40cm を測る。北西の柱穴５基は，ＳＸ 5301 に削平され柱穴底部のみを残す。主軸は北で東に約５° 振れる。

ＳＢ 24（図版６・75 － 1）

東四行北七門に位置し，２間×４間以上の西庇付南北棟である。柱間は桁行約 5.5 尺，梁行約６尺，庇の出は，約７尺となる。柱掘形は，一辺 50 ～ 60cm の方形を呈し深さは約 30cm を測る。庇の柱穴は，主柱穴にくらべ小さく，長軸約 40cm の楕円形で，深さは 20 ～ 30cm を測る。主軸は，北で西に約７° 振れる。

ＳＢ６（第 10 図）

東二行北七門に位置し，２間×１間以上の建物である。柱間は桁行約５尺，梁行 7.5 尺となり，柱掘形は長辺 75cm，短辺 50cm の長方形を基本とするが，楕円形を呈するものもある。深さ 30 ～ 40cm を測る。西側柱筋のそれぞれの柱掘方から土器が多数出土した。主軸はほぼ正方位を向く。

ＳＡ３（図版 13・74 － 2）

ＳＢ 21 の北側 20 尺に位置し，東四行北五門と六門の境界に位置する東西の柵列である。柱間は７尺等間で，４間分を確認した。柱掘形は一辺 50 ～ 60cm の方形を呈し，深さ約 45cm を測る。主軸は，ＳＢ 21 と若干異なり，ほぼ正方位を向く。

ＳＡ４（第 11 図）

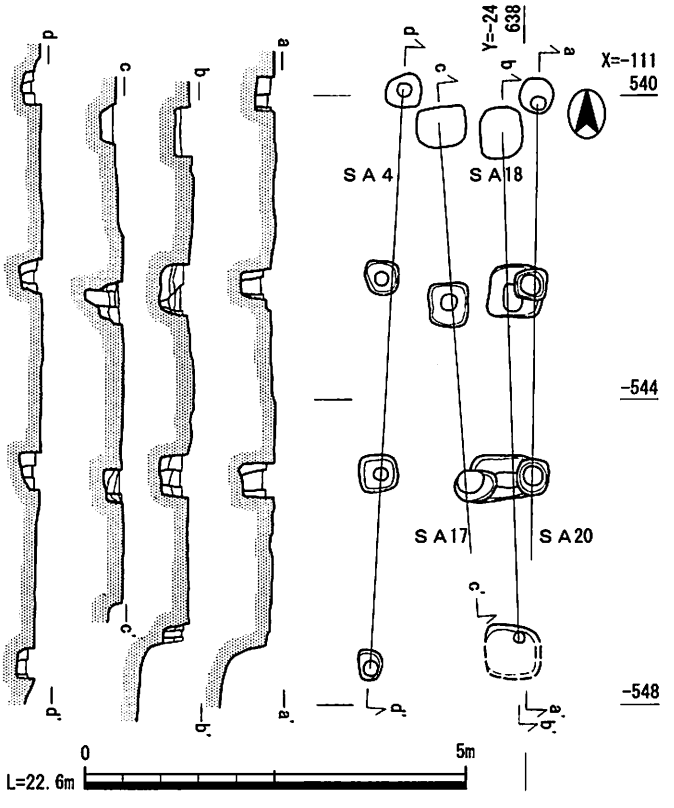
東四行北二門の西側，東築地付近に位置する南北の柵列である。この付近にはＳＡ 17・18・20 があり，南端はいずれも現代攪乱のため確定できない。柱間は８尺５寸等間で，３間分を確認した。柱掘形は長軸約 40cm の楕円形を呈し，深さ約 45cm を測る。主軸は北で東に３° 振れる。

ＳＡ 17（第 11 図）

ＳＡ４の東約 30cm 離れて並行する南北の柵列である。南側は現代攪乱のため確定できない。柱間は８尺等間で，２間分を確認した。柱掘形は長軸約 40cm の楕円形を呈し，深さ約 50cm を測る。柵列の主軸は北で西に４° 振れる。

ＳＡ 18（第 11 図）

ＳＡ４の東約 50cm 離れて並行する南北の柵列である。南端は現代攪乱のため確定できない。柱間は８尺等間で，３間分を確認した。ＳＡ 17・20 の柱穴に切られる。柱掘形は一辺約 50 ～ 70cm の方形を呈し，深さ約 40cm を測る。主軸



第 11 図　ＳＡ４・17・18・20　遺構平面図・断面図

は北で西に2°振れる。

ＳＡ19（第14図）

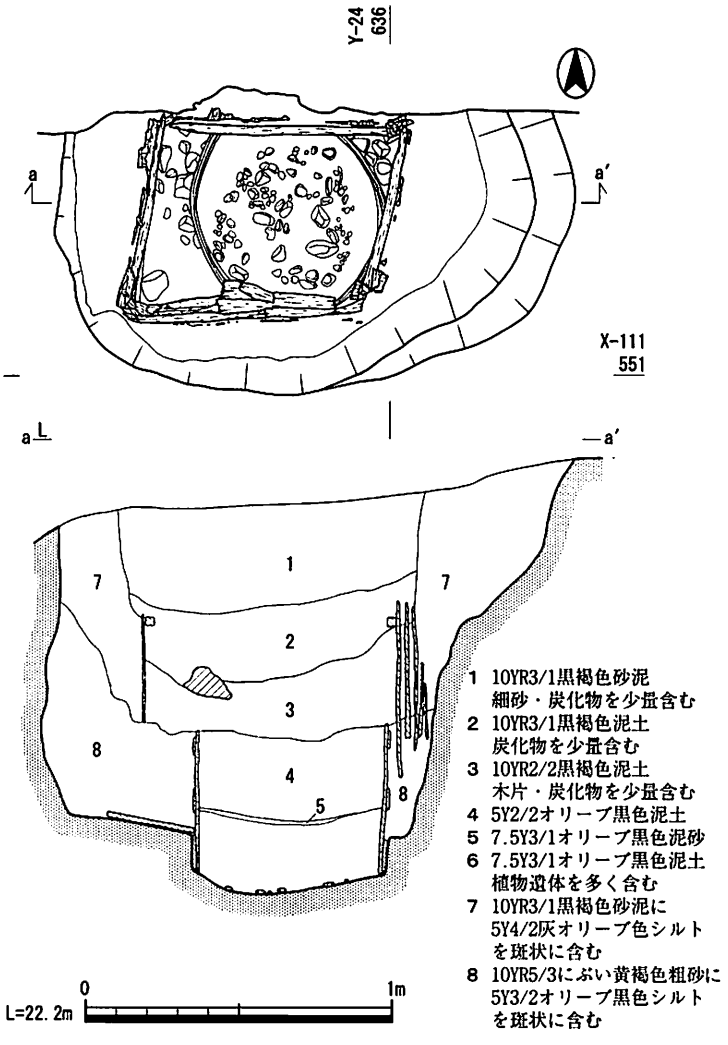
東四行北一門の馬代小路南築地付近に位置する東西柵列である。柱間は，８尺で，３間分を確認した。柱掘形は，長軸40～50cmの楕円形を呈し，深さ10～20cmを測る。ＳＲ4200の廃絶後の遺構と考えられる。

ＳＡ20（第11図）

ＳＡ04の東約１m離れた位置にある南北の柵列である。柱間は８尺等間で，２間分を確認した。柱掘形は長軸約40cmの楕円形を呈し，深さ約40cmを測る。ＳＡ18の柱穴を切る。主軸はほぼ正方位を向く。

ＳＡ13（図版４）

東四行北二門の馬代小路東築地内溝付近に位置する南北の柵列である。北端は現代攪乱のため確定できない。柱間は6.5～７尺で，４間分を確認した。柱掘形は長軸約30cmの楕円形を呈し，深さ30～40cmを測る。主軸は北で東に約１°振れる。



第12図　ＳＥ3365　遺構平面図・断面図

ＳＡ5（図版13）

宅地北端の樋口小路南築地内溝付近に位置する東西の柵列である。柱間は約８尺等間で，４間分を確認した。柱掘形は長軸約40cmの楕円形を呈し，深さ約30～40cmを測る。主軸は東でほぼ正方位を向く。

ＳＥ3365（図版77第12図）

東四行北一門の南西隅に位置する。掘形は長辺約1.6 m，短辺1.0 mの隅丸長方形を呈し，深さ1.7 mを測る。通常知られる井戸より小規模である。方形横桟縦板組の井戸枠で，底には径10cm前後の川原石が敷き詰められ，その中心部を一段掘り込んで径60cmの曲物が据えられる。曲物底面の標高は20.75 mを測る。

ＳＥ2067（図版19・75－３）

東四行北二門の南西隅に位置する。掘形は長軸約１mの楕円形を呈

し，深さ約 30cm を測る。掘形が浅く，上層は後世の削平をかなり受けている可能性が高い。掘形の北東部で，曲物の断片が確認され，掘形中央部には，須恵器の甕が半分に割られ内面を上向けた状態であった。掘形底部の標高は 21.75 mを測る。

ＳＫ 5429（図版第 72 － 1 ・73 第 10 図）

宅地のほぼ中心に位置する。掘形は，南北４m，東西６mの方形を呈し，深さ５～ 10cm を測る。南側は，現代攪乱に削平される。ＳＤ 5409 が中央部を切る。土師器の杯・高杯・甕，須恵器の壺・甕・瓦などが一括で出土した。

ＳＫ 3133（第 10 図）

東四行北一門の西隅，ＳＤ 655 東肩付近に位置する。掘形は南北約 1.2 m，東西約 0.6 mの楕円形を呈し，深さ約 20cm を測る。

ＳＤ 1902（第 10 図）

馬代小路東築地内溝想定位置付近にある南北溝で，北一門～二門の間で確認された。南半は，徐々に浅くなり，北二門以南では，確認できなかった。幅 50cm，深さ 10 ～ 15cm で，断面は浅いレンズ状を呈す。土師器皿，緑釉椀片などが比較的まとまって確認された。

ＳＦ 5408 路（図版 72 第 10 図）

宅地を東西に二分する位置にあり，113 mを確認した。ＳＤ 5412 とＳＤ 5409 によって画され，溝の心々間は 3.5 ～ 4.5 mを測り，路の有効幅は約 2.5 ～３mとなる。

ＳＤ 5409 東側溝（第 10 図）

ＳＦ 5408 東側溝に相当し，113 mを確認した。４時期の変遷をたどる。最も古いＳＤ 5409D は幅 40cm，深さ 60cm，断面は逆台形状を呈す。最も新しいＳＤ 5409A は幅 40 ～ 90cm，深さ 10cm，断面はレンズ状を呈し，北半では，幅 55cm，深さ 20cm を測る。

この溝底の標高は，北端で約 22.2 m，中心付近で約 22.4 m，南端で約 22.0 mとなることから，宅地の南北心を境に，北と南へ各々分水される。そして，北端でＳＲ 0001 に合流する。

ＳＤ 5412 西側溝（第 10 図）

ＳＦ 5408 西側溝に相当し，113 mを確認した。溝は４時期の変遷をたどり，最も古いＳＤ 5412D は幅約 60cm，深さ約 40cm，断面は逆台形状を呈す。最も新しいＳＤ 5412A は幅約 60cm，深さ約 20cm，断面は逆台形を呈し，北半で，幅約 50cm，深さ約 15cm を測る。この溝底の標高は，北端で 22.1 m，中心付近で 22.5 m，南端で 22.2 mとなることから，ＳＤ 5409 同様，宅地の南北中心付近を境に，北と南へ各々分水される。北端でやや西に蛇行しながらＳＲ 0001 に合流する。

両溝は，北半で一時期確認したにすぎない。そのため，南半との関係を確定できないが，その形状及び埋土を検討したところ，北半のＳＤ 5409 とＳＤ 5412 は，南半のＳＤ 5409A とＳＤ 5412A とおのおの同一の可能性がある。

ＳＤ 5579（第 10 図）

東三行北四門の西よりに位置する南北溝で，幅約 80cm，深さ 20cm，断面は浅いレンズ状を呈す。

ＳＤ 4070・4071（第 10 図）

ＳＤ 5409 の東に位置し二条ほぼ並行する。北北東から西南西の方へ南西流する。おおむね，西側がＳＤ 4070 で東側がＳＤ 4071 である。各々の南端付近で，前者が後者を切る。前者は幅約 2.1 m，深さ約 20cm を測る。断面は逆台形～レンズ状を呈す。この北端はＳＲ 0001 と合流し，南端は，宅地の南北中軸付近まで約 60 mを確認した。後者は幅約２m，深さ約 45cm を測る。断面は，逆台形～レンズ状を呈す。ＳＤ 4070 に比べて，東に振れる。北側については，徐々に浅くなり，確認した範囲もきわめて不明瞭となるが，北一門と北二門の境界以北にも続くと考えられる。南端はＳＤ 4070 と同じ付近まで確認し，約 32 mをである。

ＳＤ 5402・5601（第 10 図）

北東から南西へ蛇行しながら流れる二条の溝を確認した。これらは，約２～４m離れて並行する。北側がＳＤ 5402，南側がＳＤ 5601 となる。前者は幅１～２m，深さ約 15cm を測る。断面は逆台形状を呈す。北東から南西に向かって，幅約１mで南流するが，南へ進路を変えるところから幅が約２mに広がる。ＳＫ 5302 に切られる付近で一時，幅が１mと狭まり，調査区南壁より約１mのところでおわる。後者は２～３mの幅を不規則に繰り返す。深さ約 25cm を測る。断面は逆台形からレンズ状を呈す。

ＳＤ 663（図版 74 － 1 第 10 図）

ＳＲ 4200 を切る東西の溝状となり，長さ約 26 m，深さ約８～ 10cm をとなり，断面は浅いＵ字状を呈す。幅は，最も細いところで約 1.8 m，最も広い西端で約 3.5 m，東端では約 2.9 mを測る。また，底は西側がほんの少し高く，東西の高低差は約８cm となる。

ＳＫ 5301（第 10 図）

ＳＢ 21 の柱穴を一部切り，建物北半に広がる土壙である。東西約 5.9 m，南北約 6.7 mの方形を呈し，深さ 10 ～ 12cm を測る。なお，断面観察の結果，底の形状はほぼ平坦であるが，四周が約 1.2 mの幅で２～ 10cm 低い。ＳＢ 21 と同様に北で東に約５° 振れる。

ＳＸ 5302（第 10 図）

東四行北位置門に位置する。東西約 22.5 m，南北約 2.8 ～ 4.2 mの長方形を呈し，深さ 20 ～ 30cm となり，断面は，レンズ状～Ｕ字状を呈す。東端と西端の高低差は約 25cm となり，全体で，西に傾斜する。ただし，東端から 13.7 m以西は傾斜が逆となる。

ＳＫ 5303（第 10 図）

ＳＫ 5301 の南側に位置する。東西約 7.4 m，南北約 9.4 m以上の長方形を呈し，深さ約 40cm を測る。底はほぼ平坦であるが，西端から東端へわずかに傾斜し，東端が約５cm 低くなっている。この北端は，前述したＳＫ 5302 の北端と同一線上に位置することから，両者に何らかの関連性が予想される。

ＳＤ 5312（第 10 図）

東三行・東四行の境界に位置し，西肩がほぼこれと一致する。幅約２m，長さ 27.2 m以上，深さ 25 ～ 30cm を測り，南北の溝状となる。断面は，逆台形～レンズ状を呈し，南側はＳＸ 5302 に

切られる。

ＳＤ 5406（第 10 図）

東二行北五～六門の西よりに位置する南北溝である。幅約 20cm，深さ 10cm を測り，断面は浅いレンズ状を呈す。

ＳＸ 4163（第 10 図）

東三行北一門のほぼ中央に位置する。浅い土壙状の遺構で，南北 35cm，東西 40cm，深さ約 10cm を測る。ほぼ完形の土師器の皿７枚が，上向けに重ねられ正置されていた。

ＳＸ 4186（第 10 図）

東三行北二門のほぼ中央に位置する。東西約 12.5 m，南北約５mの方形となり，深さ 15～20cm を測る。断面は，レンズ状を呈し，底はほぼ平坦である。東端は，ＳＤ 5412 Ａに切られる。

ＳＸ 5403（第 10 図）

ＳＤ 5409 の東側，東二行北五～六門に位置する浅い土壙状の遺構で，南北約６m，東西 1.5m，深さ 5cm を測る。浅い遺構であるが，広範囲にわたることから，溝などの遺構の可能性も考えられる。土師器皿，緑釉陶器耳皿が出土した。

ＳＫ 5304（第 10 図）

東二行北四門の西よりに位置する土壙状の遺構で，南北 1.3 m，東西 1.5 m，深さ 15cm を測る。断面は浅いレンズ状を呈す。

ＳＫ 5586・5587・5588（第 10 図）

各々，ＳＤ 5412 に切られ，３遺構が南北に重複する。その重複関係からＳＫ 5588 が最も古く，ＳＫ 5587 が新しい。ＳＫ 5588 は幅 1.5～２m，長さ約 10 m，深さ 15～20cm を測り，断面は逆台形を呈す。ＳＫ 5586 は幅２m以上，長さ約 26 m，深さ約 45 mを測り，断面は逆台形～レンズ状を呈す。ＳＫ 5587 は，幅１～1.5 m，長さ４m以上，深さ 10～13cm を測り，さらに南へ続く。断面はレンズ状を呈す。北から２mほどのところで幅 90cm と狭まる。特に，ＳＫ 5586 とＳＫ 5588 の西肩の位置が近似することから，古いものの形状を踏襲していると考えられる。また，同一遺構の埋土の違いとも考えられるが，一応別遺構として扱った。

これらはＳＤ 5312 と約 24 m離れて並行する。また，宅地の南北中軸から南に５～６m離れたところにそれぞれの北端が位置すること，さらにこれらとＳＤ 5312 の形状が似ていることから，宅地内を区画する遺構と考えられる。

Ｂ　八町（図版 78・79）

数時期にわたる建物群，柵列や門，池を確認した。このうち，主要建物の規模と配置は，八尺を基準とした計画尺にもとづく。そのなかで，ＳＢ 25 は調査区北側の既往調査で確認されている建物２と桁行，柱筋ともに一致し，正殿域を構成する前殿・後殿に相当すると考えられる。ＳＢ 25 の西側約 20 尺のところで，ＳＢ 26 を，東側約 40 尺のところで，ＳＢ 27 を確認し，いずれも建物南端の柱通が一致する。さらに，ＳＢ 27 は，既往調査建物３と柱筋が一致する。また，これらの

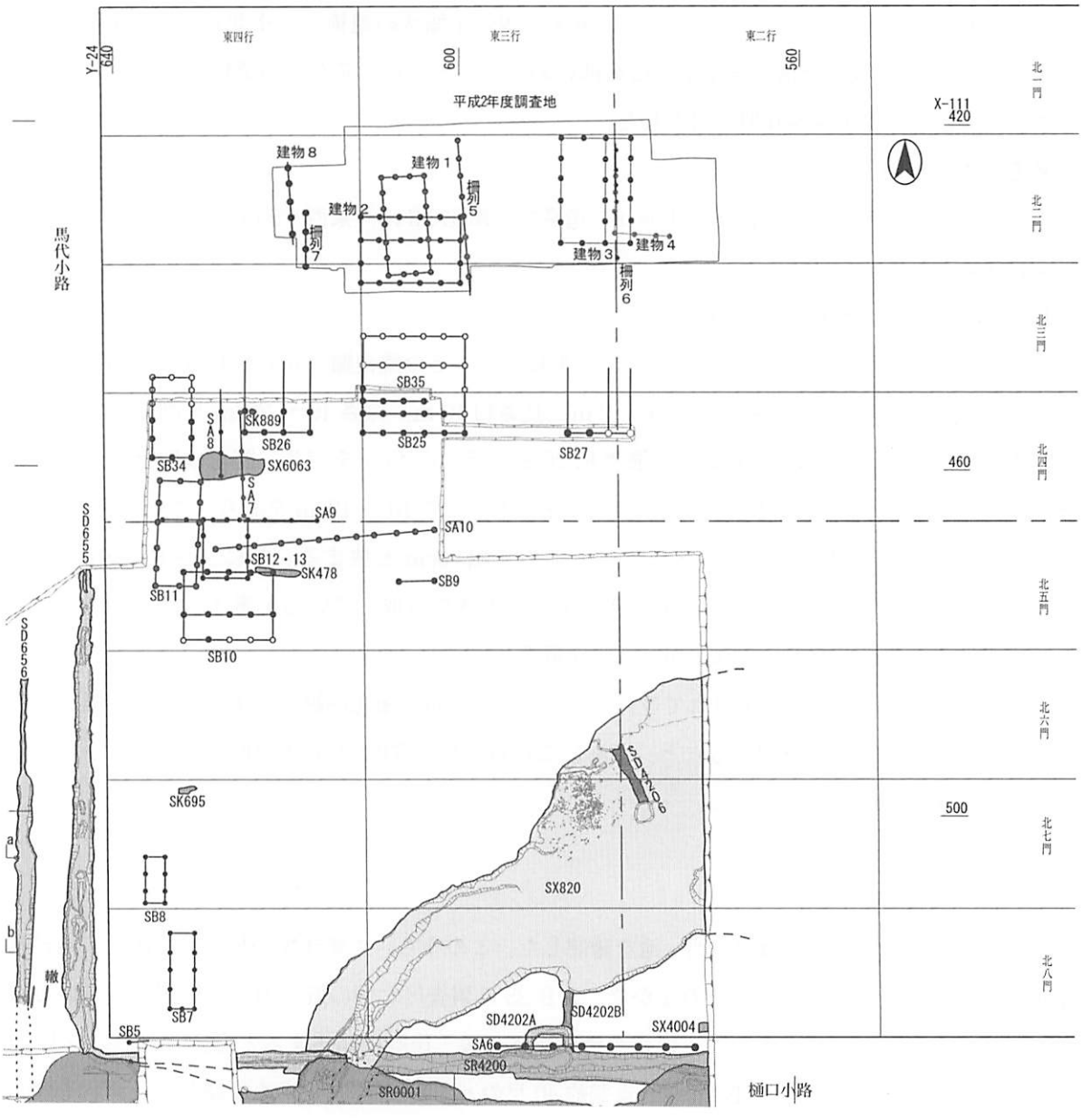
区画施設は確認されないことから，一町占地の宅地規模を有する可能性が高い。南側には，大規模な園池にともなう，洲浜，導水施設を確認した。

ＳＢ 25（図版７）

東三行北四門に位置し，５間×２間の南庇付東西棟と考えられる。その北端は，調査区外へ延び，北庇をもつ可能性が高い。柱間は身舎，庇ともに８尺等間で，棟通より南側の柱穴群と，西側柱筋の中央柱穴の柱抜取痕を確認した。柱掘形は一辺約１ｍの方形を呈し，深さ約 60cm を測る。南入側柱筋の柱穴には，いずれも北側へ柱抜き取りがみられる。主軸はほぼ正方位を向く。柱筋は，南庇柱筋より北へ約 17 ｍ隔てた 1990 年度調査で確認された建物２のものと一致する。

ＳＢ 35（図版９）

東三行北四門に位置し，柱穴はいずれもＳＢ 25 の柱抜取痕を切る。想定される建物南側の４間



第 13 図　八町遺構概略図（1/800）

分を確認した。柱間は８尺等間で，ＳＢ 25 と柱筋を一にする。柱掘形は，一辺約 80cm の方形を呈し，深さ 50cm を測る。

ＳＢ 26（図版７）

ＳＢ 25 西端より西６ｍ（20 尺）のところに位置し，２間×１間以上の東庇付南北棟である。柱間は身舎，庇ともに８尺等間で，北端は調査区外に延びると考えられる。柱掘形は一辺約 80cm の方形を呈し，深さ約 70cm を測る。主軸はほぼ正方位を向く。柱筋は，1990 年度調査で確認された柵列７と，さらにＳＢ 25 南庇のものと各々一致する。

ＳＢ 27（図版８）

ＳＢ 25 東端より東 12ｍ（40 尺）離れて，２基の柱穴を確認した。柱掘形は一辺約 80cm の方形を呈し，深さ約 30cm を測る。柱間は８尺となり，主軸はほぼ正方位を向く。その両側は，現代攪乱が著しく，性格や規模を確定できなかった。しかし柱筋は，ＳＢ 25 の南庇と，さらに 1990 年度調査で確認された建物３の桁行方向のものにも各々一致することなど，統一的な規格がみられ，関連性がうかがえる。

ＳＢ 34（図版７）

東四行北四門に位置し，建物２間×２間以上の南北棟である。柱間は約７尺等間で，北と西側は調査区外に延びると考えられる。柱掘形は一辺約 40 ～ 60cm の方形を呈し，深さ約 50cm を測る。主軸はほぼ正方位を向く。

ＳＢ９（図版８・80 － ２）

東三行北五門にあるＳＢ 25 南庇から 58 尺南に位置し，東西１間である。柱間は約 13 尺，柱掘形は，一辺約１ｍの方形を呈し，深さ約 50cm を測る。主軸は，ＳＢ 25 とほぼ同一方位を向く。これ以外に周辺で柱穴は確認されず，また柱間も他の建物に比べ大きいことから，門の可能性が考えられる。

ＳＢ 10（図版８・80 － １）

東四行北五門に位置し，５間×２間の南庇付東西棟である。身舎柱間は８尺等間で，庇出は約９尺で，建物棟通が攪乱を受ける。柱掘形は一辺約 60 ～ 85cm の方形を呈し，深さ約 40cm を測る。主軸はほぼ正方位を向く。

ＳＢ 11（図版９）

東四行北四から五門に位置し，２間×５間の南北棟である。柱間は建物中央の柱穴を欠くが，８尺等間と考えられる。柱掘形は一辺の約 70 ～ 80cm の方形を呈し，深さ 60 ～ 80cm を測る。主軸はほぼ正方位を向く。

ＳＢ 12（図版 10）

東四行北五門に位置し，２間×２間の東西棟である。柱間は桁行８尺等間，梁行 11 尺等間となる。柱掘形は一辺約１ｍの方形を呈し，深さ 40 ～ 60cm を測る。主軸は北で西に５～６° 振れる。

ＳＢ 13（第 13 図）

東四行北五門に位置し，２間×３間の南北棟である。柱間は，桁行は北から 6.5 尺，10 尺，6.5

尺と中央が広く，梁行は９尺等間となる。柱掘形は一辺の約１ｍの方形を呈し，深さ 30 ～ 65cm を測る。主軸はほぼ正方位を向く。

これら４棟は，同位置で切合い，ＳＢ 10・11・12・13 の順で古くなる。

ＳＫ 889（図版 19・80 － 4）

東四行北四門，ＳＢ 26 身舎の南西部に位置する。掘形は長軸約 70cm，短軸約 60cm の楕円形を呈し，深さ約 25cm を測る。その中央部で，口縁部を破損する土師器の甕１個体が認められた。その直下北東脇から遺存状態の悪い富壽神寶が１枚出土した。建物との位置関係より，ＳＢ 26 の祭祀に関わる遺構の可能性がある。

ＳＫ 478（第 13 図）

東四行北五門のほぼ中央に位置する。東西約５ｍ，南北約 40cm の長方形を呈し，深さ５～ 10cm を測る。ＳＢ 10 の柱穴に切られる。底からは，須恵器や土師器が炭化物とともに出土した。

ＳＡ７（図版 14）

東四行四門のほぼ中央に位置する南北の柵列で，４間分確認し，柱間は７～ 10 尺となる。柱掘形は，直径 40 ～ 50cm の円形を呈し，深さ約 20cm を測る。主軸はほぼ正方位を向く。

ＳＡ８（図版 14）

東四行四門に位置し，ＳＡ７の西側に並列する南北の柵列で，３間分確認し，柱間は約８尺となる。柱掘形は，直径 30 ～ 50cm の円形もしくは方形と不揃いで，深さ約 20cm を測る。主軸はほぼ正方位を向く。

ＳＡ９（図版 15）

東四行五門の北端に位置し，宅地の南北中軸付近を走る東西の柵列で，６間分確認し，柱間は 10 尺となる。柱掘形は一辺 40 ～ 50cm の方形を呈し，深さ約 20cm を測る。柵列の主軸は正方位に対し直交する。

ＳＡ 10（図版 15）

東三～四行五門の北端に位置する東西の柵列で，９間分確認し，柱間は７～８尺となる。柱掘形は一辺 40 ～ 50cm の方形を呈し，深さ約 40cm を測る。また，これと同じ柱筋延長上の西端で２基の礎石据付痕跡が確認された。礎石据付掘形は一辺 40 ～ 50cm 方形を呈し，深さ約 20cm を測る。礎石間は開口部と考えられ，他の掘立柱間が塀などの遮蔽施設の可能性もある。この礎石据付痕の南北はいずれも後世の溝などにより削平され，確認するには至らなかった。主軸は東で北に４～５°振れる。1990 年度の調査で確認されている柵列５の延長と直交する。

ＳＸ 6063（第 13 図）

ＳＢ 11 の北側に位置する土壙である。東西約７ｍ，南北 2.5 ～３ｍの不整形な方形を呈し，深さ５～ 10cm を測る。断面は浅い逆台形状である。ＳＡ７・８に切られる。

ＳＫ 695（第 13 図）

東四行北七門のほぼ中央に位置する土壙である。幅 1.5cm，南北 50cm 以上の不整形な方形を呈し，深さ約 10cm を測る。底には，土師器，須恵器などの小片が散乱していた。

ＳＡ６（図版 15）

東二～三行北八門の樋口小路北築地付近に位置する東西の柵列で，７間分確認し，柱間は 11 尺となる。柱掘形は一辺 40 ～ 50cm 方形を呈し，深さ 30 ～ 40cm を測る。主軸は正方位に対し直交する。

ＳＸ 820，ＳＤ 4206（図版 20・21・81・82・83）

宅地南西部で確認された池状遺構である。東西中軸付近で，洲浜の葺石に想定される小礫の分布を確認したことから園池の可能性が高い。また，この下層に，縄文時代中期末～奈良時代にかけての旧河川が北東から南西方向に流れる。その窪みを園池に利用したと考えられる。

また，北肩で宅地の東西中軸線近くに一条の溝が取り付いていた。その北端には東西両側に立った状態で板材を確認した。このうち東側板材の北端には切り欠きがあることから，板が組合わされていたと考えられ，枡状を呈する木樋の可能性が想定された。しかも底には小石が敷き詰められ，板材の南端部分は特に密となっている。これより南側には板材の両側に杭が打ち込んであり，その間にはこぶし大の川原石を敷き並べている。このことから，ここに板をはめ込んでいたと考えられ，水を堰き止める施設であったと考えられる。このような配置のあり方から，園池に水を引き込むための導水施設と考えられる。ただし，この桝状遺構の北側は現代攪乱に削平され，取水の状況については明らかにできなかった。

しかしながら，付近の地層との関連をみると，枡底は地山の礫層にいたっており，現在でもここから水が湧く。特に雨が降ったあとは顕著である。このことから，水をほかのところから引いてくるのではなく，自然地形の礫層からの湧水を利用したと考えられる。その最も顕著な例は，平安時代後期の宇治平等院の園池である[1)]。なお，枡の例としては京内でも数例確認されている。

Ｃ　九町

九町では，掘立柱建物２棟と井戸１基，井戸に関連する土壙などが確認された。

ＳＢ 14（図版 10・88 － 2）

東一行北七門の西端に位置し，３間×３間以上の建物と考えられる。柱間は約９尺等間である。柱掘形は一辺約１ｍの方形を呈し，深さ 30 ～ 40cm となる。南と東側の柱穴は規模がやや小さく一辺 60 ～ 70cm の方形で，深さ 30 ～ 40cm を測る。柱当たりにはこぶし大の川原石がいくつか確認され，柱抜取り後に投棄されたものと考えられる。柱穴の規模の違いなどから，南と東側に庇をもつ可能性も考えられる。主軸はほぼ正方位を向く。

ＳＢ 15（図版 11・88 － 1）

東二行北八門の西端に位置し，２間×４間以上の西庇付南北棟と考えられる。柱間は８尺等間で，庇出は９尺となり，柱掘形は一辺約 80cm の方形を呈し，深さ 30 ～ 50cm を測る。Ｐ 566・568 には径約 10cm の柱痕が遺存する。主軸はほぼ正方位を向く。

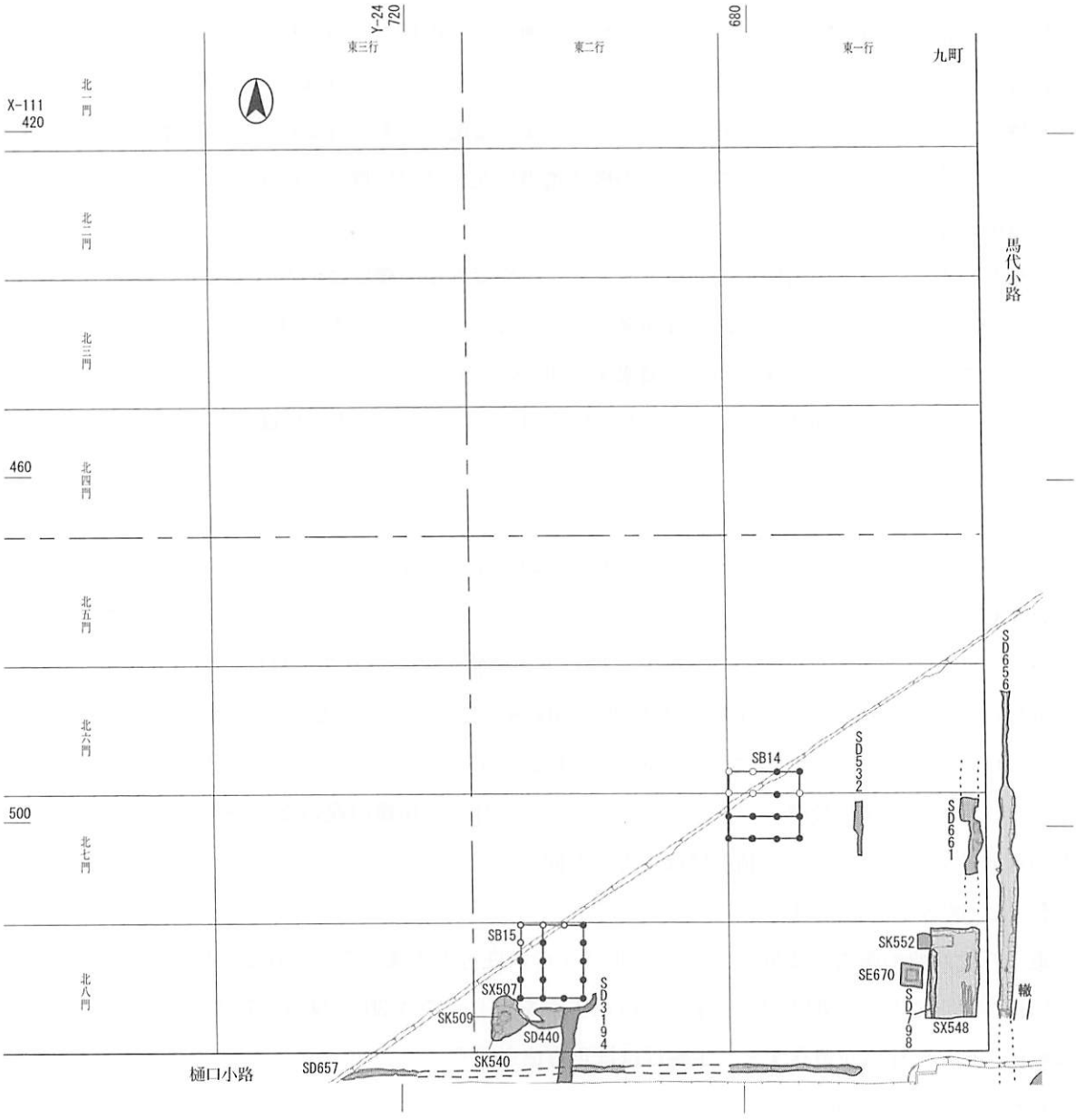
ＳＥ 670（図版 18・86・87）

九町の南東隅に位置し，上半は削平をうけるが，下半の井戸枠は良好な状態で遺存していた。掘

形は2.4 mの方形を呈し，深さ1.7 mを測る。中央には，一辺約1.5 mの方形を呈する横板井籠組の井戸枠があり，五段の板材からなる。最上段は遺存状態が悪く，加工痕などの確認はできなかった。それより以下では，墨付や材の位置を決める番付，さらには材加工時の痕を明瞭にとどめている。また，板材には各段をつなぐためのほぞが上下ほぼ中央に1ヶ所ずつあり，だぼにより接合されていた。また，底には，まばらに小礫が分布し，その上面に，曲物などの破片とともに，完形の鉄製鎌1点を確認した。底標高は21.30 mを測り，地山の礫層を40cmほど掘り込んでいる。

ＳＸ548（第14図）

ＳＥ670の東側に位置する。掘形は南北10 m，東西5.5 mの長方形を呈し，深さ約20cmを測る。底は平坦で，北から南へやや緩い傾斜をもつ。井戸と繋ぐ施設は確認されなかったが，水を溜めるような施設の可能性が考えられる。



第14図　九町遺構概略図（1/800）

ＳＤ 798（第 14 図）

ＳＸ 548 の底面西側で確認した南北溝である。全長７ｍ，幅 30cm，深さ 10 ～ 15cm を測り，断面は，浅いレンズ状を呈す。この溝も南に傾斜することから，ＳＸ 548 の排水施設と考えられる。

ＳＫ 552（第 14 図）

ＳＸ 548 の北西に位置し，東半部をＳＸ 548 に切られる。掘形は南北約２ｍ，東西 1 .4m 以上の楕円状を呈し，深さ約 35cm を測り，断面はレンズ状を呈す。埋土の中位には炭化物が特に密集し，その上下にもまばらにみられる。

ＳＸ 507（第 14 図）

ＳＢ 15 の南西に位置し，南北約 4.8 ｍ，東西約 3.4 ｍの三角形状を呈し，深さ約 20cm を測る。その中心部分，直径約１ｍの範囲はさらに約 25cm，一段低くなり，ＳＫ 509 とした。肩部は 60cm ～１ｍの幅でテラス状になる。そのうち，南側をＳＫ 546 とした。これらの遺構は，検出時には一つの遺構と考えていたが，掘下げの結果と断面等の観察から別々の遺構と考えた。

ＳＤ 440（第 14 図）

ＳＢ 15 の南側に位置し，長さ約３ｍ以上，幅約 2.4 ｍ，深さ 10 ～ 15cm で，東西に長い溝状を呈する。断面は浅いＵ字状を呈す。これは宅地内溝の想定位置にあたる。また，この底において，後述するＳＤ 3194 を確認した。

ＳＤ 3194（第 14 図）

ＳＢ 15 南東角から南側で確認した。東側柱筋から約１ｍ東を南流し，建物南東角で西に折れ，建物中軸付近で再び折れて南流する。建物の北・西側では，溝を確認することはできなかったが，ＳＢ 15 に近接することから，雨落ち溝の可能性が考えられる。ＳＢ 15 南東部で幅約 80cm，深さ 15 ～ 20cm となる。南流する部分から幅約 1.8 ｍと広がり，深さ 20cm を測る。これは，樋口小路を超える際，北側溝との接続部では明確な切り合い関係はなく，合流していると理解した。なお，南側溝には切られることを確認した。

ＳＤ 661（第 14 図）

東築地想定位置の西側で確認された。幅約１～２ｍ，深さ 10 ～ 40cm を測る南北溝である。断面は，逆台形を呈し，底は平坦でなく部分的にやや深い窪みが認められる。

Ｄ　十町（図版 89）

井戸２基，建物５棟，宅地を区画する溝，柵列などが確認された。

ＳＢ 16（図版 11）

東一行北一門の中央よりやや南東に位置し，２間×３間の総柱建物である。柱間は約７尺等間で，建物南西隅の柱穴を欠くが，10 基の柱穴を確認した。柱掘形は一辺 40 ～ 50 ｍの方形を呈し，深さ 30 ～ 60cm を測る。主軸はほぼ正方位を向く。

ＳＢ 17（図版 13）

東一行北二門の中央より北東に位置し，２間×３間の南北棟である。柱間は梁行８尺，桁行７尺

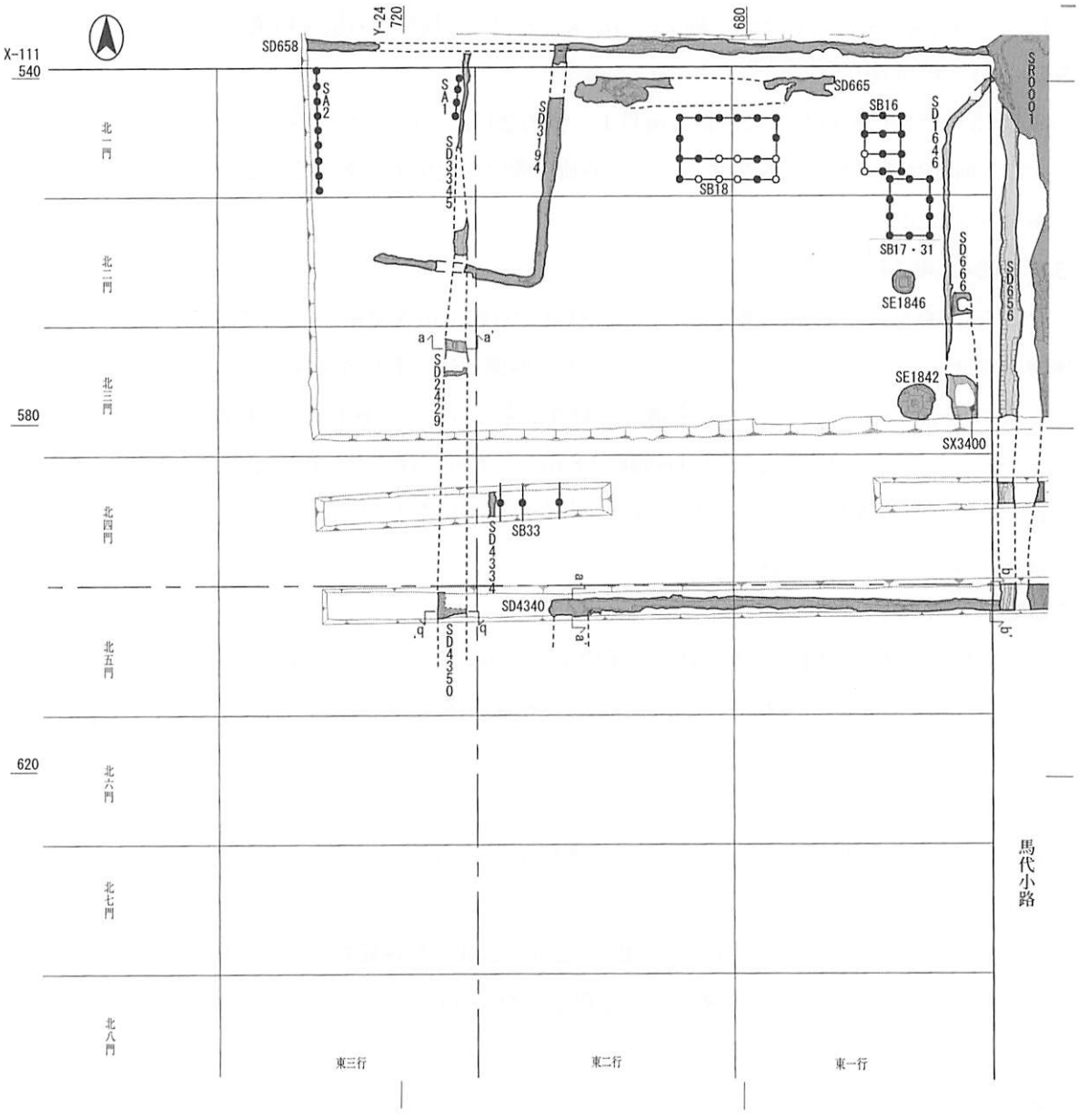
となり，柱掘形は一辺 40 ～ 60cm の方形を呈し，深さ約 40cm を測る。主軸はほぼ正方位を向く。

ＳＢ 31（図版 13）

ＳＢ 17 と重複し，２間×３間の南北棟である。ＳＢ 17 にほとんどの柱穴を切られており，全容は不明である。柱掘形は一辺 40 ～ 60cm の方形を呈し，深さ約 40cm を測る。主軸はほぼ正方位を向く。このことからＳＢ 17 は建替えもしくは補修と考えられる。

ＳＢ 18（図版 12・90 － 2）

東一行北二～三門南端に位置し，２間×５間の南庇付東西棟である。柱間は身舎，庇の出ともに８尺等間となり，柱掘形は一辺約 70 ～ 80cm の方形を呈し，深さ約 60cm を測る。南庇の規模は他のものに比べやや小さく，掘形一辺約 40cm の方形で，深さ約 30cm となる。主軸はほぼ正方位を向く。



第 15 図　十町遺構概略図（1/800）

ＳＢ 33（図版 13・91 － 3）

八町の東二行北四門に位置し，西庇付南北棟である。柱通一列分にあたる３基の柱穴を確認した。柱間は身舎が約７尺，庇の出８尺である。桁行規模は確定できない。柱掘形は一辺約 50cm の方形を呈し，深さ 20 ～ 30cm を測る。主軸位はほぼ正方位を向く。

ＳＡ１（第 15 図）

東三行北一門の東端に位置する南北のもので，３間分確認し，柱間は５尺となる。柱掘形は，長軸約 40cm，短軸約 60cm の楕円形を呈し，深さ約 20cm を測る。柱はすべて抜き取られていた。主軸は柱当が不明なため，確定できず北で東に約４～６° 振れる。

ＳＡ２（図版 14）

東三行北一～二門の中央よりやや西に位置する南北のもので，10 間分確認し，柱間は６～７尺となる。柱掘形は不揃いであるが，長軸約 60cm，短軸約 50cm の楕円形を呈し，深さ約 30cm を測る。主軸はほぼ正方位を向く。

ＳＥ 1846（図版 18・93）

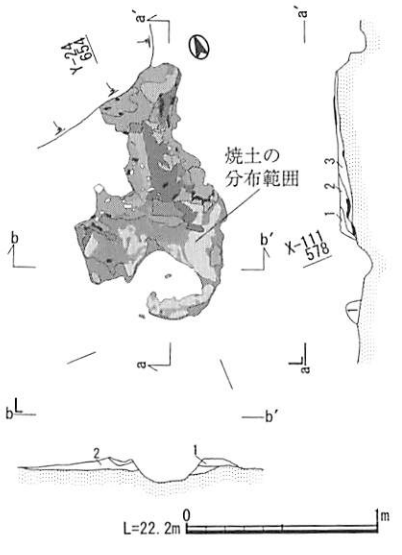
東一行北二門のほぼ中央南端に位置する。掘形は南北約 2.6 m，東西約 2.4 mの楕円形を呈し，深さ 1.95 mを測り，地山の粗砂～砂礫層を約１m掘抜いている。中央部に方形縦板組の井戸枠を確認した。各面に幅 15 ～ 25cm，高さ約 1.25 mの板材を二重に重ね，その内側には横木が 50cm ごとに三段組まれていた。埋土の上層５～ 10cm に層状の堆積がみられることから井戸廃棄後，一度に埋め戻されなかったと考えられる。底の標高は，20.35 mである。

ＳＥ 1842（図版 19・92）

東一行北三門のほぼ中央南端に位置し，ＳＥ 1846 よりもやや規模が大きい。井戸枠や曲物などは確認されなかった。掘形は直径約４mの円形を呈し，断面は擂鉢状で中央部が深く，検出面より約 1.9 mを測る。埋土掘り下げの状況と断面観察の結果，作り替えのあったことが判明した。土中から多量の遺物が出土した。底の標高は，古い方が 20.3 m，新しい方が 20.85 mとなる。

ＳＤ 3345・2429・4350（図版 17・90 － 1・99 － 5・99 － 6・第 15 図）

宅地東西中軸からやや西側に位置する南北溝である。幅 2.6 ～ 3.0 m，深さ約 60cm を測り，断面レンズ状を呈す。部分的に攪乱をうけるが，北一門から三門にかけて確認された。北二門付近で東西溝と切り合い関係が想定されたが，攪乱により不明。さらにこれは，北五門の位置で一部確認されているＳＤ 4350 につながると考えられる。堆積は２層あり，下層では炭化物を多く含み，土器の小片が目立つ。上層は径３cm 前後の礫をまばらに含む砂泥層である。溝底は，北側の断面観察位置で標高 22.05 m，南側では 21.55 mを測り，そ



1　7.5Y6/6橙色～10YR7/3にぶい黄橙色（炉壁）
2　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥，炭化物を多量に含む
3　10YR3/3暗褐色砂泥

第 16 図　ＳＸ 3400　出土状況図

の間約30 m隔てることから，勾配は約1.6%となり緩やかに南へ傾斜する。

ＳＤ4340（図版17・91 － 2）

宅地の南北中軸付近を東端より西流し，東西中軸の手前約10 m付近で南流する。幅1.2 ～ 1.6 m，深さ約60cmを測る。東端部は，馬代小路西側溝と合流する。

ＳＤ4334（第15図）

北四門の東西中軸付近で確認された南北溝である。全長2.8 m，幅1.2 m，深さ約40cmを測り，断面は浅いレンズ状を呈す。東肩はＳＢ33の柱穴に切られる。

ＳＤ665（第15図）

北築地想定位置の南側で確認された東西溝である。幅1.0 ～ 3.0 mと部分的に広いところもあり，深さも約0.3 m前後と一定でない。このことから北築地内溝と考えられる。

ＳＤ666（第15図）

宅地の東築地想定位置の西側，東一行北二～三門間で確認された南北溝である。幅2.2 ～ 3.1 m，深さ20 ～ 30cmを測る。東肩部が緩やかに高くなり，この間は築地基底部の可能性も考えられる。

ＳＸ3400（図版91 － 1第16図）

炉跡と考えられる焼土面をＳＤ666の検出面上で確認した。このことから，ＳＤ666埋没後の遺構と考えられる。南北64cm，東西42cmを測り，楕円形を呈す。北側は攪乱により壊される。南半は，橙色（7.5ＹＲ6/6）～にぶい黄褐色（10ＹＲ7/3）の焼土が中心に分布し中央部から北側では炭が混入する。付近のＳＥ1842からは，銅製の帯金具が出土し，周辺の溝からも轜に転用された高杯脚部などが出土した。

ＳＤ1646（第15図）

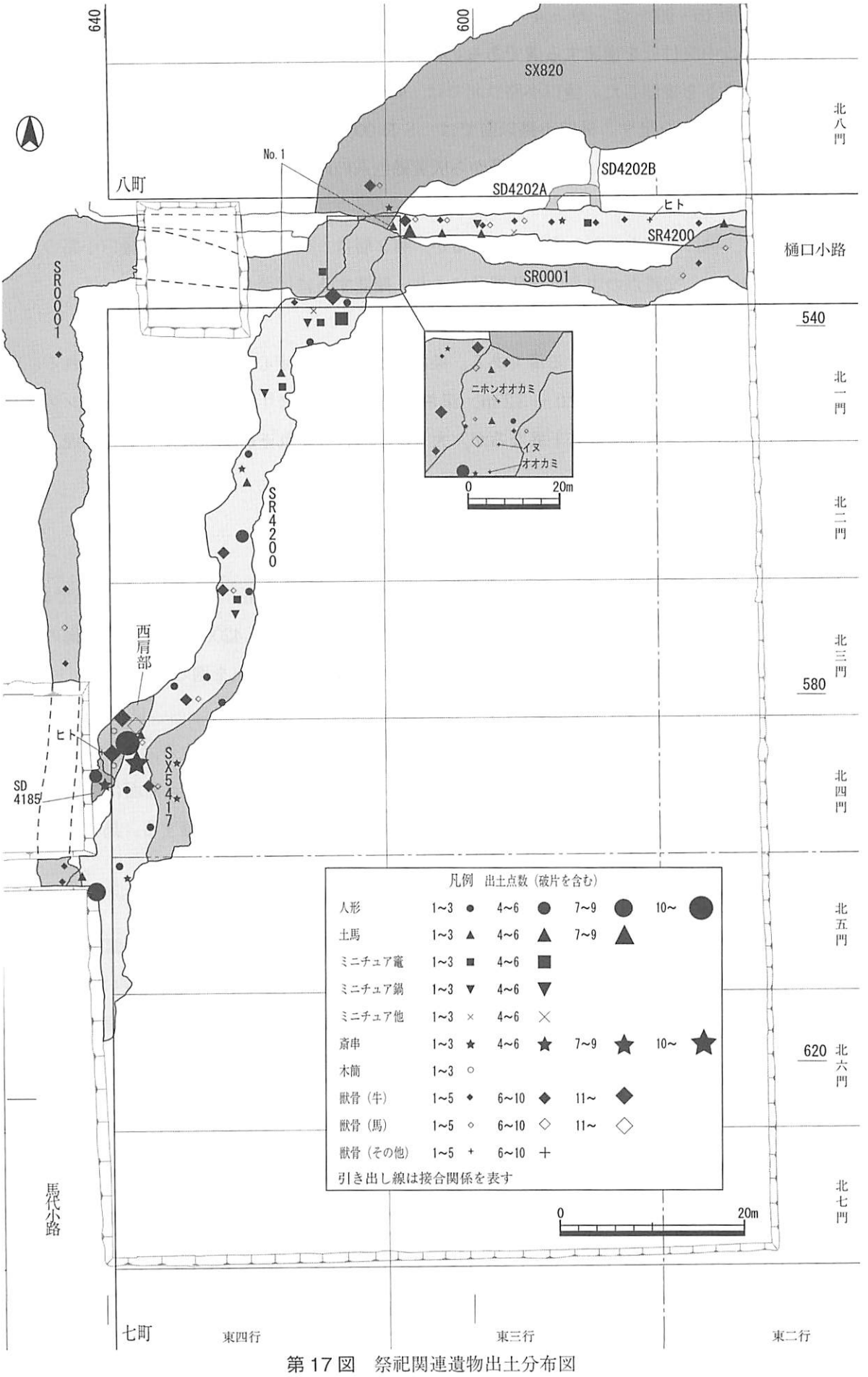
東一行北一門の北東隅より南西へ斜行し，宅地の東築地内溝の西肩に沿うように南流する。北三門の北端までの約30 m分を確認した。幅90cm，深さ40cmを測る。北端は，ＳＲ0001と合流し，その付近から同時期の遺物が出土した。

Ｅ　条坊と川

馬代小路と樋口小路及びその交差点を確認し，樋口小路を西流し交差点で南に折れ，馬代小路を南流するＳＲ0001とこれに切られるＳＲ4200を確認した。

馬代小路ＳＦ649（図版16・85）

ＳＤ655とＳＤ656に画された平坦面である。これらの心々間距離は5.6（18.6尺）～ 6.8 m（22.6尺），有効幅は3 m（10尺）～ 4.5 m（15尺）を測る。これらは，『延喜式』記載の溝心々間の距離26尺，路面幅23尺よりも狭く異なる。なお，樋口小路との交差点以南は路のほぼ中心部を流れるＳＲ0001の存在から路面の機能を果さない。路面の標高は，北端で約23.3 m，交差点付近22.8 m南端（Ⅶ区）21.9 mを測る。北端～南端間は，113.7 mを隔て，勾配は約1.2%である。また，樋口小路との交差点やや北側で，幅1.55 mの轍を約2.5 mにわたって確認した。轍の溝は，２条一対となり，幅約９cm，深さ約５cmを測る。



第17図　祭祀関連遺物出土分布図

ＳＤ 655（図版 16・99 － 2 ・99 － 4）

調査区のほぼ中央付近を南流する溝である。条坊復原の側溝想定心より約 1.3 m西にずれる。南北約 110 mあまりを確認した。樋口小路以北では，幅 5.6 ～ 6.8 m，深さ 80 ～ 90cm を測り，断面は逆台形～レンズ状を呈す。樋口小路以南では，ＳＲ 0001 によって全容は不明。溝内の埋土は，北で大きく３層，南側で２層に分かれ下層から灰黄褐色系の砂泥，灰黄褐色系の泥砂，にぶい黄褐色系の泥砂が堆積する。

最下層では，樋口小路を横断し南側へ流れるが，第２層は，交差点部で東に折れ樋口小路の北側溝と合流している。交差点の中心は現代攪乱により，確認するには至らなかった。

ＳＤ 656（図版 16・99 － 1 ・99 － 3）

調査区のほぼ中央付近を南流する溝である。条坊復原の側溝想定心より約 30cm 西にずれる。南北 102 mあまりを確認した。幅 2.0 ～ 3.2 m，深さ 30 ～ 50cm を測り，断面は逆台形～レンズ状を呈す。埋土は，北端と南端では若干異なるが，大きく２層に分かれ下層から黒褐色系の砂泥，灰黄褐色系の泥砂が堆積する。

樋口小路の北側溝との合流部も現代攪乱により，破壊されていた。

ＳＦ 650 樋口小路（図版 16）

ＳＤ 657 とＳＤ 658 に画された平坦面である。心々間距離は約 7.1 m，有効幅は約 6.2 mである。『延喜式』記載の数値よりもわずかに狭い。交差点東側は，ＳＲ 0001・4200 の存在から路面の機能を果さない。路面の標高は，西端約 23.12 m，七町東四行中央約 22.69 mを測る。

ＳＤ 657（図版 16）

調査区のほぼ中央付近の東西溝である。条坊復元の側溝想定心とほぼ合致する。部分的に削平されるが東西 110 mあまりを確認した。幅 60 ～ 100cm，深さ 5 ～ 15cm を削り，断面は浅いレンズ状を呈す。溝内の埋土は，東端と西端では若干異なるが，黄灰色の泥砂が堆積する。馬代小路の側溝との合流部は現代攪乱を受ける。

ＳＤ 658（図版 16・90 － 1）

調査区のほぼ中央付近の東西溝である。北肩は一部調査区外へ続き，調査区の東側では，ＳＲ 0001 の下層部で溝の痕跡を残す。条坊復元の側溝想定心より南に約１mにずれ，東西 80 mあまりを確認した。幅 80 ～ 160cm，深さ 40 ～ 50cm を測り，断面は逆台形を呈す。溝内の埋土は，東西両端で若干異なるが，基本層位は下層から黒褐色系の砂泥，黒褐色系の泥土，黒褐色系の砂泥，黒褐色～褐灰色系の泥砂となる。

ＳＲ 4200（図版 16・72 － 2 ・98・99 － 7）

樋口小路北側溝想定位置を西流し，馬代小路と樋口小路の交差点より東 15 m付近で南に折れ，蛇行しながら，七町の宅地内の西側を南流するもので，約 120 m分を確認した。南端では，西へ蛇行するものとさらに 15 mほど南流し西に折れる二つに分流する。幅３～４ m，深さ１～ 1.8 mを測る。七町東四行北四門付近東肩部で南北 14 m，東西 2.7 m，深さ 30cm にわたりテラス状の部分があり，これをＳＸ 5417 とした。ＳＲ 4200 の最上層と同時に埋まったと考えられる。

川の埋土は，およそ35層を数えるが地点毎に異なり煩雑になるため３層に大別できる。まず，第１層は，比較的流れが緩やかな段階で厚さ20～40cmで2.5Y 3/2黒褐色砂泥，シルトを主体とする。この層の下部で多くの木製品，獣骨などが確認される。第２層は，径３～５cmの礫や粗砂を主体とした流水層で，部分的に粗砂～細砂を間層に含むことから，数時期緩やかな流れがあったことを物語る。第３層の最下層では，地点により流水堆積層に削られ，部分的に確認される。10YR 3/2黒褐色シルト～細砂の厚さ約30cm前後の互層を主体とし，所々まとまって木製品が出土する。川底を形成する泥土は，縄文時代晩期から弥生時代の遺物を含む旧河川によって堆積したものである。

ここからは，数ヶ所で祭祀にかかわるとみられる獣骨，土器，木製品がまとまって出土した。とくに七町の東四行北四門付近で南西に大きく蛇行する地点からは，多くの獣骨とともに，多量の木製品が一括で出土した。これには，多数のケズリ屑をともなった。

このことから，数時期にわたる祭祀がおこなわれたことが想定される。

ＳＤ 4202 Ａ・Ｂ（図版16）

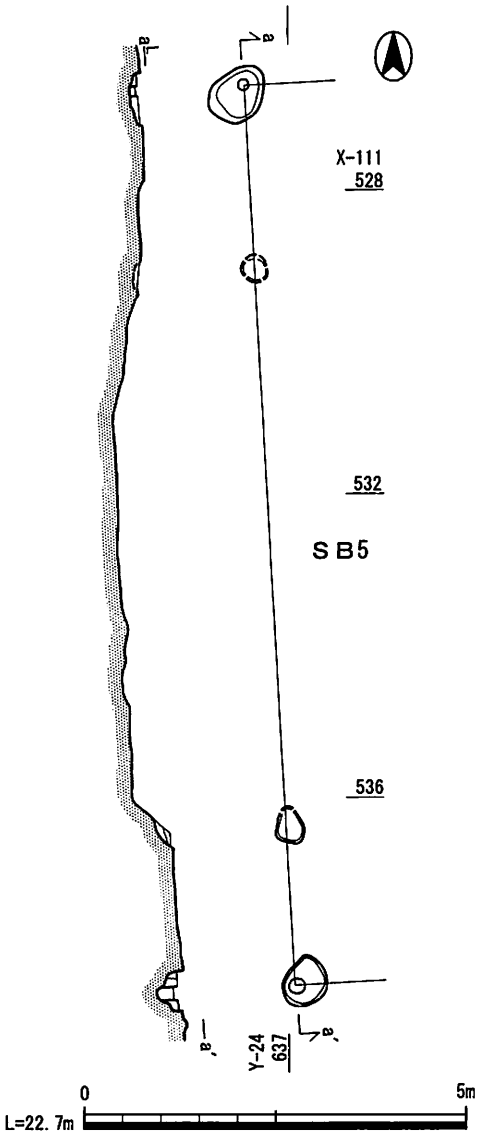
東三行北八門の中央部に位置し，ＳＸ820とＳＲ4200を繋ぐ素掘の溝である。ＳＤ 4202Bは，南北溝で幅約１m，深さ35cmを測る。上層は，ＳＤ 4202Aで，幅は１m，深さ25cmを測る。これは，ＳＡ６の柱穴を切っている。底面標高の比較からＳＸ820・ＳＲ4200よりも10～20cmほど高く，ＳＤ 4202A・Bともに底面はほぼ平坦で，比高差は数cmほどである。いずれの段階も砂などの堆積が間層として認められないことから，水量の調整などの仮設的な遺構の可能性が高い。

ＳＤ 4185（図版16）

七町の東四行北四門の西端，ＳＲ4200が西へ蛇行する地点の南西隅において確認した。ＳＲ4200との明確な切合い関係はないが，遺物は接合関係にあるものが認められるなど，分流する溝と考えられる。幅約2.3m深さ20～30cmの溝で，部分的に確認しただけである。多量の木製品，獣骨が出土している。

ＳＲ 0001（図版16・72－２・91－２・94・95・96・97）

調査区西端の樋口小路を西流し，樋口小路と馬代小路の交差点部で南に折れ，ほぼ南流する。幅２～６m，深さ0.6～1.2mを測り，埋土は24層を数えるが，３層に大別できる。これらは，径２cm前後の礫や粗砂を多量



第18図　ＳＢ５　遺構平面図・断面図

に含む層が認められ，流水が比較的多かったことをうかがわせる。また，条坊交差点より東15ｍ付近で，流水が肩にぶつかり，平安時代の遺構面を一部礫が覆い被さっていた。

ＳＲ0001　北肩（図版94－２）

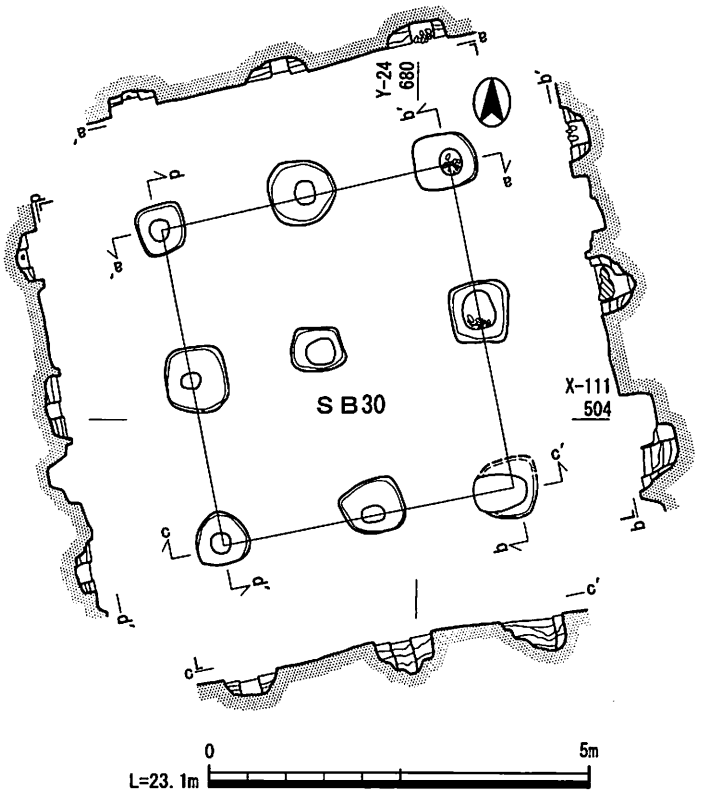
樋口小路北側溝想定位置の北にあり，ＳＲ0001の北肩が北方に一部ひろがりテラス状を呈する。東西約12ｍ，南北約2.5ｍ，深さ約30cmを測る。平坦な底から，瓦や土師器，須恵器などが一括出土した。

ＳＢ５（第18図）

条坊交差点より東側８ｍの付近で，四基の南北に並ぶ柱穴を確認した。柱掘形は直径35～50cm，深さ20～35cmの円形を呈す。このうち２基は，ＳＲ0001の上層の埋土を除去した段階で確認された。これらは，ＳＲ0001に直交して配置され，周囲に関連遺構もみられないことから，これに架かる橋脚の一部と考えられる。柱間は北側より７尺，24尺，７尺となり，中央の柱間がかなり広い。

第４節　平安時代以前の遺構

古墳時代の総柱建物１棟，縄文時代中期末から奈良時代にかけての大規模な旧河川，これとほぼ同一方向の溝４条を確認した。また，縄文時代中期末の土壙，柱穴状遺構を確認した。



第19図　ＳＢ30遺構平面図・断面図

旧河川（第20図）

北東から南西方向にかけて流れる，大規模なもので，数ヶ所断ち割りをし，断面確認をおこなった。その範囲は，幅20～40ｍ，深さ1.5～３ｍで，複雑な堆積のあり方が確認された。

ＳＤ1669・3296・4315（第20図）

Ⅱ・Ⅵ区で確認された北東から南西方向の溝で，延長約90ｍを確認した。幅約40cm，深さ20cm，断面は逆台形状を呈す。溝の方位は，旧河川と並行する。

ＳＤ839（第20図）

Ⅰ区の南東部で確認された北東から南西方向の溝で，延長約10ｍを確認した。幅約30cm，深さ約10cm，断面は逆台形状を呈す。溝の方位は，

旧河川と並行する。

SD 797（第 20 図）

SD 839 の南側で確認された北東から南西方向の溝で，延長約 15 mを確認した。幅約 30cm，深さ約 10cm，断面は逆台形状を呈す。溝の方位は，旧河川と並行する。

SB 30（第 19 図）

調査区の北西隅で確認された２間×２間の総柱建物である。建物規模は，南北 4.2 m，東西 4 mである。柱掘形は一辺約 80cm の隅丸方形を呈し，深さ約 50cm を測る。主軸方位は，北で西に 13° 振れる。

SX 3401（図版 22・100）

調査区の南西隅に位置し，掘形は南北約８m，東西約６mのを深さ 10cm を測る。検出面の標高は約 22.50 mである。そこからは，縄文時代中期末頃と想定される遺物が一括出土した。

SX 3402（図版 22）

SX 3401 南西隅の下層に位置し，土壙状を呈す。掘形は，南北約５m，東西 0.8 ～ 1.2 m，深さ 10 ～ 30cm を測る。断面はレンズ状を呈す。

SX 3406（図版 22）

SX 3401 南西隅の下層部に位置し，土壙状を呈す。掘形は南北約４m，東西１～２mの不定形で，深さ約 20cm を測る。底は平坦である。

SK 4351（図版 22・101）

SX 3401 の約 16 m南に位置し，掘形は南北約 1.6 m，東西約 1.2 mの楕円形をで，深さ約 50cm を測る。断面は袋状をとなり，底は平坦である。検出面の標高は約 22.30 mである。

P 5631（第 20 図）

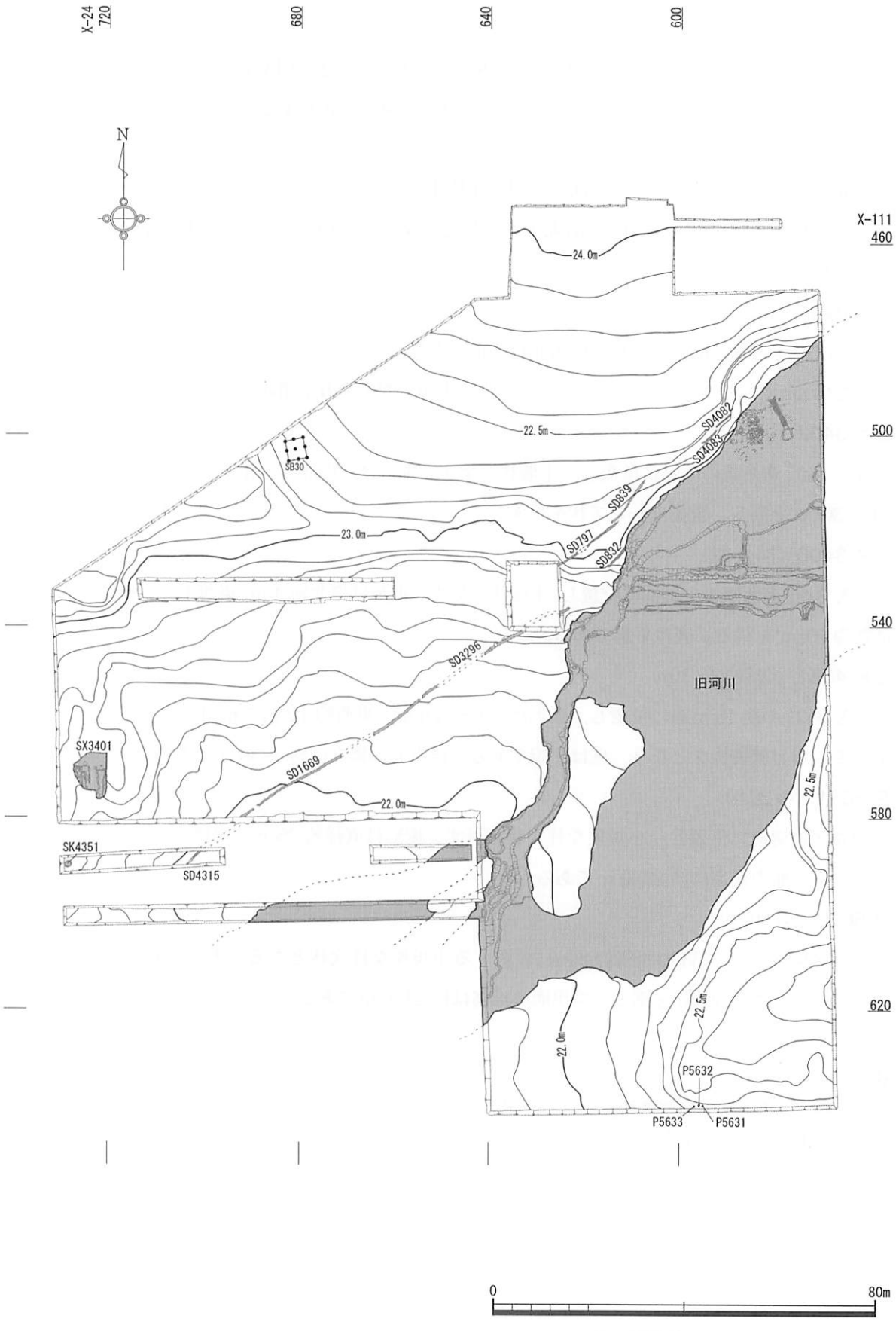
調査区の南端に位置し，小規模な柱穴状を呈す。掘形は直径約 25cm の円形で，深さ約 30cm を測る。検出面の標高は約 22.50 mである。

P 5633（第 20 図）

調査区南端，P 5633 の西側約２mに位置する小規模な柱穴状となる。掘形は直径約 20cm の円形を呈し，深さ約 30cm を測る。検出面の標高は約 22.50 mである。

註

1）杉本宏『平等院の庭園遺構』（『日本歴史』第 590 号掲載，東京，平成９年）。



第 20 図　平安時代以前遺構概略図 (1/1200)

第Ⅳ章　遺物

第１節　遺物の概要

今回の調査において出土した遺物は，整理箱で860箱程度と，発掘面積が広大に及んだにも拘らず，出土量は余り多くを数えない。その内訳は土器・瓦類700箱，木製品72箱，土製品３箱，金属製品３箱，　鋳造関連遺物２箱，獣骨80箱に留まり，土器・瓦類が過半数を占めるものの，木製品の比率も高いのが特徴的である。帰属時期は，縄文時代中期末から江戸時代末と極めて長期にわたる。出土遺物を時期別に見ると平安時代後期以降，平安時代前期から中期，平安時代以前の３時期に大別でき，平安時代前期のものが圧倒的多数を占める。ついで平安時代以前の遺物のなかでは，縄文時代のものが多く，古墳時代から飛鳥時代のものや，中世や江戸時代にかけての遺物は，僅かにすぎない。縄文時代の土壙状遺構からは中期末の土器，石器，剥片などの出土があり，旧流路からは縄文晩期の土器，弥生時代前期の土器から７世紀代の土器・須恵器までが含まれていた。また平安時代の遺構にも弥生時代前期から後期の土器や古墳時代の杯・高坏・壺・甕，須恵器が混入する。平安時代のものには，井戸，宅地内溝，条坊側溝，川，土壙などから大量の土器類とともに，多量の祭祀関連遺物，木製品，漆器，獣骨，炭化物等がまとまって出土した。これらは一括性の高いものが含まれ，時期を限定しうる極めて重要な資料といえる。また平安時代後期から近世にかけての遺物は，木棺墓出土のものを含めて，土師器，瓦器，国産陶器，中国製陶磁器，肥前磁器，京・信楽陶器，銭貨などが含まれる。

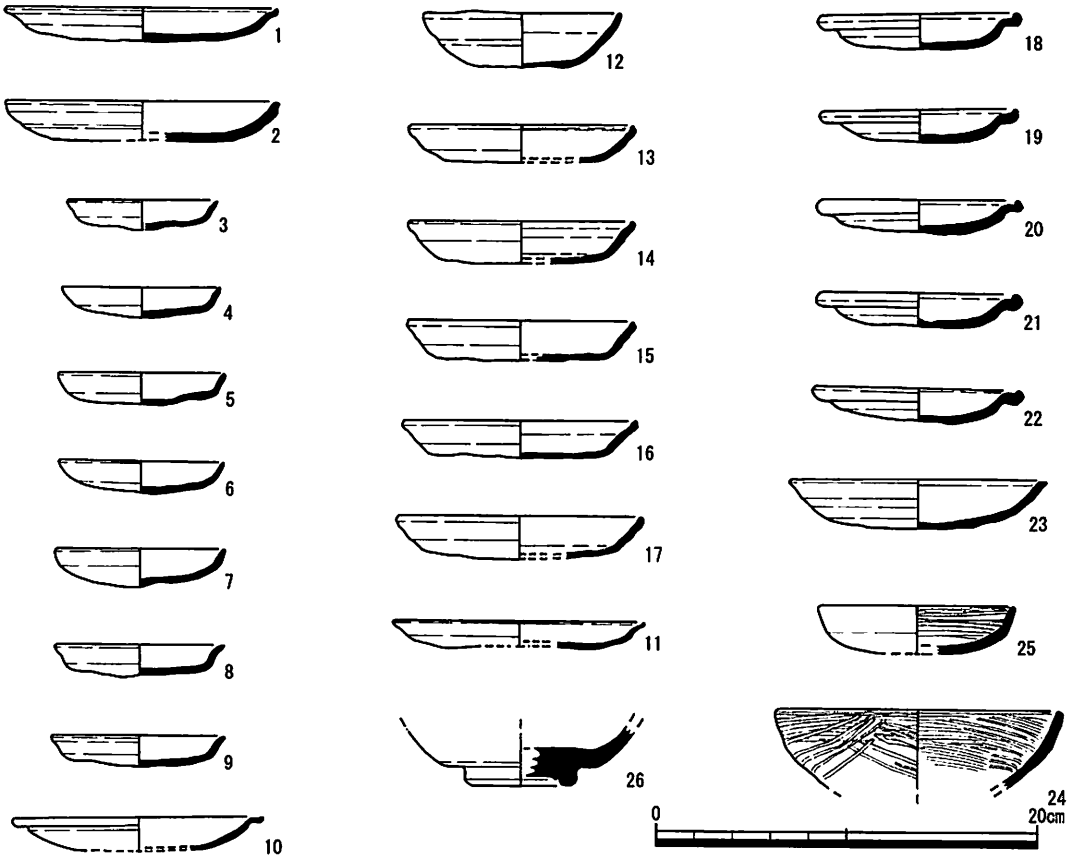
第２節　平安時代以降の遺物

調査区全域から遺物が散見するのみで，破片が多くまとまった資料は得られなかった。しかし例外的に七町内の南北路北端で確認した木棺墓から土師器の一括資料がある。なお平安時代前期に属する遺構のなかで，当該期に埋め戻されず放置され，後属時期の遺物を出土する例があり，その遺構の廃絶時期に関わることから，次節の各遺構ごとのなかで記述する。

１　土師器（図版118，第21図）

ＳＤ655上層から皿ＡⅡが２個体出土した。（１）は，屈曲する口縁部からなる。端部は上方へつまみ上げる。ｅ手法で，胎土はＩｄｉ少（胎土分類は後出による。以下同様）10世紀前半。（２）の口縁端部はやや外反し，外側へわずかに肥厚する。二段ナデ手法で，胎土はＩｂｉ少，12世紀前半。

ＳＸ4163から皿Ｃ（３～９）が７個体出土した。これらは，口縁部形態から細分でき，直線的なもの（３・４），やや内湾気味のもの（６），わずかに外反するもの（５・７・９），強く外反するもの（８）がある。口縁端部はいずれもＣ形態（形態分類は後出による。以下同様）。胎土は（６・７・９）がⅡｄで，ほかはＩｄ。そのうち（４）はｉ少。（６）は底部の内外面，（５・７・８）は



第21図　平安時代以降の出土土器実測図（1/4）

口縁の一部，（9）は口縁から底部の一部にかけて各々煤が付着し，灯明皿に使用される。これらは9世紀のⅢCに類似する。ただ器形にばらつきがあり器壁も薄く，しかも胎土に砂粒を多く含み粗いなど異なる点もみられる。そのため在地的な様相がうかがわれ，後出の可能性もあるが，帰属時期は9世紀前半に遡る可能性が高い。

P 674（SB 8）からⅢA Ⅲが6個体，小椀が1個体出土した。ⅢA Ⅲのうち（13～17）は平底で口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。（14～16）は上半でヨコナデにより外反する。口縁端部は（14）がB形態で，他はE形態である。（13）だけは上方に突出する。口縁部外面上半をヨコナデし，それ以外の外面はユビオサエを施す。胎土は，（15）がⅡdである以外はⅠdで，その中でも（15・17）は断面が淡い橙色を呈す。白色土器小椀（12）はやや深い器形で，口縁部は内湾気味に立ち上がる。口縁端部はC形態。胎土は砂質で，含有物の粒がやや大きい。13世紀末～14世紀前半。

SX 4001からⅢA Ⅲ5個体，ⅢA Ⅱ1個体が出土した。Ⅲ（18・19・20・21・22）は，口縁部は外方に屈曲して「て」の字状を呈し，端部は上方につまみ上げる。e手法で，胎土はⅡdである。その中で（22）は断面が橙色を呈す。Ⅱ（23）はゆるやかに外上方に開く口縁部からなる。端部はわずかに外反する。2段ナデ手法で，胎土はⅡd。11世紀末。

SX 4004からⅢA 2個体が出土した。（10）は，口縁部上半で屈曲して「て」の字状を呈する。口縁端部は外上方に突出する。器壁はきわめて薄い。e手法で，胎土はⅡdi普である。（11）の口縁部はやや外反して，端部は上方へ突出する。器壁はきわめて薄い。e手法で，底部内面には板ナデ痕を残す。胎土は，やや灰褐色気味なⅡdである。10世紀後半。

2　瓦器（第21図）

椀（24）は，内湾しながら立ち上がる口縁部からなる。口縁端部内側には1条の凹線が巡る。内外面とも密にヘラ磨きする。胎土は表面が灰白色で，断面漆黒化している。楠葉型。九町東一行北八門北西より出土。11世紀末。小皿（25）の内面には，横方向にやや密にミガキを施し，口縁部外面にも一部ミガキがみられる。楠葉産。十町東二行北二門中央西南寄りより出土。13世紀後半。

3　中国陶磁器

龍泉窯系青磁椀（26）の内面には，劃花文を施す。底部外端に，削り出しの輪高台がつく。底部外面のみ未施釉。七町東二行北六門の路東側溝東付近より出土。

4　土製品（図版122，第22図）

泥面子（1）は「戌」を表面に表し，その周りを丸く縁取る。径3.5cm，厚さ0.8cmを測る。十町東一行北門東端より出土。犬（2）は垂れ耳である。全長4.5cmを測る。七町東四行北一門中央より出土。

第22図　泥メンコ実測図（1/2）

5　銭貨（図版 62・125）

北宋銭７種７点，江戸時代の銭貨２種４点出土した。

淳化元寶（21）は銭文が鮮明で，鋳出しが深い。草書体である。「淳」の一部を欠く。外径 2.35cm，0.55cm 四方の孔が開く。十町東二行北一門北東部より出土。祥符元寶（22）は「符」を欠く。銭文は不鮮明ながら，草書体と確認できる。外径 2.35cm，0.55cm 四方の孔が開く。包含層出土。皇宋通寶（23）は銭文が不鮮明ながら，真書体と確認できる。外径 2.35cm，0.7cm 四方の孔が開く。包含層出土。熙寧元寶（24）は銭文がやや不鮮明ながら，真書体と確認できる。外径 2.3cm，0.8cm 四方の孔が開く。包含層出土。元符通寶（25）は銭文が極めて不鮮明。外径 2.3cm，0.65cm 四方の孔が開く。十町東一行北一門北東より出土。元祐通寶（26）は銭文がやや不鮮明ながら行書体と確認できる。外径 2.35cm，0.7cm 四方の孔が開く。九町東二行北八門南東より出土。紹聖元寶（27）は銭文が不鮮明ながら，篆書体と確認できる。外径 2.3cm，0.65cm 四方の孔が開く。七町東四行北五門中央より出土。寛永通寶（28）は寶の右下部分に，裏から径 1.5mm の穴が開けられる。背面には文の字が鋳出される。銭文は鮮明であるが，背文はやや不鮮明。外径 2.45cm，0.55cm 四方の孔が開く。十町東二行北一門中央より出土。２期の新寛永に属する[1)]。これは，寛文八年（1669）から天和三年（1683）にかけて鋳銭されたものである。寛永通寶（29）は外径 2.45cm，0.65cm 四方の孔が開き，銭文はやや不鮮明。十町東一行北一門東端より出土。３期の新寛永に属する[2)]。寛永通寶（30）はほとんどの部分を欠くため，鋳銭時期は不明。包含層出土。文久永寶（31）は銭文が鮮明だが，真書体と確認できる。他の銭貨に比べ，外縁が太い。外径 2.65cm，0.55cm 四方の孔が開く。九町東二行北八門南西より出土。

註

1）永井久美男『日本出土銭総覧 1996 年版』（神戸，　2）註１，前掲書。
平成８年）49 頁。

第３節　平安時代前期から後期の遺物

1　瓦類

出土した瓦類には，軒丸瓦 15 点，軒平瓦 18 点と多数の丸・平瓦とごく僅かに鴟尾と塼がある。これらは大部分破片であり，接合可能な資料も少ないため，全容が判明したものはない。また面戸瓦などの道具瓦は認められなかった。出土傾向からみると，１遺構からまとまって出土する場合はなく，調査区全域に散在した状態である。内容も再利用瓦を含め多様なもので構成され，しかも同型式のものも少なく，量的にまとまらないことから，平安宮の瓦葺建物出土の瓦群とは，出土傾向が異なっていると考えられる。

以下，軒丸瓦，軒平瓦，丸・平瓦，その他の順に解説する。なお軒瓦の小片の詳細については，巻末の観察表に記す。軒瓦について，同笵資料が特定できるものは，それらを参考に記述する。ただし製作技法や胎土の特徴，焼成については本資料により記述する。

なお瓦に付した番号は，各瓦の種別ごとの通し番号であり，実測図版・写真図版などすべてに共通する。

A　軒丸瓦（図版 23・102）

平城宮式４型式４種４点（6075 A・6282・6308・7192），長岡京式１型式２種３点（7133），平安京式３型式３種３点（26，東寺系 15，三巴文）が出土した。この他同笵関係が特定できないものや，瓦当文様が欠落して不明なものが５点あり，このうち緑釉瓦３点が含まれる。文様を特定できないものは計測表に委ねる。

6075 A型式（１）　単弁 10 弁蓮華文。中房径はやや大きく，連子は１＋６である。蓮弁は花弁形を呈し，やや平坦である。間弁は独立し，ハート形を呈す。内区と外区の間には二重の圏線が巡る。外区外縁は無文で，外区内縁には珠文が密に配される。外縁は内面が直線的な傾斜縁Ⅰである。瓦当裏面はタテナデし，丸瓦接合部凹面には布目痕をとどめる。胎土は，やや精良で長石，石英，チャートを微量に，黒色粒をごくわずかに含む。灰白色を呈し，焼成は幾分軟質である。七町東二行北一門北端ＳＫ 4008 出土。

6282 型式（２）　複弁８弁蓮華文。中房は小さく，連子は一重である。瓦当径は小さく，蓮弁は盛り上がりがあまりなく，凸線で表現される。外区外縁に線鋸歯文，外区内縁に珠文を密に巡らす。外縁は上面に丸味がある傾斜縁で，内面はやや内反りになる。調整は保存状態が悪く，摩滅し，不明。胎土は長石，石英がやや少量，金雲母は目立ち，少し粗い。表面は黒褐色で，断面は灰白色を呈し，軟質である。七町東二行北七門ＳＤ 5411 出土。

6308 型式（３）　複弁８弁蓮華文。中房は小さく連子は一重に巡らし，やや突出する。内区は内外区を区分する圏線からわずかに内側で一段高くなる。蓮弁の先端には楔状の飾りがつく。外区外縁に鋸歯文，外区内縁に珠文がややまばらに巡る。間弁はＡ系統。外縁は上面の広い傾斜縁で，内面は内反りとなる。瓦当外縁側面はタテケズリしたのちに，指ナデを加える。瓦当裏面には布目

痕をとどめ，丸瓦部との屈曲点付近には強い横方向のユビナデを施し，布目を消す。一本造り。胎土は長石，石英を多く含み，黒色粒は微量である。青灰色を呈し，硬質である。七町東二行北五門ＳＤ5411出土。

7133Ｈ型式（４～６）　単弁12葉蓮華文。中房は１＋４の連子を配す。子葉はなだらかに隆起し，蓮弁は短く，その輪郭は太い凸線で表現される。弁端は丸く弧が連結しない箇所がみられる。外区内縁を画する凸線は，外側に比べ内側が幾分細い。珠文は中房の連子に比べ，やや小さく楕円形を呈する。直立縁をなすが，内面は内傾する。文様の彫り直しによりⅠからⅡへの変遷がみられる。瓦当外周上半はタテケズリし，瓦当裏面と丸瓦接合部はタテナデする。胎土は，長石，石英，チャートが目立ち，少し粗い。黒色粒や雲母もみられる。表面は灰白ないしオリーブ黒色で，断面灰白色を呈し，やや軟質である。（４）は八町東三行北五門ＳＫ907，（５）は八町東三行北五門ＳＸ921，（６）はＨⅠ型式でＳＤ655第２層出土。

7192型式（７）　複弁８弁蓮華文。内区のみをとどめる破片である。蓮弁は平坦で，帯状を呈す。瓦当裏面はユビナデする。胎土は，長石，石英が目立ち，チャートが少量で，少し粗い。表面は黒褐色で，胎土は灰白色を呈し，軟質である。九町東一行北八門の馬代小路西側溝ＳＤ656出土。

26型式（８）　単弁16葉蓮華文。蓮弁はわずかに隆起し，弁端は弧が連結しない。内外区を画する凸線は，太い。外区内縁の珠文は，密に配され間隔が狭い。直立縁。瓦当外周下半はヨコナデを施したのち，周縁端から１cmほどの幅にヨコナデを付け加える。周縁上面には部分的に糸切り痕を残す。瓦当裏面は，不定方向にナデる。胎土は径２mmまでの長石，石英，金雲母をやや多く含み，少し粗い。燻しているため表面は暗灰色で，断面灰白色を呈し，幾分軟質である。西寺系軒瓦で，大阪府芝本瓦窯産の可能性がある。七・八町間の樋口小路西寄りＳＤ833出土。

東寺系15型式[1]（９）　単弁８葉蓮華文。花弁は短く少し隆起し，内区と外区を分ける界線は弁端と一体化し波状を呈する。外区内縁の珠文はややまばらに配し，外区外側の界線は太くなる。直立縁。瓦当外周下半は外縁に沿ってヨコケズリしたのち，ナデを加える。外周には笵枠痕を残す。九町東一行北八門東南包含層出土。

三巴文型式（10）　小型瓦で，頭部が少し隆起し，尾が細い右巻きの巴文を配する。尾の先端は内外区を画する圏線につながる。やや大きな珠文を密に配す。瓦当裏面はタテナデし，接合部裏面はヨコナデする。径２mmまでの長石，石英，金雲母が目立ち，少し粗い。燻しているため表面は黒褐色，断面灰色を呈する。軟質。七町東三行北四門ＳＫ5429付近より出土。

型式不明（11）瓦当面が剥離し，丸瓦接合部を残す。丸瓦凸部および接合部裏面の一部に緑釉がみられる。胎土は，長石を少し含むが，精良である。やや軟質。十町ＳＤ4340出土。

Ｂ　軒平瓦（図版24・103）

平城宮式２型式２種３点（6663ｃｂ，6727），長岡京式１型式１種１点（7757），平安京式３型式３種３点（325，335，339），その他２型式２種３点が出土した。この他同笵関係が特定できないものや，瓦当文様が欠落しているものが８点ある。文様を特定できないものは観察表に委ねる。

6663 C b 型式（1，2） 均整唐草文。中心飾りは花頭形を呈し，左右に蕨手が3回反転する。蕨手の第1単位は下から斜め上方に派生する。内区と外・脇区に2重の圏線を巡らす。外縁はわずかに突出する。曲線顎。凹面はタテナデし，瓦当面より1.5～8cmほどの範囲にヨコナデを加える。瓦当裏面は顎部より9cmほどをヨコナデし，平瓦部凸面には縄叩きを残す。顎部はヨコナデする。胎土は，長石，石英，金雲母が少量で，精良である。灰白ないしはにぶい黄橙色を呈し，幾分硬質である。（1）は表面黒色を呈するが，二次的な火を受ける。七町S R 4200出土。（2）は七町東三行北二・三門境界付近包含層出土。

6727型式（3） 均整唐草文。中心飾りは対向C字形の尾部が連結するなかに，矢印形を配する。左右に蕨手が3回反転する。蕨手の第1単位は下外区界線から斜め上方に派生する。第4単位の蕨手は下方に巻き込む。上・下外区と脇区には珠文を配する。外縁は低い。曲線顎。瓦当面上端はわずかに面取りする。凹面は摩滅のため不明。顎部は下端から3.5cmほどヨコナデし，そのほかはタテケズリする。胎土は，長石，石英が目立ち，金雲母が少量で，少し粗い。表面灰色，断面灰白色を呈し，やや硬質である。破片のため下位分類はできない。八町東三行北八門S X 820出土。

7757型式（4） 均整唐草文。中心飾りは三葉形を呈し，左右に蕨手が3回転半する。蕨手の第1単位は下から斜め上方に派生する。第4単位は上方に巻き込む主葉のみである。外区には低い珠文を配する。外縁は低い。曲線顎。凹面は瓦当面より8cmほどをヨコナデし，瓦当端および側面を面取りする。平瓦部凹面には布目痕を残す。顎部はヨコナデする。胎土は，長石，石英，チャート，金雲母が少量で，やや精良である。表面灰色，断面灰白色を呈し，幾分硬質である。破片のため下位分類はできない。八町東四行南端S X 820出土。

法通寺Ⅰ類型式[2]（5，6） 均整唐草文。中心飾りは対向C字形の尾部が連結し，左右に蕨手が4回転する。蕨手の第1単位は下から斜め上方に派生する。外区には少し大きな珠文を配する。笵の彫り込みが浅く，瓦当は扁平である。曲線顎。凹面は瓦当面より2.5cmの幅でヘラケズリし，それ以外は布目痕を残す。顎部は一部欠損するが，平瓦部凸面にかけて1/2ほどはタテケズリを施し，他の部分は布目痕をとどめる。側面もタテケズリがおこなわれている。胎土は，長石，石英，金雲母を多く含み，やや精良である。表面黄褐色で，断面黒褐色を呈し幾分硬質である。七・八町間樋口小路内S R 4200出土。

325型式（7） 均整唐草文。中心飾りは対向C字形を配する。左右に蕨手を2反転半する。右第1単位の主葉と子葉が連結する。外面の調整は摩滅のため不明である。胎土は，長石，石英を多く含み，金雲母もわずかにみられ，少し粗い。表面は灰黄色，断面は黄灰色を呈し，幾分軟質である。七・十町北二・三門相当部S R 0001出土。

335型式（8） 均整唐草文。中心飾りは対向C字形の中に「小」字形を入れる。左右に二葉の蕨手が3反転する。外区の珠文は大きめで，間隔は比較的疎となる。曲線顎。瓦当面上端は幅狭く横方向にヘラケズリし，凹面は瓦当面から6cmばかりヨコナデする。それ以外は布目痕を残す。顎部はヨコナデし，平瓦部凸面はタテケズリする。当資料は335に極めて類似するが，同笵ではない。胎土は，長石，石英，チャート，金雲母を少量含み，少し粗い。表面灰色，断面淡灰色で硬質。

八町東四行北八門ＳＲ0001出土と九町東一行北八門ＳＤ657出土のものが，接合する。

339型式（９）　均整唐草文。中心飾りは不明。蕨手は２葉を基本として，左右に３反転するが，右側がやや煩雑になる。子葉や間枝の先端が二股となる。笵の彫り込みが浅く，扁平である。曲線顎。凹面はヨコナデのようなヘラケズリをし，顎部はタテケズリをおこなう。胎土は，長石，石英などの粒子をわずかに含み，精良である。表面灰色，断面灰白色を呈し，幾分硬質である。八町東三行北八門ＳＸ820出土。

型式不明（10）　均整唐草文。中心飾りは不明。蕨手は１葉ないし２葉を基本として，最終単位の蕨手は上方に巻き込む。外面の調整は摩滅のため不明。胎土は，長石，石英を多く含み，チャートや金雲母もわずかにみられ，少し粗い。表面は灰色，断面は灰白色を呈し，軟質である。九町東一行北八門北東部ＳＫ552出土。

C　丸・平瓦

大部分は破片のため，遺存状態が悪く，全容をしることができる資料はない。そうしたなかでも一程度計測できるものは，丸瓦５個体，平瓦22個体と平瓦が4.4倍と多い。さらに実数に近い個体数を得るために，端面あるいは側面のいずれかを残しているものを計測した。その結果総点数289点のうち，丸瓦77点，約19個体分，平瓦212点，53個体分となり，平瓦が約2.8倍を占める。内訳は，ＳＲ4200が52点，ＳＲ0001が42点と多く，ＳＸ820の24点がこれに次ぐ。条坊関係では十町北端の樋口小路南築地内溝の20点が目立ち，そのほかでは少ない。また，十町を南北に二分する東西溝ＳＤ4340からは破片数は少ないが，端部をとどめる大きな破片があり，注目される。それ以外ははほとんど数点で小破片に過ぎない。以下主要なものについて，その特徴を記す。

1　丸瓦（第23図）

破片から判断すると，玉縁のある丸瓦と考えられ，行基丸瓦は認められない。軒瓦には藤原宮式，平城宮式，長岡宮式の各都城で制作されたものが含まれることから，これらにともなって丸瓦もあると考えられる。しかし明確に抽出することができなかった。確認した丸瓦は，縄叩き目で格子叩きなどのその他の成形によるものは認められなかった。

これらは縄叩き，ないしは縄叩きののちヘラナデにより消しているものを主体とする。縄叩きはすべて縦位で，成形後ヘラナデにより叩き目がほとんど消される。凹面は基本的に糸切り未調整である。筒部の成形は凹面に糸切り痕がわずかに確認できることから，粘土板巻き付けによる成形技法と考えられる。破片資料という制約された条件のため，分類が十分におこなえず，ここでは長岡京左京東院でおこなった５分類方法[3]を援用することとする。それに基づいて調整手法，胎土，焼成からＡ群からＥ群の５群に分類した。以下その概略を記す。

①類　凹面側縁面取りを全縁，凹面端面取りを両端，玉縁部凸面側縁を面取りするもの。

②類　玉縁部凸面側縁を面取りするが，そのほかの部位の面取りは徹底しないもの。

③類　凹面側縁面取りを全縁おこなうもの。

④類　分割破面を残し，凹面の広端縁を面取りするもの。

⑤類　分割破面を残すもの。

今回出土のものは，①類と②類に属す。

（1）　筒部広端縁を残す。瓦面の残存状態が極めて悪く，成形並びに調整が不明な点が多いが，凸面は全体を横方向にナデで調整する。凹面の側・広端縁は面取りし，端面は丁寧にヘラケズリする。①類でA群の可能性がある。復原広端径 15.6cm，厚さ 2.1cm。十町中央東二行東端ＳＤ 4340 出土。

C群（2・3）　玉縁と筒部の一部を残す。凸面を非常に丁寧に横方向にナデる。両者は②類に属し，胎土も近似するが，さらに凹面成形から下位区分できる。（2）は筒部凹面側縁をわずかに面取りする。凸面の表面には細かな砂粒がみられる。復原径 15.8cm，狭端径 9.6cm，厚さ 2.1cm。十町中央東一行西端ＳＤ 4340 出土。（3）は筒部凹面側縁の面取りをおこなわない。復原径 15.8cm，狭端径 8.8cm，厚さ 2.4cm。七町東四行北三門ＳＤ 4200 砂礫層上層。

2　平瓦Ｐ（図版 25 ～ 29）

凹面に模骨痕のあるものとないものがあり，前者は桶巻作り，後者は一枚作りと考えられる。しかし区別のつきにくいものもあり，それについては個別に記述する。凸面の叩き目は，縦縄叩き成形のものが圧倒的多数を占める。わずかに平行条叩きがあり，格子目叩きはみられない。それらは法量・調整手法・胎土・焼成・色調などから分類を試みた。なおそれに際し『平城宮発掘調査報告ＸⅢ』瓦類[4] に準じた。それに該当しないものについては新たに型式を設定し，これらの群に含まれないものは観察表に委ねた。

模骨痕があり，縦位縄叩き目のあるものは１類２種２点に区分できる。

第１類　凸面が不調整で，凹面の調整により下位区分できる。該当するものはない。

第２類　凸面をヘラケズリないしナデし，狭端側をナデ調整する。凹面の調整により下位区分できる。

c（1）　凹面は，模骨によると考えられる凹凸の凸部を強いタテナデにより布目を消している。狭端側は少し粗い幅広のヨコナデをし，側面を幅広く面取りする。凸面の狭端側約 1/3 を板状工具によりヨコナデする。凸面には離れ砂は認められない。胎土は粉性で密なもので，焼成はやや良である。表面はいぶしにより黒色化していることから２次的な火を受けたものと考えられる。布目は７本前後／ cm。模骨幅 2.5 ～ 4.5cm，厚さ 2.0cm。十町中央東二行東端ＳＤ 4340 出土のものと馬代小路七・十町北五門相当部ＳＲ 0001 西肩出土のものが接合する。

d（2）　側縁と端面に丁寧に面取り，とくに狭端面は幅広くおこなう。側面は凹面に対しやや鋭角になる。凸面には離れ砂が目立つ。胎土には長石，石英，黒色粒などを非常に多く含み粗く，特異なものである。布目は６本前後／ cm。模骨幅 3.5cm，厚さ 2.3cm。十町東一行北二門馬代小路西築地内溝ＳＤ 666 出土。

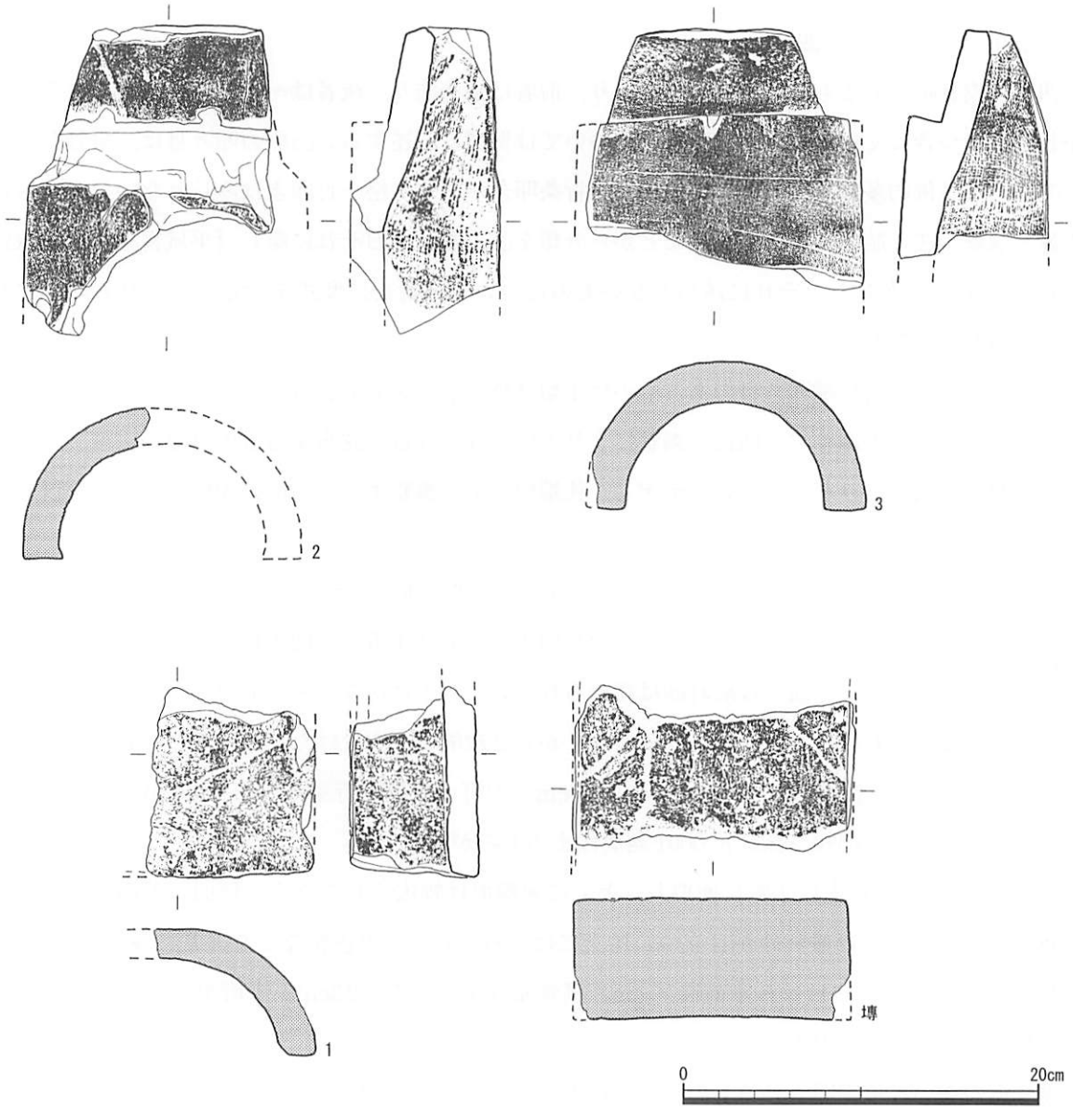
模骨痕がない縦位縄叩き目のもので，１類１種 13 点に区分できる。

第１類は凸面が不調整で，凹面の調整によりａ・ｄ両種がある。ａは凹面が不調整で，端面，側

面の調整により３種に下位区分できる。

ａ１（３～５）　端面，側面に面取りを施す。側面のあり方は，（４）が凹面に対しほぼ直角に，（５）が鋭角になるが境をなでるため丸みを帯びる。（３）は凹面に対し鋭角となる。（４）のみ離れ砂がみられない。いずれも灰白ないし灰色を呈する。（３）七町東四行北五門ＳＤ 4200 東肩出土。（４）十町中央東二行東端ＳＤ 4340 出土。（５）馬代小路内七・十町北五門相当部ＳＲ 0001 砂礫層出土。

ａ２（６～９）　端面に面取り状の軽いナデないしはヘラケズリを施す。側面のあり方は，（６）は鋭角になるが境をなでるため丸みを帯びる。（７・８）は凹面に対し鋭角となる。（９）は不明で，これだけに離れ砂がみられない。胎土は（７・９）がやや粗い以外は，精良である。両方とも樋口小路七・八町東三行相当部ＳＲ 4200 砂礫層出土。（６）十町中央東二行中央付近ＳＤ 4340 出土。（８）七町東四行北五門ＳＤ 4200 東肩出土。



第 23 図　丸瓦・塼実測図（1/4）

a 3（10 ～ 14） 端面，側面に面取りを施さない。側面のあり方は，（10）が凹面に対し直角になるが凸面側を面取り状に大きくヘラケズリするため鋭角状を呈する。（12 ～ 14）は凹面に対し鋭角となる。（11）は不明。（10・11）には離れ砂がみられない。胎土は（11 ～ 14）は黄灰色ないしはにぶい黄橙色を呈し，少し粗い。（10）は白灰色で精良。（10）十町中央東一行西端ＳＤ 4340 出土。（11）七町東四行北一門ＳＲ 34200 砂礫層出土。（12）八町東三行北七門ＳＸ 820 Ⅲ－２層出土。（13）九町北七門相当部馬代小路西側溝ＳＤ 656 出土。（14）七町東三行北三門ＳＫ 5429 出土。

このほか（15）は凸面平行タタキ目を残し，凹面布目をナデ消す。広端部はヨコナデ，側面はタテナデし，それ以外は丁寧にナデ消す。凸面の側面もタテナデする。側面は，凹面に対し直角になる。胎土は灰白色を呈し，精良で硬質である。十町東二行相当部樋口小路南側溝ＳＤ 658 出土。

D　その他（図版第 23 図）

鴟尾片（１）は，残存長 9.4cm，幅 8.7cm，厚さ 6.8cm を測る正段型鰭部段片である。左右面は不明で，両面とも１段を残す。鰭部はヘラケズリし，端面は斜格子文を残す。胎土は長石などの細粒を少量含みやや粗く，焼成は甘いため軟質である。色調は灰黄色を呈する。七町東四行北二門ＳＲ 4200 最上層出土。

塼（２）は，長方体で，長さ 8.7cm 以上，幅 15.4cm，厚さ 6.9cm を測る。各面はヘラにより調整する。断面には粘土をブロック状にして成形したことが窺える。七町東三行北七門Ｐ 5560 出土。

註

1）東寺『新東寮記』（京都，平成７年），544 頁，図版 15。

2）東大阪市文化財協会『石切剣箭神社穂積殿建設工事に伴う調査』（東大阪，昭和 60 年）15 頁，図版 482 番。

3）岩本崇『瓦類』（財団法人古代学協会編『長岡京左京東院跡の調査研究』〔『古代学研究所研究報告』第七輯〕所収，京都，平成 14 年），80 頁。

4）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅷ』（『奈良国立文化財研究所学報』第 50 冊，奈良，平成３年），118 ～ 120 頁。

2．土器類

出土した土器類は，遺構の重複関係やその変遷から大きく３時期に区分することができる。ここではそのなかでも出土遺物の主要な部分を占める条坊側溝，宅地内溝および井戸，土壙，土器溜，柱穴，川をとりあげ，順次報告する。ついで法量，調整手法，口縁部形態については，機種ごとに分類整理しているので，それに委ねる。各個体の観察については，巻末の表に記載する。

法量は，出土土器のうち口縁部の1/6以上残存するものを基準として区分をおこない，従来用いられてきた区分と合致するかどうかを確認した。その結果，齟齬をきたすには至らなかったため，その区分に準じることにした。なお，それに該当しないものについては，器種ごとで新たな基準を設定することにした。外面調整手法は，長岡京左京東院跡での分類基準[1]を援用して，分析した。また胎土の区分は，土器の表面および断面が呈する色調，胎土の性質や含有物に着目し，肉眼観察を基本としておこなった。各個体の詳細については，巻末の観察表に記す。

土師器は上述した方法と胎土に基づき，ⅠからⅢ群に大別した。Ⅰ群は砂質，Ⅱ群は粉性，Ⅲ群は粘質である。さらに色調により，ａ赤褐色，ｂ橙色および黄橙色，ｃ褐色，ｄ灰褐色の下位区分を設定した。なお堆積状況による表面の土色変化がみられるものについては断面色調を優先し，表面と断面が明確に異なる場合はこれも併記する。含有物については，金雲母，石英，長石，赤色粒，黒色粒等がみられ，金雲母，長石についてはほとんどに含まれることから，赤色粒を含むものをⅰ，黒色粒をⅱ，白色粒をⅲとし，それらの含有量に応じて多，普，少に細分した。それに属さないものについては個別に記述することとする。

また杯，皿，椀類の口縁部形態については，長岡京出土土器の分類基準[2]に準じる。それを概説する。

口縁端部の処理の仕方によって次のＡ～Ｇの７形態に分ける。

Ａ形態…口縁端部を内側に折れ曲げるか巻き込み気味にするもの

Ｂ形態…口縁端部を内側にわずかに折り曲げ気味にし，かすかに突出させるもの

Ｃ形態…口縁端部は，折り曲げたり巻き込むことなく，素直におわるもの

Ｄ形態…口縁端部内側に内傾する面をもつもの

Ｅ形態…口縁端部外側に外傾する面をもつもの

Ｆ形態…口縁端部上面に水平に近い面をもつもの

Ｇ形態…口縁端部外側を若干肥厚させるもの

土師器甕の分類は以下の如くである。

Ａ形態…端部を内側に巻き込むもの

Ｂ形態…端部を内側上方に突出させるが巻き込まないもの

Ｃ形態…端部を内側上方にわずかに突出させるか肥厚させるもの

Ｄ形態…端部を外側下方にのみ突出させるか肥厚させるもの

Ｅ形態…端部を内側上方・外側下方の両方に突出させるもの（外側下方への突出が微弱なものも含む）

なお壺Bについては，数量表には記載するが個別の解説については祭祀遺物の項でおこなう。

須恵器は９類に識別した。Ⅰ類は，長石を微量に含み，やや砂質ないしは粘質気味で，灰白～灰色を呈し，焼成は良好なもので，焼成の状態からⅠ$_0$－硬質，Ⅰ$_1$－軟質の下位区分を設けた。なおこれと同様な胎土を有するが色調は青灰～暗灰色と異なるものをⅠ′類とした。Ⅱ類は，長石をわずかに含み，石英や雲母を含む粘質のもので，灰白～灰色を呈し，硬質で焼成が良好なものである。Ⅲ類は，長石を含み，石英はわずかで，微砂粒が目立つ砂質のものである。灰白～灰色を呈し，硬質で外面に自然釉が認められる。Ⅳ類は，長石を含み，石英がわずかとⅢ群に類似するが黒色粒を含み，粘性であることが異なる。灰白～灰色を呈し，硬質で外面に自然釉が認められるものもある。Ⅴ類は，長石，石英を含むがやや粉性のあるもので，灰色で硬質である。これには胎土が縞目状になるものがある。Ⅵ類は，長石，チャートを多く含むが，非常に粘質で炻胎化し極めて硬質である。このなかには断面赤褐色を呈するものがある。Ⅶ類は，長石，角セン石をわずかに含み，粘性があり硬質である。全体に赤っぽく発色し，断面も赤褐色を呈する場合が多い。外面に自然釉が認められる。Ⅷ類は，長石を多量に含み，石英はわずかでやや粗く，灰色を呈し硬質である。Ⅸ類は，長石と雲母がやや目立ち，微砂粒も多く砂質であるが，灰～青灰色を呈し，硬質である。なお胎土は，近似するが器形，調整が異なるものについては，文章中で類似という表現をした。またこれらの群に帰属しない資料については，個別に特徴を述べる。なお文章中で特に断りがない場合の「糸切り」とは，「回転糸切り」を意味する。

貯蔵具の頸部接合については，笹沢正史の分類[3]をもとに観察をおこなった。そのなかの大半が従来の二段構成で，近年開口法と呼ばれ胴部に閉塞痕が確認できないものである。笹沢のいうＡ類に該当する。そのなかでも，下位区分のＡ２類とした胴頸部をしぼりすぼめて端部をナデにより成形したのち，別造りの口縁部を接合するものが多くみられた。このことから文章中では煩雑になるため，あえて記述せず，それ以外の方法にだけ解説を加えた。

一方壺Ｇ，壺Ｍの分類については，長岡京出土土器の分析をおこなった秋山浩三の分類基準[4]に依拠する。それらの特徴は，基本的には長岡京期のものを踏襲するが，平安京出土のものには器形の変化がみられる。

また新たに出現した器形もみられることから，これを分類に加えた。胎土の差異も含めて，産地同定を想定した。

まず壺Ｇは，細長い体部と口縁部からなり，胴頸部を絞りすぼめて端部を整えたのちに，別作りの口縁部を接合するＡ類にあたる。その形態・色調・胎土等に極めて明瞭な違いがみえることからＡ～Ｄの４群に分けられる。

〔Ａ群〕胴部は細長く，その下半部は弓状を呈する。肩部はあまり張らず，加えて明瞭な稜線をなさない。口縁部は大きくラッパ状に外反して開き，端部は原則的に丸くおわる。外表面の仕上げは，あまり丁寧でなく，小粘土塊や指紋が付着したままになっていることが多い。その色調は，内外面が青みの強い灰青～黒灰青色系で，断面赤茶色系を呈する。硬質焼成で，胎土中には少しばかり白色粒子等を含む。長岡京期では最も量が多く一般的であると秋山は指摘している。

〔B群〕胴部は太くふくらみ，肩部模型が大きく明瞭な稜線をもつ。外反する口縁端部は先すぼまりに丸くおさめる。A群に比べると，器高も底部径も大きい。調整は丁寧で，器表面は平滑に仕上げられている。内外面・断面ともに灰白～淡灰白色の色調を呈し，硬質焼成である。胎土中には白色粒子と多くの黒色粒子を含む。本群中には，外面に淡灰緑色の自然釉のかかるものが見られる。出土点数はあまり多くはないが，長岡京期ではA群に次ぐ量である。

〔C群〕胴部全体の側面観が長方形に近い形状を呈する。肩部はあまり張らず，ほとんど稜線はみられない。口縁部は外反して開き，端部はわずかに面状になる傾向がある。内外面・断面ともに，濃灰～灰色を呈する。焼成は硬質からやや軟質である。胎土は上述の２群とは異なり，素地自体がやや粗く，白色粒子や黒色粒子を比較的多く含有する。白色粒子（長石）の含まれる量が非常に多いという特徴がある。長岡京期では出土量は非常に少ない。

〔D群〕胴部は尻すぼまりに底部に向かって狭まる特徴をもつ。肩部はあまりシャープではないが稜線がつく。口縁部は外反してラッパ状に開くが，開き具合は弱く，口縁部径は肩部径を下回る。内外面は灰～淡灰色を呈し，硬質～やや軟質焼成である。胎土の素地自体は緻密で，黒色粒子や白色粒子を含むが，C群とは逆に黒色粒子の含有率が多い。長岡京期では出土量は極端に少なく，確認例は１例のみである。

壺Mは，球形状の体部に外反する口縁部を備える硬質焼成の小型壺である。体部下半にはヘラ削りが施され，平滑に仕上げられている。体部の形状・高台の有無によってA～Dの４群に分類されている。しかしながら平安京出土のものと長岡京出土のものと比較すると，その形態は口縁部が外反し，端部上端が上方に突出し，幅広の端面をなす。また調整においても体部下半のロクロヘラ削りはなく，ロクロ目を顕著にとどめるなどの異なった特徴をもつ。本分類は，長岡京における分類を基本としながら，口縁部の特徴が異なることから，従来の分類に下位区分として１を付設して分類した。また新たな形式とみられるものについては別途分類した。

〔A１〕最大体部径の位置が中央部付近あるいはやや上部にあたり，安定感のあるもので，有高台のもの。高台は幅広く少し低い。底部外面はヘラキリののちナデのものと，糸切りののちナデの両者があり，前者の法が量的に多い。色調は灰～青灰～濃灰色と，灰色味が強い。大半の個体には自然釉の付着はみられない。A群の出土量が長岡京では最も多い。

〔B１〕体部最大径の位置が，A群より上部に位置し，全体的に腰高の感を与えるもので，有高台のもの。高台はA群に比べると，幅が狭く，径が小さい。底部外面はヘラ切りののちナデと糸切りののちナデの二者がある。色調は，淡灰～灰～青灰色を呈し，A群に比べると灰味は淡い。外面には自然釉の付着が顕著である。長岡京におけるB群の出土量はA群に次ぐ。

〔C１〕Aと同じ胴部形態で無高台のもの。底部外面は糸切り痕を残す。内外面は暗青灰色を呈し，黒色粒子を多く含有する特徴ある胎土であるが，長岡京における出土量は少ない。

〔D１〕Bと同じ体部形態で無高台のもの。B群に比べるとかなり小型である。底部外面は糸切り痕を残す。内外面淡灰色を呈する。長岡京におけるD群の出土量は少ない。

これに新たに４群を付け加える。

〔E〕上述した４種とは異なり，体部は卵形状とやや細長く，有高台のもの。高台はやや小さな台形を呈する。体部外面はロクロナデで平滑である。底部外面には糸切り痕を残す。

〔F〕Eに同じ体部形態で無高台のもの。体部下半にロクロヘラケズリするものがある。底部外面には糸切り痕を残す。

〔G〕E・Fと同様の体部形態で，高台は円盤状に作り出す。口縁部は外反し，端部上端が上方に突出し，幅広の端面をなす。全体にロクロ挽きの痕跡をとどめる，底部外面には明瞭に糸切り痕を残す。頸部と体部上端の内面には連続するしぼり目があり，頸部に接合痕もないことから，体部から口頸部まで連続して成形されたものである。

〔H〕AからD群同様球形の体部であるが，G群同様高台は円盤状に作り出す。口縁部は外半し，端部はG群に類似する。体部や底部の調整はG群に類似する。ただ頸部と体部上端の内面にしぼり目が確認されないことから，口頸部の整形はG群と異なる。

なおこれらの群に帰属しない資料については，本文中で個別に述べることにする。

A　SR 4200（東西部）出土土器（図版 30・31・33・104 ～ 108）

樋口小路北側溝相当位置にあり，西流する。堆積は複雑であるが，SR 4200 全体では総数 356 点出土し，調査区内における平安時代前～中期の出土数 1385 点の 25.7％と 1/4 を占め，最も多い。そのうち東西部から 113 点（31.7％）ある。検出範囲の中で基本層位となっている中位の砂礫層を基準に，その上下層からも遺物が出土することから，それらを含めて述べる。

1　最上層

土師器，須恵器，緑釉陶器があり，４点にとどまる。

緑釉陶器には椀がある。緑釉陶器は，水簸した精良な陶土を使用し，ロクロにより成形してヘラ切りないしは糸切りによって切り離す。器面はロクロナデにより調整し，外面はその上にロクロヘラケズリを施している。さらに内外面ともにヘラミガキによってより丁寧に平滑に仕上げる。瓶・壺類は外面のみにとどめる。胎土は灰白色ないし黄灰色を呈し，軟質のもの（軟陶と呼ぶ）と，灰白色ないし暗灰色を呈し，硬質のもの（硬陶と呼ぶ）がある。焼成に際しては，釉薬の下に重ね焼きの痕跡がみられ，素地を一度焼きしたのち施釉し，二度焼きをしたものもみられる。この際三叉トチンの痕跡がみられる。椀皿類の高台には，その成形法に５種あり，A，B，C，D，Eとする。高台Aは底部外面が凹面を呈した円盤状に削り出したもので，切り高台である。高台Bは切り高台の中央を小さく円形に抉った蛇の目高台。高台Cは高台Bと同様な方法で成形するが，やや抉りの範囲が広い蛇の目高台。高台Dはこれも高台Bと同様な方法によるがさらに抉りの範囲が大きく，高台断面が台形を呈するもの。高台Eは張り付け高台で，断面台形のものが一般的であるが，まれに蛇の目状を呈するものもある。以下この分類によって表記する。

椀（1）はやや外方に直線的に開く口縁部からなる。高台A。釉の遺存状態が非常に悪く不明。底部内面には二次的に再利用されたような，無数の小さな窪みがみられる。軟陶。京都産。

2　砂礫層上層

総個体数18点のうち，土師器3点（16.7%），黒色土器2点（11.1%），須恵器11点（61.1%），灰釉陶器1点（5.6%），埴輪1点（5.6%）が出土する。須恵器が半数以上を占め，壺類などの貯蔵具が目立つ。反面，食膳具は全体の4割ほどしかなく，土師器の占める割合が極端に少ない。

土師器は，高坏・甕Aがある。高坏（2）は，脚部上半から杯底部を残す。脚部外面は縦方向のケズリし，断面八角形を呈する。脚部内面はしぼり目痕が残る。胎土はⅢｄｉ少。

須恵器には，杯B，杯B蓋，盤，壺L，壺M，壺G，壺，甕があり，貯蔵具が過半数を占める。

盤（3）口縁部上半を欠くが，平たい底部と直線的に大きく開く口縁部からなる。底部外面は糸切り痕をとどめ，内面はヨコナデと不定方向のナデで，口縁部内面はＳＫ5429出土の鉢同様，底部から口縁部へ斜め方向にナデあげる。このような内面調整は類例をあまりみない。I_1類に類似。

壺（4）は口頸部片で，端近くでやや内側に折れ，端部は平坦面となる。壺ＬⅡの可能性がある。胎土はⅥ類。

壺L（5，6，7）はいずれも破片で，器形から大型のものⅠ（5），小型のものⅡ（6，7）に分かれる。（5）はⅨ類。（6）の口頸部と体部上端の内面には，連続するしぼり目がみられることから，それらは連続して成形されたと考えられる。Ⅴ類。（7）は底部片で，底部外端よりやや内側に撥形に開く台高台がつく。底部外面は，ヘラ切りののち粗いロクロナデする。Ⅵ類に類似。

壺G（8）は底部片で，A群。

壺M（9）は，口縁部の欠損を除くとほぼ完形に近い。器形はＡ1群であるが，外面に自然釉の付着がみられ，B群の特徴もあわせもつ。底部外面に「一」の線刻がある。Ⅲ類。

このほか灰釉陶器瓶C（10）があり，口縁部は欠くが体部は完形である。平底に末広がりに膨らむ体部からなる。釉は体部上半に施される。胎土Ｉａ。

3　砂礫層

総個体数75点のうち，土師器45点（60%），須恵器23点（30.7%）があり，弥生時代から古墳時代のもの7点（9.3%）が混入する。土師器が過半数を占め，そのなかでも食膳具が半数以上ある。須恵器でも食膳具が半数以上を占める。

土師器には，杯A，杯B，杯B蓋，ⅢA，椀A，高杯，壺，甕Aがあり，食膳具が過半数を占める。

杯ＡⅠ（11）は，平底に内湾しながらまっすぐに開く口縁部からなる。口縁端部はA形態で，やや面をなす。ｅ－ｃ手法で，胎土はＩｃｉ少。

ⅢＡⅡ（12）は，底部からゆるやかに開く口縁部からなる。口縁端部はC形態。ｃ手法で，ケズリは全体に丁寧である。胎土はⅡｃｉ少で，杯のなかの精良な胎土をもつ一群と共通する。

ⅢＡⅠ（13）は，やや丸みをもって開く口縁部からなる。口縁端部はB形態。ｃ／ｅ手法で，胎土はⅡｃ。口縁部から底部にかけて煤が付着。

椀ＡⅠ’（14・15）は，内湾する口縁部からなる。口縁端部はB形態。（14）の口縁部中程でやや厚味がある。ｅ－ｃ手法で，胎土はＩｃである。内面全体に煤が付着し黒褐色化する。（15）はｃ手法で，底部内面に板ナデ痕を残す。胎土はＩｂｉ少で，断面縞目状を呈する。外面に二次的な火

を受け表面が荒れる。内面の広範囲と外面の口縁の一部に煤が付着。

椀ＡⅠ（16）はやや小さい底部の中央に厚みがあり，口縁部は内湾気味に立ち上がる。口縁端部はＢ形態。ｃ／ｅ手法で，内面に板ナデ痕を残す。胎土はＩｃ。このほか底部片（17～20）に墨書がみられる。（17）は「二」，（18）は「御」，（19）は「直」か。（20）は判読できない。

高坏（21・22）は脚部片である。（21）の裾部は広がり，外面は丁寧にヘラケズリする。脚部内面にしぼり目痕を残す。胎土はＩｄｉ，ii普。７世紀代のもので混入する。（22）は脚部片で，縦方向のケズリにより断面七角形を呈す。裾部はミガキを施す。胎土はⅡｄｉ少で，断面縞目状となる。

甕ＡⅡ（23～25）は外傾する短い口縁部からなる。体部は叩き成形で，内面には無文の当て具痕を残し，部分的にハケメを加える。口縁部内面は叩き具によりヨコナデする。端部はＡ形態。（23）の体部外面は，上半が横方向の叩きのちオサエ，下半は縦軸成形叩きののちハケメを施す。胎土はⅢｂｉ，ii少で，断面縞目状を呈す。（24）の体部外面は上半が縦方向の平行条叩きののち粗いヨコナデ，下半は無文叩きののちハケメを加える。胎土はＩｄii少である。（25）の体部外面は叩きののちハケメ，内面はハケメを施す。胎土はⅡｂｉ少。

甕ＡⅢ（26）の口頸部の器壁はやや厚く，口縁端部はＡ形態。体部外面は無文叩きののちハケメ，内面はハケメ。胎土はＩｃｉ，ii普。口縁部内面の一部に煤が付着。

須恵器には，杯Ａ，杯Ｂ，杯Ｂ蓋，椀，壺Ｌ，壺Ｍ，壺Ｇ，壺蓋，甕などがある。食膳具が65.2％と過半数を占め，そのなかでも杯類が７割強を占める。

杯ＡⅡ（27）は，平らな底部にやや外方に直線的にのびる口縁からなり，端部は丸くおわる。Ｉo類。

杯（28）は杯Ａに類似するが，底部と口縁部の境は丸みがあり，器壁も厚いことから杯Ｅの可能性がある。Ⅲ類に類似。

杯Ｂ（29～34）は，器形の特徴はほぼ共通し，端部は丸くおわる。高台は台形を呈するがやや低いもの，長方形のものなどがある。器形からＢⅡ（29，32，33，374）とＢⅢ（30，31）がある。（29，30）はⅢ類に類似。（31，32）はＩ′類。（33）はＩo類。（34）はⅢ類。

杯Ｂ蓋Ⅲ（35）は，笠形の器形で頂部と縁部の境が不明瞭となる。縁端部下端は突出し，丸くおわる。頂部外面はロクロヘラケズリし，扁平なつまみがつく。縁部外面と内面は黒色化する。Ⅷ類。

壺Ｌ（36）は，口縁部を欠くがそれ以外を残す。球形の体部にやや外方に開く口頸部からなる。底部外縁には小さな台高台がつく。体部下半はロクロケズリし，底部外面はヘラ切り後中心部を除いてロクロナデする。Ⅸ類。

壺Ｍ（37，38）はいずれも底部片である。（37）はＥ群。Ｉ′類。（38）はＦ群。Ｉ′類に類似。

壺Ｇ（39）は口縁部を欠く。Ａ群。

壺（40）は底部片で，底部外端に四角い台高台が付く。底部外面は糸切り痕を残す。Ⅳ類。

甕（41）は上半部の破片で外反する口頸部に，端部はほぼ直立する端面をなす。体部外面には平行叩きののち粗いハケメをし，内面には同心円文の当て具痕が残る。体部最上位成形には平行叩き

第1表　SR 4200 東西部砂礫層

土師器					
形態	器形	法量区分	手法	個体数	
食膳具	杯A	Ⅰ	c	1	5(16.1%)
			e-c	3	
			-	1	
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	-	
	杯B	Ⅰ	-	-	2(6.5%)
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	1	
		不明	c	1	
	杯B蓋	Ⅰ	-	-	1(3.2%)
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	1	
	Ⅲ A	Ⅰ	c'	3	6(19.4%)
			c/e	2	
		Ⅱ	-	1	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	-	
	椀A	Ⅰ'	e-c	1	2(6.5%)
			c	1	
		Ⅰ	c/e	1	8(25.8%)
			c'	2	
			e-c	1	
			e	1	
			-	3	
	高杯	-	-	2	2(6.5%)
	不明	-	-	5	5(16.1%)
	小計			31(68.9%)	
貯蔵具	壺	B	-	-	1(100%)
		C	-	-	
		E	-	1	
		不明	-	-	
	小計			1(2.2%)	
煮沸具	甕A	Ⅰ	-	-	13(100%)
		Ⅱ	-	5	
		Ⅲ	-	6	
		Ⅳ	-	2	
		Ⅴ	-	-	
		不明	-	-	
	小計			13(28.9%)	
合計				45(60%)	

須恵器				
形態	器形	法量区分	個体数	
食膳具	杯A	Ⅰ深	-	2(13.3%)
		Ⅰ浅	-	
		Ⅱ深	-	
		Ⅱ浅	1	
		Ⅲ	-	
		不明	1	
	杯B	Ⅰ	-	8(53.3%)
		Ⅱ	4	
		Ⅲ	3	
		Ⅳ	-	
		Ⅴ	-	
		不明	1	
	杯	Ⅲ	1	1(6.7%)
	杯B蓋	Ⅰ	-	3(20%)
		Ⅰ～Ⅱ	-	
		Ⅱ高	-	
		Ⅱ低	-	
		Ⅲ	2	
		Ⅲ高	-	
		Ⅲ低	1	
		Ⅳ	-	
		不明	-	
	Ⅲ A	Ⅰ	-	0(0%)
		Ⅱ	-	
		Ⅲ	-	
		不明	-	
	鉢	-	-	0(0%)
	椀	-	1	1(6.7%)
	不明	-	-	0(0%)
	小計			15(65.2%)
貯蔵具	壺	A	-	6(75%)
		B	-	
		G	1	
		L	1	
		M	3	
		不明	1	
	甕	-	1	1(12.5%)
	短頸壺	-	1	1(12.5%)
	不明	-	-	0(0%)
	小計			8(34.8%)
合計				23(30.7%)

緑釉陶器		
形態	器形	個体数
食膳具	椀	0(0%)
	Ⅲ	0(0%)
	小計	0(0%)
貯蔵具	-	0(0%)
	-	0(0%)
	小計	0(0%)
合計		0(0%)

灰釉陶器		
形態	器形	個体数
食膳具	椀	0(0%)
	Ⅲ	0(0%)
	小計	0(0%)
貯蔵具	-	0(0%)
	-	0(0%)
	小計	0(0%)
合計		0(0%)

黒色土器		
形態	器形	個体数
食膳具	杯A	0(0%)
	杯B	0(0%)
	小計	0(0%)
その他	-	0(0%)
合計		0(0%)

その他			
	形態		個体数
中国陶磁器	-		0(0%)
弥生～古墳	土器	甕(弥生)	1(14.3%)
		壺(弥生)	1(14.3%)
		高杯	1(14.3%)
		甕(古墳)	1(14.3%)
		壺(古墳)	1(14.3%)
		小計	5(71.4%)
	須恵器	杯身	2(28.6%)
		小計	2(28.6%)
	小計		7(100%)
合計			7(9.3%)

総個体数 75

が口縁部に並行し，左回りに叩く。内面の同心円文は，ナデにより不明瞭となっている。Ⅳ類。

このほか6世紀の杯身（42・43）が混入する。

4　最下層

総個体数16点のうち，土師器13点（81.2%），須恵器2点（12.5%）があり，弥生時代の甕1点が混入する。土師器が過半数を占め，そのなかでも食膳具が圧倒的多数である。

土師器には杯，皿A，皿B，椀A，高杯，壺B，甕A・Bが少量ずつあり，器形を特定できないものもある。

皿AⅡ（44）の口縁端部外端は，わずかに凹線のある面をなす。c手法で内面に一定方向の板ナデを施す。胎土はⅢcである。内外面全体に煤が付着。

椀AⅠ（45）の口縁端部は，上方につまみ上げられ，外端はやや凹む面をなす。c／e手法（あるいはc／c'手法）。胎土はⅠb。

底部片（46～48）に墨書がみられるが，判読はできない。

須恵器には，杯A，杯B蓋，平瓶がある。

杯A（49）は，成形が丁寧で器面が平滑。Ⅰo類。

杯B蓋（50）はⅠ'類。

平瓶（51）は口縁部片で，端部は平坦面をなし，中央が凹線上に窪む。Ⅸ類。

B　SR4200（南北部）出土土器（図版31～34・104～108）

樋口小路と馬代小路交差点のやや東側で折れ曲がり，七町に南流する部分にあたる。ここは平安時代以前の旧流路を利用して開削されたもので，それ以前の混入物も目立つ。南北部から243点，68.3%と多数を占める。検出範囲の中で東西部と同様，基本層位となっているその中位に認められた砂礫層を基準に，その層および直上層とに特に遺物がまとまって出土することから，それを中心に述べる。

1　最上層・西肩

総個体数52点のうち，土師器30点（57.7%），須恵器20点（38.5%）で，黒色土器，埴輪が1点ずつある。土師器が過半数を占め，そのなかでも貯蔵具が半数以上ある。内訳は，食膳具は杯Aが半数以上，貯蔵具では壺Bが圧倒的多数を占める。

土師器は，杯A，杯B蓋，椀A，壺，甕Aがある。

杯AⅠ（52）の口縁端部はB形態。e－c手法で，胎土はⅠc。（53）は斜め上方に直線的に開く口縁部からなる。口縁端部はA形態。e－c手法で，胎土はⅠc。外面全体および内面の広範囲に煤が吸着。

杯B蓋（54）は，丸みをもってゆるやかに曲がる縁部からなる。端部は内下方に突出する。外面はケズリののち四分割にやや粗くヘラミガキする。内面は板ナデを残す。胎土はⅢb。

皿AⅠ（55･56）は，丸味のある底部に直線的に外方に開く口縁部からなる。口縁端部はA形態。（56）はc手法で，胎土はⅡd。器体の一部に煤が付着。（55）はe手法で，胎土はⅡdi少。内面

の広範囲に煤が付着。

甕ＡⅡ（57）は短く外反する口縁部からなる。端部はＡ形態。体部外面の最上位はヨコ方向の叩き，それ以下は縦軸成形叩き。内面は上半が小さな凹凸のある当て具痕があり，下半は別の無文当て具痕を残す。口縁部外面はヨコナデするが一部叩き痕を残す。内面は叩き具によりヨコナデする。胎土はＩｄ。外面の大部分と内面に薄く煤が付着。

須恵器には，杯Ｂ，杯Ｂ蓋，鉢，壺Ｌ，壺Ｍ，甕などがあり，食膳具１２点（60％），貯蔵具８点（40％）と食膳具が半数以上をしめる。

杯Ｂ（58，59）は，器形の特徴はほぼ共通し，端部も丸くおわる。ＢⅡ（58）の口縁端部は幾分細まり内湾気味になる。高台は底部外端より少し内側につき，やや内傾する端面となる台高台がつく。やや大振りで深い器形である。Ⅲ類。ＢⅢ（59）は（58）に比べ小さい。Ⅲ類に類似。

杯Ｂ蓋Ⅲ（60）は，扁平な頂部に屈曲する縁部からなり，縁端部下端は僅かに突出する。頂部外面をヘラ切りののちロクロナデを施し，内面にはロクロナデする。Ⅴ類。

壺Ｍ（61）は上半部片で，ＥないしはＦ群である。Ⅰ′類。

甕（62）はほぼ原形をとどめ，やや肩の張る長胴の体部に，外反する短い口縁部からなり，口縁端部は横方向に突出し，上端はやや外傾する。体部外面には平行叩きののちハケメをし，叩き目が消され，底部のみ痕跡をとどめる。内面には同心円文の当て具痕を残す。内面の同心円文は，少し太く大きい。底部内面はヨコナデするが粘土紐の痕跡を部分的に残す。底部外面はかなり摩滅する。Ⅳ類に類似。

このほか６世紀の壺（63）口縁部片がある。外面の上半には２条の凸線があり，その間に波状文を施す。器壁は極めて薄い。胎土は精良。

２　砂礫層上層

総個体数40点のうち，土師器24点（60.0％），須恵器13点（32.5％），灰釉陶器１点（2.5％）と，古墳時代の土器２点が混入する。土師器が過半数を占める。内訳は土師器の食膳具が58.3％と半数以上を占め，貯蔵具の壺が目立つ。須恵器では貯蔵具が半数以上を占める。

土師器には杯Ｂ，ⅢＡ，椀，高杯，壺，甕などがある。

ⅢＡⅠ（64）は，やや丸みのある口縁部からなる。口縁端部はＡ形態。ｅ－ｃ手法で，口縁部内面に一部板ナデ状の痕跡を残す。胎土はⅡｄｉ少。内面に部分的に煤が付着。

ⅢＡⅡ（65）の口縁端部はＣ形態。ｃ／ｃ′手法で，内面見込に一定方向の板ナデ痕を残す。胎土はⅡｃで，杯類の精良なものに類似する。

椀ＡⅠ（66）の口縁端部はＢ形態。ｃ手法で，外面の丁寧にヘラケズリするが上半に一部ケズリ残しがある。胎土はⅢｃｉ少である。口縁部内外面の大部分に煤付着。

底部片（67）には，やや外傾する細長い長方形の高台がつく。胎土はＩｂｉ少。椀の可能性があり，器形，胎土から搬入土器と考えられる。

高坏（68）の脚部は，断面六角形を呈す。裾部外面はヨコ方向のミガキで，脚部内面は未調整。芯棒巻き付け技法。胎土はⅡｃｉ，ⅱ少。

甕ＡⅡ（69）の頸部には叩きによる段があり，口縁部が外反する。端部はつまみ上げ，端面は外傾する。口縁端部はＢ形態。体部外面上半は叩きののち粗い縦方向のハケメ，下半は縦軸成形叩きののち不定方向のハケメを加える。内面上半には無文当て具，下半は異なる無文当て具ののち粗いハケメを施す。口縁部内面は叩き具によりヨコナデする。胎土はⅡｄⅱ少で，雲母を多量に含む。

須恵器には，食膳具が45.5%，貯蔵具が54.5%で，小型の壺類が目立つ。

壺Ｋ（70）は完形で，細長い口頸部と肩部が張り，稜をなす体部からなる。口縁端部はわずかに開き，丸みのある端面を呈す。底部は平底である。頸部の接合はＡ２，Ⅳ類。

壺Ｇ（71）は底部片で，Ａ群に類似。壺Ｇはこのほかに口頸部片がある。それは，内外面ロクロ目を顕著に残す。胎土は多孔質で粗く，硬質で自然釉が薄くかかる。胎土分類には，該当せず，従来知られていない産地の製品と考えられる。

壺Ｍ（72・ 73）はほぼ完形で，口縁部は外反し，端部上端が上方に突出し，幅広の端面をなす。（72）は高台はなく平底でＤ１群，頸部内面に少ししぼり目がみられ，頸部と体部最上位の境は明瞭である。胎土はⅨ類。（73）はＡ１群，頸部内面にしぼり目がみられるが，体部最上位と頸部の境が明瞭であることから，接合はＡ２と考えられる。Ⅱ類。両者とも器形の特徴は長岡京期の壺Ｍの特徴を踏襲する。

壺（74）は底部片で，体部下端にロクロ削りを施す。Ⅶ類。

３　砂礫層（東西・南北両部）

総個体数23点のうち，土師器８点（34.8%），須恵器15点（65.2%）あり，須恵器が多数を占める。

土師器にはⅢＡ，高杯，甕Ａがある。

甕ＡⅣ（75）は，球形の体部に外反する口頸部からなる。口縁端部はＡ形態。体部調整は上述した甕同様である。口縁部内面は叩き工具によるヨコナデ。胎土はⅢｄⅱ少である。

須恵器には，食膳具７点，貯蔵具８点あり，杯Ｂ，鉢，壺Ｌ，壺Ｍ，壺Ｇ，平瓶，壺，甕などがある。

杯Ｂ（76～78）は，平たい底部と直線的に大きく開く口縁部からなる。ＢⅡ（76）の高台は内傾気味の逆台形を呈す。Ⅰ′類。ＢⅡ（77）の高台は台形を呈す。Ⅴ類。ＢⅢ（78）はやや扁平な器形で，高台の外端面は外傾し，断面三角形を呈す。底部外面には判読不明の墨書がみられる。Ⅲ類に類似。姫路市打越奥山３号窯の製品の可能性がある[5]。

壺Ｌ（79）は口頸部が破損し，体部の一部を残す。器形は球形で，底部外端には撥形に開く高い高台がつく。大型で，頸部接合はＡ２，Ⅴ類に類似。

壺Ｍ（80）は，口縁部の欠損する体部片である。器形はＢ１群で，Ⅴ類。

平瓶（81）はやや扁平な器形の背面に把手がつき，注口，把手と体部背面の半分を欠く。体部の高さが体部最大径の1/2よりやや短く，肩部の折れ曲がりは鋭く稜をなす。把手は細長い逆Ｕ字形で，ヘラで面取りされ扁平な粘土紐を張りつける。底部外端より少し内側に台高台をつける。体部下半から底部外面にかけてはロクロヘラケズリし，体部背面はロクロナデする。Ⅱ′類に類似。

甕（82）は口縁部を欠く。全体に長胴でやや肩が張り，平底である。体部外面は細かい平行叩き目が右上がりの斜め方向に施される。内面は細同心円文の当て具痕を丁寧にナデ消す。底部外面は，砂粒が付着する。口頸部は体部最上位で接合される。猿投産の可能性が高い。

4　砂礫層

総個体数111点と遺構中のなかで31.2%を占め，最も多い。土師器60点（54.1%），黒色土器1点（0.9%），須恵器41点（36.9%），灰釉陶器1点（0.9%）があり，弥生時代から古墳時代のもの8点（7.2%）が混入する。土師器が過半数を占める。黒色土器，灰釉陶器がわずかに含まれることが特徴である。内訳は土師器の食膳具が38.3%と最も多い。

土師器には杯A，杯B，杯B蓋，皿A，椀A，高坏，壺B・E，甕Aがあり，貯蔵具の壺Bが20点と最も多い。

杯AⅠ（83）は直線的に立ち上がる口縁部からなり，口縁端部はA形態。e－c手法で，底部内面に不定方向の板ナデ痕を残す。胎土はⅡbi少。口縁部上端の一部に煤が吸着。杯AⅡ（84）の口縁部は，上半でわずかに外反し端部をつまみ上げる。e手法。外面にはユビオサエの凹凸が目立つ。胎土はⅡdi少。

皿AⅠ（85～87）は直線的に開く口縁部からなる。口縁端部はA形態。（85）はほかのものより器高が低い。c手法で，胎土はⅠdi少である。口縁部と見込の一部に煤が付着。（86）の端部は外傾する凹みのある面をなす。c手法で，底部内面に板ナデ痕を残す。胎土はⅢci少で，杯類の精良なものに類似する。（87）も器高がやや低い。c／e手法で，胎土はⅡci少。底部内面の一部に煤が付着。

椀AⅠ（88・89）のうち（88）の端部はC形態。c手法でケズリは丁寧。底部内面には板ナデ痕を残す。胎土はⅢbi少で，（66）に類似する。口縁の一部に煤が付着。（89）の端部はB形態。e－c手法で，底部内面には板ナデ痕をわずかに残す。胎土はⅢbi少。外面の一部と底部内面に1/2ほど煤が付着。

壷E（90）はわずかに外傾する体部に，短く内側に屈曲し，さらに折れて上方に突出する口縁からなる。端部は丸くおさめる。体部外面はケズリののち粗いミガキ。内面および口縁部はヨコナデ。胎土はⅠdiii少で，金雲母が目立つ。口縁部はわずかに煤が付着。

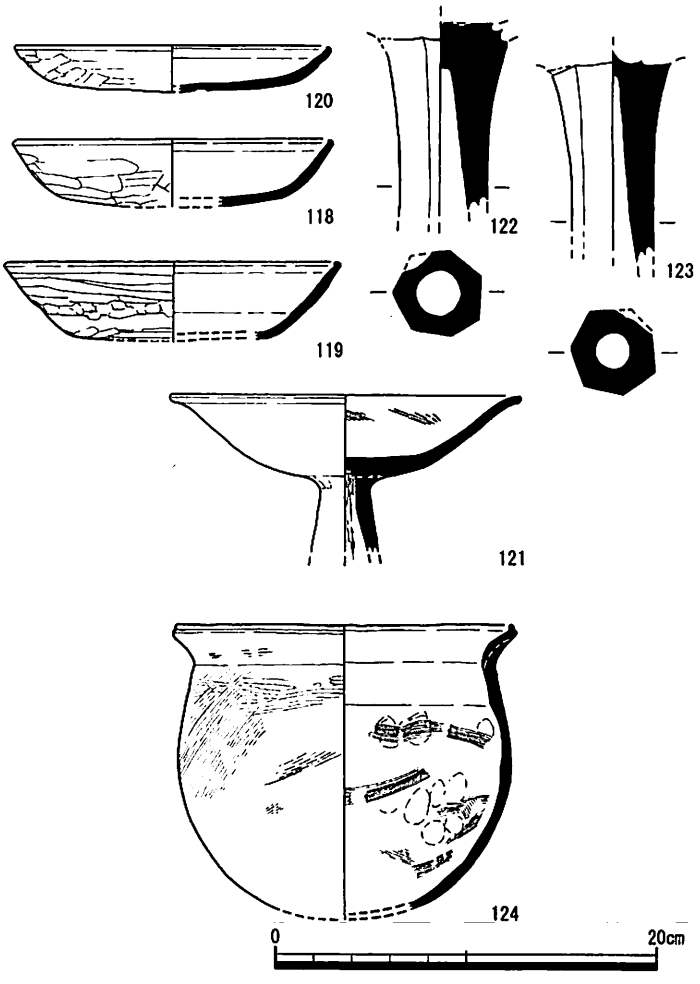
甕AⅡ（91・92）は球形の体部に，くの字に折れ曲がる短い口縁部からなる。（91）の口縁端部はE形態で，端部はやや凹み外傾する面をなす。体部外面の調整は上半が叩きののち縦方向のハケメ，下半が斜め方向のハケメ。体部内面は上半が横方向のナデ，下半が無文の当て具痕を残す。胎土はⅢcで，含有物がやや目立つ。外面の広範囲に煤が付着。（92）の口縁端部はA形態。体部外面の調整は上半が縦方向のハケメ，以下は斜め方向のハケメ。体部内面の上半付近は当て具痕を横方向のハケメでほぼ消し，下半はそれを部分的に残す。口縁部内面は叩き工具によるヨコナデ。胎土はⅡdi少。

甕AⅣ（93・94）は球形の体部に，くの字に折れ曲がり外傾する短い口縁部からなる。（93）は残存部からB形態と考えられる。体部外面は粗い平行条叩きののち粗いハケメ，内面は無文当て具

痕を残す。胎土はⅢｃⅱ少。内外面の大部分に煤が付着。(94) の口縁部はＡ形態。体部外面は縦方向のハケメ，体部内面には当て具痕があり，横方向のハケメを加える。口縁部内面は叩き工具によりヨコナデする。胎土はⅡａｉⅱ普。外面広範囲に煤が付着。

須恵器には，食膳具が20点(48.8%)，貯蔵具が21点（51.2%）がある。前者では杯類が圧倒的多数を占め，後者では小型の壺類が半数以上を占める。杯A，杯B，杯B蓋，壺L，壺M，壺G，壺，平瓶などがある。

杯ＡⅡ（95・96）があり，(95) は口縁部がやや斜めに直線的に開く。器壁は薄く，調整は丁寧で平滑である。底部外面には「井」の墨書がみられる。Ⅰ1類。(96) は，外方に開く口縁部からなる。器壁も厚く，器高はやや低い。Ⅴ類に類似。



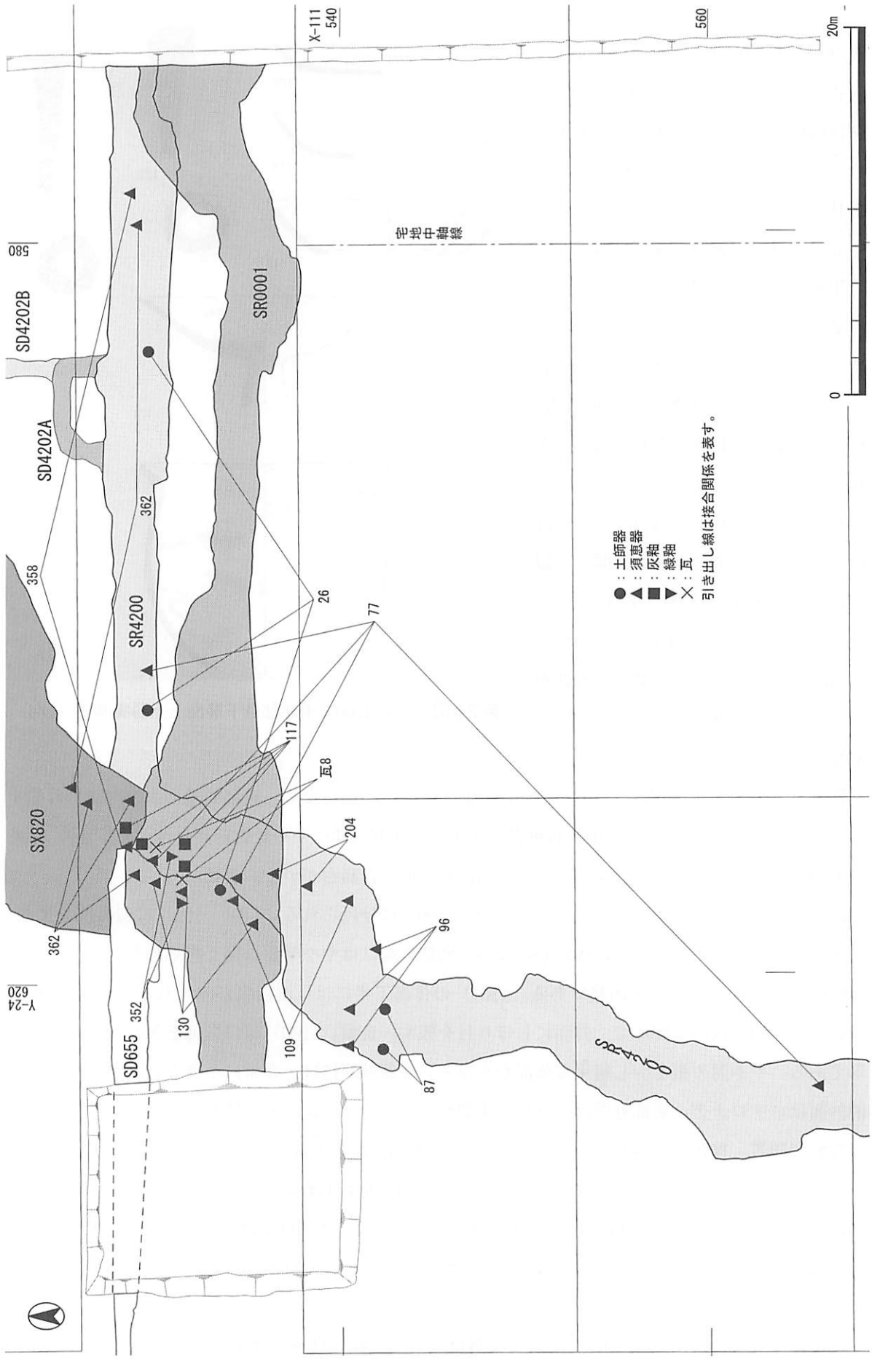
第24図　ＳＲ4200　南北部最下層出土土器実測図（1/4）

杯ＢⅢ（97～99）があり，(97) は底部外面が僅かに凸面をなす。底部外端の少し内側に外傾する端面のある台高台がつく。(98) は底部が平坦で，底部外端にやや低い台高台がつく。(99) は底部外面が凹面をなす。底部外端より僅か内側にやや低い台高台がつく。Ⅲ類。

壺Ｌは，器形から大型（101～103）と小型（100）に分けられる。(101・102) は口縁部を欠き，あまり肩の張らない球形に近い体部からなる。底部外端にはやや外側に開く撥形の高台がつく。底部外面はいずれも糸切り未調整である。(101) の体部下半には，湿台痕がみられる。Ⅴ類。(102) はⅢ類。(103) は口頸部片で，外面にしぼり目を残す。Ⅲ類。(100) は口頸部を欠くが，体部は完形である。やや肩の張る少し扁平な体部からなる。底部外端には，非常に小さな台高台がつく。体部外面はロクロナデ，底部外面はヘラ切り未調整である。内外面とも赤褐色化し灰を被るが，胎土は良好で硬質。Ⅳ類。兵庫県加西市成池17号窯の製品に類似する[6]。

壺M（104～106）は，(105) が口縁部片で，それ以外はほぼ完形に近い。(104) はＡ群で，口頸部が直立する。底部外面はロクロ削りののちロクロナデし，底部外面は糸切り痕をとどめる。Ⅰ′類。(105) は頸部内面にしぼり目を残す。Ⅰ′類。(106) は長岡京期のＡ群の特徴をもつが，外反する口縁端部であることが異なる。Ⅰ′類。

壺Ｇのうち（107・109）は口縁部を欠く以外は完形。Ａ群。(108) は完形で，Ａ群に類似。(109)



第25図　遺物出土分布図

第2表　S R 4200　南北部砂礫層

土師器					
形態	器形	法量区分	手法	個体数	
食膳具	杯A	Ⅰ	e-c	3	4(17.4%)
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	1	
	杯B	Ⅰ	--	-	5(20.8%)
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	5	
	杯B蓋	Ⅰ	-	-	1(4.3%)
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	1	
	ⅢA	Ⅰ	c	2	5(21.7%)
			c/e	1	
			e-c	2	
		不明	-	-	
	椀A	Ⅰ	c	4	6(26.1%)
			e-c	1	
		Ⅰ'	-	-	
		Ⅱ	-	1	
		不明	-	-	
	高杯	-	-	2	2(8.7%)
	小計			23(38.3%)	
貯蔵具	壺	B	-	20	22(100%)
		C	-	-	
		E	-	2	
		不明	-	-	
	小計			22(36.7%)	
煮沸具	甕A	Ⅰ	-	-	15(100%)
		Ⅱ	-	4	
		Ⅲ	-	2	
		Ⅳ	-	8	
		Ⅴ	-	-	
		不明	-	1	
	小計			15(25%)	
合計				60(54.1%)	

黒色土器		
形態	器形	個体数
食膳具	杯A	1(100%)
	杯B	0(0%)
	小計	1(100%)
その他	-	0(0%)
合計		1(0.9%)

緑釉陶器		
形態	器形	個体数
食膳具	椀	0(0%)
	Ⅲ	0(0%)
	小計	0(0%)
貯蔵具	-	-
	小計	0(0%)
合計		0(0%)

灰釉陶器		
形態	器形	個体数
食膳具	椀	0(0%)
	Ⅲ	0(0%)
	小計	0(0%)
貯蔵具	壺	1(100%)
	小計	1(100%)
合計		1(0.9%)

須恵器				
形態	器形	法量区分	個体数	
食膳具	杯A	Ⅰ深	-	6(30%)
		Ⅰ浅	-	
		Ⅱ深	-	
		Ⅱ浅	5	
		Ⅲ	1	
		不明	-	
	杯B	Ⅰ	1	7(35%)
		Ⅱ	-	
		Ⅲ	3	
		Ⅳ	-	
		Ⅴ	-	
		不明	3	
	杯	Ⅱ	1	4(20%)
		Ⅲ	1	
		Ⅳ	2	
	杯B蓋	Ⅰ	-	3(15%)
		Ⅰ～Ⅱ	-	
		Ⅱ高	-	
		Ⅱ低	-	
		Ⅲ	2	
		Ⅲ高	-	
		Ⅲ低	-	
		Ⅳ	-	
		不明	1	
	ⅢA	Ⅰ	-	0(0%)
		Ⅱ	-	
		Ⅲ	-	
		不明	-	
	鉢	-	-	0(0%)
	不明	-	-	0(0%)
	小計			20(48.8%)
貯蔵具	壺	A	-	14(66.6%)
		B	-	
		G	3	
		L	5	
		M	4	
		不明	2	
	短頸壺	-	1	1(4.8%)
	甕	-	3	3(14.3%)
	平瓶	-	3	3(14.3%)
	不明	-	-	0(0%)
	小計			21(51.2%)
合計				41(36.9%)

その他			
	形態		個体数
中国陶磁器	-		0(0%)
弥生～古墳	土器	弥生	2(25%)
		甕(古墳)	2(25%)
		小計	4(50%)
	須恵器	高杯	3(37.5%)
		甕	1(12.5%)
		小計	4(50%)
	小計		8(100%)
合計			8(7.2%)

総個体数 111

はA群。

壺は3個体ある。(110, 111) は口頸部片で，口縁端部は外反し，端部上端が突出して直立する端面をなす。V類。(112) は短頸壺の底部片で，平底にほぼまっすぐ立ち上がる体部からなる。体部外面はロクロヘラケズリののち粗いロクロナデをし，内面はロクロ目を残す。底部外面はヘラ切りののち粗いナデを加える。V類に類似。

平瓶 (113) は，やや扁平な器形の背面に把手がつき，把手と体部背面を欠く。体部の高さが体部最大径の1/2よりやや短く，肩部の折れ曲がりは鋭く稜をなす。口縁端部はやや外半し，端部は平坦面となる。底部外面がやや凸面となり，安定感がない。体部下半から底部外面にかけてはロクロヘラ削りし，体部背面はロクロナデする。V類。(114) は口縁部片で，端部は平坦面となる。I′類に類似。(115) は小型で，器形の特徴は連結部出土の平瓶 (81) と類似する。把手を欠く。高台はやや大きな台高台を呈し，端面外端が外側に突出する。Ⅷ類で，猿投窯産の可能性がある。

甕 (116) は，口縁部片で，やや外側に開く短い口縁部からなる。端部外端は外方に張り出す。体部外面には細かい平行叩きののちヨコナデを施す。内面は細同心円文がナデにより僅かに痕跡を残す。体部最上位に粘土の継ぎ目痕が見られる。Ⅳ類。

灰釉陶器壺L (117) はほぼ完形に近い。少し肩が張りやや扁平な体部に，外側にやや開く口頸部からなる。口縁端部は丸くおわる。肩部には一条の凹線が巡る。外面全面に施釉。頸部接合は体部上位内面に成形時の指ナデの圧痕や円盤閉塞痕が明瞭なことから，三段構成のB1類である。胎土は1a。

このほか6世紀の長脚高坏の破片があり，脚部に2重の凹線が巡る。

5　最下層（第24図）

17個体出土し，土師器が12個体と7割を占める。

土師器には杯A，ⅢA，椀A，高坏，甕Aなどがある。

杯AI (118・119) は，わずかに内湾しながら立ち上がる口縁部からなる。e－c手法。(118) の端部はAに近いB形態。胎土はIcである。(119) の端部はA形態。底部内面には不定方向の板ナデ。口縁部外面にはケズリ残しが目立つ。胎土はIc。

ⅢAⅡ (120) の口縁端部は上方に突出し，外傾する面をなす。c／e手法で，胎土はⅡdi少。見込の一部に煤が付着。

高杯 (121～123) のうち (122・123) は脚部片である。(121) はゆるやかに外方に立ち上がる口縁部からなり，端部は外反して丸くおわる。杯部内面は斜放射状暗文を施す。脚部の断面はほぼ円形で，杯部との接合部にはオサエの痕，脚部内面にはしぼり痕を残す。胎土はⅡaiii普。7世紀のもので混入。(122) は断面七角形を呈する。芯棒巻き付け技法。胎土はIci・ii少で，断面縞目状を呈す。(123) は断面八角形で，胎土はIbi・ii少。

甕AⅢ (124) の口縁部はやや小さく折れ曲がる。端部は上方につまみ上げ，端部は凹線のある外傾面をなす。体部外面の調整は複数方向のハケメ，内面上半にはヨコナデを，下半にはハケメを加える。胎土はIdii少。外面ほぼ全体に煤が付着。

須恵器には杯A，杯B蓋，壺がある。

壺（125～127）は口縁部片で，（125，126）は口縁端部が外反し，端部上端が突出して直立する端面をなす。Ⅲ類。（127）は頸部片で，内外面ともロクロ目を残す。Ⅳ類。

C　SR 0001（東西部）出土土器（図版 35・106・108）

樋口小路を西流し，樋口小路と馬代小路の交差点で折れ曲がり，馬代小路を南流する。埋土は間層を含めると 24 層確認した。それらを分析し，また遺物の接合関係から判断した結果，3層に大別した。総個体数 163 点あり，SR 4200 同様東西部と南北部の出土傾向が異なることから，東西部と南北部に分別する。なお樋口小路と馬代小路の交差点のものは遺物の接合関係から，南北部に含めた。ここからは 52 点出土し，遺構中 31.9%と約 1/3 を占める。

1　第1層

総個体数 25 点のうち，土師器8点（32.0%），黒色土器2点（8.0%），須恵器3点（12.0%），緑釉陶器6点（24.0%），灰釉陶器1点（4.0%），中国製陶磁器4点（16.0%）などがあり，古墳時代の須恵器1点が混入する。土師器はやや多いが，全個体数の 1/3 強を占めるに過ぎず，ついで緑釉陶器が目立つ。

土師器は，杯A，皿A，皿N，高杯，甕Aがあり，食膳具が6割強を占める。

皿A（128）は低い器形で，口縁は「て」の字状に屈曲し，口縁端部は強く上方につまみ上げる。e手法。胎土はIdで，粒子の大きな含有物を含む。

皿Ⅱ（129）は直立気味に立ち上がる口縁部からなり，端部はやや外反し丸くおわる。二段ナデ手法，見込は一定方向のナデし，底部は歪みがみられる。胎土はⅡdi少。

須恵器には，皿A，鉢，壺がある。

鉢D（130）は，口縁部を欠く破片であるが，平底にやや肩の張る体部からなる。内外面ともロクロナデをするが，内面にはそれに加えて粗い斜め方向のナデをおこなう。底部外面は糸切り痕をとどめる。内面に煤が付着。Io類。

壺（131）は直線的に外方に開く体部で，底部外面は回転糸切りののち粗いナデを施す。断面台形でやや外側に張り出す幅の狭い小さな高台がつく。Ⅵ類。

緑釉陶器には，椀，皿がある。

椀（132・133）は底部片で，（132）は内湾気味に立ち上がる口縁部からなる。底部内面には一条の凹線が巡る。高台Eであるが，細長く，端面内側に段を有する。底部外面はヘラケズリし，未施釉で，それ以外は濃緑色の釉が施される。胎土は青灰色を呈す。近江系。（133）は高台C。京都産。

灰釉陶器は，椀の破片だけにとどまる。

中国陶磁器には，越州窯系青磁，黒釉陶器がある。越州窯系青磁は椀がある。（134）の口縁部は直線的に開き，端部は丸くおわる。オリーブ色の薄い釉がみられる。（135）は底部片で低くて小さな削り出しの台高台がつく。底部外面には目跡がみられる。オリーブ茶色の薄い釉を全面に施す。

黒釉陶器（136）は，瓶の底部片である。底部外面には目跡がみられ，体部下半から底部にかけ

第3表　SR 0001　東西第2層

土師器					
形態	器形	法量区分	手法	個体数	
食膳具	杯A	Ⅰ	-	-	0(0%)
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	-	
	杯B	Ⅰ	-	-	0(0%)
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	-	
	杯B蓋	Ⅰ	-	-	0(0%)
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	-	
	Ⅲ A	Ⅰ	-	-	1(25%)
		Ⅱ	-	1	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	-	
	椀A	Ⅰ	-	-	0(0%)
		Ⅰ'	-	-	
		Ⅱ	-	-	
		不明	-	-	
	高杯	-	-	3	3(75%)
	小計			4(44.4%)	
貯蔵具	壺	B	-	4	5(100%)
		C	-	-	
		E	-	-	
		不明	-	1	
	小計			5(55.6%)	
煮沸具	甕A	Ⅰ	-	-	0(0%)
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	-	
		Ⅳ	-	-	
		Ⅴ	-	-	
		不明	-	-	
	小計			0(0%)	
合計				9(14.1%)	

緑釉陶器		
形態	器形	個体数
食膳具	椀	2(25%)
	Ⅲ	4(50%)
	不明	2(25%)
	小計	8(100%)
貯蔵具	-	0(0%)
	小計	0(0%)
合計		8(12.5%)

灰釉陶器		
形態	器形	個体数
食膳具	椀	4(36.4%)
	Ⅲ	3(27.3%)
	手付瓶	1(9.1%)
	不明	3(27.3%)
	小計	11(61.1%)
貯蔵具	壺	5(71.4%)
	平瓶	1(14.3%)
	鳥組壺	1(14.3%)
	小計	7(38.9%)
合計		18(28.1%)

須恵器				
形態	器形	法量区分	個体数	
食膳具	杯A	Ⅰ深	-	2(22.2%)
		Ⅰ浅	-	
		Ⅱ深	2	
		Ⅱ浅	-	
		Ⅲ	-	
		不明	-	
	杯B	Ⅰ	-	3(33.3%)
		Ⅱ	3	
		Ⅲ	-	
		Ⅳ	-	
		Ⅴ	-	
		不明	-	
	杯B蓋	Ⅰ	-	1(11.1%)
		Ⅰ～Ⅱ	-	
		Ⅱ高	1	
		Ⅱ低	-	
		Ⅲ	-	
		Ⅲ高	-	
		Ⅲ低	-	
		Ⅳ	-	
		不明	-	
	Ⅲ A	Ⅰ	-	1(11.1%)
		Ⅱ	1	
		Ⅲ	-	
		不明	-	
	鉢	-	1	1(11.1%)
	その他	-	1	1(11.1%)
	小計		9(42.9%)	
貯蔵具	壺	A	-	8(66.7%)
		B	-	
		G	-	
		L	3	
		M	2	
		不明	3	
	甕	-	3	3(25%)
	不明	-	1	1(8.3%)
	小計		12(57.1%)	
合計			21(32.8%)	

黒色土器		
形態	器形	個体数
食膳具	杯A	0(0%)
	杯B	0(0%)
	不明	1(100%)
	小計	1(100%)
その他	-	0(0%)
合計		1(1.6%)

その他			
	形態		個体数
中国陶磁器	青磁		3(100%)
弥生～古墳	土器	甕	1(25%)
	須恵器		2(50%)
	埴輪		1(25%)
	小計		4(100%)
合計			7(10.9%)

総個体数 64

て厚い釉が流れる。灰白色の良質の胎土である。

2　第2層

総個体数64点のうち，土師器9点（14.1%），黒色土器1点（1.6%），須恵器21点（32.8%），緑釉陶器8点（12.5%），灰釉陶器18点（28.1%），中国陶磁器3点（4.7%）で，古墳時代の土器が4点混入する。土師器が少ない反面，須恵器，灰釉陶器が約1/3ずつを占め，後者の比率が目立つ。

土師器には，ⅢA，高杯，壺がある。

ⅢAⅡ（137）は内湾気味に外方に立ち上がる口縁部からなり，口縁部上半で外反する。口縁部C形態。二段ナデ手法で，胎土はⅡcii多。

高杯（138・139）は脚部片で，（138）は断面七角形を呈する。芯棒巻き付け技法で，胎土はIdi少。（139）の脚部は，断面八角形を呈す。成形時の不手際か，穴が一部ふさがった状態となる。胎土はIdiii少で，断面縞目状を呈す。

須恵器には，杯A，杯B，杯B蓋，ⅢA，壺H，壺L，壺M，壺がある。

杯AⅡ（140・141）と考えられる底部片である。（140）の底部外面に墨書がみられる。判読はできない。（141）は，底部外面はヘラ切りののち部分的にナデを施し，それ以外はロクロナデをおこなう。底部内面は，かなり摩滅していることから，何らかの2次的な使用が考えられる。Ⅱ類。

壺（142）は底部片で，底部外面は糸切り未調整である。体部内面はロクロ水挽きで，外面はロクロナデをおこなう。Ⅵ類。

壺H（143）は体部が幾分外側に直線的に開いたのち，少し外反する口縁部からなる。端部は上方に突出する。内外面ともロクロナデし，薄い器壁となる。Io類。

壺L（144～146）は底部及び頸部片である。（144）は撥形に開く大きな高台がつき，底部外面は回転糸切り痕を残す。Ⅶ類。（145）はやや外反しながら開く口縁部からなる。内面はヨコナデする。外面に一部自然釉がみられる。Ⅳ類。（146）にはやや外方に開く高い高台がつき，底部外面は回転糸切りののちロクロナデを施す。Ⅴ類。

このほかE群で，胎土がI′類の壺L，E群で，頸部内面には絞り痕がみられるI′類の壺Mがある。

緑釉陶器椀（147）は高台Eで低い三角形を呈す。内外面とも粗くヘラミガキされ，薄い釉が底部外面以外に施される。近江系。

灰釉陶器には椀，皿，瓶，壺，蓋がある。胎土の分類に際しては平城宮発掘調査報告Ⅵ[7]に準じる。胎土には，1：灰白色を呈し水簸をおこなう極めて硬質なもの，2：淡灰色ないしは灰色を呈し，須恵器の胎土に準じるものがある。さらに1は色調と質から，白色が強く緻密なもの（a），灰色が強くあまり緻密でないもの（b），黄灰色を呈しやや粗い胎土のもの（c）に下位分類する。椀・皿の高台は，全て張り付け高台で，断面台形を呈し低いもの（高台a），断面三角形を呈し，やや高いもの（高台b），やや低いもの（高台c）に区分する。施釉は，内面のみ（施釉1），内面と口縁部外面のみ（施釉2），口縁部内外面のみ（施釉3）があり，基本的に施釉1・2は刷毛塗りで焼成時三叉トチンを使用し，3は浸し掛けで直接重ね焼きによる。以下この分類による。

手付瓶把手（148）片は，長方形の粘土板を弧状に張りつけたものである。

壺（149，150）は底部片である。（149）は端面が内傾する台形状の高台がつく。底部内面の際には水挽きによる目立った段がみられる。摩滅していることから二次的な堆積と考えられる。胎土は１ｂ（150）は撥形に開く大きく低い高台がつき，底部外面は回転ヘラ切り痕を残す。体部内面はロクロ水挽きで，外面はロクロヘラケズリする。体部の器壁は薄く，平滑である。底部外面にはヘラによる「一」の線刻がある。胎土は１ａ。

平瓶鳥紐蓋（151）があり，鳥形のみをとどめる。手ひねりで成形した中空のもので，外面は細かくヘラケズリしたのち，羽毛表現のための刻線を入れる。目は一重の竹管文で表現する。胎土は１ａで，灰オリーブ色の釉を施す。

このほか６世紀末～７世紀初頭の受け部が退化した須恵器杯身（152）が混入する。

３　第３層

総個体数７点のうち，土師器１点，須恵器３点，緑釉陶器２点，灰釉陶器１点あり，器種は分散する。

須恵器のうち，壺ＧはＡ群で，外面には薄く灰がかぶり，一部ビロード状に流れる。

灰釉陶器皿（153）は，低い器形で口縁部は直線的に外方に開き，端部は極端に外反する。高台ａで低い台形を呈する。底部外面はヘラ切りののち粗くロクロナデをおこなう。施釉１で，胎土１a。

Ｄ　ＳＲ0001北肩出土土器（図版35）

総個体数15点のうち，土師器２点，須恵器10点，緑釉陶器２点あり，古墳時代の土師器甕が１点混入する。須恵器が圧倒的多数を占め，貯蔵具がほとんどで，甕の比率が50.0％と高い。

須恵器壺Ｍ（154）は，Ｅ群でＩo類。

Ｅ　ＳＲ0001（南北部）出土土器（図版35・106・108，第26図）

１　第１層

総個体数７点のうち，黒色土器２点，須恵器２点，緑釉陶器１点，灰釉陶器２点がある。

２　第２層

総個体数20点のうち，土師器２点（10.0％），黒色土器２点（10.0％），須恵器12点（60.0％），緑釉陶器４点（20.0％）と，須恵器が２／３近くを占める。土師器・黒色土器が少なく，灰釉陶器は認められない。

土師器は，皿Ａ，高杯がある。

皿ＡⅡ（155）の口縁端部はＢ形態で，端部外側に面をなす。ｃ手法で，胎土はＩｄｉ少。

須恵器には，杯Ａ，杯Ｂ，皿Ａ，鉢，壺Ｌ，壺Ｍなどがあり，食膳具が75.0％を占める。

杯ＢⅢ（156）はやや丸みのある底部にほぼ直線的に立ち上がる口縁からなり，端部は丸くおわる。底部外面は回転ヘラ切りを丁寧におこない，底部と口縁部の境が明瞭に稜をなす。それ以外はロクロナデをおこない，器面が平滑である。高台は底部外端よりやや内側につき，撥形を呈した台形で，外端部が上がり端面は外傾する。Ⅲ類。

椀（157）は口縁部上半を欠き，平底に内湾する口縁部がつく。高台は円盤状に削りだした切り高台を呈す。底部外面はヘラ切りで，それ以外はロクロナデを施す。Ⅱ類。

盤（158）は，平底に斜め上方に直線的に開く体部からなる。口縁端部は外傾し，内端部は上方にわずかに突出する。底部外面はヘラケズリし，それ以外の内外面はロクロナデする。Ⅴ類。

壺L（159）は卵形状の体部片で，底部外面は糸切り未調整である。体部内面はロクロ水挽きで外面はロクロナデをおこなう。やや高い台形の高台がつく。Ⅴ類。

壺M（160）は底部片で，H群。胎土はⅠo類。

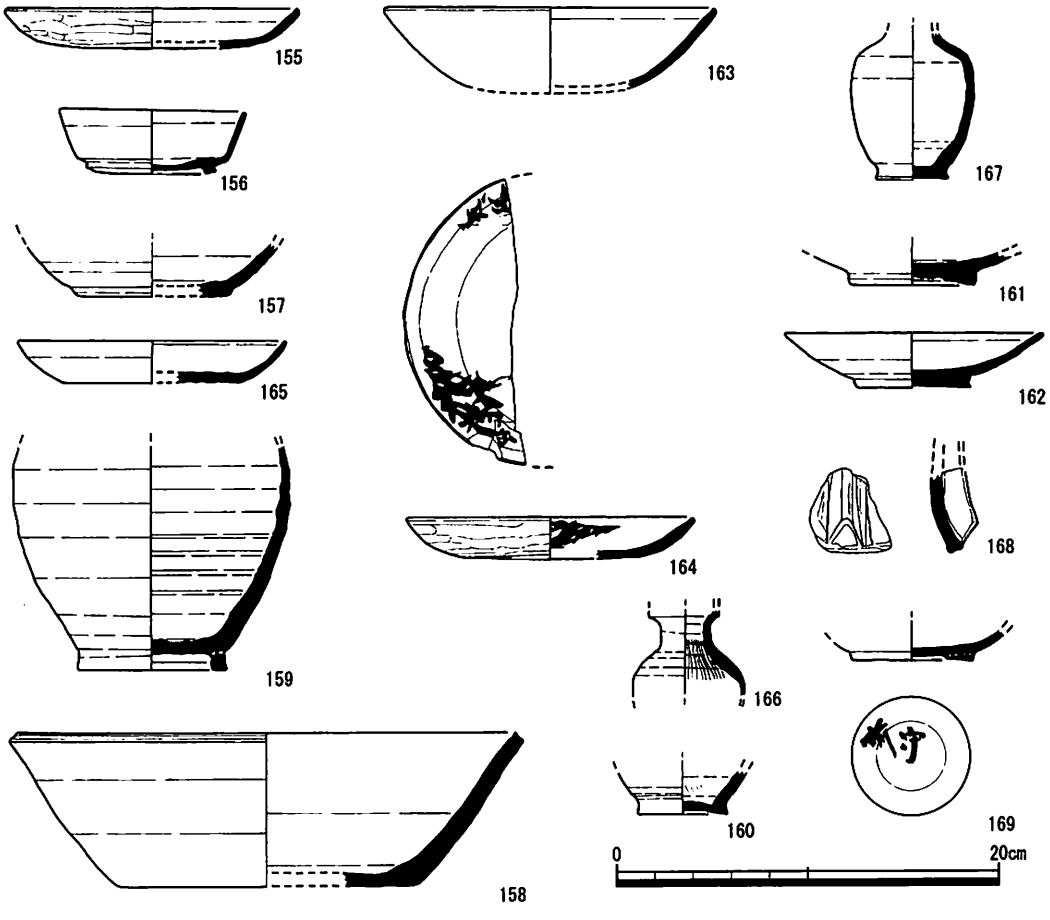
緑釉陶器椀（161）は底部片で，高台C。全面施釉。硬陶で京都産。皿（162）は浅い体部に高台がつき，高台Aで，口縁端部は直線的で丸くおわる。全面施釉。硬陶で京都産。

3　第3層

総出土数25点のうち，土師器6点（24.0%），黒色土器2点（8.0%），須恵器11点（44.0%），灰釉陶器5点（20.0%）などがあり，古墳時代の土器1点が混入する。須恵器が土師器より多く，総個体数の半数近くを占める。緑釉陶器はない。

杯AⅠ（163）は，直線的に開く口縁部からなる。口縁端部はB形態。C手法。内面は著しく剥離し，二次的な使用が考えられる。胎土はⅡbi少。

皿AⅡ（164）は内湾気味に立ち上がる口縁部からなる。口縁端部はE形態。C手法。ヘラケズ



第26図　SR0001　南北部出土土器実測図（1/4）

リの単位は長く丁寧である。胎土はＩｄｉ少。内面には多数の墨書があり，そのなかに「子」と判読できる文字がみられる。習字に使用されたと考えられる。

須恵器には皿，盤，平瓶，壺，甕があり，貯蔵具が圧倒的多数を占める。

皿ＡⅢ（165）は，平底に内湾する口縁部からなり，端部は丸くおわる。端部内面には一条の凹線が巡る。Ⅱ類。

壺M（166・167）があり，前者は上半部を残す。Ⅰ′類。後者はG群で胎土はⅠ′類。

なお器形不明であるが，突帯のつく脚部の破片と考えられるもの（168）が混入する。胎土はやや軟質で，焼成は瓦質を呈す。

灰釉陶器には，椀，皿などがある。

椀（169）は平底に内湾する口縁部からなり，底部外面はロクロヘラ切りで，口縁外面下半はロクロヘラケズリののち粗いロクロナデをおこない，内外面はロクロナデする。高台は低い蛇ノ目状を呈し，張り付けとなる。施釉１で，胎土１a。底部外面には「□守」の墨書が認められる。

F　条坊関連遺構出土土器（図版36・37・109）

1　ＳＤ655出土土器

総個体数59点のうち，土師器18点（30.5%），瓦器５点（8.5%），黒色土器１点（1.7%），須恵器17点（28.8%），緑釉陶器12点（20.3%），灰釉陶器６点（10.2%）などあり，土師器と須恵器の割合はほぼ同比率に近く，両者で全体の過半数を占める。

土師器には，杯Ａ，杯Ｂ，皿Ａ，高杯，甕Ａ・Ｂなどがあり，食膳具と煮沸具がほぼ二分する。

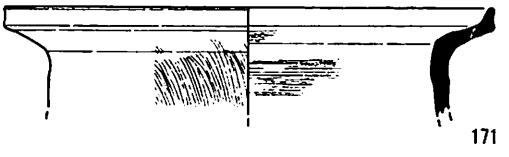
高杯（170）の脚部は，断面七角形を呈す。芯棒巻き付け技法。胎土はＩｄｉ少。

甕Ｂ（171）は長胴の体部に大きく折れ曲がる口縁部からなる。口縁端部は上方に大きくつまみ上げる。体部外面はナナメ方向の，内面は横方向のハケメを施す。口縁部はヨコナデ。胎土は，長石，石英，雲母を多く含み粗い。Ｉｃ多。外面は煤が付着。

このほか，口縁端部はＢ形態で外端に一部凹みのある杯ＡⅡがある。ｃ手法。胎土はＩｃｉ少。

黒色土器には杯Ａ（172）があり，炭素吸着による黒色化がなされていない。口縁部は外方に直線的開き，口縁端部は僅かに外反して丸くおわる。内面に比べ外面のヘラミガキは粗雑である。口縁部内面には連続渦巻き状の暗文を施す。胎土はやや粘性。

瓦器（173・174）は，樋口小路交差点寄りの第１・２層から出土する。（173）は，内湾しながら立ち上がる口縁部からなる。口縁端部内側には１条の凹線が巡る。内外面とも密にヘラミガキする。胎土は表面が灰白色で，断面漆黒化している。楠葉型。（173）は，小さい平底に内湾しながらやや外方に開く口縁部からなる。端部はやや端面を呈する。高台は断面三角形を呈し，高い。内外面ともやや太いヘラミガキを施すが，外面は粗い。胎土は灰色を呈し，雲母，黒色粒を少し含む。和泉型。


171

第27図　ＳＤ655　出土土器実測図（1/4）

須恵器には，杯Ａ，杯Ｂ，椀，壺Ｇ，壺Ｌ，壺Ｍ，壺，

第4表　ＳＤ655

土師器					
形態	器形	法量区分		個体数	
食膳具	杯A	Ⅰ	-	-	2(20%)
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	1	
		不明	-	1	
	杯B	Ⅰ	-	-	1(10%)
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	1	
	杯B蓋	Ⅰ	-	-	0(0%)
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	-	
	Ⅲ A	Ⅰ	e	1	6(60%)
		Ⅱ	e	2	
			-	1	
		不明	e	1	
			-	1	
	椀A	Ⅰ	-	-	0(0%)
		Ⅰ'	-	-	
		Ⅱ	-	-	
		不明	-	-	
	高杯	-	-	1	1(10%)
	小計			10(55.6%)	
貯蔵具	壺	B	-	-	0(0%)
		C	-	-	
		E	-	-	
		不明	-	-	
	小計			0(0%)	
煮沸具	甕A	Ⅰ	-	1	7(87.5%)
		Ⅱ	-	3	
		Ⅲ	-	1	
		Ⅳ	-	1	
		Ⅴ	-	-	
		不明	-	1	
	甕B	Ⅱ	-	1	1(12.5%)
	小計			8(44.4%)	
合計				18(30.5%)	

黒色土器		
形態	器形	個体数
食膳具	杯A	0(0%)
	杯B	0(0%)
	不明	1(100%)
	小計	1(100%)
その他	不明(瓦器)	5(100%)
合計		6(10.2%)

灰釉陶器		
形態	器形	個体数
食膳具	椀	0(0%)
	皿	1(33.3%)
	耳皿	2(66.7%)
	小計	3(50%)
貯蔵具	広口短頸壺	2(66.7%)
	壺	1(33.3%)
	小計	3(50%)
合計		6(10.2%)

須恵器				
形態	器形	法量区分		個体数
食膳具	杯A	Ⅰ深	-	4(50%)
		Ⅰ浅	-	
		Ⅱ深	-	
		Ⅱ浅	2	
		Ⅲ	2	
		不明	-	
	杯B	Ⅰ	-	3(37.5%)
		Ⅱ	1	
		Ⅲ	1	
		Ⅳ	-	
		Ⅴ	-	
		不明	1	
	杯B蓋	Ⅰ	-	0(0%)
		Ⅰ～Ⅱ	-	
		Ⅱ高	-	
		Ⅱ低	-	
		Ⅲ	-	
		Ⅲ高	-	
		Ⅲ低	-	
		Ⅳ	-	
		不明	-	
	稜椀	-	1	1(12.5%)
	Ⅲ A	Ⅰ	-	0(0%)
		Ⅱ	-	
		Ⅲ	-	
		不明	-	
	鉢	-	-	0(0%)
	不明	-	-	0(0%)
	小計			8(47.1%)
貯蔵具	壺	A	-	8(88.9%)
		B	-	
		G	1	
		L	5	
		M	1	
		不明	1	
	甕	B	1	1(11.1%)
	不明	-	-	0(0%)
	小計			9(52.9%)
合計				17(28.8%)

緑釉陶器		
形態	器形	個体数
食膳具	Ⅲ	3(33.3%)
	不明(輪花)	6(66.7%)
	小計	9(75%)
貯蔵具	不明	3(100%)
	小計	3(25%)
合計		12(20.3%)

その他		
	形態	個体数
中国陶磁器	-	0(0%)
弥生～古墳	土器	0(0%)
	須恵器	0(0%)
	小計	0(0%)
合計		0(0%)

総個体数 59

甕があり，貯蔵具が半数以上を占め，小型の壺類が目立つ。

杯A（175・176）のうち（175）は底部に少し丸みがあり，口縁部は斜めに直線的に開く。端部は小さく外反する。（176）の底部は平坦で，口縁部は同様に直線的であるが，端部はそのまま丸くおわるなど，違いがみられる。両者とも底部外面はヘラ切りののち部分的にナデを施し，それ以外はロクロナデする。Ⅱ類。

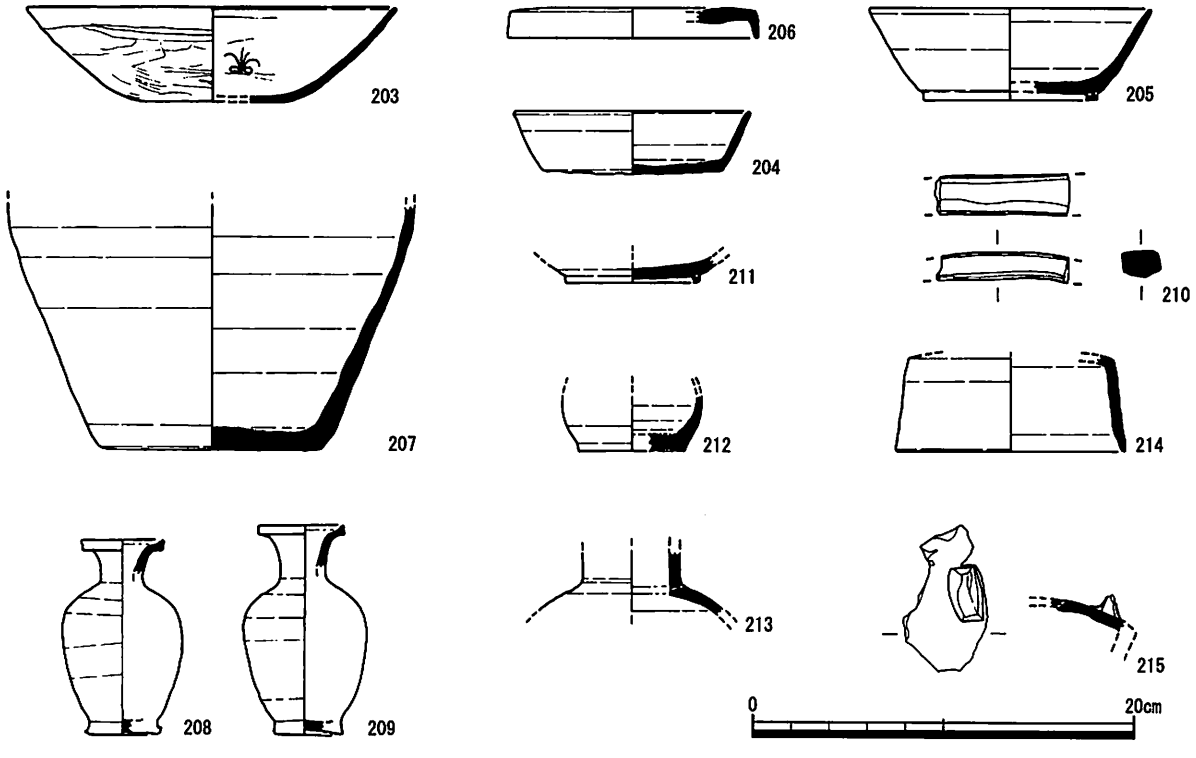
杯B（177・178）は口縁部上半を欠くが，外方に直線的に開く。底部外面はヘラ切りののちナデを施す。それ以外はロクロナデし，器面は平滑である。高台はやや小さな断面台形を呈し，底部外端につく。（177）は全体に器壁が薄く，高台も少し逆台形を呈す。Ⅶ類に類似。（178）はⅢ類。

椀（179）は丸みのある底部にやや外方に開く口縁部からなる。底部外面はロクロヘラケズリし，それ以外はロクロナデする。高台は撥形を呈し，細くて高い。Ⅲ類。

壺G（180）はほぼ完形で，なで肩の体部にほぼまっすぐ立ち上がる口頸部からなり，口縁端部はやや外反する。口縁部径は体部最大径よりやや小さい。長岡京期のもの比べ，体部長が短く，口頸部長との差が縮まっている。A群。

壺M（181）はG群で，胎土はⅠ₀類。

壺L（182～185）は，いずれも体部下半の破片である。（182）は底部外面ロクロヘラ切りのち粗いナデし，体部外面はロクロケズリする。高台はやや角張った台形である。Ⅰ₀類。（183）は底部外面糸切りで，体部外面はロクロケズリののちロクロナデする。高台は四角い台形を呈す。Ⅱ類。（184）は底部外面糸切りで，部分的にナデし，体部外面はロクロケズリする。Ⅳ類。（185）は底部外面ロクロナデし，内面は板状工具によりロクロ目をオサエののち，一定方向のナデを加える。高



第28図　SD658出土土器実測図（1/4）

台は外側に開くやや長い四角形を呈し，内端部がやや上がり，内傾気味である。底部外面に「一」と線刻する。Ⅳ類。

壺（186・187）は口縁部と体部の破片である。（186）は口縁部がやや外反する口頸部からなる。口縁端部は外傾する端面を有する。内外面とも自然釉がみられるが，２次的な火を受けたのか器面が荒れている。Ⅴ類。（187）は長胴の体部で，内外面ともロクロナデをし，平滑である。体部下端はやや強いヨコナデを施し，円盤高台状を呈す。底部外面は糸切り痕をとどめる。Ⅰo類。

甕（188）は口縁部のみの破片で，口縁部はやや外反し，端部は平坦面を有する。口縁部中位には，粘土紐の継ぎ目痕が観察される。Ⅰo類に共通するが，全体に灰色味が強い。

緑釉陶器には，椀，皿，瓶などがある。椀（189～193）は底部片で，高台Ａ（190・191），高台Ｂ（189），高台Ｄ（192・193）がみられる。（190）が軟陶である以外は，硬陶。京都産。

皿（194・195）も底部片で，高台Ａで硬陶。京都産。

灰釉陶器には皿，耳皿，長頸壺，短頸壺，同蓋がある。

皿（196）は，低い器形で口縁部は直線的に外方に開き，端部は丸くおわる。高台ｂで，底部外面は回転ヘラ切りののち粗くロクロナデをおこなう。施釉３で，胎土は１ｂ。

耳皿（197）は，口縁の両端を内側に折り曲げ，上端を波形に仕上げる。高台はややいびつになっているが高台ａ。施釉１で，胎土は１ｃ。

長頸壺（198）は，扁平な台形の高台がつく。体部外面はロクロケズリを施す。底部よりやや上位で，粘土紐の継ぎ目痕がみられる。胎土は１ａ。壺蓋（199）は，宝珠つまみを残す。胎土は１ｂ。

２　ＳＤ656出土土器

総個体数16点のうち，土師器４点（25％），黒色土器２点（12.5％），須恵器８点（50％），灰釉陶器２点（12.5％）があり，須恵器が半数を占める。

土師器は，杯Ａ，高杯，甕があり，食膳具が大部分を占める。

杯ＡⅠ（200）は内湾気味に立ち上がる口縁部からなり，口縁端部はＢ形態。ｃ手法で，胎土はⅡｄｉ少。

須恵器には，杯Ａ，杯Ｂ，椀Ａ，壺Ｇ，平瓶，壺などがあり，食膳具が５点（62.5％）と半数以上を占める。

椀Ａ（201）は平底で筒形を呈す。口縁端部はほんの少し外反する。底部内口縁部内外面にロクロナデし，底部外面には糸切り痕をとどめる。底部内面中央にはオサエを加える。器面は平滑で薄い。Ⅲ類。

杯Ｂ（202）は口縁部がやや外方に直線的に伸び，端部は丸くおわる。底部外面はロクロヘラ切りのあと粗いナデをおこなう。底部内面もロクロナデのあとに一定方向のナデを加える。高台は低い台高台を呈し，底部外端より少し内側につける。Ⅱ類。

このほか平瓶の把手があり，各面ごとにヘラケズリし，上面，側面，屈曲部に自然釉がみられる。Ⅶ類。

３　ＳＤ657出土土器

須恵器杯ＢⅡ蓋１点だけが出土する。

4　ＳＤ658出土土器（第28図）

総個体数25点のうち，土師器１点（4.0%），黒色土器１点（4.0%），須恵器11点（44%），緑釉陶器２点（8.0%），灰釉陶器８点（32%）がある。古墳時代の須恵器２点（8.0%）が混入し，土師器が極めて少なく，須恵器が半数近くを占める。

黒色土器には杯Ａ（203）があり，やや深い器形で，直線的に外方に開く口縁部からなる。口縁部外面はヘラケズリする。内面に小さな螺旋状の暗文を施す。Ａ類。胎土はやや砂質。口縁部と底部に部分的に煤が付着。

須恵器には，杯Ａ，杯Ｂ，杯Ｂ蓋，壺Ｍ，壺，平瓶などがあり，食膳具５点（45.5%），貯蔵具６点（54.5%）とほぼ二分する。そのなかで小型の壺類が目立ち，杯Ｂ蓋がこれに次ぐ。

杯Ａ（204）は平らな底部に直線的にやや外方に開く口縁部からなる。端部は丸くおわる。底部外面にはヘラ切りののち粗いナデを施す。Ⅸ類。

杯Ｂ（205）の口縁部は外方直線的に開く。底部外面はヘラ切りののちナデを施す。それ以外はロクロナデし，器面は平滑である。高台はやや小さな断面台形を呈し，底部外端につく。Ⅴ類。

壺蓋（206）は，平らな頂部に直角に折れ曲がる深い縁部からなる。端部は丸くおわる。Ⅳ類。

壺Ｎ（207）平底で斜め上方に立ち上がる体部からなる。外面にはロクロヘラケズリする。Ⅸ類に類似。

壺Ｍ（208，209）は両方ともほぼ完形で，Ｇ群。（208）はⅡ類，（209）はⅠ′類。

平瓶（210）は把手のみで，各面ごとにヘラケズリする。上面に自然釉がみられる。Ⅵ類。

灰釉陶器には，食膳具と貯蔵具が二分するが，瓶が目立つ。

椀（211）の底部外面はロクロヘラ切りでののちロクロナデを施す。高台ａ。施釉１。胎土１ａ。

瓶（212）は平底に下ぶくれの体部に細い口縁部がつくと思われる。全体をロクロ水挽きし，外面にロクロナデを施す。体部下端の底部境だけにヘラケズリし，円盤状の高台状を呈する。底部外面は糸切り痕をとどめる。胎土１ｂ。

壺（213）は口縁部の破片で，内面はロクロナデし，痕跡は不明であるが体部外面下位に１条の凹線が巡ることから，３段構成の可能性がある。胎土１ａ。

蓋（214）は平らな頂部に垂直に折れ曲がる長い縁部からなり，端部は丸くおわる。内外面ロクロナデする。外面にのみ施釉し，胎土は１ｂ。食膳具にはこのほか皿があり，低い器形で口縁部は直線的に外方に開き，端部はやや外反する。底部外面はヘラ切りののち粗くロクロナデをおこなう。高台ａ。施釉１で，やや灰色味の強い胎土１ａ。

このほか平瓶の把手取り付き部片（215）がある。胎土１ｂ。

5　ＳＤ663出土土器

総個体数98点の内訳は，土師器36点（36.7%），黒色土器８点（8.2%），須恵器21点（21.4%），緑釉陶器25点（25.5%），灰釉陶器６点（6.2%）であり，古墳時代の土器２点が混入し，土師器が３分の１強を占め，須恵器，緑釉陶器がこれに次ぐ。緑釉陶器の量が目立つ。

土師器には，杯A，杯B，皿A，椀A，高杯，鉢，甕Aなどがある。

杯AⅠ（216）は大きく開く口縁部からなる。e－c手法で，口縁端部はB形態。胎土はⅡdi少。内面の一部に煤が付着。

杯AⅡ（217・218）はe－c手法で，胎土はⅡdi少。（217）の口縁端部は内側にわずかに突出する。内面には墨痕，外面の一部には煤が付着。（218）は外側にわずかに肥厚する。

杯BⅠ（219）の底部外端部には断面逆台形の高台がつく。調整はe－c手法で，口縁端部はB形態。胎土はⅡdi多。

椀AⅠ（220）はc手法で，口縁端部はC形態。胎土はⅡdで，やや大粒の含有物が目立つ。

杯（221）は平底で体部は直線的に立ち上がる。ヘラ切り未調整。胎土はⅢbで，断面縞目状となる。ロクロ土師器。

盤（222）はやや丸みのある平底に，ほぼまっすぐに外上方へ開く口縁部からなる。外面は下から上への縦方向のヘラケズリし，底部付近は横方向のヘラケズリで，底部にもヘラケズリを施す。内面はヨコナデする。胎土はⅢbi少。

黒色土器は，杯A，皿，甕がある。

杯A（223）は口縁部内面にはハケ状工具によるナデを施す。胎土は粉性。外面に部分的に煤が付着する。皿（224）は撥型に開く細長い高台がつく。外面の摩滅が激しい。胎土は粉性。（225）は底部のみで，断面三角形の高台をつける。底部内面は緻密で丁寧な一定方向のヘラミガキを施す。胎土は砂質。底部外面には十字の線刻がある。甕（226）は球形の体部に，外上方へ開く口縁部からなる。口縁端部外方へわずかに肥厚する。内面のヘラミガキは粗くハケメを残す。胎土は砂質。いずれもA類。

須恵器には，杯A，杯B，杯B蓋，壺L，壺M，壺，平瓶，甕があり，食膳具が4割強を占める。

杯B（227～229）は口縁部がやや外方に直線的に伸び，端部は丸くおわる。（227）は，器形の特徴，高台の形状と付き方，調整手法，胎土の特徴など，SR 0001上層出土の杯B（156）と共通する。Ⅲ類。（228・229）は，口縁がやや外方に開き，端部は丸くおわる。底部外面はロクロヘラ切りののち粗いナデをおこなう。底部内面もロクロナデののちに一定方向のナデを加える。高台は低い台高台を呈し，底部外端より少し内側につける。Ⅱ類。

杯B蓋（230）は，平坦な頂部に屈曲する縁部を呈する。頂部外面はヘラ切りのあと中央部のみオサエをし，縁部と内面はロクロナデする。長石を微量に含む砂質で，やや暗い灰色を呈する。分類外。短頸壺（231，232）は体部片である。（231）は長胴と考えられるもので，摩滅が著しく観察が困難である。底部が比較的薄い特徴を有する。I_1類。（232）は丸い体部に直立する口縁がつく，いわゆる薬壺である。底部外面には，端面が内側に窪む大きな台高台である。体部内面はロクロ目が残り，肩部下位から口頸部にかけてはロクロナデ，下位から底部にかけてはロクロケズリをおこなうが，下半はロクロナデを加える。Ⅸ類。

長頸壺（233）は底部片である。底部外面はロクロヘラ切りのままで，底部内面はロクロ目を調整するために板状工具でオサエたのち，不定方向にナデをおこなう。このような調整は，SD 655

第5表　SD 663

土師器					
形態	器形	法量区分	手法	個体数	
食膳具	杯A	Ⅰ	e-c	1	5(15.6%)
		Ⅱ	e-c	3	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	1	
	杯B	Ⅰ	e-c	1	1(3.1%)
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	-	
	杯B蓋	Ⅰ	-	-	0(0%)
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	-	
	Ⅲ A	Ⅰ	c'	1	8(25%)
		Ⅱ	c-e	2	
			c	3	
			e	1	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	1	
	椀A	Ⅰ	e	1	5(15.6%)
			c'	1	
			c?	1	
		Ⅰ'	e-c	1	
		Ⅱ	-	-	
		不明	-	1	
	高杯	-	-	13	13(40.7%)
	小計			32(88.9%)	
貯蔵具	壺	B	-	-	1(100%)
		C	-	-	
		E	-	-	
	小鉢	不明	-	1	
	小計			1(2.8%)	
煮沸具	甕A	Ⅰ	-	-	3(100%)
		Ⅱ	-	1	
		Ⅲ	-	-	
		Ⅳ	-	1	
		Ⅴ	-	-	
	竈	不明	-	1	
	小計			3(8.3%)	
合計				36(36.7%)	

須恵器				
形態	器形	法量区分	個体数	
食膳具	杯A	Ⅰ深	-	2(22.2%)
		Ⅰ浅	-	
		Ⅱ	1	
		Ⅲ	-	
		不明	1	
	杯B	Ⅰ	-	6(66.7%)
		Ⅱ	1	
		Ⅲ	3	
		Ⅳ	1	
		Ⅴ	-	
		不明	1	
	杯B蓋	Ⅰ	-	1(11.1%)
		Ⅰ～Ⅱ	-	
		Ⅱ高	-	
		Ⅱ低	-	
		Ⅲ	-	
		Ⅲ高	-	
		Ⅲ低	-	
		Ⅳ	1	
		不明	-	
	Ⅲ A	Ⅰ	-	0(0%)
		Ⅱ	-	
		Ⅲ	-	
		不明	-	
	鉢	-	-	0(0%)
	不明	-	-	0(0%)
	小計			9(42.9%)
貯蔵具	壺	A	1	7(58.3%)
		B	-	
		G	-	
		L	2	
		M	2	
		不明	2	
	甕	-	2	2(16.7%)
	平瓶	-	3	3(25%)
	小計			12(57.1%)
合計				21(21.4%)

黒色土器		
形態	器形	個体数
食膳具	杯A	1(20%)
	Ⅲ	4(80%)
	小計	7(83.3%)
その他	甕	1(100%)
	小計	1(16.7%)
合計		8(8.2%)

灰釉陶器		
形態	器形	個体数
食膳具	椀	4(66.7%)
	Ⅲ	2(33.3%)
	小計	6(100%)
貯蔵具	-	0(0%)
	小計	0(0%)
合計		6(6.2%)

緑釉陶器		
形態	器形	個体数
食膳具	椀	14(60.9%)
	Ⅲ	5(21.7%)
	耳Ⅲ	1(4.3%)
	不明	3(13.1%)
	小計	23(92%)
貯蔵具	壺	2(100%)
	小計	2(8%)
合計		25(25.5%)

その他			
	形態		個体数
中国陶磁器	-		0(0%)
弥生～古墳	土器	甑	1(50%)
	須恵器		1(50%)
	小計		2(100%)
合計			2(2%)

総個体数 98

壺（185）と共通する。高台は断面やや長細い台形を呈し，やや外傾する。Ⅳ類。

甕（234，235）は，口頸部である。（234）は小型で，口頸部は短く，直立気味に立ち上がる。口縁端部は平坦面を有する。体部上端内面に粘土紐継ぎ目痕と考えられる段がみられる。Ⅵ類に類似するが，断面赤褐色を呈さない。（235）はやや大振りの長い口縁部で，頸部接合部から直立して立ち上がり，上半から外反して，端部は上下にやや突出して，ほぼ直立する面をなす。体部外面には平行条の叩き，内面には同心円文が認められ，体部最上位の叩きは，時計方向の横叩きとなる。口縁部と体部の接合は二段構成のＡ２である。Ⅷ類。

なお７世紀代の杯身（236）がある。

緑釉陶器には椀，皿がある。椀（237～242）は大小２種があり，やや外方に開く口縁部で端部は小さく外反するものがある。高台はＡ・Ｂあり，Ｂは大型の（239）にみられる。京都産。皿（243）は浅い体部に高台のつき，口縁端部は外反する。高台Ａ。全面施釉する。京都産。

灰釉陶器には椀，皿がある。椀（244～246）は平底に内湾する口縁部からなり，端部は外反する。底部外面はロクロヘラ切りで，口縁外面下半はロクロヘラケズリのち粗いロクロナデをおこない，それ以外はロクロナデする。いずれも高台ａで，施釉１。胎土１ａ。皿（247）は低い器形で口縁部は直線的に外方に開き，端部はやや外反する。底部外面はヘラ切りののち粗くロクロナデをおこなう。高台ａ。施釉１で，胎土１ａ。

Ｇ　七町宅地内出土土器（図版 38～40・109～111）

１　ＳＤ 1902

土師器と緑釉陶器が１点ずつ出土する。

土師器皿ＡⅡ（248）は，丸底気味の底部にやや外方に開く口縁部からなる。口縁部上半で外反し端部は肥厚する。ｅ手法で，ユビオサエによる凹凸が目立つ。胎土はⅡｄｉ多。

緑釉陶器椀（249）は平底に内湾気味に斜めに開く口縁部からなり，端部は極端に外反する。内外面とも丁寧なヘラミガキを施す。やや外方に開く小さな高台Ｄで，全面施釉。尾張産。

２　ＳＤ 5409

宅地内を東西に二分する道路遺構に伴う東側溝である。溝の埋土から４層に分かれる。

ｉ北半

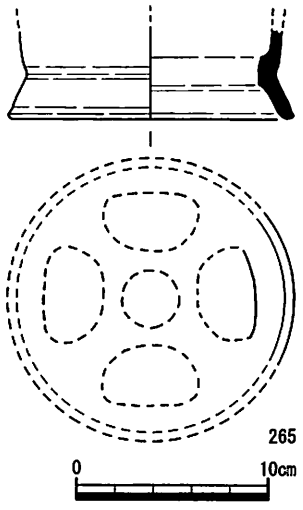
４点出土し，土師器が３点，須恵器１点がある。

土師器には，杯Ａ，高杯がある。

杯ＡⅢ（250）はやや上方に膨らむ底部に，直線的に開く口縁部からなる。口縁端部はＣ形態。ｅ手法で，胎土はＩｄｉ少。高杯（251）の脚部は，断面七角形を呈す。芯棒巻き付け技法で，胎土はＩｄ。

須恵器壺Ａ（252）は底部片で，平らな底部にやや斜めに立ち上がる体部からなる。底部外端には，長方形の高台がつく。胎土は非常に粘性にとみ，緻密。Ⅳ類。

ⅱ第１層



第29図　SK5409第4層出土土器実測図（1/4）

土師器5点，緑釉陶器5点，灰釉陶器1点がある。

土師器杯A（253）の口縁部ははやや直線的に開く。口縁端部はB形態。c手法で，胎土はIdi多。

緑釉陶器輪花椀（254）は，内面に花文を配す。硬陶。猿投産。

灰釉陶器椀（255）は，底部片で低い台高台がつく。施釉1，胎土1a。

iii第2層

総個体数19点のうち，土師器1点（5.3%），黒色土器1点（5.3%），須恵器6点（31.5%），緑釉陶器10点（52.6%），灰釉陶器1点（5.3%）と緑釉陶器が過半数を占める。

土師器甕Ⅲ（256）は，頸部で「く」の字状に外方へ折れ曲がる。口縁端部はA形態。巻き込みがやや強い。体部外面調整は無文叩き，内面は摩滅のため不明瞭。胎土はIdi多。第1層出土と接合する。

須恵器杯B蓋（257）は，つまみを欠く破片で，屈曲する縁部からなる。I′類。

緑釉陶器皿（258）は底部片で，低い高台Eがつく。内面に陰刻花文を配す。全面施釉。猿投産。

iv第3層

土師器1点（12.5%），須恵器4点（50.0%），緑釉陶器3点（37.5%）があり，そのうち須恵器が半数を占める。

土師器皿A（259）は，内湾気味に立ち上がる口縁部からなる。口縁端部はE形態。口縁部内面にナデによる凹みがみられる。c手法で，胎土はIc。

v第4層

総個体数15点のうち，土師器5点（33.3%），須恵器8点（53.3%），緑釉陶器1点（6.7%）あり，古墳時代の須恵器1点が混入し，須恵器が過半数を占める。

土師器には，椀A，皿A，高杯などがある。

椀AⅠ（260·261）がある。（260）は，口縁端部がC形態。c手法。胎土はⅡai少。（261）は，口縁端部B形態。e手法で，胎土はIdi少。口縁の一部に煤が付着。

皿AⅡ（262）は，口縁端部がC形態。c手法。胎土はⅡbi少で口縁部内面に一部煤が付着。

高杯（263）は断面七角形を呈す。芯棒巻き付け法。裾部外面へラミガキを施す。胎土はId である。このほか杯AⅡがあり，口縁端部C形態，c手法で，Iaがある。またこのほかにも高杯があり，胎土はIa。

須恵器甕A（264）は，丸い体部にやや外反する口縁からなり，口縁端部は外傾する面をなし，外端は少しつまみ出す。内外面とも丁寧なナデにより，叩き目や当て具痕はみられない。V類に類似。

緑釉陶器甑（265）は底部片で細長い長方形の高台がつく。底には楕円形の穴を穿つ。淡緑色の釉を外面に施す。軟陶。京都産か（第29図）。

3　ＳＤ 5412 第４層

宅地内を東西に二分する道路遺構に伴う西側溝である。

土師器２点（25％），須恵器６点（75％）がある。

土師器には杯ＡⅠ（266）があり，口縁端部はＢ形態。底部外面はヘラケズリするがそのほかは摩滅が激しく不明。胎土はＩｂｉ少。

須恵器には杯Ａ，杯Ｂ，壺Ａ，壺Ｍがあり，食膳具と貯蔵具が二分する。

杯Ｂ（267）は底部片で底部外端より僅かに内側に傾斜する台高台がつく。Ⅰ′類。

壺Ａ（268）は，平底に肩の張る体部からなる。底部外面は，外縁をヨコナデする以外はオサエによる凹凸をとどめ，内面にもオサエをする。体部外面には，ロクロケズリののちロクロナデし，内面はロクロ目を残す。Ⅲ類に類似。

4　ＳＤ 5587

土師器１点，須恵器３点，灰釉陶器１点がある。

須恵器には壺Ｋ，壺Ｇ，壺Ｍなどがある。

壺Ｇ（270）は体部片で，体部にロクロ目が残らず，丁寧な成形である。器壁も薄く，灰白色の精良な胎土で，体部外面には灰がかかる。胎土は分類外。壺Ｋ（271）は体部片で，底部から斜めに直線的に立ち上がり肩の張る体部からなる。底部外端には，やや外方に開く台高台がつく。Ⅲ類。壺Ｍ（269）は，Ｇ群。Ⅰ′類。壺Ｍ（272）は外反する口縁部片で，端部上端が上方に突出し，幅広の端面をなす。Ⅶ類に類似。

灰釉陶器には壺Ａ蓋（273）があり，平らな頂部に直角に折れ曲がる縁部からなり，端部は丸くおわる。胎土１ｂ。

5　ＳＫ 5586

総個体数 17 点のうち土師器が５点（29.4％），須恵器 12 点（70.6％）と，須恵器が多数を占める。

土師器には杯Ａ，ⅢＡ，壺，甕Ａがある。

ⅢＡⅠ（274）は，口縁端部Ａ形態で，端部が外傾する面を呈す。ｅ－ｃ手法で，胎土はⅡｄ。内面の一部に煤が付着。壺（275）の底部は円盤状を呈し，体部は外方に立ち上がる。外面は摩滅する。内面ロクロナデ。胎土は重量感があり，Ⅱｂ。やや大きな砂粒が目立つ。内面全体に漆が付着。

須恵器には杯Ｂ，杯Ｂ蓋，鉢，壺がある。

杯ＢⅡ（276，277）には浅いもの（277）と深いもの（276）がある。前者はⅢ類に類似。後者はⅨ類に類似。このほか杯ＢⅢのⅤ類のものもある。鉢（278）は平底で，直線的な体部からなり，肩の張りが小さく，少し外傾する短い口縁部からなる。小型。Ⅰ′類。壺には，壺Ｋの底部片(279)，非常に丁寧な成形の壺Ｍ（280）とがあり，前者はⅤ類，後者はⅠ′類。

6　ＳＤ 5406

総個体数５点のうち，土師器１点（20.0％），須恵器３点（60.0％），緑釉陶器１点（20.0％）であり，須恵器が過半数を占める。

須恵器には皿Ⅲ（281）がある。外反する口縁部片で，端部は丸くおわる。内外面はロクロナデされ，底部外面はヘラ切りののちナデをおこなう。灰白色を呈し，非常に密な胎土で，Ⅳ類に類似。

緑釉陶器（282）は，底部片である。底部は円盤に削り出したのち中央を円形に大きく抉り，断面が台形の高台Ｃを呈す。薄い釉を全面に施し，胎土は黄灰色で，京都産。

7　ＳＤ4071

宅地を北東から南西に流れるものである。土師器高杯１点，須恵器２点がある。

須恵器には杯Ｂ，杯蓋がある。杯Ｂ（283）は，口縁部が斜め上方に直線的に開き，端部は丸くおわる。高台はやや低い逆台形を呈す。内外面ロクロナデし，器面は平滑。Ｉo類。

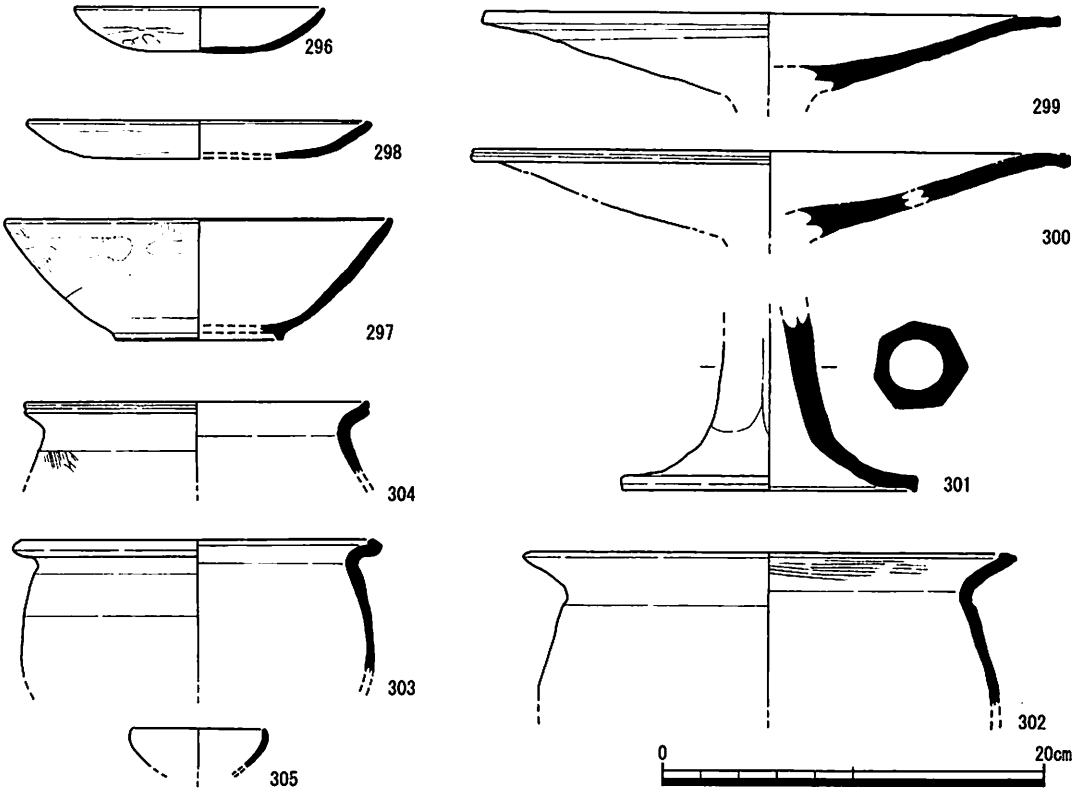
この他６世紀後半代の須恵器杯蓋（284）がある。半球形を呈し，口縁はやや直立気味で，端部は少し外反する。頂部外面はロクロヘラケズリされる。胎土は砂粒を含む砂質で，灰色を呈す。

8　ＳＤ2454

土師器杯ＡⅠ（285）があり，口縁端部はＢ形態。ｅ手法で，胎土はＩｄ。

9　ＳＤ5601

土師器に杯Ａ，皿Ｃがあるにすぎない。杯Ａ（286）は，底部と口縁部の屈曲が明瞭で，須恵器の杯に類似する。全体に摩滅が著しく調整は不明瞭であるが，ロクロ土師器と考えられる。胎土はＩｂ砂多。皿Ｃ（287）の口縁端部はＣ形態。外面は著しく摩滅する。内面はわずかにナデがみられる。胎土はＩｄ。



第30図　ＳＫ5429　出土土器実測図①（1/4）

10　ＳＤ5312

須恵器に，蓋，壺があるにすぎない。蓋（288）は扁平な頂部に折れ曲がる縁部からなる。Ⅰ′類に類似。壺Ｍ（289）はＧ群で，Ⅱ類。壺（290）は撥形に外側に肥厚する高台がつく。Ⅵ類。

11　ＳＥ3365

土師器５点，須恵器２点，灰釉陶器１点があり，古墳時代の土師器１点が混入する。

土師器には杯Ｂ，皿Ａがある。

杯ＢⅠ（291・292）の口縁端部は，外面の強いナデにより外反し，Ｂ形態。（291）は外傾形する面をもつ。底部外端よりやや内側に逆台形（291），三角形（292）の小さい高台がつく。ｅ－ｃ手法。（291）は見込付近に板ナデ痕を残す。内面に比べて外面の調整が粗い。胎土はⅠｄｉ少。

皿ＡⅡ（293）の口縁端部はＢ形態で，外側に一部凹線が巡る。ｅ手法で，底部内面に板ナデ痕を残す。胎土はⅠｂｉ少。

須恵器には杯，壺がある。

杯ＡⅢ（294）は平たい底部に直線的に開く口縁部からなる。器壁は非常に薄く，胎土は精良。Ⅸ類。壺Ｍ（295）は体部に自然釉の付着がみられる。Ｇ群，胎土はⅢ類。

12　ＳＫ5429（第30・31図）

総個体数58点のうち，土師器33点（56.9％），黒色土器５点（8.6％），須恵器13点（22.4％），緑釉陶器７点（12.1％）があり，土師器が過半数を占める。

土師器には，杯Ａ，杯Ｂ，皿Ａ，高杯，甕Ａなどがある。

杯ＡⅡ（296）の口縁端部はＣ形態。ｃ手法で，胎土はⅡｄ。

杯ＢⅡ（297）の口縁部は内湾気味に立ち上がる。口縁端部はＢ形態。逆台形の高台が底部外端につく。外面の調整はケズリのち上半に縦方向のハケ状の線条痕を所々残す。胎土はⅡｄ。外面の一部に煤が付着。

皿ＡⅡ（298）底部から口縁部へ丸みをもってゆるやかに開く。端部はＢ形態。ｅ－ｃ手法で，胎土はⅡｄ。口縁の数ヶ所に煤が付着。

高杯（299・300）は杯部片で，大きく外上方へ広がり，口縁部でゆるやかに外反し，水平に開く。端部は垂直に近い面をなし，上方につまみ上げる。外面の調整は中心から外方にケズリする。（299）の胎土はⅡｂｉ多。口縁の一部に煤が付着。（300）の端部外端面はわずかに凹みがある。内面はナデのち一部ハケメを加える。胎土はⅠｄ。（301）は脚部片で，断面七角形を呈する。裾部は外反して広がり，垂直気味の端面には少しに凹みがある。下端部は下方に突出する。裾部の調整は内外面ともヨコナデし，芯棒巻き付け技法。胎土はⅢｂｉ少。裾部外面に布片が付着する。

甕ＡⅡ（302）の口縁端部はＡ形態。体部は摩滅のため調整が不明瞭であるが，外面に一部叩き痕を残す。口縁部内面は叩き具によるヨコナデ。胎土はⅡｂｉ普。ＡⅢ（303）は大きく折れ曲がる短い口縁からなる。口縁端部はＡ形態。胎土はⅡｄｉ少。（304）体部は，「く」の字に折れ曲がる短い口縁部からなる。口縁端部はＦ形態。胎土はⅡｃ群。体部外面に煤が付着。

黒色土器には小型鉢（305）があり，鉄鉢形を呈す。胎土はやや砂質。Ａ類。

須恵器には，杯Ｂ，杯Ｂ蓋，鉢，壺がある。

杯蓋（306）は，器壁の薄い扁平な器形で，頂部につまみがつかず，直立する縁部からなる。頂部外面は丁寧なロクロヘラケズリ。Ｖ類に類似し，猿投産の製品の可能性がある。

杯Ｂ（307）は，少し斜め上方に直線的に伸びる口縁からなる。底部外縁には，やや扁平な逆台形の高台がつく。Ｉ$_0$群。

鉢（308）は，斜め上方に直線的に開く口縁部からなる。底部は平底で，回転糸切り痕をとどめ，口縁部下端には，ロクロケズリののちにナデを加える。口縁部内面には，下方からやや斜めにナデし，ロクロ目を残さない。Ｉ′類に類似。

壺には，壺Ａ（309）と底部片（310）とある。（309）はやや肩の張る球形状の体部からなる。高台は破損し形状は不明。底部外面はロクロヘラケズリし，底部内面外周は弧状にナデし，その内側はほぼ一定方向にナデする。Ⅲ類。（310）はＩ$_1$に類似。

甕（311）は体部から底部を残す。外面には横方向の叩きののち斜めに叩きを加える。内面の当て具痕は，ヨコナデを加えることにより，ほとんど消されている。Ⅲ類。

緑釉陶器には，小型椀（312）があり，高台Ａ。軟陶。京都産。

13　ＳＸ5403

土師器２点，緑釉陶器１点がある。

緑釉陶器の耳皿（313）があり，高台Ａ。硬陶。京都産。

14　ＳＫ3133

土師器，黒色土器が１点ずつ，須恵器２点がある。

土師器皿ＡⅡ（314）があり，底部はやや丸みをもち，口縁はやや外反し端部はＡ形態をなす。ｅ－ｃ手法で，胎土はⅡｄｉ少。口縁の一部に煤が付着。

黒色土器皿（315）があり，扁平な器形で，口縁部は大きく外方に開く。口縁端部は丸くおわる。内面はヘラミガキを施すが，外面は摩滅により不明瞭。胎土は砂質。焼成は良で幾分軟質である。内面に擦痕が数ヶ所確認できる。Ａ類。

須恵器杯Ｂ（316）は口縁部が斜め方向に直線的に開き，端部は丸くおわる。底部外面は回転ヘラ切りのあと粗いナデをおこなう。底部内面と口縁部内外面はロクロナデする。高台は断面台高台を呈し，底部外端近くにつく。器壁は平滑で薄い。Ⅵ類。

同杯Ｂ蓋（317）は，平坦な頂部に屈曲する縁部を呈す。頂部外面はヘラ切りのあとロクロナデし，内面はロクロナデ，縁部はヨコナデをおこなう。Ⅱ類。

15　ＳＫ5304・5431

土師器７点だけがあり，杯Ａ，杯Ｂ，杯Ｂ蓋，皿Ａ，椀Ａなどがある。

杯ＢⅡ（318）は小型で，外方に直線的に広がる口縁部からなる。口縁端部はＢ形態。逆台形の低い高台が底部外端部よりやや内側につく。ｅ－ｃ手法で，胎土はＩｄ。皿ＡⅡ（319）はやや外反気味に開く口縁部からなる。端部はＢ形態。ｅ手法で，胎土はＩｄ。見込と底部に煤が付着。ＳＫ5431出土。椀ＡⅠ（320～322）は，内湾気味に外方に開く口縁部からなる。（320）の口縁端部

はB形態で，端部はごく僅かに突出する。ｃ手法で，胎土はⅡｂｉ普である。(321) の口縁端部はC形態。ｅ手法で，胎土はⅡｄｉ多。(322) の口縁端部はC形態。ｅ－ｃ手法で，Ｉｄｉ少。口縁の一部に煤が付着。ＳＫ5304出土。

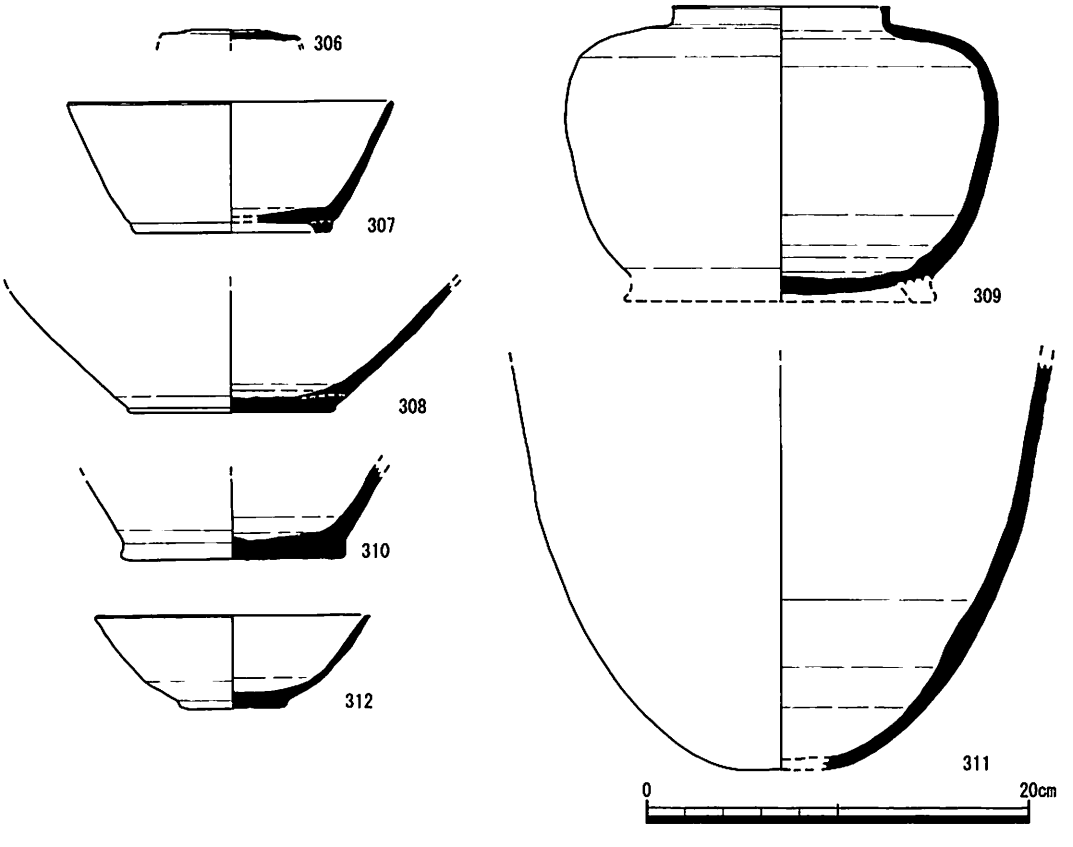
杯ＡⅡ (323) の口縁端部はＢ形態。器壁が薄い。ｅ－ｃ手法で，底部にはケズリによる当り痕が強く残る。胎土はＩｄ。杯Ｂ蓋Ⅲ (324) はつまみから天井部中央を欠く。胎土はＩｄｉ普。ＳＫ5431出土。

16　ＳＸ5301・5302及び周辺

須恵器には杯Ｂ蓋，壺，壺Ｇ，壺Ｍがある。

杯Ｂ蓋 (325・326) は，頂部中央が破損する。両者とも硯に転用される。(325) はＩ₀類で，ＳＸ5301出土。(326) はⅣ類に類似し，ＳＸ5302出土。双耳壺 (327) は耳の破片で，扁平な鰭形を呈し，中央付近に円孔を穿つ。ヘラで成形。Ⅳ類。ＳＸ5301出土。壺 (328) は口縁部だけの破片で，Ⅰ′類。ＳＸ5302。壺Ｇ (329) は体部を残す。全体に薄く成形。Ｄ群に類似。静岡県助宗窯の製品に特徴が共通する。ＳＲ4200西方付近の中世溝出土。壺Ｍ (330) は口縁部を欠けるが体部は完形。体部は球形に近く，外面のロクロ目をとどめる。体部外面には自然釉がかかる。Ｈ群。東四行北二門ＳＲ4200西肩付近の中世溝出土。

灰釉陶器椀 (331) は口縁端部が外反する。内面のみ施釉。　胎土１ａ。ＳＸ5302出土。



第31図　ＳＫ5429　出土土器実測図②（1/4）

第6表　S K5429

土師器					
形態	器形	法量区分	手法	個体数	
食膳具	杯A	Ⅰ	c'	1	7(29.2%)
		Ⅱ	-	2	
		Ⅲ	-	-	
		不明	c	1	
			e	1	
			e-c	1	
			c'	1	
	杯B	Ⅰ	-	-	2(8.3%)
		Ⅱ	c	1	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	1	
	杯B蓋	Ⅰ	-	-	1(4.2%)
		Ⅱ	-	1	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	-	
	Ⅲ A	Ⅰ	e-c	1	3(12.5%)
		Ⅱ	e-c	1	
			c	1	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	-	
	Ⅲ B	-	-	1	1(4.2%)
	椀A	Ⅰ	c/c'	1	1(4.2%)
		Ⅰ'	-	-	
		Ⅱ	-	-	
	高杯	-	-	7	7(29.2%)
	不明	-	-	2	2(8.3%)
	小計			24(72.3%)	
貯蔵具	壺	B	-	-	0(0%)
		C	-	-	
		E	-	-	
		不明	-	-	
	小計			0(0%)	
煮沸具	甕A	Ⅰ	-	-	8(88.9%)
		Ⅱ	-	1	
		Ⅲ	b	5	
		Ⅳ	c	2	
		Ⅴ	-	-	
		不明	-	-	
	竈	-	-	1	1(11.1%)
	小計			9(27.3%)	
合計				33(56.9%)	

黒色土器		
形態	器形	個体数
食膳具	杯A	0(0%)
	杯B	0(0%)
	鉄鉢	1(100%)
	小計	1(20%)
その他	甕	3(75%)
	小壺(瓦器)	1(25%)
	小計	4(80%)
合計		5(8.6%)

緑釉陶器		
形態	器形	個体数
食膳具	椀	6(85.7%)
	不明	1(14.3%)
	小計	0(0%)
貯蔵具	-	0(0%)
	-	0(0%)
	小計	0(0%)
合計		7(12.1%)

須恵器				
形態	器形	法量区分	個体数	
食膳具	杯A	Ⅰ深	-	0(0%)
		Ⅰ浅	-	
		Ⅱ深	-	
		Ⅱ浅	-	
		Ⅲ	-	
		不明	-	
	杯B	Ⅰ	-	2(22.2%)
		Ⅱ	1	
		Ⅲ	-	
		Ⅳ	-	
		Ⅴ	-	
		不明	1	
	杯B蓋	Ⅰ	1	2(22.2%)
		Ⅰ～Ⅱ	-	
		Ⅱ高	1	
		Ⅱ低	-	
		Ⅲ	-	
		Ⅲ	-	
		Ⅳ	-	
		不明	-	
	Ⅲ A	Ⅰ	-	0(0%)
		Ⅱ	-	
		Ⅲ	-	
		不明	-	
	鉢D	-	5	5(55.6%)
	不明	-	-	0(0%)
	小計		9(69.2%)	
貯蔵具	壺	A	1	3(75.0%)
		B	-	
		G	-	
		L	-	
		M	-	
		蓋	1	
		不明	1	
	甕	-	1	1(25.0%)
	不明	-	-	0(0%)
	小計		4(30.8%)	
合計			13(22.4%)	

灰釉陶器		
形態	器形	個体数
食膳具	杯蓋	0(0%)
	Ⅲ	0(0%)
	小計	0(0%)
貯蔵具	-	0(0%)
	-	0(0%)
	小計	0(0%)
合計		0(0%)

その他		
	形態	個体数
中国陶磁器	-	0(0%)
弥生～古墳	土器	0(0%)
	須恵器	0(0%)
	小計	0(0%)
合計		0(0%)

総個体数 58

17　その他

土師器には，杯A，杯B，皿A，高杯，甕などがある。

杯AⅠは3個体ある。(332・333) は，口縁端部がA形態。c手法で，胎土はⅡc。(333) は口縁部外面に煤が付着。旧河川上面の窪みから出土。(337) の口縁端部はC形態。c手法で，胎土はⅠd。口縁部内外面と底部内面に煤付着。SB21のP5539出土。

杯BⅠ (334) は1個体ある。口縁A形態。外面体部はケズリののちミガキを施す。高台は逆台形を呈す。胎土はⅠc。これ以外に口縁A形態で，外面体部はケズリののちミガキを施し，胎土はⅡcの杯BⅠが1点ある。旧流路上面の窪みから出土。

皿AⅡは4個体ある。(335・336) のうち (335) はc手法で，口縁端部は摩滅のため不明。胎土はⅡd。SD5579出土。(336) の口縁端部はB形態。e－c手法で，口縁部外面上半部を一部削り残す。胎土はⅠc。SD4185出土。(338) の口縁端部はC形態。b手法で，胎土はⅡb砂多。内面の一部と外面底部の広範囲に煤が付着。P5453出土。(339) の口縁端部はD形態。表面の剥離が非常に激しく調整は不明で，胎土はⅠbi少。SB24のP5557出土。

高杯 (340) の脚部は，断面七角形を呈す。胎土はⅠdi多で，P5455出土。

甕AⅣ (341・342・343) の口縁端部はA形態。外面に無文叩きののち軽いハケメを施す。(341) の頸部から口縁部にはハケメ痕を残す。胎土はⅠaで，他地域からの搬入品と考えられる。東四行北五門包含層出土。胎土がⅠd，(343) のみi少。口縁部の歪みは大きい。内外面とも煤が付着。東四行北二門包含層出土。

黒色土器杯A (344) は，平たい底部に内湾して立ち上がる口縁部からなる。口縁端部は丸くおわる。口縁部内面に連続螺旋暗文を施す。胎土は砂質で，やや硬質である。東四行北二門包含層出土。

須恵器には杯B，杯B蓋，椀，壺などがある。

杯BⅡ (345) は口縁部がやや外方に直線的に伸び，端部は丸くおわる。Ⅰ′類。P5453出土。杯B蓋Ⅰ(346)は平坦な頂部に屈曲する縁部を呈する。頂部外面はヘラ切りのあとロクロナデをし，縁部と内面もロクロナデをおこなう。$Ⅰ_0$類に類似。P5538出土。椀 (347) は平らな底部に内湾しながら立ち上がる口縁部からなる。端部を欠く。$Ⅰ_1$類。P5518出土。壺L (348) は体部下半片である。底部外面糸切り痕をとどめる。体部外面はロクロナデを施す。高台は撥形に広がる長方形を呈す。Ⅰ′類に類似。P5454出土。

なお古墳時代の高杯脚部片 (349) があり，脚部に二条の凹線が巡る。東四行北四門西端SD4185出土。

H　八町宅地内出土土器

1　SX820（図版40・41・110・111・113～117）

総個体数168点のうち，土師器55点 (32.7%)，黒色土器10点 (5.9%)，須恵器49点 (29.2%)，緑釉陶器17点 (10.1%)，灰釉陶器8点 (4.8%)，中国陶磁器5点 (3.0%)，その他24点 (14.3%)

第7表　SX820　Ⅰ・Ⅱ区　3層

土師器					
形態	器形	法量区分	手法	個体数	
食膳具	杯A	Ⅰ	c	1	5(25%)
			e-c	2	
		Ⅱ	-	2	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	-	
	杯B	Ⅰ	-	-	2(10%)
		Ⅱ	-	1	
		Ⅲ	-	1	
		不明	-	-	
	杯B蓋	Ⅰ	-	-	0(0%)
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	-	
	ⅢA	Ⅰ	-	-	3(15%)
		Ⅱ	-	2	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	1	
	椀A	Ⅰ	-	-	4(20%)
		Ⅰ'	-	-	
		Ⅱ	-	2	
		Ⅳ	c	2	
		不明	-	-	
	高杯	-	-	6	6(30%)
	小計				20(64.5%)
貯蔵具	壺	B	-	5	5(100%)
		C	-	-	
		E	-	-	
		不明	-	-	
	小計				5(16.1%)
煮沸具	甕A	Ⅰ	-	1	6(100%)
		Ⅱ	-	2	
		Ⅲ	-	1	
		Ⅳ	-	-	
		Ⅴ	-	-	
		不明	-	2	
	小計				6(19.4%)
合計					31(58.5%)

黒色土器		
形態	器形	個体数
食膳具	杯A	0(0%)
	杯B	0(0%)
	小計	0(0%)
その他	甕	1(50%)
	風字硯	1(50%)
	小計	2(100%)
合計		2(3.8%)

緑釉陶器		
形態	器形	個体数
食膳具	椀	3(50%)
	小椀	1(16.7%)
	Ⅲ	2(33.3%)
	小計	6(100%)
貯蔵具	-	0(0%)
	小計	0(0%)
合計		6(11.3%)

須恵器				
形態	器形	法量区分	個体数	
食膳具	杯A	Ⅰ深	-	0(0%)
		Ⅰ浅	-	
		Ⅱ深	-	
		Ⅱ浅	-	
		Ⅲ	-	
		不明	-	
	杯B	Ⅰ	-	1(33.3%)
		Ⅱ	1	
		Ⅲ	-	
		Ⅳ	-	
		Ⅴ	-	
		不明	-	
	杯B蓋	Ⅰ	-	1(33.3%)
		Ⅰ～Ⅱ	-	
		Ⅱ高	-	
		Ⅱ低	1	
		Ⅲ	-	
		Ⅲ高	-	
		Ⅲ低	-	
		Ⅳ	-	
		不明	-	
	ⅢA	Ⅰ	-	0(0%)
		Ⅱ	-	
		Ⅲ	-	
		不明	-	
	鉢D	-	1	1(33.3%)
	不明	-	-	0(0%)
	小計			3(25%)
貯蔵具	壺	A	1	4(44.4%)
		B	-	
		G	-	
		L	2	
		M	1	
		不明	-	
	甕	-	3	3(33.3%)
	平瓶	-	1	1(11.1%)
	壺	-	1	1(11.1%)
	不明	-	-	0(0%)
	小計			9(75%)
合計				12(22.6%)

灰釉陶器		
形態	器形	個体数
食膳具	椀	2(100%)
	Ⅲ	0(0%)
	小計	2(100%)
貯蔵具	-	0(0%)
	小計	0(0%)
合計		2(3.8%)

その他		
	形態	個体数
中国陶磁器	-	0(0%)
弥生～古墳	土器	0(0%)
	須恵器	0(0%)
	小計	0(0%)
合計		0(0%)

総個体数 53

となり，土師器と須恵器がほぼ1/3ずつを占める。

ⅰⅠ・Ⅱ区－1層

土師器1点（14.3%），黒色土器1点（14.3%），須恵器2点（28.5%），緑釉陶器1点（14.3%），中国陶磁器1点（14.3%），その他1点（14.3%）と少ない。

ⅱⅠ・Ⅱ区－2層

総個体数16点のうち，土師器3点（18.7%），黒色土器1点（6.3%），須恵器3点（18.7%），緑釉陶器5点（31.2%），灰釉陶器2点（12.5%），中国陶磁器1点（6.3%），古墳時代の須恵器1点（6.3%）があり，緑釉陶器がほぼ1/3を占めることは極立った特徴である。

土師器には，皿，高杯，壺などがある。

皿AⅢ（350）の口縁部は「て」字形を呈し，端部は上方につまみ上げる。e手法で，胎土はⅡd。底部片（351）の外面に墨書がみられるが判読できない。胎土はⅡc。

緑釉陶器には，椀，皿がある。

椀（352）は底部片で，高台A。軟陶。京都産。皿（353）は浅い体部に高台がつく。口縁端部はく字形に外反し，口縁上部との境に鋭い稜をつくる。高台は，幅の狭い蛇の目を呈する高台Cで，端面が外傾する。全面施釉。硬陶。京都産。皿（354）は底部片で，断面台形を呈する高台D。摩滅が著しく，調整は不明。軟陶。京都産。

灰釉陶器椀（355）は三日月状で低い高台cである。内面見込みには焼成時の重ね焼き痕がみられる。施釉3。底部外面に判読は困難ながら，墨書が確認できる。胎土はⅠb。

このほか，晩唐から五代にかけての邢窯系白磁椀Aの小玉縁口縁部片が2点，蛇の目高台片2点がある。底部外面は未施釉[8]。

ⅲⅠ・Ⅱ区－3層

総個体数53点のうち，土師器31点（58.5%），黒色土器2点（3.8%），須恵器12点（22.6%），緑釉陶器6点（11.3%），灰釉陶器2点（3.8%）あり，土師器が半数を占める。

土師器には，杯A，杯B，皿A，椀A，高杯，壺，甕Aなどがある。

皿AⅡ（356）の口縁端部はB形態。c手法で，胎土はⅢcⅰ少。

須恵器には，杯B，杯B蓋，鉢D，壺L，壺Mがある。

鉢（357）は，上半部のみを残す。「く」字形を呈する口縁部に，あまり肩が張らず，口縁部との境が明瞭でない体部からなる。口縁端部は外傾する端面となり，中央がやや窪む。Ⅰ$_0$類。

壺LⅡ（358）は，体部下半部を残す。体部は卵形状にやや長く，やや撥形に開く高台がつく。体部外面はロクロナデし，底部外面はヘラ切りののち粗いナデを加える。Ⅴ類。

壺M（359）は，口縁部を残す。Ⅰ′類。

緑釉椀（360）は底部片で，高台Bを呈す。成形は丁寧で平滑。高台以外は丁寧にヘラミガキを施す。全面施釉。硬陶。京都産。

ⅳⅠ・Ⅱ区－4層

土師器，黒色土器，須恵器が僅かに確認できる。

第8表　SX820　Ⅲ区　2層

土師器					
形態	器形	法量区分	手法	個体数	
食膳具	杯A	Ⅰ	e	1	1(7.7%)
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	-	
	杯B	Ⅰ	-	-	6(46.2%)
		Ⅱ	-	3	
		Ⅲ	-	3	
		不明	-	-	
	杯B蓋	Ⅰ	-	-	0(0%)
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	-	
	Ⅲ A	Ⅰ	-	-	2(15.4%)
		Ⅱ	e-c	1	
		Ⅲ	-	-	
		不明	e	1	
	椀A	Ⅰ	c	2	2(15.4%)
		Ⅰ'	-	-	
		Ⅱ	-	-	
		Ⅳ	-	-	
		不明	-	-	
	高杯	-	-	2	2(15.4%)
	小計			13(68.4%)	
貯蔵具	壺	B	-	-	1(100%)
		C	-	-	
		E	-	-	
		不明	-	1	
	小計			1(5.3%)	
煮沸具	甕A	Ⅰ	-	-	0(0%)
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	-	
		Ⅳ	-	-	
		Ⅴ	-	-	
		不明	-	-	
	甕B	-	-	5	5(100%)
	小計			5(26.3%)	
合計				19(25%)	

黒色土器		
形態	器形	個体数
食膳具	杯A	1(25%)
	杯B	3(75%)
	小計	4(80%)
その他	鉢	1(20%)
合計		5(6.6%)

緑釉陶器		
形態	器形	個体数
食膳具	椀	0(0%)
	Ⅲ	4(100%)
	小計	4(80.0%)
貯蔵具	瓶	1(100%)
	小計	1(20.0%)
合計		5(6.6%)

灰釉陶器		
形態	器形	個体数
食膳具	Ⅲ	0(0%)
	椀	1(100%)
	小計	1(25%)
貯蔵具	平瓶	1(33.3%)
	瓶c	1(33.3%)
	壺A	1(33.3%)
	小計	3(75%)
合計		4(5.2%)

須恵器				
形態	器形	法量区分	個体数	
食膳具	杯A	Ⅰ深	-	1(12.5%)
		Ⅰ浅	1	
		Ⅱ深	-	
		Ⅱ浅	-	
		Ⅲ	-	
		不明	-	
	杯B	Ⅰ	-	3(37.5%)
		Ⅱ	2	
		Ⅲ	-	
		Ⅳ	-	
		Ⅴ	-	
		不明	1	
	杯B蓋	Ⅰ	-	2(25%)
		Ⅰ～Ⅱ	-	
		Ⅱ高	-	
		Ⅱ低	-	
		Ⅲ	-	
		Ⅲ高	-	
		Ⅲ低	-	
		Ⅳ	2	
		不明	-	
	Ⅲ A	Ⅰ	-	0(0%)
		Ⅱ	-	
		Ⅲ	-	
		不明	-	
	鉢	-	1	1(12.5%)
	高杯	-	1	1(12.5%)
	不明	-	-	0(0%)
	小計		8(34.8%)	
貯蔵具	壺	A	-	6(40%)
		B	-	
		G	1	
		L	1	
		M	-	
		不明	4	
	短頸壺	-	1	1(6.7%)
	甕	-	8	8(53.3%)
	不明	-	-	0(0%)
	小計		15(65.2%)	
合計			23(30.3%)	

その他			
	形態		個体数
中国陶磁器	青磁椀		1(100%)
弥生～古墳	土器	壺(弥生)	2(16.7%)
		壺(古墳)	2(16.7%)
		壺(不明)	1(8.3%)
		高杯(古墳)	3(25%)
		甕(弥生)	1(8.3%)
		甕(古墳)	3(25%)
		小計	12(63.2%)
	須恵器	杯身	2(28.6%)
		蓋	2(28.6%)
		高杯	2(28.6%)
		壺	1(14.2%)
		小計	7(36.8%)
	小計		19(100%)
合計			20(26.3%)

総個体数 76

黒色土器杯A（361）は，内湾して立ち上がる口縁部からなる。口縁端部は丸くおわる。内外面密にヘラミガキし，底部外面にはユビオサエする。胎土は砂質。A類。

須恵器には，杯B，甕がある。

杯B（362，363）は破片で，（362）がⅠ$_0$類，（363）がⅠ$_1$類。甕A（364）は，外反する短い口縁部がつく。口縁端部は縁帯状を呈し，内端は内側に突出する。体部外面は細い平行叩き，内面にはやや太い同心円文がみられる。Ⅵ類。

ⅴⅢ区－1層

総個体数12点のうち，土師器1点（8.3%），瓦器1点（8.3%），須恵器6点（50.0%），中国陶磁器2点（16.7%），その他2点（16.7%）があり，須恵器が半数を占める。

ⅵⅢ区－2層

総個体数76点のうち，土師器19点（25.0%），黒色土器5点（6.6%），須恵器23点（30.3%），緑釉陶器5点（6.6%），灰釉陶器4点（5.2%），中国陶磁器1点（1.3%），その他19点（25.0%）があり，分散する傾向がみられ，数量比では土師器と須恵器がほぼ二分する。

土師器には杯A，杯B，皿A，椀A，高杯，壺，甕Bなどがある。

杯AⅠ（365）の口縁部外面はユビオサエによる凹凸が目立つ。口縁端部はB形態。e手法で，底部内面には板ナデを残す。胎土はⅠb。

皿A（366）の底部中央はやや上方に膨らみ，口縁部は緩やかに外方に開く。口縁部上半はやや屈曲する。口縁端部はB形態。e手法で，胎土はⅡdi少。口縁部外面に煤が付着。

椀AⅠ（367）の口縁端部はB形態。c手法で，胎土はⅠai少。

黒色土器には，杯A，杯B，鉢などがある。

鉢（368）は小型の器形で，球形の体部にほぼ直立する口頸部からなる。口縁端部は上方へつまみ上げられる。口縁部のゆがみが著しい。胎土は砂質。外面体部下方の一部に煤が付着。A類。

須恵器には，杯A，杯B，壺，甕がある。

壺（369～371）は体部片で，平底で直立気味に立ち上がる体部からなる。体部外面はロクロナデし，底部外面は外縁をヘラケズリするのみで未調整。内面はロクロ目を残す。（369・370）は同一個体で，底部と体部の粘土紐の接合痕がみられる。（370）の外面に判読は困難ながら墨書がみられる。V類に類似。（371）は底部外面が摩滅する。Ⅷ類に類似。

壺L（372）は，口縁部を残す。V類に類似。

甕は4個体以上ある。（373）は短く外反する口縁部がつく。口縁端部は平坦面を呈し，やや外方に突出する。体部外面は，斜め方向の平行叩きののちヨコナデを加える。内面にはナデを施すが僅かに細同心円文を残す。Ⅳ類。甕B（374）は球形の体部に，やや外反する短い口頸部からなる。口縁端部は外傾する端面を呈す。体部外面は平行叩きののち，縦方向にハケメを施す。内面には大きめの同心円文を残し，頸部に接合痕をとどめる。胎土は微砂粒が多く粗い砂質で，硬質。分類外。甕（375）は，やや外傾する長い口頸部と底部を残す。口縁端部は下端が突出し，幅広の端面を呈す。底部は平底で薄い。底部外面に僅かに斜め方向の平行状叩きがみられる。底部と体部下端はユビオ

サエされ，内面にも確認でき，接合痕がある。口頸部もロクロナデを施す。頸部の接合はＡ２。底部外面は未調整である。内外面はハケによる泥づけが施され，漆黒化する。灰白色を呈し，極めて硬質でⅧ類。猿投産。(376) は卵形を呈する体部下半のみを残す。体部外面は縦方向に平行条叩きをおこなったのちヨコナデを何条も施す。底部は叩きだしの際，平行条叩きを縦及び斜めに繰り返しおこなっている。それにともない内面の当て具も体部でみられるやや細い同心円文ではなく，それより一回り大きな太い凸線のある同心円当て具を用いる。底には摩滅した痕をとどめる。胎土には砂粒が目立つ。Ⅸ類。

緑釉陶器には，椀，皿，瓶がある。

皿 (377) はほぼ完形で，浅い体部に高台がつく。口縁端部は「く」字形に外反し，口縁上部との境に鋭い稜をつくる。高台Ｃで，端面が外傾する。底部外面のみ未施釉。硬陶。京都産。(378) は，張り付けの高台Ｅで，小さく低い台形を呈す。内外面とも丁寧にミガキが施され，全面施釉。尾張産。瓶 (379) は口頸部を欠く。やや下ぶくれの体部からなり，底部は平坦である。体部外面は丁寧なヘラミガキを施す。内外面施釉。硬陶。京都産か。

灰釉陶器には，椀，皿，瓶，壺がある。

椀 (380) は，内湾しながら立ち上がる口縁部に高台がつく。口縁端部は僅かに外反して丸くおわる。高台ａで，小さな台形を呈する。施釉１で，胎土１ａ。瓶Ｃ (381) は，平底で下ぶくれの体部からなり，細くて短い外反する口縁部からなり，端部を欠く。胎土Ｉａで，外面一部分に施釉がみられる。壺Ａ (382) は球形の体部に，短く直立する口縁部からなる。端部は丸くおわる。外面のみ施釉。胎土１ｂ。

このほか，越州窯系青磁瓶 (383) があり，体部下半を残す。平底で体部は直線的に立ち上がる。釉は体部上半に施されるが，ムラがある。胎土は精良で，部分的に橙色をおびる。底部外面に楕円形の目跡が７ヶ所以上みられる。

２　その他（図版 40・110・111）

土師器には椀Ａがある。

椀ＡＩ (384) の口縁端部はＢ形態で，端部の突出はわずかである。全体的に摩滅が激しいが，調整はおそらくｅ－ｃ手法で，胎土はＩｂ。東四行北七門北端中央ＳＫ 695 出土。

須恵器には，盤，壺Ｇ，壺などがある。

盤 (385) は，平底に大きく外傾する口縁部からなる。口縁端部は外傾する端面を呈す。底部外面は粗いオサエがあり，外周をヘラ状工具でケズリを加える。Ⅰ′類。東四行北五門北東ＳＫ 478 出土。壺Ｇ (386) は，口縁の一部を欠くがほぼ完形。器高は低く，口縁部もあまり開かない。肩部の稜もなく，丸味を帯びる。Ｄ群に類似。東四行北七門北端中央西寄りのＳＢ８東北から出土。なお側溝 655 付近より壺Ｌ (390) が１点，そのほかから壺２点がそれぞれ出土する。

緑釉陶器には，皿 (387・388) がある。(388) の口縁端部は外反し，高台Ａ。全面施釉で軟陶。京都産。東四行北四門西南より出土。(387) は，扁平な器形で口縁端部は僅かに外反して，丸くおわる。高台Ａで全面施釉。軟陶。京都産。東四行北四門ＳＲ 4200 西側馬代小路より出土。

灰釉陶器壺Ａ蓋（389）が１点東三行北五門門ＳＢ９の北側から出土する。胎土は１ｂ。

Ⅰ　九町宅地内出土土器（図版 42・111）

１　ＳＤ 661

土師器には，皿Ａ，甕Ａなどがごくわずかにある。

皿ＡⅠ（391）の口縁端部はＢ形態で，外側に一条の凹みのある面をなす。ｅ－ｃ手法で，胎土はⅠｄｉ少。甕ＡⅢ（392）は，緩やかに外反する口縁部からなる。口縁端部は丸くおわるが，上側にわずかに面をなす。全体に器表は著しく荒れ，調整は不明瞭であるが，体部外面には叩き痕が残る。胎土はⅠａで，他地域からの搬入品である。口縁と体部の内面の一部に煤が付着。

２　ＳＥ 670

総個体数８点あり，土師器，緑釉陶器が二分する。

土師器には杯Ａ，杯Ｂ，皿Ａがある。

皿ＡⅠ（393）の口縁端部はＢ形態。ｅ手法で，胎土はⅠｃ。

緑釉陶器には，椀，皿がある。

（394～397）はいずれも全面施釉で，このうち椀（394・396）と皿（395）は京都産で，それぞれ口縁部のみのものと底部だけの破片である。底部は２点とも高台Ａ。これらは硬陶で，内外面ヘラミガキが施されている。この中で井戸枠内から出土した椀（396）の底部外面には，ヘラで「大」と判読できる線刻が認められる。椀（397）は，底部外面に逆台形の低い張り付け高台Ｅ。内外面ヘラミガキが施され，オリーブ黄色を呈した厚い釉が全面に施釉される。尾張産。

３　ＳＸ 548

総個体数 30 点あり，土師器 10 点（33.3％），須恵器 14 点（46.7％），緑釉陶器１点（3.3％），灰釉陶器３点（10％）で，古墳時代の須恵器２点が混入する。土師器と須恵器が３～４割強を占める。

土師器には，杯Ａ，皿Ａ，皿Ｃがある。

杯ＡⅡ（398）の口縁端部はＥ形態。ｃ手法で，黄色味を帯びるⅡｄである。ＳＸ 552 出土と接合する。皿ＡⅡ（399・400）の口縁端部はＢ形態。（399）はｅ－ｃ手法で，胎土はⅠｄ。（400）はｃ手法で，胎土はⅠｃ。皿Ｃ（401）の口縁端部はＣ形態。ｅ手法で，胎土はⅡｄ。口縁の一部に煤が付着。

須恵器には，杯Ａ，杯Ｂ，壺Ｍ，甕などがある。

杯Ａ（402）は平らな底部に直線的に開く口縁部からなり，端部は丸くおわる。Ⅴ類。杯Ｂ（403）は，やや斜め上方に開く口縁部に，底部外縁に角張った高台がつく。Ⅰ₀類。壺Ｍ（404）はＥ群に類似するが，底部は狭まり，円盤状に削り出さず，撥形の高台がつく。Ⅰ′類に類似。壺Ｍ（405）はＥ群で，Ⅰ′類。甕（406）は，肩の張る体部に「く」の字形に外反する口縁で，やや平坦な口縁端面を呈し，外端は少し外側に張り出す。体部外面にはやや細い平行叩き目，内面には同心円文を残す。Ⅳ類に類似。甕（407）は尖庭気味の卵形を呈する体部下半を残す。体部外面には平行条叩きが施され，一部粗いヨコナデを加える。内面は楕円形を呈し，大きく太い凸線となる同心円文

の当て具痕を残す。それらのことから，底に向けて縦方向に底部叩きだしをおこなっていることがわかる。長石が目立ちⅨ類に類似。

灰釉陶器には，小型の鉢（408）があり，少し碁笥底を呈し，内湾気味に立ち上がる口縁からなる。口縁端部はやや平坦で，内側に一条凹線が巡る。内面にはやや厚い釉が施釉１。胎土は１ａ。なお古墳時代の碗（409）がある。

４　その他

土師器杯ＡⅠ（410）の口縁端部はＢ形態。Ｃ手法で，胎土はⅠｂｉ少。ＳＤ532出土。このほか７世紀の高杯の脚部が，ＳＤ3194より出土する。

須恵器杯Ｂ（411）は底部片である。底部外面は回転ヘラ切りのあと粗いロクロナデをおこなう。底部内面と口縁部内外面はロクロナデする。高台は断面台高台を呈し，内端面が上がって端面は内傾し，底部外端につく。器壁は平滑で薄い。Ⅸ類。ＳＤ3194出土。杯蓋（412～414）は平坦な頂部に屈曲する縁部からなる。頂部外面はヘラ切りのあとロクロナデをし，縁部と内面もロクロナデをおこなう。（412）はⅠ₀類でＰ566出土。（413）はⅠ′類でＳＫ507出土。（414）はⅠ₀類でＳＢ15のＰ575出土。壺Ｌ（415）は口頸部が欠けるが，体部の一部を残す。器形は球形で底部外端には逆台形の大きな高台がつく。やや大型のもので，Ⅴ類に類似。中世南北溝より出土。甕（416）は，ほんの少し外方に開く短い口縁部からなる。口縁端はやや丸みを帯びる。体部最上位の外面は並行条，内面には同心円文がみられ，右回りに叩きを施す。Ⅴ類。ＳＤ3194出土。

灰釉陶器壺（417）は底部片で，底部外面は回転ヘラ切りし，内面底部と体部の境は，指オサエする。体部下端は強くロクロケズリし，円盤高台風に仕上げる。胎土１ｃ。ＳＤ768出土。

越州窯系青磁合子蓋（418）は，やや丸味のある頂部に直立する縁部からなり，端部は平坦面を呈する。頂部と縁部の境には１条の凹線が巡る。頂部外面には，花弁文を線彫りした優品である。灰オリーブ色の透明感のある釉が施される。縁端部は釉が拭い取られ，焼成時の目跡をとどめる。花弁文線彫合子の出土は，現在までほとんど例をみない。東二行北七門ＳＢ14南側より出土。
なお古墳時代の碗（419）がＳＤ440より出土。

Ｊ　十町宅地内出土土器（図版43・44・112）

１　ＳＤ665

全個体数24点中，土師器15点（62.5％），須恵器９点（37.5％）と，土師器が過半数を占め，緑釉陶器，灰釉陶器は含まれない。

土師器には，皿Ａ，椀Ａ，高杯，壺Ｅ，甕Ａなどがあり，煮炊具が10点（66.6％）と過半数を占める。

杯ＡⅡ(420)の口縁端部は内上方にわずかに突出する。Ｂ形態。器高はやや高い。ｅ－ｃ手法で，胎土はⅡｂｉ少。

皿ＡⅡは２点ある。（421）の口縁部は少し開き気味で，口縁端部はＢ形態。ｃ手法で，胎土はⅢｂｉ少。（422）の口縁部は内湾気味に立ち上がり，口縁端部はＣ形態。ｃ手法で，胎土はⅡｄ。

高杯（423）は杯部を欠き，脚部は断面七角形を呈す。裾部の端部は内傾する面をなし，下端は下方に突出する。裾部外面はやや摩滅するがヘラミガキをおこなう。胎土はＩｄ。

甕ＡⅡ（424）の口縁端部はＡ形態。体部外面は平行条叩きをおこなう。胎土はＩａ。

甕ＡⅣは２点ある。(425)の口縁端部はＡ形態。体部外面の調整は叩きののち粗いハケメを施し，内面は当て具痕を残す。口縁部内面は叩き具によりヨコナデする。胎土はⅡｃｉ少。口縁および体部の外面の一部に煤が吸着。（426）は小型の器形で，口縁端部は上方に突出する。体部外面は上半に叩きだけで，下半にはハケメを加える。胎土はⅡｃ。体部内外面および口縁の一部に煤が付着。

須恵器には杯Ａ，杯Ｂ，杯Ｂ蓋，壺がある。

杯Ａ（427）は底部が平坦で，口縁部は斜めに直線的に開き，端部は丸くおわる。底部外面はヘラ切りののち部分的にナデを施し，それ以外はロクロナデをおこなう。全体に平滑である。Ⅰ$_1$類。

杯Ｂ（428）は口縁部がやや外反気味方に開き，端部は丸くおわる。底部外面は回転ヘラ切りのあと粗いナデをおこなう。底部内面もロクロナデのあとに粗いナデを加える。高台はやや細い台高台を呈し，底部外端より少し内側につける。Ⅲ類。

杯Ｂ蓋（429）は，平坦な頂部に屈曲する縁部からなる。頂部外面は回転ヘラ切りのあとロクロナデし，内面はロクロナデ，縁部はヨコナデをおこなう。Ⅰ$_1$類。

鉢（430）は，平らな底部に斜め上方に直線的に開く体部からなる。口縁部を欠く。底部外端には逆台形の高台がつく。Ⅰ$_1$群。

壺Ｂ（431）は，肩部と体部の境に稜をなし，直立する短い口縁部がつく。肩部に双耳をつける。耳は長方形の粘土板を張り付け，円形の穴を穿つ。体部下半を欠く。Ⅸ類。

甕Ａ（432）は長頸の甕で，口縁部が外反する口頸部からなり，口縁端部を欠く。口頸部は内外面ロクロナデ。体部外面は平行叩きを施す。内面には同心円の当て具痕が残る。Ⅷ類。猿投産の可能性が考えられる。なお，この甕はＳＲ4200の南北部出土の破片と遺構間接合する。

２　ＳＤ666

わずかに土師器が少量確認されるに過ぎない。

杯ＡⅠ(433)の底部中央部がわずかに膨らむ。口縁端部はＡ形態。ただし全体的に剥離が激しく，調整は不明瞭である。胎土はＩｂｉ少。口縁部に煤が付着。

３　ＳＤ4334

わずかに土師器と緑釉陶器灰釉陶器が確認される。

緑釉陶器（434）の底部には高台Ａで，内外面粗いヘラミガキし，暗緑灰色を呈する釉を全面施釉する。軟陶。京都産。

灰釉陶器（459）は，扁平な体部に低い高台がつく。口縁端部はわずかに外反する。高台は，少し外側に開く逆台形の高台ａである。施釉１。胎土１ｃ。

４　ＳＤ4340

宅地を南北に等分する東西溝である。遺物は総個体数63点とまとまって出土する。土師器６点(9.5%)，須恵器52点（82.5%），緑釉陶器３点（4.8%），灰釉陶器２点（3.2%）があり，須恵器が

圧倒的多数を占める。

土師器には，皿A，椀A，皿C，高杯，壺，甕などがある。

椀AⅠ（435）の口縁端部はE形態。調整は表面が摩滅して不明瞭である。胎土はⅠb。

皿AⅡ（436）の口縁端部はB形態。c／c'手法で，胎土はⅠd。

皿C（437）は，大きな歪みがみられる。口縁端部はC形態。e手法で，胎土はⅡd。口縁部に煤が付着。

壺E（438）の胎土は，Ⅱdi少。

黒色土器には杯A（439）があり，口縁部は内湾気味に立ち上がり，口縁端部は丸くおわる。口縁部外面は摩滅のため不明瞭であるが，一部ヘラミガキがみられる。胎土はやや粉性。口縁部外面中程に粘土継ぎ目痕がみられる。A類。

須恵器には，杯A，杯B蓋，杯B，鉢，短頸壺，平瓶，壺M，長頸壺，甕がある。

杯B蓋（440）は口縁部だけの破片で，頂部と縁部の境界が不明瞭で，傘形を呈する。頂部外面上半はロクロケズリし，縁部下半および内面はロクロナデされる。縁端部の下端は突出し，端面が外傾する。尾張産の特徴を有する。Ⅷ類。

杯B（441～444）は口縁部が外方に直線的に開く。このうち（443）の端部はわずかに外反し，底部外面はヘラキリののちナデが施される。それ以外はロクロナデをおこなうが，水挽き痕をとどめ，内外面に凹凸を残す。高台は非常に低く，扁平な台形を呈する。底部外面には「十」の線刻がある。（441）の高台は，内端部が上がり端面は内傾する。（441）がV類で，それ以外はⅨ類。（444）の底部外面には判読不能ながら墨書が確認できる。

鉢（445）は，外反する短い口縁部と上位でやや肩の張る体部からなる。口縁端部は少し窪んだ平坦面を有する。内外面ともロクロナデを施すが，体部中央に道具痕による浅い凹みがみられる。I_1類。

短頸壺（446）は下半部の破片で長胴を呈し，平底である。底部外面はヘラ切りのあとナデを施す。体部内面にはロクロ水挽き痕を残し，外面はロクロナデをおこなう。体部下端にはロクロヘラケズリをする。平安京周辺以外の他地域産と考えられる。なお底部内面と体部内面過半には乳白色のギブサイドがみられることから屎尿用の容器に使用された可能性がある。

壺M（447，448）は器形が異なり，（447）がA群でI_0類。（448）はE群で，胎土はI_1類。

長頸壺（449）は底部片で，外面に糸切り痕をとどめる。底部外端には，断面台形でやや外側に張り出す幅広の高台がつく。Ⅱ類。

平瓶（450）は体部片である。器形は体部の上面と下部に稜をつけ，平安な底部に断面台形の小さな高台をつける。底部外面はヘラ切りののち不定方向のナデし，体部内面はロクロ水挽きをとどめる。底部内面は一定方向にナデし，外面にはロクロナデを施す。ⅣないしはV類。

甕（451・452）は体部上半と底部の破片である。（451）は卵形の大きな体部で，外面には平行条叩きをおこない，内面には同心円文の当て具痕がみられる。体部上半の叩きと当て具痕から，縦軸整面叩きと考えられる。体部最上位には横方向の頸部叩きがみられる。いずれも叩きは縦方向に並

第9表　S D 4340

土師器					
形態	器形	法量区分	手法	個体数	
食膳具	杯A	Ⅰ	-	-	0(0%)
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	-	
	杯B	Ⅰ	-	-	0(0%)
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	-	
	杯B蓋	Ⅰ	-	-	0(0%)
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	-	
	Ⅲ A	Ⅰ	-	-	1(25%)
		Ⅱ	c-c'	1	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	-	
	Ⅲ C	-	e	1	1(25%)
	椀A	Ⅰ	e	1	1(25.0%)
		Ⅰ'	-	-	
		Ⅱ	-	-	
		不明	-	-	
	高杯	-	-	1	1(25.0%)
	小計			4(66.6%)	
貯蔵具	壺	B	-	-	1(100%)
		C	-	-	
		E	-	1	
		不明	-	-	
	小計			1(16.7%)	
煮沸具	甕A	Ⅰ	-	-	1(100%)
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	1	
		Ⅳ	-	-	
		Ⅴ	-	-	
		不明	-	-	
	小計			1(16.7%)	
合計				6(9.5%)	

須恵器				
形態	器形	法量区分	個体数	
食膳具	杯A	Ⅰ深	-	5(17.8%)
		Ⅰ浅	-	
		Ⅱ深	1	
		Ⅱ浅	1	
		Ⅲ	-	
		不明	3	
	杯B	Ⅰ	-	11(39.3%)
		Ⅱ	1	
		Ⅲ	3	
		Ⅳ	1	
		Ⅴ	1	
		不明	5	
	杯B蓋	Ⅰ	-	9(32.1%)
		Ⅰ～Ⅱ	-	
		Ⅱ高	-	
		Ⅱ低	2	
		Ⅲ	2	
		Ⅲ高	-	
		Ⅲ低	4	
		Ⅳ	1	
		不明	-	
	Ⅲ A	Ⅰ	-	1(3.6%)
		Ⅱ	-	
		Ⅲ	-	
		不明	1	
	鉢	-	1	1(3.6%)
	平瓶	-	1	1(3.6%)
	不明	-	-	0(0%)
	小計			28(53.8%)
貯蔵具	壺	A	-	10(41.7%)
		B	1	
		G	-	
		L	-	
		M	2	
		不明	7	
	甕	-	14	14(58.3%)
	不明	-	ー	0(0%)
	小計			24(46.2%)
合計				52(82.5%)

黒色土器		
形態	器形	個体数
食膳具	杯A	0(0%)
	杯B	0(0%)
	小計	0(0%)
その他	-	0(0%)
合計		0(0%)

緑釉陶器		
形態	器形	個体数
食膳具	椀	2(66.7%)
	Ⅲ	1(33.3%)
	小計	3(100%)
貯蔵具	-	0(0%)
	小計	0(0%)
合計		3(4.8%)

灰釉陶器		
形態	器形	個体数
食膳具	椀	1(50%)
	Ⅲ	1(50%)
	小計	2(100%)
貯蔵具	-	0(0%)
	小計	0(0%)
合計		2(3.2%)

その他		
	形態	個体数
中国陶磁器	-	0(0%)
弥生～古墳	土器	0(0%)
	須恵器	0(0%)
	小計	0(0%)
合計		0(0%)

総個体数 63

行するようにおこなわれる。肩部と頸部の中位ほどに２条の凹線が巡る。外面には自然釉がみられる。Ⅲ類の可能性が高い。(452) はやや尖り気味の丸底で，外面には格子状叩き，内面には平行状当て具痕がみられる。両者の痕跡から底部中心に向かって叩き出されていることがうかがえる。Ⅸ類。(453, 454) は口頸部片で，(453) はⅢ類。(454) は大型品で，口縁端部は縁帯上の端面をなす。Ⅶ類に類似。

緑釉陶器には椀がある。

(455) は小型で，高台Ａで，硬陶。京都産。(456) は大型の器形で，内湾しながら外方に開く口縁部からなり，端部は顕著に外反して丸くおわる。高台は高くて撥形に外方に開く高台Ｅである。内外面丁寧にヘラミガキされ，オリーブがかった薄い釉は全面に施釉される。胎土は精良で産地は分類外。平城宮出土資料に同種のものがある[9]。

灰釉陶器には椀，皿がある。

椀 (457) は，内湾しながら外方に開く口縁部で，端部はやや外反し丸くおわる。底部外面はロクロヘラ切りで，口縁外面下半はロクロヘラケズリのち粗いロクロナデをおこない，内外面はロクロナデする。高台は外端部を面取り状にナデし，断面三日月状のやや高い高台ｂである。施釉３。胎土１ｃ。皿 (458) は底部片で，平坦な底部に高台ａがつく。底部外面はヘラ切りののち粗くロクロナデをおこなう。施釉１であるが厚く，見込みに三叉トチンの痕跡をとどめる。胎土１ａ。

5　ＳＤ 4350

宅地を東西に２等分する溝である。土師器２点，須恵器３点，緑釉陶器１点，灰釉陶器２点があり，それぞれ分散する。

土師器には，杯Ａがあるにすぎない。

杯Ａ (460) は口縁部上半で外反し，口縁端部は上方につまみ上げる。ｅ手法で，底部内面にはハケメが残る。胎土はＩｄ。

須恵器には，頸部のみを残す短頸壺 (461) がある。体部上端と口縁部接合部は下方への膨らみがあることから，三段構成による接合と考えられる[10]。頸部付近には自然釉の付着が認められる。

甕 (462) は口頸部片で，短く外反し，端部はほぼ水平の端面を呈する。胎土はＶ類に類似。

緑釉陶器 (463) は小型の椀で，内湾しながら外方に開く口縁部からなり，端部は大きく外反して丸くおわる。高台Ａで，硬陶。京都産。

灰釉陶器には椀，皿がある。

椀 (464) は，内湾しながら立ち上がる口縁からなり，端部は大きく外反する。高台ａで，施釉２。胎土１ａ。

輪花皿 (465) は，扁平な器形で，緩やかに外側に開く口縁部からなる。底部は平底でやや上方に内反りする碁笥底を呈す。底部外面はヘラケズリする。内面には花弁と間弁が交互に線刻され，口縁端部の輪花は，花弁と間弁の間に施される。施釉１で厚く，胎土１ａ。ほかに類例はみない。

6　ＳＥ 1842 (図版 45 ～ 47，第 32 図)

宅地東端中央北寄りで確認し，総個体数 109 と多量の遺物がまとまって出土した。井戸は枠が抜

かれていたため，その構築時期についての資料は得られることはできなかった。抜かれたのちは一度に埋め戻されたようであるが，その埋土は44層ほどが確認された。しかしながら，1層から17層までの遺物は，接合関係が認められることから，それを上層出土として扱うことにする。また18層から23層までの遺物の出土はわずかにあるだけで，それを中層とした。さらに24層から44層までの遺物も，接合関係が認められることから下層として扱い，以下層位ごとに述べる。

ⅰ上層

総個体数61点あり，土師器34点（55.7%），黒色土器1点（1.6%），須恵器23点（37.7%），灰釉陶器2点（3.3%），中国陶磁器1点（1.6%）などがあり，土師器が過半数以上を占める。

土師器には，杯A，杯B蓋，ⅢA，椀A，高杯，甕Aがある。

杯AⅠ（466～468）の口縁部は，やや内湾気味に外方に開く口縁部からなる。（466・467）はe－c手法で，（466）は見込にわずかに板ナデが残る。底部に丸みがあり，器高が高い。口縁端部はA形態。胎土はⅡdⅰ少。（467）は口縁端部がB形態で，胎土はⅡd。（468）の口縁端部はE形態で，わずかににつまみ上げる。c手法で，胎土は同じくⅡdⅰ少。

ⅢAⅠ（469・470）は，外方に開く口縁部からなる。（469）の口縁端部はA形態。e－c手法で，胎土はⅡcⅰ多。底部外面に「一」の墨書がみられる。（470）の口縁端部はB形態。e－c手法で，胎土はⅡdⅰ少。

ⅢAⅡ（471～475）のうち（471・472）は底部にやや丸みがある。（473）は，内湾気味に立ち上がる口縁部からなり，口縁端部はわずかに外反する。口縁端部は，（474）がA形態である以外は，C形態である。（473）はケズリがやや粗い。（471・472）はc手法，（473～475）はc／e手法で，胎土は（471）がⅠdⅰ少，（473）がⅠdⅰ少，（472・475）がⅡd，（474）がⅡdである。（471）の底部外面には「十」字状の線刻がある。（473）の底部外面には「二」の墨書がある。

ⅢA底部片（476）には底部外面へラケズリする。胎土はⅡd。底部外面に墨書を残すが，判読できない。

椀AⅠ'（477）の口縁端部はB形態で，端部はわずかに突出する。c手法で，胎土はⅢd。

椀AⅠ（478～485）は，小さな底部に内湾気味に立ち上がる口縁部からなる。口縁端部は（478～480・484・487）がB形態で，いずれも上方にわずかに突出する。（478）は端面をなす。（480）は外側の面に凹線をもつ。（481～483・485）がC形態である。（478・480・482・483）はc手法，（479・481・484）はc／c'手法，（485）c／e手法である。胎土は（484・485）がⅠcで（484）がⅰ・ⅱ普，（483）がⅠdⅰ少，（479・481）がⅡbⅰ少，（478・482）がⅡd，（480）がⅢbⅰ少である。（478）の底部と口縁部境に墨痕があり，（479）も底部に墨書がみられるが判読できない。（480）は底部外面に「一」の墨書，（485）は口縁部外面に「二」の墨書がみられる。（480・483）は口縁に煤が付着。このほか椀A底部片（486）の外面に「㊀」の墨書がある。

甕AⅣは5個体ある。（487）の口縁端部はA形態。体部外面の調整は叩きののちハケメ，内面は無文当て具痕を残す。口縁部内面は叩き具によるヨコナデ。胎土はⅡc。体部外面上半に「Y」字状の墨痕がみられる。（488）の口縁端部はC形態。胎土はⅡdⅰ，ⅱ多で，砂粒が目立つ。（489）

はやや外傾し厚みのある口縁部からなる。口縁端部はB形態。体部外面は無文タタキを施す。胎土はⅡbi，ii多で，砂粒が目立つ。(490) の口縁端部はA形態。体部外面は叩きののちハケメ，内面は横方向のハケメをおこなう。胎土はⅠcである。(491) の口縁部はやや外傾し，口縁端部は端面をなす。胎土はⅠai少で，砂粒の粒子が大きく目立つ。これ以外は煤が付着。

須恵器には，杯A，杯B，杯B蓋，壺L，壺M，壺，甕がある。

杯A (492～497) は底部が平坦で，口縁部は斜めに直線的に開き，端部は丸くおわる。(492～494) は，底部がやや丸みを帯び，口縁部がやや外側に開くのに対し，(495·496) は底部が平坦で，直立気味に立ち上がる口縁からなり，器形に差がみられる。底部外面はヘラ切りののち部分的にナデを施し，それ以外はロクロナデをおこなう。全体に平滑。(497) は底部の小片であるが，外面に「十」の墨書がある。灯明皿に使用。(492) がI_0類で，それ以外はI_1類。

杯B (498～500) は口縁部がやや外方に直線的に伸び，端部は丸くおわる。(498) は高台が逆台形で外端よりやや内側につくのに対し，(499·500) は四角い高台で，外端部につく。(500) がV類で，それ以外はI_0類。

杯B蓋 (501) は，平坦な頂部に屈曲する縁部からなる。頂部外面はヘラ切りのあとロクロナデし，縁部と内面はロクロナデ，縁端部はヨコナデをおこなう。頂部外面に「隆」とも読める墨書がみられる。Ⅰ類。

壺M (502·503) の底部外面には糸切り痕をとどめる。(502) はB群で，体部内面最上位に絞り痕をとどめる。底部径は広く，高台は少し高い長方形を呈する。Ⅲ類。(503) はA群で，体部外面は非常に平滑で成形が優れている。底部径は少し狭く，幾分撥形に外側に開く台高台を呈す。Ⅱ類。

短頸壺 (504) はほぼ完形に近い。全体に長胴で，丸みのある肩部からなり，口縁部は短く直立して端部は丸くおわる。底部は平底である。内外面ともロクロ目をとどめ，底部外面は未調整，内面は指オサエで成形した凹凸をとどめる。なお底部外面には成形時についたと考えられる白色微砂粒が全面に薄く認められる。また肩部に粘土の継ぎ目がある。長石などの微粒子を多く含み，ざらつきがあり，粘性がある。硬質。胎土は分類外。

長頸壺 (505·506) は底部片である。底部外面は回転ヘラ切りののち軽くロクロナデを施し，内面はロクロ目をとどめる。体部外面にはロクロナデをおこなう。(505) の高台は断面やや細長い撥形を呈す。端部外端は横方向につまみ出し，内端も斜め内側下方に少し突出する。Ⅳ類。(506) の高台は断面長方形で，端面外端が外側に膨らむ。Ⅵ類。

甕Aは3個体ある。(507) はやや外傾する大振りの長い口頸部からなり，端部は斜め下方に突出し，外傾する端面をなす。口縁部内外面にロクロナデをおこなうが，外面中央付近に横方向に平行条叩きの痕を残す。口縁部と体部の接合は二段構成で，開口法による。Ⅷ類[11]。(508) は平底で，内底面際には底部に粘土を張りつける時のオサエの痕をとどめる。体部下端は平行条叩きののち横方向にヘラケズリする。体部外面は平行条叩き，内面はナデをおこなう。Ⅲ類に類似。(509) は卵形の体部に少し肩が張る。丸底。体部下半外面は斜め方向の平行条叩き，内面には平行条叩き具を当て具に用い，ナデを加える。上半は外面が横方向の平行条叩き，内面は細同心円文当と具痕がみ

第10表　ＳＥ1842　上層

土師器					
形態	器形	法量区分	手法	個体数	
食膳具	杯Ａ	Ⅰ	c	2	4(16%)
			e-c	2	
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	-	
	杯Ｂ	Ⅰ	-	-	0(0%)
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	-	
	杯Ｂ蓋	Ⅰ	-	-	1(4%)
		Ⅱ	-	1	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	-	
	Ⅲ A	Ⅰ	c	1	8(32%)
			e-c	1	
		Ⅱ	c	4	
			c/e	1	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	1	
	椀Ａ	Ⅰ	c/e?	1	10(40%)
			c	4	
			c/c'?	3	
		Ⅰ'	c	1	
		Ⅱ	-	-	
		不明	-	1	
	高杯	-	-	2	2(8%)
	小計			25(73.5%)	
貯蔵具	壺	B	-	-	0(0%)
		C	-	-	
		E	-	-	
		不明	-	-	
	小計			0(0%)	
煮沸具	甕Ａ	Ⅰ	-	-	9(100%)
		Ⅱ	-	1	
		Ⅲ	-	2	
		Ⅳ	-	6	
		Ⅴ	-	-	
		不明	-	-	
	小計			9(26.5%)	
合計				34(55.7%)	

黒色土器		
形態	器形	個体数
食膳具	杯Ａ	1(100%)
	杯Ｂ	0(0%)
	小計	1(100%)
その他	-	0(0%)
合計		1(1.6%)

灰釉陶器		
形態	器形	個体数
食膳具	椀	0(0%)
	Ⅲ	0(0%)
	小計	0(0%)
貯蔵具	甕	1(50%)
	短頸壺蓋	1(50%)
	小計	2(100%)
合計		2(3.3%)

須恵器				
形態	器形	法量区分	個体数	
食膳具	杯Ａ	Ⅰ深	-	6(46.1%)
		Ⅰ浅	-	
		Ⅱ深	5	
		Ⅱ浅	-	
		Ⅲ	-	
		不明	1	
	杯Ｂ	Ⅰ	-	3(23.1%)
		Ⅱ	2	
		Ⅲ	-	
		Ⅳ	1	
		Ⅴ	-	
		不明	-	
	杯Ｂ蓋	Ⅰ	-	2(15.4%)
		Ⅰ～Ⅱ	-	
		Ⅱ高	1	
		Ⅱ低	-	
		Ⅲ	1	
		Ⅲ高	-	
		Ⅲ低	-	
		Ⅳ	-	
		不明	-	
	Ⅲ A	Ⅰ	-	0(0%)
		Ⅱ	-	
		Ⅲ	-	
		不明	-	
	鉢Ｄ	-	1	1(7.7%)
	盤	-	1	1(7.7%)
	小計		13(56.5%)	
貯蔵具	壺	Ａ	-	6(60%)
		Ｂ	1	
		Ｇ	1	
		Ｌ	2	
		Ｍ	2	
		不明	-	
	甕	-	4	4(40%)
	不明	-	-	0(0%)
	小計		10(43.5%)	
合計			23(37.7%)	

緑釉陶器		
形態	器形	個体数
食膳具	椀	0(0%)
	Ⅲ	0(0%)
	小計	0(0%)
貯蔵具	-	0(0%)
	-	0(0%)
	小計	0(0%)
合計		0(0%)

その他		
	形態	個体数
中国陶磁器	褐釉	1(100%)
弥生～古墳	土器	0(0%)
	須恵器	0(0%)
	小計	0(0%)
合計		1(1.6%)

総個体数 61

られ，粗いナデを加える。Ⅸ類に類似。

ⅱ中層

総個体数40点，土師器19点（47.5%），黒色土器1点（2.5%）須恵器17点（42.5%），灰釉陶器3点（7.5%）があり，土師器と須恵器がほぼ二分する。

土師器には，杯A，皿A，皿C，椀A，壺B，甕Aがあり，食膳具が圧倒的多数を占める。

杯AⅠ（510・511）の口縁端部はB形態。（511）は外傾する面をなす。（510）はc／e手法で，胎土はⅢb。口縁部外面に一部煤付着。（511）はe－c手法で，胎土はⅢd。口縁部外面全体と内面一部に煤が付着。

皿AⅠは4個体ある。（512）の口縁端部はC形態。a手法で，胎土はⅡc。底部内面に灯明芯の痕がある。（513・514・515）の口縁端部はA形態。（513・514）はc／e手法，（515）はe－c手法で，（514）は比較的丁寧にヘラケズリする。胎土は（513）がⅡcⅰ少，（514）がⅡaⅰⅱ多，（515）がⅢaである。（513）の口縁部外面の一部に煤が付着。

皿AⅡ（516）の口縁端部B形態。e－c手法で，胎土はⅡbⅰ少。

皿C（517）はやや丸みがある底部に，まっすぐに立ち上がる口縁部からなる。e手法で，胎土はⅡc。

椀AⅠ’（519）の口縁端部はB形態。c／e手法で，底部内面に板ナデ痕を残す。外面のヘラケズリがやや粗い。胎土はⅡb。

椀AⅠ（518・520～522）の口縁端部は（518・520）がB形態，（521・522）がC形態である。（521）の口縁端部はわずかに外反する。（522）は器壁がやや薄い。（518）はc／c’手法で，胎土はⅢcである。（520）はc手法で，胎土はⅡd。（521）はe手法で，胎土はⅢc。底部外面には小さい「○」形の墨書あり。（522）はe－c手法で，胎土はⅡdである。底部外面には「一」の墨書がみられる。（519）の口縁部外面の半分ほど，（522）の口縁部の一部に煤が付着。

甕AⅣは2個体ある。（523）の口縁端部はA形態。端面に一部凹線が巡る。体部外面は叩きののちハケメで，内面上半がハケメののち板ナデし，下半は当て具痕を残す。胎土はⅡdである。（524）の口縁端部はA形態。体部外面は平行条叩き，内面は当て具痕があり下半にはハケメを加える。胎土はⅠc。いずれも煤が付着。

黒色土器杯B（525）には，炭素吸着による黒色化がみられない。底部には，断面三角形の高台がつく。内面のヘラミガキに比べ，外面のヘラミガキは粗雑で，胎土は粉性。

須恵器には，杯A，杯B蓋，壺L，壺M，壺G，長頸壺がある。

杯A（526～528）のうち（526）以外はすべて完形。（528）は，直立気味に立ち上がる口縁からなるのに対し，（526・527）は，口縁部がやや外側に開き，器形に微妙な差がみられる。（526）の端部はやや肥厚し，（527）の端部はやや外傾する。いずれも底部外面はヘラ切りののちごく一部にナデを施す以外は，ロクロナデをおこなう。全体に平滑である。（526）の底部外面に「十」の墨書がみられる。（528）は灯明皿に使用。（526）がI_1類で，それ以外はI_0類。

杯B蓋（529）は完形で，平坦な頂部に屈曲する縁部をからなる。頂部外面はヘラ切りのあとロ

第11表　ＳＥ1842　中層

土師器					
形態	器形	法量区分	手法	個体数	
食膳具	杯A	Ⅰ	c/e	1	2(13.3%)
			e-c'	1	
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	-	
	杯B	Ⅰ	-	-	0(0%)
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	-	
	杯B蓋	Ⅰ	-		0(0%)
		Ⅱ	-	-	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	-	
	Ⅲ A	Ⅰ	c/e?	1	6(40%)
			c/e	1	
			e-c	1	
			-	1	
		Ⅱ	c/e	2	
		Ⅲ	-	-	
		不明	-	-	
	Ⅲ C	-	e	1	1(6.7%)
	椀A	Ⅰ	c/c'	4	6(40%)
			e-c	-	
			e	-	
			c	-	
		Ⅰ'	c/e	1	
		Ⅱ	-	-	
		不明	-	1	
	高杯	-	-	-	0(0%)
	小計			15(78.9%)	
貯蔵具	壺	B	-	1	1(100%)
		C	-	-	
		E	-	-	
		不明	-	-	
	小計			1(5.3%)	
煮沸具	甕A	Ⅰ	-	-	3(100%)
		Ⅱ	-	1	
		Ⅲ	-	-	
		Ⅳ	-	2	
		Ⅴ	-	-	
		不明	-	-	
	小計			3(15.8%)	
合計				19(47.5%)	

黒色土器		
形態	器形	個体数
食膳具	杯A	0(0%)
	杯B	1(100%)
	小計	1(100%)
その他	-	0(0%)
合計		1(2.5%)

緑釉陶器		
形態	器形	個体数
食膳具	椀	0(0%)
	Ⅲ	0(0%)
	小計	0(0%)
貯蔵具	-	0(0%)
	-	0(0%)
	小計	0(0%)
合計		0(0%)

須恵器				
形態	器形	法量区分	個体数	
食膳具	杯A	Ⅰ深	-	6(75.0%)
		Ⅰ浅	-	
		Ⅱ深	2	
		Ⅱ浅	4	
		Ⅲ	-	
		不明	-	
	杯B	Ⅰ	-	0(0%)
		Ⅱ	-	
		Ⅲ	-	
		Ⅳ	-	
		Ⅴ	-	
		不明	-	
	杯B蓋	Ⅰ	-	2(25.0%)
		Ⅰ～Ⅱ	-	
		Ⅱ高	1	
		Ⅱ低	-	
		Ⅲ	-	
		Ⅲ高	-	
		Ⅲ低	-	
		Ⅳ	1	
		不明	-	
	Ⅲ A	Ⅰ	-	0(0%)
		Ⅱ	-	
		Ⅲ	-	
		不明	-	
	鉢	-	-	0(0%)
	不明	-	-	0(0%)
	小計			8(47.1%)
貯蔵具	壺	A	-	8(88.9%)
		B	-	
		G	1	
		L	2	
		M	3	
		不明	2	
	甕	-	1	1(11.1%)
	不明	-	-	0(0%)
	小計			9(52.9%)
合計				17(42.5%)

灰釉陶器		
形態	器形	個体数
食膳具	椀	0(0%)
	Ⅲ	0(0%)
	小計	0(0%)
貯蔵具	浄瓶	1(33.3%)
	小壺蓋	1(33.3%)
	長頸	1(33.3%)
	小計	3(100%)
合計		3(7.5%)

その他		
	形態	個体数
中国陶磁器	-	0(0%)
弥生～古墳	土器	0(0%)
	須恵器	0(0%)
	小計	0(0%)
合計		0(0%)

総個体数 40

クロナデし，縁部と内面はロクロナデ，縁端部はヨコナデをおこなう。Ⅰo類。

壺M（530・531）は，いずれも底部外面に糸切り痕をとどめる。（530）はB群で，体部外面に一部自然釉がみられる。底部径はやや広く，断面長方形の高台を呈す。Ⅰo類。（531）はD群で，高台のない平底である。B群よりさらに肩の張る体部となる。Ⅰo類。

壺G（532）は底部片で，A群。

壺（533，534）は口縁部と体部下半をとどめる破片である。（533）は外反する口縁部片である。端部は直立して平坦面を有する。胎土は分類外。（534）は卵形状の体部に，底部外端に断面台形のやや細い高台がつく。内外面ともロクロ目をとどめ，底部外面は回転糸切りののちロクロナデを施す。内面はロクロ水挽きの凹凸をとどめる。なお底部外面に墨痕がみられることから硯に転用されたと考えられる。極めて硬質。Ⅵ類。

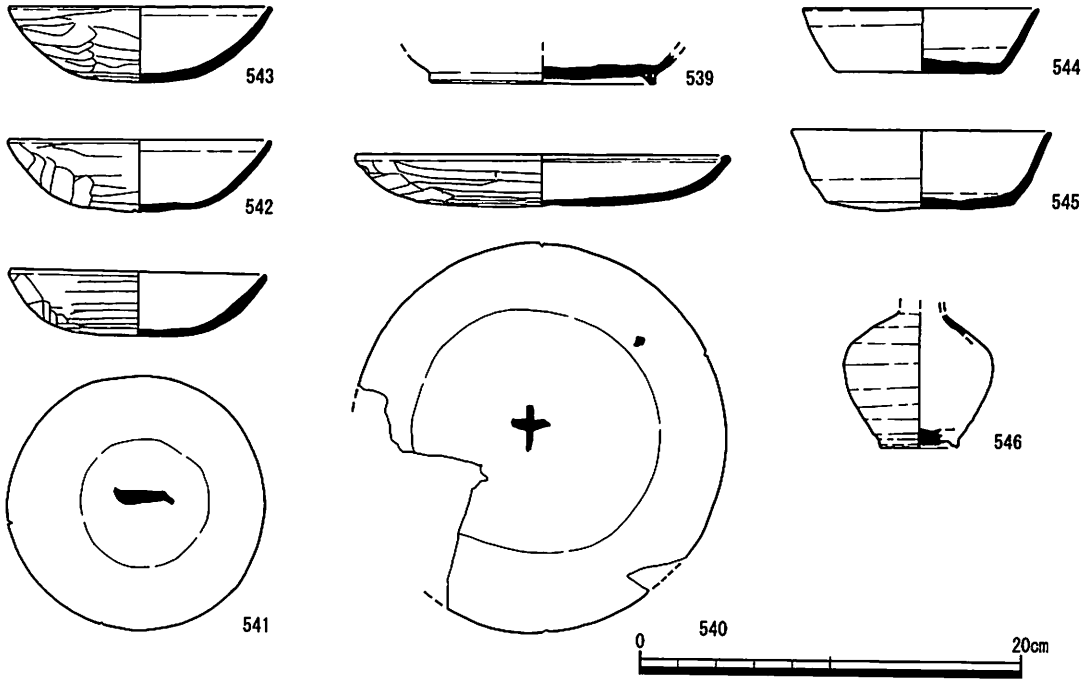
長頸壺（535）は底部片である。底部外面は回転ヘラ切り痕をとどめ，内面はロクロ目を残す。体部外面はロクロケズリする。高台は撥形に外方に開き，外端は丸みをもち，内端は少し内側につまみ出す。Ⅷ類。

灰釉陶器には，蓋，長頸壺，浄瓶がある。

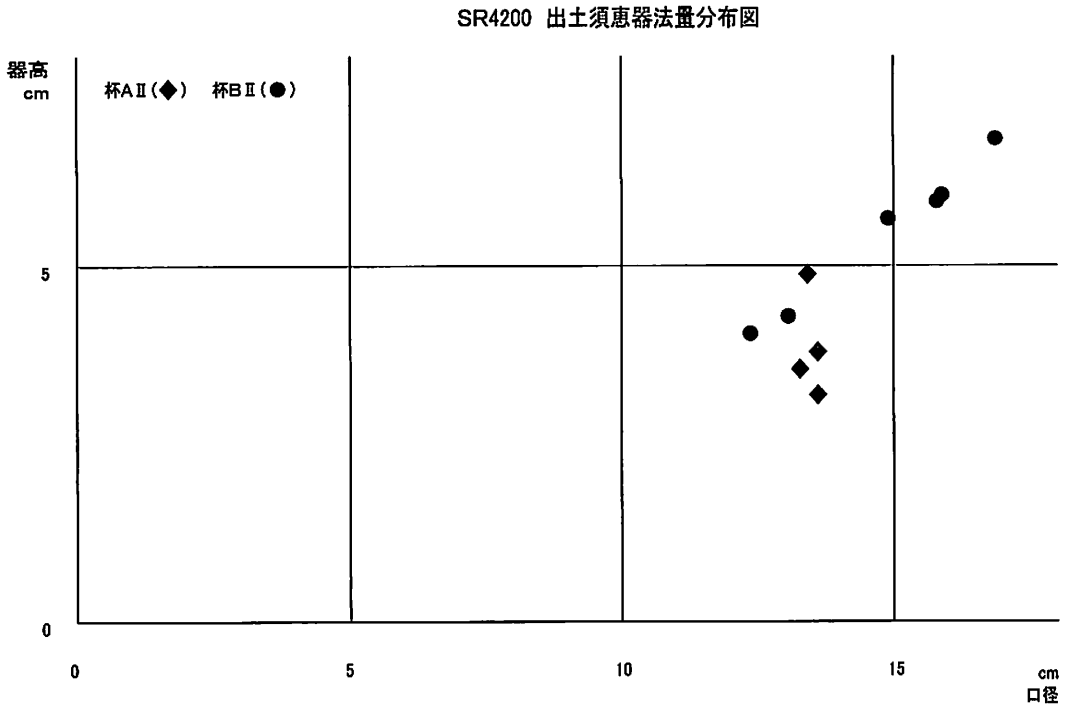
蓋（536）は，小型壺にともなうもので，球形のつまみがつき，縁部は直立する。外面には厚く釉が施される。胎土は1aであるが，砂粒を含み粗い感じをもつ。

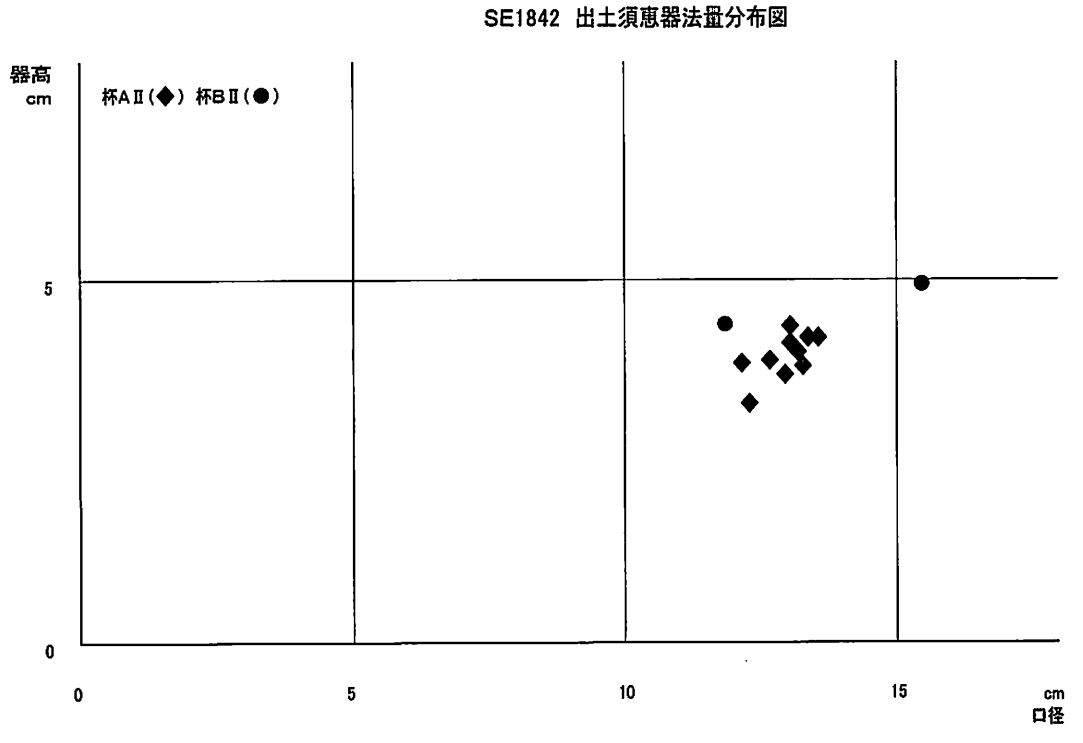
長頸壺（537）は口縁部片で，頸部と体部の接合は，二段構成でA2。胎土1b。

浄瓶（538）も口縁部片である。頸部上位に間隔の狭い2条の凹線，下位に間隔のやや広い2条の凹線を配し，頸部下端には円形の凹線による丸文を5ヶ所に施す。このような施文は，ほかに類例をみない。胎土1a。

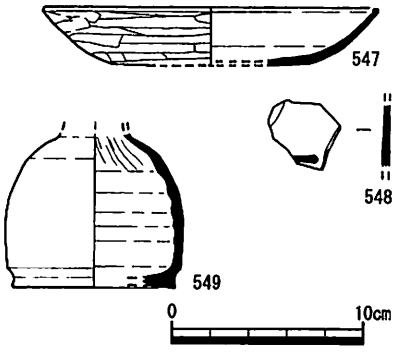


第32図　SE 1842　下層出土土器実測図（1/4）





第33図　ＳＲ4200・ＳＥ1842法量分布図（単位：cm）



第34図　ＳＥ1846
出土土器実測図（1/4）

ⅲ下層

土師器は，杯Ｂ１点，ⅢＡＩ１点，椀ＡＩ３点がある。

杯Ｂ（539）は底部片で，外端部に逆台形の高台がつく。口縁部外面ヘラケズリ，底部ロクロケズリののちロクロナデする。胎土はⅢｃである。ロクロ土師器で，他地域からの搬入品である。

ⅢＡＩ（540）の口縁端部はＡ形態。ｅ－ｃ手法で，底部内面に板ナデ痕を残す。胎土はＩｄである。底部外面に「十」の墨書がみられる。

椀ＡＩ（541～543）の口縁端部は（542・543）がＢ形態，（541）がＥ形態である。いずれもｃ手法で，(542）の底部内面には板ナデ痕を残す。胎土は（541）がⅢｄｉ少，(542）がⅡｂｉ少，(543）がＩｂである。（541）の底部に「一」の墨書がみられる。（542）の口縁部外面全体に煤が付着。須恵器にはわずかではあるが杯Ａ，壺Ｍが確認される。

杯Ａは２個体ある。(544)は，直立気味に立ち上がる口縁からなる。灯明皿に使用。Ｉ₀類。(545）の底部はわずかに丸みがあり，口縁部がやや外側に開き，丸くおわる。全体に平滑。底部外面には板状の当り痕がみられる。Ｉ₀類。

壺Ｍ（546）はＡ群で，体部内面最上位までロクロ水挽き痕をとどめる。底部径はやや狭く，やや低い台高台がつく。Ｉ₀類。

7　ＳＥ1846（図版112，第34図）

宅地東北，ＳＥ1842の北側で認めたものである。遺物の数量は５点と少なく，土師器が大部分を占める。

土師器には，杯ＡＩ，墨書片がある。

杯ＡＩ（547）の口縁端部はＡ形態。ｃ／ｅ手法で，胎土はⅡｄ。墨書片（548）は判読できない。須恵器には，瓶がある。

瓶（549）は，大きな平底で末広がりに膨らむ体部に細い口縁部がつく。全体をロクロ水挽きし，外面にロクロナデを施す。体部下端底部境を強くナデし，円盤高台状を呈する。底部外面は回転糸切り痕をとどめる。Ⅱ類。

8　その他（図版43・112）

土師器の高杯裾部（557）は，外下方にゆるやかに広がり，端部は内傾する面をなす。外面の調整はミガキ，内面下部はユビオサエ，上部にはしぼり痕が残る。胎土はＩｂで，縞目状を呈する。６世紀から７世紀のものである。ＳＤ2429より混入。

須恵器には，壺，壺Ｇ，平瓶，杯蓋がある。

壺（558）は，体部上半に１対の三角形折曲把手がつくものである。Ⅱ類。ＳＤ2429出土。

壺Ｇ（550）は口縁部を欠くが，なで肩の体部にほぼまっすぐ立ち上がる口頸部からなる。体部

長が短い。D群に類似。東一行北二門東南隅ＳＤ656上層付近より出土。

平瓶（551）はやや扁平な器形の背面からなり，注口，把手と体部背面の半分を欠く。体部の高さが体部最大径の1/2より短く，肩部の折れ曲がりは鋭く稜をなす。底部は平底である。体部下端部のみはロクロヘラケズリし，そのほかはロクロナデする。Ⅸ類に類似。東二行北二門東南中世溝から混入。

杯蓋（552）は，丸味のある頂部に，ほぼ直立する縁部からなる。縁部端は，やや内傾し丸くおわる。頂部外面はヘラ削りするが，中央部はケズリ残しがみられる。６世紀末から７世紀初頭。東二行北三門西端中央攪乱内より出土。

緑釉陶器（553）は，大型の椀で内湾しながら外方に開く口縁部からなり，端部はやや外反して丸くおわる。高台Ａで，京都産。東三行北五門東より出土。

灰釉陶器には，皿，壺，蓋がある。

皿（554）は，低い器形で，底部外面はヘラ切りののち粗くロクロナデをおこなう。細長い三角形の高台が付く。高台ｂ。口縁部内面のみ施釉１で，胎土１ｂ。東二行北三門北西隅より出土。

壺（555）は底部片である。底部外面は回転ヘラ切り，内面はロクロ目を残す。内面底部と体部の境は，水挽きによる段がみられる。胎土１ａ。東一行北五門東端ＳＲ0001上部付近より出土。

蓋（556）は縁部を欠く。頂部中央には宝珠つまみをつける。胎土１ａ。東二行北三門北西隅より出土。

註

1）財団法人古代學協会編『長岡京左京東院跡の調査研究』（『古代学研究所研究報告』第七輯，京都，平成14年）。

2）秋山浩三『13長岡京左京第120次（７ＡＮＦZN－２地区）～二条大路，東二坊第一小路，東二坊間小路交差点～発掘調査概要』（向日市埋蔵文化財調査センター『向日市埋蔵文化財調査報告書18』，向日，昭和61年）。

3）笹沢正史『須恵器瓶類の口縁頸部接合痕跡』（『北陸古代土器研究』第９号所収，金沢，平成13年），63～71頁。

4）註２前掲論稿。

5）森内秀造･永井信弘『播磨とその周辺の須恵器』（古代の土器研究会『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東２須恵器－』所収，奈良，平成５年），26頁第24図。

6）兵庫県加西市教育委員会永井信弘氏のご教示による。

7）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅵ』（『奈良国立文化財研究所学報第23冊』，奈良，昭和50年）。

8）堀内明博『平安京の土器・陶磁器』（『平安京出土土器の研究』〔『古代學研究所研究報告』第４輯〕所収，京都，平成６年），109～161頁。

9）巽淳一郎氏の御教示による。

10）註３前掲論稿。

11）望月精司『須恵器甕の製作痕跡と成形方法』（註３前掲書所収）27～52頁。

3　木製品

木簡，人形，斎串など小型品が約450点，井戸枠・柱痕などの大型品が約205点あり，ＳＲ4200・0001，ＳＸ820などから大部分が出土した。小型品のうちわけは，木簡，木印，木製祭祀遺物，容器，食事具，服飾具，工具，部材があり，ケズリ屑，松明とみられる一端が炭化した棒状のもの，一部に加工痕が認められるものなども含まれる。

樹種同定については一部の木製品しかおこなっていない。破損が著しいもの，用途が峻別しがたいものは，用途不明品とした。詳細は，木製品観察表に委ねる。

A　木簡（図版50・126）

木簡及び類似資料は，13点あり，ＳＲ0001より１点（３），ＳＸ820より３点（６・８・12），ＳＲ4200より９点（１・２・４・５・７・９・10・11・13）が出土した。

（１・２）は，人名や駅名と考えられる文字をとどめる削屑で，書体が非常に類似している。

（３）は讃岐国苅田郡からの白米の荷札。下端を欠く。苅田郡は，讃岐国最西端の郡で，北は瀬戸内海に面する。『延喜民部式』年料米条には，（年料春米）を運京する国の一つに讃岐国がみえる。ＳＲ0001が南流する東側約15ｍ付近で出土，獣骨や人形，斎串，陽物など祭祀に関連する遺物と共伴する。

（４）は宍肉１つの付札である。（５）は，九九に関する習書である。両面に墨痕が残る。

（６）は何らかの記号を表示したものと考えられる。（７）は習書の削屑である。（８）は『難波津に　咲くやこの花　冬籠もり　今は春べと　咲くやこの花』という歌の上句である。この歌は，『古今和歌集』の仮名序にあり，手習い歌として用いられる著名なものである。（９）は木簡ではなく，天秤棹の端に記された単位である。『延喜主計式』諸国庸条のなかに『凡諸国輸庸（中略）綿五両二分西海道諸国五斤成一屯。』とあり，綿１屯の重量であることが知られる。(10)は，里名をとどめる削屑である。(11)は，文字の半分を欠く。厚さ５mmとやや厚い。(12)は，上下端は，原型をとどめるものの，右半分を欠く。(13)は，漢詩の習書と考えられ，端正な文字で記される。

木簡の釈文・内容（単位はmm）

（１）□稲持刑部田須万呂□〔柱カ〕（板目）

部葦人　月

（２）□□□〔駅カ〕日（板目）

（３）「＜讃岐国苅田郡白米（板目）　(99) × 19 × 2.5　039型式

（４）「＜賀宍一古」（柾目）　(81) × 19 × 4.2　032型式

（5）（表面）「□□八十一八九七十二七九六十三　六九五十四」（柾目）
　　（裏面）「五九四五□　　」　247 × （27） × 5　011 型式

（6）「○××□　（板目）　（87） × （15） × 3.2　019 型式

（7）我我我我〔我カ〕□（板目）

（8）（表面）「奈仁波都□佐久夜」（板目）
　　（裏面）「□□□□□」　（180） × （38） × 7　011 型式

（9）五両一分」（板目）　（58.5） × 14 × 10.5

（10）〔宜カ〕□里□（板目）
（11）□□　（板目）　（47） × （8.5） × 5

（12）「久遊□□□去□（板目）　（189） × （15.2） × 6

（13）「□山畫」（板目）　184 × 31 × 3.3　011 型式

B　遊戯具・文房具（図版 51・127・131）

独楽（14・15）は，樹皮を剥いだ心持材の一端を削りあげ先端を乳頭状に削り出し，他端は平坦に切断される。（14）は乳頭状先端が欠損する。

木印（16）は，角材を削り，一木からほぼ方形の印台とほぼ四角柱を呈する紐の把手をつくり出す。篆刻の木印である。印面には「印」と篆刻が施され[1]，朱色の印泥が残存していた。この朱の同定をおこなった結果[2]，鉄を主成分とするベンガラと判明した。ＳＲ 4200 より出土，高さ 10.5cm，印面は縦 43 ㎜，横 35 ㎜を測る。

算木（17）は，四角柱に削りだしたものである。両端は，ほぼ平滑に切断されている。各面には幅約５mm ほどの切込みを入れ，各面に一から四ヶ所，切込みを入れ，数を示す。全長 5.6cm，断面は縦１cm，横 1.2cm の長方形を呈する。

漆紙（18）は，漆紙を三ツ折以上に畳んだ状態のもの。赤外線カメラで分析したが，文字は確認されなかった。畳まれた状態で高さ５cm，縦７cm，横６cm である。

C　籠編物（19・20・212）（図版 51・127）

３点が出土。（19）は，幅５mm の竹条を用いて小型の円筒形に編む。口縁部は，この竹条を束ねて固定する。残存長は，25.5cm，幅 8.5cm である。（20）は一部をのこすのみで，籠状に編んで

いる。竹条の幅は，(19) と同様で，やや薄く表皮を取り去ったものを使用していたと考えられる。一本送りの二間編代に編む。このほかに同様の (212) が一点出土しているが遺存状態がわるい。これらは，すべてＳＲ4200から出土。

D　紡織具（図版51）

糸巻きの横木 (21) は，横木の頂部は枠木を取り付けるために直径約８mmの円筒形に削り出される。枠木結合部は直径10mmの木釘孔をあける。紡輪 (22) は，円版の中心に糸巻き棒をとおす孔があけられていた。

E　工具・漁具（図版51・127）

鎌 (23) は，刃が着装された完形品で，柄断面は楕円形を呈し，全長約26cm，幅2.4cm，厚さ1.6cm。柄尻の部分には，山形に突起をつくり滑り止めとする。鎌身は全長21cm，幅2.4～３cm，厚さ２mmで，その取り付け部は，縦4.7cm，幅約5mmの孔を斜めに開け着装孔とする。鎌身の基部を折り返し，さらに楔を二本差し込み柄と固定する。柄表面は，丁寧に成形される。ＳＥ670の最下層から出土。

撚網 (24) は，全長52.5cmの心持丸太材枝部のＶ字型をそのまま使用する。樹皮も一部残存していた。枝部には先端付近にＬ字型の金属の留具が差し込まれる。網などを固定するためのものと考えられる。法量は，断面が縦３mm，横3.5mmのほぼ正方形を呈し，残存長2.3cmを測る。

F　服飾具（図版52・127）

横櫛は18点が出土。完形に近い (25) をのぞきほとんどが破片である。横櫛は，すべて肩部に丸味をもたすＡⅡ形式に該当する。多くが３cmあたり約30枚前後の歯を挽きだす。子細に検討すると，肩部の丸味の差異により大きく２つに区分される。辻裕司の分類[3]によると (30) がＡⅡ－ａ－１形式に該当する。ＳＥ670から３点，ＳＲ4200から11点，ＳＲ0001から１点，ＳＸ820から３点が出土。

連歯下駄は３点が出土。(34～36) は，台と歯を一木からつくるもので，すべてＣⅢｄ形式に該当する。(34) は鼻緒孔部分の半分を欠く。歯の先端は摩耗している。(36) は，前壺部分を欠く。(34・35) よりやや小振りである。

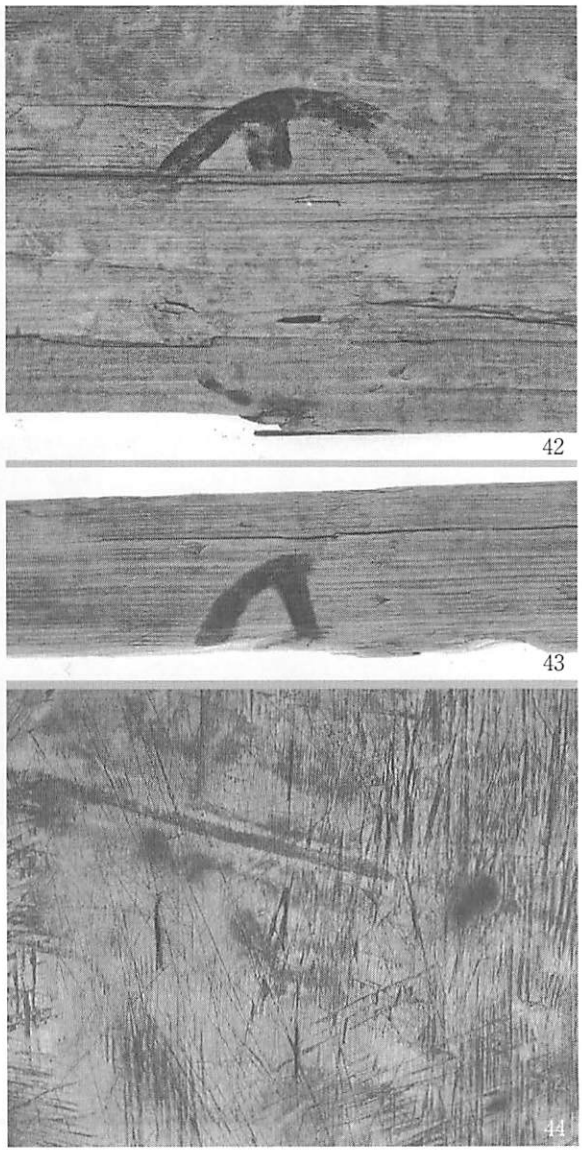
檜扇 (37～39) はいずれも，扇骨の一部である。(37) は，厚さ2mm，１ヶ所径約３mmの孔を穿つ。(38) は，厚さ1.5mm，5.5cmの間隔で２ヶ所径2mm孔を穿つ。(39) は，前掲の２例に比べ骨が厚く，厚さ約5mm，１ヶ所径約３mmの孔を穿つ。

G　容器・栓（図版53・54・128・129）

蓋 (40) は，曲物や土器の蓋で，上面直径16cm，底面直径12cmの円形，高さ1.5cmの低い円錐形を呈す。ＳＲ4200から出土。

挽物は破片をふくめ12点が出土。このうち器種の明確なものが5点あり，いずれも皿である。この他の破片についても，皿の可能性が高いものが過半数をしめる。

皿C類：(41) は，1/3ほどを残す。幾分外反する口縁，器壁は薄く挽きだす。復元径は約21cm，部分的に剥離するが，内面には不規則な刃痕を残す。(42) は，幾分外傾する口縁を挽きだす。口径22cmである。内面には不規則な刃痕を残す。裏面中央に直径約6.5cmの丸い焼印の痕跡，轆轤の爪痕が全ヶ所ある。(43) は，口縁端部が欠け，残存率は約1/4あり，復元口径約21cmを測る。内面には轆轤目が明瞭に識別される。裏面には (42) と類似する焼印がある。(44) は，幾分外反する口縁，器壁は薄く挽きだされ，内面および底面には不規則な刃痕を残す。また，裏面には長さ1.5cm程度の轆轤の爪痕が5ヶ所ある。皿A類：(45) は，復元口径約27cmを測り，外反する口縁に，直立する高台を挽きだす。1/3は欠損。内面には不規則な刃痕，中央部に一部，焦げ痕があり，裏面には轆轤目，轆轤の爪痕が1ヶ所ある。



第35図　挽物に残る焼印・轆轤の爪痕
裏面の焼印（42・43），裏面の轆轤の爪痕（44）

漆器は57点が出土。このうち，器種のわかるものは25点，他は破片や木胎のない膜状のものである。なお，一部内面朱漆塗，外面黒漆塗のものが出土したが器種は確定できなかった。器種が明確なものを中心に記述する。

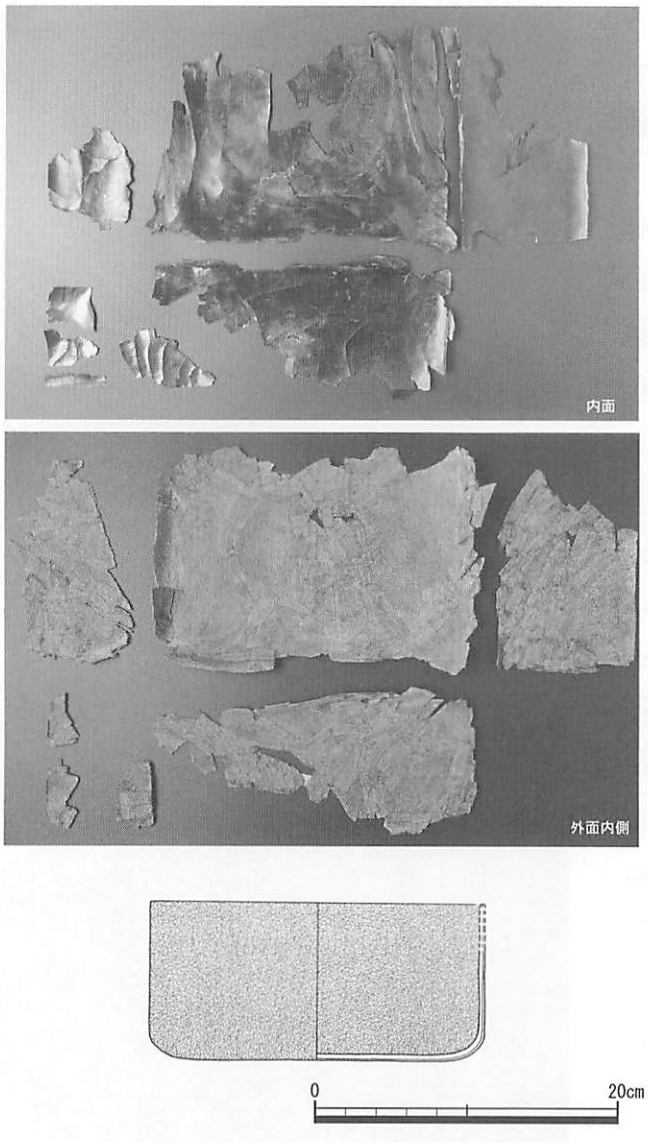
(46) は遺存状態が悪いが，手箱と考えられる。木胎のない膜状のもので，保存処理後図化（挿図第36）した。復元規模が，縦15cm以上，横約22cm，高さ10.3cm。布着せ後，黒漆をかける。

黒漆塗方形の小箱 (47) は，復元規模が，一辺約10.4cm，高さ2.9cm。布着せの有無は確定できない。

合子身 (48) は，口縁を合口造りとする。復元規模が，口径11.3cm，高さ4.3cm。内外面ともに布着せをせず木胎に直接黒漆を塗る。

皿B (49) は，復元規模が，口径19.9cm，高さ3.95cm。内外面ともに布着せをせず木胎に直接黒漆を塗る。

杯A (50) は，口径15.2cm，高さ2.3cmである。布着せをせず木胎に直接に黒漆をかける。



第 36 図　黒漆塗手箱　実測図・写真

椀（51・52）は，いずれも木胎はほとんどなく，口縁部だけが残る。（51）は，外反する口縁をもち復元口径は 15.7cm。（52）は（51）より多少小振りで，復元口径は 11.5cm。

蓋（53 ～ 54）は，いずれも縁部内面の内よりに反りをつけ頂部には，宝珠つまみをもつ。

（53）は，つまみ部を欠く。内外面ともに布着せをせず木胎に直接漆をかける。口径は 14cm。（54）は，縁部内面の内よりに反りをつけ頂部には宝珠つまみがある。頂部と縁部の境に稜線を施す。内外面ともに布着せをせず木胎に直接黒漆を塗る。口径 14.4cm。

蓋（55）は，平坦な頂部と直立する縁部からなる。頂部とは縁部の境に稜線がはいる。口径 21.5cm に復元される。縁端部内面は剥離欠損，内外面ともに布着せをせず木胎に直接漆をかけ，縁端部は幾分厚く塗る。

曲物は 58 点が出土。このうち多くが，底板・側板の破片である。口径は，10cm 前後，約 16cm，18cm と大きく 3 つに区分される。ＳＲ 4200 からの出土が過半数を占め，ついでＳＸ 820 が 12 点，ＳＥ 670 からも数個体分が出土。

樺皮結合曲物Ｂ（図版 54・129）

（56）は，径約 17.7cm，高さは約 4cm である。側板綴じ部は，一列一段のみ残る。底板と側板は，ほぼ均等に 4 ヶ所の樺皮紐で結合される。（57）は，側板は 1/2，底板は 1/2 以上を欠く。径約 16cm，高さは 1 cm 以上である。側板綴じ部は，一段のみ残る。底板と側板は，樺皮紐で結合される。（64）は，楕円形曲物の側板と考えられ，遺存状態がわるい。復元規模は，縦約 40cm，横約 30cm，高さ 3.5cm。ＳＲ 4200 より出土。

釘結合曲物（図版 54・129）

（58）は，側板のみで径約 11cm，高さ約 5.2cm を測る。側板綴じ部は二列前内五段後内一段綴じと，一列内二段綴じである。下端に 1 ヶ所径 1mm ほどの釘孔がある。（59）は，側板の過半を欠き，径約 10cm，高さは 4 cm 以上である。側板綴じ部は二段以上，底板側面周囲に不規則な

10ヶ所の釘孔がある。(60) は，側板の上半を欠き，径は13cm，高さは2.3cm以上を測る。側板綴じ部は内一段のみ残る。底板側面周囲に4ヶ所の釘孔がある。(61) は，側板の上半を欠き，径約15.6cm，高さは6.5cm以上である。側板綴じ部は一列内三段，底部側板外周に高さ1.5cmの箍を巻き，その上から4ヶ所の釘孔がある。(62) は，側板の上半を欠き，径約16cm，高さは1.9cmである。側板綴じ部は一列内二段，底部側板外周に高さ1.7cmの箍を巻き，その上から2ヶ所の釘孔がある。底板内面に不規則な刃痕を残す。(63) は，側板の1/2以上を欠き，径約18cm，高さは7.2cm以上である。側板綴じ部は，一列内二段，これも底板側面周囲に2ヶ所の釘孔がある。これも，底板内面に不規則な刃痕を残す。

H　木製祭祀遺物

1　人形（図版55・56・129・130）

出土した人形は61点にのぼる。これらのうち，ＳＲ4200から56点が発見され，またほぼ同位置で，約30点が出土したＳＲ4200西肩部の一群がある。ここは，川の蛇行する屈曲部であることから，これらが元位置をたもつものであるか判断しがたい。

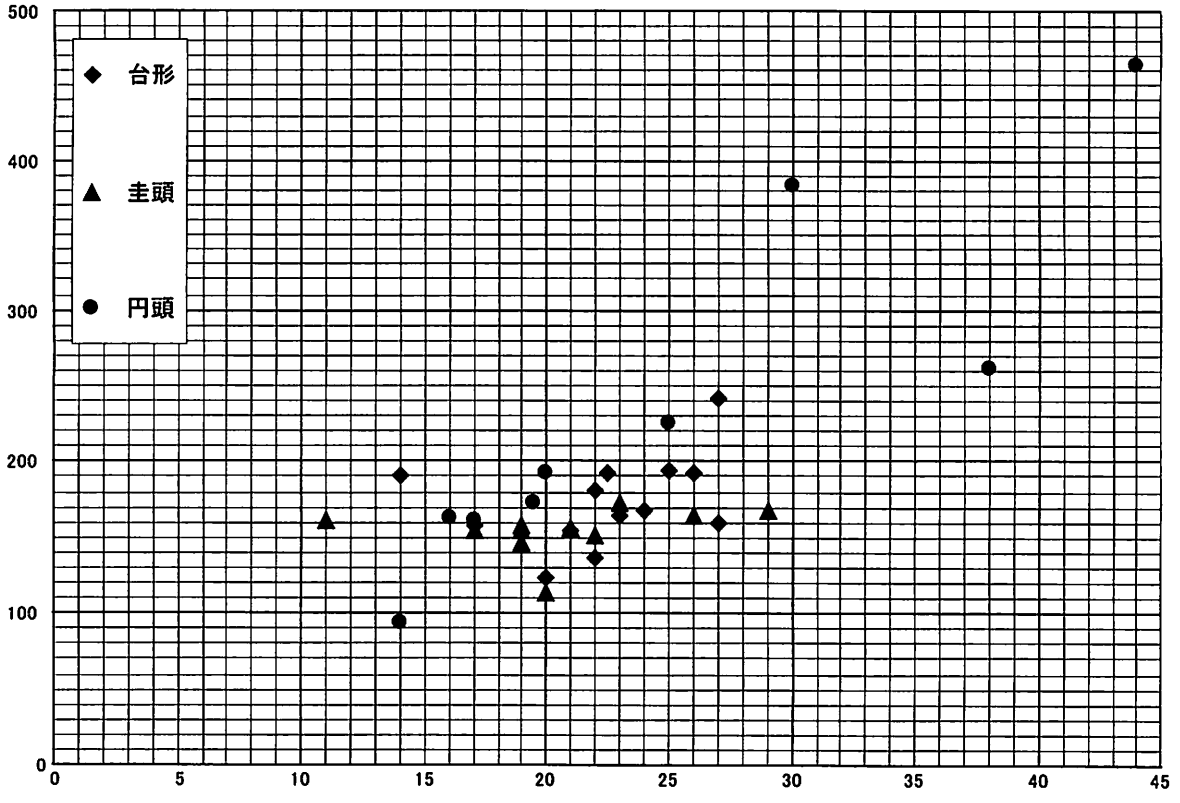
人形の形状は，厚さ2～5mmの扁平な板材に切込みを入れ，頭，肩，腕，足を表現し，さらに墨により目，口，鼻，髭，頭髪などを表現しているものもみられ，その描写も様々である。とくに，墨書に表現する顔の表情も，写実的なもの（67）から簡略化したもの（79）まで様々である。今回出土したものには，全長が10cm，15cm前後，20cm前後，25cm前後といくつかのまとまりが認められ，幅は22mm前後のものが大勢をしめる。手の表現については，欠損により不明なものを除き，すべてが切込みにより手を表現している。股部の形態は，２方向より切込みを入れ，逆Ｖ形を呈するものが大勢をしめ，足先側より２つ割れ目を入れ，適当なところで切り取り，コの字形を呈するものは，(66・79・93・107) に認められる。また，出土状況から明らかに複数で１群と考えられる（68～73）のように６枚が一括で出土したものもある。

出土した人形の形状は様々である。大平茂の型式分類[4]（以下，大平案）によると，手の切込み方法の差によりⅠ～Ⅳ類に区分し，さらに肩部の切込みによりａ～ｄの４型式に区分する。この分類によると今回出土した人形は，Ⅰ類ａ・ｃ型式が認められる。大平案ではⅠ類ａ型式は，７世紀後半から８世紀後半，Ⅰ類ｃ型式は，８世紀後半から９世紀中頃に設定される。これらは，今回出土した人形の共伴する土器類の年代とも合致する。なお，ＳＲ4200から一括出土したもの（68～73）のうち，ａ類とｃ類が含まれることから，変遷の過渡的状況をしめす資料とも考えられる。

大平案では，頭頂部などの様々な形状は年代を反映する重要な指標でない[5]とされる。しかし，一括出土した（68～73）のうち異なる型式の一群が認められ，遺構の年代も極めて限定されることから，ここでは頭頂部の形状を下位区分として以下に設定し記述する。なお，出土遺構の層序など詳細は，観察表に委ねる。

円頭：丸みをもたせたもの。

台形頭：圭頭の端部を切り落として台形にしたもの。



第37図　人形法量分布図（単位㎜）

圭頭：頭部の形状について山形にかたどったもの。

他これ以外とする。

円頭：（66～68・72・74～79）は，頭部全体を卵形にするものと，頭頂のみ円形とし，頭部両側面を平坦に切断するもの（68・72・74～77・79）がある。大きさは，（66・67・79）が大型で26.3～46.3cm，（74）が約9.4cm，16cm前後のものなど様々なものがある。

台形頭：（85）は体部背面に判然としないが，「□□（符カ）□□（作カ）」と墨痕が見られる。大きさは，13，16，19cm前後のものなどがある。（97・98）は，顔の表現・形態が類似し，いずれも髭の表現がみられる。（97）は，後頭部に髪を表現した墨痕がみられる。

圭頭：16cm前後のものが過半数をしめる。

その他：（65・71・80）は，頭頂部に髷などを表現したとみられるもの。（65）は，今回出土した中でも最大で長さは47.6cm。

破片：（117～121）は，いずれも全容が確定しない。（120・121）は大型の人形と考えられる。

2　斎串（122～159）（図版57・130）

出土した斎串は54点ある。各型式ごとに記述し，型式分類に合致しないものは，類似する型式のなかで述べる。これらは，SR4200から35点，SR0001，SD4185から7点，SX820から4点で，獣骨や祭祀に関わると土器類と共伴して出土した。ただし，全容が確定できるのは18点ほどである。A型式：（122）は，両面に木の葉を模した墨痕がある。（123）は，一端が炭化しており，松明などに使用された可能性がある。（125）は，A型式に区分してあるが上端部に切込みが見

られる。

B型式：全容が確定できるのは，(129，130，131）でいずれもＢⅠ型式である。全長は，19～20cm，幅1.2cm前後。一端は平坦に切断し他端は，山形に削りだす。

C型式：もっとも多く出土した型式で，このうちＣⅡ型式が７点ある。これらは，14cm前後，20cm前後の２つに大きく分かれる。出土地点は，ＳＸ820からの１点以外は，すべてＳＲ4200とこの分流ＳＤ4185から出土した。(142）は下端を欠くが，形状からＣ型式とする。このほか，剣先状の下端とみられるものが８点出土した。(152）は，今回出土した斎串の中で最大長のもので37.3cmある。両側面に一対の切込みが２ヶ所以上ある。

D型式：Ａ～Ｃ型式に属さないものを扱う。(141）は，一端を剣先状につくり，他端を斜めに切断する。側面の切込みは認められない。A，C型式の両方の要素をもつ。(157）は，一端を平坦に切断し，他端は欠ける。側面の切込みは，１ヶ所のみある。(158）は，一端を欠くためここに分類する。他端は，山形にし，裾部付近から，一対の切込みを入れ，２cmほど下方にさらに一対の切込みを入れる。この切込みに挟まれた部分に「×」を両面ともに刻むⅥ式。(159）は，一端を平坦に切断し，他端を剣先状にする。

３　その他（図版58・130・131）

鎌形（160）は，鎌を模した形代である。片面のみ立体的に加工し，背面は平坦に仕上げる。刃が着装された完形品で，柄は全長約26cm，幅1.6cm，厚さ７mmを測り，柄尻の部分には，山形に突起をつくり滑り止めとする。鎌身は全長11.6cm，幅1.8cm，厚さ2.5mmを測り，鎌身の取り付け部は，縦2.5cm，幅2.5mmの孔を斜めに開け着装孔とする。この鎌の全長は，(23）の全長に等しい。両者はＳＲ4200より出土。いずれもＢ型式。

刀物形（161・162）は，半分を刀身とし，のこりを柄にあてる。(161）は，刀身上端部のみ刃をつける。

刀子形（163）は半分を刀身とし，のこりを柄にあてる。刀身には，断面三角形の刃をつけ，身と柄の間に段をつけ身と柄を区別する。柄の断面は隅丸方形で写実的なつくりである。(164）は刀身のほとんどを欠くが，柄と身の間の段差が明瞭にある。ＳＲ4200より出土。

陽物形（172）の，亀頭部には，加工痕が明瞭にある。基端には幅約８mmの溝をめぐらせる。芯持丸太材の棒を用い，一部樹皮が残る。写実的に表現される。全長23.4cm，径約５cm。ＳＲ0001より木簡，獣骨等とともに出土。

動物形（173）は耳，足などは表現されず，抽象化される。頭部を，一端に切込みをいれ，胴部は，中央部をやや屈曲させる。尾の部分は，上部をややカーブを描き，下部を平坦に切断する。馬形ＡⅡ型式と考えられる。

(174）は小片であるが，頭部を切込み，口部をやや尖らせることで表現しており，鳥形の可能性が高い。

立体人形（175）は，立体人形で割材の一端に球形の頭部をつくる。顔の表現は破損しており判然としない。ＳＲ0001より出土。

I　棒状木製品（図版58）

一部加工をともなう棒状のものを指す。（176）は，端部の加工から斎串B型式に該当するが，全長12cm，断面は方形であることからここで取り上げた。（181）は，一端を刀身状にし，他方は棒状に加工する。刀形の可能性も考えられる。

J　食事具（図版58）

箸（185～189）は，全長のわかるもので20cm前後である。断面は，厚さ約5mm，ほぼ円形に整形する。杓文字形木器（190）は，柄と身からなる。柄の端部は平坦に仕上げ，身の端部は，半円形につくる。（191）は，匙形木器身の破片で，身の先端は半円形でわずかに内湾する。

K　その他（図版59・131）

（192）は，板状木器で孔が数ヶ所あけられる。2孔1対のものが2ヶ所ある。折敷などの底板の可能性が考えられる。（193）は，円形の曲物底板と形状は同じで，側面に釘孔が6ヶ所ある。また，中央部には径1cmの円形の孔と2ヶ所に補修孔がある。類似のものを蒸器のサナに当てる説[6]がある。（194・195）は，刀剣の形をした材の一側面に鋸歯を刻んだ木器。（196）は，棒状木器の片方の側面に不規則な切込みをいれる。（197）は，枝材3本を樺皮で巻くもので把手などの用途が考えられる。（201）は，棒材の一端を細く削り，他方に紐などを巻く，くびれ部を削りだす。全長3.5cm，径約1cmである。栓の可能性が考えられる。（204・205）は，いずれも鋤身の破片の可能性がある。（206）は，割材を円柱状に加工し，中心部に径約14mmの孔をあける。（207）は，一端を円筒形にし，他端を平坦にする。両側面に金属製の縦2.5mm，横3mmの断面長方形の釘が打ち込まれ，釘は一方のみ残る。（208）は，棒状の木器で一端に3mm程の孔があけられる。他方は欠けており全容は不明である。（209）は，横槌の身の破片と考えられる。身の部分に加工痕をとどめるが，その稜がやや窪むことから使用痕とも考えられる。（210）は，心持材を加工したもので断面は，底の丸いフラスコ状を呈す。中央部に12×28mmの方形孔を穿つ。形状から，木槌などが考えられるが孔の位置が柄を挿入するにしては通常のものとは異なる。

樺皮巻（202）は，SR4200から出土した樺皮が丸く巻かれた状態のもので，幅約4cm，展開すると全長約15cmほどになる。曲物などに使用される樺皮加工前のものと考えられる。

紐（211）の全長は遺存状態が悪く確定できないが，少なくとも40～60cmある。紐は，まず右回りに撚り，それを3～4本を左回りに編みあわせる。紐の同定の結果[7]稲科の植物であることが判明した。SX820池尻最下層より出土。

L　部材

SE670（図版60・61・139）

井籠組の井戸枠である。5段が確認され上段一段目の状況は悪い。井戸枠は，一段が幅約1.5m，高さ約28cm，厚さ約5cm，内法は，約1.3m四方である。また，各段を繋ぐ枘穴が各々確認された。

また，西側下から２段目外面中央部には「西二」の番付や各段の枘を切る部分に墨付けの痕跡が明瞭に残る。また，井戸枠側面に刻印とみられる圧痕が10ヶ所ある。なお，井戸枠外面には，手斧による加工痕が明瞭に残る。

ＳＥ3365

井戸枠は，板材を３から４枚ほどを重ね，補強する。四隅には縦の角材と横材により枠を構成する。井戸枠の下部で確認された曲物は，直径60c m，高さは43cmを測る。幅７cmの箍を３ヶ所巻く。

箍は，おのおの外側より木釘を５～８ヶ所打ち固定する。内面には，縦方向と斜め方向の規則的な無数のケビキがある。

木簡の釈読に関しては京都大学　鎌田元一・西山良平・吉川真司の各先生方より，木印の釈読は大阪府教育委員会久米雅雄氏より御教示を頂いた。

註

1）大阪府教育委員会文化財保護課久米雅雄主査の釈読による。
2）分析結果　付章２参照
3）辻祐司『横櫛－横櫛の分類と生産遺跡－』（財団法人京都市埋蔵文化財研究所『研究紀要』第７号掲載，京都，平成13年）87～96頁。
4）大平茂『木製人形年代考上』（『古文化談叢』第30集掲載，北九州，平成５年）567～591頁，大平茂『木製人形年代考下』（『古文化談叢』第35集掲載，北九州，平成７年）59～78頁。
5）註４前掲論稿。
6）奈良国立文化財研究所『木器集成図録』（奈良，昭和60年）57頁。
7）分析結果　付章２参照

4　土製品

A　硯（図版120，第38図）

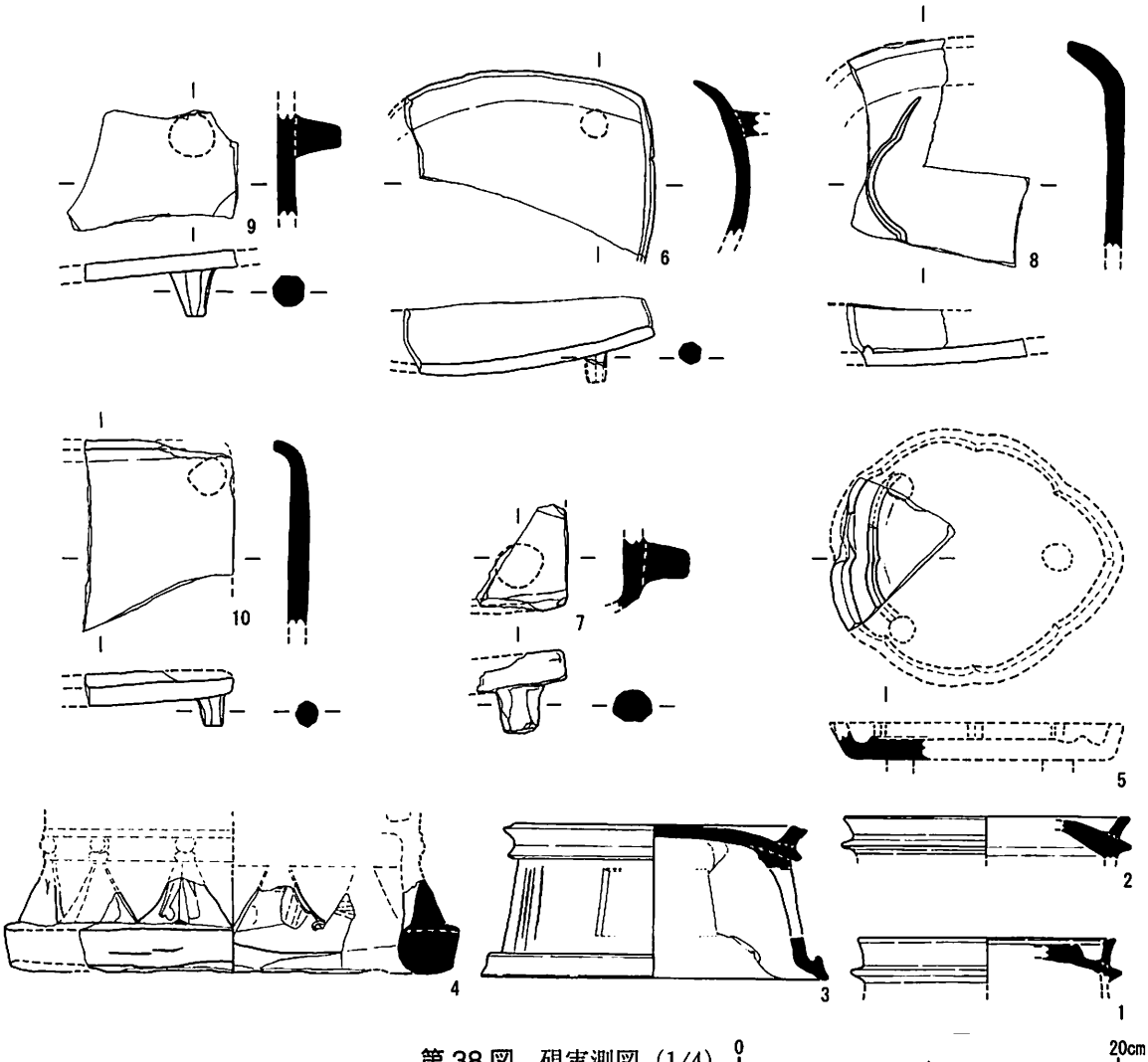
調査時を通じて，円面硯何５個体，風字硯何７個体が出土し，いずれも破片である。

台付円面硯

硯部となる円面と裾広がりの台部を連続的に成形し，硯部の外端に高い外堤を巡らす。硯部の外端には１条の凸帯が巡るものが大部分を占める。硯部は凸面をなし，境をつけるもの（１）とつけないもの（２・３）がある。（２）は全体に摩滅していることから，二次的堆積と考えられる。Ⅴ群。ＳＲ0001第１層より出土。（３）の圏足には幅の狭い長方形の透かし孔をあけ，その間に４条の縦線文を施す。Ⅰ′群に類似。ＳＲ0001第３層より出土。

蹄脚硯

（４）硯部と脚部を連続的に成形したものである。台部下半の外側には分厚く粘土を巻き付け，断面方形の安定した基部に成形する。脚部には，逆三角形状に篦で透かし孔をあけ，三角柱状の脚注を呈する。側面を篦によって大きく面取りする。非常に硬質である。ＳＲ0001第３層より出土。



第38図　硯実測図（1/4）

宝珠硯

（5）はおおよそ円形を呈し，一端が尖頭となる平面を呈することから，宝珠硯の名が付けられた。外堤は僅かに丸みのある６ひらの花弁と１ひらの尖った花弁からなり，弁間は内側に窪む。陸部と海部の境は，外堤同様花弁状を呈する低い内堤が設けられる。外面には灰が被る。陸部は摩滅している。ＳＥ 1846 より出土。

風字硯

長方形の硯面に海部と陸部両側端の三方に外堤をつくり，海部に一定の深さを設けるために，陸部縁側裏に２脚つける。胎土には，須恵器，灰釉陶器，黒色土器などさまざまである。硯面の海部と陸部の境に，波形ないしは連弧形の内堤をつけるものがある。これは型押しないしは手づくねによって成形されたのち，ナデあるいはヘラ削りによって調整される。陸部に顕著な摩滅がみられ，墨痕をともなう。このほか硯面を縦断する堤を設置した二面硯（11）もある。（６）は，外面はヘラ削りされ，７～８角に面取りされた幾分高い脚がつく。須恵器のもの，全体に外堤と硯面の境が不明瞭となって，凹面を呈す。陸部と脚の上半をとどめる。外面には灰が被る。胎土は極めて良好。Ⅶ群。（７）は陸部の一部と脚をとどめる破片である。脚は太くて短い，断面不整八角形を呈す。Ⅰ′群。ＳＲ 0001 第３層より出土。灰釉陶器（８－10）は硯面以外の外面全面に灰釉を施す。扁平な板状の脚がつくものもみられる。（８）の陸部には，連弧形の内堤がみられる。胎土はいずれも灰白色を呈し，精良である。

黒色土器のものは，全体に薄作りで外堤と硯面の境が不明瞭となって，凹面を呈す。外堤端部内面には浅い凹線が１条巡り，全面にわたって丁寧にヘラ削りが施されている。内外面とも漆黒色を呈す（12）。

このほか，須恵器の杯Ｂ，同蓋，灰釉陶器の椀皿などを転用した硯もある。

Ｂ　祭祀関連遺物

壺Ｂ（図版 49・121，第 39 図）

Ａ形態が 23 点（２～５，13，20～26，36～44，46，52），Ｂ形態が２点（６，45），Ｃ形態が３点（27，28，50），破片が 24 点（１，７，８～12，14～19，29～35，47～49，51）ある。その大部分（１～45）がＳＲ 4200 からで，ＳＲ 0001・ＳＸ 820・ＳＫ 1842 からはわずかに認められる。胎土分類は，土師器の項に基づく。

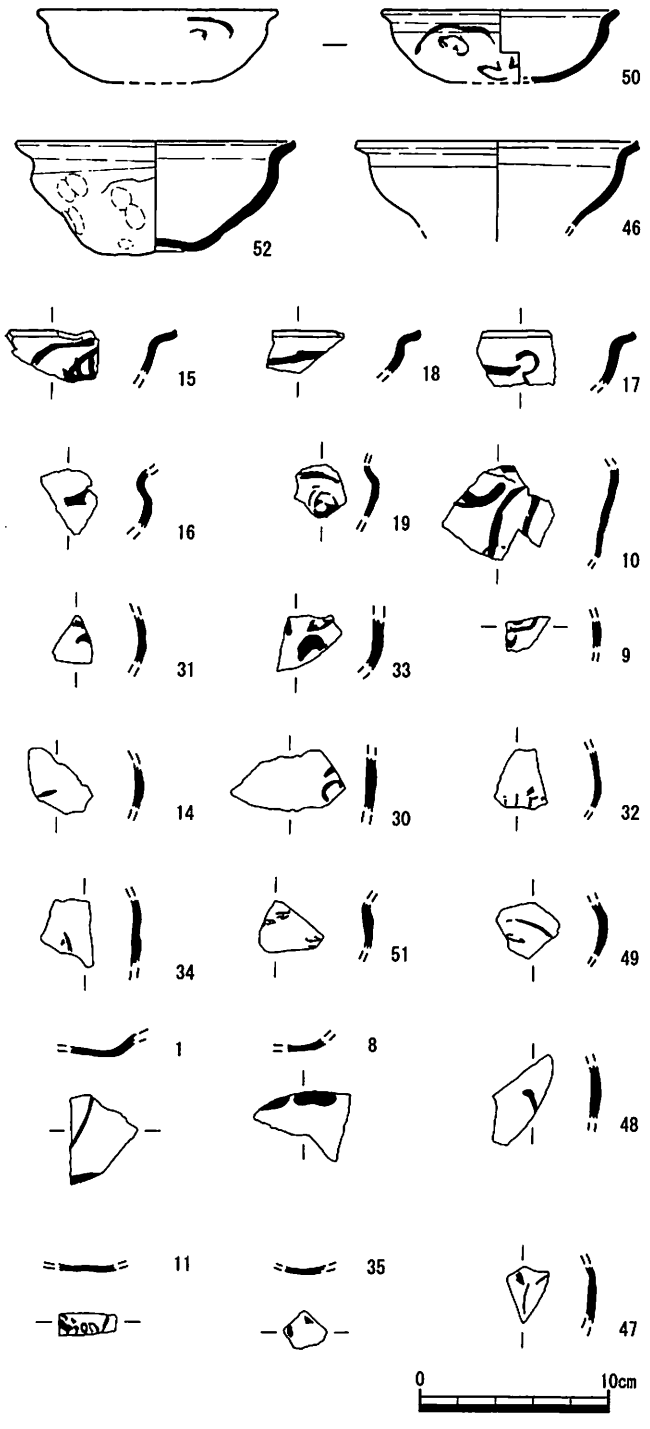
墨書があるものは（１，５～12，14～19，25，29～36，42，44，47～49，50，51）である。そのうち，（５，42，50）はほぼ対称位置に２面の人面墨書がある。そのほかは，１面もしくは破片のため不明。

器体の特徴として，体部はオサエののちナデを施す。その大部分は，口縁部をヨコナデしたのち，端部を上方につまみ上げる。ただ底部の成形には，粘土紐巻き上げによるものⅠ類と，型を用いるものⅡ類とがある。Ａ形態には両者が存在し，それ以外はⅡ類だけである。（44・46）底部を欠くため細分できない。

A形態のうち，Ⅰ類には（2，5，13，21，24～26，36～42）がある。内面の調整からさらに下位区分できる。斜め方向にハケメ（2），ヨコナデ（41），下半をヨコナデ（5），ヨコナデののち斜めのナデ（13，21，38～40，42），ヨコナデののちタテナデ（24），オサエのみ（25），細かいヨコハケののち斜めにハケ（26），不定方向のナデ（37）がある。

Ⅱ類には，（3，4，20，22，23，43，52）があり，Ⅰ類同様下位区分できる。下半をヨコナデ（3，20），斜めのナデ（4），ヨコナデののち斜めのナデ（22），一部をナデ（23，43），ナデ（43）がある。

B形態の内面調整は，（6）が下半をヨコナデ，（45）ナデをおこなうがオサエの痕跡をとどめる。



第39図　祭祀関連遺物実測図（1/4）

C形態では（27・28）の内面はタテナデを施す。

色調・胎土は（3，6，13，25，27，36，45）がⅠdと最も多く，次いで（26，41，46，49，50）がⅡdで，（40，42，48）がⅠbでこれに次ぐ。これ以外は各個体ごとにばらつき，まとまりが少ない。そのなかで（40・44）が成形，胎土の特徴が他のものと異なり，上述したものとは異なる他地域からの搬入品と考えられる。

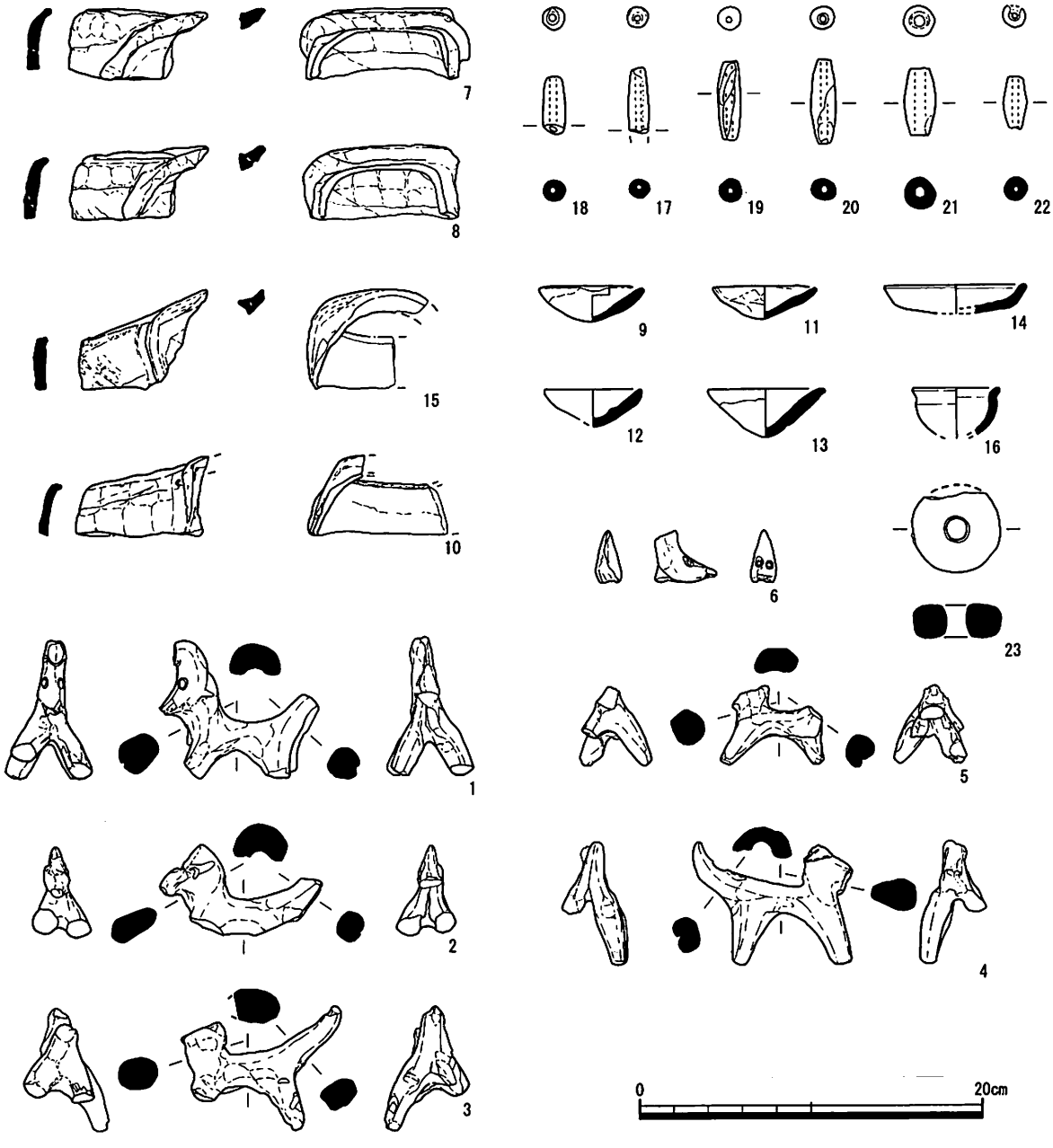
（1）は東西部最下層，（2～12）は南北部西肩，（13～19）は南北部砂礫層上層，（20～35）は南北部砂礫層，（35～45）は南北部最下層，（46～49）はSR0001，（50・51）はSX820，（52）はSE1842より出土。

土馬（図版122，第40図）

出土総数は，接合関係が不明なものを含め39点を数える。主にSR4200から19点出土した。また，SR0001から3点出土し，川跡からの出土が過半数を占める。実測した6点以外の大半は，脚部もしくは尾部である。いずれも形態的には，粘土版を折り曲げて，脚・尾・首を引き延ばして体部を成形したものに，別づくりの頭部をつける。今回のものにはいずれも馬具の表現はみられなかった。

胎土分類は，土師器の項に基づく。

（1）は出土したものうち，最も残りがよい。脚部と尾部の一部を欠く以外は残存する。頭部側面は三日月状を，正面は長方形状を呈する。体部断面は逆U字状を呈し，脚は八の字状に開く。頭頂は正面から押さえて成形される。眼は竹管状のもので表現される。眼の後方少し下に耳が水平につく。Ⅰd。（2）は頭部上半，四脚の全て，尾の先端を欠く。体部断面は逆U字状を呈し，脚は八の字状に開く。鼻の部分が残存し，これは丸みを帯びた形状に成形される。頭部の後ろにやや長めの粘土紐を，やや上方に向けてつける。Ⅱb。（3）は頭部のほとんどと，左後脚以外，尾の先端を欠く。体部断面は楕円状を呈し，脚は八の字状に開く。尾は，斜上方へ引っ張り出したのち，先端部を上方へ曲げる。Ⅱb。（4）は頭部と左脚を欠く。体部断面は逆U字状を呈し，脚もおお



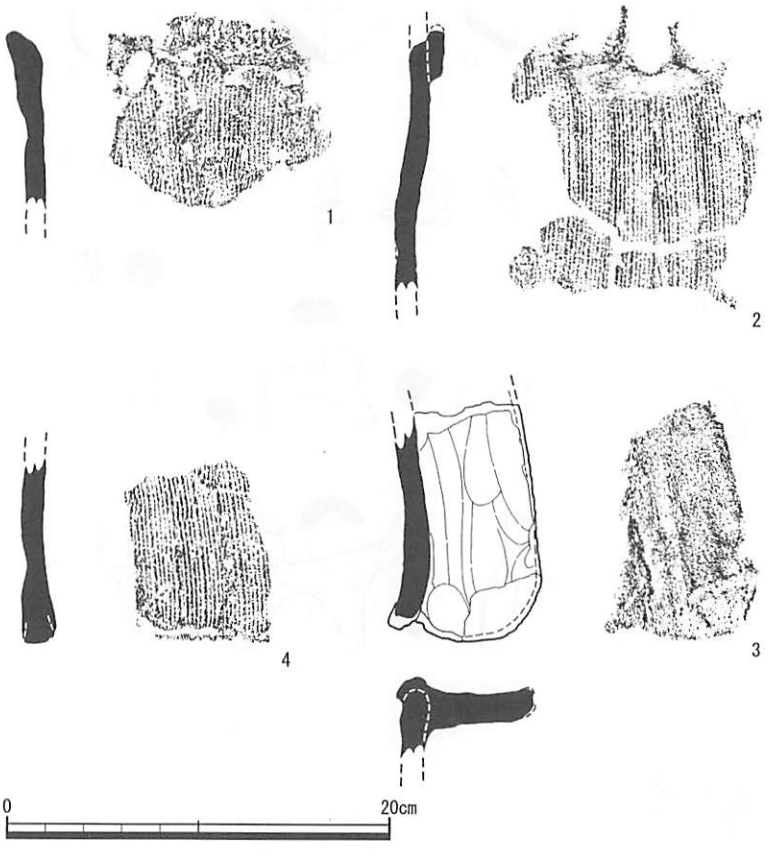
第40図　土製品実測図（1/4）

むね逆Ｕ字状で閉じている。頭部の後ろにやや長めの粘土紐を，やや下方へ向けてつける。脚の先端は，角が丸められる。尾は，斜上方へ引っ張り出したのち，先端部を上方へ曲げる。尾の裏には貼合わせ痕跡を明瞭にとどめる。Ⅲｂ。（５）は他のものよりやや小型である。頭部，右前脚，左後脚，尾を欠く。体部断面は楕円状に近い逆Ｕ字状を呈し，脚は八の字状に開く。後脚の付け根に切込みや粘土の重なった跡があるため，別づくりしたものを後付けした可能性がある。Ⅰｂｉ少。（１－５）はＳＲ4200出土。（６）は頭部である。側面は三日月状を，正面は三角形状を呈する。頭部上方裏側を貼り合わし，頸部に頭をかぶせて製作されていることがわかる。眼は竹管状のもので表現される。Ⅲｄｉ少。ＳＲ0001出土。

模型土器（図版122，第40図）

出土総数は21点を数える。竈が16点，鍋等が６点である。そのほとんどがＳＲ4200から出土した。その内，竈は４点（７・８・10・15），鍋等は５点（９・11～14）実測した。竈は，粘土紐を巻き上げ，体部を成形したのち，焚き口を切取り，廂を取り付ける。内外面ともユビオサエし，ナデを施す。鍋は，粘土紐を巻き上げ，逆円錐状にユビオサエ成形し，内面は「の」の字にナデを施す。胎土分類は，土師器の項に基づく。

（７）は完形品で，正面は長方形に近い台形状を呈する。側面も同様で，廂が前に突出する。側面中央底部より廂が斜上方へ付けられる。廂付け根の前後ではやや底部の状態に差がある。前方はおおむね水平を保つが，後方は底部がやや上に向いているため，大きく隙間があく。掛口は前方がやや下がるがほぼ水平である。幅10cm，高さ４cm，奥行きは８cm。Ⅲｂ。（８）は完形である。正面はほぼ長方形状を呈し，廂が掛口より上まで張り出す。側面も同様で，廂が前に突出する。側面中央底部より廂が斜上方へ付けられる。底部はおおむね水平を保っている。掛口もほぼ水平である。幅10cm，高さ４cm，奥行きは８cm。Ⅲｂ。（９）は（８）の内部に入れられた状態で出土した。完形品である。口径6.15cm，器高は2cm。平たい形状を呈する。底部はやや丸みを帯び，口縁から体部に比して，底部の器壁が薄いことが特筆される。Ⅲｂ。（10）は約



第41図　竈実測図（1/4）

半分が残存する。幅８cm，高さ 4.7cm，奥行きは 7.7cm。正面は台形状を呈し，側面は焚口側が高い台形状を呈する。廂の突出は前方，上方共に小さい。廂は焚口に沿ってほぼ垂直に付けられる。掛口は焚口側に高くなる。内面はヨコナデが施され，ユビオサエの痕跡がおおむね消される。Ⅲｂ。（７・８・10）の外面にはユビオサエの痕跡が明瞭に残る。（11）は完形の鍋である。平たい形状を呈する。器壁はやや薄手の造りである。口縁部は外反する。口径６cm，器高 1.9cm。Ⅲｂ。（12）はほぼ完形の鍋である。器高が高い。器壁はやや厚手の造りである。内面は不明瞭だが一部にヨコナデの痕跡が認められる。口径 5.7cm，器高 2.2cm。Ⅱｄ。（13）は完形の鍋である。最も大型である。器壁はやや厚手の造りである。口径 6.6cm，器高 2.75cm である。Ⅱｃ。（14）はⅢCの可能性がある。約 1/3 が残存する。口径 8.2cm，復元器高 1.6cm である。Ⅱｄ。（７，11 － 14）はＳＲ 4200 砂礫層出土。（８－ 10）は砂礫層上層出土（15）は約半分強が残存する。正面は上部が丸みを帯びた方形を呈し，側面は焚口側が極めて高い形状を呈す。廂は底部から，やや後ろへ向かって付けられ，掛口に沿って前方にほぼ直角に屈曲する。この廂を貼付けたのち焚口部分を一部切除する。外面には一部ユビオサエの痕跡が残るが，他は比較的丁寧にナデが施される。復元幅 5.4cm，器高 5.7cm，奥行き 7.5cm。Ⅱｂ。ＳＥ 1842 出土。（16）は 1/4 が残存し鉢型を呈する。内外面ともヨコナデが施されるが，外面体部は不明である。口縁は外反し，端部は丸く収まる。口径 4.9cm，復元高 2.65cm。ＳＤ 663 出土。

C　竈（図版 124，第 41 図）

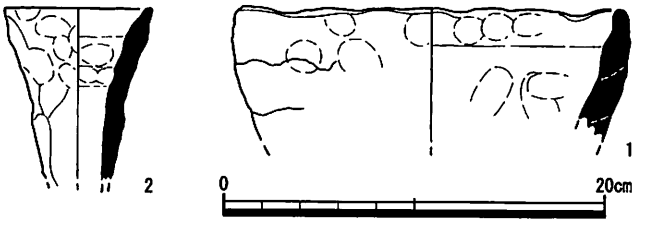
ＳＤ 663 を中心に 15 点の竈片と思われるものを確認した。ただし，各破片の接合関係はみいだせなかった。胎土等の観察から，同一個体である可能性もあるが，部位の特定にとどまり，形状の復元はできなかった。そこで，代表的なもの４点を実測。掛口部（１），取手部（２），廂部（３），底部（４）である。各々ハケメ調整ののち，取手等の部位を取り付けている。また，底部の成形は雑である。底面には短い当て具痕を残す。掛口部内面には，すすが付着し，使用していた。胎土は粗く赤褐色を呈し，径５㎜ほどの礫を含む。（１）はＳＤ 2344，（２・４）はＳＤ 663，（３）はＰ 837 出土。

D　土錘（図版 122，第 40 図）

出土総数は８点である。うち６点を実測。胎土分類は，土師器の項に基づく。

(17)は 2/3 程残存し，断面はおおむね円形である。表面の一部に粘土を巻き付けた痕を確認した。長さは５cm 前後に復元できる。最大径は 1.2cm を測る。Ⅰｂ。ＳＲ 4200 砂礫層出土。（18）は 2/3 弱残存し，長さは５cm 前後に復元できる。最大径は 1.25cm を測り，断面はおおむね円形である。ほとんどのところで最大径を測り，円柱状を呈する。Ⅰｂ。ＳＲ 4200 最下層出土。（19）は断面がおおむね円形である。長さ 4.55cm，最大径 1.3cm を測る。中央部分の約 1.5cm 幅で最大径を測る。Ⅲｄ。包含層出土。（20）はほぼ完形である。断面は楕円形である。長さ 4.85cm，最大径は 1.4cm を測る。Ⅲｂ。七町東三行北二門出土。（21）は完形である。断面は円形である。前述した

４点より，幅広の形状を呈する。長さ3.85cm，最大径1.8cmを測る。Ⅱｂ。ＳＲ4200出土。(22) はほぼ完形である。断面は円形である。中心部で最大幅となり，縦長の六角形を呈する。今回出土した中で最も小型である。長さ３cm，最大径1.3cmを測る。Ⅲｄ。九町東二行北八門出土。



第42図　製塩土器実測図（1/4）

E　製塩土器（第42図）

ＳＲ4200とＳＥ1842・ＳＤ4350を中心に42点の破片が出土した。これらからの出土は，38点と９割を占める。実測したものは２点。

（１）は大型品である。粘土紐を巻き上げ，ユビオサエによって成形し，内面はヨコナデを施す。口縁は内湾する。端部はユビオサエが強く，器壁が他の部分より薄い。また，端部上面は凹凸である。口径が21cm，残存高7.1cmを測る。ｄ類[2]に類似する。胎土は精良で灰白色を呈し，径0.3cmほどのチャートを多量に含む。ＳＲ4200砂礫層出土。（２）は粘土紐を巻き上げ，ユビオサエを施す。器壁にはユビオサエによる凹凸が残る。口縁端部は平坦に調整される。口径8.9cm，残存高9.25cmを測る。ａ３類[3]に属する。胎土は粗く橙色を呈し，径0.3cmほどの長石を多量に含む。ＳＫ1842上層出土。

F　その他（図版122，第40図）

ＳＤ655から，用途不明の有孔円盤（23）が出土した。径5.5cm，厚さ1.9cm，孔径1.3cmを測る。外面および内面は丸く仕上げる。胎土は灰色を呈し，0.8cmほどの石英粒を含む。斎宮跡で出土した紡錘車と形状が似るため，紡錘車である可能性がある[4]。

5　金属製品・金属加工関連遺物

A　金属製品（図版124，第44図）

刀子（１）・吊金具（２）・環金具（３）が各１点出土した。

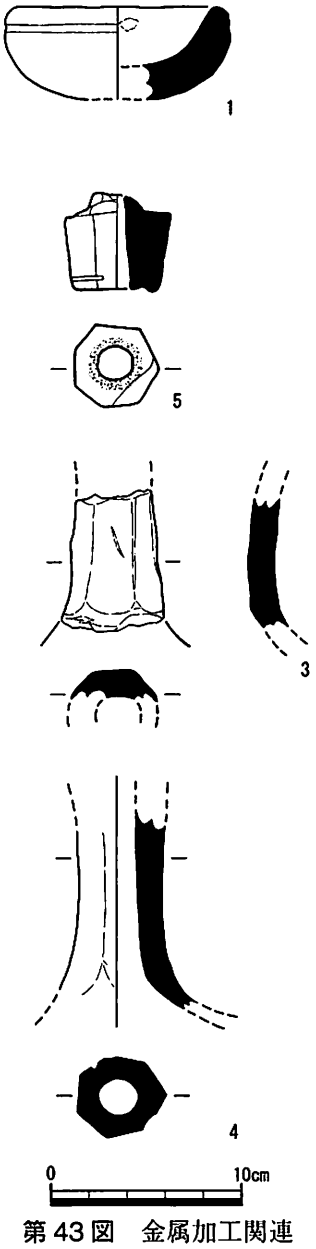
（１）は断面が楔形を呈する。刃部の2/3は研減りと欠けのため残存しない。中央部で屈曲する。茎の根元の一部をとどめる。長さ9.75cm，高さ1.1cm，幅0.3cm。ＳＥ1842中層　出土。（２）は二つの部分からなる。宝珠形の環（長さ1.9cm，幅2.8cm）と円形の環（径1.5cm）が台形状の軸（長さ１cm，幅0.9cm）で繋がれる。この円形の環に楕円状の孔を持つ方形（長さ1.5cm，幅0.8cm）の金具が取り付けられ，この部分が可動する。宝珠形の環は上方へ曲げられる。後者は一本の棒を二つ折りにし，接合したものを，横方向から押さえ付けて薄く伸ばすが，先端は引きちぎられたようである。長さ６cm弱，幅2.8cm。七町東四行北二門出土。（３）は環部・撥状部・長方形状部からなる。環部の径1.9cm，孔径0.5cm。孔は表と裏から穿たれ，貫通する。撥状部は，長さ２cm，

最大幅 1.6cm。長方形状部は，長さ 1.8cm，幅 0.7cm。この部分の先端に 8 mm 程の長さで切り欠きが存在し，この部分で上に曲げられる。ＳＥ 1842 中層出土。

B　金属加工関連遺物（図版 123，第 43 図）

坩堝（1・2）・羽口等（3－14）・鉱滓（15・16）・その他（17）が出土した。

（1）は外面の口縁から約 1 cm 下に，沈線がほぼ水平に施される。被熱のため，全体に青灰色を呈し，口縁の内面が一部発泡する。口径 10.4cm，器高 4.9cm，厚さ 1.8cm。ＳＤ 655 出土。（2）は口縁部片である。1～7 mm ほどの長石が多く含まれ，7 mm ほどの物が目立つ。器壁は 1 cm ほどで（1）に比べて薄い。全体に比熱のため青灰色を呈する。幅 4 cm，高さ 2 cm。ＳＫ 5586 出土。



第 43 図　金属加工関連遺物実測図（1/4）

羽口はいずれも高杯脚部を転用している。（3）は先端部を欠く。現存先端部から 2～3.5cm の部分に煤が付着し変色する。縦半分が残存する。残存長 7.15cm，幅 4～5.4cm。ＳＲ 0001 出土。（4）は先端部 0.5cm ほどが被熱により変色する。また，これから 5 cm ほど離れ，幅 2.5cm の間に煤が吸着することが確認される。変色していない部分は炉体の厚みを示すと考えられる。残存長 7.9cm，残存裾部幅 7.9cm，脚部幅 4.5cm。（5）は脚部両端を鋸状のもので切断する。後端は一方向から鋸を入れ切断するのに対し，先端は多方から鋸をいれ切断する点が異なる。先後端ともに孔周辺に炭素が吸着するが，孔内面まで及んでいない。残存長 5 cm，幅 4.5～5.5cm。（6）は杯部を一部含む。5 方向から鋸を入れ切断する。羽口を製作した時の残存物と考えられる。残存長 3 cm，幅 4.7cm。（7）も杯部を一部含む。5 もしくは 6 方向から鋸を入れ切断する。製作時の残存物と考えられる。残存長 3 cm，幅 6 cm。（8）は縦方向に半分に割れている。現状では，3 方向から鋸を入れたことが確認される。他の切断された高杯の脚が，杯部根本付近を切るのに対し，脚の中心付近に鋸を入れる点が異なる。そのいずれも脚中心部に達しない。切断を途中で放棄した可能性がある。残存長 5.7cm，幅 5.7cm。（9）は外面が灰色，内面が赤色を呈する。現存先端部は著しく発泡し，一部ガラス状を呈する。このため，羽口の先端と考えられる。残存長 2.4cm，幅 1.3cm。（10）は外面先端部が黒灰から灰色，内面の一部が帯状に赤色を呈する。残存長 3.3cm，幅 3.1cm。（11）は外面の半分以上が灰色に変色する。内面は先端部分が変色し，灰色から赤色へと変化する。残存長 4 cm，幅 3.5cm。（12）は外面の一部を除いて，灰色を呈する。赤紫色を呈する。残存長 2.8cm，幅 4 cm。これらはＳＤ 663

出土。(13) は外面が灰色を呈する。この下は赤褐色を呈する。ＳＲ 4200 出土。(14) は羽口先端部片である。先端部は丸く仕上げ，造作は丁寧である。先端部を削り直したと考えられる。外面は先端を含め，発泡する。特に先端部はガラス状に溶解し，内面まで達する。ＳＫ 5429 出土。(15) は外面が深緑から青緑を呈し，ガラス状に溶解する。内面は茶色を呈する。双方ともに発泡する。後者の方が重く，金属成分が含有されると考えられる。残存長 7.2cm，幅 6.3cm，厚さ 3.8cm を測る。ＳＫ 1842 中層出土。(16) は被熱のため発泡溶解した土がガラス状を呈し，これにより，数枚の須恵片が重なったものを，癒着したものである。ＳＲ 0001 出土。(17) は円筒状のものの破片で中空部はない。外面はガラス状に溶解し，黒から赤紫色を呈する。外周部分の３㎜ほどが灰色を呈し，一部，赤紫色を呈する。これは，外面の溶解分が染み込んだ結果と考えられる。外面からここまでが発泡する。径 2.6cm，長さ 3.9cm。ＳＲ 0001 出土。

C　銭貨（図版 62・125）

奈良～平安時代にかけての銭貨が７種 20 点出土。

和同開珎（１）は「開」が隷書風の新和銅で，最も一般的な普通和銅[5]である。外径 2.3cm，0.55cm 四方の孔が開く。ＳＲ 4200 出土。和同開珎（２）は「開珎」部のみ残存する。（１）と同じく普通和銅である。ＳＫ 1842 中層出土。萬年通寶（３）は，外径 2.55cm，0.65cm 四方の孔が開き，「年」の第三画は横棒である。ＳＸ 820 出土。神功開寶（４）は「神」の辺が「示」，「功」の旁が「刀」で，「刀」の第一画は水平である。最終画は跳ねる。字形は表現がやや幅広い。「開」は隷書。「寶」の最終画が横に伸びる。外径 2.55cm，0.65cm 四方の孔が開く。ＳＫ 1846 出土。神功開寶（５）は外縁が太い。「神」がやや横広い。おおむね（６～９）も同じ。「功」の旁は「力」で，第一画は水平となる。最終画は跳ねる。「開」は真書。外径 2.55cm，0.6cm 四方の孔が開く。ＳＥ 1842 出土。神功開寶（６）は「功」の旁が「刀」，「刀」の第一画は右上がりで，字形は弓なりになる。ＳＥ 670 出土。外径 2.45cm，0.6cm 四方の孔が開く。神功開寶（７）は（６）に比して「刀」の第一画が水平に近い。左払いの最終部分がやや太くなる。外径 2.45cm，0.6cm 四方の孔が開く。ＳＤ 4340 出土。神功開寶（８）は外径 2.45cm，0.6cm 四方の孔が開く。ＳＤ 4340 出土。神功開寶（９）は表面外縁がやや上にずれる。外径 2.35cm，0.7cm 四方の孔が開く。ＳＤ 4340 出土。神功開寶(10)「神功」部のが 1/2 が残る。ＳＤ 4340 出土。神功開寶（11）は「神」部のみの 1/4 が残る。ＳＤ 4340 出土。隆平永寶(12)は銭文が鮮明。「永」の最終角が上に跳上がっている。外径 2.55cm，0.65cm 四方の孔が開く。ＳＤ 4340 出土。隆平永寶（13）は摩滅のため，銭文がやや不鮮明。書体は（12）に似るがやや太め。外径 2.5cm，0.65cm 四方の孔が開く。ＳＤ 4340 出土。隆平永寶（14）は銭文が鮮明。前二者のように「永」の最終角が上に跳上がらない。外径 2.5cm，0.6cm 四方の孔が開く。ＳＲ 0001 出土。隆平永寶（15）は他の３点より一回り小さい。書体も他より小さい。「隆」の右はらいが長く，「生」部が小さい。外径 2.35cm，0.65cm 四方の孔が開く。ＳＤ 4340 出土。富壽神寶(16)は銭文が鮮明で，裏面の内郭を成形するのに鑢を使用した痕が右側に残る。外縁下部に鋳残しがある。外径 2.3cm，0.65cm 四方の孔が開く。ＳＸ 820 出土。富壽神寶（17）は銭文が鮮明で，(16)

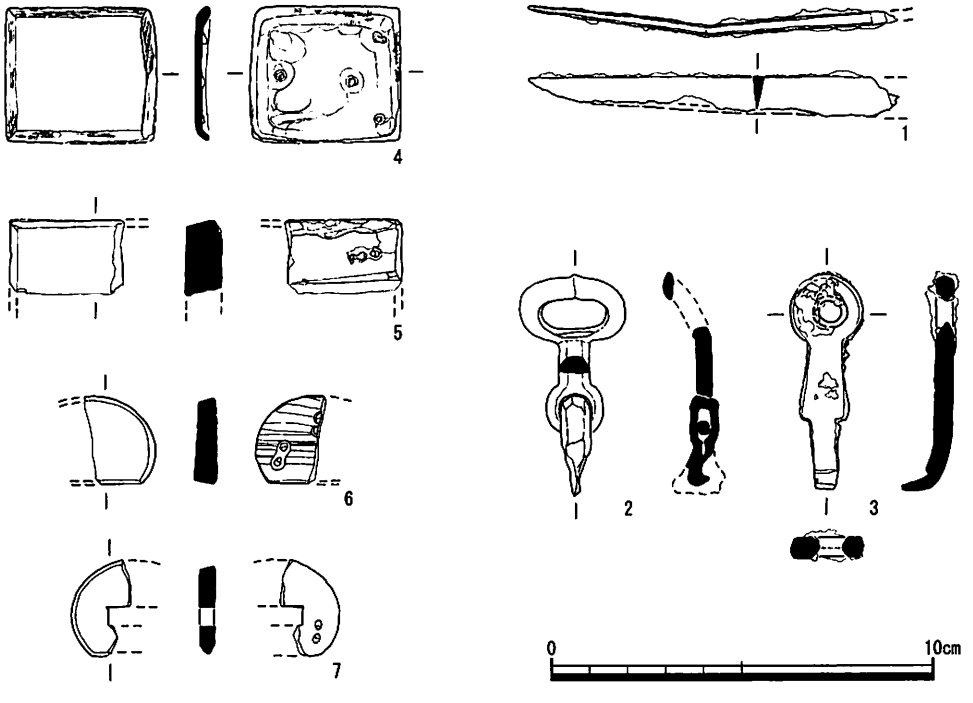
より文字が細く，鋳出しも深い。内郭に鋳残しがある。外径2.3cm，0.6cm四方の孔が開く。ＳＥ3365出土。富壽神寶（18）は保存状態が悪く，風化が激しい。そのため，金属の厚い部分が残る。「富・壽・神」と外縁の一部が残存する。ＳＫ889出土。承和昌寶（19）は銭文がやや不鮮明で，外縁に鋳残しがある。外径２cm，0.6cm四方の孔が開く。ＳＲ0001出土。貞観永寶（20）は銭文が鮮明で，表面は外縁の下のほうがやや太いと感じる程度であるが，裏面は大きく上にずれる。外径1.95cm，0.5cm四方の孔が開く。ＳＤ4103出土。

6　石製品

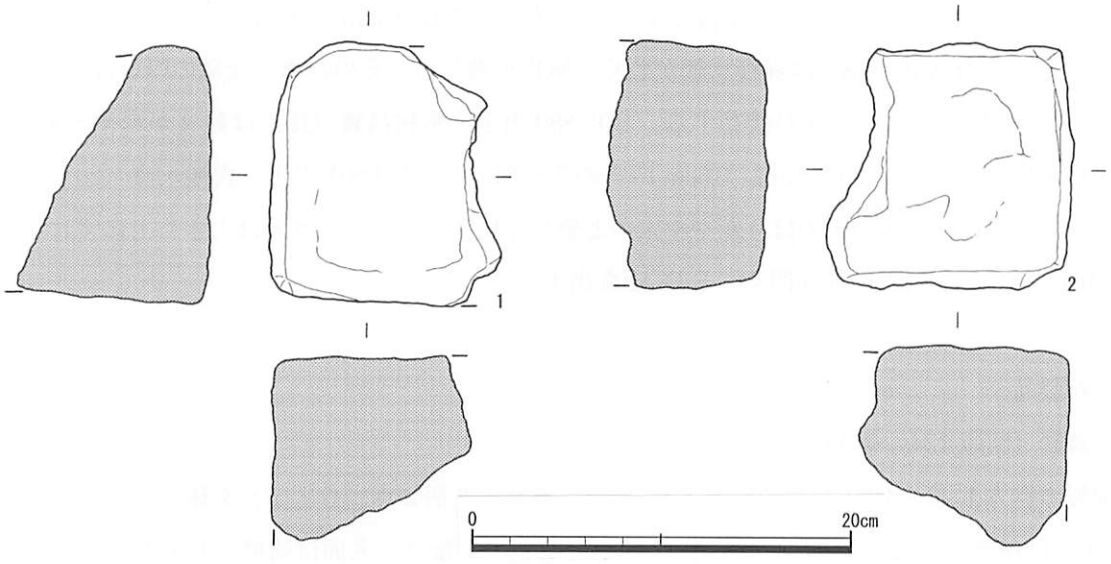
A　錘具（図版124，第44図）

銅製の巡方１点（４），石製の巡方１点（５），石製の丸柄２点（６・７）を確認。

（４）は銅製でほぼ完形。四辺の内，一辺はやや丸みを帯び，表面は研磨されるが，一部研磨されないところもある。側面は横方向の研磨痕跡が残るが，裏面は研磨されず，その一部に漆の付着痕がある。鋲足が４ヶ所につく。左下のものは外側に曲がり，ほかは折れる。縦3.5cm，横４cm，厚さ0.3cm。ＳＲ0001第２層出土。（５）は石英製で，全体の1/4程が残存する。表面・側面・裏面共に研磨されるが，裏面には光沢がない。また，裏面は面取りが施される。潜り穴は横方向に穿たれ，３個確認した。外側の２個が使用された潜り穴である。縦1.95cm，横3.0cm，厚さ0.95cmを測る。ＳＲ0001第１層出土。（６）は黒色石製で，1/2程が残存する。表面・側面・裏面の順で研磨が荒くなる。裏面は石挽き鋸の切断痕跡が存在することから，研磨されていないと考えられる。潜り穴は放射状に穿たれる。また，裏面は面取りが施される。潜り穴方向に割れているため，加工



第44図　金属・石製品実測図（1/4）



第45図　ＳＥ1842　出土凝灰岩実測図（1/4）

時に破損した可能性がある。縦2.3cm，横1.85cm，厚さ0.6cm。Ｐ5514出土。（７）は白色系滑石製で1/2程が残存する。方形の垂孔が穿たれる。これは，四隅に小穴をあけたのち，方形に整形している。潜り穴は縦方向に穿たれる。縦2.5cm，横1.55cm，厚さ0.4cm。ＳＤ1376出土。

Ｂ　玉（図版124）

ＳＥ670の枠内底より，玉が10点出土した（８）。黒玉が２点，白玉が８点。黒玉は長径1.3～1.5cm，短径1.15～1.3cm，白玉は長径1.2～1.35cm，短径１～1.2cm。断面は楕円形を呈す。俵状をした白玉が１点あり，ほかのものより小型で長径1.05cm，短径0.75cm。白玉は石英製，黒玉はホルンフェルス製と思われる。黒，白が存在することから碁石の可能性が高い。

Ｃ　凝灰岩（図版124，第45図）

４点の凝灰岩片が出土した。３点はＳＥ1842から出土し，残りは包含層から出土した。ＳＫ1842上層から２点（１・２）出土した。（１）は，幅13cm，高さ9.5cmを測るブロック状ものの破片である。（２）も，幅13cm，高さ10cmを測るブロック状のものの破片である。両者の形状から，基檀外装の化粧石の可能性がある。

註

１）向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財報告書』第13集（向日，昭和59年）152～154頁。
２）財団法人向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財報告書』第30集（向日，平成２年）89～92頁。
３）註２前掲書。
４）財団法人京都市埋蔵文化財研究所『平安京右京三条二坊十五・十六町―「齋宮」の邸宅跡―』（『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第21冊，京都，平成14年）73頁。
５）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告ＸＩ』（奈良，昭和57年）209頁。

第４節　平安時代以前の遺物

１　弥生時代から平安時代以前の遺物

弥生時代から奈良時代にかけての遺物は大部分旧河川から出土し，それらが平安時代以降に混入する。とくに旧河川と重複する遺構については顕著である。それを除くとこれらの時期に相当する遺構は，調査範囲内では全く未確認である。しかし遺物表面の遺存状況をみると，摩滅を受けた痕跡のあるものが少ないことから，これらの遺物は，ごく近辺で廃棄されていたと考えられる。

Ａ　旧河川出土土器（図版 48・110・111・119，第 46 図）

１　弥生土器

底部片（１）は平底で，やや内湾気味に立ち上がる体部からなる。体部外面には縦方向のハケメを一部分残す。内面は摩滅のため調整は不明。弥生時代前期末に相当する。八町東二行北六門より出土。

高坏（２）は，脚部と杯部下半をとどめる。杯部底は小さな椀形にした粘土を充填する。杯部内面と脚部外面上半はミガキを施す。脚部内面上半はしぼり目を残す。弥生時代中期後半に相当する。七町東三行北四門北東隅より出土。

２　土師器

高杯杯部（３）は，屈曲する杯部に口縁部は外傾して，口縁端部は丸くおわる。布留式３以降。七町東二行北二門より出土。

小型丸底壺（４）は，やや肩の張る球形の体部に，「く」の字に折れ，外方に開く口縁部からなる。口縁端部は丸くおわる。体部外面はハケメ，内面は斜め方向のケズリで頸部付近はユビオサエを残す。布留式３以降。七町東四行北五門西端馬代小路付近より出土。

高杯脚部片（５）は，脚部の面取りをしているが不明瞭である。裾部はなだらかに広がり，端部は下方へ肥厚する。内面にしぼり痕が見られる。胎土はやや粘性で焼成は良好で硬質。６世紀。七・八町東三行相当部樋口小路より出土。

甕（６）は，丸みをもった厚めの体部に，「く」の字に折れ曲がる口縁部からなる。口縁端部は丸くおわる。胎土は砂質。６～７世紀。七町東二行北一門より出土。

杯（７）は丸みを持った体部に垂直に立ち上がる口縁部。端部は丸くおさめる。胎土は粉質。７世紀。七町東三行北一門より出土。

杯Ｃ（８・９）はやや平らな底部で，体部は丸みをもって外上方へ開く。内面は，斜放射状暗文を施す。７世紀。（８）の口縁部は僅かに外反し口縁端部は丸くおわる。七町東三行北一門より出土。（９）の口縁部は垂直に立ち上がり，口縁端部はやや外反する。八町東二行北六門より出土。

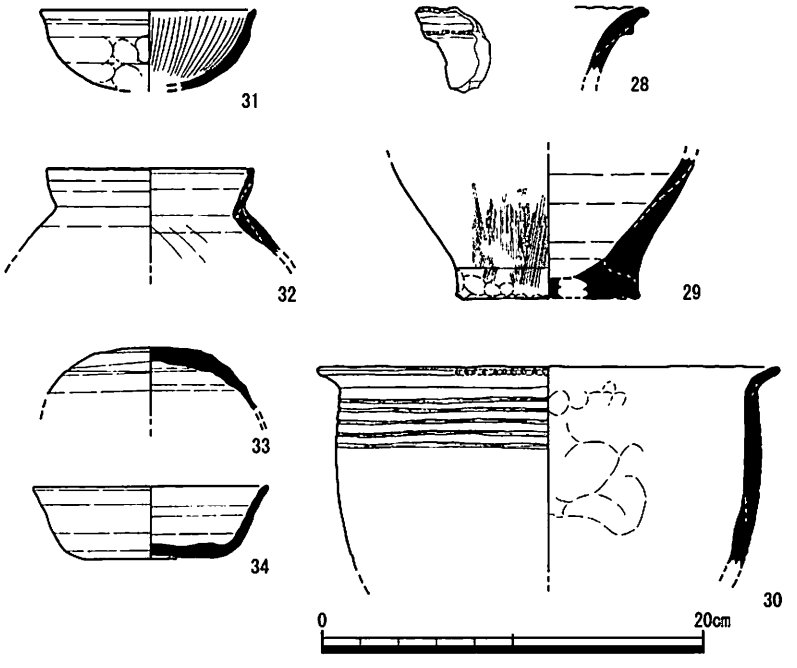
高杯（10･11）の脚部外面はヘラケズリする。単位は不明瞭である。脚部内面はユビオサエする。７世紀。（10）は八町東三行北八門より出土。（11）の裾部外面はわずかに内傾する面をなし，下端はわずかに肥厚する。七町東三行北一門より出土。

甕（12）は丸みを帯びた底部に，胴長の体部からなる。口頸部は「く」字状に外方へ開き，端部

は丸くおわる。体部下半はヘラケズリし，内面はハケメののち粗い縦方向のナデを加える。８世紀か。七町東三行北一門より出土。

３　須恵器

杯身（13・14）は平らな底部に，内湾して直立する口縁部からなり，口縁端部は直立するもの（13）とやや内傾するもの（14）がある。ＴＫ23・47。七町東三行北一門より出土。



第46図　ＳＤ4206　出土土器実測図（1/4）

杯蓋（15・16）は頂部に丸みがあり，縁部がやや外反し，端部は丸くおわる。（15）ＴＫ217。七町東三行北一門より出土。（16）ＴＫ23・47。七町東三行北一門より出土。

杯身（17・18）は丸みのある底部に，内湾気味に開く口縁部からなる。受け部はやや低く内傾する。（17）はＴＫ209。八町東二行北六門より出土。（18）はＴＫ217。八町東三行北八門より出土。

杯Ｇ蓋（19）はやや丸みのある頂部に，内面にかえりをもち，宝珠つまみをつける。かえりの先端は，口縁端部より下方に伸びる。ＴＫ217。八町東三行北八門樋口小路北築地付近より出土。

杯ＡⅡ（20）はやや平坦な底部に，屈曲して外方に開く口縁部からなる。端部は丸くおわる。八町東三行北六門より出土。

杯ＢⅡ（21）は平らな底部に，外傾する口縁部からなり，口縁端部はやや外反して丸くおわる。八町東三行北六門より出土。

長脚二段透高坏（22）は，杯部下半と脚部上半をとどめる。胎土は精良。ＴＫ10新段階か。七町東三行北一門より出土。

高杯（23・24）は脚部片で，（24）は，短脚で円形の孔を有する。ＴＫ23・47。八町東三行北七・八門出土。（23）は八町東二行北七門より出土。

鼓（25）は，やや肩の張る体部に撥型に開く脚部からなる。脚部端は大きく屈曲する。体部上半には二条の凹線を巡らし，その間に列点文を配す。七町東三行北一門より出土。

壺（26）球形の体部に直立する口縁部からなり，口縁端部が欠ける。体部外面上半はカキメ，底部をロクロヘラ削りし，それ以外はロクロナデを施す。胎土は砂質ではあるが，焼成は良好。八町東二行北八門より出土。

甕（27）は，口頸部を残す。頸部には上下二段の凹線を配し，その間に縦方向にカキメを施す。

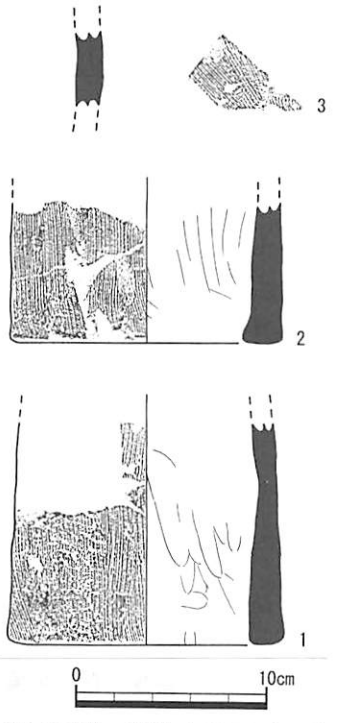
八町東二行北六門より出土。

B ＳＤ 4206 出土土器（第 46 図）

弥生土器，土師器，須恵器が出土した。

弥生土器は，広口壺（28）があり，口縁部直下に一条突帯を有する。瀬戸内中部の広口壺に類似する。（29）は底部片で，外面にハケメを施す。甕（30）は，如意形口縁を有し，体部上位にヘラ描直線文を５条有する。口縁端部にはヘラにより刻目文を施す。いずれも前期末。

土師器は杯Ｃ（31）はやや平らな底部で，体部は丸みをもって外上方へ開く。内面は，斜放射状暗文を施す。７世紀。甕(32)は，「く」の字状に屈曲する口縁部からなる。口縁端部はやや肥厚する。布留式。須恵器杯蓋（33）は頂部を残す。ＴＫ 23・47。杯Ａ（34）はやや外反気味に開く口縁部からなる。８世紀。



第 47 図　埴輪実測図（1/4）

Ｃ　埴輪（図版 124，第 47 図）

埴輪が３点出土。内，（１・３）は平安時代の遺構に混入する。（２）はＳＸ 820 西側の包含層から出土。それらは，ユビオサエののち，内面はナデ，外面はハケメ調整が施される。（１・２）は円筒埴輪の底部片である。おのおの，外面のハケメ，内面のナデは縦方向である。最下部の内面はおおむねヨコナデである。また，底は平坦面をなす。（３）は小片であるが，他のものと湾曲がことなり，朝顔型埴輪の肩部片と考えられる。外面のハケメ，内面のナデは斜方向である。各々の胎土は，浅黄橙色を呈し，長石･石英粒子が混入する。とくに（１）のそれは他のものより大きい。（１）はＳＤ 655，（３）はＳＤ 661 出土。

２　縄文時代の土器

ＳＸ 3401・3402，ＳＸ 3406 の土壙状遺構群や，Ｐ 5631・5632・5633 の柱穴状遺構とその周辺，さらにＳＲ 0001・4200，ＳＸ 820 の包含層内から出土した。いずれも遺存状態はあまり良くなく，摩滅が著しい。帰属時期は，北白川Ｃ式と縄文時代晩期に比定できる。土器は，泉拓良による『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ　北白川追分町遺跡の調査』[1)] の分類に拠って，遺構ごとに述べる。

Ａ　ＳＸ 3401（図版 63 ～ 65・132 ～ 134）

357 点あり，重量にして 5323g。37 点が図化可能なものである。いずれも北白川Ｃ式に比定できる。

深鉢Ａ類（１・３～７）　平縁もしくは緩やかな波状口縁を呈す。（１）は口縁部下に突帯を貼り付け，その上に指頭圧痕を施し，胴部と口唇部上にＲＬの縄文を施す。（３）は口縁が「く」の字に屈曲するキャリパー形を呈し，器壁は薄く，口縁部には楕円形の隆帯が剥離した痕を残す。おそらく咲畑式に類似するような要素を備えたものと考えられる。口唇部には非常に細かいＬＲの縄文を施す。（４）は小片で，口縁部に楕円文があり，その周りに隆帯がめぐる。（５）の口縁端部は欠

損しているが，口縁部に巡る２条の沈線の上下に隆帯を貼付する。（６）は口縁部と頸胴部の境目に隆帯と沈線が一条巡る。（７）は口縁端部は欠損しているものの，渦文を施文する。

深鉢Ｂ類（８・９）　口縁部よりやや下がったところに把手もしくは突起をもち，その両脇にメガネ状区画文を施す。（８）は把手部である。（９）は突起部であり，（８）よりも若干新しいと考えられる。突起の上には指頭圧痕が施され，その両脇にはメガネ状区画文を配し，そのなかに波状沈線を施文す。

深鉢Ｃ類（２・10～14）　大きな波状口縁を呈す。（２）の波頂部は，６ヶ所あると想定される。文様は沈線のみで描かれ，波頂部付近に紡錘文を２ヶ所，胴部には紡錘文のような楕円文を施文する。(10) は山形の波頂部となり，器壁は非常に薄い。文様モチーフは摩滅が著しく，明確には判別しがたい。ただし胴部に多条の連孤文があり，沈線が口縁部上に２条巡る。縄文はＬＲである。(11) は大きな山形波状口縁で，大きく屈曲する。波頂部下には指頭圧痕がある。(14) は沈線のみで文様を描き，口縁部に独立した文様を施さないことに特徴がある。京都府網野町浜詰遺跡[2)]に類例がある。

有文土器胴部片（15～27）（16・17・19・20）は多条の連孤文がみられる。(23) は縦位の多条沈線と蛇行沈線を描いたのち，ＲＬ縄文を施す。(27) は細い沈線で文様を描き，細かいＬＲ縄文を施す。ボウル形の浅鉢を呈すると思われ，比較的中津式に近く，新しい様相を呈する可能性がある。

無文土器 (28～34) ここでは，文様モチーフをもたないものを一括した。(28～31) は口縁部片。(32～34) は胴部片。このうち器形が判別できるものは深鉢 (30) にすぎない。(28) は口縁部が「く」の字に屈曲し，ＬＲ縄文を口縁部と胴部に施文する。(29) はＬＲを全面に施文し，口縁部を肥厚させる。その特徴から，胴部に文様を施文していた可能性がある。小型深鉢（30）の器面は丁寧にナデて調整する。(32) はＬＲにＲを２条巻き付けた，付加条の縄文を回転押捺する。(33・34) はＬＲ縄文を全面施文する。

深鉢底部（35～39）　底面からまっすぐに立ち上がるもの（38・39）と底面がややくびれるもの (36・37) とがある。

Ｂ　ＳＸ 3402（図版第 65・134）

179 点あり，重量にして 1347g で，そのうち 11 点が図化可能なものである。(40～44) は有文土器の口縁部片で，器種器形は小片のため不明である。(40) は口縁端部が破損している。口縁部が屈曲し，口縁部上に指頭圧を施す。縄文はＬＲである。(41) は楕円形区画文の周囲に隆帯をめぐらし，その中に刺突を施す。(43) は小片ではあるが，器形からして浅鉢と思われる。沈線内に刺突があり，ＬＲの充填縄文をもつことからも，ＳＸ 3402 の他の遺物よりも新しい可能性がある。(45～49) は有文の胴部片である。(45) は沈線で渦文を描く文様モチーフから口縁部付近の土器片の可能性がある。(47) は沈線ののちにＬＲに無節Ｒを２条巻きつけた付加条の縄文を回転押捺する。(48・49) は縦位の多条沈線を持つ胴部片であるが，(48) は沈線を描いた後にＬＲ縄文を施文してあり，(49) は沈線文のみである。(50) は無文土器の胴部片で，粗いＬＲの縄文を全面に施

文する。

C　ＳＸ 3406（図版第 65・134）

5点，重量にして 160 ｇで，そのうち 1 点が図化可能なものである。(51) は摩滅が著しい。有文土器の胴部片であり，土器片上部にかすかに沈線の痕が残っており，ＬＲ縄文を施す。

D　ＳＸ 3401・3402・3406 周辺（図版第 65・135）

575 点出土あり，重量にして 2726 ｇで，そのうち 6 点が図化可能なものである。(52 ～ 54) は有文土器の口縁部である。深鉢Ａ類 (52) は，口縁部の文様として渦文と楕円形区画文を細い沈線を一筆で描き，胴部には連孤文を配したのちにＬＲ縄文を施す。(53) は口縁部を肥厚させて，その上に棒状工具でＤ字に刺突する。(54) は小片のため器形は不明であるが，浅鉢の可能性がある。(55) は浅鉢の突起部を残す。(57) は底部片で，底面からまっすぐに立ち上がることから中期末の特徴を示す。

E　Ｐ 5631（図版第 66・135）

33 点あり，重量にして 600 ｇで，そのうち 4 点が図化可能なものである。深鉢 (58) は波状口縁をもつ。口縁部に一筆書きで渦文と区画文を，その下に多条の連孤文を描く。主文様が波頂部直下にないことが通常の深鉢Ａ類と異なり，特徴的である。胴部には縦位の多条沈線と縄文を施す。縄文の撚方向は摩滅していて明確には判断できないが，器面に回転押捺した縄目が，深いものと浅いものとが交互に表出していることから，ＬＲにＲを 2 条巻きつけた付加条であると推測できる。深鉢Ｂ類 (59) は突起部分である。その上部に指頭圧痕を持ち，突起の両脇にメガネ状区画文を描き，そのなかに羽状沈線を施す。(60・61) は胴部片。(60) は口縁部と頸胴部の境に貼り付けられる隆帯をもつ。

F　Ｐ 5633（図版第 66・135）

5点あり，重量は 428 ｇで，2 点が図化可能なものである。深鉢Ａ類 (62) は平口縁で，口縁部を肥厚させる。その上に沈線をめぐらし，胴部にはＬＲ縄文を施文する。

G　その他（図版第 66・136）

1 点ある。(64) は口縁部に 1 条の突帯をもち，口縁端部の調整と突帯の貼付とが同時におこなわれる。突帯と口唇部上に小Ｏ字の軽い刻みを施す。長原式。

H　旧河川（図版第 66・136）

ＳＲ 4200，ＳＸ 820 および旧河川の包含層出土土器は 69 点で，重量にして 1389 ｇになり，17 点が図化可能なものである。全体的に遺存状態は悪く，摩滅が著しい。大きく分けて中期末の北白川Ｃ式と晩期の突帯文土器に分けられる。(65 ～ 67) は北白川Ｃ式。(65) は波状口縁の波頂部片で指頭圧痕をもつ。(68 ～ 77) は晩期の突帯文土器。68 は口縁端部を丁寧に面取りしたのち，口縁部から少し下がった所に突帯を貼り付ける。突帯は上下とも丁寧になでて調整し，刻み目はＤ字を呈す。滋賀里Ⅳ式。長原式 (69 ～ 71) は口縁部片，(72 ～ 77) は胴部片に該当する。刻み目は

横に滑らせる軽いＯ字もの（69・72・75・76）とＶ字に刻むもの（71・77）とがある。なお，（69・70・75・76）が生駒西麓産の胎土である。（78～81）は底部片。いずれも深鉢の底部と考えられ，晩期に属するものと考えられる。（79）は生駒西麓産の胎土である。

小結

これらの土器様相を踏まえて特にＳＸ3401・3402・3406，Ｐ5631・5632の位置づけを考えてみたい。遺構群は中期末北白川Ｃ式の範疇で捉えることのできるものであり，各遺構間で時期差は特に認めることはできない。出土した土器は小片が多く，量的にも少ないので明確な器種構成を把握することは困難である。しかし，深鉢Ａ類，Ｂ類，Ｃ類，少量の浅鉢，および無文土器を有するという点では，北白川Ｃ式土器の標識遺跡である北白川追分町遺跡の器種構成と一致する。しかしながら，北白川追分町遺跡では一定量の出土量が認められる口縁部が「く」の字に屈曲する深鉢Ａ3類を明確に確認できなかった。一方，出土土器には，（1）や（4～6）のように隆帯をもつものや（10・58）のように複雑な文様を描くものが多いことに加えて，明確な充填縄文のある土器がほとんど確認されないという特徴がみられる。このことから，遺構群は北白川Ｃ式の比較的古い段階に短期間形成されたものと考えられる。縄文原体の撚り方向としては，ＬＲが82%，ＲＬが９%，Ｒが9%とＬＲが圧倒的多数を占める点でも北白川追分町遺跡と類似しているが，（32・47・58）といった付加条の縄文のある土器が存在することは，北白川追分町遺跡では見られない特徴である。

以上のことから当遺跡は，縄文時代中期末に北白川追分町遺跡と密接に関わりながら，それより小規模かつ短期間に営まれたといえる。そして周辺に縄文の遺跡がなく，標高が約23ｍと低い立地であることから，北白川周辺に存在する拠点集落のキャンプサイト的な役割を担っていた可能性も考えられる。従来から北白川周辺には時期的にも連続した縄文時代の遺跡が点在することは確認されていた。今回小規模ながらも右京の低湿地に縄文時代中期末の遺跡が確認されたことは，当該期における京都盆地内での集落の様相を考える上で意義のあることといえるだろう。

3　石器

石器の出土は全調査区を通じて認められた。時期的には岩宿時代から弥生時代までの各時期の石器が出土している。ＳＤ4351出土の磨製石斧を除くほとんどの遺物がＳＲ0001・4200，および後世の遺物包含層中に含まれていたものであり，一部の定型的な石器を除けば，その器種構成，帰属時期は不明なものが多い。

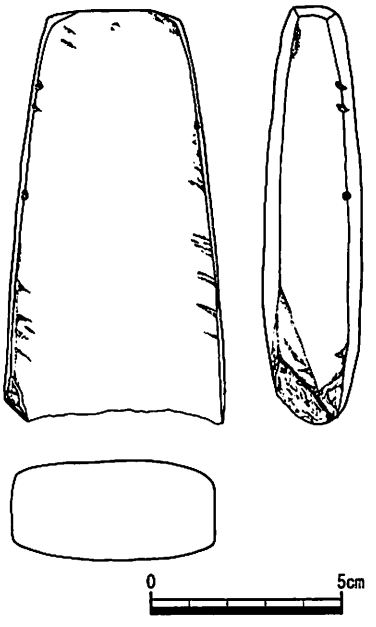
Ａ　ＳＫ4351（第48図）

共伴する縄文土器片から縄文時代中期末に帰属すると考えられる遺構である。ここからは磨製石斧が一点出土している。刃部は欠損しており，断面が角丸方形を呈する定角式石斧である。処々に研磨の際の線条痕を有する。砂岩製。

B　S R 0001・S R 4200 および遺構外出土 P（図版 67 ～ 70, 137・138）

1　ナイフ形石器（1）　包含層掘り下げ時に国府型ナイフ形石器が 1 点出土した。サヌカイト製で，基部は欠損している。岩宿時代のナイフ形石器は隣接する西院月双町[3] でも出土している。

2　石鏃（2 ～ 23）　23 点確認することができ，そのうち 22 点を図示した。利用石材はサヌカイトが主体であるが，チャート製（2・6・7・10）も確認できる。形態から凹基無茎鏃（2 ～ 10, 13, 14, 16 ～ 22），平基無茎鏃（11・12），円基鏃（15）にわけることができる。平面形態は 2 等辺三角形を呈するものが主体であるが，（5）のように両側縁に抉りを入れ，5 角形を呈するものもある。材質上の違いであろうが，チャート製のもの（2・6・7）のほうが基部の抉りが深い。調整法はいずれも表裏面に調整を施しているが，そのなかでも表裏面全面に調整を施すもの（2 ～ 16）と周辺部のみ調整し主要剥離面を含む素材面を残すもの（17 ～ 22）とが確認できる。（23）は未製品である。主要剥離面を残す。なお（21・22）は旧流路から，（16）は S R 4200 から，（4・9）は S R 0001 からそれぞれ出土した。



第 48 図　S K 4351 出土遺物実測図（2/1）

器種不明の石器の先端部（24・25）　石器の先端部で器種が不明なものをここに一括した。いずれもサヌカイト製で，主要剥離面を残し，周辺部のみを調整している。

3　石槍（26・27）　いずれもサヌカイト製である。（26）は木の葉状の形態で，基部が丸みを帯びる。（27）は小型の石槍で，やや太い基部を持つ。弥生時代に帰属するものと考えられる。

4　石匙（28）　横型の平面形態をもつチャート製である。左右端部の片方が折損しており，使用時に折損したと考えられる。

5　使用痕のある剥片（29・30）　（29・30）ともサヌカイト製で主要剥離面を大きく留める。（29）は縦長剥片で，スクレイパーと考えられる。

6　2 次加工のある剥片（31 ～ 34）　背面や腹面に調整剥離をもっているものを一括した。いずれも石材はサヌカイトである。（31）は大型の剥片で調整の際の未製品と考えられる。（33）は両面を成形する段階での事故品。（34）は成形段階の事故品もしくは石核の可能性がある。

7　剥片（35 ～ 49）　23 点あり，そのうちの 15 点が図化可能なものである。石材はチャート製（35・40）以外はすべてサヌカイト製である。全体的に剥片は粗雑で，消費の進んだ石核から不規則な手法で取られたと考えられるものが多い。（37）は自然面を有し，主要剥離面が鋭角を呈す。

8　楔形石器（50 ～ 52）　4 点出土し，そのうちの 3 点を図示した。いずれもサヌカイト製で，対向する 2 辺に階段状剥離がみられるもの（50・52）と 4 辺ともに階段状剥離が確認できるもの（51）とがある。また，（50・51）は自然面を有する。

9　石核（53・54）　いずれも自然面を有し，石材はサヌカイトである。（53）は処々に敲打痕をも

つ。元来石核として用いられていたものが，消費が進んだ後にハンマーとして転用されるようになったと考えられる。(54) はかなり消費が進んで小さくなった石核である。

10　磨製石斧 (55・56) (55) は断面が角丸方形を呈する定角式石斧である。基部が欠損しており，横方向の研磨痕を残す。刃部は片方が磨耗していることからも，刃部に平行した着柄の縦斧であったと考えられる。(56) は太型蛤刃石斧の刃部であり，片側が欠損している。斜位方向に研磨の際の線条痕を有し，側面に敲打痕をもつ。砂岩製。

11　石製品 (57)　石製垂飾品とも考えられるが用途は不明である。平面形態は上方が欠損するものの，卵形を呈する。処々に研磨の際の線条痕を有するが調整は粗雑である。直径約 0.8 cmの回転研磨によって２方向から穿孔された孔をもつ。

12　磨石・敲石・凹石 (58 ～ 61) (58) は砂岩製の磨石・敲石。平面形は円形を呈し，側面を敲石として使用する。(59) は磨石。円形を呈し，平面の半分が欠損している。砂岩製。(60) は磨石・凹石。旧流路内から出土した。平面形は楕円形で，約半分が欠損する。平面全体を磨面として使用し，さらに中央部に２ヶ所の敲打痕があり，凹石としても使用したことがわかる。安山岩製。(61) は円柱形を呈する磨石・敲石。下部側面を磨面とし，平面を敲石として使用している。側面に自然面が残る。砂岩製。

縄文土器の報告に際しては，京都大学埋蔵文化財センター冨井眞氏，立命館大学矢野健一氏，石器の報告に際しては，京都大学高橋章司氏，冨井眞氏，立命館大学大学院生土谷嵩夫氏に有益なるご教示を戴いた。記して感謝申し上げます。

註

1）泉拓良『京都大学埋蔵文化財調査報告３－北白川追分町縄文遺跡の調査－』京都，昭和 60 年)。

2）三浦到･大下明編『浜詰遺跡発掘調査概要』(網野町教育委員会『網野町文化財調査報告』第８集，竹野郡網野町，平成５年)。

3）山下秀樹『平安京右京六条四坊九町・五条大路　京都市右京区西院月双町』(京都文化博物館『京都文化博物館調査研究報告第８集』，京都，平成３年)。

第Ⅴ章まとめ

第１節　遺跡の立地

調査の進行にともない，当該地周辺が低地に形成された流路と微高地からなり，変化に富んだ自然地形上に立地していることが，判明してきた。しかも縄文時代中期後半まで遡る遺構・遺物も発見された。これまで標高22m前後から24ｍほどの低位における縄文時代の遺跡の存在は，ほとんど確認されていなかった。周辺部では隣接する西院月双町からわずかに縄文時代後期の深鉢や打製石斧が出土例が知られるに過ぎない[1)]。当遺跡の発見は，縄文時代における盆地内での遺跡評価に対する再検討につながると考えられる。

京都盆地は，約２万年～18000年前，極相といわれる寒冷期を迎え，盆地付近は亜寒帯針葉樹林帯が形成され，現在の中部山岳地帯のようなモミ属，ツガ属，トウヒ属などの森林になったと考えられている[2)]。そして大阪湾の海水面が150ｍほどの低下により，河川はこれまでに形成された扇状地に，小さな谷を刻み込んでいった。そして河川は土砂の運搬能力を増大させ，大量の砂礫を山地から運搬した。この砂礫は谷口に扇状地を発達させ，そこを埋め立てられた支谷は，後背湿地となった。遺跡の北方には，天神川扇状地が広がっている。ここには，気候の温暖化が進むにつれ，河川の土砂運搬能力が低下し，支谷の中に礫や砂を堆積する。そして森林はブナやコナラが主体となり，約6000年前の海水準が最も高位の時期を迎えると，暖温帯林であるアカガシを主にした森が形成されていった。温暖期における森林の繁茂により，河川の運搬能力は失われ，扇状地を伏流するかもしくはせいぜい縁辺部を流れる程度のものとなる。盆地南西部には粘土層が溜まるような湿地帯が広がり，この時期に京都盆地の地形が完成し，現在とほぼ同じ地形（自然堤防など）ができあがったと指摘されている[3)]。まさに当該地の地形はそのことを裏付けるものといえる。

そして　弥生時代に入ると，やや気候が悪化し，また人為的行為による森林破壊もおこなわれるようになり，河川はしばしば洪水を引き起こすこととなった。扇状地を下刻した河川が扇状地末端に小さな扇状地を新たに押し出すという現象が生じた。

当該地で確認した低地と微高地からなる自然地形は，平安時代においてもなお残存し，至る所で湿地を形成した。このような存在に歴史的評価を与えたのが，杉山信三である[4)]。杉山は，平安京図の中で『拾芥抄』にみる右京図に注目し，そのなかでとくに目立つものとして「小泉」を取り上げられた。この「小泉」ならびに「同」の占める範囲が，三条以南六条以北，西大路以西（一部五条一坊の十三・十四町が東に出る），西京極の間にあって，47町に及ぶ広大な地域にあたるとした。杉山はこのなかで，この「小泉」を「小泉家領」と書くべきであったのではないかとした。しかしこれらの地域に小泉氏の存在は知られず，否定的な見解も提出された[5)]。後述の論考では，これについて再考され，「拾芥抄」に「小泉」と記載された六条四坊十一から十四坪に関して「在西院小泉庄内」とする文書があり，それにもとづき再評価されたのである。この庄に関する文書が，曼陀羅寺執行を巡る承暦二年（1078）の観智院文書や永保二年（1082）の『永作手田宛行状』（大徳寺

文書）にもみられるとし，平安時代末には右京の一部が庄園化され，そのなかには「厩」などの施設があったことを立証した。

さらに小泉庄の位置を，明治25年作成の陸軍省地形図におとしてみると，標高25 m～30 mの間に立地し，その範囲は右京内の南の一部を占めるとした。そこは川の氾濫にあえば，水はけが悪いことから，居住には適さない地域であった。これらの湿地において，耕作が禁止されていた水田が形成されるようになると，湿地間にある微高地に耕作者が住み着くようになると考えた。それが後世の西院，川勝寺，朱雀，唐橋，西中といった集落であると指摘したのである。

次いで杉山は，この地形図から紙屋川の氾濫と治水についてと，御土居の外に小泉庄（西院庄）があることの意味について検討し，『拾芥抄』の右京図の書き入れには伝統的な小泉庄とせず，単に「家領」ではないことから，「小泉」とのみ書き込んだものと考えた。

この「小泉」について，近年の考古学の成果により，周辺地域の自然環境が明らかになりつつある。これを六条三坊周辺でみてみる[6]。

三坊の東辺一町から三町にかけては，条坊や宅地に関係する遺構や包含層が確認されている。それが東南隅の四町から西にかけての各宅地内では，湿地や流路の確認例が，俄然増加する。そのなかでも三坊の南半と西半に顕著にみられる。このようなあり方は，『拾芥抄』の「小泉」の分布と重複するが，南半の五，十一，十二の各町では合致しない。さらに「小泉」と明記された十四から十六町でも部分的ではあるが，十四町での弥生時代の落ち込み，十五町での古墳時代の南北溝，十六町での平安時代前期の包含層など遺構が確認されている箇所もある。このことから当該地同様，各町には微高地と低地が併存し，低地が広範囲に及ぶ場合は，遺跡が確認されにくいと考えられる。

調査成果のなかで，低地化した湿地の利用状況を平安時代後期以降最も端的に示すものとして，七町東二行北一門の路の東側溝付近で確認された11世紀末頃に想定される木棺墓1基がある。掘形は，南北長2.1m，東西幅0.8 m，深さ0.2m，木棺は，長辺1.7m，短辺0.5mを測り，棺台が2本，棺底から確認された。遺物は木棺内から，漆器が1点，木棺北東側の掘形内から完形の土師器の皿6枚が正置された状態で認められた。右京における墓の検出例は，右京三条三坊（現島津製作所本社工場内）から発見された9世紀後半の木棺墓がある[7]。これは副葬品からして貴族の子女に関係すると考えられ，のちの屋敷墓的な性格を備えていると考えられる。また右京五条二坊の堀川小路の路面で検出した11世紀後半の木棺墓がある[8]。これは時期も同一であり，木棺の規模，副葬品のあり方など共通する要素が多くみられる。そして重要な点は，路端での埋葬という点である。これは今回の例と全く共通する。これらの事実から，条坊制が既に形骸化し，右京の南半で条坊に関わる路に，「穢れ」を持ち込める環境が，院政期開始と相前後する時期にあったことである。これらの遺構はそれを裏付ける重要な歴史的史料といえる。『兵範記』仁平三年（1153）四月二十八日条には，「離宮祭致齋之間，死人乗車被渡宇治橋，来月八日御輿奉渡有憚否，前例如何被尋問，宇治古老者申伝，雖無先例，依准大路，不存禁忌者，仍被渡橋云々，」と答えている。これは道・大路は魑魅の活動するところ，自由往来の場所であって，常に死穢れのつきまとうところと

して路に関する捉え方に変化があったことが知られる[9]。右京では，宅地の衰退が著しいことからこのような現象は左京よりも早く進行したのではないかと考えられる。

そして条坊制の痕跡を残しながらも，低地の開発が本格化するのが，13 世紀に入ってからである。最近右京六条一坊で，この時期の持仏堂に関連する遺構や今回と同様な低地と小領主的宅地が発見されている[10]。当該地では微高地に建物群が出現し，それとほぼ同時期に低地には，無数の耕作に関連する小溝群が開削され，低地が本格的に開発されたことがうかがわれる。右京の六条の地は，このような低地を利用して逆に水田耕作に適した地ともいえよう。ただ今回のそれに関連する小溝群の分布は，広範囲にいたってはいない。このことから同じ右京の南半でも，低地が広範囲な部分と，谷地に存在する小規模耕作地とがあり，前者は庄園化が進むが，後者は小規模開発領主のままであったとも考えられられる。そのことから『拾芥抄』の書き込みは，これらの開発地をすべて「小泉庄」とはせず，低地で泉の湧き出る特徴から，総称として「小泉」と表記したのではないかと考える。

このように在地領主による開発に関連する遺跡は顕在化するが，現集落への変遷は一律的ではなかった。たしかに微高地に新たな居住域が形成されたが，その場所はこれらの地域ではなかった。当調査区だけではなく，右京六条一坊でも鎌倉時代の小規模領主的な宅地は出現するが，それほど存続せず，14 世紀代にはほぼ消滅する。それは当該区でも同様である。そして南北朝動乱期を経て，京郊集落の淘汰あるいは再編成がなされ，現在まで知られる西院，川勝寺，朱雀，唐橋，西中といった塊村集落が成立したことを遺跡の消長からうかがえる。杉山はこのような考古学的成果からみた遺跡の変遷過程を抜きにして，一気に現在の集落立地に移行したと考えたことは，考古学による成果が蓄積されてない段階であったためやもうえないことであろう。現在の集落は，鎌倉時代の小領主的宅地とは異なるが，やはり自然堤防上に立地し，室町期にはいってようやく集村化した結果といえる。

このように右京の南半はさまざまな歴史的変遷を経ながらも，縄文時代以来の地理的環境を中世末までとどめていたといえよう。そして右京の地は，近世にいたって集落が京都の近郊農村として幕藩体制化に位置づけられるなか，低地は埋め戻され，本格的な大規模水田が展開する景観に大きく変化したのである。

註

1）山下秀樹『平安京右京六条四坊九町・五条大路　京都市右京区西院月双町』（京都文化博物館『京都文化博物館調査研究報告第８集』，京都，平成３年）21・22 頁。

2）石田志朗『京都盆地北部の扇状地』（『古代文化』第 34 巻第 12 号掲載，京都，昭和 57 年）。

3）横山卓雄『第２章京都盆地の自然環境』（古代学協会編『平安京提要』所収，東京，平成６年）。

4）杉山信三『京図右京の小泉について』（『史迹と美術』410 号掲載，京都，昭和 45 年），同『平安京右京の湿地について』（『古代文化』第 40 巻第９号掲載，昭和 63 年）。

5）西院史編集委員会編『西院の歴史』（京都，昭和 58 年）77 頁。

6）本章末尾の調査一覧を参照。

7）平尾政幸ほか『平安京右京三条三坊』（（財）京都市埋蔵文化財研究所第 11 冊，京都，平成

２年)。
8）堀内明博『第Ⅱ章平安京跡発掘調査　右京五条二坊』(京都市埋蔵文化財調査センター・(財)京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘調査報告昭和55年度』所収，京都，昭和56年）49・50頁。
9）岡田荘司『平安時代の国家と祭祀』(東京，平成６年)。
10）(財）京都市埋蔵文化財研究所『平安京右京六条一坊六町現地説明会資料』京都，平成14年。
11）梅川光隆ほか『平安京右京六条一坊』((財)京都市埋蔵文化財研究所調査報告第11冊，京都，平成４年)。

第２節　条坊と建物配置

今回の調査では，条坊関連の遺構として，東西方向の樋口小路と南北方向の馬代小路を検出した。そしてこれらの条坊で区画された宅地内から，３時期以上にわたる計35棟の建物と15条の塀および宅地内区画溝５条を確認した。

本節では，これらの条坊関連遺構と周辺部での条坊に関する成果を含めて，平安京右京六条三坊における条坊施行のあり方と規模について復原を試みる。その分析に際しては，『延喜式』の記載や従来平安京の条坊復原の研究成果と齟齬があるかどうかを含めて，国土方眼座標方位に対する個々の振れ，基準尺などについて検討する。

次いで，条坊と各宅地内部の建物群や塀，宅地内溝などの配置や分布から，四行八門制との関連や地割について検討する。

作業に際して，各遺構の計測座標値は，航空測量により作成した20分の１実測図から計測した。

１　条坊

馬代小路ＳＦ649　八町と九町間で東西両側溝を南北約113ｍにわたり確認できた。これらの心々間距離は，5.6（18.6尺）～6.8m（22.6尺），有効路面幅は３ｍ（10尺）～4.5m（15尺）と，『延喜式』記載の溝心々間26尺，路面幅23尺の数値に比べ短い。しかも数値にばらつきがあることは，場所により溝幅に広狭になっていることによる。

東側溝ＳＤ655は，南北約110mあまりを確認した。樋口小路以北では，幅5.6～6.8m，深さ80～90㎝となり，樋口小路との交差点以南では，ＳＲ0001と重複し，その大部分が削平されている。溝の位置は，条坊復原の側溝想定心より約1.3ｍ西にずれる。溝幅は『延喜式』記載の小路の溝幅３尺よりかなり広い。溝の両肩をみると，東肩がほぼ同位置にあるのに対し，西肩では場所によりその位置が異なる。樋口小路交差点寄りでは，大きく路面側に張り出すような形態をとっている。

西側溝ＳＤ656は，南北102mあまりを確認した。幅2.0～3.2ｍ，深さ30～50㎝となり，東側溝同様樋口小路との交差点以南は，ＳＲ0001により削平を受ける。これも『延喜式』記載の溝幅よりかなり規模が広い。溝の位置は，条坊復原の側溝想定心より約30㎝西にずれる。その両肩をみると，西肩がほぼ同位置であるのに対し，東肩は北七門以南で大きく路面側に張り出している。

このようなあり方は東側溝と共通する。

両側溝の断面観察や層位ごとの出土遺物から，路面側に張り出す時期が，九世紀前半以降と下がることが判明している。即ち，この時期に溝を広げた可能性が高く，しかもそれは路面側になされている。このことから初期に開削された溝の位置をとどめているのは東側溝では東肩，西側溝では西肩となる。それを基準とすると両肩間は，約8.9ｍとなる。これは『延喜式』の記載と合致する。このような溝拡幅のあり方は，平城京にもみられる[1)]。路面の標高は，北端約23.2ｍ，交差点付近22.9ｍとなり，北端～南端間の勾配は1.3／113.3と南に緩やかに傾斜している。これは両側溝の傾斜も同様であり，自然地形に合わせて南向きに排水機能を有している。

樋口小路ＳＦ650　九町と十町間で，東西約85ｍにわたって南北両側溝を確認した。これらの心々間距離は，約7.1m，路面幅は約6.2mとなり，『延喜式』記載の数値と比べわずかに狭い。交差点より東側は，ＳＲ0001・4200の存在から路面部をほとんどとどめていない。

北側溝ＳＤ657は，部分的に削平されるが東西110ｍあまりを確認した。幅60～100㎝，深さ5～15㎝となり，溝深が浅いことから，後世削平を受けたと考えられる。溝幅は馬代小路ほど広狭はみられないが，溝の両肩をみると，北肩の方がほぼ同位置である。南肩は馬代小路交差点寄りでやや路面側に広がる傾向がみられる。馬代小路の側溝との合流部は現代攪乱を受ける。条坊復原図の側溝想定心とほぼ合致する。なお交差点より東側の北側溝想定位置で確認したＳＲ4200の肩の位置をみると，北肩が北側溝の北肩の延長線上と一致することから，その設置は，北肩を基準としていることがうかがえる。それをもとに交差点より東の小路規模をみると，約7.1mとなり，小路想定範囲内で川が設置されていたことが明らかとなった。

南側溝ＳＤ658は，東西80ｍあまりを確認した。馬代小路交差点より東側でも，ＳＲ0001南肩でその一部が残存していた。しかし近世以降の東西溝と重複し，その原形ををとどめるのは部分的である。幅80～160㎝，深さ40～50㎝となり，北側溝に比べ溝幅の変動も少しみられる。条坊復原の側溝想定心より南に約1ｍにずれる。

路面の標高は，西端約23.12m，七町東四行中央約22.69ｍで，両間の勾配は0.43／106.4と南北路よりさらに緩やかに東に傾斜している。

七町宅地内で宅地を2分する路を認め，それは両側に溝をともなう。溝間は約4.5mを測り，緩やかに蛇行する。溝はほぼ同位置に幅が狭く深いものから，広く浅いものへと四時期の変遷を確認した。これらのうち最も古い時期の溝最下層から，9世紀前半の土師器を確認したことから，開削時期がここまで遡る。この路は規模などから『延喜式左京職式』に「凡町内開小径者‥(中略)‥，自餘町内一廣一丈五尺」と記載されている『小径』に相当するものと考えられる。路面の標高は，宅地を南北に等分する付近が標高22.4ｍ前後と一番高く，それを境に北と南に向かって各々流れる。これも自然地形に沿った排水方法をいえる。

2　造営尺と造営方位の振れ

これについては，財団法人京都市埋蔵文化財研究所の成果に基づく造営尺29.84708cm，造営方

位N－0°　14′　03″　－Wによる条坊復原案を採用し，それにもとづき分析してきた。その過程で，この案に合致しない事実が浮かび上がってきた。とくに南北方向の条坊関連遺構についてである。そのなかでも七町内で確認した小径にかかわる路およびそれにともなう側溝と馬代小路の関係であった。従来の案によるとこの路の中心が，七町の東西二等分線上に位置すると考えていた。しかしながらそれに符合しなかった。しかも溝の方位もわずかであるが異なることが明らかになってきた。

そこで改めて検出した遺構の具体的事例に基づいて，改めて条坊のあり方を分析した。その際上述した如く，溝が後世改変されたことが，判明したため，路面幅の中心や，溝心身間距離に基づいて復原することはおこなわず，できる限り造営当初の痕跡をとどめているもの，具体的には溝肩を基準としておこなった。その際これも上述したように両溝肩でも路面側が改変されている可能性が高いことから，築地側の溝肩に基づいて造営尺と方位を各遺構ごとに求め，条坊を復原することにした[2)]。

その結果，樋口小路を境にして各町における南北方向の条坊の振れは，異なる事実が明らかになってきた。即ち以北ではN－0°　48′　45″　－W，以南ではN－0°　20′　1″　－Wであることが解った。東西に関しては振れ角が同じであった。このことから南北方向については異なる基準により施行されたことがうかがえたのである。そこで想起されることとしてSR4200のあり方である。上述した如くこの川は馬代小路手前で条坊制に準じた川筋から自然流路に準じた河道となったことである。即ちこの箇所から西南へは，路や街区に規制されず，自然流路のあり方に沿って流れていたことから，これより西南は条坊制が施行されていたかどうかが問題となる。そして，SR0001に変更された際，改めて条坊制に遵守するような河川となったことは，この時期に条坊制が新たに再施行されたことを物語っていると考えられる。右京ではないが左京九条三・四坊でも条坊にともなう溝の時期が平安京造営当初まで遡らない事例がみられる[3)]。今回の調査成果は，これまで右京でも，時期の下がる条坊関連遺構は確認されていたが，このように条坊施行の時期が具体的に異なることが判明したのは初めてであり，しかも右京の西南部においてこのような地域があったことをうかがわせる事例といえる。このことからも当該地周辺の条坊関連遺構の再評価が必要となろう。

3　建物配置

今調査で，建物が密集し，かつ重複がみられたのは八町の宅地である。それらは三時期に細分され，1町占地の宅地であったことがほぼ判明している。

このような占地規模をもつ宅地は，平安京では京内離宮，院を除くと，平安時代前期に属するものとして右京一条三坊九町[4)]，右京三条三坊[5)]，右京六条一坊[6)]など，ごく限られている。このうちいわゆる左右対称配置をもつ建物群が確認されているのは，右京一条三坊九町だけで，しかもその配置にあたっては10尺方眼に基づいた地割により計画されていたことが明らかにされている。最近長岡京左京東院跡で発見された巨大な建物群からなる宅地が，やはり10尺方眼に基づいた地割により造営されていたことが明らかになった[7)]。このことから宮内だけでなく京内における天皇

ならびに皇臣家に関わる離宮や邸宅でも10尺方眼の地割により計画的に建物群が配置されていたことが明らかにされつつある。右京一条三坊の報告では，桓武天皇に関連して，神王あるいは壹志濃王との関連を指摘されていることからも，このことが裏付けられる。

一方平城京において左京三条二坊一・二・七・八坪の建物群や区画施設が9尺方眼の基準区画により配置されていたことが明らかにされている[8)]。このことから平城京内では，10尺方眼だけでなく9尺方眼に基づく建物配置があったことになる。

このような研究成果にもとづき，各宅地内の配置計画を具体的にみてみる。

七町では宅地内を東西2分する路，掘建柱建物10棟以上と土器溜ＳＫ5429，ＳＥ3365などを確認した。ＳＢ1は，東三行北二門の位置にあり，東西3間以上（8.3尺等間）×南北2間（7尺等間）の東西棟で南庇（8.3尺）がつき，正殿相当の建物と考えられる。これと重複して東西4間×南北2間のＳＢ29がある。前者の南入側柱列と後者の棟通は北二門の南北2等分線と一致する。さらに後者の東妻柱筋は，北二門の東西2等分線と一致する。このようにこの2棟は四行八門制に規制されて配置されたことが解る。なお両建物から約52尺南に，2間×2間の小規模なＳＢ20があるが，これの南柱列は北三・四門境界線にのる。一方ＳＢ2～4はＳＢ1から西へ50尺ほど離れた七町北西隅にあり，重複するが，攪乱などにより全容は明らかでない。柱間間隔も6～10尺と不揃いである。このうちＳＢ2は東西2間（10尺等間）×南北3（8.3尺等間）で，総柱のものである。またＳＢ3も北側柱列が未確認であるが，東西4間×南北2間の南庇付東西棟に想定される。いずれもＳＢ1・29に付属する施設と考えられる。なお建物群のすぐ南に掘形約1.2mの長方形で内法0.7mの方形横桟縦板組のＳＥ3365があり，形態が長方形で通常の井戸より小規模であることから，通常とは異なる特殊な使用が考えられる。

調査区東端において確認されたＳＢ19は，南北2間（9尺等間）で東へ延び南庇（10尺）がつくものと予想される。この西妻柱筋は東二行の東西2等分線と一致しこれも四行八門制に規制された配置であることが解る。この北西には，路側溝に切られる土器溜SK5429があり，これにともなうものを考えられる。

ＳＢ21は，2間×3間（8尺）に西庇（7尺）のつく南北建物に想定される。この棟通りは東四行の東西2等分線に一致する。ＳＢ24は，東四行北七門の位置にあり，東西2間（6尺等間）×南北3間以上（5.5尺等間）の南北棟で西庇（7尺）がつき，西側柱列が東四行の1／3に一致する。また当町では，幅約15尺ほどの南北路である小径があり，その西側溝の東肩が七町を東西2等分線上に位置し，路の中心は東にずれる。出土遺物の時期より小径が9世紀の前半には成立しており，当初から宅地が1/2町ないし1/4町であったと考えられる。ただ小径の両側には，築地や塀などの具体的な遮蔽装置が確認されていないことから，同一敷地内の区画施設であった可能性が高い。このように七町の建物群は，小規模でありながらも四行八門に規制された配置をとっていたことが明らかとなった。

八町では，SB 9が門のような施設である可能性が考えられる。その西にあるＳＢ10は，5間（8尺）×2間（8尺）で南庇（9尺）付東西棟で，ある時期の正殿に相当する施設と考えられる。こ

の建物の桁行中央の柱筋は東四行の東西２等分線と一致する。八町内での正殿と考えられるＳＢ25は，５間×２間（桁行，梁行とも８尺等間）で，南北庇（８尺）付東西棟に想定される。棟通は北三・四門境界に，西妻柱筋は東三・四行境界に一致する。上述した門とおもわれる施設の中心は，これの中軸線上に合致する。さらに平成２年調査での建物２の東西両側柱筋はSB25のそれの延長線上に位置することから，両棟は密接な関係があったと考えられる。建物２は後殿に相当すると考えられる。なお両棟間は20尺隔てる。

ＳＢ25の西側20尺隔てて，２間×２間以上（８尺等間）の東庇付南北棟と考えられるＳＢ26があり，建物内南端付近で胞衣壷もしくは地鎮具に関連するものをともなう。またＳＢ25の東側33尺でＳＢ27の南側柱筋を確認した。これらのＳＢ26・27南妻とＳＢ25南庇の柱筋は同一線上にのることから，同一の計画にもとづき，配置された建物群とみられ，両建物は東西脇殿に比定される。なおSB27は西庇付に復原したが，この西入側柱筋とSB25間は40尺となる。そして平成２年度調査での建物３の身舎側柱筋と一致する。なおSB25から南門までほぼ60尺となり，SB25・26間の３倍の数値となる。SA７・８はＳＢ11およびＳＢ25・26と並行し，東西方向のＳＡ９は，北四・五門境界線上と一致する。また，ＳＡ10はＳＢ12と同様西に振れ，時期が異なる。

これらの建物群はいずれも八町の南北２等分線より以北に配置され，左右対称型をとり，門や柵列の存在から内郭構造を有していたと考えられる。これらは８尺を統一基準として割り付けられ，前殿と後殿間，前殿と西脇殿間が20尺と同一で，西殿と東脇殿間はその２倍の40尺となり，規則性が認められる。このことは平安京で今まで知られていた建物配置の寸法割付として，新たな事例で重要な資料といえる。

また八町南半には縄文時代～古墳時代の流路を利用した大規模な池状の遺構が存在し，そこから平安京内でもほとんど類例がない越州窯系青磁毛彫合子の蓋や須恵器宝珠硯，鳥形瓶の鳥紐蓋など貴重なものが出土することから，当該地にはかなり高位の宅地班給者の存在を裏付けるものといえる。その北側には，南北方向の溝一条が取り付き，北端に枡状を呈した木樋が設置されていた。その南は水を堰き止めたり，開けたりする施設があり，池に水を引き込むための導水施設と考えられる。また，溝の南側両肩周辺には洲浜に想定される小礫や粗砂の広がりを確認している。このことから単なる池ではなく園池とみたていたことが想像できる。しかもこれと建物群は，門を隔てて南北に対置する。このようなあり方は，右京一条三坊九町[9]でもみられるが，平安京内でこのような導水施設をともなう平安時代前期の例は今回初めてであり，寝殿造りとの関連が注目される。

九町では，掘立柱建物２棟と井戸１基が確認された。ＳＢ14は九町の南東部にあり，３間以上×２間で南庇付き東西棟で，柱間はほぼ９尺等間を測る。この西妻は東一・二行境界線，棟通りは北六・七門境界線に各々位置する。ＳＢ15は九町の中央南端にあり，SB14西妻から56尺隔ててある。これは２間×５間以上の西庇付南北棟で，柱間寸法は７尺等間である。この建物の東南から南妻側に沿って，雨落溝と考えられる遺構があり，その位置は，東二行の東西２等分線上に位置する。

SE670は九町の南東角にあり，建物群と離れて設置され，通常の配置のあり方とは異なる。

十町では，掘立柱建物が３棟，塀２条がいずれも樋口小路に沿うように配置される。宅地内の建物のうち，ＳＢ 18 は中心的なもので，東西５間（7.7 尺等間）×南北２間（8.3 尺等間）で，南庇（8.3 尺）付東西棟である。これには建て替えがあり，後に南庇が付けられたことが判明した。桁行中心は，東一・二境界に，棟通りは北一門南北２等分線に一致する。これから東に 33 尺ほど離れた馬代小路寄りにＳＢ 16・17 が南北に並んで確認された。ＳＢ 17 は東西２間（8.3 尺等間）×南北３間（7.7 尺，６尺，7.7 尺）の南北棟で南北の中央間が狭くなっている。この北妻柱列はＳＢ 18 の南庇柱列とほぼ揃っていることから，両者が同時に存在していたことがうかがえる。ＳＢ 16 はその北に位置し東西２間（７尺）×南北３間（7.5 尺等間）の総柱建物で倉庫と考えられる。この建物方位は他と比べやや西に振れ，時期は異なることが想定される。また，ＳＥ 1842 周辺から炉跡と考えられる焼土面があり，金属加工関連の工房の存在が予想される。井戸はこれらの雑舎に付属するように配置され，このうちＳＥ 1842 から銅製の帯金具が出土し，班給者の階層をうかがえるものといえる。

このほか，宅地を東西に２分すると思われるＳＤ 2429 や南北に２分するＳＤ 4340 があり，十町の宅地を細分する。しかし七町の小径同様遮蔽装置をともなわないことから，これらも同一宅地内を細分する区画施設の可能性がある。

このように当該地の建物配置を中心に分析してきたが，このようなあり方がどのような特徴を有しているものであるかを把握するために，周辺の調査事例についてみることとする。

右京六条一坊五町　平成元年の調査で，町の東約３／４を占地する宅地として利用し，その南半に主要殿舎を，北半に付属雑舎が配置され，２分割された異なる空間構造もつ宅地であることが判明した[10]。主要殿舎は５間（９尺等間）×２間（9.5 尺等間）の，四面庇（12 尺）をもつ東西棟である正殿（建物 14）がある。その北には８間（８尺等間）×２間（8.5 尺等間）で南北庇（11 尺）をもつ東西棟の後殿（建物 11）がある。西には正殿と廊でつながる５間×２間の四面庇（10 尺）付南北棟建物 23 がある。東には後殿と廊でつながる６間×２間で南と西に庇（9.5 尺）の付く建物 16 と３間×２間の四面庇（8.5 尺）付き南北棟建物 22 を南北に配置する。この３棟はいずれも身舎が桁行・梁行とも８尺等間である。建物群を配置したときに廃絶した井戸から平安時代前期中頃の遺物が出土することから，これらの建物はこの時期以降であることが想定されている。

主要建物群の配置は，建物 14・23 の南側柱列と建物 22 の北側柱列が，北七・八門境界線に一致する。建物 11 の北入側柱列は，北五・六門境界線にほぼ一致する。建物 14 の西入側柱筋と建物 11 の西妻より１間東の梁行が揃い，それは東二行中心線と一致する。また建物 16 の東側柱筋と廊 19 の東柱筋は揃っており，東一行中心線と一致する。このように四行八門制に強く規制された配置であったことがわかる。一方建物 14 と建物 23 間は 16 尺余り，建物 14 と建物 11，建物 14 と廊 19 間は各々 33 尺で，前者の２倍をとる。また建物 14 の南庭の南北長は 47 尺強と建物 14・23 間の３倍をとる。このように建物間隔は８尺の倍数で割り付けられている。また身舎の柱間寸法は，建物 14 が桁行，梁行とも，その他の建物の身舎は８尺等間であるのに対し広く，四面庇とことなる。このように柱間寸法でも８尺を基準としている特徴がみられる。

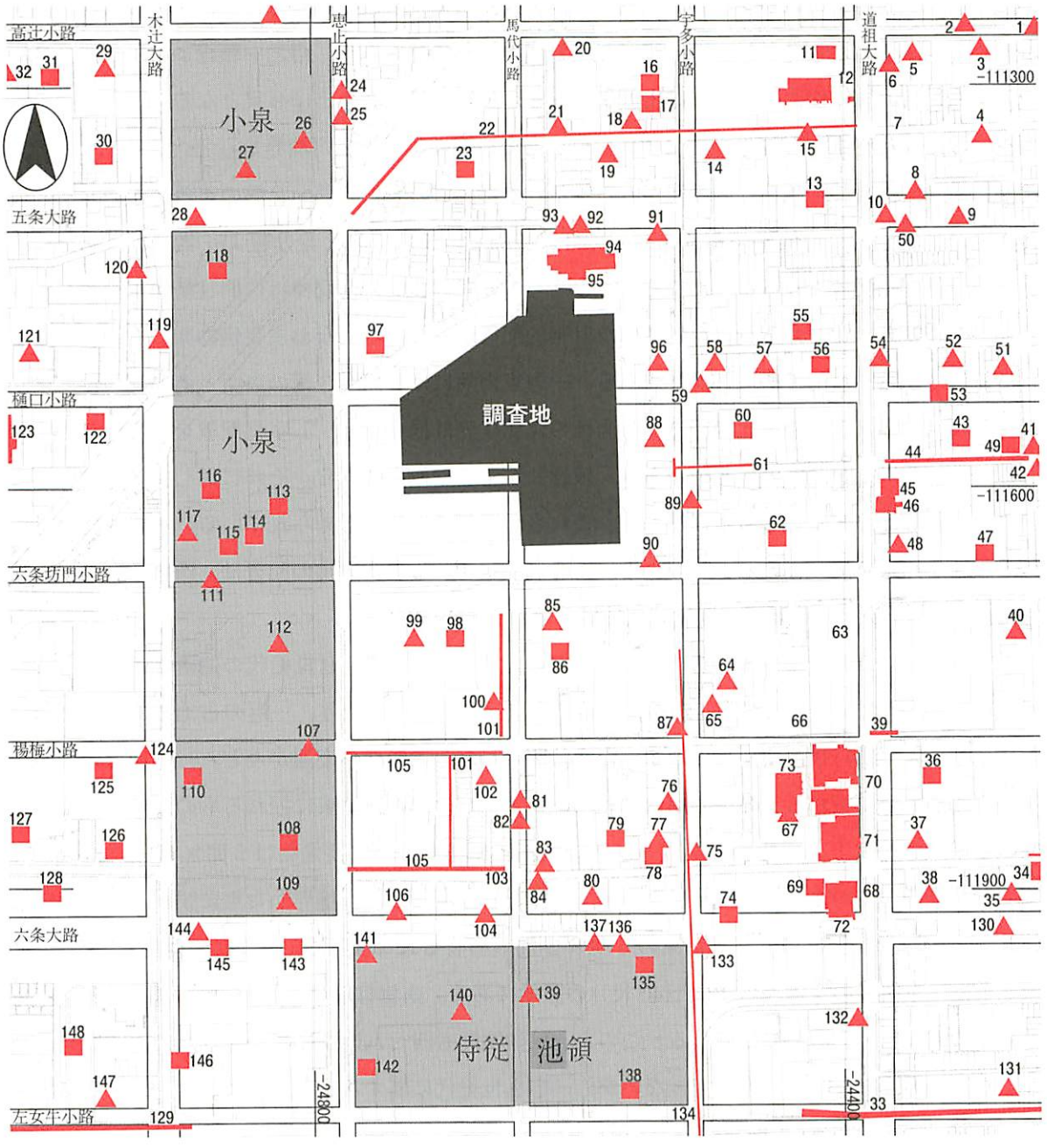
右京六条一坊十一町　平成２年の調査で，その範囲は十一町の南部をほぼ占める[11]。このうち建物群が検出されたのは東部で，宅地範囲は東が皇嘉門大路，西は十一町を東西に２分する位置に南北溝があり，それが西限と考えられ，南は楊梅小路，北に遺跡が拡がることから 3/16 町以上 1/4 町以下と考えられる。建物群は所々撹乱をうけ全容が判明しにくいが，数時期にわたる建て替えがある。そのうち主要なものとして北側には５間×２間以上（桁行・梁行とも８尺等間）東西と南に庇（８～９尺）のつく東西棟がある。この建物の西側柱筋は十一町の東西２等分する位置から 50 尺にあり，北側柱筋は北五・六門境界から 20 尺にある。これの南に東西に細長い建物が１棟あり，両棟の西入側柱筋は揃うことから，並列型の配置となる。この南にある SB ５の北側柱筋は北七・八門境界に揃うなど，全体的に四行八門制に規制された計画的な配置といえる。なお建物間距離は建物の規模が不明のため確定できない。９世紀代に属する。

右京六条一坊十二町　平成元年の調査で，その範囲は十二町の北西部を占める[12]。宅地規模は北が楊梅小路，西が西櫛司小路，東が十二町を東西２等分する位置に南北溝，南が南北に２等分する位置の付近に東西溝が各々あり，東と南を限る施設と考えられ 1/4 町を占地したことが想定される。主要建物は東四行内にあり，各々の西妻側柱筋をあわせた並列型の配置である。両棟は厳密な意味での対称型とはならない。両建物の西妻より東１間の梁行が東四行中心線と一致する。両東西棟の間隔は 15m（50 尺）の距離を測る。また南側の東西棟の南側柱筋は北四・五門境界から 10.5m（35 尺）にある。このように当該地の建物群は，間隔に整数の比率や寸法割付がみられず，規制を強く受けた配置をとらないと考えられる。なお北側東西棟とその東の建物内には甕据え付け痕跡をともなうことから公的施設の可能性がある。９世紀代に属する。

右京六条一坊十三町　平成元年の調査で，その範囲は十三町の中央北寄りを占める[13]。宅地規模は，十三町を東西２等分する位置に南北溝があること，南北２等分する位置に東西溝があることから，各々 1/4 町を占地したことが想定される。東西両区の建物群はいずれも３棟で構成され，雁行型配置をとる。東側建物群は５間×２間（桁行・梁行とも９尺等間）の南庇（８尺）付東西建物を主要なものとする。その，桁行心は東一・二行境界より東にずれる。ただ西端から東１間目の梁行が境界に揃う。この建物の北端から 20 尺離れて，5 間×２間（桁行・梁行とも８尺等間）の東庇（９尺）付東西棟があり，桁行心はやや西にずれるが，梁行柱筋は主要東西棟の梁行に揃う。また主要東西棟の西側柱筋から 40 尺離れた西に，５間（9.3 尺）×２間（8.3 尺）東庇付（12 尺）の南北棟がある。この南側柱筋は主要東西棟の南側柱筋にあい，北側柱筋は北の東西棟南側柱筋に揃う。このように３棟間の距離の比率は１：２の整数値をとり，極めて計画的な配置をとっているのがうかがわれる。ただ南北方向については四行八門制などの宅地区画との関連は明瞭でない。西半建物群のうち，西側の５間（８尺等間）×４間（8.3 尺等間）の東西庇（10～11 尺）のつく南北棟 SB ６が主要なものと考えられる。この西側柱筋が東三・四門境界に，北側柱列が北三・四門境界に揃うことなど四行八門制に規制された配置といえる。また東方の７間×３間（桁行・梁行とも８尺等間）の西庇（９尺）つき南北棟の西側柱筋は，十三町を東西に２等分する位置から 20 尺東にある。そして北東部の南北棟の西側柱筋は同じく２等分する位置から 30 尺にあり，SB ６との間も 30 尺と

なる。これらのことから四行八門制に規制された配置となり，一定の計画的配置がなされていたことがうかがえる。9世紀代に属する。

右京六条一坊十四町　平成4年の調査で，その範囲は十四町の南東部を占める[14]。宅地規模は東が西櫛司小路，南は楊梅小路，北と西では遺構がさらに拡がり，1/4町占地の可能性が高いと考えられる。主要なものは7間×4間（隅以外桁行・梁行とも8尺等間で，隅の出9尺）の建物で，単独型の配置をとる。その桁行心は東一・二行境界からやや東にずれるが，西妻より東1間の梁行が東一・二行境界線と一致する。さらに棟通は，北七門の南北2等分線に一致する。この建物の東入側柱筋は西櫛司小路西築地心から西へ56尺にあること，南側柱筋が楊梅小路北築地心から56尺に

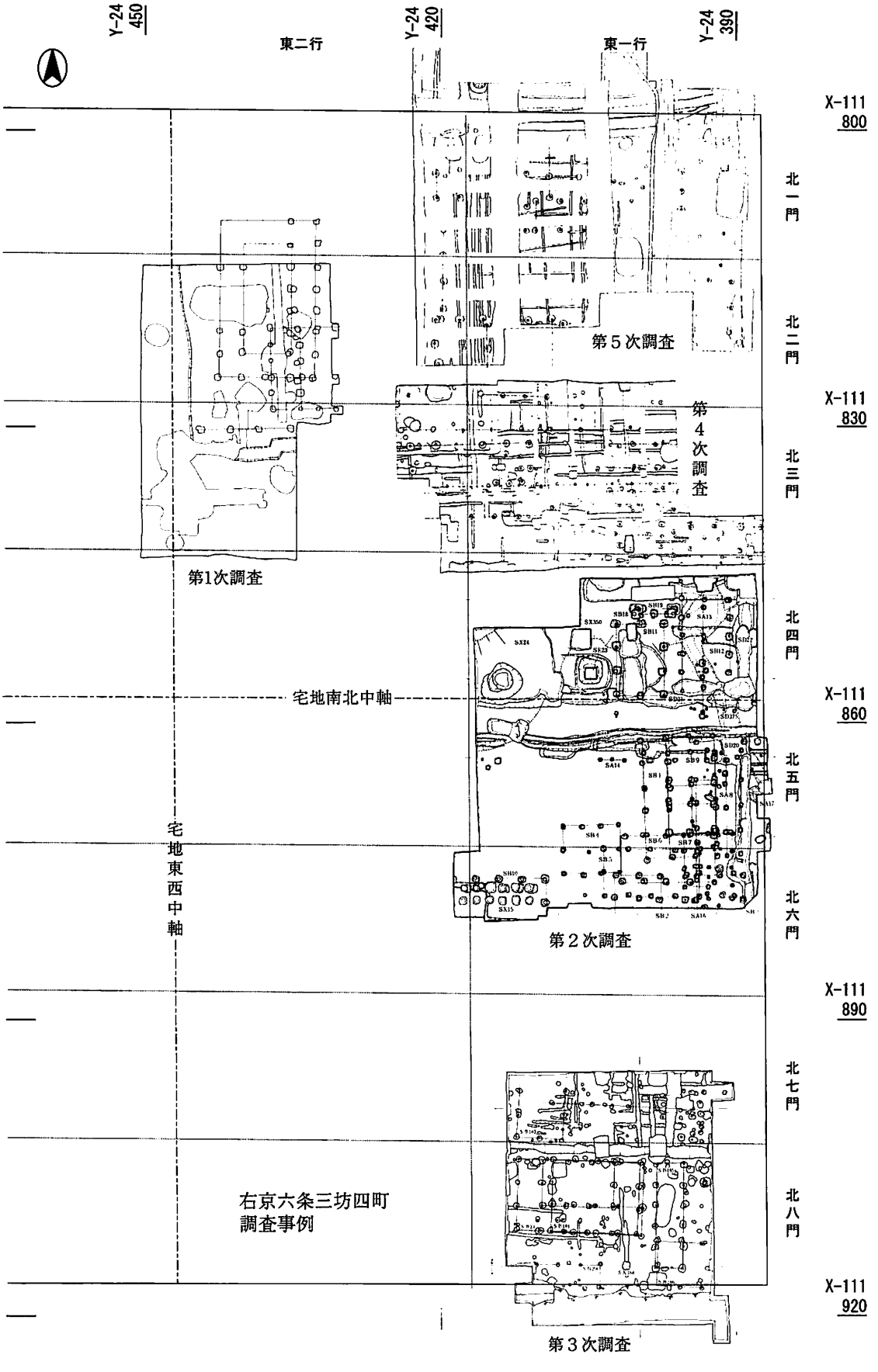


第49図　調査地周辺既往調査配置図（1/5000）

あるなど，宅地境界から東と南の間隔が近似する。さらにこの建物の北側に４間×１間の東西棟があり，その西妻側柱筋が東一・二行境界に揃うなど，宅地内の建物群の配置には，四行八門制に規制されたことがしられる。９世紀代に属する。

右京六条三坊四町　昭和56年から平成元年の多年度にわたる調査で，その範囲は四町の北端中央東寄り，東端中央，東南隅にあたり，５時期にわたる遺構の変遷がたどれる[15]。また平成５年から７年にかけての調査で，四町の北東隅にあたり，10世紀前半までの時期に属する遺構の存在が明らかにされた[16]。その中で宅地に関することとして，９世紀初頭には四町を南北に２等分する位置に東西の小径が存在していた。この時期主要建物は，宅地北東南よりの５間×２間（桁行・梁行とも８尺等間）の南庇（９尺）付東西棟である。その桁行中心は，東一行･二行境界線に一致する。そして９世紀前半にこれが廃絶され，宅地は一町規模に拡大された。同時に道祖大路の西築地内溝も埋められ，整地がなされる。この時点で主要建物も建て替えられ，南北中軸線よりに５間×２間の四面庇付南北棟に変わる。これは桁行７尺５寸，梁行８尺で庇の出は９尺となる。この建物の東側柱筋は，東二行東西２等分線の位置に揃い，南側柱筋は北二・三門境界から北へ3m（10尺）の距離にあり，配置は宅地割との関連がみられる。また，この東に５間×２間の東西棟が南北に２棟並置され，北一・二門境界から各々６m（20尺）隔る。また南北２等分線より北側にも新たに小規模な建物群が配置されるようになる。そのうちの３間×２間の南北棟は西側柱筋が東一行心に揃うなど，建物群は四行八門制に規制された計画的配置がみられる。なお主要建物群のなかに倉などがあることから，公的性格の可能性がある。一方東南隅には５間×３間の東西と南に庇の付く東西棟，東には５間×１間の南北棟があり，両棟の北側柱筋は揃うなど，Ｌ字型配置をとる。そのすぐ北西にも２間以上×２間の南北棟があり，棟通りが北でやや東に振る。それに対し主要建物がある地区の建物群は，北に対して西に振れる。これも時期差であると考えられている。主要建物の南には，園池と井戸を配している。このように正殿に想定される主要建物の配置は，四行八門制に規制されていることがうかがえる。９世紀代に属する。

右京六条三坊八町　平成４年の調査で，八町の北西部にあたり，９世紀代の遺構群が確認された[17]。宅地規模は北が五条大路，西が馬代小路で当該区の北側にあたり，一町の占地であること明らかにされた。平安時代前期から中期までの３時期にわたる遺構群の変遷がたどれ，Ⅰ期は建物の軸線が真北から西に振れるもの，Ⅱ期は真北に一致するもの，Ⅲ期は東に振れるものに分かれる。Ⅱ期の遺構は２棟以上の建物群で構成され，後殿部に相当する。主要建物は５間×３間（桁行・梁行とも８尺等間）の南庇（９尺）付東西棟で，桁行心は東三・四行境界から東にずれるが，西側柱筋は東三・四行境界に揃う。また東の５間×３間（桁行８尺・梁行8.3尺等間）西庇（9.3尺）付南北棟は，東西棟の東端から12m（40尺）の距離にある。南側柱筋は東西棟の北入側柱筋と揃い，その位置が北二・三門境界にあたる。このように建物群も四行八門制に規制された計画的な配置となる。Ⅱ期の詳細な時期は断定できないが，一応９世紀代に属すると考えられる。



第 50 図　右京六条三坊四町（1/600）

4　当該地および周辺の建物配置の特徴

京における宅地班給に関する明確な文献資料は，延暦12年（793）9月遷都にあたり「班給新京宅地」とあるのみで，具体的なことについては記されていない。秋山國三は宅地配分について「三位以上は一町以下，五位以上は半町以下，六位以下は四分の一」とした難波京の宅地班給規定を援用し，平安京でもこの程度が標準であったことを推定した[18]。また京戸貫附から下級官僚に対しても四分の一町程度を基準とし，その戸口に応じて配慮されたとの見解を提示した。そののち平良泰久は，右京一条三坊九町のコ字型配置と宅地規模について言及した[19]。平良は秋山の見解を継承した上で，天皇家及びそれにかかわる一部貴族層に2町以上の宅地があったことを付け加えた。また山中章は長岡京のそれと比較し，平安京の宅地規模には，1/32町から8町まで9種類があるとした[20]。発掘調査で実際に規模が明らかになった中・小規模宅地の事例は，1/16町，3/32町以上，1/8町以上，3/16町以上1/4町以下，1/4町の5種類あり，このうち1/8町以上1/4町の例が最も多く，これらの宅地の大部分が六位以下の下級官人あるいはそれに関わる邸宅ないし屋敷と考えられる[21]。また1/32町の最小限規模については，西市外町南西部の平安京右京八条二坊二町だけがしられる[22]。

当該区周辺の五条から六条間には，右京六条一坊五町での一町占地や1/4町占地の事例が比較的密に分布すること，それらには9世紀代の間に短時期に廃絶するものや10世紀前後を境に消滅する宅地が多い。そして10世紀代まで存続する宅地は，平安京造営当初の宅地規模を廃絶時まで維持する場合が多く，右京の変遷を検討する上でも重要な点と考えられる。

さらに宅地内の建物群は，9世紀を通じて同一の方位をとらずに各小期で異なった方位を呈する例が多くみられる。即ち9世紀前後では柱筋を北で西に振る傾向があり，前半では条坊の振れに一致し，中頃前後で北で東に振るようになり少しずつ方位をずらした変遷とたどる。しかしながらこれはあくまで統計的な傾向で，当該地のように異なる場合もみられる。さらに方位のずれにより建物配置に大幅な変化を及ぼさないものと，大幅に変更する場合がある。後者の例に属するのが六条三坊八町である。これらの宅地の建物配置の特徴については，すでに小稿があり，以下，その概略を記す[23]。

これらの宅地には，黒崎直，平良泰久が設定した並列型Ｌ字型，雁行型等の型式が確認され，また主要建物1棟に付属施設のつく単独型，同規模程度の建物を規矩型に配置する規矩型，建物の柱筋を一定方向に揃えた一列型などもみられる[24]。ただこれらのうち規矩型と一列型には主要な建物がなく，それに付属した建物配置とも考えられる。

宅地規模との関係は，平城京では1町以上の宅地ではコ字型，並列型，二字型が多く，1/2町以下ではＬ字型，雁行型が多いといわれている。この傾向は平安京でもうかがえ，Ｌ字型，雁行型は半数以上を占める。けれども1/4町以下の例で右京二条三坊十五町や右京六条一坊十二町のように建物内に甕据え付け痕跡を伴うことから公的性格を帯びた性格が考えられる宅地では並列型となり，宅地規模が小さくても公的色彩を帯びる場合は並列型を採用したのではないかと思われる[25]。

並列型の特徴

①主要建物が四行八門の二行にわたる場合，身舎のどちらかの梁行柱筋を行境界にあわせる場合

が多い。

②主要建物が一行内にある場合も，建物の桁行心は一行を東西に２等分する位置にあわず，どちらかに片寄る傾向にある。その場合主要建物の西妻あるいは西妻より東１間の梁行が行境もしくは，行の東西２等分線と一致する場合が多い。

③しかも並列する建物群は一方の側柱筋をほぼ揃える配置となり，それが一行を東西に２等分する位置にあうものもある。

④並列する建物間ないし宅地境界と建物間は15m（50尺）の距離を基本とする。

⑤並列する建物群には，前後同規模のもの，前方が後方に比べ規模の小さいもの，逆のものがあるが，ほぼ同規模のものが目立つ。

⑥脇に南北棟を伴う場合と東西棟を伴う場合があり，どちらの場合でも並列する建物群のいずれかの柱筋を揃える配置となるなどがあげられる。

Ｌ字型の特徴

①脇の建物が主要建物と同規模もしくは近い規模の場合，主要・脇の建物には片面庇が付く場合があり，二行にわたって占地する。

②この場合の主要建物の中心線は二行境界に合わず，梁行柱筋のいずれかに揃えるものがある。

③主要建物が一行内におさまる場合，脇の建物が明らかに小規模となるものが多い。

④この場合の主要建物心も一行心にあわず，梁行側柱列もしくは入側柱列にあう。

⑤逆に南北棟が主要建物となる場合があるが，その配置には①から④に比べて宅地割との関連は明瞭ではないなどがあげられる。

雁行型の特徴

①建物群中に明らかに主要な建物が存在し，しかも桁行５間以上で片面ないしは両面に庇付きの大規模なものとなる。

②主要建物に雁行となる建物にも桁行が広がると共に片面庇付きとなり大規模化する。

③雁行型の建物間は6m（20尺）となる場合が多く，平城京とは異なり密集した景観となる。

④建物群は四行八門境界線に柱筋を揃えるかもしくは3m（10尺）を単位としてその整数倍の間隔をもうけるなど，一定の計画性が認められる。

このことからＬ字型の一部を除き，これらの各配置は，宅地割の中軸線に主要建物心はあわずどちらかに寄る反面，いずれかの柱筋を四行八門制に揃えるなど宅地割と関連する配置がみられ，全体的に計画性の配置であることが一般的な傾向として指摘でき，改めて五・六条周辺の宅地の性格が意味を持ってくる。

このような傾向は一町占地をとる六条一坊五町や六条三坊八町での左右対称形に近い建物群からなる宅地でも同様にうかがえる。そして建物間距離をみると，前者では正殿を中心として，西脇殿間を１とすると，後殿間，東廊間，南庭間が１：２：２：３という整数比をとる。後者でも同様に正殿を中心として，西脇殿間を１とすると，後殿間，東脇殿間，南庭間が１：１：２：３という整数比をとる。このことから正殿と西脇殿間距離が基準寸法となり，後殿間だけが異なるが，東脇殿

ないしは東廊，南庭の南北長の比率は共通する。このように10尺方眼をとらない左右対称形配置の建物群にも，一定の整数比で割り付けられる地割が存在することが明らかとなった。

ただこれらの建物群は，塀などが主要建物に取り付く例がわずかで，また廊などで連結した配置は六条一坊五町以外みられない。その一方建物相互の間隔が並列型の南北両棟間を除き，狭くなる傾向にあり，平城京に比べて密集した様相を呈し，建物を夾んで中庭を構成するような形態がみられる。しかも桁行規模の拡大，庇の増加ならびに庇の出が深くなることなど，単に主要建物だけではなくそれにともなう様々な建物にも同様な現象が認められ，建物の格差が減少しているのがうかがえる。即ち周囲の建物であっても庇付きの大規模の空間を必要とした結果と考えられる。そのなかでも右京六条一坊五町と三坊八町の一町占地の宅地では８尺を基準とした配置と，それに合致する桁行，梁行寸法を有する建物群の存在は宅地内配置を考える上で一つの重要な指標となろう。さらに南庭に園池を備えた邸宅や廊に連結された建物群の存在は，平安時代における住宅史上重要な意義を有したものといえる。

註

1）小沢　毅『東院南方遺跡の調査』奈良国立文化財研究所『1991年度平城宮発掘調査概報』所収，奈良，平成４年。
2）このような方法は，長岡京左京東院の周辺条坊のあり方を検討する際にも採用したものと共通する。財団法人古代学協会編『長岡京左京東院跡』京都，平成13年。
3）小森俊寛『平安京左京九条三坊（１）』（財）京都市埋蔵文化財研究所『昭和58年度平安京跡発掘調査概報』，京都，昭和60年。
4）平良泰久『平安京（右京一条三坊九・十町）昭和55年度発掘調査概報』（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』所収，京都，昭和55年。）
5）網伸也他『平安京右京三条二坊十五・十六町』（財）京都市埋蔵文化財研究所調査報告第21冊，京都，平成14年。
6）梅川光隆他『平安京右京六条一坊』（財）京都市埋蔵文化財研究所調査報告第11冊，京都，平成４年。
7）堀内明博『古代の内裏地割り配置について』（財団法人古代学協会『長岡京左京東院跡』所収，京都，平成13年。）
8）高瀬要一『第Ⅴ章考察　４条坊復原と建物配置計画』奈良国立文化財研究所編『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告－長屋王邸・藤原麻呂邸の調査』所収，奈良，平成７年。
9）註４と同じ。
10）註６と同じ。
11）平尾政幸『平安京右京六条一坊』（財）京都市埋蔵文化財研究所『平成３年度京都市埋蔵文化財調査概要』，京都，平成元年。
12）長宗繁一『平安京右京六条一坊』（財）京都市埋蔵文化財研究所『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』，京都，平成元年。
13）註12に同じ。
14）平尾政幸『平安京右京六条一坊』（財）京都市埋蔵文化財研究所『平成４年度京都市埋蔵文化財調査概要』，京都，平成７年。
15）平尾政幸・梅川光隆『12平安京右京六条三坊』（財）京都市埋蔵文化財研究所『昭和61年度平安京跡発掘調査概報』，京都，平成元年。
16）前田義明『平安京右京六条三坊』（財）京都市埋蔵文化財研究所『平成２年度京都市埋蔵文化財調査概要』，京都，平成６年。
17）古代文化調査会『平安京右京六条三坊－ローム株式会社社屋新築に伴う調査－』京都，平成10年。
18）秋山國三『平安京における宅地配分と斑田制』秋山國三・中村研『京都「町」の研究』所収，東京，昭和50年。
19）平良泰久他『平安京（右京一条三坊九町）昭

和54年度発掘調査概要』京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報1980－3』，京都，昭和55年。同『平安京（右京一条三坊九・十町）昭和55年度発掘調査概要』京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報1981－1』，京都，昭和56年。京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報第16冊』，京都，昭和60年。同『平安時代貴族の邸宅跡ー平安京右京一条三坊九町ー』『月刊文化財242号』掲載，東京，昭和58年。

20）山中章『長岡京の建築遺構と宅地の配置』中山修一先生古稀記念事業会『長岡京古文化論叢』所収，京都，昭和61年。

21）規模を～以上としたのは宅地規模が明瞭に確定せず，調査範囲内での宅地規模基本としたためにこのような分類となった。調査の進展により今後整理できると考えられる。

22）辻裕司・近藤知子『平安京右京八条二坊』（財）京都市埋蔵文化財研究所『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』所収，京都，平成8年。

23）拙稿『平安京における宅地と建物配置についてー中小規模宅地の事例をもとにー』（杉山信三先生米寿記念論集刊行会編『平安京歴史研究』所収，京都，平成5年）49～62頁。

24）同上。

25）今回扱った事例のなかに甕据え付け痕跡を伴う建物遺構の存在から公的性格をおびるものと指摘したが，その詳細については，拙稿「長岡京出土の特殊建物遺構に関する2・3の覚書ー所為甕据付穴付掘立柱建物の類型別分析」中山修一先生喜寿記念事業会『長岡京古文化論叢Ⅱ』所収，京都，平成4年を参照していただければ幸いである。

補註

調査区における条坊復元は，以下のようにおこなった。

樋口小路以北でのSD655東肩の残存状況のよい2点（a1:X=-111472.570m，Y=-24642.231m，a2:X=-111515.328m，Y=-24641.625m）の計測値は，N－0°　48′　45″　－Wの振れをもつ。

樋口小路以南ではSD655東肩の残存状況のよい2点（b1：X=-111578.106m，Y=-24641.351m，b2：X=-111562.408m，Y=-24641.442m）の計測値は，N－0°　20′　1″　－Wの振れをもつ。

SR4200東西部北肩とSD657北肩の残存状況よい2点（b1：X=-111527.808m，Y=-24637.313m，b2：X=-111527.745m，Y=-24573.397m）の計測値は，E－0°　23′　11″　－Nの振れをもつ。

これらの振れ角をもとに，側溝肩よりそれぞれ『延喜式』記載の5.5尺の間隔で築地心を求めた。

第３節　遺物の特徴

１　遺構の帰属時期

今までに出土した遺物はコンテナーに860箱程度と余り多くないが，重要な一括遺物が含まれ，当遺跡の性格を分析する上でなくてはならないものである。これらの資料の帰属時期であるが，これまでの先行研究の成果にもとづいて，それぞれの一定の相対年代を提示してみる。

筆者はかつて平安時代前期・中期の土器群を４期に区分し，さらに２～３期の小期に分けて，全体を９段階にした案を提示した。それは土師器を基本とした編年で，その調整手法や器種構成を主眼としたものであった[1)]。また近年平尾政幸は，平安京右京二条二坊の報告のなかで８世紀末から11世紀前半までの紀年名資料をともなう一括遺物を基準資料とし，土師器の型式分類から３段階９小期に区分し編年を提示したものである[2)]。これらの研究成果に基づいて，土師器の型式分類を基本とした相対年代から，遺構の帰属時期を提示してみる。

その結果川や条坊関連遺構には，一部12世紀まで存続するものがみられるが，宅地内では９世紀中頃を境に急激に遺構が減少し，わずかに七町内だけが10世紀初めまで存続している傾向がみられる。そのなかで七・八・九・十町が活発な状況を呈したのは９世紀初めから中頃までであったことがうかがえる。

第12表　主要遺構時期区分表

相対年代	七町	八町	九町	十町
９世紀前後～初め	SD4071		SD661，SX548	SE1842下・中層
９世紀前半	SD5409下層・5412	SX820	SE670（～中頃まで）	SD665
	SD5601	３・４層		
	SK5304			
９世紀中頃	SD2454・5312			SE1846，SD4334
				SD661・4340
９世紀後半	SD5406・5409	SX820　２層		SD4350
９世紀末	SD4124・5587			
10世紀初	SK5431			

９世紀初 （最上層９世紀前半）	SR4200
９世紀前 （第１層11世紀前半）	SR0001

条坊関連	相対年代
SD665	一部12世紀まで存続
SD656	９世紀後半まで
SD657	遺物がほとんど無く時期の特定が不可能
SD658	９世紀前半を中心

2　器種構成の特徴

当該区の各遺構出土土器をみると，その器種構成に共通した特徴が少なく，かなりのばらつきがみられる。ここでは当該区の遺跡の性格を決定づけた９世紀前後から前半に属する主要な遺構の出土遺物についてみてみる。

まずＳＲ4200の東西部・南北部砂礫層では土師器が過半数を占め，通常いわれる京域内出土器種構成に共通する特徴である。しかしその内訳をみると，東西部では食膳具が６割強であるのに対し，南北部では全体の４割弱に過ぎない。さらに前者の内容は土師器が過半数であるのに対し，後者では土師器と須恵器の出土比率がほぼ等しい。その具体的な構成をみると前者では土師器と須恵器の食膳具がおのおの７割前後と高い割合であるのに対し，後者では，土師器の食膳具が４割弱，須恵器の食膳具が５割ほどと低い。このことは土師器で壺Ｂの出土量が目立ち，食膳具とほぼ同じ割合となっている。ただ両方とも煮炊具としての甕Ａはほぼ同じ比率を占める。須恵器では壺Ｇ・Ｌ・Ｍなどの小型貯蔵具が目立ち，食膳具に近い比率を示す。このように同一遺構でも，東西部では京域内の一般的な出土傾向に類似するのに対し，南北部では異なった様相を呈していることが特徴として指摘できる。平安京内では比較資料はないが，このような傾向は長岡京左京第87次ＳＤ8709，左京第89次ＳＤ8903下層にみられる[3]。これらの出土遺物も食膳具が全体の６割にも満たなく，かわりに墨書人面土器としての壺Ｂが目立つという特徴がみられる。しかも確認された遺構は条坊の交差点にあたり，祭祀行為を反映したものといわれている。まさしく南北部と合致する特徴で，祭祀がおこなわれていたことを傍証するといえる。さらに特徴的なこととして須恵器における小型貯蔵具の比率の高さがあげられる。同様な傾向を示す事例が平安京内では少ないなかで，遺跡の性格は異なるが北野廃寺でも，小型貯蔵具が一程度量を占め，共通する特徴がみられる。このように高い比率をもつ小型貯蔵具の使用は宗教儀礼との関連が予想される[4]。

以上のこのことからＳＲ4200の東西部と南北部ではまったく異なった土器使用の状況があったことが指摘できよう。このことは砂礫層上層でも，同様な傾向がみられることから，一程度の期間同様な機能を持続していたことがうかがえる。

十町のＳＥ1842の上層と中層をみてみる。両方とも土師器が５割前後と半数を占め，SR4200と同様な傾向がみられる。また両層とも土師器・須恵器の食膳具の占める割合が６割前後と共通し，上層と中層では同様な土器使用がなされていたと考えられる。これらは土師器の壺Ｂの出土が極めて少ない反面，煮炊具としての甕Ａが目立ち，須恵器でも貯蔵具としての甕が一程度の割合を占める。そして小型貯蔵具も多い。さらに中層では灰釉陶器の貯蔵具がこれまでにない特徴として指摘できる。とくに丸文を頸部に配した浄瓶は類をみないものであり，注目される。さらに各器種ごとの構成をみると，土師器の杯Ｂや高坏の食膳具の中で占める割合が極端に低いことである。また食膳具における杯Ａ，皿Ａ，椀Ａは，１：２～３：2.5～３と，皿Ａと椀Ａがほぼ同じ割合を示す。また須恵器の食膳具では杯Ａが半数以上を占め，杯Ｂが少なく，皿にいたってはない。このようなあり方は，饗宴などに使用された多器種にわたる構成ではなく，ごく限られた単純な器種構成を示している。遺構内および周辺からは鍛冶などの金属加工に関連する炉や遺物が出土する。このこと

からこれらの土器群は，下級官司などの日常的に使用される生活用具として土器を使用していたものと考えられる。

一方八町のＳＸ820Ⅲ区第２層や，樋口小路内ＳＲ0001では，土師器や須恵器の比率が低く，食膳具は半数を満たないものが多い。そのなかで前者は土師器のうち，食膳具が過半数を占める。ただ上述したＳＥ1842の内容とは異なり，杯Ｂが半数近くを占めるという特徴がみられる。またここでも他の遺構に比べ灰釉陶器の比率が高く，平瓶の鳥紐蓋など特異なものを含む。これは９世紀前半以降，施釉陶器の割合が増加するという時代的な特徴と符合する。

このように各遺構別の器種構成は，京域内での一般的な割合と同様な傾向を示す一方，祭祀的な様相を示すものもあり，多様な土器使用のあり方がみられる。また出土遺物の中でも，ＳＲ4200東西部から，蹄脚硯，風字硯をはじめ，その他の遺構からも転用硯をなどの文房具，SR4200の南北部から椀，蓋，合子などの多種多様な漆器類，銅製の巡方など装飾具が出土する。九町のSE670からは高台外面に『大』の文字が刻字された緑釉椀，SX820から越州窯系青磁毛彫合子の蓋など，京域でも出土例があまり知られたいない貴重なものや特出すべきものが含まれる。このような遺物の存在は遺跡の性格を考える上で，無視することができない。

一方当該区の全出土遺物のうち，八・九町における各遺構からの遺物出土量が，七・十町に比べ極めて少ないことが指摘できる。とくに八町の南半には園池が広がるなど非日常的な場であったことを遺物のあり方からも物語っている。長岡京左京東院の正殿域でもほとんど遺物の出土がみられないことからも[5]，非日常的の場における遺物廃棄のあり方を示している。

このような遺物廃棄の状況や貴重な遺物が含まれることから，この八町の宅地班給者はある程度高い身分であったことが推測される。このように当該区の遺物は，各町ごと，さらには各遺構ごとで異なった器種構成がみられることから，その土器使用は一律的ではなく，多様な性格を有していたことがうかがえ，それは遺構のあり方にも符合する。

なお今回出土した遺物の特徴として，猿投産や播磨産などの搬入土器がある。とくに播磨産の製品は９世紀前後から認められ，しかも器種には杯Ｂなどの食膳具や壺Ｌなどの小型貯蔵具などがみられ，その多さはこれまでの平安京内出土土器でも非常に特徴的なこととして指摘できる。さらに摂津地域産と考えられる竈や甕なども目立つ。これらは西国街道を経てもたらされたものである。ＳＲ0001から出土した「讃岐国苅田郡白米」の荷札木簡もそうしたものの一つといえよう。このように搬入品に関して西国との関係がうかがえることは，当遺跡の性格を明らかにしうる重要な手がかりであるといえよう。しかしながら本稿では，それについて検討することはができなかった。これについては後日の課題としたい。

註

１）堀内明博『平安京出土の初期貿易陶磁』（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編『貿易陶磁－奈良･平安の中国陶磁－』奈良，平成５年）。

２）平尾政幸ほか『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊，京都，平成２年。

３）國下多美樹『東院西外郭出土土器の様式的特徴について』（財団法人向日市埋蔵文化財調査

センター『長岡京左京北辺一条三坊』所収，京都，平成13年)。
4）堀内明博『北野廃寺発掘調査報告書』(財)京都市埋蔵文化財研究所調査報告第7冊，京都，昭和58年。
5）(財団法人古代学協会『長岡京左京東院跡』所収，京都，平成13年。)

第4節　祭祀

今調査の特筆すべき成果の一つとして，祭祀遺物の出土があげられる。しかもそれらは良好な状態で発見されたばかりか，器種器形も豊富であり，かつ大量であることを特色とする。さらに獣骨をはじめ，植物の種子，木製品などをともなっていることも資料的な価値を増している。その代表するものとしてＳＲ0001およびＳＲ4200出土のものがある。

八町の樋口小路北側溝位置において，ＳＲ4200（幅約2.5～7m，深約0.5～1.5m）を確認した。これは，交差点部東約15m手前で南流し七町の西側を蛇行しながら南流し，七町を南北二等分する位置付近で，西へ流れるＳＲ4185とさらに南に流れるものに分流する。ＳＲ4200は，縄文～古墳時代の遺物を含む自然流路を利用して9世紀前後に開削され，短期間のうちに廃絶し埋め戻される。そのため出土遺物の時期が極めて短期間でかつ限定され，重要なものといえる。ここから多量の祭祀遺物が出土した。それらは馬や牛などの頭骨，肋骨，大腿骨など併せて74点以上，人形代62点，斎串58点，鎌形1点，刀子形など12点，墨書人面土器に使用された土師器壺B45点以上（うち墨書人面を伴なうもの26点以上)，土師器壺Ｃ1点，ミニチュア竈15点以上，土馬19点以上，ミニチュアの平瓶，などの祭祀関連遺物や墨書木簡が川筋の中で幾つかのまとまりをもって出土した。とくに獣骨の出土の多さが目立ち，そのなかでも馬，牛が圧倒的多数を占め，オオカミ，ニホンジカなどもわずかに含む。人形代も10cm～50cmと様々な大きさのものがある。その中でも調査区西壁付近の下流域から，人形代が6体重なるように確認された。また，その付近から出土例が極めて希少な篆刻の木印が1点ある。篆刻の木印としては国内で初見であり，印面に朱が付着することから実用品であることが判明した。この周辺からは土師器の食器類，甕，須恵器の食器類，壷，甕，多量の桃の種子や片方の先端だけが焦げた松明の燃えさし，黒漆塗りの木箱が1点，椀や蓋などの様々な漆器類，籠など多種多様な遺物が出土した。このようなあり方は他の屈曲部でもみられることから数度にわたる動物供儀をともなう祭祀がおこなわれていたことが明らかになった。

一方馬代小路と樋口小路が想定されたところにＳＲ0001を確認した。それは樋口小路を西流してＳＲ4200と重複し，切っている。それから交差点で直角に折れ，馬代小路を南流する。川幅は２～４ｍ，深さは0.8～１ｍを測る。交差点中心から樋口小路を東に35ｍ程の川底から，獣骨などが一ヶ所からまとまって発見された。それには雄馬の骨一頭分，牛の骨，人形代４点，陽物形１点，斎串７点，多量の桃の種子など祭祀関連遺物や『讃岐国苅田郡白米』と記された墨書木簡が共伴し，非常に良好な状態で一括出土した。陽物形は長さ23.5cm，太さは最大で4.8cmと，古代都城出土の陽物形のうち平城宮SD1025出土の25.2cmに次ぐ大きさである。これらの出土状況は，

大同２年（807）斎部広成が著した『古語拾遺』（御歳神段）の『宜以牛宍置溝口作男茎形以加之，（是所以厭其心也），以蔥子（古語以蔥玉都須也）蜀椒呉桃葉及塩班置其畔，仮従其教苗葉復茂，年穀豊稔。是今神祇官以白猪白馬白鶏祭御歳神之縁也』と記載された豊穣祈願の祭祀と酷似する。従来，牛や馬の骨が溝や川から出土すると祭祀に関連するとして指摘されていたが，それがどのような意味をもつものかについては，農耕儀礼や祟り祓いの儀礼等，さまざまな観点から分析が試みられ，議論の分かれるところであった。今回の出土状況は文献記載との関連が注目されることから，当地で行われていた祭祀を考える上で御歳神伝承は重要な参考資料になると考えられる。

このように当該区でおこなわれた祭祀は，１回だけではなく，複数回繰り返された可能性が高く，しかもその内容が豊富であることが明らかとなった。ここで注目されるのはやはり多量の動物遺体である[1)]。これらは先行研究から一般に動物供犠にともなうと考えられている。しかしその性格についてはさまざまな議論がある。殺牛祭神を本格的に分析して研究の基礎を築いたのは佐伯有清である[2)]。その研究によると雨乞いのための殺牛と延暦期に盛行した殺牛祭神とを区別し，前者は日本古来からおこなわれてきた農耕儀礼であるのに対し，後者は新しく伝わった怨霊の祟りをしずめる祭りであることを指摘した。その後栗原朋信は，古代中国の犠牲とは生きている動物を「殺す」儀礼であり，日本では釈奠や郊祀の日本的変容からみても「犠牲」礼の拒否が明らかであること，殺牛祭神関係の史料はいずれもそれが外来であることを示しており，雨乞いも含めて殺牛は日本古代における一般的習俗ではなかったとの見解を出した[3)]。そのようななかで問題とされるのが上述した『古語拾遺』である。近年義江明子は研究史を整理する中，同文献にいう蝗害駆除のための「牛宍」は農耕豊饒神たる御歳神への「饗」ではなく，疫鬼に給うための「味物」だったとする見解を出した[4)]。そして農耕の産物たる稲（と酒）に，魚猟の獲物たる魚と宍をサカナとして添えて神に捧げて豊饒を祈り，共同体成員の共同労働による耕種始め（営田）がなされ，しかるのちにその「酒肴」＝「魚酒」による共食の宴をもつ，という村落祭田祭祀の原型を確認し，営田の日の牛宍の饗もその（変容した）一環であることを明らかにされたのである。しかしながら今回の事例は平安京内であり，そこでの営田経営は認められていなかった。このような文献史学の研究成果をふまえつつ，当該区の性格について新たな視点から分析する必要があろう。

上述したように，このようにまとまった祭祀遺物の出土例は平安京西市以外あまりなく，当地が祭祀に関わる重要な場所であったことがうかがえる。そしてその川が９世紀前半頃に小路内に付け替えがおこなわれ，そこから豊穣祈願の儀式に関連すると考えられる動物供犠祭祀の跡が非常に良好な状態で出土したことは特筆される。今回の調査成果は右京域の縁辺でも，一町占地の宅地が９世紀代から存在していたことを裏付けるだけでなく，それが９世紀代を通じて宅地内の建物群が３回の建て替えを経ていることも判明した。また樋口小路を跨ぐ溝や川に架けられていた橋状の施設などから，各町ごとが独立した単位としての宅地ではなく，七町と八町，九町と十町は相互に密接な関連がうかがえ，特に八町は七町の主要建物群に付属するような地区であったことが予想される。これらの建物配置の有り方，実用された木印，荷札木簡や習書木簡や様々な貴重な遺物から，今調査区の遺跡の性格は個人の邸宅というよりはむしろ官衙に関連する施設の可能性が考えられる。こ

のような施設群と複数時期にわたる多くの動物供儀祭祀跡とは，如何なる関連があったかは，より詳細な検討が必要と考えられる。

ここで重要なこととして，ＳＲ4200の位置のあり方についてである。それは七・八町間の樋口小路では，その北側溝想定位置を西流していたのが，馬代小路交差点手前から自然地形に沿うように旧流路を踏襲して西南流していることに注目したい。右京の範囲内でこれまで平安時代の川が幾つか確認されている。それらは大路あるいは小路内にあるか，宅地内にあっても条坊方位に沿って開削され，流れている[5]。しかしＳＲ4200は樋口小路内ではその原則を遵守するが，交差点以南ではそのような規制を受けていないことである。その変曲点でこのような，多岐にわたる祭祀がおこなわれていたと考えられる。これに関連する遺跡として平安京ではないが長岡京左京六･七条三坊水垂遺跡が想起される。その調査成果によると東二坊大路と七条条間小路の交差点には橋が架かり，川が北西から南東に向かって流れ，その中から多量の墨書人面土器や土製品が投棄された状態が明らかにされた。それらは疫病や悪霊が京内に入り込まないように「京果ての祭り」が行なわれたものであると考えられている[6]。

本調査地は平安京の西南に位置し，更に西南には遺跡の存在が希薄になり，桂川の氾濫が広がる。長岡京と平安京，左京と右京という違いがある一方，その位置と立地環境は非常に類似する。今回の祭祀遺物の性格は，水垂遺跡のような祭祀の有り方が重要な手がかりと考えられる。そしてＳＲ4200からＳＲ0001に付け替えられたとき，上述した条坊制を遵守した河川となる。それはなによりも，これより西南が以後京域として再編成されその中に取り込まれ，宅地として整備されたことを物語っているのではないだろうか。

新訂増補国史大系『続日本後紀』によると，延暦年間から天長年間かけて，疫神祭に関する記録が，一時みられなくなる。疫神については『延喜祝詞式』の道饗祝詞には，疫神を含む鬼魅は「八衢比古・八衢比売・久那斗」の諸神に防御される存在に過ぎないとされ，『令義解』にみる鬼魅は，防御される対象と同時に，饗応の対象から変化していることが文献史において見解が一致しているようである。[7]。即ち律令政府が対疫病祭祀のなかで意図した疫神観は，８世紀後半から末期を境として，それまでの饗応の対象から祓の対象へと変化していったとする笹生衛の評価[8]と一致する。このような祭祀のあり方を，当遺跡は如実に示し，平安京内で初めてその実態を明らかにしたことになる。

註

1）その詳細は，付章の松井章論文に詳述されている。

2）佐伯有清『殺牛祭神と怨霊思想』（『日本古代の政治と社会』所収，東京，昭和35年）

3）栗原朋信『犠牲礼についての一考察』（『上代日本対外関係の研究』所収，東京，昭和53年）

4）義江明子『殺牛祭神と魚酒』（佐伯有清先生古稀記念会編『日本古代の祭祀と仏教』所収，東京，平成７年）。

5）堀内明博『増設された京の川』（『ミヤコを掘る』所収，京都，平成７年）76～78頁。

6）長宗繁一ほか『水垂遺跡　長岡京左京六・七

条三坊』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第17冊　京都，平成10年）。
7）三宅和朗『延喜式祝詞の成立について』（『日本歴史』第454号掲載，東京，昭和61年）。31・32頁。
8）笹生衛『奈良・平安時代における疫神観の諸相－杯（椀）・皿形人面土器とその祭祀』（二十二社研究会編『平安時代の神社と祭祀』所収，東京，昭和61年）。368～406頁。

第5節　結語

今回調査にあたるに際し，当該地南の右京六条三坊四町で平安時代の宅地内の状況を示す建物群が確認されていたので，それに関連する遺構の存在を予想して望んだ。その結果，通常平安宮に近いところに大規模宅地が集中する傾向があると指摘されていたが，宮の中心から約2.8km西南に離れた右京六条三坊八町にも一町占地をうかがわせる大規模宅地の存在が明らかになったことである。そして宅地内のうち，内郭があり南北二等分線より北の区域に正殿を中心として，後殿，脇殿からなる左右対称型を呈する建物群が確認されたのである。これらは8尺（2.4m）を統一基準として計画的に割り付けられ，前殿と後殿間，前殿と西脇殿間が20尺（6m）と同一で，後殿と東脇殿間はその2倍の40尺（12m）となり規則性が認められる。このような建物配置は，右京一条三坊九町の建物群以来のことで，平安京では2例目となる。しかも両遺構とも平安時代当初に属するものとして重要なものといえる。そして後者が10尺方眼で割り付けられ，天皇及び王臣家の邸宅に限られる宅地割付であるのに対し，前者はそれより一回り小さい8尺方眼で割り付けを用いた平安京内での初めての例といえる。しかも南庭には湿地を利用した園池を備えており，平安京での平安時代前期の建物配置や園池のあり方を考える上で特に重要な資料といえる。

また，七町では『延喜式左京職式』に「凡町内開小径者・・（中略）・・，自餘町内一廣一丈五尺」と記載されている内容と同様な幅約4.5mほどの小径が見つかり，七町の宅地は宅地規模が1/2町ないし1/4町に細分されていることも明らかにできた。

一方東西路である樋口小路において平安京造営時に遡る川が北側溝想定位置で確認され，それが馬代小路の交差点より東約15mほどで南流する。その中からも動物供犠祭祀の跡が良好な状態で確認し，3時期以上に亘る祭祀がおこなわれていたことが判明した。このようにまとまった祭祀遺物の出土例は平安京西市以外あまりなく，当地が平安京でも祭祀に関わる重要な場所であったことがうかがえる。そしてその川が9世紀前半頃に小路内に付け替えがおこなわれ，そこから豊穣祈願の儀式とも考えられる動物供犠祭祀の跡が非常に良好な状態で確認したことも特筆される。

これらの遺構からは，実用された木印，荷札木簡や習書木簡などの様々な文字資料を初め，祭祀遺物，木製品など多量に出土した。また七町，十町には小規模の建物群や倉庫，井戸がセットで発見された。更にその近辺では簡易な金属加工関連の遺構や遺物も発見されている。このようなことから八町の中心施設に付随する厨や工房関連施設に想定される雑舎群である可能性が高い。2つの性格の異なる地区には明確な遮蔽装置を伴わないことから，密接な関連がうかがえ，西側は西外郭

に想定できる。そこにはあきらかに実務担当の官人の存在が予想される。即ち当遺跡の性格は，個人の邸宅というよりはむしろ官衙に関連する施設の可能性が考えられ，このような施設群と複数時期にわたる多くの動物供儀祭祀跡と併存していたことに当遺跡の特色が見いだせよう。

また川の付け替えをはじめ条坊の振れなどが各宅地で異なることから，その成立時期に違いがあることを導きだした。それは，上述した祭祀と平安京の造営過程と密接に関わることといえる。

従来平安京造営については，文献史の瀧浪貞子氏から北限付け替え説が提起されたことがある。しかし考古学からそれを検証することが未だに可能となっていない。一方京域内では，左京九条の範囲で条坊の施行時期の違いが指摘され，京の縁辺部のあり方が注目された。今回朱雀大路を挟んだ右京であるが，そこでも同様に条坊施行に時期差がある可能性が指摘できる。これも上述の施設群との関わりが重要な点といえる。このような祭祀に関連する遺跡として平安京ではないが，長岡京左京六･七条三坊水垂遺跡があり，そこでは疫病や悪霊が京内に入り込まないように「京果ての祭り」が行なわれたことは上述した如くである。古代の律令都城は，一次元の明確な境界をもったバウンダリーな都市であったことがしられている。しかし中国の都城とは異なり，羅城の存在がしられず，それがまた両都城の性格の違いとして指摘されてきた。今回の遺跡の成果から導かれたものは，平安京を含めた律令制都城における条坊とその境界について，改めて課題を投げかけたことになる。とくに未完であったといわれる長岡京，そして律令最後の都城として完成された平安京という通説を再検討すべき内容を備えたものといえよう。

本書を作成するに際し，考古学だけでなく，文献史並びに建築史の各分野の研究者から貴重な助言や指導を頂いた。改めて共同研究の重要性が痛感された次第である。

ただし発掘調査成果の事実から得られた結果に基づき検討を加えたが，いまだ結論めいた段階までは至っていない。限られた時間内での作成された本書は，不十分な点が多々指摘されると思われる。ただこれらの作業を通じてえられた成果を少しでも社会に還元でき，またそれによる批判や提言をえることで今後に幾ばくかの展望を見いだせると思う。

発掘調査の終了後２年が経過し，ここになんとか刊行にこぎつけるまで，実に多数の関係各位の御協力と御支援を頂いた。これによって作業を進める上で原動力となって，本書が刊行に至ったことを，この場を借りて感謝する次第である。またサマリー翻訳を財団法人古代學協会・古代學研究所坂井聰氏にお願いした。併せて御礼申し上げる。なお編者の怠惰な性格のため本書の刊行が遅れ，多くの方々に多大な迷惑をおかけした。そのお詫びを申し上げ，結語とさせていただく。

第13表　調査地周辺既往調査一覧

No	発掘地点	所在地	調査期間（年月日）		掲載誌	備考
五条二坊						
1	十三・十四町	右京区西院平町6	1982	4/19	昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要P120立会・京都市内遺跡試掘立会S57 24-14	平安時代の包含層
2	十四町	右京区西院西平町8	1989	9/10	京都市内遺跡試掘立会調査概要63年度京都市文化観光局 立会 P52 8-86	GL-0.3m以下時期不明の包含層
3	十三町	右京区西院西平町7-1-2	1996	8/23	京都市内遺跡立会調査概報平成8年度京都市文化市民局 P64 11-217	地表下0.2mまで盛土
4	十三町	右京区西院西平町2-10	1990	10/9	京都市内遺跡試掘立会調査概報平成2年度 8-59	検出なし
5	十三町	右京区西院矢掛町32	1990	3/9	京都市内遺跡試掘立会調査概報平成2年度 8-135	包含層（時期不明）
6	十三町	右京区西院矢掛町33-1	1984	6/20	京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和59年度 8-50	盛土のみ
7	十三町	右京区西院矢掛町35	1993	9/2	京都市内遺跡立会調査概報平成5年度京都市文化観光局 P63 9-200	検出できず
8	十三町	右京区西院寿町27	1992	9/2・4	京都市内遺跡立会調査概報平成4年度京都市文化観光局 立会 P56 9-189	地表下1.32mにて池の東肩にあたる落ち込み，肩には杭を伴う
9	十三町	右京区西院西高田町18-1	1989	8/9	京都市内遺跡試掘立会調査概要63年度京都市文化観光局 立会 P52 8-70	検出できず
10	十三町	右京区西院寿町326-3	1989	6/16	京都市内遺跡試掘立会調査概要63年度京都市文化観光局 立会 P52 8-48	GL-0.58m以下時期不明の路面3，推定五条大路
五条三坊						
11	四町	右京区西院矢掛町5（西院中学校）	1981	10/20-11/20	昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要P43－44図30・終報56	建物，溝，柵列
12	四町	右京区西院矢掛町5（西院中学校）	1987	8/12-11/11	昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要P51-52(調査-21)	建物，池状遺構，東西溝，園池，土壙（弥生前期）
13	四町	右京区西院寿町20	2000	5/24	京都市内遺跡試掘調査概報平成12年度 46	池状遺構
14	四町	右京区西院西矢掛町31-2，32-2・3	1997	10/27-31	京都市内遺跡立会調査概報平成9年度京都市文化市民局 P78 10-314	平安前期の南北溝2条，東西溝1条，南北方向の落込の東肩 宇多小路東外溝と内溝 本文21ページ
15	四町	右京区西院矢掛町5（西院中学校）	2000	9/1・4・5	京都市内遺跡立会調査概報平成12年度京都市文化市民局 P39 10-155	地表下-0.55m，平安前期の包含層（土師器皿・高杯・黒色土器椀，緑釉陶器，瓦）-0.77m以下，褐色砂泥の地山
16	五町	右京区西院太田町26-1	1990	11/26	京都市内遺跡試掘立会調査概報平成2年度 7-79	平安前期～中期の柱穴，溝，土壙，池状遺構
17	五町	右京区西院太田町26-1	1991	6/7	京都市内遺跡試掘調査概報平成3年度京都市文化観光局 試掘 P60 8-40	1T,GL-1.0mで平安時代前期の遺物を含む池を検出 2T,GL-1.0mで平安前期の池及び州浜を検出 設計変更による遺構保存を指導する 本文4ページ
18	五町	右京区西院太田町41，42	1989・	8/30	京都市内遺跡試掘立会調査概要63年度京都市文化観光局 立会 P52 7-78	盛土のみ
19	五町	右京区西院太田町72，73，74	1990	8/7	京都市内遺跡試掘立会調査概要平成元年度京都市文化観光局 立会 P43 7-59	GL-1.22mにて時期不明の落ち込み
20	五町	右京区西院太田町24	1982	3/22	昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要P124立会・京都市内遺跡試掘立会S57 23-169	検出なし
21	五町	右京区西院太田町26-1	1993	7/26・28	京都市内遺跡立会調査概報平成5年度京都市文化観光局 P64 8-151	地表下0.6m以下，室町の包含層，平安の遺物を含む流路
22	四・五・一二町	右京区西院太田町地内	1994・1995	12/7・1/25	京都市内遺跡立会調査概報平成7年度 10-387	褐色砂泥の無遺物層
23	十二町	右京区西院太田町70-2他	1992	2/17	京都市内遺跡試掘平成4年度 8-4	検出なし
24	十三町	右京区西院久田町150	1984	3/29	昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要P149立会・京都市内遺跡試掘立会S59 7-180	流れ堆積
25	十二町	右京区西院太田町15-9	1984	9/17	京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和59年度 7-86	江戸時代の流れ堆積

No	発掘地点	所在地	調査期間（年月日）		掲載誌	備考
26	十三町	右京区西院清水町地先	1989	11/29，12/2	京都市内遺跡試掘立会調査概要 63 年度京都市文化観光局　立会　P53 7-121	盛土のみ
27	十三町	右京区西院清水町 24	1989	9/5	京都市内遺跡試掘立会調査概要 63 年度京都市文化観光局　立会　P53 7-81	検出できず
28	十三町	右京区西院清水町 67-2	1991	8/26	京都市内遺跡立会調査概報平成 3 年度　8-182	盛土のみ
五条四坊						
29	四町	右京区西院清水町 3-2	1996	12/16・25	京都市内遺跡立会調査概報平成 8 年度京都市文化市民局　P64　10-384	地表下 1.1m 以下，湿地状堆積
30	四町	右京区西院清水町 12-1	1994	12/19	京都市内遺跡試掘調査概報平成 6 年度京都市文化観光局　P32　10-51	GL-1.8m 以下，湿地状堆積
31	四町	右京区西院清水町 2	1990	8/10	京都市内遺跡試掘立会調査概報平成 2 年度　7-39	池沼状堆積
32	四町	右京区西院清水町 1 の一部	2002	2/7，4/23	京都市内遺跡立会調査概報平成 14 年度京都市文化市民局　P17 10-341	GL-0.9m でオリーブ黒色泥土の湿地状堆積を検出
六条二坊						
34	十二町	右京区西院中水町 21-1，22-1	1992	6/5	京都市内遺跡試掘調査概報平成 4 年度　9-26	推定野寺小路東側溝
35	十三町	右京区西院中水町 1，2	2001	5/28-6/1	京都市内遺跡立会調査概報平成 13 年度京都市文化市民局　P33 11-058	No.1:-0.81m，平安後期の包含層（土師器皿）　-1.3m 以下，灰色微砂の地山 No.2:-0.61m，時期不明の包含層 3．
36	十三町	右京区西院西中水町 21	1994	6/3	京都市内遺跡試掘調査概報平成 6 年度京都市文化観光局　P32　11-52	GL-1.03m で平安時代の土壙・柱穴 1 基を発見
37	十三町	右京区西院西中水町 25-1	1994	8/31，9/7	京都市内遺跡立会調査概報平成 6 年度京都市文化観光局　P50　11-229	地表下 0.57m 以下，褐色砂泥の無遺物層
38	十三町	右京区西院西中水町 28 他 9 筆	2000	2/9・10・15～17	京都市内遺跡立会調査概報平成 12 年度京都市文化市民局　P30 11-394	No.5・6：-0.78m，平安中期の包含層（土師器皿，平瓦）-0.9m 以下，暗褐色砂泥の地山　No.5・6：-0.63m，平安以前の溝（土師器甕）
39	十三・十四町	右京区西院西中水町地先	1983	7/28	昭和 58 年度京都市埋蔵文化財調査概要 P149 立会・京都市内遺跡試掘立会 S58　8-66	埋め土のみ
40	十四町	右京区西院南高田町 6-1，7-2	1984	5/17	京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和 59 年度　8-29	土壙（時期不明）
41	十五町	右京区西院西高田町 30	1989	1/21	京都市内遺跡試掘立会調査概要 63 年度京都市文化観光局　立会 P44 8-170	盛土のみ
42	十五町	右京区西院西高田町 33	1982	5/6-5/7	昭和 57 年度京都市埋蔵文化財調査概要 P120 立会・京都市内遺跡試掘立会 S57　27-21	検出なし
43	十五町	右京区西院西高田町 6	1989	2/12	京都市内遺跡試掘立会調査概要 63 年度京都市文化観光局　試掘 P44 8-179	GL-0.5m にて平安の包含層
44	十五町	右京区西院西高田町地先	1991	2/26	京都市内遺跡立会調査概報平成 3 年度　9-95	時期不明の佐井川の東肩検出
45	十五町	右京区西院寿町	1989	4/25	京都市内遺跡試掘立会調査概要 63 年度京都市文化観光局　試掘　P53 8-13	GL-0.3m にて道祖川の東肩，-0.5m にて石敷遺構，柱穴，溝，平安時代～室町時代　発掘調査に切り換える
46	十五町	右京区西院寿町	1988	5/23-6/14	昭和 63 年度京都市埋蔵文化財調査概要 P57-58　23	道祖大路東築地柱列，河川，排水溝
47	十五町	右京区西院寿町 40-3 他	1989	11/16	京都市内遺跡試掘立会調査概要 63 年度京都市文化観光局　試掘　P53 8-114	GL-0.3m にて時期不明の東西溝
48	十五町	右京区西院寿町 40，41，42	1994	1/26	京都市内遺跡立会調査概報平成 6 年度京都市文化観光局　P43　11-383	地表下 0.1m で包含層，土師器微片
49	十五町	右京区西院西高田町 6	1988	4/19	昭和 63 年度京都市埋蔵文化財調査概要 P177 試掘 -10	–
50	十六町	右京区西院寿町 27	1992	5/20・22	京都市内遺跡立会調査概報平成 4 年度京都市文化観光局　立会 P57 9-69	地表下 0.58m 以下，時期不明の流れ堆積

No	発掘地点	所在地	調査期間（年月日）		掲載誌	備考
51	十六町	右京区西院西高田町 8-5	1989	7-21	京都市内遺跡試掘立会調査概要 63 年度京都市文化観光局　立会 P53 8-62	検出できず
52	十六町	右京区西院西高田町 10-2・5	1990	6/1	京都市内遺跡試掘立会調査概要平成元年度京都市文化観光局　立会 P43 8-26	検出できず
53	十六町	右京区西院西高田町 6	1989	4/11	京都市内遺跡試掘立会調査概要 63 年度京都市文化観光局　試掘　P53 8-5	GL-0.64m にて鎌倉～室町の包含層
54	十六町	右京区西院寿町 35-3	1992	4/16 ～ 18	京都市内遺跡立会調査概報平成 4 年度京都市文化観光局　立会　P57 9-28	地表下 0.9m にて平安の柱穴・路面　佐井川の東肩，二列の杭
六条三坊						
55	一町	右京区西院寿町 16-1	2000	1/6	京都市内遺跡試掘調査概報平成 12 年度　10-9	東西溝（平安時代）
56	一町	右京区西院寿町 11-1，12-1 他	1998	10/29	京都市内遺跡試掘調査概報平成 10 年度　10-41	推定樋口小路北側溝の肩部，旧建物の撹乱が著しく残存状態は良くない
57	一町	右京区西院西寿町 21-3	1990	9/12	京都市内遺跡試掘立会調査概要平成元年度京都市文化観光局　立会 P43 7-79	検出できず
58	一町	右京区西院西寿町 24	1994	9/7・12	京都市内遺跡立会調査概報平成 6 年度京都市文化観光局　P50　10-246	地表下 1.0m 以下，黄灰色砂泥の無遺物層
59	一町	右京区西院西寿町 26	1982	9/27	京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和 57 年度　25-97	南北方向の溝
60	二町	右京区西院寿町 7，西院西寿町 29	1997	3/10	京都市内遺跡試掘調査概報平成 9 年度京都市文化市民局　P36　10-10	遺構・遺物ともに発見できず
61	二町	右京区西院西寿町 27 地先	1982	4/1	昭和 57 年度京都市埋蔵文化財調査概要 P120 立会・京都市内遺跡試掘立会 S57　23-2	検出なし
62	二町	右京区西院南寿町 17-1，2，3	1999	6/9	京都市内遺跡試掘調査概報平成 11 年度　10-36	小型の柱穴，浅い落ち込み（平安時代）
63	三町	右京区高辻通～五条，佐井通～西大路通他地内	1996	4/8，5/7／9・13・15・21	京都市内遺跡立会調査概報平成 8 年度京都市文化市民局　P64　10-017	地表下 0.6m 以下，佐井川の堆積層
64	三町	右京区西院溝崎町 11	1996	7/10	京都市内遺跡立会調査概報平成 8 年度京都市文化市民局　P64　10-146	地表下 0.7m まで盛土
65	三町	右京区西院溝崎町 11	1983	12/3	昭和 58 年度京都市埋蔵文化財調査概要 P149 立会・京都市内遺跡試掘立会 S58　7-124	盛土のみ
66	四町	右京区西院溝崎町 21	1995	3/6	京都市内遺跡試掘調査概報平成 7 年度　11-7	土壙（平安時代）
67	四町	右京区西院溝崎町 12，他 7 筆	1984	1/10	昭和 58 年度京都市埋蔵文化財調査概要 P149 立会・京都市内遺跡試掘立会 S59　7-135	包含層（時期不明）
68	四町	右京区西院西中水町 2-1 他	2000	11/15	京都市内遺跡試掘調査概報平成 12 年度京都市文化市民局　P36　10-49	GL-0.75m ～ 1.05m で地山　六条大路部分は河川の氾濫や湿地状堆積であった
69	四町	右京区西院西中水町 1，2	1990	9/1	京都市内遺跡試掘立会調査概要平成元年度京都市文化観光局　試掘 P43 7-72	Gl-0.52m にて平安時代の包含層 -1.0m にて平安前～中期の土壙・柱穴・溝　発掘調査に切り換える
70	四町	右京区西院溝崎町 21（ローム）	1993・1995	2/4-3/27・4/28-7/8	平安京右京六条三坊（ローム）1998	掘立柱建物，堀，溝，池，土壙
71	四町	右京区西院溝崎町 12，他 10 筆	1986-1987	11/19-2/7	昭和 61 年度京都市埋蔵文化財調査概要 1989(86HK-OB2)P35-37 図 12	－
72	四町	右京区西院西中水町 1・2	1989・1990	10/11-01/09	平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要 1994（89HK-OB3)P65-67 図 25	掘立柱建物，土器埋納遺構，溝，柵列，土坑
73	四町	中京区西院満崎町 21（東洋電具製作所）	1981	6/16-7/28	昭和 56 年度京都市埋蔵文化財調査概要 1983(81HK-OB)P45-46 図 31，終報 56	建物，柵，溝
74	四町・六条大路	右京区西院溝崎町 21	2000	10/30	京都市内遺跡試掘調査概報平成 12 年度京都市文化市民局　P36　10-50	耕作土以下は湿地状堆積
75	五町	右京区西院溝崎町 12，他 7 筆	1982	4/7-4/8	昭和 57 年度京都市埋蔵文化財調査概要 P120 立会・京都市内遺跡試掘立会 S57　23-8	検出なし

No	発掘地点	所在地	調査期間（年月日）		掲載誌	備考
76	五町	右京区西院溝崎町 5-2	1993	10/4・29，11/1	京都市内遺跡立会調査概報平成５年度京都市文化観光局 P64 8-244	検出できず
77	五町	右京区西院溝崎町 4-1	1991	6/4	京都市内遺跡立会調査概報平成３年度　8-78	時期不明の土壙
78	五町	右京区西院溝崎町 4-1	1990	10/12・19	京都市内遺跡試掘立会調査概報平成２年度　7-60	時期不明の柱穴，土壙
79	五町	右京区西院西溝崎町 42	1989	8/29	京都市内遺跡試掘立会調査概要 63 年度京都市文化観光局　試掘 P53 7-76	検出できず
80	五町	右京区西京極北庄境町 36	1990	7/19	京都市内遺跡試掘立会調査概報平成２年度　7-28	検出なし
81	五町	右京区西院西溝崎町 45-1	1990	1/26	京都市内遺跡試掘立会調査概報平成２年度　7-121	検出なし
82	五町	右京区西院西溝崎町 45-2	1990	1/22	京都市内遺跡試掘立会調査概報平成２年度　7-120	平安時代の流れ堆積
83	五町	右京区西院西溝崎町 44	1992	10/30	京都市内遺跡立会調査概報平成４年度京都市文化観光局　立会 P57 8-271	地表下 0.51m にて平安時代の包含層
84	五町	右京区西院西溝崎町 45-3・4	1994	2/16-18	京都市内遺跡立会調査概報平成６年度京都市文化観光局　P43　10-410	地表下 0.9m 以下，流れ堆積
85	六町	右京区西院西溝崎町 15,16	1984	6/9	京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和 59 年度　7-46	耕土のみ
86	六町	右京区西院西溝崎町 15,16	1990	3/17	京都市内遺跡試掘立会調査概要平成元年度京都市文化観光局　試掘 P37 7-160	検出できず
87	六町	右京区西院西中水町他	2000-2001	4/18-8/13	京都市内遺跡立会調査概報平成 13 年度京都市文化市民局　P23　10・11-018	No.1:-0.72m，弥生～古墳の包含層（土器）この層を切って時期不明のピット　-0.9m 以下，黄褐色粘土の地山 No.2:-0.35m，平安前期の包含層（須恵器平瓶）
88	七町	右京区西院西寿町 2-1，3，4	1990	10/17	京都市内遺跡試掘立会調査概報平成２年度　7-65	時期不明の土壙
89	七町	右京区西院西寿町 33	1982	4/1	昭和 57 年度京都市埋蔵文化財調査概要 P120 立会・京都市内遺跡試掘立会 S57　23-1	表土下 0.9 m南北方向の平安中期の溝，宇多小路東側溝に位置する
90	七町	右京区西院南寿町 10	1982	6/10	京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和 57 年度　25-37	東西方向の流路
91	八町	右京区西院西寿町 8	1989	3/31	京都市内遺跡試掘立会調査概要 63 年度京都市文化観光局　立会　P44 7-215	GL-1.05m にて推定五条大路の路面，時期不明
92	八町	右京区西院太田町 83	1984	1/17	昭和 58 年度京都市埋蔵文化財調査概要 P149 立会・京都市内遺跡試掘立会 S59　7-140	包含層（平安中期）
93	八町	右京区西院太田町 84，85	1982	12/17-22	昭和 57 年度京都市埋蔵文化財調査概要 P124 立会・京都市内遺跡試掘立会 S57　23-135	溝，柱穴（平安時代）
94	八町	右京区西院追分町 25-2	1990	9/10-12/1	平成２年度京都市埋蔵文化財調査概要 1994・P57-58 図 21	耕作溝，建物（重複），柵列
95	八町	右京区西院追分町 25-2	1990	8/6	京都市内遺跡試掘立会調査概報平成２年度　7-33	平安時代の柱穴，土壙，溝発掘調査に切り替え
96	八町	右京区西院西寿町 4	1989	9/8	京都市内遺跡試掘立会調査概要 63 年度京都市文化観光局　立会　P53 7-84	検出できず
97	九町	右京区西院追分町 4-1，5-6	2000	12/22	京都市内遺跡試掘調査概報平成 12 年度京都市文化市民局　P36　10-51	GL-2.0m で時期不明の南北の溝６本を検出
98	十一町	右京区西院西溝崎町 6	1989	5/16	京都市内遺跡試掘立会調査概要 63 年度京都市文化観光局　試掘　P53 7-25	GL-2.0m にて植物遺体を含む湿地堆積
99	十一町	右京区西院西溝崎町 1	1983	8/4	昭和 58 年度京都市埋蔵文化財調査概要 P149 立会・京都市内遺跡試掘立会 S58　7-70	検出なし
100	十一町	右京区西院西溝崎町 8	1989	11/14	京都市内遺跡試掘立会調査概要 63 年度京都市文化観光局　立会　P53 7-112	GL-0.19m にて平安の包含層

No	発掘地点	所在地	調査期間（年月日）		掲載誌	備考
101	十二町	右京区西院西溝崎町　地先	2000	7/21-8/3	京都市内遺跡立会調査概報平成12年度京都市文化市民局　P40 10-123	No.3：-0.65m，湿地状堆積 No.4:-0.4m，湿地状堆積 No.5:-0.62m，灰色粘土の地山
102	十二町	右京区西院西溝崎町 29-4	2002	11/28-12/3	京都市内遺跡立会調査概報平成14年度京都市文化市民局　P25 10-272	GL-0.7m，室町中期の包含層（土師器皿）
103	十二町	右京区西京極北庄境町 8・9	1996	10/2・4	京都市内遺跡立会調査概報平成8年度京都市文化市民局　P64　10-276	地表下 0.7m 以下，包含層，土師器，瓦片
104	十二町	右京区西京極北庄境町 10	1991	6/18	京都市内遺跡立会調査概報平成3年度　8-95	室町時代の包含層
105	十二町	右京区西院西溝崎町 地内	2000	2/1-2/22	京都市内遺跡立会調査概報平成12年度京都市文化市民局　P30 10-385	地表下 -0.45m 以下，湿地状堆積
106	十二町	右京区西京極北庄境町 4-3・4	2000	1/12	京都市内遺跡立会調査概報平成12年度京都市文化市民局　P30 10-358	地表下 -0.62m，時期不明の包含層（土師器）
107	十三町	右京区西院六反田町 36.37	1991	10/18-21	京都市内遺跡立会調査概報平成3年度　8-241	検出なし
108	十三町	右京区西院六反田 39	1991	1/11	京都市内遺跡試掘調査概報平成3年度京都市文化観光局　試掘　P58 8-1	GL-1.8 ～ 2.3m で地山
109	十三町	右京区西京極豆田町 11 他	1990	5/9	京都市内遺跡試掘立会調査概報平成2年度　7-9	時期不明の包含層
110	十三町	右京区西院六反田町 45，46	1993	2/9	京都市内遺跡試掘調査概報平成5年度　8-3	湿地状堆積
111	十四町	右京区西院久保田町 6-6	1993	8/23	京都市内遺跡立会調査概報平成5年度京都市文化観光局 P64 8-184	検出できず
112	十四町	右京区西院六反田町 29	1990	6/20	京都市内遺跡試掘立会調査概報平成2年度　7-20	弥生時代の落ち込み
113	十五町	右京区西院久保田町 15	1990	4/6	京都市内遺跡試掘立会調査概報平成2年度　7-2	時期不明の湿地堆積
114	十五町	右京区西院久保田町 20	1992	11/10	京都市内遺跡試掘調査概報平成4年度　8-27	湿地状堆積
115	十五町	右京区西院久保田町 6	1984	4/18	京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和59年度　7-12	池状堆積（鎌倉時代～江戸時代）
116	十四町・十五町	右京区西院久保田町 6-7 他	2000	12/18	京都市内遺跡試掘調査概報平成12年度京都市文化市民局　P36　10-52	GL-1.4m で古墳時代後期の南北溝 1 条（幅約 4m）を検出　平安時代以降は柱穴 1 個のみ
117	十五町	右京区西院久保田町 6-7 他	2001	1/5・10-12	京都市内遺跡立会調査概報平成13年度京都市文化市民局　P23 10-289	地表下 -0.97m，時期不明の落込
118	十六町	右京区西院清水町 101，144	2001	4/4	京都市内遺跡試掘調査概報平成13年度京都市文化市民局　10-47	GL-2.5m 以下，湿地状堆積 GL-3.0m で平安前期の包含層　基礎深度が浅く遺構への影響なし
119	十六町	右京区西院清水町 146	1989	5/16	京都市内遺跡試掘立会調査概要 63 年度京都市文化観光局　立会　P53 7-26	盛土のみ
六条四坊						
120	一町	右京区西院清水町 120，141	1995	1/9・23	京都市内遺跡立会調査概報平成7年度　10-423	検出なし
121	一町	右京区西院清水町 136-3	2000	9/5・6	京都市内遺跡立会調査概報平成12年度京都市文化市民局　P40 10-159	No.1:-0.5-0.82m，時期不明の包含層 3，-1.09m 以下，黒褐色砂泥の地山　No.2:-1.16m 以下，褐色粘土の地山
122	二町	右京区西院清水町 161	1997	1/17	京都市内遺跡試掘調査概報平成9年度京都市文化市民局　P36　10-11	GL-1.1m で古墳時代の流路跡を検出　本文 18 頁
123	二町	右京区西院清水町 155	1989	4/24-6/10	平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要 P68-70 図 26	弥生中期後半～古墳前期竪穴，平安時代溝一条
124	四町	右京区西院六反田町 11	1996	1/18，2/13・22	京都市内遺跡立会調査概報平成8年度京都市文化市民局　P56 10-392	地表下 0.6m 以下，褐色砂泥の無遺物層
125	四町	右京区西院六反田町 10	1997	5/9	京都市内遺跡試掘調査概報平成9年度京都市文化市民局　P38　10-49	湿地状堆積が地表下 2.4m まで続くのを確認する

No	発掘地点	所在地	調査期間（年月日）		掲載誌	備考
126	四町	右京区西院六反田 13-1・2・3・4	1989	2/19	京都市内遺跡試掘立会調査概要 63 年度京都市文化観光局　試掘　P44 7-185	GL-1.0m 湿地堆積
127	四町	右京区西院六反田町 17-2	1999	3/25	京都市内遺跡試掘調査概報平成 11 年度　10-8	灰色泥土の分厚い湿地堆積
128	四町	右京区西京極豆田町 1 東大丸児童公園	1986	9/20-9/24	昭和 61 年度京都市埋蔵文化財調査概要 P161 試掘 -11	－
七条二坊						
130	十六町	右京区西院中水町 1	1993	11/10・17	京都市内遺跡立会調査概報平成 5 年度京都市文化観光局 P64 9-293	検出できず
131	十六町	下京区西七条掛越町 12	1990	6/1	京都市内遺跡試掘立会調査概報平成 2 年度　8-14	検出なし
33	七条二坊十・十五町	下京区西七条八幡町	1984	6/29-7/30	昭和 59 年度京都市埋蔵文化財調査概要 P179 立会 -24	検出なし
七条三坊						
132	一町	下京区西七条八幡町 21	1983	4/28	昭和 58 年度京都市埋蔵文化財調査概要 P150 立会・京都市内遺跡試掘立会 S58　7-12	包含層（江戸時代）
133	一町	右京区西院溝崎町 21	1984	11/27	京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和 59 年度　7-134	盛土のみ
134	七町	右京区下京区，佐井西通，五条通～七条通　地内	2002	3/18～5/20	京都市内遺跡立会調査概報平成 14 年度京都市文化市民局　P17 10・12-390	GL-1.4m まで現代盛土
135	八町	右京区西京極北境町 71-1，2	1990	10/15	京都市内遺跡試掘立会調査概報平成 2 年度　7-62	平安前期～中期の池状堆積
136	八町	右京区西京極北庄境町 69 他	2001	8/7・8	京都市内遺跡立会調査概報平成 13 年度京都市文化市民局　P33 12-150	地表下 -1.28m 以下，黄灰色粘土の地山
137	八町	右京区西京極北庄境町町 69	1984	11/19	京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和 59 年度　7-128	検出なし
138	八町	右京区西京極北庄境町 75	2000	11/20	京都市内遺跡試掘調査概報平成 12 年度京都市文化市民局　P36　12-55	GL-2.0m で灰色泥土の湿地状堆積
139	八町	右京区西京極北庄境町 14-2	1992	9/8・10	京都市内遺跡立会調査概報平成 4 年度京都市文化観光局　立会　P57 8-199	地表下 1.36m 以下，湿地堆積
140	九町	右京区西京極北庄境町 12	1989	1/9	京都市内遺跡試掘立会調査概要 63 年度京都市文化観光局　立会　P44 7-165	GL-1.07m 以下包含層 3，平安前期・中期・時期不明各 1
141	九町	右京区西京極北庄境町 27-1	1991	11/1-11/5	京都市内遺跡立会調査概報平成 3 年度　8-257	平安前期の包含層
142	九町	右京区西京極北庄境町 23	1999	4/22	京都市内遺跡試掘調査概報平成 11 年度　12-38	河川の氾濫堆積
143	十六町	右京区西京極豆田町 13，14	1994	8/29	京都市内遺跡試掘調査概報平成 6 年度京都市文化観光局　P32　12-54	GL-0.85m で平安時代？の東西溝を発見する
144	十六町	右京区西京極豆田町 32	1993	6/7・11・15	京都市内遺跡立会調査概報平成 5 年度京都市文化観光局 P64 8-83	地表下 1.1m 以下，湿地堆積
145	十六町	右京区西京極豆田町 31	1991	3/29	京都市内遺跡試掘調査概報平成 3 年度京都市文化観光局　試掘　P58 8-19	検出できず
146	十六町	右京区西京極豆田町	1990	7/19	京都市内遺跡試掘立会調査概報平成 2 年度　7-26	流れ堆積
七条四坊						
147	一町	右京区西京極豆田町 4	1983	5/18,20	昭和 58 年度京都市埋蔵文化財調査概要 P150 立会・京都市内遺跡試掘立会 S58　7-20	竪穴住居（古墳時代），土師器甕２個体をあわせ口にして埋納した土壙（平安前期）
148	一町	右京区西京極豆田町 5	1983	10/7	昭和 58 年度京都市埋蔵文化財調査概要 P150 試掘・京都市内遺跡試掘立会 S58　7-95	溝，包含層，弥生土器出土
129	四町・七条四坊二	右京区花屋町通，葛野大路一筋東通～西小路一筋西通地内	1995	7/27・8/2・17・29	京都市内遺跡立会調査概報平成 7 年度　12-174	にぶい黄褐色砂泥の無遺物層

付章1　平安京右京六条三坊七・八・九・十町出土の動物遺存体

京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程[1]
独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
埋蔵文化財センター主任研究官[2]
丸山真史[1]・松井章[2]

1．概要

平安京右京六条三坊の七・八・九・十町の発掘で出土した動物遺存体は，細片を含めると1,000点以上にのぼる。おおよその種類，部位を集計することができたのは310点で，そのうちウマが182点と最多の出土数を示し，ウシが64点と続く。ウシ，ウマの同定を行わなかった椎骨や肋骨，四肢骨でも，種類の特徴の明らかでない破片で，その大きさと形態の特徴からウシ，またはウマと思われる破片など合計52点にのぼる。この二種が，同定できた破片数の94％を占める。その他の動物種は少数にとどまるが，種類が判定できたのは，ニワトリ，オオカミ，ヒト，ニホンジカがそれぞれ2点，イヌ，が1点である(第15表)。また，近世の層から骨角器の破片が1点出土している。遺構別にみるとＳＲ4200が214点，SX820が45点，ＳＲ0001が43点となり，時期はいずれも平安前期のものである。

2．遺構別の出土状況

ＳＲ0001

調査区東より樋口小路内を西流し，調査区中央部西より馬代小路交差点で直角に南に折れる。ウシ21点，ウマ12点，イヌ1点が出土した。出土したのはＳＲ4200との重複箇所で，ＳＲ4200でえぐれた部分がＳＲ0001の澱みとなり，そこに堆積したのであろう。

ほかの遺構とは異なり，ここではウシが多いという特徴がある。

ＳＲ4200

ＳＲ0001に切られる川である。調査区の東側，樋口小路北側溝想定部を西に流れ，馬代小路交差点手前で南流する。

ウマ93点，ウシ18点が出土した。ウマは，下顎骨が13点（右7左5不明1）と最も多く，そのほかの部位で多く出土したのは，寛骨11点（右4左4不明3）である。ウシは，下顎骨7点（右2左5）が出土した。そのほかではオオカミ2点，ニホンジカ，ヒトが1点出土した。

ＳＲ4200西肩

上記の動物遺存体が河川の上流でまとまって出土したのに対し，南北に下ったところの澱みから出土した。本地点では，ウマが41点，ウシが13点である。部位ごとに見ると，ウマの上顎骨5点(右2左3）前上顎骨の結合部1点，下顎骨6点（右1左4不明1）が出土した。ウシは，四肢骨が散乱した状態で出土し，特定部位への偏りはみられない。

SX820

園池の池尻に相当する。北東から漏斗状に狭まり，注ぎ出す部分で集中して確認した。ウマが34点，ウシが12点出土した。ウマは下顎骨8点（左右結合状態4左1不明3），上顎骨2点（右1左1）が出土している。ウシは，遊離した上顎臼歯が数点出土したのみである。

包含層，その他からの出土

ニワトリは，SX475（明治時代）と十町東二行北一門北端樋口小路南側溝から出土し，時期は川からの他の動物遺存体に比べると新しい。SX475から脛蹠骨1点，1U1Iから足根中足骨1点が出土している。脛蹠骨は，在来鶏であるオナガドリとほぼ同大で近位端は癒合していない。足根中足骨はそれより小さく，蹴爪のないことからメスの可能性が高い。

ニホンジカは，SX474より脛骨1点が出土している。

3．ウシ，ウマの形質について

SE1842下層から出土したウマの中手骨は，最大長220.0mm，近位端最大幅（Bp）48.4mmを測る。この値は，在来馬の木曽馬や御崎馬の中型馬に相当し，体高約135.0cmと推定でき，当時としては大きな個体であったと推定される。その他，計測することができた下顎全臼歯列長は，それぞれ179.2，175.3，173.0，172.5，170.0mmを測り，上記の中型馬の範疇に含められる。前臼歯，後臼歯列長もそれぞれこの傾向を追随する。遊離した臼歯の臼歯高は，比較的高い個体が多く，老齢馬は少なく，壮齢馬が多いことをうかがわせる。なお，乳歯を有する幼齢馬はみられなかった。ウシの下顎骨は，全臼歯列長が160.1，156.0，152.4 mmを測り，それぞれ在来種として天然記念物に指定されている現生の見島牛や口之島牛と同大である。

4．オオカミの出土

SR4200のウマ，ウシの集中部より大型のイヌ科の後頭骨が出土した。現生骨格比較標本のチョウセンオオカミ（天王寺動物園より寄贈）とほぼ同大で，オオカミと考えた。同じ遺構からやはり大型のイヌ科の脛骨が出土した。これは上述のチョウセンオオカミに比較してやや小さい。しかし，在来日本犬の大きさをはるかに凌ぎ，これもオオカミの可能性が高いと考えられる。

この他にSR0001より在来犬に相当するイヌ科の頸椎が1点出土している。解体痕は観察できなかった。

5．骨角器

SD1001の江戸時代以降と思われる層から，磨かれた柄の一部と推測される骨器が出土している。断面は，片面が平坦で，もう片面が凸形を呈する。大きさ，形状から見て櫛払い，もしくは歯ブラシと考えられる。櫛払いは，江戸時代になり発達した骨細工で，櫛の歯の間の汚れを掃除する道具である。古い例は牛馬の四肢骨を四角く削り，歯をつけたものであるが，江戸時代後期より，規則

的に孔をあけて毛を植えてブラシの形状に近づく。歯ブラシは長崎からの出土が古く，遅くとも江戸時代後期には大坂，江戸へ伝わったようである。
柄の表面には，「コクホー」と二重円の中に「齋」の刻印が見られることから，明治以降の工場において生産されたものと考えられる。

平安時代前期のＳＥ1842より，ウシの脛骨を鋸で挽いたものが出土している。骨細工の素材として利用し，途中で廃棄したものと考えられる。付近に骨細工の職人がいたか，工房があったと考えられるだろう。

第14表　出土動物遺存体種名表

鳥綱　Aves
目科　不明　fam. gen. et sp. indent.
キジ科　Phasianidae
ニワトリ　*Gallus gallus*
哺乳綱　Mammalia
食肉目　Carnivora
イヌ科　Canidae
オオカミ　*Canis lups*
イヌ　*Canis familiaris*
偶蹄目　Artiodactyla
イノシシ科　Suidae
イノシシ　*Sus scrofa*
シカ科　Cervidae
ニホンジカ　*Cervus nippon*
ウシ科　Bovidae
ウシ　*Bos taurus*
奇蹄目　Perissodactyla
ウマ科　Equidae
ウマ　*Equus caballus*

6．考察

従来，平安京でウシやウマなど動物遺存体が，多く出土しているのは，八条より南，特に現在の京都駅周辺が挙げられる1)。本遺跡は，平安京右京六条三坊という右京の中央部に立地しており，斃牛馬処理の工房が存在したとは考えにくい。長岡京でも都城の中央付近で，ウマを斬殺して放置した例があり，その傍らから墨書人面土器，鳴り鏑，人形などの祭祀遺物が出土していることから，何らかの祭祀との関連がうかがえるが、断定はできない2)。他の古代，中世の遺跡から出土するウシ，ウマと比較すると，ともに大きく，壮齢の個体が多い。同一個体のウマの胴部と四肢が切断されたと思われる状態でＳＲ4200から出土している。皮や肉を取るためであれば，もっと細かく解体されているはずであるが，単に胴体から前肢，後肢を切り離したのみのようである。

歯のエナメル質以外，骨質部の多くは埋没中に腐朽してしまい，多くは土中に骨粉を残す事が多い。そのため実際は，これらの溝には，実際出土したより、はるかに多くの動物遺存体が存在したと思われるが，証明することは困難である。本例でも、ウシやウマが出土した付近において、人面墨書土器や人形、斎串などの祭祀遺物が出土している。今回のように、動物遺存体など有機物が集中して出土した地点以外にも、それらが存在していた可能性があることから、長岡京の事例と同様に祭祀との関連を断定することは難しい。

本例は，平安京における，貴重な動物遺存体の出土例である。この地点から出土したウマやウシの死因などは，今後，さらに保存状態のよい地点の発掘例を待ち，再度考察を加えねばならない。

註

1）辻裕司･本弥八郎･加納敬治『平安京八条二坊』((財団法人）京都市埋蔵文化財研究所『平成８年度京都市埋蔵文化財調査概要』所収，京都，平成10年)。

2）松井章『長岡京右京二条二坊・側溝出土の動物遺存体調査』（向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書第九集』所収，京都，昭和63年)。

第15表　出土動物遺存体一覧表

遺物No.	遺構	GRID	層位	種名	部位	左右	SEX	AGE	備考
1	1D1I	SR0001	3層	イヌ	頸椎	−	−	−	−
2	1D1I	SR0001	3層	ウシ	環椎	−	−	−	BFcr : 106.0　GB : 145.86(参考) 大きい
3	1D1I	SR0001	3層	ウシ	踵骨	左	−	−	−
4	1K1Y・ 1K2A	SR0001	1層	ウシ	手根骨	−	−	−	3本
5	0T1I	SR0001	3層	ウシ	上顎臼歯	−	−	−	2本
6	1D1I	SR0001	3層	ウシ	上腕骨	左	−	−	体部～遠位
7	1K1Y・ 1K2A	SR0001	1層	ウシ	中節骨	−	−	−	3本
8	1D1I	SR0001	3層	ウシ	椎骨	−	−	−	−
9	0S1H	SR0001	11層	ウシ	橈骨	左	−	−	−
10	1D1I	SR0001	3層	ウシ	橈骨	−	−	−	−
11	1D1I	SR0001	3層	ウシ	橈・尺骨	右	−	−	近位～体
12	0T1I	SR0001	13層	ウシ	中手骨	右	−	−	−
13	1D1I	SR0001	3層	ウシ	肋骨	−	−	−	−
14	1D1I	SR0001	3層	ウシ	肋骨	−	−	−	−
15	1D1I	SR0001	3層	ウシ	肋骨	−	−	−	−
16	1D1I	SR0001	3層	ウシ	肋骨	−	−	−	−
17	1D1I	SR0001	3層	ウシ	肋骨	−	−	−	−
18	1D1I	SR0001	3層	ウシ	肋骨	−	−	−	−
19	1D1I	SR0001	3層	ウシ	下顎骨	右	−	−	全 : 160.10　後 : 98.16 前 : 63.53
20	1D1I	SR0001	3層	ウシ	中手骨	右	−	−	BP : 60.43
21	1D1I	SR0001	3層	ウシ／ ウマ	椎骨	−	−	−	−
22	1D1I	SR0001	3層	ウシ／ ウマ	椎骨	−	−	−	−
23	1D1I	SR0001	3層	ウシ／ ウマ	椎骨	−	−	−	−
24	1D1I	SR0001	3層	ウシ／ ウマ	椎骨	−	−	−	−
25	1D1I	SR0001	3層	ウシ／ ウマ	肋骨	−	−	−	−
26	1D1I	SR0001	3層	ウシ／ ウマ	肋骨	−	−	−	−
27	1D1I	SR0001	3層	ウマ	距骨	左	−	−	−
28	0S1I	SR0001	7層	ウマ	距骨	左	−	−	−
29	0W1I	SR0001	5層	ウマ	脛骨	左	−	−	−
30	1L1K	SR0001	−	ウマ	上顎臼歯	左	−	老齢	−
31	1L1Y	SR0001	最下層 (砂礫層)	ウマ	上顎臼歯	左	−	−	−
32	0X1H・ 0Y1H	SR0001	16層	ウマ	上顎臼歯	−	−	−	−
33	1D1I	SR0001	3層	ウマ	中手骨／ 中足骨	−	−	−	−
34	1D1I	SR0001	3層	ウマ	上顎骨	左	−	−	前 : 89.23
35	1D1I	SR0001	3層	ウマ	上顎骨	右	−	−	前 : 89.90
36	1D1I	SR0001	3層	ウマ	上顎骨	−	−	−	46 : 65.87
37	1D1I	SR0001	3層	ウシ	椎骨 (棘突起)	−	−	−	−
38	1D1I	SR0001	3層	ウシ／ ウマ	椎骨	−	−	−	−

〔凡例〕 GL：最大長，Bp：近位端最大幅，Bd：遠位端最大幅，
全：臼歯列全長，前：前臼歯列長，後：後臼歯列長

遺物No.	遺構	GRID	層位	種名	部位	左右	SEX	AGE	備考
39	1D1I	SR0001	3層	ウシ／ウマ	肋骨	－	－	－	－
40	1D1I	SR0001	3層	ウシ／ウマ	肋骨	－	－	－	－
41	1L1S	SR0001	－	ウシ	上顎臼歯	左	－	－	－
42	1L1T	SR0001	－	ウマ	上顎臼歯	左	－	－	3本
43	1L2A	SR0001	－	ウマ	上顎臼歯	右	－	成～老齢	3本　縦割
44	1D1I	SR0001	3層	ウシ／ウマ	肋骨	－	－	－	－
45	1A1H	SR4200	砂礫層	ウシ	下顎骨	左	－	成獣	全：155.99　後：69.00 前：85.28
46	1A1H	SR4200	砂礫層	ウシ	下顎骨	左	－	－	－
47	0X1H	SR4200	北肩	ウシ	下顎骨	右	メス	成獣	小さい
48	1I1W	SR4200	－	ウシ	下顎骨	左	－	－	－
49	1H1U	SR4200	砂礫層	ウシ	下顎骨	左	－	－	－
50	1B1H	SR4200	砂礫層	ウシ	下顎臼歯	－	－	－	M3　3本
51	1D1I	SR4200	最下層	ウシ	寛骨	左	－	－	－
52	1D1I	SR4200	砂礫層上層	ウシ	距骨	左	－	－	ほぼ完形
53	1D1I	SR4200	砂礫層	ウシ	肩甲骨	右	－	－	遠位
54	1G1R	SR4200	－	ウシ	上顎臼歯	－	－	－	1本
55	0S1H	SR4200	砂礫層	ウシ	上腕骨	左	－	－	遠位
56	0Y1H	SR4200	砂礫層	ウシ	大腿骨	左	－	－	遠位
57	1B1H	SR4200	砂礫層	ウシ	橈骨	右	－	－	Bp：80.69　近位
58	1B1H	SR4200	砂礫層	ウシ	中足骨	右	－	－	Bp：48.61　近位
59	1D1I	SR4200	砂礫層	ウシ	肋骨	－	－	－	－
60	0X1H	SR4200	砂礫層	ウシ	下顎骨	右	－	－	全：152.42　後：99.60 前：56.39
61	1C1I・1D1I	SR4200	砂礫層上層	ウシ	下顎骨	左	－	－	後：93.94
62	1D1H	SR4200	砂礫層上層	ウシ	鼻骨	－	－	－	－
63	－	SR4200	－	ウシ／ウマ	下顎骨	－	－	－	関節突起
64	1G1Q	SR4200	－	ウシ／ウマ	寛骨（坐骨）	左	－	－	－
65	0S1H	SR4200	砂礫層	ウシ／ウマ	四肢骨	－	－	－	－
66	1D1J	SR4200	砂礫層	ウシ／ウマ	四肢骨	－	－	－	2本
67	1D1J	SR4200	砂礫層	ウシ／ウマ	大腿骨	左	－	－	遠位部
68	0U1H	SR4200	砂礫層上層	ウシ／ウマ	中足骨	－	－	－	1本
69	0U1H	SR4200	砂礫層上層	ウシ／ウマ	中足骨？	－	－	－	1本
70	0W1H	SR4200	砂礫層	ウシ／ウマ	椎骨	－	－	－	－
71	1D1I	SR4200	最下層	ウシ／ウマ	椎骨	－	－	－	2本
72	1D1I	SR4200	最下層	ウシ／ウマ	椎骨	－	－	－	2本
73	1D1I	SR4200	砂礫層上層	ウシ／ウマ	肋骨	－	－	－	－
74	1D1I	SR4200	砂礫層	ウシ／ウマ	肋骨	－	－	－	－
75	1D1I	SR4200	最下層	ウシ／ウマ	肋骨	－	－	－	4本

遺物No.	遺構	GRID	層位	種名	部位	左右	SEX	AGE	備考
76	1D1I	SR4200	最下層	ウシ／ウマ	肋骨	－	－	－	－
77	1D1I	SR4200	最下層	ウシ／ウマ	肋骨	－	－	－	－
78	1D1I	SR4200	最下層	ウシ／ウマ	肋骨	－	－	－	複数
79	1D1J	SR4200	－	ウシ／ウマ	肋骨	－	－	－	－
80	1D1I	SR4200	砂礫層上層	ウシ／ウマ	下顎骨	左右	－	－	－
81	1D1I	SR4200	砂礫層上層	ウシ／ウマ	椎骨	－	－	－	－
82	1D1I	SR4200	最下層	ウシ？	頸椎	－	－	－	－
83	1D1I	SR4200	砂礫層	ウシ？	尺骨？	－	－	－	近位付近？
84	1D1I	SR4200	砂礫層	ウシ？	仙椎	－	－	－	近位
85	0U1H	SR4200	砂礫層	ウマ	下顎	－	－	－	－
86	0V1H	SR4200	砂礫層	ウマ	下顎臼歯	－	－	－	2本
87	1E1J	SR4200	砂礫層	ウマ	下顎臼歯	－	－	－	1本
88	－	SR4200	－	ウマ	下顎臼歯	－	－	－	2本
89	－	SR4200	－	ウマ	下顎臼歯	－	－	－	4本　小型
90	1G1R	SR4200	－	ウマ	下顎骨	右	－	－	－
91	1G1Q	SR4200	－	ウマ	下顎骨	左	－	－	前：96.20
92	1G1Q	SR4200	－	ウマ	下顎骨	右	－	－	－
93	1D1I	SR4200	砂礫層上層	ウマ	下顎骨	右	－	－	－
94	1D1I	SR4200	最下層	ウマ	下顎骨	左	－	－	後：74.75
95	1D1I	SR4200	最下層	ウマ	下顎骨	右	－	－	後：73.22
96	1G1Q	SR4200	－	ウマ	寛骨	－	－	－	－
97	1D1I	SR4200	砂礫層	ウマ	寛骨	－	－	－	－
98	1B1H	SR4200	砂礫層	ウマ	寛骨	左	－	－	－
99	1G1R	SR4200	－	ウマ	寛骨（坐骨）	左	－	－	－
100	1G1R	SR4200	－	ウマ	寛骨（坐骨）	右	－	－	－
101	1G1Q	SR4200	－	ウマ	寛骨（坐骨）	右	－	－	－
102	1I1W	SR4200	－	ウマ	寛骨（坐骨）	左	－	－	－
103	1I1W	SR4200	－	ウマ	寛骨（坐骨）	右	－	－	－
104	1D1J	SR4200	砂礫層	ウマ	寛骨（坐骨）	右	－	－	－
105	1D1J	SR4200	砂礫層	ウマ	寛骨	左	－	－	－
106	0Y1H	SR4200	砂礫層	ウマ	臼歯	－	－	－	1本
107	1D1J	SR4200	砂礫層上層	ウマ	臼歯	－	－	－	6本
108	1B1H	SR4200	砂礫層	ウマ	臼歯	－	－	－	－
109	0S1H	SR4200	砂礫層上層	ウマ	臼歯	－	－	－	1本
110	0V1H	SR4200	砂礫層	ウマ	臼歯	－	－	－	1本
111	1D1J	SR4200	砂礫層上層	ウマ	臼歯	－	－	－	3本
112	－	SR4200	－	ウマ	臼歯	－	－	－	2本
113	1D1J	SR4200	砂礫層	ウマ	脛骨	右	－	－	体部
114	1E1J	SR4200	砂礫層上層	ウマ	肩甲骨	左	－	－	体部
115	1C1I	SR4200	砂礫層	ウマ	肩甲骨	右	－	－	SLC：73.25　遠位
116	1A1H	SR4200	砂礫層	ウマ	尺橈骨	右	－	－	近位
117	1G1R	SR4200	－	ウマ	尺橈骨	右	－	－	近位付近
118	1G1Q	SR4200	－	ウマ	尺骨	－	－	－	－
119	1D1J・1E1J	SR4200	砂礫層	ウマ	上顎骨・前上顎	右	－	－	後：143.85
120	1E1J	SR4200	砂礫層	ウマ	上顎臼歯	右	－	－	6本　P2～M3
121	1B1H	SR4200	砂礫層	ウマ	上顎臼歯	－	－	－	3本

遺物No.	遺構	GRID	層位	種名	部位	左右	SEX	AGE	備考
122	1A1H	SR4200	砂礫層	ウマ	上顎臼歯	－	－	－	1本
123	1C1H	SR4200	砂礫層上層	ウマ	上顎臼歯	右	－	－	－
124	1C1H	SR4200	砂礫層上層	ウマ	上顎臼歯	右	－	－	－
125	0W1H	SR4200	砂礫層	ウマ	上顎臼歯	－	－	－	2本
126	1A1H	SR4200	砂礫層	ウマ	上顎臼歯	－	－	－	1本
127	－	SR4200	－	ウマ	上顎臼歯	－	－	－	1本
128	－	SR4200	－	ウマ	上顎臼歯	－	－	－	－
129	0W1H	SR4200	砂礫層	ウマ	上顎骨	左	－	－	前：89.47　後：78.28
130	0W1H	SR4200	砂礫層	ウマ	上顎骨	右	－	－	－
131	1D1I	SR4200	砂礫層上層	ウマ	上顎骨	左	－	－	－
132	1D1I	SR4200	砂礫層上層	ウマ	上顎骨	右	－	－	－
133	1C1H	SR4200	砂礫層	ウマ	上腕骨	右	－	－	切断？
134	0X1H	SR4200	砂礫層	ウマ	上腕骨	右	－	－	切断
135	1E1J	SR4200	砂礫層	ウマ	上腕骨	左	－	－	体部
136	1H1U	SR4200	－	ウマ	上腕骨	左	－	－	体部
137	1I1U	SR4200	砂礫層	ウマ	上腕骨	左	－	－	体部
138	1D1J・1E1J	SR4200	砂礫層	ウマ	側頭骨	右	－	－	－
139	1D1I	SR4200	砂礫層	ウマ	その他	－	－	－	－
140	0Y1H	SR4200	砂礫層	ウマ	大腿骨	左	－	－	－
141	1C1H	SR4200	砂礫層	ウマ	大腿骨	右	－	－	体部
142	1G1R	SR4200	－	ウマ	大腿骨	右	－	－	変形
143	1G1R	SR4200	－	ウマ	大腿骨	左	－	－	－
144	1G1Q	SR4200	－	ウマ	中足骨	左	－	－	近位端～体部　Bp：48.9（大きい）
145	1G1R	SR4200	－	ウマ	中手骨	右	－	－	近位端～体部
146	1I1W	SR4200	－	ウマ	中手骨	右	－	－	GL：219.9　Bp：53.93　Bd：44.88
147	南北部	SR4200	－	ウマ	中手骨	左	－	－	近位端～体部　Bp：43.30（参考）
148	1D1J・1E1J	SR4200	砂礫層	ウマ	中節骨	－	－	－	1本　Bd：6.61　ほぼ完形
149	1D1I	SR4200	砂礫層上層	ウマ	椎骨	－	－	－	－
150	1G1P	SR4200	－	ウマ	橈骨	－	－	－	体部
151	1B1H	SR4200	砂礫層	ウマ	橈骨	左	－	－	近位
152	1A1H	SR4200	砂礫層	ウマ	橈骨	右	－	－	尺骨一部残
153	1I1W	SR4200	－	ウマ	橈骨	左	－	－	－
154	1H1U	SR4200	－	ウマ	橈骨	左	－	－	－
155	1I1W	SR4200	－	ウマ	橈・尺骨	右	－	－	近位端～体部
156	1B1H	SR4200	砂礫層	ウマ	中足骨	右	－	－	GL：264.2　ほぼ完形
157	1G1R	SR4200	－	ウマ	中足骨	左	－	－	近位付近
158	1D1I	SR4200	砂礫層上層	ウマ	中足骨	右	－	－	G：271.1　Bd：50.27　ほぼ完形
159	1A1H	SR4200	砂礫層	ウマ	中手骨？	－	－	－	－
160	1B1H	SR4200	砂礫層	ウマ	中手骨／中足骨	左	－	－	遠位　2本
161	1B1H	SR4200	砂礫層	ウマ	中手骨／中足骨	－	－	－	3本
162	0S1H	SR4200	砂礫層上層	ウマ	中手骨／中足骨	－	－	－	2片
163	0X1H	SR4200	砂礫層	ウマ	下顎骨	右	オス	3才前後	－
164	1D1H・1D1I	SR4200	砂礫層上層	ウマ	下顎骨	左	－	－	全：179.2　後：83.53　前：91.17　3104

遺物No.	遺構	GRID	層位	種名	部位	左右	SEX	AGE	備考
165	1C1H・1D1H	SR4200	砂礫下	ウマ	下顎骨	右	−	若い？	全：172.97　後：83.54 前：86.98
166	1D1I	SR4200	砂礫層上層	ウマ	下顎骨	左	−	成獣	後：91.02
167	1D1I	SR4200	砂礫層上層	ウマ	下顎骨	右	−	成獣	−
168	1D1I	SR4200	砂礫層	ウマ	下顎骨	左	−	−	後：110.04
169	1D1H	SR4200	砂礫層上層	ウマ	距骨	−	−	−	−
170	1D1H	SR4200	砂礫層上層	ウマ	距骨	右	−	−	−
171	1D1I	SR4200	砂礫層上層	ウマ	切歯	−	−	−	−
172	1D1H	SR4200	砂礫層上層	ウマ	大腿骨	左	−	−	−
173	1I1U	SR4200	砂礫層	ウマ？	上腕骨？	左？	−	−	−
174	1D1I	SR4200	砂礫層	ウマ？	仙椎	−	−	−	近位
175	1D1H	SR4200	砂礫層上層	ウマ？	寛骨	−	−	−	−
176	1I1W	SR4200	−	ウマ	寛骨	−	−	−	−
177	1H1U	SR4200	−	ウマ	寛骨	左	−	−	−
178	1D1H	SR4200	砂礫層上層	オオカミ	後頭部	−	−	−	25：40.18　27：22.41 28：19.55
179	1D1I	SR4200	砂礫層上層	オオカミ？	脛骨	−	−	−	Bd：21.35　骨折痕
180	1D1H	SR4200	砂礫層上層	ニホンジカ	前頭骨	左	オス	−	角座あり
181	0U1H	SR4200	砂礫層	ヒト	−	−	−	−	−
182	1G1Q・1G1R	SR4200	−	ウマ	脛骨	右	−	−	体部
183	1H1U	SR4200	−	ウマ	肩甲骨	−	−	−	−
184	1H1U	SR4200	−	ウマ	尺骨	左	−	−	−
185	1I1W	SR4200	−	ウマ	中手骨	右	−	−	Bp：52.5
186	1J1U	SR4200西肩	−	ウシ	距骨	−	−	−	GLl：77.13　GLm：68.78 Dm：37.43　Bd：46.25
187	1J1U	SR4200西肩	−	ウシ	肩甲骨	右	−	−	−
188	1J1U	SR4200西肩	−	ウシ	指骨	−	−	−	−
189	1J1U	SR4200西肩	−	ウシ	尺骨	右	−	−	近位端～体部
190	1J1V	SR4200西肩	−	ウシ	足根骨	−	−	−	−
191	1J1U	SR4200西肩	−	ウシ	足根骨	−	−	−	−
192	1J1U	SR4200西肩	−	ウシ	足根骨	−	−	−	−
193	1J1U	SR4200西肩	−	ウシ	中手骨	右	−	−	近位端～体部　Bp：62.39
194	1J1U	SR4200西肩	−	ウシ	中手骨	左	−	−	Bp：59.48　ほぼ完形（遠位端割れ／未化骨）
195	1J1U	SR4200西肩	−	ウシ	中足骨	−	−	−	BP：56.22　BD：58.20 GL：237.6
196	1J1U	SR4200西肩	−	ウシ	橈骨	右	−	−	近位～遠位
197	1J1U	SR4200西肩	−	ウシ	頸骨	右	−	−	Bd：68.82　Dd：49.80
198	1J1U	SR4200西肩	−	ウシ	踵骨	−	−	−	GL：143.40
199	1J1V	SR4200西肩	−	ウシ／ウマ	寛骨	−	−	−	寛骨臼

遺物No.	遺構	GRID	層位	種名	部位	左右	SEX	AGE	備考
200	1J1U	SR4200 西肩	−	ウシ／ ウマ	脛骨	左	−	−	体部
201	1J1U	SR4200 西肩	−	ウシ／ ウマ	肩甲骨	−	−	−	−
202	1J1V	SR4200 西肩	−	ウシ／ ウマ	四肢骨	−	−	−	−
203	1J1U	SR4200 西肩	−	ウシ／ ウマ	上腕骨	右	−	−	−
204	1J1U	SR4200 西肩	−	ウシ／ ウマ	側頭骨	−	−	−	破片複数
205	1J1U	SR4200 西肩	−	ウシ／ ウマ	大腿骨	左？	−	−	骨頭，未化骨
206	1J1U	SR4200 西肩	−	ウシ／ ウマ	大腿骨	−	−	−	遠位端片
207	1J1U	SR4200 西肩	−	ウシ／ ウマ	椎骨	−	−	−	−
208	1J1U	SR4200 西肩	−	ウシ／ ウマ	椎骨	−	−	−	−
209	1J1U	SR4200 西肩	−	ウシ／ ウマ	椎骨	−	−	−	−
210	1J1V	SR4200 西肩	−	ウシ／ ウマ	肋骨	−	−	−	近位～体部
211	1J1V	SR4200 西肩	−	ウシ／ ウマ	肋骨	−	−	−	9本
212	1J1U	SR4200 西肩	−	ウシ／ ウマ	肋骨	−	−	−	14点
213	1J1U	SR4200 西肩	−	ウシ／ ウマ	肋骨	−	−	−	−
214	1J1U	SR4200 西肩	−	ウシ？	手根骨？	−	−	−	−
215	1J1V	SR4200 西肩	−	ウマ	上顎骨	右	−	−	全：177.86　後：81.99 前：95.02
216	1J1V	SR4200 西肩	−	ウマ	下顎	−	−	−	−
217	1J1V	SR4200 西肩	−	ウマ	下顎骨	左	−	−	筋突起～関節突起
218	1J1V	SR4200 西肩	−	ウマ	下顎骨	左	−	−	全：170.00　後：82.40 前：89.70
219	1J1V	SR4200 西肩	−	ウマ	下顎骨	右	−	−	全：172.50　後：82.99 前：89.45
220	1J1U	SR4200 西肩	−	ウマ	下顎骨	左	−	−	下顎角
221	1J1V	SR4200 西肩	−	ウマ	寛骨（腸骨）	左	−	−	−
222	1J1V	SR4200 西肩	−	ウマ	基節骨	−	−	−	−
223	1J1U	SR4200 西肩	−	ウマ	側頭骨	−	−	−	頬骨突起
224	1J1V	SR4200 西肩	−	ウマ	距骨	右	−	−	ほぼ完形
225	1J1V	SR4200 西肩	−	ウマ	脛骨	−	−	−	−
226	1J1U	SR4200 西肩	−	ウマ	脛骨	左	−	−	−
227	1J1U	SR4200 西肩	−	ウマ	肩甲骨	右	−	−	−
228	1J1U	SR4200 西肩	−	ウマ	後頭骨	左	−	−	−
229	1J1V	SR4200 西肩	−	ウマ	尺骨	−	−	−	DPA：57.80　BCP：37.77

遺物No.	遺構	GRID	層位	種名	部位	左右	SEX	AGE	備考
230	1J1U	SR4200 西肩	－	ウマ	上顎骨	右	－	－	全：162.8　後：73.56 前：87.07(割れ有参考)
231	1J1U	SR4200 西肩	－	ウマ	上顎骨	左	－	－	全：163.4　後：72.87 前：91.04
232	1J1U	SR4200 西肩	－	ウマ	上顎骨	左	－	－	前：91.52
233	1J1U	SR4200 西肩	－	ウマ	上顎骨	右	－	－	前：91.75　後：77.61
234	1J1V	SR4200 西肩	－	ウマ	上顎骨・前上顎	左	－	－	前：93.48
235	1J1U	SR4200 西肩	－	ウマ	上顎骨・前上顎	左右	オス	－	45：70.42　46：69.18 47：55.43(参考)
236	1J1V	SR4200 西肩	－	ウマ	上腕	左	－	－	体部，遠位端 BT：72.42（参考）
237	1J1U	SR4200 西肩	－	ウマ	上腕骨	右	－	－	近位～遠位
238	1J1V	SR4200 西肩	－	ウマ	頭蓋骨	－	－	－	－
239	1J1U	SR4200 西肩	－	ウマ	頭蓋骨	－	－	－	－
240	1J1U	SR4200 西肩	砂礫層	ウマ	切歯	右	－	－	I 1/I2
241	1J1U	SR4200 西肩	－	ウマ	前上顎骨・上顎骨	左	－	－	I 1～I 3(LR)
242	1J1U	SR4200 西肩	－	ウマ	側頭骨	左	－	－	頬骨突起
243	1J1U	SR4200 西肩	－	ウマ	側頭骨	右	－	－	－
244	1J1U	SR4200 西肩	－	ウマ	大腿骨	右	－	－	近位～遠位
245	1J1U	SR4200 西肩	－	ウマ	中節骨	－	－	－	－
246	1J1V	SR4200 西肩	－	ウマ	胸椎	－	－	－	BFcr：44.45　HFcr：35.91
247	1J1V	SR4200 西肩	－	ウマ	橈骨	－	－	－	－
248	1J1U	SR4200 西肩	－	ウマ	橈骨	左	－	－	GL：301.10　Bp：73.58　Bd：67.81
249	1J1U	SR4200 西肩	砂礫層	ウマ	橈骨	左	－	－	近位～遠位端　Bd66.23
250	1J1V	SR4200 西肩	－	ウマ	中足骨	左	－	－	体部
251	1J1V	SR4200 西肩	－	ウマ	中足骨	右	－	－	GL：266.3　Bp：45.42 Bol：48.03　ほぼ完形
252	1J1U	SR4200 西肩	砂礫層	ウマ	中足骨	左	－	－	近位端～遠位
253	1J1U	SR4200 西肩	砂礫層	ウマ	中足骨	右	－	－	GL：227.2　Bd：48.41
254	1J1V	SR4200 西肩	－	ウマ	中節骨	－	－	－	－
255	1J1U	SR4200 西肩	－	ウマ	末節骨	－	－	－	－
256	1J1V	SR4200 西肩	－	ウマ？	寛骨	－	－	－	－
257	1K1V	SR4200 西肩	－	ヒト	頭蓋骨	－	－	－	頭頂？／側頭
258	1D1H	SX820	－	ウシ	下顎臼歯	左	－	老齢	M 2・M 3　他 3 本
259	1D1H	SX820	－	ウシ	寛骨	右	－	－	－
260	1D1H	SX820	－	ウシ	頸椎	－	－	－	－
261	1C1G	SX820	－	ウシ	上顎臼歯	－	－	－	3 本
262	1C1G	SX820	－	ウシ	上顎臼歯	－	－	－	M 1・M 2・M 3　後：90.7

遺物No.	遺構	GRID	層位	種名	部位	左右	SEX	AGE	備考
263	−	SX820	−	ウシ	上顎臼歯	−	−	−	−
264	1C1G	SX820	−	ウシ	上顎後臼歯	−	−	−	−
265	1C1G	SX820	−	ウシ	上顎後臼歯	−	−	−	−
266	1D1H	SX820	−	ウシ	上顎前臼歯	左	−	−	−
267	1C1G	SX820	−	ウシ	橈・尺骨	左	−	−	体部
268	1D1H	SX820	−	ウシ	中足骨	−	−	−	体部
269	1D1H	SX820	−	ウマ	下顎臼歯	右	−	−	3本
270	1D1H	SX820	−	ウマ	下顎臼歯	右	−	−	1本
271	1D1H	SX820	3・4層	ウマ	下顎臼歯	−	−	−	−
272	1D1H	SX820	3・4層	ウマ	下顎臼歯	−	−	−	−
273	1C1G	SX820	−	ウマ	下顎臼歯	右	−	−	P2～M2　前：100.6
274	1D1H	SX820	−	ウマ	下顎骨	左右	−	−	P2・P3・P4・M1・M2 前：86.0
275	1D1H	SX820	−	ウマ	下顎骨	左右	−	−	全：175.7　後：82.9　前：91.8
276	1D1H	SX820	−	ウマ	下顎骨	左	−	−	全：175.3　後：83.4　前：91.2 P2～M3
277	−	SX820	−	ウマ	下顎骨	−	オス	−	I2・I3・C
278	1D1H	SX820	−	ウマ	下顎切歯	−	オス	−	I1・I2・I3・C
279	1D1H	SX820	−	ウマ	下顎骨切歯	左右	−	−	I1・I2・I3
280	1C1G	SX820	−	ウマ	下顎切歯	左右	オス	−	I1・I2・I3・C
281	1C1G	SX820	−	ウマ	環椎	−	−	−	−
282	1D1H	SX820	3・4層	ウマ	基節骨	右	−	−	−
283	1D1H	SX820	−	ウマ	脛骨	左	−	−	体～遠位（Bd61.6）
284	1D1H	SX820	−	ウマ	上顎臼歯	左	−	−	3本
285	1D1H	SX820	−	ウマ	上顎臼歯	−	−	−	P2～M3　M2未萌出
286	1C1G	SX820	−	ウマ	上顎臼歯	左右	−	−	12本
287	1C1G	SX820	−	ウマ	上顎臼歯	左右	−	老齢	12本
288	1C1G	SX820	−	ウマ	上顎臼歯	左	−	老齢	−
289	1D1H	SX820	−	ウマ	上顎骨	左	−	−	P2・P3・P4
290	1D1H	SX820	−	ウマ	上顎骨	右	−	−	全：165.6　後：77.3　前：89.5 P2～M4
291	1D1H	SX820	−	ウマ	上腕骨	右	−	−	−
292	1C1G	SX820	−	ウマ	上腕骨	右	−	−	−
293	1C1G	SX820	−	ウマ	切歯	−	−	−	3本
294	−	SX820	−	ウマ	切歯	−	−	−	2本
295	1D1H	SX820	−	ウマ	大腿骨	右	−	−	体部
296	−	SX820	−	ウマ	大腿骨	−	−	−	−
297	1D1H	SX820	−	ウマ	橈・尺骨	右	−	−	近位～体
298	1D1H	SX820	−	ウマ	橈・尺骨	−	−	−	−
299	1C1G	SX820	−	ウマ	橈・尺骨	右	−	−	橈骨 Bp：76.7　Bd：66.5
300	1D1H	SX820	3・4層	ウマ	中手骨	左	−	−	Bp：39.4
301	1D1H	SX820	−	ウマ	中手骨	左	−	−	近位～体
302	1D1H	SX820	−	ウマ	中手骨	右	−	−	体～遠位
303	1P1T	SE1842	46層	ウマ	中手骨	左	−	−	ML：220.0　Bp：48.4 Bd：不明（カットマーク）
304	1P1T	SX1842	−	ウシ	脛骨	左	−	−	体部　ノコギリ
305	1L1B	馬代小路路面	遺構検出中	鳥不明	上腕骨	右	−	−	体部
306	1L1B	SX474	−	ニホンジカ	脛骨	右	−	幼獣	体部
307	1I0S	SX475	最下層	ニワトリ	足根中足骨	右	−	−	
308	1M1N	SD1001	−	−	−	−	−	−	骨角器（ハブラシ？）
309	1U1I	SX475	最下層	ニワトリ	脛ふ骨	左	メス	−	GL：70.15　Bp：13.01　Bd：12.72
310	−	−	−	ニワトリ？	−	−	−	−	−

付章２　木製品の保存処理と分析

株式会社京都科学　西口裕泰

１　はじめに

今回の調査で出土した木製品は主に平安時代前期に属する川跡からのものが中心となる。なかでも，木印，鉄鎌をはじめ，人形，漆器など古代の木製品でも希有なものも含まれる。
こうした，出土品のうち木印１点，漆器９点，鉄鎌１点，紐１点，籠編物２点，ＳＥ 670 の井戸枠について保存処理をおこなった。なお，木印と紐の２点については，材質同定と木印の印面に残存する赤色物の分析をおこなった。ここでは，その保存処理方法と分析の結果を述べる。

２　処理方法・工程

発掘調査で発見された木製品を恒久的に保存するためには，木材の細胞に含まれる過剰な水分を他の安定した物質に置き換えることにより，木材の寸法の安定化をはかる必要がある。PEG 含浸法をはじめとして，いくつかの方法が知られているが，近年，木材構成要素に近い，糖類を含浸させる方法が開発，実用化されたきた。工業的に製造された糖類の中から，安価なラクチトール（Lactitol）やトレハロース（Trehalose）を用いて保存を行う方法で，糖アルコール含浸法と呼ばれるものである。今回の保存処理では基本的には，この糖アルコール含浸法を採用した。ただし，漆塗手箱は乾燥品であったため，アクリル樹脂（パラロイドＢ - 72）による強化処置を，紐についてはアルコールキシレン樹脂法を採択した。

糖アルコール含浸法処理工程

1) 現状確認：35mm による写真撮影を行い，状態を確認する。

2) クリーニング：刷毛・筆などで表面の汚れを落とす。

3) 脱色：EDTA・2Na の 2% 水溶液に漬浸する。（漆器・鉄製品には実施しない。）

4) 糖アルコール含浸：①糖アルコール※ 30% 水溶液を室温にて含浸する。②糖アルコール 50% 水溶液を 50℃にて含浸する。③糖アルコール 50% 水溶液を含浸終了後，溶液をゆっくりと濃縮し濃度 75 ～ 85% にて含浸を終了する。

※糖アルコールは，ラクチトール：トレハロース＝９：１で混合

5) 乾燥：①温水にて洗浄する。②表面の水分を拭き取り，ラクチトールの粉末をまぶす。③ 50℃にて乾燥させる。

6) 表面仕上げ：①ラクチトール粉末を取り除き，表面を温水にて洗浄する。②表面の水分を拭き取り，再度 50℃にて乾燥させる。

7) 接合：セメダイン C 及びエポキシ系樹脂を用いて資料の接合を行う。

8) 補彩：アクリル系絵の具で復元部の補彩を行う。

9) 処理後記録作成，35mm 写真撮影。

3　分析結果

A　木印に使用された赤色顔料と木印の樹種

1　調査内容

木印の赤色部をケイ光X線分析（以下，XRF）による元素分析を行った。

2　使用機器及び測定条件

エネルギー分散型ケイ光X線分析装置〔セイコーインスツルメンツ㈱製 SEA5230)〕試料の微小領域にX線を照射し，その際に試料から放出される各元素に固有のケイ光X線を検出することにより元素を同定する。条件：モリブデン管球使用，大気圧条件下

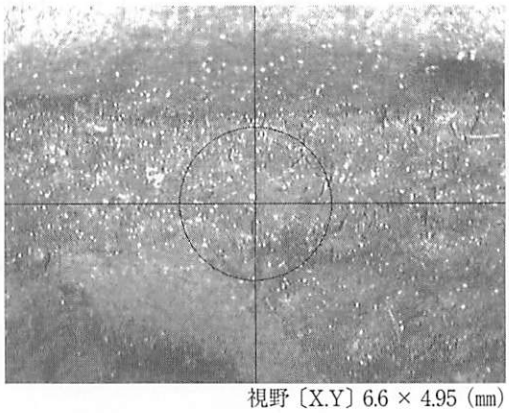
3　結果

XRF分析では赤色部は主な元素として鉄（Fe）および微量元素としてカルシウム（Ca），チタン（Ti），マンガン（Mn），銅（Cu）を検出した（図2）。以上のことより赤色顔料は鉄に由来するベンガラであることがわかった。

〔測定条件〕

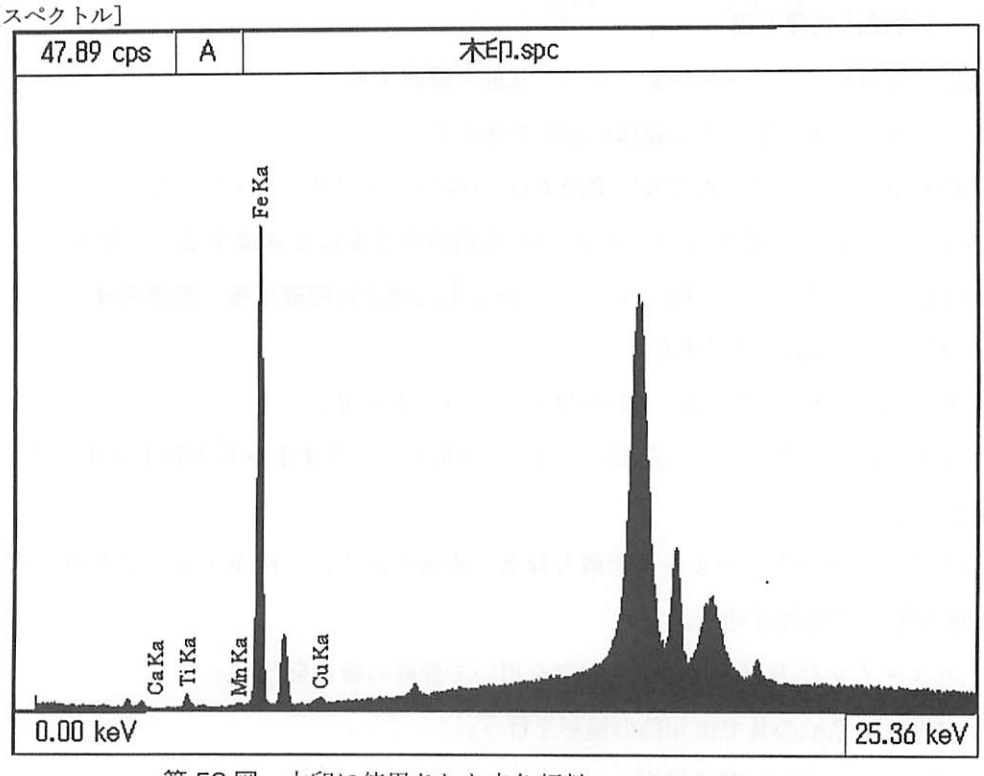
測定装置	SEA5230
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	203
資料室雰囲気	大気
コリメータ	φ 1.8mm
励起電圧（KV）	45
管電流（μA）	20
コメント	赤色部

第51図　資料像



視野〔X.Y〕6.6 × 4.95（mm）

〔スペクトル〕



第52図　木印に使用された赤色顔料のXRFスペクトル

B　紐の材質の同定

1　調査内容

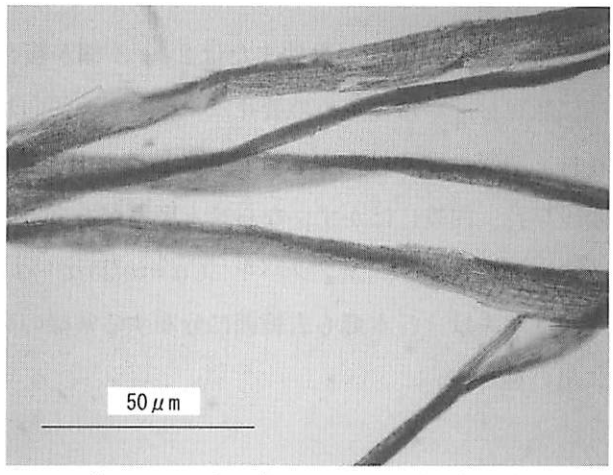
紐の材質を調べるため，生物顕微鏡で組織観察を行なった。また，成分を調べるため，赤外分光分析（以下，FT-IR）を行った。

2　使用機器及び測定条件

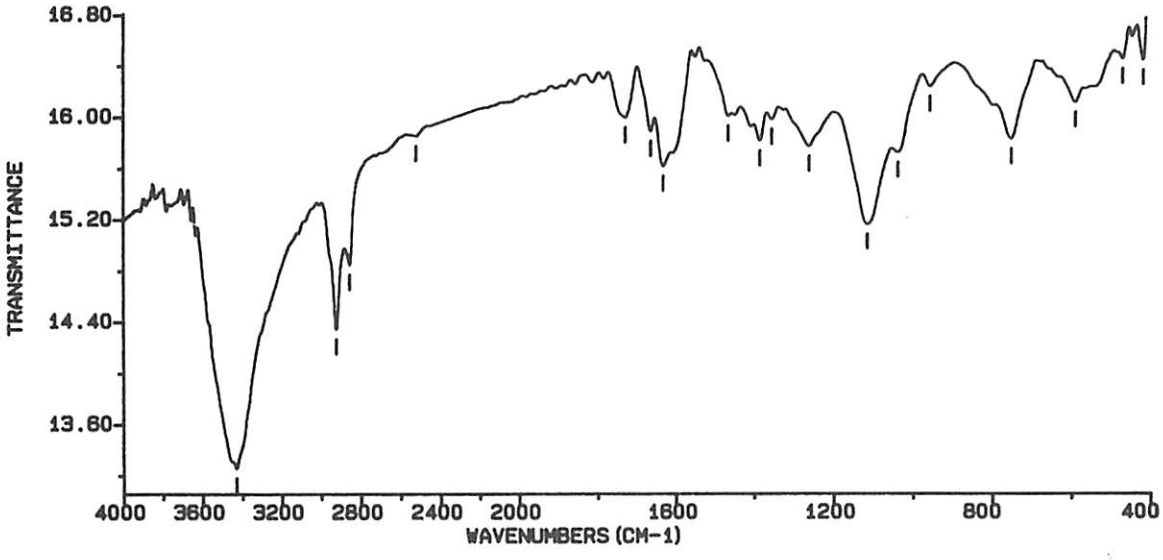
①生物顕微鏡〔㈱オリンパス BX50〕②フーリエ変換型赤外分光光度計（FT-IR）〔日本電子㈱製 JIR-6000〕赤外線を試料に照射することにより得られる，分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し，化合物の種類を同定する。条件 :KBr 錠剤法（(試料を KBr（臭化カリウム）と混合，圧縮し錠剤を作製して行う分析法)）分解能 4cm^{-1}，検出器 TGS

3　結果

組織観察の結果，麻のような靭皮繊維ではなく，イネ科の茎に類似した長方形の細胞が見られた（第３図）。また，成分分析の結果，2920，1630，1460，1380，1100cm^{-1} の吸収位置・強度がセルロースに由来する吸収とほぼ一致した（第４図）。以上より，イネ科の茎



第 53 図　紐繊維の顕微鏡写真（透過）



RESOL	:2cm-1	3430.78	13.26	1259.30	15.79
SCANS	:100	2923.59	14.34	1112.74	15.18
AMPGAIN	:x8	2858.09	14.85	1035.60	15.74
P.INT	:1cm-1	2522.47	15.86	952.67	16.26
BEAM	:single	1727.93	16.01	748.25	15.85
S.SPEED	:TBS	1663.32	15.90	585.30	16.14
S.NUMBER	:1484	1631.50	15.63	485.73	16.48
M.DATE	:4/18/3	1463.72	16.02	413.66	16.47
		1383.69	15.83		
		1352.84	16.00		

第 54 図　紐繊維の FT-IR スペクトル

を撚った縄状の紐の可能性が高いと考えられる。

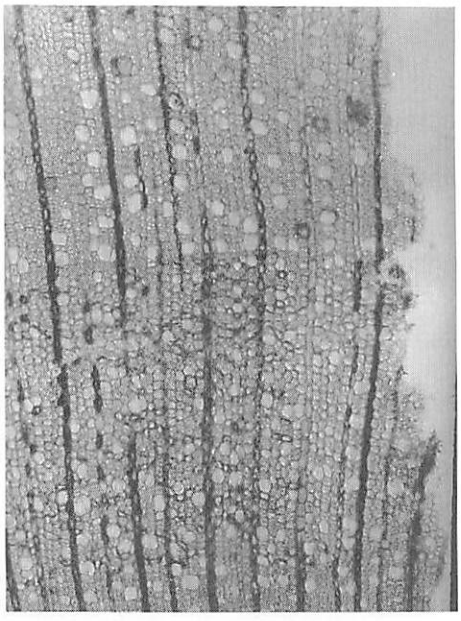
C　木印の樹種同定

1　樹種同定の方法

材の組織標本は，破損部分を片刃の剃刀を用いて材の横断面（木口）を薄く剥ぎ取りスライドグラスの上に並べ，ガムクロラールで封入し永久プレパラートを作成した。光学顕微鏡をもちいて材組織を観察し同定をおこなった。

2　結果

非常に小型の管孔が単独または2～3個が複合して均一に散在し，年輪の始めの管孔はやや大きい傾向がある散孔材。道管の壁孔は交互状，穿孔は横棒が太く約20本の階段穿孔，内腔にはかすかならせん肥厚がある。



第55図　顕微鏡写真
（×60木口面）

以上の形質より，ヤブツバキ（*Camellia japonica Linn.*）に同定される。ヤブツバキは，日本でも広範囲に分布する常緑の高木である。材は，丈夫で建築，器具，彫刻などに用いられる。

4　小結

保存処理と分析調査をおこなった木製品は，平安時代初期の遺構から出土したもので，その内容の豊富さは他に類をみないものである。

幾つか，観察所見を述べる。方形黒漆塗手箱（46）は，ほぼ乾燥状態，細片化しており，木胎はほぼ消失していた。処置としては，可能な限り接合し，形状の回復，構造の推定をおこなった。その結果，内側・外側の漆膜の厚みに，明瞭な差異が認められ，これを基準に可能な限り位置を特定した。接合作業では，僅かに残る布着せを破損しないよう，留意した。またほかの蓋，方形小箱（47）については，このような布着せの痕跡は，処理の過程では認められなかった。紐は非常に腐朽度が高く，繊維状物質の塊という状況であった。現状保存を目標に，処理をおこなった。井戸枠（SE670）は，合計20点の部材及び12点のダボからなり，芯去材がもちいられる。遺存状態は一部の部材を除き，きわめて良好である。おそらく釿によるものと思われる加工痕や，木材加工の際の墨付け，墨書が認められることから，将来的に形状を復元し，何らかの形で一般公開されれば有意義であろう。

出土木製品は発掘後，自然乾燥させると，多くのものは取り返しのつかない収縮変形を生じる。そのため，水漬け状態で保管されるのが一般的である。しかし水漬け状態では，腐朽菌により劣化が進行し，その形状が少しずつ失われていく。そのため発掘時の遺物形状を残すためには，早急な保存処理が必須である。しかしながら，保存処理を施したとしても，水漬けでは数年しかもたないものを，乾燥状態に移行させたことで，劣化の進行を遅らせているにすぎない。そのため，安定な

環境での保管，継続した管理が求められる。

樹種鑑定については京都大学木質科学研究所　伊東隆夫教授に依頼した。

Excavations of the Regio III, Decumanus VI
in the Pars Occidentalis of the Capital Heian

Contents

Preface
Introductory Remarks

Archaeological Reports
Chapter I Realization of the Investigation
Section 1 Background of the Investigation
Section 2 Procedure of the Excavation

Chapter II Topography and Environment
Section 1 Geographical Setting
Section 2 Historical Background

Chapter III Structural Remains
Section 1 Principal Stratigraphy
Section 2 Remains after the Heian Period
Section 3 Remains of the Heian Period
1. Remains of the Later Heian Period
2. Remains of the Former and Middle Heian Period
Section 4 Remains of from the Jômon to the Kofun Period

Chapter IV Artifacts
Section 1 General Explanation of Artifact Remains
Section 2 Artifacts after the End of the Heian Period
Section 3 Artifacts of the Heian Period
1. Roof Tiles
2. Pottery
3. Wooden Objects
4. Earthen Objects
5. Metal Artifacts and the Objects Related to Metalworks
6. Lithic Objects
Section 4 Artifacts before the Heian Period
1. Artifacts from the Yayoi until the Establishment of the Capital Heian
2. Pottery from the Jômon Period

3. Stone Implements

Chapter V Conclusion

Appendices

1. Animal Remains Excavated from the Regio III, Decumanus VI in the Pars Occidentalis of the Capital Heian
2. Conservation and Chemical Treatments of Wooden Objects

Contents in English

Summary in English

Tables

Plates

Appended Plan: The Structural Remains of the Excavated Site during the Heian Period

SUMMARY

The Japan Institute of Paleological Studies has executed an archaeological investigation within the officially acknowledged site of the Capital Heian(平安京) where the factories of Shimadzu Corporation was located. The site is attributed to the Regio III, Decumanus VI in the Pars Occidentalis of the Capital Heian. From this investigation, the site of a large-scale residence has been brought to light. As it has been widely accepted that this kind of large-scale residence ordinary concentrated around the palace of the Capital Heian, the main achievement of this investigation lies in the confirmation of a large-scale residential complex which might have occupied the whole Insula (namely the 8th Insula of the above-mentioned Regio) in such a remote area from the political center. Within this Insula, the building complex with a presumed bisymmetrical form was located in the area situated to the north of the middle east and west line which divided the Insula precisely into two parts, North and South. Eight ancient Japanese feet as a standard measure for the span between the pillars were adopted in these buildings, and the intervals between the buildings were also highly standardized. Namely the interval between the main and rear buildings and that between the main and western subordinated building measured 32 feet (approx.9.6m), while that between the rear and eastern subordinated buildings measured 40 feet (approx.12m), namely 1.25 times longer than 32 feet. These regularities contain much importance when one considers the disposition of the buildings in the Capital Heian.

In the 7th Insula, the investigation has brought to light a pathway of approx.4.5m wide that might have divided the Insula equally into two or four parts. The existence of a path of this scale can be testified in a passage of historical document *Enigi siki*(延喜式).

The trace of old riverbed overlaid by the northern ditch of Higuchi-kôji(樋口小路), an east and west street, was confirmed. This river ran westward and turned its direction southward at the point approx.15m to the east of the intersection between the Higuchi-kôji and Badai-kôji(馬代小路), a street running north and south. The ritual site of animal sacrifice of good condition was confirmed from the riverbed, and the site must have utilized at least in three different periods. Since the examples of such ritual remains have not well been reported except those from the West Market site of the Capital Heian, one may consider that the present site was very important for the religious rites in the Capital Heian. It should also be emphasized that the replacement of the river in accordance with the running direction of Higuchi-kôji took place in the former half of the 9th century and that a site of animal sacrifice of which nature was presumably the rituals to pray the fertility has been confirmed.

Such archaeological evidence as the disposition of large-scale buildings, or such important artifacts as used wooden stamps, wooden tags for delivering loads or wooden tablets for the practice of writing make us to presume that the character of present site is not so much an ordinary residence as a kind of facilities related to the governmental offices. The relationship between these facilities and the excavated remains of animal sacrifice of rituals performed over the different periods will have to be discussed in the future.

As for the site of animal sacrifice, Mizutare Site(水垂遺跡) of Regio III, 6th and 7th Decumanus in the Pars Orientalis of the Capital Nagaoka (長岡京左京六・七条三坊) is well known, although it did not belong to the Heian era. The excavation elucidated that a bridge was constructed on the intersection between the Cardo Higashi-nibô (東二坊大路)and Shichijô-jôkan kôji (七条条間小路), where a river ran from northwest to southeast, and that numerous pottery on which the human face was inscribed in ink or other earthen objects were abandoned at this place. It has been interpreted that a ritual of "Capital's border" was executed at this place in order to prevent the intrusion of any evil into the capital. In spite of the topographical difference, namely by the Capital Nagaoka in the Pars Orientalis and by the Capital Heian in the Pars Occidentalis, the location and circumstance of both cases can be analogized. To the southwest of present site was located a vast flood plane formed by the Katsura and the Tenjin rivers. It is not entirely out of focus to consider that a similar ritual was carried out at this site.

付　　表

平安時代以降の出土土器

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量区分	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
1	SD655 上層	土師器	皿A	Ⅱ	14.2 1.75	1/2	B	e	ナデ	やや粉性。やや大きい赤色粒をやや多量，雲母・長石を微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	良 やや硬質	
2	SD655 上層	土師器	皿A	Ⅱ	14.2 2.1	1/4	口縁外方へわずかに肥厚する。	二段ナデ	ナデ	やや粉性。赤色粒・雲母・長石・石英を微量含む。	10YR6/4 浅黄橙色	良好	
3	SX4163	土師器	皿C	-	7.8 1.55	口縁 2/5	C	e	ナデ	やや砂質。雲母・石英・長石を微量含む。	2.5Y8/2 灰白色	良 やや硬質	
4	SX4163	土師器	皿C	-	8.25 1.65	口縁 4/5	C	e	ナデ	やや砂質。赤色粒・雲母・石英・長石を少量含む。	2.5Y8/3 淡黄色	良 やや軟質	
5	SX4163	土師器	皿C	-	8.75 1.65	口縁 3/4	C	e	ナデ	やや砂質。雲母・石英・石粒を少量含む。	2.5Y8/3 淡黄色	良 軟質	口縁部の一部に煤付着（灯明皿）。
6	SX4163	土師器	皿C	-	8.65 1.75	口縁 4/5	C	e	ナデ	やや粉性。雲母・石英・長石を少量含む。	2.5Y7/3 浅黄色	良 やや軟質	見込，底部に煤付着（灯明皿）。
7	SX4163	土師器	皿C	-	8.9 2.0	ほぼ完形	C	e	ナデ	やや粉性。雲母・石英・長石を少量含む。	2.5Y8/3 淡黄色	良 やや軟質	口縁部の一部に煤付着（灯明皿）。
8	SX4163	土師器	皿C	-	8.8 1.7	ほぼ完形	C	e	ナデ	やや砂質。雲母・石英・長石を少量含む。	2.5Y7/2 灰黄色～2.5Y8/3 浅黄色	良 やや軟質	口縁部の一部に煤付着（灯明皿）。
9	SX4163	土師器	皿C	-	9.1 1.6	完形	C	e	ナデ	やや粉性。雲母・石英・長石を微量含む。	2.5Y8/2 灰白色	良 軟質	口縁～底部の一部に煤付着（灯明皿）。
10	SX4004	土師器	皿A	-	13.0 1.7	1/8	「て」の字状口縁	e	ナデ	粉性。赤色粒を中量，雲母を微量含む。	2.5Y8/2 灰白色	良 やや硬質	
11	SX4004	土師器	皿A	-	13.4 1.5	口縁 1/4	B	e	ナデ	やや粉性。雲母を微量含む。	2.5Y7/2 灰黄色～2.5Y8/2 灰白色	良好 やや硬質	
12	P674	土師器	小椀	-	10.5 2.85	ほぼ完形	C	e	ナデ	やや精良。石英・石粒を少量含む。	内面：10YR7/3・7/4 にぶい黄橙色 外面：10YR8/2 灰白色～10YR8/3 浅黄橙色	良好	口縁部に煤付着（灯明皿）。
13	P674	土師器	皿A	Ⅲ	11.8 1.95	口縁 1/4	B	e	ナデ	やや良。最大4mmの石粒を含む。	10YR8/2 にぶい黄橙色～10YR7/2 灰白色	やや良好	
14	P674	土師器	皿A	Ⅲ	11.8 2.2	口縁 1/4	B	e	ナデ	やや精良。長石・石粒を微量含む。	10YR7/3～10YR7/4 にぶい黄橙色（やや明）	やや良好	
15	P674	土師器	皿A	Ⅲ	12.0 2.1	口縁 1/3	E	e	ナデ	やや精良。長石を微量含む。	2.5Y8/1～7/1 灰白色	やや良好	
16	P674	土師器	皿A	Ⅲ	12.4 2.0	3/4	E	e	ナデ	やや精良。雲母・チャートをごく微量含む。	内面：10YR8/2 浅黄橙色 外面：10YR8/3 浅黄橙色	良好	
17	P674	土師器	皿A	Ⅲ	13.0 2.25	2/5	E	e	ナデ	やや精良。長石・赤色粒を微量含む。	10YR8/1～8/2 灰白色	やや不良	

〔凡例〕
法量の単位は cm，（　）は現存の計測値をしめす。
法量区分・形態・外面調整手法の分類は本文（第Ⅳ章　遺物編）による。

(2)

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量区分	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
18	SX4001	土師器	ⅢA	Ⅲ	10.45 1.9	ほぼ完形	「て」の字口縁	e	ナデ	やや精良。やや粉性。雲母を微量含む。	2.5Y7/3 浅黄色	良好 硬質	
19	SX4001	土師器	ⅢA	Ⅲ	10.3 1.8	完形	「て」の字口縁	e	ナデ	やや精良。やや粉性。雲母・チャートを微量含む。	2.5Y7/3 浅黄色	良好 硬質	
20	SX4001	土師器	ⅢA	Ⅲ	10.5 1.8	完形	「て」の字口縁	e	ナデ	やや精良。やや粉性。雲母を微量含む。	2.5Y7/3 ～ 2.5Y8/3 淡黄色	良好 硬質	
21	SX4001	土師器	ⅢA	Ⅲ	10.45 1.85	完形	「て」の字口縁	e	ナデ	やや精良。やや粉性。雲母・長石を微量含む。	2.5Y7/2 灰黄色	良好 やや軟質	
22	SX4001	土師器	ⅢA	Ⅲ	10.9 2.0	ほぼ完形	「て」の字口縁	e	ナデ	やや精良。やや粉性。雲母・石英微量含む。	表面：2.5Y7/3 浅黄色，断面：7.5YR7/4 にぶい橙色	良好 硬質	
23	SX4001	土師器	ⅢA	Ⅱ	13.4 2.5	完形	D	二段ナデ手法	ナデ	やや精良。やや粉性。雲母・石英・長石・チャートを少量含む。	2.5Y7/2 灰黄色	良好 やや硬質	
24	1T1E	瓦器	椀	－	14.8 (3.9)	口縁 1/6	口縁端部は丸くおわる	口縁上部にヨコ方向のミガキのちナナメ方向の粗いミガキ	ヨコ方向のミガキ	やや精良。粉性。石粒を微量含む。	表面：N3/0 暗灰色～N4/0 灰色（やや黄色） 断面：N8/0 灰白色～2.5Y8/1 灰白色	良 軟質	楠葉形。口縁部内面に1条の凹線あり。
25	2A1P	瓦器	Ⅲ	－	10.4 2.5	1/4	口縁は直線的に立ち上がり，端部は丸くおわる。	ミガキ。底部放射状を呈するユビオサエ。	見込部粗いミガキのち口縁部をヨコ方向のミガキ	精良。黒色粒をごく微量含む。	外面：N5/0 灰色・内面：N6/0 灰色，断面：5Y7/1 灰白色	良	楠葉産
26	0T2F	青磁	椀	－	底径 5.1 (3.1)	底部 1/4	底部削り出し輪高台	底部ケズリ	施釉のため不明	精良。	N8/0 灰白色 釉：緑がかる	良	高台内にしっぺい痕あり。

瓦観察表

種別	グリッド 遺構名 層位	残存	重量	凸面調整	凹面調整	胎土	色調	焼成	備考
平瓦	1D1H SR0001 北肩	−	142g	板状のものによるナデ消し。	剥離のため不明	長石を少量，石英・黒色粒を微量含む。	表面：N7/0 灰色，断面：10Y7/1 灰白色	やや良好	
軒平瓦 狭端左	1D1H SX820 Ⅰ・Ⅱ３層	19 × 9	530g	板状のものでナデ消し。指頭圧痕あり。	布目痕。経緯５本/1cm。側縁付近面取りあり。	長石・黒色粒を少量，石英を微量含む。	表面：N3/0 暗灰色，断面：10YR7/2 にぶい黄橙色	やや不良	狭端面に布目あり。
軒丸瓦 当	1B1S P600	11 × 9	304g	ナデ消し	布目痕。経緯７本/1cm	長石・石英・砂粒を多量含む。	表面：10BG3/1 暗青灰色，断面：5Y7/1 灰白色	やや良好	
軒丸 瓦当	1C0Y SD655	6.5 × 3	44g	剥離のため不明	剥離のため不明	長石・石英・砂粒を多量含む。	表面：10BG3/1 暗青灰色，断面：N8/0 灰白色	やや不良	
軒平瓦	1K1C SD655	13 × 11.5	454g	ナデ？	摩滅のため不明	砂粒をやや多量，長石・黒色粒を少量，石英を微量含む。	表面：10BG4/1 暗青灰色，断面：2.5Y7/2 灰黄色	やや不良	
平瓦	1B1N 1B1O	9 × 9.5	306g	板状のものによるナデ消し。	布目痕。経緯８本/1cm。側縁付近面取りあり。	黒色粒を少量，長石・石英を微量含む。	表面：5B5/1 青灰色，断面：5Y8/1 灰白色	良	
軒丸 瓦当	0U2G SD5056	5 × 3	29g	不明	不明	長石・石英を微量含む。	10Y8/1 灰白色	不良	
軒丸瓦	1N1K SD1646	12 × 10	344g	ナデ	布目痕。経緯８本/1cm	長石・石英・黒色粒・砂粒を多量含む。	表面：10BG3/1 暗青灰色，断面：N8/0 灰白色	やや良好	
軒平瓦 側縁	1D1H SX820 Ⅰ・Ⅱ３層	12 × 9	312g	ナデ	布目痕。経緯６本/1cm。側縁面取りあり。一部にスリ消しあり。	長石・黒色粒を少量，石英を微量含む。	表面：N4/0 灰色，断面：10YR7/2 にぶい黄橙色	やや不良	
広端左 含む	1I1L	29 × 15	750g	縦縄タタキ。11本/3cm。	布目痕。経緯７本/1cm。側縁面取りか？	黒色粒を少量，長石・石英を微量含む。	表面：10BG4/1 暗青灰色，断面：10Y8/1 灰白色	やや不良	
不明	1K1F SD655	10 × 10	322g	ナデか？	布目痕。経緯10本/1cm。	長石・石英・黒色粒を微量含む。	5Y8/1 灰白色	やや良好	
側縁含む	南北部 SD4200 最下層	15 × 4.5	114g	剥離のため不明	不明。側縁面取りあり。	長石・黒色粒を微量含む。	表面：10BG3/1 暗青灰色，断面：7.5Y7/1 灰白色	良	
軒丸 瓦当	1P1F SX550	7 × 3	35g	瓦当裏面に接合痕あり。	不明	長石・黒色粒を少量，石英を微量含む。	表面：10G5/1 緑灰色，断面：5Y8/1 灰白色	良	
平瓦？	1K1D SD655	6.5 × 7	95g	板状のものによるナデ。	剥離のため不明	長石・黒色粒を少量，石英を微量含む。	表面：10BG3/1 暗青灰色，断面：10GY6/1 緑灰色	やや良好	
平瓦？	1K1D SD655	3.5 × 2.5	11g	不明	不明	長石・黒色粒を少量，石英を微量含む。	表面：N5/0 灰色，断面：10Y7/1 灰白色	やや不良	
軒平瓦	1B1N 1B1O	13 × 15	780g	ナデか？一部に指頭圧痕あり。	布目痕。経緯６本/1cm。	長石・石英・黒色粒・雲母を少量含む。	2.5Y6/2 灰黄色	良	法通寺
軒丸 瓦？	0Y1H SR4200 砂礫層	11.5 × 8	280g	剥離のため不明	スリ消し	長石を多量，石英・雲母を少量，黒色粒を微量含む。	表面：2.5Y4/1 黄灰色，断面：2.5Y6/1 黄灰色	良	
軒平 瓦？	0U1H SR4200 砂礫層	−	164g	ナデか？	布目痕。経緯６本/1cm。	黒色粒をやや多量，長石・石英を少量含む。	表面：5BG4/1 暗青灰色，断面：10YR6/4 にぶい黄橙色	良	
軒平 瓦？	1C1H SR4200 砂礫層	−	124g	縦縄タタキ。８本/3cm。全体にナデ。	布目痕は認められるが摩滅のため経緯不明。	雲母を少量，長石を微量含む。	表面：5B3/1 暗青灰色，断面：5Y7/1 灰白色	良	
軒平 瓦？	1D1H SR0001 北肩	−	142g	板状のものによるナデ消し。	剥離のため不明	長石・黒色粒をやや多量，石英を少量含む。	表面：10Y7/1 灰白色，断面：2.5Y7/1 灰白色	やや良好	

ＳＲ 4200 東西部　最上層出土土器

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量区分	口径器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
1	0Y1H	緑釉陶器	椀	－	20.4 (5.9)	口縁部 1/10 底部完形	口縁端部外反し丸くおわる。高台A。	ミガキ	ミガキ	やや精良。	2.5Y8/2 灰白色～2.5Y8/4 淡黄色	やや良	

ＳＲ 4200 東西部　砂礫層上層出土土器

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量区分	口径器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
2	0U1H	土師器	高杯	－	脚部径約 4.4 (6.6)	脚部上半	面取り８分割	ケズリ	未調整	精良。やや粘性。雲母を少量，石英・赤色粒・長石を微量含む。	10YR8/3 浅黄橙色（黄白味が強い）	良好	内面にしぼり痕がのこる。
3	0W1G 0W1H 0X1H	須恵器	盤	－	底径 12.4 (7.1)	底部 1/3	平底で口縁部は直線的に大きく開く。	ロクロナデ。底部回転糸切り痕	斜め方向のナデ	精良。粉性。長石・石英をごく微量含む。	表面：5Y7/1 灰白色，断面：7.5Y7/1 灰白色	やや良 軟質	
4	0X1H	須恵器	壺L	Ⅲ	6.0 (4.9)	口頸部ほぼ完形	口縁端部はやや内側に折れ，上端に面をなす。	ロクロナデ	ロクロナデ	精良。やや粘性。長石・石英をまばらに含む。	表面：5B5/1 青灰色，断面：2.5YR6/1 赤灰色	良好 極めて硬質	内面上半と外面の一部に自然釉付着。
5	0Y1H	須恵器	壺L	Ⅰ	推定 9.4 (6.1)	口頸部 9/10（口縁端部欠損）	－	ロクロナデ	ロクロナデ	やや粗粒。砂質。長石・石英を多量含む。	表面：N6/0 灰色～N5/0 灰色，断面：N5/0 灰色	良 硬質	口縁部付近に自然釉付着。
6	0X1H	須恵器	壺L	Ⅲ	5.2 (5.2)	口頸部 7/10	口縁端部は上方と下方に突出する。	ロクロナデ	ロクロナデ	精良。やや粘性。黒色粒をやや多量，長石を微量含む。	表面：N 6/0 灰色，断面：N5/0 灰色	良好 硬質	頸部に自然釉付着。
7	1A1H	須恵器	壺L	－	底径 6.6 (2.2)	底部 1/3	撥形高台	ロクロナデ。底部ヘラキリのちロクロナデ。	ロクロナデのち一部に粗いナデ	精良。長石をごく微量含む。	表面：N 5/0 灰色，断面：10YR3/2 暗赤褐色	良好 極めて硬質	高台外面の一部に自然釉付着。
8	0S1H	須恵器	壺G	－	4.9 (2.2)	底部完形	A	ロクロナデ。底部回転糸切り痕。	ロクロ水挽き	やや精良。やや粘性。長石を多量，チャートを微量含む。	表面：5B4/1 暗青灰色，断面：5R5/1 赤灰色	良好 硬質	
9	0Y1H	須恵器	壺M	－	4.0 9.8	口縁部 1/4 他は完形	A１	ロクロナデ。底部回転糸切り。	口頸部ロクロナデ	精良。やや砂質。長石少量含む。	N 5/0 灰色，釉：5Y4/4 暗オリーブ色	良好 硬質	部分的に自然釉付着。底部にヘラ記号あり。
10	0U1H	灰釉陶器	瓶C	－	底径 5.4 (7.8)	口頸部を欠く。他は完形。	平底。体部は末広がりに膨らむ。	ロクロヘラケズリのちロクロナデ。底部回転糸切り痕。	ロクロ水挽き	精良。黒色粒を少量，長石を微量含む。	2.5Y7/1 灰白色，釉：5Y6/3 オリーブ黄色～5Y5/3 灰オリーブ色	良好	肩部～胴部上半に施釉。

ＳＲ 4200 東西部　砂礫層出土土器

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量区分	口径器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
11	0V1H	土師器	杯A	Ⅰ	16.6 3.85	1/2	A	e－c	ナデ	精良。砂質。雲母，赤色粒・石英を微量含む。	10YR6/4 にぶい黄橙色（やや赤褐色）	良好 硬質	
12	0V1H	土師器	Ⅲ A	Ⅱ	15.3 2.25	1/6	C	c	ヨコナデ	やや精良。雲母・石英・長石・チャート・赤色粒を微量含む。	5YR6/6 橙色	やや 良好 硬質	
13	1B1H	土師器	Ⅲ A	Ⅰ	20.1 2.45	1/5	B	c／e	ナデ	精良。粉性。石英・雲母・長石を微量含む。	7.5YR6/6 橙色	良好 硬質	口縁部～底部煤付着。
14	0V1H	土師器	椀A	Ⅰ'	14.1 3.6	1/4	B	e－c	ナデ	精良。やや砂質。雲母を微量含む。	表面：2.5Y4/1 黄灰色～2.5Y3/1 黒褐色，断面：7.5YR6/4 にぶい橙色	良好 硬質	内外面全体に煤付着。
15	0Y1H	土師器	椀A	Ⅰ'	14.4 (3.6)	1/2	B	c	板ナデ	精良。やや砂質。雲母，石英・赤色粒を微量含む。	7.5YR6/4 にぶい橙色	良好 硬質	内面の広範囲と外面口縁の一部に煤付着。
16	0T1H	土師器	椀A	Ⅰ	13.5 (3.3)	1/3	B	c／e	板ナデ	精良。砂質。雲母・長石・チャート・石英を微量含む。	7. 5YR6/4 にぶい橙色	良好 硬質	

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量	口径器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
17	0U1H	土師器	食膳具	−	−	底部片	−	ヘラケズリ	ナデ	精良。やや砂質。雲母・長石・石英を微量含む。	7.5YR7/4 にぶい橙色	良好やや硬質	外面に墨書あり。「二」か。
18	0V1H	土師器	食膳具	−	−	底部片	−	ヘラケズリ	板ナデか	精良。砂質。雲母を微量含む。	10YR6/3 にぶい黄橙色	良好硬質	外面に墨書あり。「御」か。
19	1A1H	土師器	食膳具	−	−	底部片	−	ヘラケズリ	ナデ	精良。やや粘性。	7. 5YR6/6 橙色	良好硬質	外面に墨書あり。「直」か。
20	0V1H	土師器	食膳具	−	−	底部片	−	ユビオサエ	板ナデ	精良。砂質。雲母・石英を微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好やや硬質	内面に墨書あり。
21	0X1H	土師器	高杯	−	− (4.1)	杯部底部〜脚部上半	−	不明瞭	未調整	粗粒。長石・チャート・黒色粒・赤色粒を中量含む。	10YR8/3 浅黄橙色（黄味が強い）	やや良好やや脆質	脚部内面にしぼり痕がのこる。
22	0U1H	土師器	高杯	−	脚部径約 3.8 (16.3)	脚部	面取り７分割	ケズリ。裾部ミガキ	未調整	精良。粉性。雲母を少量，赤色粒・長石・石英を微量含む。	7.5YR7/4 〜 6/4 にぶい橙色	良好硬質	裾部内面の一部に煤付着。
23	1A1H 1D1K 1F1M 1I1V 他	土師器	甕A	II	25.2 (11.5)	口縁部 1/4	A	タタキのちハケメ。一部オサエ。	当て具痕。口縁タタキ工具によるヨコナデ。	精良。やや粘性。雲母を少量，赤色粒・石英・黒色粒を微量含む。	外面：5YR7/6 橙色・内面：10YR8/3 浅黄橙色	良好硬質	
24	0U1H 1A1H 1C1H	土師器	甕A	II	27.2 5.8	口縁部 1/3	A	無文タタキのちハケメ	無文当て具のちハケメ。口縁部タタキ工具によるヨコナデ。	精良。雲母を多量，長石・黒色粒を少量含む。	外面：10YR7/3 にぶい黄橙色・内面：7.5YR7/6 橙色，断面：10YR8/3 浅黄橙色	良好硬質	
25	0S1H	土師器	甕A	II	27.0 (19.4)	口縁の 1/4	A	タタキのちハケメ	当て具痕。口縁部タタキ工具によるヨコナデ。	やや精良。粉性。雲母・赤色粒を微量含む。	10YR7/4 にぶい黄橙色	やや良好	
26	1B1H	土師器	甕A	III	19.4 6.5	口縁部 6/7	A	無文タタキのちハケメ	無文当て具のちハケメ。口縁部タタキ工具によるヨコナデ。	精良。砂質。雲母を多量，長石・石英・黒色粒・赤色粒を中量含む。	7.5YR7/4 にぶい橙色〜10YR7/4 にぶい黄橙色	良好硬質	口縁の一部に煤付着。
27	0V1H 1B1H	須恵器	杯A	II	13.4 4.9	2/5	丸みをもって内湾する口縁	ロクロナデ。底部ヘラキリのち粗いナデ。	ロクロナデ	精良。砂粒をほとんど含まない。	外面：N2/0 黒・内面：5Y2/1 黒・2.5Y7/2 灰黄色，断面：2.5Y7/2 灰黄色	良好	
28	0U1H 0W1H 0Y1H	須恵器	杯E？	−	底径 7.8 (3.5)	底部 3/4	−	口縁部下半〜底部ロクロヘラケズリ，上部ナデ	ロクロナデのち見込に不定方向のナデ	精良。砂質。長石を微量含む。	外面：5Y6/1 灰色・内面：10YR3/2 黒褐色，断面：5Y7/1 灰白色	良好硬質	
29	0W1H 1B1H	須恵器	杯B	II	底径 11.6 (1.2)	底部 2/5	−	底部ヘラキリのち粗いロクロナデ。	見込ロクロナデのち一定方向のナデ	精良。やや砂質。長石を少量含む。	外面：2.5Y5/1 黄灰色・内面：7.5Y6/1 灰色 断面：5Y6/1 灰色	やや良やや硬質	
30	0T1H	須恵器	杯B	III	12.2 (3.4)	口縁部 1/4	丸みをもって内湾する口縁	ロクロナデ	ロクロナデ	精良。砂質。長石を少量含む。	表面：5Y6/1 灰色，断面：10Y6/1 灰色	良やや硬質	口縁部に煤付着。灯明皿。
31	0V1H	須恵器	杯B	III	底径 7.8 (2.2)	底部 1/2	−	ロクロナデ。底部ヘラキリのち粗いロクロナデ。	ロクロナデ	精良。やや粘性。比重が高く重い。長石を微量含む。	表面：5B4/1 暗青灰色，断面：7.5R5/2 灰赤色	良好極めて硬質	口縁部外面に灰が被る。
32	0R1H 0W1H 1A1H 1D1I 他	須恵器	杯B	II	15.4 6.0	口縁部 1/2 底部ほぼ完形	直線的に外方へのびる口縁	ロクロナデ。底部ヘラキリのちオサエとロクロナデ	ロクロナデのち見込に一定方向のナデ	精良。やや砂質。長石をごく微量含む。	表面：2.5GY6/1 オリーブ灰色，断面：N6/0 灰色	良好硬質	螺旋状に 4 回転分の凹線あり。
33	0U1H 0W1H 0X1H 0Y1H	須恵器	杯B	II	14.9 5.65	1/2	直線的に外方へのびる口縁	ロクロナデ。底部ヘラキリ未調整	ロクロナデのち見込に一定方向のナデ	精良。やや砂質。チャートをごく微量含む。	外面：2.5Y2/1 黒色・内面：10YR5/3 にぶい黄褐色，断面：2.5Y8/2 灰白色	良好硬質	底部内面の一部二次的に黒色化。
34	0V1H 1C1H	須恵器	杯B	II	16.9 6.8	口縁部 1/8 底部ほぼ完形	直線的に外方へのびる口縁	ロクロナデ。底部ヘラキリのち粗いロクロナデ。	ロクロナデのち見込に不定方向のナデ	やや良。やや粗い砂質。長石をやや多量含む。	表面：5PB7/1 明青灰色 断面：5PB4/1 暗青灰色	良好極めて硬質	外面に自然釉のためテリがある。

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
35	0X1H 1B1H 1C1H	須恵器	杯B蓋	Ⅲ高	14.8 2.8	1/3	笠形。端部は下方に突出。	頂部ロクロヘラケズリ，下部ロクロナデ。	ロクロナデ中央部一定方向のナデ	やや良。やや粉性。長石を多量含む。	表面：7.5Y4/1 灰色 断面：7.5Y6/1 灰色	良好 極めて硬質	内面黒化。重ね焼きか。
36	0V1H	須恵器	壺L	Ⅲ	底径 6.5 (13.6)	口頸部以下ほぼ完形	球形の体部。台形高台。	頸部～肩部ロクロナデ体部ロクロヘラケズリ底部ヘラキリのちロクロナデとヨコナデ	頸部ロクロナデ	精良。砂質。石英・長石・チャートをやや多量含む。	7.5 Y 6/1 灰色（やや青味）	良好 硬質	
37	0U1H 0S0X 0S0W 1C1H	須恵器	壺M	－	底径 4.4 (4.7)	底部完形	E	ロクロナデ。底部回転糸切り痕。	ロクロ水挽きのちロクロナデ	精良。やや粘性。長石・黒色粒・チャートをごく微量含む。	表面：5Y6/1 灰色断面：5PB6/1 青灰色（やや青味あり）	良好 硬質	
38	0V1H	須恵器	壺M	－	底径 4.0 (3.5)	底部 1/2	F	ロクロヘラケズリのちロクロナデ。底部回転糸切り痕。	ロクロ水挽きとロクロナデ	良。やや砂質。長石・黒色粒を微量含む。	表面：N5/0 灰色，断面：2.5Y5/1 黄灰色	良好 極めて硬質	底部内面に黒色付着物あり。（漆の可能性あり）
39	0W1H	須恵器	壺G	－	底径 4.9 (16.25)	口頸基部以下完形	A	ロクロナデ。底部回転糸切り一部ぬぐい痕あり	口頸部ロクロ水挽き	やや粗粒。長石・砂粒を多量含む。	10Y8/1 灰白色	やや良 やや脆質	
40	0T1H	須恵器	壺	－	底径 8.2 (4.15)	底部 7/10	方形の高台	ロクロナデ。底部回転糸切り痕	ロクロ水挽きのちロクロナデ	良。やや粘性。長石少量含む。	表面：N4/0 灰色 断面：N5/0 灰色	良好 極めて硬質	
41	0R1H 0X1T 1E1N 1G1T 1I1V 他	須恵器	甕A	Ⅱ	22.0 (21.1)	1/8	口縁端部を内側上方と外側下方に突出。頸部の屈曲部で大きく肥厚。	タタキのちハケメ	同心円文当て具痕のちナデ	やや精良。やや粘性。長石少量含む。	N7/0 灰白色～N6/0 灰色	良好 極めて硬質	
42	0X1H	須恵器	杯身	－	11.5 (5.85)	2/5	－	上方ロクロナデ，下方ロクロヘラケズリ	ロクロナデ	良。やや粉性。長石を多量，石英を少量含む。	表面：5B5/1 青灰色～N6/0 灰色 断面：5PB5/1 紫灰色	良好 極めて硬質	
43	0Y1H	須恵器	杯身	－	12.65 5.05	完形	－	上方ヨコナデ底部ロクロヘラケズリ	ロクロナデのち見込に一定方向のナデ	粗粒。やや粉性。石英・長石を多量含む。	N5/0 灰色（青味がある）	良好 硬質	

ＳＲ 4200 東西部　最下層出土土器

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量区分	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
44	0W1H	土師器	Ⅲ A	Ⅱ	16.1 2.8	5/6	E	c	板ナデ	精良。粘性。雲母・チャート・石英を微量含む。	表面：10YR4/2 灰黄褐色 断面：7.5YR6/4 にぶい橙色	良好 硬質	内外面全体に煤付着。
45	0R1H 0S1H 0W1H	土師器	椀A	Ⅰ	13.3 (3.5)	1/3	E	c／e	ヨコナデ	精良。やや砂質。長石を少量，石英・雲母を微量含む。	表面：5Y7/1 灰白色 断面：5YR5/4 にぶい赤褐色	良好 硬質	
46	0W1H	土師器	食膳具	－	－	底部片	－	ユビオサエ	板ナデ	やや精良。やや粉性。雲母・長石・チャート・石英を微量含む。	10YR6/4 にぶい黄橙色	やや良好	内面に墨書あり。
47	0W1H	土師器	－	－	－	底部片	－	ケズリ	ナデ	精良。やや粉性。雲母を微量含む。	7.5YR6/4 にぶい橙色	良好 硬質	外面に墨書あり。
48	0V1G	土師器	－	－	－	底部片	－	ケズリ	ナデ	精良。やや砂質。雲母を微量含む。	7.5YR6/4 にぶい橙色	良好 硬質	内面に墨書あり。
49	0W1H	須恵器	杯A	Ⅱ	13.3 3.55	4/5	直線的に外方へのびる口縁	ロクロナデ。底部ヘラキリのち粗くナデ。	ロクロナデ	精良。やや砂質。雲母をごく微量含む。	外面：N2/0 黒・内面：10YR6/2 灰黄褐色，断面：7.5Y8/1 灰白色	良 やや硬質	外面と口縁内面が煤により黒色化。
50	0R1H 0S1H 0V1H 1A1H 1C1H	須恵器	杯B蓋	Ⅱ	15.4 (1.65)	2/5	端部は外側下方に突出する。	ロクロナデ。頂部ロクロヘラキリのち粗いナデ。	ロクロナデと一定方向のナデ	良。やや砂質。長石を微量含む。	表面：10Y7/1～N7/0 灰白色，断面：5Y7/1 灰白色	やや良 硬質	
51	0W1H	須恵器	平瓶	－	10.8 (6.55)	口縁部ほぼ完形	口縁端部に面をなす。	ロクロナデ	ロクロナデ	良。砂質。長石を多量含む。	表面：N4/0 灰色，断面：5Y7/1 灰白色	良好 やや脆質	

ＳＲ4200南北部　最上層・西肩出土土器

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量区分	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
52	1J1V	土師器	杯A	Ⅰ	16.5 3.5	1/2	B	e－c	ナデ	やや精良。やや砂質。雲母・石英・長石・チャートを微量含む。	10YR6/4 にぶい黄橙色	良好 硬質	
53	1J1V	土師器	杯A	Ⅰ	17.2 (3.55)	口縁の1/4	A	e－c	ナデ	精良。砂質。チャート・雲母をごく微量含む。	外面：N5/0 黒・内面：7.5YR6/4 にぶい橙色，断面：10YR6/2 灰黄褐色	良好 硬質	外面全体と内面の広範囲に煤付着。
54	1I1V 1J1V 1J1W 1K1U 1K1W	土師器	杯B蓋	Ⅱ	19.7 (3.25)	つまみを欠く以外はほぼ完形	縁端部下方内側に突出する。	ミガキ	板ナデ	精良。やや粘性。長石・石英・赤色粒・黒色粒を微量含む。	表面：5YR7/6～7.5YR7/6 橙色，断面：7.5YR7/4 にぶい橙色	良好 硬質	
55	1D1J 1E1J 1I1T 1I1U	土師器	Ⅲ A	Ⅰ	18.4 2.8	1/2	A	e	ナデ	精良。やや粉性。雲母・赤色粒・チャート・石英を微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好 硬質	部分的に煤付着。
56	1I1T	土師器		Ⅰ	20.5 2.85	1/2	A	c	ナデ	精良。粉性。雲母・石英・チャート・長石を微量含む。	10YR8/3 浅黄橙色	良好 硬質	内面の一部と外面の広範囲に煤付着。
57	1J1V	土師器	甕A	Ⅱ	26.4 (20.5)	口縁の2/5	A	タタキのちハケメ	無文当て具痕	精良。砂質。雲母を中量，長石を微量含む。	表面：10YR6/1～10YR5/1 褐灰色，断面：10YR8/2 灰白色	良好 硬質	外面の広範囲と内面に薄く煤付着。
58	1G1N 1G1O	須恵器	杯B	Ⅱ	18.0 6.8	2/5	直線的に外方へのびる口縁	ロクロナデ。底部ヘラキリのちロクロナデ。	ロクロナデ	良。砂質。長石・石英・黒色粒をやや多量含む。	外面：2.5YR4/1 赤灰色・内面：5Y6/1 灰色，断面：5Y6/1 灰色	良好 硬質	体部外面に薄く灰が被る。
59	1J1V	須恵器	杯B	Ⅲ	16.4 5.6	2/5	直線的に外方へのびる口縁	ロクロナデ。底部ヘラキリのち粗くロクロナデ。	ロクロナデと粗い一定方向のナデ	良。やや砂質。白色粒を多量含む。	表面：N6/0 灰色，断面：2.5Y6/2 灰黄色	良好 硬質	高台底に糸，籾殻痕および切り込みあり。
60	1F1L	須恵器	杯B蓋	Ⅲ低	14.0 (1.2)	2/5	縁部下端わずかに突出	ロクロナデ。頂部ロクロナデ。	ロクロナデ	精良。やや粉性。長石を微量，チャート・石英をごく微量含む。	表面：N6/0 灰色，断面：N7/0 灰白色（やや灰背色気味）	良好 硬質	焼け歪みが著しい。
61	1F1L	須恵器	壺M	－	4.1 (5.8)	口縁部～体部上部3/5	EかF	ロクロナデ	ロクロナデ。	良。やや砂質。長石を少量含む。	表面：N6/0 灰色，断面：N7/0 灰白色（暗背灰色気味）	良好 硬質	口縁部焼け歪みが目立つ。
62	1I1Y 1J1U	須恵器	甕B	－	17.0 44.9	ほぼ完形	口縁端部は外方に突出し，上方に面をなす。	タタキのち体部上部にハケメ。	同心円文	やや精良。白色粒を微量含む。	表面：N7/0 灰白色～N6/0 灰色，断面：7.5YR3/1 黒褐色	良好	口縁部～体部上部の1/2程に灰が被る。
63	1J1V	須恵器	壺	－	10.9 (4.55)	口縁部1/3	口縁端部は先すぼまりにおわる。	ロクロナデおよび突帯ハリツケナデ。	ロクロナデ	精良。やや粉性。長石を微量，石英をごく微量含む。	表面：N7/0 灰白色」断面：5R5/1 赤灰色	良好 硬質	2条の突帯を巡らせ，その間に櫛状原体で波状文を施す。

ＳＲ4200南北部　砂礫層上層出土土器

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量区分	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
64	1I1T 1I1Y	土師器	Ⅲ A	Ⅰ	19.1 2.65	1/2	A	e－c	ナデ	精良。やや粉性。赤色粒・雲母を微量含む。	2.5Y8/2 灰白色	良好	
65	1D1J	土師器	Ⅲ A	Ⅱ	16.5 2.3	1/4	C	c／c'	板ナデ	精良。やや粉性。雲母・チャート・石英・長石を微量含む。	外面：10YR5/2 灰黄褐色 内面：7.5YR6/6 橙色	良好 硬質	口縁端部外面に煤付着
66	1G1P	土師器	椀A	Ⅰ	13.9 3.45	完形	B	c	ナデ	精良。石英・長石を少量，赤色粒を微量含む。	7.5YR7/4 にぶい橙色	良好 硬質	口縁部内外面上半に煤付着。
67	1D1K 1E1K	土師器	食膳具	－	底径 6.1 (1.8)	底部 3/4	長方形の高い高台が付く。	不明瞭	不明瞭	精良。やや砂質。長石を少量，石英・雲母・赤色粒を微量含む。	5YR6/6 橙色	良好	搬入土器
68	1D1J	土師器	高杯	－	脚部径約 3.5 (8.1)	杯部底部～脚部	面取り6分割。脚部ほぼ直線的。	ケズリ	脚部未調整裾部ミガキ	精良。雲母・長石・黒色粒・赤色粒・石英を少量含む。	10YR6/3 にぶい黄橙色（灰褐色気味）	良好 硬質	

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
69	1I1T 1I1U	土師器	甕 A	Ⅱ	27.0 (12.2)	口縁の1/4	B	タタキのちハケメ	無文当て具のち上部を除き細いハケメ。口縁部タタキ工具によるヨコナデ。	精良。粉性。雲母を多量，黒色粒を少量，長石を微量含む。	10YR8/3 浅黄橙色	良好 硬質	体部内外面煤付着。
70	1D1J	須恵器	壺 K	－	6.3 19.3	完形	肩部が張り後をなす	ロクロナデ。底部回転糸切り痕。	頸部ロクロナデ	精良。やや粘性。長石・黒色粒・を微量含む。	N7/0 灰白色	良好	部分的に自然釉付着。
71	1D1J 1D1K 1E1K	須恵器	壺 G	－	底径 5.4 (8.3)	底部～体部 1/4	Aに類似	ロクロナデ。底部回転糸切り痕。	ロクロ水挽き	良。やや粉性。黒色粒やや多量，長石微量含む。	表面：2.5Y8/1 灰白色，断面：10Y7/1 灰白色	やや不良 軟質	
72	1D1K	須恵器	壺 M	－	4.0 9.9	ほぼ完形	D	ロクロナデ。体部下方はロクロヘラケズリ。底部回転糸切り痕。	頸部ロクロナデ	やや良。やや砂質。長石を中量，石英・チャートを微量含む。	表面：N 6/0 灰色，断面：N5/0 灰色	良好	
73	1F1K	須恵器	壺 M	－	3.6 10.0	ほぼ完形	A	ロクロナデ	頸部ロクロナデ	良。粘性があり半磁胎質。長石をごく微量含む。	表面：N 6/0 灰色，断面：N7/0 灰白色	良 極めて硬質	口頸部内面および外面，体部外面の大半に自然釉付着。
74	－	須恵器	壺	－	底径 7.4 (5.0)	底部 4/5	－	ロクロナデのち一部ロクロヘラケズリ	ロクロ水挽き	精良。長石を微量含む。	表面：7.5YR6/4 にぶい橙色～5YR4/3 にぶい赤褐色，断面：5YR6/4 にぶい橙色	良好	胴部外面の一部に自然釉付着。

SR 4200 東西・南北両部　砂礫層出土土器

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量区分	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
75	0W1H 1J1V	土師器	甕 A	Ⅳ	14.3 (13.0)	口縁の2/5	A	タタキのちハケメ	無文当て具のち一部ヨコナデ口縁部タタキ工具によるヨコナデ	精良。粘性。黒色粒・雲母・石英・長石を少量含む。	2.5Y7/2 灰黄色	良好 硬質	底部内外面炭素吸着。
76	0X1H 1B1H 1C1H 1E1K	須恵器	杯 B	Ⅱ	15.7 5.9	1/2	直線的に外方へのびる口縁	ロクロナデ。底部ヘラキリのち一部ロクロナデ	ロクロナデのち見込に一定方向のナデ	精良。やや砂質。長石をごく微量含む。	外面：N5/0 灰色・内面：10YR5/1 褐灰色（やや暗），断面：N6/0 灰色	良好 硬質	底部焼け歪みが著しい。口縁外面二次的な火を受ける。
77	1A1H 1D1H 1D1I 1F1K	須恵器	杯 B	Ⅱ	15.4 5.8	1/3	丸みをもって内湾する口縁	ロクロナデ。底部ヘラキリのちナデ。	ロクロナデ	やや精良。やや粉性。長石を少量含む。	外面：N5/0 灰色・内面：N6/0 灰色，断面：7.5YR6/2 灰褐色（やや赤）	良好 極めて硬質	底部に炭付着。硯に転用か。ヘラ記号あり。
78	0U1H 1E1J	須恵器	杯 B	Ⅲ	13.0 3.4	底部の1/2および口縁の一部	直線的に外方へのびる口縁	ロクロナデ。底部ヘラキリのち粗いロクロナデ。	ロクロナデ一部ロクロ水挽き痕のこる	良。砂質。石英・長石を多量含む。	5Y7/1 灰白色（やや白色）	やや良	底部に墨書あり。
79	0T1H 0W1H 0X1H 1C1H 1F1L	須恵器	壺 L	－	底径 8.0 (13.7)	頸基部以下 2/5	撥形高台	ロクロナデ。底部回転糸切り痕。	ロクロ水挽き	精良。やや粉性。長石をやや多量，石英をごく微量含む。	表面：N5/0 灰色，断面：5PB6/1 青灰色	良好 硬質	胴部外面，底部内面に自然釉。胴部内面の一部に黒色付着物。
80	0T1H 0Y1H 1E1K 1F1K 1F1L	須恵器	壺 M	－	4.8 (8.5)	頸基部以下 2/5	B	ロクロナデ。底部回転糸切り痕。	ロクロ水挽き	精良。やや粉性。長石を微量，石英をごく微量含む。	表面：5Y7/1 灰白色，断面：N7/0 灰白色	良好 極めて硬質	
81	0R1G 0W1H 1A1H 1E1I 1I1U 他	須恵器	平瓶	－	底径 11.6 (13.05)	底部の3/4 把手 1/2	台形高台	ロクロヘラケズリ。底部ロクロヘラキリのち一部ロクロナデ。把手ヘラケズリ。	ロクロナデ	精良。やや粘性。長石を微量含む。	表面：5B5/1 青灰色，断面：7.5R3/2 暗赤褐色	良好 極めて硬質	把手や体部の一部に自然釉が付着。内面に黒色付着物あり。
82	0V1H 0Y1H 1A1I 1D1H 1E1I 他	須恵器	甕	－	肩部最大径 29.7 底径 11.1	肩部の1/3 底部 1/4	長胴でやや肩が張る体部。平底。	タタキ	細同心円当て具のちナデ消し	精良。やや砂質。長石を多量含む。	内面：2.5Y4/1 黄灰色・外面：10YR4/1 褐灰色，断面：2.5Y7/2 灰黄色・N6/0 灰色	良	肩部外面に自然釉付着。内面に黒色付着物あり。

SR 4200 南北部　砂礫層出土土器

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量区分	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
83	－	土師器	杯A	I	18.6 4.15	1/2	A	e－c	ナデ	精良。やや粉性。雲母・赤色粒・石英を微量含む。	7.5YR6/4 にぶい橙色～5YR7/6 橙色（やや茶褐色）	良好 硬質	口縁の一部に煤付着。
84	1F1L	土師器	杯A	－	13.1 2.9	口縁の1/8	B	e	ナデ	やや精良。粉性。赤色粒・チャート・長石・石英・雲母を微量含む。	10YR6/4 にぶい黄橙色（やや灰白色）	やや良好 やや硬質	
85	1I1T	土師器	皿A	I	19.2 1.8	1/3	A	c	ナデ	精良。やや砂質。雲母・赤色粒・長石・チャートを微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好 硬質	見込に部分的に煤付着。
86	1D1J 1E1J 1F1K	土師器	皿A	I	19.4 2.7	1/4	A	c	板ナデ	精良。やや粘性。雲母・赤色粒・長石・チャートを微量含む。	7.5YR6/6 橙色（褐色気味）	良好 硬質	
87	1D1K 1E1K 1F1K	土師器	皿A	I	18.1 2.0	ほぼ完形	A	c／e	ナデ	精良。やや粉性。石英・雲母・赤色粒・チャートを微量含む。	7.5YR6/6 橙色	良好 硬質	
88	1G1P	土師器	椀A	I	13.2 3.65	1/2	C	c	板ナデ	精良。やや粘性。石英・長石を微量含む。	7.5YR6/4 にぶい橙色	良好 硬質	口縁の一部に煤付着。
89	1F1L	土師器	椀A	I	13.7 3.2	ほぼ完形	B	e－c	ナデ	やや精良。やや粘性。長石・石英・雲母・赤色粒を微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	やや良好	口縁の一部に煤付着。
90	1D1J 1E1J	土師器	壺E	－	10.0 (5.2)	口縁の1/4	口縁端部は外上方に折れ，丸くおわる。	ケズリのちミガキ	ヨコナデ	精良。やや砂質。雲母を多量，長石・赤色粒・黒色粒・チャート・石英を少量含む。	10 Y R 7/3 にぶい黄橙色	良好	口縁にわずかに煤付着。
91	1I1U	土師器	甕A	II	22.5 (20.5)	口縁の1/4	E	タタキのちハケメ	無文当て具とナデ	精良。やや粘性。雲母を多量，石英・長石・チャートを中量含む。	2.5 Y 7/2 灰黄色（淡褐色気味）	良好 硬質	外面に煤付着。
92	1I1T	土師器	甕A	II	26.0 (24.5)	3/4	A	タタキのちハケメ	当て具のちハケメ	やや精良。粉性。雲母を微量，赤色粒をごく微量含む。	2.5Y7/2 灰黄色	やや良	肩部外面に煤付着。内面下方に帯状に黒色付着物あり。
93	1D1J	土師器	甕A	IV	推定 14.4 (5.3)	口縁部1/2	Bか？	タタキのちハケメ	無文当て具痕	精良。やや粘性。雲母・黒色粒・長石・石英を少量含む。	10YR7/2 にぶい黄橙色（灰褐色気味）	良好 硬質	内面全体と外面部分的に煤付着。
94	1E1J	土師器	甕A	IV	15.6 (3.9)	口縁部1/4	A	ハケメ	無文の当て具のちハケメ口縁部タタキ工具によるヨコナデ	精良。粉性。黒色粒・赤色粒・長石を中量含む。	外面：N2/0 黒色・内面：10YR6/2 灰黄褐色	良好 硬質	外面の広範囲に煤付着。
95	1D1I 1D1J 1E1I	須恵器	杯A	II	13.8 3.8	1/3	直線的に外方へのびる口縁	ロクロナデ。底部ヘラキリのちナデとロクロナデ。	ロクロナデ	精良。やや砂質。長石・石英・黒色粒を少量含む。	表面：5Y8/1 灰白色，断面：10Y8/1 灰白色	やや不良 やや軟	底部に「井」の墨書あり。口縁外面上端に重ね焼き痕。
96	1E1K 1F1K	須恵器	杯A	II	13.6 3.1	1/4	直線的に外方へのびる口縁	ロクロナデ。底部ヘラキリのち粗いナデ。	ロクロナデ	精良。やや粉性。長石・黒色粒を中量含む。	表面：N6/0 灰色，断面：5Y6/1 灰色	良好 硬質	
97	1E1J 1E1K 1F1K	須恵器	杯B	III	13.0 4.3	1/3	外反する口縁	ロクロナデ。底部ヘラキリのち一部粗いナデ。	ロクロナデ	良。砂質。長石を多量，黒色粒を少量含む。	N5/0～N6/0 灰色（やや青色気味）	良好 硬質	見込に黒色付着物あり。
98	1D1I	須恵器	杯B	III	12.4 4.1	口縁部1/6 底部2/3	内湾して立ち上がり上半で外反する口縁	ロクロナデ。底部ヘラキリのち一部ロクロナデ。	ロクロナデ	精良。やや砂質。黒色粒を多量，長石をやや多量含む。	表面：N6/0 灰色，断面：5Y6/1 灰色～5Y7/1 灰白色	良好 硬質	外面の一部に自然釉付着
99	1B1H 1C1H	須恵器	杯B	III	底径 10.0 (1.5)	底部1/2	－	底部ヘラキリのちヨコナデ	ロクロナデ	良。やや砂質。半磁胎に近い。黒色粒をやや多量含む。	表面：5Y6/1 灰色～5Y7/1 灰白色，断面：5Y7/1 灰白色	良好	底部の広範囲に自然釉および灰が被る。見込に黒色付着物あり。
100	1E1J	須恵器	壺L	III	底径 6.0 (7.3)	頸基部以下ほぼ完形	やや扁平な体部。小さな台形の高台	ロクロナデ。底部ヘラキリ痕。	不明	良。やや粘性。長石を少量，黒色粒を微量含む。	表面：2.5YR4/4 にぶい赤褐色，断面：N7/0 灰白色	良好 硬質	肩部～体部外面の一部に自然釉付着。

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
101	1G1N 1G1S	須恵器	壺L	－	底径 8.0 (14.5)	頸基部以下 4/5	体部球形。高台撥形。	ロクロナデ。底部回転糸切り痕。	ロクロ水挽きのちロクロナデ	良。やや粉性。長石を微量含む。	表面：N5/0 灰色，断面：7.5R5/2 灰赤色	良好 硬質	
102	1D1I 1E1M 1F1L 1G1Q 他	須恵器	壺L	Ⅱ	底部 9.0 (9.0)	体部～高台 1/2	体部球形。高台撥形。	ロクロナデ。底部ヘラキリ。	ロクロ水挽き	良。やや砂質。長石を少量，石英をごく微量含む。	外面：N 6/0 灰色・内面：2.5Y6/1 黄灰色，断面：2.5Y7/1 灰白色	良好 硬質	体部外面に自然釉付着。
103	1J1Y 1K1Y	須恵器	壺L？	－	(4.45)	頸部	－	ロクロナデ	ロクロ水挽きとナデ	良。やや砂質。雲母・長石・黒色粒を微量含む。	N6/0 灰色	良好 硬質	内外面および断面にタール状の付着物あり。
104	1G1O- 1G1S	須恵器	壺M	－	底径 3.8 9.7	口縁部以外ほぼ完形	A	ロクロナデ。回転糸切り痕。	不明	精良。やや粉性。長石をごく微量含む。	表面：N4/0 灰色，断面：N6/0 灰色	良好	肩部付近に自然釉付着。胴部～肩部に部分的に黒色付着物あり。
105	1F1L	須恵器	壺M	－	4.4 (3.1)	口縁部 1/2 と頸部の一部	口縁端部面をなす	ロクロナデ	ロクロナデ	良。やや砂質。長石をやや多量含む。	表面：N5/0 灰色，断面：N6/0 灰色	良好 硬質	
106	1D1J	須恵器	壺M	－	4.5 (9.7)	ほぼ完形	A	ロクロナデ	頸部ロクロナデ	精良。砂質。長石を少量含む。	表面：5B5/0 青灰色，断面：N6/0 灰色	良好 極めて硬質	口頸部と胴部に部分的に自然釉付着。
107	1E1K	須恵器	壺G	－	底径 5.4 (17.8)	口縁部以外は完形	A	ロクロナデ。底部回転糸切り痕。	頸部ロクロ水挽きのち上部ロクロナデ	やや精良。やや粉性。長石・砂粒を多量，石英を微量含む。	表面：5Y7/1 灰白色，断面：2.5Y7/1 灰白色	やや不良 やや軟質	粘土片が器表に数ヶ所付着。
108	1D1J	須恵器	壺G	－	6.8 18.5	ほぼ完形	A	ロクロ水挽き。頸部ロクロナデ。底部回転糸切り痕。	頸部ロクロナデ	粗粒。やや粉性。長石・黒色粒を多量，チャートをごく微量含む。	7.5Y4/1 灰色（やや青色気味）	良好	
109	1D1K 1D1I	須恵器	壺G	－	底径 5.5 (15.6)	ほぼ完形（口縁部欠損）	A	ロクロナデ	ロクロ水挽き	やや粗粒。長石・赤色粒を多量含む。	表面：N5/0 灰色，断面：5R4/1 暗赤灰色	良好	外面全体に自然釉付着。
110	1D1J	須恵器	壺L	Ⅲ	6.7 (5.25)	口頸部完形	口縁端部は上方と下方に突出。	ナデ	ロクロナデ	良。やや粉性で粘りがある。黒色粒を少量，長石を微量含む。	表面：N5/0 灰色，断面：N4/0 灰色	良好 極めて硬質	全体的に自然釉付着。全体的に二次的な火を受ける。
111	1F1K	須恵器	壺L	Ⅱ	6.9 (6.3)	口頸部ほぼ完形	口縁端部は上方と下方に突出。	ロクロナデ	ロクロナデ	やや良。やや粘性。長石・砂粒を微量含む。	表面：5B6/1 青灰色，断面：2.5YR6/2 灰赤色	良好 硬質	
112	1D1J	須恵器	短頸壺	－	底径 12.4 (5.95)	底部 1/3	平底でまっすぐ立ち上がる体部	ロクロナデ	ロクロナデ	良。やや粉性。長石・黒色粒をごく少量，雲母をごく微量含む。	表面：5Y5/1 灰色，断面：5R6/1 赤灰色	良好 硬質	外面と底部内面に自然釉付着。
113	1A1H 1G1O	須恵器	平瓶	－	11.4 17.45	2/5	口縁端部外反し上方に面をなす。	体部～底部ロクロヘラケズリ。頸部ロクロナデ。	頸部ロクロナデ	非常に精良。半磁胎化して非常に粘性。黒色粒を少量含む。	表面：N7/0 灰白色，断面：2.5Y7/3 浅黄色	良好 極めて硬質	体部背面および口頸部内面に自然釉付着。
114	1D1K 1E1K	須恵器	平瓶	－	7.4 (5.15)	口縁部 2/5	口縁端部が平坦	ロクロナデ	ロクロナデ	精良。やや粉性。長石を少量含む。	表面：N4/0 灰色，断面：2.5YR4/3 にぶい赤褐色	良好 極めて硬質	外面の一部に灰を被り漆黒化。
115	1F1L	須恵器	平瓶	ミニチュア	底径 5.1 4.8	把手欠損，口縁部 1/6，他は完形	高台台形で端部が外側に突出。	ロクロナデ。底部ヘラキリのちヨコナデ。	注口部ロクロナデか	精良。砂質。長石・黒色粒を含む。	N5/0 灰色，釉：7.5Y4/2 灰オリーブ色	良好 硬質	
116	0S1I 0X1H 1C1G 1D1I 他	須恵器	甕A	Ⅲ	21.4 (6.7)	口縁部 1/2	口縁端部外方へ突出。	タタキのちナデ	細同心円文をナデ消す	やや精良。やや粘性。長石を少量含む。	表面：5Y6/1 灰色，断面：2.5Y7/1 灰白色	良好 硬質	口縁の一部に灰が被る。
117	1C1H 1D1H	灰釉陶器	壺L	－	8.0 17.3	2/5	口縁端部丸くおわる。高台外側に張る。	ロクロナデ	ロクロナデおよびナデ	やや粗粒。長石・石英を多量含む。	表面：7.5Y6/2 灰オリーブ色・N 7/0 灰白色，断面：N 6/0 灰色	良好 硬質	外面全体に施釉。肩部に凹線あり。

ＳＲ4200南北部　最下層出土土器

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量区分	口径器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
118	1K2B	土師器	杯A	I	16.6 (3.6)	1/4	B	e－c	ナデ	精良。砂粒を微量，雲母をごく微量含む。	10YR5/3 にぶい黄褐色	良好 硬質	
119	1I1Y	土師器	杯A	I	17.3 4.1	3/4	A	e－c	板ナデ	精良。やや砂質。雲母を微量含む。	7.5YR5/6 明褐色	良好 硬質	
120	1G1R	土師器	Ⅲ A	Ⅱ	16.6 2.5	1/3	B。外側に面をなす。	c／e	ナデ	精良。やや粉性。雲母を少量，石英・長石・赤色粒を微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好 硬質	見込の一部に煤吸着。
121	1B1H 1C1H 1E1J	土師器	高杯	－	18.4 (8.2)	口縁の1/4	口縁端部外反して丸くおわる。	不明	斜放射状暗文	粗粒。やや粉性。長石・石英・チャート・赤色粒・黒色粒・を中量含む。	7.5YR6/6～5YR6/6 橙色	良好 硬質	
122	1C1H	土師器	高杯	－	脚部径約4.6 (10.25)	杯部底部～脚部上半	面取り７分割	ケズリ	未調整	精良。砂質。雲母を少量，長石・石英・赤色粒・黒色粒を微量含む。	10YR7/2 にぶい黄橙色	良好 硬質	内面にしぼり痕がのこる。
123	1F1M	土師器	高杯	－	脚部径約4.5 (11.3)	脚部上半	面取り８分割	ケズリ	未調整	精良。やや粘性。雲母を少量，長石・黒色粒・赤色粒を微量含む。	7.5YR6/6 橙色 (赤色気味)	良好 硬質	
124	1G1Q 1G1R 1J1U	土師器	甕A	Ⅲ	17.6 (15.0)	口縁の1/3	B	ハケメ	当て具のちハケメ一部ナデ	精良。やや砂質。雲母を少量，黒色粒を微量含む。	内面：10YR4/2 灰黄褐色，断面：10YR8/2 灰白色	良好 硬質	外面全体に煤付着。内面も煤のため褐色化。
125	1I1U 1I1V	須恵器	壺L	Ⅱ	推定7.0 (6.0)	口頸部2/3	口縁端部は上方と下方に突出。	ロクロナデ	ロクロナデ	良。やや粉性で粘りがある。長石を少量，褐色粒・チャートをごく微量含む。	表面：N 6/0 灰色，灰被り部分：N3/0 暗灰色 断面：5R4/1 暗赤灰色（やや黒色）	良好 硬質	外面の1/2程に灰が被る。焚口の側は漆黒化。
126	1J1V 1J1W 1I1V 1I1W	須恵器	壺L	Ⅱ	7.5 (3.45)	口縁部1/4	口縁端部は上方と下方に突出。	ロクロナデ	ロクロナデ	やや良。やや粉性。長石を少量含む。	表面：N3/0 暗灰色，断面：5PB2/1 青黒色	良好 硬質	外面に自然釉付着。
127	1J1V 1J1W 1I1V 1I1W	須恵器	壺L	－	－ (5.15)	頸部1/8	－	ロクロ水挽き(のちナデか)	ロクロ水挽き	良。やや粉性。長石を少量，石英を微量含む。	表面：10Y5/1 灰色，断面：5Y7/1 灰白色	良好 硬質	外面に自然釉付着。

ＳＲ0001東西部　第１層出土土器

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量区分	口径器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
128	0T1I	土師器	皿A	－	9.8 (1.5)	口縁の3/4	「て」の字口縁	口縁部ヨコナデ。底部ユビオサエ。	ナデ	良。砂質。長石・石英・チャート・雲母を多量含む。	2.5Y8/2 灰白色・7.5YR7/4 にぶい橙色	良好	
129	0T1I	土師器	皿	－	10.4 2.15	ほぼ完形	口縁端部外反して丸くおわる。	二段ナデ	ナデ	良。砂質。	7.5YR7/4 にぶい橙色	良好	
130	1D1H 1E1I	須恵器	鉢D	－	底径11.5 (9.75)	底部～体部3/8	平底にやや屑の張る体部	ロクロナデ。底部回転糸切り痕。	ロクロナデのち一部ナデ	精良。やや粉性。長石を極微量含む。	表面：N6/0 灰色，断面：N7/0 灰白色	良好 硬質	内面に煤付着。
131	1C1G 1D1H	須恵器	壺	－	底径10.2 (4.9)	底部1/3	やや外側に張り出す台形の高台	ロクロヘラケズリ。底部回転糸切りのちナデ。	ロクロナデ	良。粘性。長石・チャートを多量含む。	表面：5B6/1 青灰色 断面：5YR6/2 灰褐色	良好 非常に硬質	高台に板状圧痕のこる。
132	0X1I	緑釉陶器	椀	－	底径7.8 (3.6)	底部1/2	高台E	ロクロナデとケズリ。底部ロクロヘラケズリ。	施釉のため不明	精良。	5B6/1 青灰色，釉：濃緑色	良	高台内を除き全面に施釉。
133	0T1I	緑釉陶器	椀	－	底径6.8 (1.7)	底部1/3	高台C	ミガキ	ミガキ	やや精良。長石を含む。	7.5GY7/1 明緑灰色，釉：灰色	良	底部外面を除き施釉。釉が銀化。
134	0X1I	青磁	椀	－	15.4 (2.3)	口縁部1/10	口縁端部は丸くおわる	施釉のため不明	施釉のため不明	精良。	N8/0 灰白色，釉：オリーブ色	良	口縁部全面施釉。越州窯系。
135	0X1I 0W1I	青磁	椀	－	底径10.2 (2.8)	底部1/3	小さな削り出し台高台	施釉のため不明	施釉のため不明	精良。	5Y7/1 灰白色，釉：オリーブ茶色	良	全面施釉。高台内に目跡あり。越州窯系。

136	0W1I	黒釉陶器	瓶	−	底径 7.8 (2.9)	底部 1/4	−	ロクロナデ	ロクロナデ	精良。	N8/0 灰白色	良	体部下半〜底部釉が流れる。底部外面目跡あり。

S R 0001 東西部　第２層出土土器

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量区分	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
137	0T1I	土師器	皿 A	Ⅱ	16.1 3.1	1/2	口縁端部丸くおわる。	二段ナデ	ナデ	精良。粉性。雲母・長石・石英を微量含む。	10YR6/4 にぶい黄橙色（やや赤色）	良好 やや硬質	
138	1C1I	土師器	高杯	−	脚部径 約 4.9 (5.7)	脚部下半	面取り７分割	ケズリ	未調整。裾部ヨコナデ	やや粗粒。砂質。石英・長石・雲母を中量，赤色粒を少量含む。	表面：5YR7/6 橙色，断面：10YR8/3 浅黄橙色	良好	
139	0W1I	土師器	高杯	−	脚部径 4.1 (9.1)	脚部	面取り８分割孔が途中で塞がる。	ケズリ	−	精良。砂質。雲母を多量，長石・赤色粒・黒色粒を微量含む。	10YR8/2 灰白色・7.5YR8/4 浅黄橙色	良好 やや軟質	
140	0W1I	須恵器	食膳具	−	−	底部片	−	ケズリ	ナデ	良。粘性。雲母・石英を少量，長石を微量含む。	2.5Y7/1 灰白色	良好 硬質	外面に墨書あり。
141	1D1I	須恵器	杯 A	Ⅱ	底径 7.3 (1.0)	底部 1/2	−	ヘラキリのち一部ナデ	ロクロナデ	精良。長石・石英を少量含む。	表面：5Y6/1 灰色，断面：5Y7/1 灰白色	やや良	
142	0W1I	須恵器	壺 L	−	底径 7.3 (4.65)	底部 1/4	−	ロクロナデ。底部回転糸切り痕。	ロクロ水挽き	精良。粘性。長石を多量含む。	表面：N5/0 灰色 断面：7.5YR4/2 灰褐色（やや青黒色）	良好	
143	0V1I	須恵器	壺 H	−	13.6 (4.8)	1/8	口縁端部上方に突出	ロクロナデ	ロクロナデ	良。やや砂質。長石を微量含む。	表面：2.5Y7/2 灰黄色，断面：2.5Y7/1 灰白色	良好	体部外面下方に煤付着。
144	0T1I 0T1J	須恵器	壺 L	−	底径 8.6 (3.9)	底部 1/3	大きな撥形高台	ロクロナデ。底部回転糸切り痕。	ロクロナデ	精良。長石を少量，角閃石をごく微量含む。	表面：2.5Y5/1 黄灰色，断面：7.5YR6/2 灰褐色	良好 硬質	胴部外面の一部に自然釉付着。
145		須恵器	壺 L	−	器高 (7.0)	頸部 4/5	−	ロクロナデ	ロクロナデ	やや良。長石をやや多量，黒色粒を少量含む。	表面：5Y7/1 灰白色，断面：2.5Y6/2 灰黄色	良 硬質	外面の一部に自然釉付着。
146	0W1I	須恵器	壺 L	−	底径 7.55 (2.45)	底部 1/2	やや外方に開く高い高台	ロクロナデ。底部回転糸切りのちロクロナデ。	ロクロ水挽きのち一部ナデ	精良。やや粉性。長石を少量含む。	N6/0 灰色	良好	底部外面の一部に自然釉付着。
147	1D1I	緑釉陶器	椀	−	底径 5.0 1.5	底部 1/3	高台 E	施釉のため不明	施釉のため不明	やや精良。	5Y7/1 灰白色，釉：濃緑色	良	
148	0R1I	灰釉陶器	手付瓶	−	− (4.8)	把手	球形の体部に把手がつく	施釉のため不明	ロクロナデ	やや精良。長石を微量含む。	5Y7/1 灰白色（やや黄色）釉：10Y5/2 オリーブ灰色	良好	把手部分は面取りをして貼り付ける。
149	0V1I	灰釉陶器	壺 L？	−	底径 7.1 (4.6)	底部 1/2	台形状高台	ロクロヘラケズリ	ロクロ水挽き	やや粗粒。黒色粒・白色粒を多量含む。	外面：7.5Y7/1 灰白色・内面：5Y6/1 灰色，断面：2.5Y8/1 灰白色，釉：10Y4/2 オリーブ灰色	良好	
150	0R1H 0S1I	灰釉陶器	壺	−	底径 8.4 (3.7)	底部完形	撥形高台	ロクロヘラケズリ。底部回転ヘラキリ。	ロクロ水挽き	精良。黒色粒をやや多量，長石をごく微量含む。	外面：5Y7/1 灰白色・内面：5Y6/1 灰色，断面：2.5Y7/1 灰白色，釉：7.5Y6/3 オリーブ黄色	良好	高台内線刻あり。
151	0Y1I	灰釉陶器	鳥紐蓋	−	− (5.05)	鳥頭部嘴を欠く	−	ヘラケズリのち刻線	−	精良。長石・黒色粒・茶色粒を含む。	表面：5Y6/2 灰オリーブ色，断面：2.5Y7/1 灰白色，釉：7.5Y5/3 灰オリーブ色	良好	
152	−	須恵器	杯身	−	10.9 3.05	1/3	受け部が退化	ロクロナデ	ロクロナデ	良。やや粉性。長石を多量，チャート・石英を少量含む。	表面：N6/0 灰色，断面：10YR7/4 にぶい黄橙色	良好 硬質	底部内面に黒色付着物あり。

S R 0001 東西部　第３層出土土器

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量区分	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
153	1D1H	灰釉陶器	Ⅲ	－	底径 7.8 (2.6)	6/7 口縁端部を欠く	高台 a	ロクロ水挽きとロクロヘラケズリ。底部ヘラキリのちロクロナデ。	施釉のため不明	精良。黒色粒を少量，雲母を微量含む。	N8/0 灰白色，釉：7.5Y6/2 灰オリーブ色	良好	三叉トチン痕あり。

S R 0001 北肩　出土土器

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量区分	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
154	1D1H	須恵器	壺 M	－	底径 4.1 (2.0)	底部 1/2	G	ロクロナデとヨコナデ。底部回転糸切り痕。	ロクロ水挽き	精良。やや砂質。	表面：10YR8/2 灰白色，断面：2.5Y8/1 灰白色	やや不良 やや軟質	

S R 0001 南北部　第２層出土土器

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量区分	口径 器高	残存率	形態	外面手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
155	1K1J	土師器	Ⅲ A	Ⅱ	15.3 (2.1)	1/2	B	c	ナデ	精良。砂質。雲母を多量，長石・石英・赤色粒を微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	
156	1K1J	須恵器	杯 B	Ⅲ	9.65 3.45	ほぼ完形	直線的に外方へのびる口縁	ロクロナデ。底部回転ヘラキリ。	ロクロナデ	良。砂質。長石を少量，石英をごく微量含む。	表面：N 6/0 灰色，断面：7.5Y7/1 灰白色	良好	口縁部外面に自然釉付着。
157	1L1N	須恵器	椀	－	底径 8.2 (2.75)	底部の 1/4	丸みをもって内湾する口縁	ロクロナデ。底部ヘラキリ。	ロクロナデ	精良。長石・白色粒を少量，チャートをごく微量含む。	表面：2.5GY7/1 明オリーブ灰色，断面：5GY7/1 明オリーブ灰色	良好	
158	1K1J	須恵器	盤 A	－	26.2 8.1	1/8	口縁端部外傾し上方にわずかに突出	ロクロナデ。底部ヘラキリ。	ロクロナデ	良。石英を多量，長石・白色粒をやや多量，黒色粒を少量含む。	表面：10YR6/1 褐灰色，断面：10YR7/2 にぶい黄橙色	良	内面に煤付着。
159	1K1J	須恵器	壺 L	I	底径 7.9 (11.75)	底部完形体部の一部	やや高い台形の高台	ロクロナデ	ロクロ水挽き	精良。粉性。石英・長石を微量含む。	表面：N5/0 灰色 断面：N6/0 灰色 (やや青色気味)	良好 硬質	
160	1K1I	須恵器	壺 M	－	底径 4.8 (2.2)	底部 1/2	H	高台部ヨコナデ。底部回転糸切り痕。	ロクロナデ	精良。やや砂質。長石を微量，石英をごく微量含む。	表面：N5/0 灰色 断面：N6/0 灰色 (青色気味)	良好	
161	1J1H 1K1I	緑釉陶器	Ⅲ	－	底径 6.5 (1.7)	底部 1/3	高台 c	ロクロナデ	施釉のため不明	精良。	10YR7/1 灰白色	良	全面施釉。釉が銀化。見込に重ね焼き痕あり。
162	1K1I 1K1J	緑釉陶器	Ⅲ	－	13.6 2.9	完形	高台 a	ロクロナデのちヘラミガキ。底部ケズリ。	ロクロナデ	良。長石をやや多量含む。	5PB4/1 暗青灰色，釉：暗緑色	良好	全面施釉であるが一部露胎。

S R 0001 南北部　第３層出土土器

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量区分	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
163	1K1P 1L1P	土師器	杯 A	I	17.6 (4.25)	1/10	B	c	ナデ	やや精良。長石・石英・チャート・赤色粒・雲母を微量含む。	7.5YR7/6 橙色	やや不良 やや軟質	
164	1K1I 1K1J	土師器	Ⅲ A	Ⅱ	15.2 2.2	1/3	E	c	ナデ	やや精良。砂質。赤色粒・雲母を微量含む。	10YR7/4 にぶい黄橙色	やや良好	内面に多数墨書あり。「子」の文字が判読できる。
165	1L1P	須恵器	Ⅲ A	Ⅲ	13.8 2.25	1/4	口縁部内湾して丸くおわる	ロクロナデ。底部ヘラキリ。	ロクロナデ	精良。黒色粒をやや多量，長石・白色粒を少量，雲母を微量含む。	表面：2.5Y6/1 黄灰色，断面：5Y7/1 灰白色	良	
166	－	須恵器	壺 M	－	頸部径 2.9 (4.55)	頸部～肩部(口縁端部欠損)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	精良。やや砂質。長石を微量含む。	表面：N5/0 灰色～5PB6/1 青灰色，断面：N6/0 灰色	良好 硬質	外面および口縁部内面に薄く自然釉付着。

167	−	須恵器	壺M	−	底径 3.8 (7.7)	底部完形 体部 1/2	G	ロクロ水挽き	ロクロ水挽き	精良。	5 B 5/1 青灰色	良	内面に黒色付着物あり。
168	0V1I	須恵器	不明	−		脚部片	縦方向の突帯を貼り付ける。	突帯部ナデか	ヨコナデか	良。長石を少量含む。	表面：2.5Y6/1 黄灰色・N5/0 灰色，断面：2.5Y8/1 灰白色	良好 やや軟質	瓦質
169	1J1I	灰釉陶器	椀	−	底径 6.3 (1.6)	底部完形	蛇の目状の貼り付け高台	ロクロナデ。底部ロクロヘラキリ。	ロクロナデ	精良。黒色粒・白色粒を少量，雲母を微量含む。	N8/0 灰白色，釉：5Y5/4 オリーブ色	良好	内面施釉。三叉トチン痕あり。底部「□守」の墨書あり。

条坊関連遺構出土土器

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量	口径 器高	残存率	形態	外面調整 手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
170	SD655	土師器	高杯	−	脚部径 4.9 (11.4)	脚部上半	面取り７分割	ケズリ	未調整	精良。雲母を多量，赤色粒・長石・石英・チャートを少量含む。	10YR8/4 浅黄橙色	良好 硬質	
171	SD655	土師器	甕B	−	推定 25.4 (5.7)	1/8	口縁端部は上方へ大きくつまみ上げる。	ナナメハケ	ヨコハケ	粗粒。砂質。長石・石英・雲母を多量含む。	表面 10YR5/2 灰黄褐色，断面 2.5Y8/1 灰白色	良	
172	SD655	黒色土器	杯A	−	18.95 (4.35)	口縁の 1/4	口縁端部外反して丸くおわる。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	精良。白色粒を少量，石英・長石を微量含む。	外面：5YR6/6 橙色・内面：5YR6/4 にぶい橙色，断面：7.5YR8/3 浅黄橙色	良好	黒色化していない。内面に暗文あり。
173	SD655	瓦器	椀	−	14.2 5.25	1/4	口縁端部やや端面をなす。高台高い三角形。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	良。黒色粒・雲母を少量含む。	表面：N4/0 灰色，断面：2.5Y8/1 灰白色	やや良	和泉形。
174	SD655	瓦器	椀	−	14.4 (5.0)	1/4	口縁端部丸くおわる。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	良。長石・雲母を微量含む。	表面：N4/0 灰色，断面：N3/0 暗灰色	良好	楠葉形。口縁端部内面に一条の沈線あり。
175	SD655	須恵器	杯A	Ⅲ	13.8 (3.6)	1/3	内湾して立ち上がり上半で外反する口縁	ロクロナデ。ヘラキリのちナデ。	ロクロナデ	精良。やや粉性。長石・赤色粒を微量含む。	2.5Y8/1 灰白色	良	
176	SD655	須恵器	杯A	Ⅲ	13.3 3.7	1/4	直線的に外方へのびる口縁	ロクロナデ。底部ヘラキリのちナデ。	ロクロナデ	やや精良。やや砂質。石英・雲母ごく微量含む。	外面：2.5Y7/2 灰黄色・内面：2.5Y8/1 灰白色，断面：2.5Y8/1 灰白色	良好 硬質	底部外面の一部に煤付着。
177	SD655	須恵器	杯B	Ⅲ	底径 7.9 (2.8)	底部 1/4	台形高台	ロクロナデ。ヘラキリのちナデ。	ロクロナデ	良。やや砂質。長石を微量，雲母をごく微量含む。	外面：10G6/1 緑灰色・内面：5Y6/1 灰色，断面：5YR6/3 にぶい橙色	良好	
178	SD655	須恵器	杯B	−	底径 9.0 (3.7)	底部 1/3	台形高台	ロクロナデ。ヘラキリのちナデ。	ロクロナデ	良好。粘性。長石を微量含む。	表面：5B6/1 青灰色，断面：7.5YR6/3 にぶい褐色	良好 硬質	
179	SD655	須恵器	椀	−	底径 9.4 (1.8)	底部 1/4	細い撥形高台	ロクロナデ。底部ロクロヘラケズリ。	ロクロナデ	良。やや砂質。長石を微量含む。	N7/0 灰白色	良好	
180	SD655	須恵器	壺G	−	5.45 16.8	ほぼ完形	A	ロクロナデ	頸部ロクロナデ	やや不良。長石をやや多量含む。	表面：N6/0 灰色，断面：5R5/1 赤灰色	良 硬質	外面の一部に灰が被る。
181	SD655	須恵器	壺M	−	4.2 9.0	ほぼ完形	G	ロクロナデ。回転糸切り痕。	頸部ロクロナデ	良。粉性。長石を少量含む。	表面：5GY5/1 オリーブ灰色，断面：N6/0 灰色	良 硬質	体部内面の一部に墨のような付着物。
182	SD655	須恵器	壺L	−	底径 7.3 (6.65)	底部 1/4	台形高台	ロクロヘラケズリ。底部ロクロヘラキリのちナデ。	ロクロ水挽き	良。やや砂質。長石を微量含む。	表面：5Y7/1 灰白色，断面：5Y6/1 灰色	良	
183	SD655	須恵器	壺L	−	7.2 6.3	底部の 1/3	台形高台	ロクロナデ。底部回転糸切り痕。	ロクロ水挽き	やや精良。粘性。長石をごく微量含む。	N7/0 灰白色	良好 硬質	

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
184	SD655	須恵器	壺L	-	底径 8.1 3.7	底部 1/4	台形高台	ロクロヘラケズリ、底部回転糸切り痕のち一部ナデ	ロクロ水挽き	やや精良。長石を微量含む。	N7/0 灰白色	良好 硬質	高台内の一部に自然釉付着。
185	SD655	須恵器	壺L	-	底径 11.0 (2.0)	底部 1/4	やや長い四角形の高台	底部ロクロナデ	板押えのちナデ	やや精良。粘性。長石を微量含む。	表面：N7/0 灰白色，断面：2.5YR6/2 灰赤色	良好 極めて硬質	底部外面に「一」の線刻あり。
186	SD655	須恵器	壺L	-	8.1 (6.3)	口頸部 3/4	口縁端部内傾する端面をなす	ロクロナデ	ロクロナデ	やや良。長石，石英を中量含む。胎土中のガラス質溶出。	N6/0 灰色	良	外面、内面の一部に自然釉付着。
187	SD655	須恵器	壺	-	底径 7.6 (9.6)	底部の 2/3	平底で長胴の体部	ロクロナデ，底部回転糸切り痕	ロクロナデ	やや精良。やや粉性。長石・石英を微量含む。	表面：N6/0 灰色，断面：7.5Y6/1 灰色	良好 硬質	
188	SD655	須恵器	甕	-	18.7 4.7	口縁部 1/3	口縁端部平坦面をなす。	口縁部ロクロナデ	口縁部ロクロナデ	良。やや砂質。長石を微量含む。	表面：N5/0 灰色，断面：5Y7/1 灰白色	良好 硬質	口縁端面に二条の沈線あり。
189	SD655	緑釉陶器	椀	-	底径 7.2 (2.2)	底部ほぼ完形	高台B	ヘラケズリのち高台部ミガキ	ロクロナデのち一部ミガキ	精良。	5Y5/1 灰色，釉：7.5Y5/2 灰オリーブ色	良 硬陶	施釉。
190	SD655	緑釉陶器	椀	-	底径 5.8 (2.0)	底部 1/4	高台A	底部ヘラケズリ	ヘラケズリとナデ	精良。	5Y6/2 灰オリーブ色	良 軟陶	全面施釉か。
191	SD655	緑釉陶器	椀	-	底径 8.8 (2.1)	底部 1/2	高台D	底部ヘラケズリのち一部ナデ	ロクロナデとミガキ	精良。	2.5Y7/1 灰白色，釉：10Y6/2 オリーブ灰色	良	全面施釉。
192	SD655	緑釉陶器	椀	-	底径 5.9 (1.4)	底部 1/3	高台D	底部ヘラケズリ	ヘラケズリとミガキ	精良。	5Y7/1 灰白色，釉：10Y6/2 オリーブ灰色	良 硬陶	
193	SD655	緑釉陶器	椀	-	底径 7.8 (3.5)	底部 1/3	高台D	ロクロナデ，底部ヨコナデ	ロクロナデのち一部ミガキ	精良。	5Y7/1 灰白色，釉：2.5GY7/1 明オリーブ灰色	良 硬陶	内面施釉。
194	SD655	緑釉陶器	皿	-	底径 8.0 (1.4)	底部 1/6	高台A	底部ヘラキリ	ロクロナデ	やや精良。	10YR8/4 浅黄橙色	良 軟陶	内面施釉。
195	SD655	緑釉陶器	皿	-	底径 6.6 (1.1)	底部 2/3	高台A	底部ケズリのちミガキか	ミガキ	精良。黒色粒を少量，長石を微量含む。	2.5Y8/2 灰白色，釉外面：7.5Y6/3 オリーブ黄色・釉内面：7.5Y6/3 オリーブ黄色	やや良	全面施釉。
196	SD655	灰釉陶器	皿	-	14.6 3.3	1/4	高台b	ロクロナデ，底部回転ヘラキリのちロクロナデ	ロクロナデ	やや精良。	5Y7/1 灰白色	良	口縁部内面の一部に釉がのこる。
197	SD655	灰釉陶器	耳皿	-	底径 5.8 (2.6)	高台部 1/5 口縁部一部	高台a	ヘラケズリのちナデ，底部回転ヘラキリ	ロクロナデ	精良。黒色粒をやや多く，長石を微量含む。	5Y7/1 灰白色，釉：2.5Y7/3 浅黄色	良	
198	SD655	灰釉陶器	壺	-	7.7 (3.1)	底部 1/4	台形高台	ロクロヘラケズリ	ロクロ水挽き	やや精良。	2.5Y7/1 灰白色	良	高台外面の一部に灰釉あり。
199	SD655	灰釉陶器	壺蓋	-	つまみ径 3.1 (2.4)	つまみ完形	宝珠形	ロクロナデ	ロクロナデ	やや精良。黒色粒を少量，長石を微量含む。	5Y7/1 灰白色，釉：5Y5/4 オリーブ色	良	つまみ上半に施釉。
200	SD656	土師器	杯A	I	16.2 (3.0)	1/6	B	c	ヨコナデ	良。粉性。石英・長石・赤色粒を少量，雲母をごく微量含む。	10YR8/2 灰白色	良 やや軟質	
201	SD656	須恵器	椀A	-	9.0 8.2	1/2	平底で筒形。	ロクロナデ，底部回転糸切り痕	ロクロナデ	良。砂質。長石を少量含む。	N7/0 灰白色	良	底部に線刻あり。

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量	口径 器高	残存率	形態	外面調整 手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
202	SD656	須恵器	杯B	Ⅱ	17.0 6.85	1/3	丸みをもって内湾する口縁	ロクロナデ, ロクロヘラキリのちナデ	ロクロナデのち見込にナデ	やや精良。粉性。長石を微量含む。	N6/0 灰色	良好 硬質	
203	SD658	黒色土器A類	杯A	−	19.3 5.0	1/5	口縁端部丸くおわる。	ケズリのちヘラミガキ	ヘラミガキ	精良。やや砂質。雲母を多量，長石・赤色粒を微量含む。	外面：7.5YR6/4にぶい橙色～10YR5/3 にぶい黄褐色	良好 硬質	内面に暗文あり。口縁，底部外面に部分的に煤付着。
204	SD658	須恵器	杯A	Ⅱ	12.4 3.4	1/2	内湾して立ち上がり上半で外反する口縁	ロクロナデ, 底部ヘラキリのちナデ	ロクロナデ	やや精良。砂質。黒色粒を少量，長石を微量含む。	5Y7/1 灰白色	良好 硬質	
205	SD658	須恵器	杯B	Ⅱ	14.7 4.8	1/3	直線的に外方へのびる口縁	ロクロナデ, 底部ヘラキリのちナデ	ロクロナデ	精良。やや砂質。長石を微量含む。	表面：N6/0 灰色，断面：2.5YR5/2 灰赤色	良好	体部外面に自然釉が付着。
206	SD658	須恵器	壺蓋	−	13.3 1.6	1/10	平らな頂部に直角に折れ曲がる縁部	縁部ロクロナデ	ロクロナデ	やや精良。粘性。長石を微量含む。	10Y7/1 灰白色	良好 硬質	両面に自然釉付着。
207	SD658	須恵器	壺N	−	底径 11.65 (12.9)	底部完形 体部の一部	平底	ロクロヘラケズリ	ロクロナデ	やや粗粒。粉性。長石・石英をやや多量含む。	表面：2.5Y7/1 灰白色，断面：10YR6/3 にぶい黄橙色	やや良	
208	SD658	須恵器	壺M	−	4.3 10.2	ほぼ完形	G	ロクロ水挽き，底部回転糸切り痕	頸部ロクロ水挽き	やや精良。粘性。長石を微量含む。	表面：N6/0 灰色，断面：10R5/2 灰赤色	良好 極めて硬質	外面の一部に灰が被る。
209	SD658	須恵器	壺M	−	4.4 10.95	ほぼ完形	G	ロクロナデ, 底部回転糸切り痕	頸部ロクロナデ	良。やや粉性。長石を微量含む。	5B7/1 明青灰色	良好 硬質	体部外面に灰が付着。
210	SD658	須恵器	平瓶	−	幅 1.9 厚さ 1.3	把手のみ	わずかに湾曲する。	ヘラケズリ	−	精良。粘性。長石をごく少量含む。	表面：5BG5/1 青灰色，断面：N7/0 灰白色	良好 極めて硬質	上面に自然釉が付着。
211	SD658	灰釉陶器	椀	−	底径 7.0 (1.4)	−	高台 a	底部ロクロヘラキリのちロクロナデ	施釉のため不明	精良。	2.5Y7/1 灰白色，釉：10Y5/2 オリーブ灰色	良	内面施釉。
212	SD658	須恵器	瓶	−	底径 5.6 (2.9)	底部 1/3	平底に下ぶくれの体部	ロクロナデ	ロクロ水挽き	微砂粒を均一に含む。	5Y7/1 灰白色，釉：7.5Y5/3 灰オリーブ色	良	底部内面と外面の一部に釉付着。
213	SD658	灰釉陶器	壺	−	− (3.5)	頸部～肩部	−	ロクロナデ	ロクロナデ	精良。	5Y7/1 灰白色，釉：7.5Y5/3 灰オリーブ色	良	外面に自然釉付着。
214	SD658	灰釉陶器	蓋	−	12.0 (5.0)	頂部を欠く 1/5	平らな頂部に直角に折れ曲がる長い縁部	縁部ロクロナデ	縁部ロクロナデ	精良。	5Y6/1 灰色，釉：7.5Y4/3 暗オリーブ色	良	外面施釉。
215	SD658	灰釉陶器	平瓶	−	−	把手取り付き部片	−	施釉のため不明	体部ロクロナデ	精良。	2.5Y7/1 灰白色，釉：7.5Y5/3 灰オリーブ色	良	外面施釉。
216	SD663	土師器	杯A	Ⅰ	15.6 (3.2)	1/6	B	e − c	ヨコナデ	良。粉性。雲母・石英・長石・赤色粒を微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好 硬質	内面の一部に煤付着。
217	SD663	土師器	杯A	Ⅱ	14.3 (2.4)	口縁部 1/2	B	e − c	ヨコナデ	良。粉性。雲母・長石・赤色粒を微量含む。	10YR7/2 にぶい黄橙色	良好 硬質	外面の一部に煤付着。内面に墨痕あり。
218	SD663	土師器	杯A	Ⅱ	13.8 (2.7)	1/4	Gか	e − c	ナデ	やや精良。粉性。長石・雲母・赤色粒をごく微量含む。	2.5Y8/2 灰白色	良好	
219	SD663	土師器	杯B	Ⅰ	21.9 6.0	1/2	B	e − c 底部ヘラケズリ	ナデ	やや精良。赤色粒・長石・石英・チャートを少量含む。	10 Y R 8/3 浅黄橙色	良好 硬質	外面の一部に煤付着。外面，底部に付着物あり。
220	SD663	土師器	椀A	Ⅰ	12.9 (3.1)	ほぼ完形	C	c	ヨコナデ	良。粉性。長石・チャート・石英を少量，雲母をごく微量含む。	2.5Y7/2 灰黄色	良 やや軟質	
221	SD663	土師器	杯	−	底径 8.9 (1.4)	底部 1/4	−	−	ロクロナデ	良。粘性。長石を微量含む。	5YR7/6 ～5YR6/6 橙色	良好 硬質	ロクロ土師器。
222	SD663	土師器	盤	−	底径 16.1 (5.3)	底部 1/3	口縁部直線的に広がる。	ケズリ	ヨコナデ	やや精良。やや粘性。雲母・長石・石英・赤色粒を少量含む。	5YR7/4 にぶい橙色	良好 硬質	

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
223	SD663	黒色土器	杯A	－	21.7 (4.7)	1/8	口縁部は丸くおわる	ミガキ	ミガキ	良。粉性。雲母を微量，長石をごく微量含む。	外面：10YR7/2にぶい黄橙色 内面：N3/0暗灰色	良好 硬質	外面部分的に煤付着。A類。
224	SD663	黒色土器	皿	－	14.8 2.2	1/6	口縁部外反して丸くおわる	不明瞭	ミガキ	良。粉性。長石・黒色粒を多量，石英を少量，雲母を微量含む。	外面：2.5YR7/4淡赤橙色 内面：2.5YR6/4にぶい橙色 内面黒色化部分：N3/0暗灰色	やや不良	いぶしが甘い。A類。
225	SD663	黒色土器	皿	－	底径 3.95 (1.05)	高台部 3/4	貼り付け高台	底部ヘラミガキ	ヘラミガキ	良。砂質。雲母・長石・石英を中量含む。	外面：2.5Y6/2灰黄色 内面：N3/0暗灰色	良好 硬質	高台内に「十」形の線刻あり。A類。
226	SD663	黒色土器	甕	－	18.6 (5.7)	口縁部 1/4	口縁端部外側にわずかに肥厚する	ミガキ	ハケメのちミガキ	良。砂質。長石を少量，石英を微量含む。	外面：2.5Y3/1黒褐色～2.5Y5/2暗灰黄色 内面：N3/0暗灰色	良好 硬質	A類。
227	SD663	須恵器	杯B	Ⅲ	11.1 3.2	1/4	直線的に外方にのびる口縁	ロクロナデ，底部ヘラキリ	ロクロナデ	良。砂質。長石を微量含む。	N7/0灰白色	良好 硬質	
228	SD663	須恵器	杯B	Ⅲ	9.4 (2.4)	底部1/2	台形高台	ロクロナデ，底部ロクロヘラキリのちナデ	ロクロナデのち底部ナデ	やや精良。粘性。長石を少量含む。	表面：5PB5/1青灰色，断面：5YR5/2灰褐色	良好	
229	SD663	須恵器	杯B	Ⅳ	11.8 4.1	口縁部1/8 底部1/3	上半が外反，下半が内湾する口縁	ロクロナデ，底部ヘラキリのちナデ	ロクロナデのち底部ナデ	やや精良。粘性。長石を少量含む。	表面：N6/0灰色，断面：5YR6/1褐灰色	良好 硬質	外面に自然釉付着。
230	SD663	須恵器	杯B蓋	Ⅳ	11.6 1.3	1/4	平坦な頂部に屈曲する縁部	ロクロナデ，頂部ヘラキリ	ロクロナデ	良。砂質。長石を中量含む。	表面：N5/0灰色，断面：2.5Y6/1黄灰色	良好 硬質	内面中央部黒色に変色。
231	SD663	須恵器	短頸壺	－	底径 10.65 (4.0)	底部1/2	平底	不明	不明	良。粉性。長石を微量含む。	2.5Y8/1灰白色	やや不良 軟質	
232	SD663	須恵器	壺A	－	19.9 (23.1)	底部1/7 体部1/4	大きな台形高台	ロクロナデとロクロヘラケズリ	ロクロ水挽き	良。砂質。長石を少量含む。	表面：N5/0灰色，断面：5R5/1赤灰色	良好	体部外面部分的に自然釉付着。
233	SD663	須恵器	長頸壺	－	底径 15.8 (2.4)	底部1/7	台形高台	底部ロクロヘラキリ	板押えのちナデ	やや精良。粘性。長石を微量含む。	N7/0灰白色	良好 非常に硬質	底部が黒色に変色。
234	SD663	須恵器	甕B	－	15.5 (4.8)	口縁部 1/4	口縁端部平坦面をなす。	頸部ロクロナデ	タタキのちヨコナデ	良。粘性。長石を多量，黒色粒をやや多量含む。	外面：5PB7/1明青灰色・内面：2.5GY5/1オリーブ灰色，断面：7.5YR6/2灰褐色	良好 硬質	口縁部内面と外面の一部灰が被る。
235	SD663	須恵器	甕A	－	24.8 (12.8)	口縁部 1/6	口縁端部上方と下方に突出	平行状タタキ	同心円文	やや精良。	N6/0灰色，釉：7.5Y5/3灰オリーブ色	良好	体部外面に灰を被る。
236	SD663	須恵器	杯身	－	9.1 (2.8)	1/4	底部が小さい。	ロクロナデ	ロクロナデ	良。やや粘性。長石を少量含む。	N7/0灰白色	良好 硬質	
237	SD663	緑釉陶器	椀	－	底径8.4 (1.8)	底部1/4	高台A	ヘラミガキ，底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	精良。	10YR8/2灰白色，釉：7.5Y6/3オリーブ黄色	良	全面施釉。
238	SD663	緑釉陶器	椀	－	底径6.9 (2.0)	底部1/3	高台A	ヘラミガキ	ヘラミガキ	精良。	2.5Y7/2灰黄色，釉：7.5Y6/3オリーブ黄色	良	底部を除き全面に施釉。
239	SD663	緑釉陶器	椀	－	底径6.0 (2.3)	底部完形	高台B	ヘラミガキ	ヘラミガキ	精良。	釉：7.5Y7/2灰白色	良	内外面施釉。
240	SD663	緑釉陶器	椀	－	11.6 3.1	1/4	口縁端部外反，高台A	ヘラミガキ	ヘラミガキ	精良。	10YR7/3にぶい黄橙色，釉：7.5Y5/3灰オリーブ色	良 硬質	内外面施釉。
241	SD663	緑釉陶器	椀	－	12.4 3.5	口縁部1/5 底部完形	口縁端部やや外反，高台A	ヘラミガキ，底部回転糸切り痕	ヘラミガキ	精良。	2.5Y8/2灰白色，釉：7.5Y4/1灰色	良	全面施釉。
242	SD663	緑釉陶器	椀	－	12.6 4.0	1/3	口縁端部やや外反，高台A	ヘラミガキ	ヘラミガキ	精良。	7.5Y7/1灰白色，釉：10Y7/2灰白色	良	内面施釉。外面にも施釉か。

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
243	SD663	緑釉陶器	皿	-	12.6 2.2	口縁部わずか 底部完形	口縁端部外反，高台A	ヘラミガキ。底部ヘラキリ。	ロクロナデ	精良。	2.5Y8/2灰白色，釉：10Y4/1灰色	やや不良	内外面に施釉。
244	SD663	灰釉陶器	椀	-	底径 6.8 (2.4)	底部 1/2	高台a	ロクロナデ	施釉のため不明	精良。	N7/0灰白色，釉：7.5Y5/2灰オリーブ色	良	内面施釉。
245	SD663	灰釉陶器	椀	-	14.8 (3.8)	口縁部 1/8	口縁端部外反	ロクロナデとロクロヘラケズリ	ロクロナデ	精良。	N7/0灰白色，釉：7.5Y6/3オリーブ黄色	良	内面施釉。
246	SD663	灰釉陶器	椀	-	16.4 (4.9)	口縁 部2/3 底部完形	口縁端部外反，高台a	ロクロナデ	ロクロナデ	精良。	5Y7/1灰白色，釉：7.5Y7/3浅黄色	良	内面施釉。
247	SD663	灰釉陶器	皿	-	14.4 2.7	口縁部わずか 底部 4/5	口縁端部外反，高台a	ロクロナデ。底部ヘラキリのちロクロナデ。	施釉のため不明	精良。	2.5Y7/1灰白色，釉：7.5Y6/2灰オリーブ色	良	内面施釉。

七町宅地内出土土器

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量区分	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
248	SD1902	土師器	Ⅲ A	Ⅱ	13.35 2.6	1/2	B	e	ナデ	良。やや粉性。やや大きい赤色粒をやや多量，雲母・長石を微量含む。	10YR7/3にぶい黄橙色	良 やや硬質	
249	SD1902	緑釉陶器	椀	-	17.0 5.3	底部 1/3 口縁部わずか	口縁端部外反，高台D	ヘラミガキ	ヘラミガキ	精良。	2.5Y8/1灰白色，釉：7.5Y8/2灰白色	良	全面施釉。底部内外面に三叉トチン痕あり。
250	SD5409 北半	土師器	杯 A	Ⅲ	14.0 3.15	7/8	C	e	ナデ	やや精良。砂質。長石・石英・雲母・チャート・赤色粒を中量含む。	10YR8/3浅黄橙色	良好	
251	SD5409 北半	土師器	高杯	-	脚部径 約 4.3 (17.7)	杯部底部～脚部	面取り7分割	ケズリ	未調整 杯底部ナデ	良。砂質。雲母・長石・石英を少量含む。	外面：10YR 7/3にぶい黄橙色・内面：2.5Y8/3浅黄色，断面：5Y4/1灰色	良好	
252	SD5409 北半	須恵器	壺 A	-	底径 15.2 (5.0)	底部 1/4	長方形の高台	ロクロナデ	ロクロナデとナデ	精良。粘性。長石を微量含む。	外面：5Y5/1灰色・内面：N7/0灰白色	良好	
253	SD5409 1層	土師器	杯 A	I	16.55 (3.45)	3/4	B	c	ヨコナデ	良。砂質。赤色粒を多量，雲母・石英・長石・チャートを少量含む。	10YR8/3浅黄橙色	良好	
254	SD5409 1層	緑釉陶器	輪花椀	-	21.0 (3.9)	1/10	口縁端部外反	ロクロナデ	ロクロナデ	精良。	5Y7/1灰白色	良 硬陶	内面に花文あり。
255	SD5409 1層	灰釉陶器	椀	-	底径 7.0 (1.8)	底部完形	台形高台	ロクロヘラケズリ，底部ロクロヘラキリ	施釉のため不明	やや精良。長石を少量含む。	5Y8/1灰白色，釉：10Y7/2灰白色	良好	内面施釉。見込に三叉トチン痕。底部に墨痕あり。
256	SD5409 1・2層	土師器	甕	Ⅲ	21.5 (4.1)	口縁 1/4	A	無文タタキ	不明瞭	良。砂質。雲母・石英・長石・赤色粒を中量含む。	2.5Y7/3浅黄色	良	
257	SD5409 3層	須恵器	杯B 蓋	I	19.8 (1.75)	1/4	屈曲する縁部	ロクロナデ，頂部ヘラキリのちナデ	ロクロナデ	精良。やや砂質。	10BG6/1青灰色	良好	外面に付着物あり。
258	SD5409 2層	緑釉陶器	皿	-	底径 7.7 (1.35)	底部 1/8	高台E	施釉のため不明	施釉のため不明	やや精良。	5Y7/1灰白色，釉：5Y7/3浅黄色	良好	全面施釉。内面に陰刻花文あり。
259	SD5409 3層	土師器	Ⅲ A	Ⅱ	16.5 2.45	1/5	E	c	ヨコナデ	良。砂質。長石・石英を微量含む。	外面：10YR6/4にぶい黄橙色 内面：10YR8/3浅黄橙色	やや良	

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
260	SD5409 4層	土師器	椀 A	I	13.3 3.1	1/3	C	c	不明瞭	良。粉性。長石・石英・雲母・チャート・赤色粒を微量含む。	10YR7/4 にぶい黄橙色	良好	
261	SD5409 4層	土師器	椀 A	I	12.2 2.95	1/4	B	e	ヨコナデ	良。砂質。石英・雲母・長石・赤色粒・チャートを中量含む。	2.5Y8/3 浅黄色	良好	口縁の一部に煤付着。
262	SD5409 4層	土師器	皿 A	II	15.35 2.6	ほぼ完形	C	c	ヨコナデ	良。粉性。長石・赤色粒・チャートを微量含む。	外面：10YR7/3 にぶい黄橙色 内面：7.5YR7/4 にぶい橙色	良	口縁内面の一部に煤付着。
263	SD5409 4層	土師器	高杯	−	脚部径 4.9 (19.4)	脚部	面取り７分割	ケズリ 裾部ミガキ	未調整 裾部ナデ	良。砂質。長石・石英・雲母を微量含む。	10YR7/4 にぶい黄橙色	良	
264	SD5409 2・4 層	須恵器	甕 A	−	19.0 (6.9)	口縁部 1/2	口縁端部外傾する面をなす。	ナデ	ナデ	やや精良。黒色粒を中量，長石・石英を少量含む。	5Y6/1 灰色	良好	
265	SD5409 4層	緑釉陶器	甑	−	底径 14.8 (4.9)	底部 1/8	長方形の高台，底部に穿孔	ロクロナデとヨコナデ	ロクロナデとヨコナデ	やや精良。やや砂質。	外面：2.5Y6/2 灰黄色・内面：5YR7/6 橙色，釉：7.5Y7/3 浅黄色	良 やや硬質	外面施釉。
266	SD5412 4層	土師器	杯 A	I	17.0 3.9	1/2	B	ケズリか（不明瞭）	不明	やや精良。砂質。長石・赤色粒・雲母を微量含む。	10YR8/3 浅黄橙色	良好	
267	SD5412 4層 SK5586	須恵器	杯 B	II	底径 10.8 (1.9)	底部 3/4	台形高台	ロクロナデ，底部ヘラキリ	ロクロナデ	精良。長石を微量含む。	外面：10Y6/1 灰色・内面：7.5Y6/1 灰色	良好	
268	SD5412 4層 SK5586 SD5056	須恵器	壺 A	−	底径 14.0 (16.2)	底部 4/5 肩部 1/4	平底に肩の張る体部	ロクロヘラケズリのちロクロナデ	ロクロナデ	砂質。長石・石英を微量含む。	N7/0 灰白色	やや良 やや硬質	
269	SD5412 4層	須恵器	壺 M	−	4.4 10.6	ほぼ完形	G	ロクロナデ，底部回転糸切り痕	ロクロ水挽き	精良。やや粉性。長石を微量含む。	10BG6/1 青灰色	良好	
270	SK5587	須恵器	壺 G	−	底径 5.6 (5.8)	底部 1/2	平底	ロクロナデ，回転糸切り痕	ロクロ水挽きとロクロナデ	精良。長石・石英を少量含む。	5Y8/1 灰白色	良好	外面に灰が被る。
271	SK5587	須恵器	壺 K	−	底径 9.4 (6.9)	底部〜体部下半	台形高台	ロクロヘラケズリ，底部ヘラキリ	ロクロ水挽き	良。やや砂質。長石・石英を少量含む。	外面：7.5Y7/1 灰白色・内面：5PB6/1 青灰色	良 やや硬質	
272	SK5587	須恵器	壺 M	−	6.0 (5.0)	口頸部 3/5	口縁端部上方に突出し面をなす。	ロクロナデ	ロクロナデ	やや精良。長石を微量含む。	5YR5/2 灰褐色	良好 硬質	外面に灰が被る。
273	SK5587	灰釉陶器	壺A 蓋	−	17.0 (2.9)	1/10 以下	平らな頂部に直角に折れ曲がる縁部	施釉のため不明	ロクロナデ	精良。長石・石英を微量含む。	2.5Y7/2 灰黄色，釉：7.5Y6/2 灰オリーブ色	良好	内面に重ね焼き痕あり。
274	SK5586	土師器	皿 A	I	18.7 2.4	1/8	A	e − c	ヨコナデ 見込ナデ	やや精良。粉性。長石・雲母を微量含む。	10YR8/2 灰白色	良好	
275	SK5586	土師器	壺		底径 11.6 (4.6)	底部 1/2	底部円盤状	不明	ロクロナデ	精良。砂質。赤色粒・長石・チャートを中量含む。	10YR6/3 にぶい黄橙色	やや不良 やや軟質	内面全体に漆付着。ロクロ土師器か土師質土器。
276	SK5586	須恵器	杯 B	II	底径 9.8 (6.4)	1/4	直線的に外方にのびる口縁	ロクロナデ，底部ロクロヘラキリのちナデ	ロクロナデ	精良。やや砂質。長石・石英を微量含む。	5R5/1 赤灰色・5PB5/1 青灰色	良	
277	SK5586	須恵器	杯 B	II	15.9 5.2	口縁部 1/10 底部ほぼ完形	直線的に外方にのびる口縁	ロクロナデ，底部ロクロヘラキリのちナデ	ロクロナデ	精良。砂質。長石・石英を微量含む。	外面：5B6/1 青灰色・内面：5B7/1 明青灰色	良好	底部に炭化物付着。
278	SK5586	須恵器	鉢		14.4 6.5	口縁部 1/8 底部 1/4	口縁端部端面をなす。	ロクロナデ，回転糸切り痕	ロクロナデ	精良。やや砂質。長石を微量含む。	10BG6/1 青灰色	良好	
279	SK5586	須恵器	壺 K		底径 12.0 (4.7)	底部 1/3	方形の高台	ロクロナデ，底部オサエのちナデ	ロクロ水挽き	良。やや粉性。長石・石英を少量含む。	外面：2.5Y7/1 灰白色・2.5Y8/1 灰白色	良好	
280	SK5586	須恵器	壺 M	−	− (6.95)	頸部と高台部を欠く	A	ロクロ水挽きとロクロナデ，底部回転糸切りのちナデ	ロクロ水挽き	精良。やや粉性。長石を微量含む。	外面：5PB6/1 明青灰色・内面：5B6/1 青灰色	良好	

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量	口径 器高	残存率	形態	外面調整 手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
281	SD5406	須恵器	皿	Ⅲ	14.0 2.0	口縁 1/3	口縁部外反	ロクロナデ	ロクロナデ	精良。雲母を微量含む。	N7/0 灰白色	良好	内面一部に煤付着。
282	SD5406	緑釉陶器	皿	－	底径 7.0 (1.6)	底径 3/8	輪高台	底部ヘラケズリ	施釉のため不明	やや精良。石英・砂粒を微量含む。	2.5Y8/2 灰白色，釉：5Y7/2 灰白色	良好	全面施釉。
283	SD4071	須恵器	杯B	Ⅱ	15.6 4.5	1/3	直線的に外方へのびる口縁	ロクロナデ	ロクロナデ	やや精良。やや砂質。長石・砂粒・雲母を少量含む。	外面：5Y7/1 灰白色，内面・断面：5Y8/1 灰白色	やや良	
284	SD4071	須恵器	杯蓋	－	12.5 (3.8)	1/3	半球形。縁端部外反。	上半ロクロヘラケズリ。下半ロクロナデ。	ロクロナデ	やや精良。砂質。長石・石英・雲母・微砂粒を微量含む。	外面：N6/0 灰色，内面・断面：N7/0 灰白色	良	
285	SD2454	土師器	杯A	I	15.9 3.7	口縁 3/4	B	e	ナデ	精良。砂質。長石・雲母を微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	やや良好	
286	SD5601	土師器	杯A	－	12.5 3.4	口縁 1/8 以下	口縁端部丸くおわる	摩滅のため不明瞭	摩滅のため不明瞭	やや精良。砂質。長石・石英を少量含む。	7.5YR6/4 にぶい橙色	良	ロクロ土師か？
287	SD5601	土師器	皿C	－	9.15 1.35	口縁 2/5	C	摩滅のため不明瞭	ナデ	やや精良。砂質。長石・石英微量を含む。	2.5Y8/2 灰白色	良 軟質	
288	SD5312	須恵器	杯蓋	Ⅲ	13.2 (1.8)	1/3	扁平な頂部。縁端部下方へ折れる。	ヘラキリのちロクロヘラケズリ	ロクロナデ	精良。やや砂質。砂粒・雲母を微量含む。	N6/0 灰色	良好	
289	SD5312	須恵器	盤M	－	底径 3.7 (7.1)	2/3	G	上半ロクロナデ。下半ロクロヘラケズリ。底部糸切り痕。	ロクロ水挽き	精良。雲母を微量，長石を極微量含む。	表面：N7/0 灰白色，断面：N6/0 灰色	良好	
290	SD5312	須恵器	盤	－	底径 6.2 (2.3)	底径 1/6	撥形高台	ロクロヘラケズリ。底部ヘラキリ。	ロクロ水挽き	精良。やや粘性。雲母を微量含む。	N6/0 灰色	良好	
291	SE3365	土師器	杯B	I	22.1 6.05	完形	B	e－c	ナデ。見込みは板ナデ痕残す。	精良。長石・石英・赤色粒・雲母を多量含む。	2.5Y7/3 浅黄色	良好	底部に丸みをもつ。
292	SE3365	土師器	杯B	I	21.4 5.2	5/6	B	e－c	ナデ。	精良。雲母を多量，長石・赤色粒を少量含む。	10YR7/2 にぶい黄橙色	良好	底部に丸みをもつ。
293	SE3365	土師器	皿A	Ⅱ	15.2 2.9	1/3	B	e	ナデ。見込みは板ナデ痕残す。	精良。砂質。雲母少量，長石微量，赤色粒極微量含む。	7.5YR7/3 にぶい橙色	良好	
294	SE3365	須恵器	杯A	Ⅲ	底径 8.2 (3.0)	底部片	－	ロクロナデ。底部回転ヘラキリ痕（一部ヨコナデ）	ロクロナデ	やや粗粒。砂質。微量砂粒多量，長石多量，石英微量含む。	N4/0 灰色	良好	非常に薄い。
295	SE3365	須恵器	盤M	－	底径 5.5 (9.6)	ほぼ完形（口縁部欠く）	G	ロクロナデ。体部下部ヘラケズリ。	水挽き痕残る。頸部ロクロナデ。	精良。やや砂質。微砂粒やや多量，長石・黒色粒を少量含む。	5Y5/1 灰色，釉：緑色	良好	底部に穿孔あり。
296	SK5429	土師器	杯A	Ⅱ	12.9 2.4	口縁 1/4	C	c	ヨコナデ	良。粉性。長石・石英・雲母を微量含む。	10YR8/3 浅黄橙色	良	
297	SK5429	土師器	杯B	Ⅱ	20.1 6.35	口縁 1/4	B	ケズリのち上半部にタテ方向のハケ状線状痕	ナデ	やや精良。粉性。長石・雲母微量含む。	2.5Y8/2 灰白色	良 やや軟質	外面一部に煤付着。
298	SK5429	土師器	皿A	Ⅱ	17.7 (2.0)	口縁 1/4	B	e－c	ナデ	良。やや粉性。雲母微量含む。	2.5Y8/2 灰白色	良 やや軟質	
299	SK5429	土師器	高杯	－	30.1 (4.5)	杯部片	端部は垂直に近い面をなし上方につまみ上げる	中心から外へのケズリ	ナデ	良。粉性。長石・石英・赤色粒をやや多量含む。	表面：5YR7/6 橙色～5YR6/6 橙色，断面：7.5YR8/3 浅黄橙色	良 やや軟質	口縁一部に煤付着。
300	SK5429	土師器	高杯	－	31.15 (4.45)	口縁 1/4	端部は上方へつまみ上げる	中心から外へのケズリ	ナデのち一部にハケメ	良。やや砂質。長石・石英・雲母を含む。	表面：2.5Y8/3 淡黄色～2.5Y7/2 灰黄色，断面：N5/0 灰色	良 やや軟質	
301	SK5429	土師器	高杯	－	底径 15.3 (9.25)	底径 1/2	脚端部は下方に突出する。	裾部ヨコナデ。脚部下から上へ削る。	裾部ヨコナデ。脚部未調整。	良。やや粉性。長石・石英・雲母赤色粒を少量含む。	10YR8/3 浅黄橙色	良 やや軟質	

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量	口径 器高	残存率	形態	外面調整 手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
302	SK5429	土師器	甕 A	Ⅱ	25.0 (8.1)	口縁 1/2	A	タタキ痕残る	タタキ工具によるヨコナデ	良。やや粉性。長石・石英・雲母赤色粒を少量含む。赤色粒・雲母を含む。	10YR8/3 浅黄橙色～7.5YR8/4 浅黄橙色	良 やや軟質	
303	SK5429	土師器	甕 A	Ⅲ	18.4 (7.2)	口縁 1/4	A	タタキ	ヨコナデおよびナナメナデ	やや精良。やや粉性。石英・雲母微量含む。	10YR8/3 浅黄橙色	良好	
304	SK5429	土師器	甕 A	Ⅲ	17.9 (3.7)	口縁 1/4	F	平行タタキ	ヨコナデ	良。粉性。長石・雲母を微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	良 やや硬質	
305	SK5429	黒色土器	鉢	－	6.9 (2.0)	口縁 1/5	内湾する口縁	摩滅のため不明瞭	ミガキ	良。やや砂質。長石・雲母を少量含む。	内面：N3/0 暗灰色・外面：2.5Y7/3 浅黄色	良好 硬質	A類。
306	SK5429	須恵器	杯 蓋	－	7.4 以上 (0.5)	頂部 1/3	扁平な器形	丁寧なヘラケズリ	ロクロナデ	精良。やや粉性。長石を少量含む。	N6/0 灰色	良好 硬質	器壁薄い。
307	SK5429	須恵器	杯 B	Ⅱ	17.1 6.85	底径 1/3	直線的に外方へのびる口縁	ロクロナデ。底部ヘラキリのちロクロナデ	ロクロナデのち見込みに一定方向のナデ	精良。砂質。長石・雲母を極微量含む。	表面：N7/0 灰白色，断面：N6/0 灰色	良好 硬質	
308	SK5429	須恵器	鉢	－	底径 10.9 (6.8)	底径 1/2	平底。ナナメ上方に直線的に開く口縁部。	ロクロナデ。口縁下端はロクロケズリのちナデ。底部回転糸切り痕。	下方からややナナメにナデ。	良。やや粉性。長石・石英を微量含む。	表面：N6/0 灰色，断面：N7/0 灰白色	良 硬質	内面のナデが特異。
309	SK5429	須恵器	壺 A	－	10.5 (15.05)	口縁 1/10	やや肩の張る体部。高台欠損。	ロクロヘラケズリ。肩部ロクロナデ。口縁部ヨコナデ。	ロクロナデ。	良。砂質。黒色粒を多量，長石を少量含む。	表面：N6/0 灰色，断面：N7/0 灰白色	良好 硬質	
310	SK5429	須恵器	壺	－	底径 11.8 (4.75)	底部片	平底。	摩滅のため不明瞭。	摩滅のため不明瞭。	良。粉性。長石・石英微量含む。	7.5Y8/1 灰白色	不良 軟質	
311	SK5429	須恵器	甕	－	－ (21.1)	底部～体部 1/4	－	タタキ	当て具痕のちヨコナデ	やや精良。長石・黒色粒を含む。	表面：5BG6/1 青灰色，断面：5YR6/4 にぶい橙色	やや軟質	
312	SK5429	緑釉陶器	椀	－	14.2 4.9	底部完形。(口縁 1/9)	高台A	摩滅のため不明瞭	ヘラミガキ	やや精良。砂質。長石を少量含む。	2.5Y8/2 灰白色	やや良 軟陶	
313	SX5403	緑釉陶器	耳皿	－	12.2 (2.25)	底径 5/6	高台A	ロクロナデ。底部ロクロヘラケズリ。	ミガキ	良。やや砂質。長石を少量含む。	表面：7.5Y6/2 灰オリーブ色，断面：N7/0 灰白色	良好 硬陶	内面・高台に施釉。
314	SK3133	土師器	皿 A	Ⅱ	17.6 (2.25)	1/8	A	e－c	ナデ	良。やや粉性。石英・長石・チャート・赤色粒を少量，雲母を微量含む。	10YR8/2 灰白色(やや褐色気味)	良好	口縁の一部に煤付着。
315	SK3133	黒色土器	皿	－	15.0 (2.0)	1/6	口縁端部わずかに外反し丸くおわる	不明	ヘラミガキ	良。砂質。長石・赤色粒・雲母を少量含む。	外面：2.5Y7/1 灰白色・内面：N3/0 暗灰色，断面：10YR8/3 浅黄橙色	良 やや軟質	A類。内面に擦痕。
316	SK3133	須恵器	杯 B	Ⅰ	18.3 7.0	1/3	直線的に外方にのびる口縁	ロクロナデ，ヘラキリのちナデ	ロクロナデ	やや精良。やや砂質。長石を微量含む。	表面：N6/0 灰色，断面：10R6/1 赤灰色	良好 極めて硬質	外面に自然釉付着。
317	SK3133	須恵器	杯B 蓋	Ⅲ	13.7 2.5	1/3	平坦な頂部に屈曲する縁部	ロクロナデ，頂部ロクロ水挽き	ロクロナデ	やや精良。粘性。長石を微量含む。	表面：N6/0 灰色，断面：7.5YR7/1 明褐灰色	良好 硬質	
318	SK5304	土師器	杯 B	Ⅱ	18.7 4.15	口縁 1/12	B	e－c	板ナデのちナデか？	やや精良。やや砂質。赤色粒を多量，長石・石英少量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	良 やや軟質	低い丸めの逆台形の高台がつく。
319	SK5304	土師器	皿 A	Ⅱ	14.0 2.1	口縁 1/3	B	e	ナデ	精良。やや砂質。長石・石英・雲母を微量含む。	10YR8/3 浅黄橙色	良好 やや軟質	見込み・底部に煤吸着。
320	SK5304	土師器	椀 A	Ⅰ	13.4 (3.0)	口縁 1/4	B	c	ナデ	良。やや粉性。赤色粒を多量，長石・石英・チャートを微量含む。	10YR8/3 浅黄橙色	良 やや硬質	
321	SK5304	土師器	椀 A	Ⅰ	13.1 (2.7)	口縁 1/6	C	e	ナデ	やや精良。やや粉性。赤色粒を多量，長石・雲母を微量含む。	2.5Y7/2 灰黄色	良好 やや軟質	

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量	口径 器高	残存率	形態	外面調整 手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
322	SK5304	土師器	椀 A	I	13.1 3.2	口縁 2/5	C	e－c	ヨコナデ。 見込みナデ。	やや精良。やや砂質。長石・赤色粒・雲母を微量含む。	2.5Y7/3 浅黄色～2.5Y8/3 淡黄色	良好 やや軟質	灯明皿
323	SK5431	土師器	杯 A	II	13.6 2.95	ほぼ完形	B	e－c	ヨコナデ。 見込みナデ。	やや精良。やや砂質。長石・石英・雲母微量含む。	2.5Y8/2 灰白色	良好 やや軟質	椀ＡⅠか？
324	SK5431	土師器	杯 B蓋	III	15.5 (1.95)	口縁 2/5	頂部から緑部まで丸味がある。	ケズリ	ナデ	良。やや砂質。赤色粒・雲母を中量，長石・石英を微量含む。	2.5Y8/2 灰白色	良 やや軟質	
325	SX5301	須恵器	杯 B蓋	II	16.3 (2.7)	口縁 1/6	端部は下方へ突出する。	ロクロナデ。 端部ヨコナデ。	ロクロナデ	良。やや砂質。長石を少量含む。	7.5Y7/1 灰白色	良好	硯に転用。
326	SX5302	須恵器	杯 B蓋	II	17.3 (2.1)	口縁 1/10	端部は下方へ突出する。	ロクロナデ。 頂部ヘラキリのち一定方向のナデ。端部ヨコナデ。	ロクロナデ	良。やや粉性。長石を少量含む。	表面：N7/0 灰白色，断面：10YR7/2 にぶい黄橙色	良好 硬質	硯に転用。
327	SX5301	須恵器	双耳壺	－	－ (9.25)	耳片	扁平な鰭形	ヘラケズリ	ロクロナデ	良。やや粘性。長石・微砂粒を多量，黒色粒を少量含む。	N7/0～6/0 灰白色	良好 極めて硬質	中央に円孔。
328	SX5302	須恵器	壺	－	7.4 (5.6)	口縁 1/4	口縁は外に折れ，端部は上方および外下方へ突出する。	ロクロナデ。 口縁部ヨコナデ。	ロクロ水挽きのちロクロナデ。	良。砂質。長石を少量含む。	表面：N7/0 灰白色，断面：N8/0 灰白色	良好 やや硬質	二段接合。
329	SD2190	須恵器	壺 G	－	底径 3.8 (11.6)	体部完形	D群に類似	ロクロナデ	不明	やや粗粒。砂質。	5Y8/1 灰白色	やや 不良	
330	SD1992	須恵器	壺 M	－	底径 3.5 (8.3)	体部完形	H群	ロクロナデ，底部回転糸切り痕	不明	やや精良。やや粉性。黒色粒を均一に含む。	N6/0 灰色	良好 硬質	体部外面に灰が被る。
331	SX5302	灰釉陶器	椀	－	17.7 (4.6)	口縁 1/4	口縁端部外反	下部ロクロヘラケズリ。上部ロクロナデ。	ロクロナデ	やや良好。砂質。長石・石英を少量含む。	2.5Y8/1 灰白色	良好 硬質	二次的に灰が被る。
332	1E1M 1E1N	土師器	皿 A	II	16.9 3.55	7/8	A	c	板ナデのちナデ	精良。粉性。長石・石英を微量含む。	表面：10YR8/3 浅黄橙色，断面：10YR6/4 にぶい黄橙色	良好	
333	1H1N	土師器	杯 A	I	18.2 4.15	1/3	B	c	板ナデのちナデ	精良。やや粉性。長石・石英・雲母を微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	
334	1H1N	土師器	杯 B	II	18.2 6.0	口縁 1/4	A	ケズリのちミガキ。	ヨコナデ	精良。やや粉性。雲母を多量，長石・石英・チャートを微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	
335	SD5579	土師器	皿 A	II	15.4 2.15	口縁 2/3	摩滅のため不明	c	摩滅のため不明瞭	やや精良。やや粉性。長石・石英チャート・雲母を微量含む。	2.5Y8/3 淡黄色	良好 やや軟質	
336	SD4185	土師器	皿 A	II	16.6 2.6	3/5	口縁B	e－c	ナデ	精良。砂質。石英・長石・チャート・雲母を微量含む。	10YR6/4 にぶい黄橙色（褐色気味）	良好 硬質	
337	P5539	土師器	杯 A	I	18.0 (3.9)	1/4	C	c	ナデ	やや精良。砂質。長石・雲母を微量含む。	外面：5Y7/3 浅黄色，内面・断面：2.5Y8/3 淡黄色	やや良	
338	P5453	土師器	皿 A	II	15.4 2.45	ほぼ完形	C	b	ナデ	やや精良。やや粉性。φ～2mm の長石・石英を含む。	内面：10YR7/3 にぶい黄橙色，断面：10YR7/4 にぶい黄橙色	良	内面一部と底部に煤付着。
339	P5557	土師器	皿 A	II	16.0 2.1	口縁 1/4	D	不明	摩滅のため不明瞭	やや精良。砂質。長石・赤色粒・雲母を微量含む。	内面：7.5YR8/6 浅黄橙色	不良 軟質	
340	P5455	土師器	高杯	－	底径 17.8	裾部ほぼ完形	裾部端部下方に突出する。	ヨコナデ，脚部ケズリ	ナデ	やや精良。砂質。長石・石英を微量含む。	7.5YR8/4 浅黄橙色	やや良	外面に鉄分付着。
341	－	土師器	甕 A	IV	15.8 (8.6)	口縁 1/2	A	ハケメ。口縁端部ヨコナデ。	ヨコナデ	やや精良。砂質。長石・石英・チャート・雲母を少量含む。	内面：7.5YR7/4 にぶい橙色・外面：5YR7/4 にぶい橙色，断面：10YR7/4 にぶい黄橙色	良好 硬質	

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
342	1H1N	土師器	甕	Ⅳ	18.0 (6.0)	口縁 1/4	A	無文タタキのちハケメ。口縁部ヨコナデ。	ユビオサエのちハケメ。	やや精良。やや粉性。長石・石英・赤色粒を少量含む。	2.5Y7/2 灰黄色	良好	内外面煤付着。
343	1H1N	土師器	甕	Ⅳ	15.7 (6.65)	口縁 1/4	A	無文タタキのちハケメ。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	やや精良。やや砂質。長石・石英・微量含む。	10YR8/3 浅黄橙色	良好	内外面煤付着。
344	1D1N 1E1M 1E1N	黒色土器	杯A	－	22.0 5.5	口縁 1/5	平らな底部。丸みを持って立ち上がる口縁。端部は丸くおわる。	摩滅により不明瞭。	ミガキ	精良。砂質。長石・石英を微量含む。	内面：N2/0 黒色，外面・断面：10YR6/3 にぶい黄橙色	良好	暗文あり。A類。
345	P5453 P5454 P5455	須恵器	杯B	Ⅱ	15.45 5.35	ほぼ完形	直線的に外方にのびる口縁	ロクロナデ，ヘラキリのちロクロナデ	ロクロナデ	良。やや砂質。長石をやや多量，石英を微量含む。	表面：N6/0 灰色，断面：N5/0 灰色	良好	
346	P5538	須恵器	杯B蓋	Ⅰ	19.8 2.0	1/4	平坦な頂部に屈曲する縁部	頂部ヘラキリのちロクロナデ	ロクロナデ	やや精良。長石・石英を微量含む。	外面：5Y6/1 灰色・内面：7.5Y6/1 灰色	良好 硬質	重ね焼き痕あり。
347	P5518	須恵器	椀	－	底径 9.1 (3.5)	底部の 1/2	平底に内湾する口縁部	不明	ロクロナデ	やや粗粒。やや砂質。長石・石英を微量含む。	表面：5Y8/1 灰白色・断面：5Y8/1 灰白色	軟質	
348	P5454	須恵器	壺L	－	底径 10.6 (4.85)	底部 4/5	撥形に広がる長方形の高台	ロクロナデ，底部回転糸切り痕	ロクロ水挽き	やや良。やや砂質。黒色粒を多量，長石を少量，石英を微量含む。	表面：N7/0 灰白色 断面：N8/0 灰白色	良好	
349	西屑・SD4185の付近	須恵器	高杯	－	器高 (6.65)	杯部底部～脚部	脚部に二条の凹線	ロクロナデ	下部ナデ 杯部底部ロクロナデのちナデ	良。砂質。長石を多量含む。	表面：2.5Y6/1 黄灰色， 断面：N7/0 灰白色	良好 硬質	脚部内面にしぼり痕のこる。

八町宅地内出土土器

SX820　Ⅰ・Ⅱ区２層出土土器

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
350	1A1F	土師器	皿A	Ⅲ	10.0 1.7	完形	「て」の字状口縁	ヨコナデ 底部ユビオサエ	ナデ	やや精良。粉性。雲母・石英を微量，長石・チャートを微量含む。	10YR7/2 にぶい黄橙色	良好	
351	1A1F	土師器	食膳具	－		底部片	－	ケズリ	ナデ	精良。石英・長石を微量含む。	7.5YR7/3 にぶい橙色	良好	外面に墨痕あり。
352	1D1H	緑釉陶器	椀	－	底径 4.9 (1.6)	底部完形	高台A	施釉のため不明	施釉のため不明	やや精良。砂質。長石・石英を少量含む。	2.5Y6/1 黄灰色，釉外面：10YR5/2 灰黄褐色・釉内面：5Y4/1 灰色	良好 硬陶	全面施釉。釉が銀化しかける。二次的な火を受ける。
353	1A1D	緑釉陶器	皿	－	14.8 2.35	口縁 1/4，底部 1/2	高台C	ミガキ	ミガキ	精良。やや砂質。白色粒を少量含む。	N6/0 灰色，釉：2.5GY3/1 暗オリーブ灰色	良好 硬陶	全面施釉。
354	1C1F	緑釉陶器	皿	－	底径 6.0 (1.3)	底径 2/5	高台D	摩滅により不明瞭。	摩滅により不明瞭。	精良。	2.5Y8/2 灰白色	良好	
355	1A1E	灰釉陶器	皿	－	6.8 1.4	底部 1/4	高台c	ロクロナデ，底部ロクロヘラケズリ	ロクロナデ	精良。やや砂質。長石・黒色粒を微量含む。	内面：10YR7/1 灰白色，外面・断面：2.5Y7/1 灰白色	良好 硬質	内面の一部に施釉。内面に重ね焼き痕あり。高台内に墨書あり。

SX820　Ⅰ・Ⅱ区３層出土土器

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
356	1C1G	土師器	皿A	Ⅱ	16.3 2.35	口縁 3/4	B	c	ナデ	精良。粘性。雲母・長石・赤色粒・チャートを少量含む。	7.5YR6/3 にぶい褐色	良好 硬質	
357	1C1G	須恵器	鉢D	－	19.4 (9.8)	口縁部～体部 1/6	口縁端部中央がやや窪む外傾する端面をなす。	ロクロナデ	ロクロナデ	やや精良。やや砂質。長石をごく微量含む。	5Y7/1 灰白色	良好 硬質	
358	1D1H	須恵器	壺L	Ⅲ	底径 6.5 (5.5)	底部完形，体部下半 3/4	撥形高台	ロクロナデ，底部ヘラキリのちナデ	ロクロナデ	良。長石を微量含む。	2.5Y6/1 黄灰色	良好 極めて硬質	底部～体部外面の一部に煤状の付着物。

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量	口径 器高	残存率	形態	外面調整 手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
359	1D1H	須恵器	壺 M	−	3.9 (3.1)	口頸 3/4	口縁端部上方に突出	ロクロナデ	ロクロ水挽き	やや精良。やや粉性。長石を少量含む。	N6/0 灰色	良好 硬質	
360	1A1D	緑釉陶器	椀	−	底径 6.4 (2.2)	底部 1/3	高台 B	ヘラミガキ	ヘラミガキ	やや精良。砂質。	N6/0 灰色，釉：10G4/1 暗緑灰色	良好	

SX820　Ⅰ・Ⅱ区４層出土土器

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量	口径 器高	残存率	形態	外面調整 手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
361	1D1H	黒色土器	杯 A	−	17.8 4.8	4/5	口縁端部丸くおわる。	ヘラミガキ，底部ユビオサエ	ヘラミガキ	精良。砂質。長石・石英を中量含む。	外面：7.5YR6/3 にぶい褐色・内面：N3/0 暗灰色	良好 やや軟質	A 類。口縁部内面と見込に暗文あり。
362	0T1H	須恵器	杯 B	Ⅱ	15.9 5.4	1/3	内湾して立ち上がり上半で外反する口縁	ロクロナデ，底部ヘラキリのち部分的にナデ	ロクロナデ	精良。やや砂質。長石を少量含む。	表面：5Y7/1 灰白色，断面：2.5Y8/1 灰白色	良好 硬質	
363	1C1F	須恵器	杯 B	Ⅱ	底径 10.4 (4.3)	底部～口縁部 1/2	丸みをもって内湾する口縁	ロクロナデ，底部ヘラキリのちナデ	ロクロナデのち見込一部ナデ	やや精良。やや粉性。微砂粒を微量含む。	外面：N3/0 暗灰色・内面：2.5Y6/1 黄灰色，断面：2.5Y8/1 灰白色	やや 不良 軟質	外面に炭素吸着。
364	1A1F	須恵器	甕 B	−	19.9 (8.0)	口縁 1/2	口縁端部縁帯状	タタキのちカキメ	同心円文タタキ	精良。粘性。長石を多量，石英を微量含む。	表面：N5/0 灰色，断面：2.5YR5/2 灰赤色	良好 非常に硬質	口縁部と体部外面に灰が被る。

SX820　Ⅲ区２層出土土器

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量	口径 器高	残存率	形態	外面調整 手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
365	0V0Y	土師器	杯 A	I	16.2 3.0	口縁 1/4	B	e	ヨコナデ 見込板ナデ	精良。砂質。雲母・石英・長石・チャートを微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色～7.5YR7/4 にぶい橙色	良好 やや硬質	
366	0V0Y	土師器	皿 A	Ⅲ	14.5 1.7	1/7	B。外反する	e	ナデ	良。粉性。長石・石英・雲母を少量，赤色粒を微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色（やや黄色気味）	やや良好	
367	0V1A	土師器	椀 A	I	12.0 (3.1)	口縁 1/3	B	c	ナデ	精良。砂質。雲母を少量，長石・赤色粒・チャートを微量含む。	表面：10YR7/3 にぶい黄橙色 断面：7.5YR6/4 にぶい橙色	良好	
368	0V1A	黒色土器	鉢	−	7.5 (4.7)	1/4	体部球形，口縁端部上方へつまみ上げる。	体部不明，口縁部ヨコナデ	ミガキ	良。長石・石英・雲母を少量含む。	外面：10YR6/3 にぶい黄橙色・内面：N3/0 暗灰色	良好 やや軟質	A 類。体部外面下方の一部に煤付着。
369	0V1A	須恵器	壺	−	底径 15.2 (9.6)	底部～体部下半 1/3	−	ロクロナデ	ロクロナデ	やや良。やや粉性。長石・石英を少量含む。	外面：2.5Y6/1 黄灰色，内面：5Y7/1 灰白色	良好 やや硬質	
370	0U0Y	須恵器	壺	−	−	体部片	−	ロクロナデ	ロクロナデ	良。石英を微量含む。	外面：2.5Y6/1 黄灰色，内面：2.5Y8/1 灰白色	良好 やや硬質	外面に墨書あり。(369) と同一個体。
371	0T1A	須恵器	壺	−	底径 12.7 (9.75)	底部 1/2	−	ロクロナデ	ロクロナデ	粗粒。砂質。長石・黒色粒多量含む。	外面：2.5Y6/1 黄灰色・内面：N7/0 灰白色，断面：N7/0 灰白色	良好 硬質	
372	0U0Y	須恵器	壺 L	−	7.0 (3.0)	口縁 1/3	口縁端部上方と下方に突出	ロクロナデ	ロクロナデ	精良。やや砂質。長石を少量含む。	表面：2.5Y6/1 黄灰色，断面：2.5Y5/1 黄灰色	良好 硬質	外面の一部に煤付着。
373	0V1A	須恵器	甕	−	18.2 4.0	口縁 1/12	口縁端部上方に平坦面，外面にやや突出	平行タタキのちヨコナデ	細同心円文	粗粒。長石・石英を多量含む。	表面：5 B 5/1 青灰色 断面：5 B 4/1 暗青灰色	良	口縁内面と体部外面に自然釉付着。
374	0V0Y	須恵器	壺 B	−	10.3 (8.3)	口縁 1/2	口縁端部外傾する端面をなす。	タタキのちハケメ	同心円文	良。砂質。長石を少量，赤色粒を微量含む。	表面：N5/0 灰色，断面：10YR7/2 にぶい黄橙色	良好 硬質	口縁部の一部に灰が被る。

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
375	1K1I 1K1J	須恵器	甕	−	口径 25.8 底径 17.8 口縁 部器高 (11.3) 底部器 高 (4.9)	口頸 部 1/3 底部 1/7	長い口頸部。端部は下方に大きく突出する。底部平底。	口頸部ロクロナデ 底部付近体部タタキおよびユビオサエ 底部未調整	口頸部ロクロナデ 底部付近体部ユビオサエ	やや精良。やや砂質であるが粘性をもつ。黒色粒を少量，長石をごく微量含む。	7.5Y7/1 灰白色 (やや明るい) 黒色部分： 10BG2/1 青黒色 (やや黒色気味)	良 極めて 硬質	内外面は刷毛による泥づけにより漆黒化する。
376	−	須恵器	甕	−	器高 (19.5)	体部下半	体部卵形	平行タタキのちヨコナデ	同心円文タタキ	精良。長石・白色粒をやや多量，黒色粒を微量含む。	外面：5 P B 6/1 青灰色 内面：5B4/1 明青灰色	良 硬質	底部内面に灰が被る。
377	0U0Y	緑釉陶器	皿	−	14.75 3.05	ほぼ完形	高台 C	ロクロ水挽き	施釉により不明	やや精良。やや砂質。長石を少量含む。	表面：N7/0 灰白色，断面：10YR6/1 褐灰色，釉：7.5Y5/2 灰オリーブ色	良好 硬陶	高台部を除き全面施釉。内面に一条の沈線あり。口縁部内面の一部に灰が被る。
378	0V0Y	緑釉陶器	皿	−	底径 7.2 (1.45)	底部 1/2	高台 E	ミガキ	ミガキ	精良。やや粘性。	N8/0 灰白色，釉：2.5Y5/3 黄褐色	良好 硬陶	
379	−	緑釉陶器	瓶	−	底径 12.76 (12.3)	底部の 1/8	平底でやや下ぶくれの体部	ヘラミガキ	ナデ	精良。	N 8/0 灰白色 釉：10Y5/1 〜 4/1 灰色	良好 硬陶	内外面施釉。
380	0S0Y	灰釉陶器	椀	−	13.2 4.9	1/2	口縁端部外反，高台 a	ロクロナデ	施釉のため不明	精良。やや砂質。長石・黒色粒を少量含む。	5Y8/1 灰白色，釉：7.5Y6/2 灰オリーブ色	良好 硬質	内面施釉。
381	−	灰釉陶器	瓶 C	−	底径 4.6 (9.9)	1/2	平底でやや下ぶくれの体部。	ロクロナデ	ロクロ水挽き	精良。やや砂質。長石を微量含む。	内面：N8/0 灰白色，外面：2.5Y7/1 灰白色	良好 硬質	
382	0V0Y	灰釉陶器	壺 A	−	8.5 (5.8)	口縁〜 体部上部 1/3	口縁端部やや肥厚して丸くおわる。	ロクロナデ	ロクロ水挽き	やや精良。やや粉性。長石を少量，黒色粒を微量含む。	表面：5Y7/1 灰白色，断面：5Y8/1 灰白色，釉：5Y6/2 灰オリーブ色	良好 硬質	外面施釉。外面の一部に粘土および灰付着。
383	0S1B	青磁	瓶	−	底径 9.0 (11.7)	底部 3/4， 体部 1/3	中央がやや上方に膨らむ平底	ロクロナデ，下部ケズリ	ロクロナデ	精良。やや粉性。長石を少量含む。	外面：10YR6/2 灰黄褐色・内面：7.5YR5/2 灰褐色，断面：N7/0 灰白色，釉：2.5Y8/2 灰白色	良好 硬質	体部上半に施釉。底部に目跡あり。

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量区分	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
384	SK695	土師器	椀 A	I	13.2 3.35	ほぼ完形	B	e − c	ナデ	良。やや砂質。長石・石英・雲母を少量含む。	10YR7/4 にぶい黄橙色	良 やや軟質	
385	SK478	須恵器	盤	−	34.3 9.9	口縁 1/15	まっすぐのび る体部。口縁端部は外下方に肥厚する。	下部ロクロ水挽き。上部ロクロナデ。	下部ロクロナデ。上部摩滅のため不明瞭。	やや粗粒。やや砂質。長石少量，石英微量含む。	表面：2.5Y7/1 灰白色，断面：10Y8/1 灰白色	不良 やや軟質	
386	SK695	須恵器	壺 G	−	6.0 15.3	ほぼ完形	D 群に類似	ロクロナデ	ロクロ水挽き	やや精良。非常に粘性。	N7/0 灰白色	良好 極めて硬質	
387	1H1P	緑釉陶器	皿	−	12.0 2.25	3/4	高台 A	ロクロナデ	ミガキ	良。粉性。長石・石英をやや多量含む。	2.5Y8/3 淡黄色，釉：7.5Y8/2 灰白色	良 軟陶	全面施釉。
388	1G0P 1H0O 1H0P	緑釉陶器	皿	−	14.1 2.55	口縁部 1/10，底部 1/2	口縁部外反，高台 A	ミガキ	ミガキ	精良。	N8/0 灰白色	やや良 軟陶	全面施釉。
389	1A0R	灰釉陶器	壺 A 蓋	−	18.1 (2.8)	口縁 1/10	口縁部ほぼ直角に折れる。	ロクロヘラケズリ。	ロクロナデ	良。やや砂質。長石・石英を少量含む。	10Y8/1 灰白色，釉：10Y6/2 オリーブ灰色	良好 硬質	
390	1K1G	須恵器	壺 L	−	底径 6.5 (11.7)	底部ほぼ完形，体部 1/4	台形高台	ロクロナデとロクロヘラケズリ，底部回転糸切り痕。	ロクロ水挽き	良。長石を含む。	N8/0 灰白色	やや良	

九町宅地内出土土器

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量区分	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
391	SD661	土師器	Ⅲ A	Ⅰ	18.0 (2.6)	1/8	B	e－c	ヨコナデ	やや精良。砂質。長石・石英・赤色粒を少量含む。	表面：10YR7/3 にぶい黄橙色～7.5YR7/4 にぶい橙色 断面：5Y5/1 灰色	良 やや軟質	口縁端部外面に凹みあり。
392	SD661	土師器	甕 A	Ⅲ	19.7 (8.1)	口縁 1/3	H	タタキ	不明	良。砂質。石英・長石・チャートを少量含む。	10YR6/4 にぶい黄橙色～7.5YR6/4 にぶい橙色	良好	口縁部，内面の一部に煤付着。
393	SE670	土師器	Ⅲ A	Ⅰ	18.5 (2.9)	口縁 1/12	B	e	ナデ	やや精良。砂質。長石・石英を少量含む。	10YR7/4 にぶい黄橙色	良好	
394	SE670	緑釉陶器	椀	－	18.2 (5.9)	口縁 1/8	丸みを持つ体部で端部は外反する。	ケズリのちミガキ	ロクロナデのちヘラミガキ	精良。微砂粒を含む。	表面：7.5Y2/1 黒色，断面：5Y8/2 灰白色	やや良好	釉は銀化して黒くなる。
395	SE670	緑釉陶器	Ⅲ	－	底径 6.0 (1.45)	底径 1/4	高台A	ロクロナデ。底部ヘラキリ未調整。	ロクロナデ	精良。砂質。微砂粒を含む。	表面：5GY6/1 オリーブ灰色，断面：10Y7/1 灰白色	良好	
396	SE670	緑釉陶器	Ⅲ	－	底径 8.0 (1.9)	底径 1/6	高台A	ロクロナデ	ロクロナデ。見込みはミガキ。	精良。やや砂質。長石を含む。	表面：N3/1 暗灰色，断面：5Y6/1 灰色	良好	釉は銀化して黒くなる。
397	SE670	緑釉陶器	椀	－	底径 8.0 (1.6)	底径 1/2	高台A	ヘラミガキ	ヘラミガキ	やや精良。砂質。微砂粒を含む。	表面：7.5Y6/3 オリーブ黄色，5Y7/2 灰白色	良好	厚く釉がかかる。尾張産。
398	SX548 SX552	土師器	杯 A	Ⅱ	14.3 3.85	口縁 1/4	E	c	見込み部一定方向のナデ。	やや精良。粉性。石英・チャートを微量，雲母を極微量含む。	10YR8/2 灰白色	良好 やや硬質	
399	SX548	土師器	Ⅲ A	Ⅱ	14.85 2.45	口縁 2/3	B	e－c	ナデ	やや精良。やや砂質。長石・石英・雲母を微量含む。	10YR8/3 浅黄橙色	良好 やや軟質	
400	SX548	土師器	Ⅲ A	Ⅱ	15.7 (2.5)	口縁 1/4	B	c	摩滅のため不明瞭	良。砂質。長石・石英微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	良 やや軟質	
401	SX548	土師器	Ⅲ C	－	8.6 1.6	口縁 1/5	C	e	ナデ	やや精良。やや粉性。雲母を微量含む。	2.5Y7/2 灰黄色	良好 やや硬質	口縁部の一部に煤付着。灯明皿。
402	SX548	須恵	杯 A	－	14.0 3.0	1/4	丸みをもって内湾する口縁	ヘラキリ後ヘラケズリ	ロクロナデ	良。長石を中量含む。	表面：N8/ 灰白色，断面：N7/ 灰白色及び 5Y8/2 灰白色	やや不良	
403	SX548	須恵器	杯 B	Ⅰ	18.5 7.25	口縁 1/8	内湾して立ち上がり上半で外反する口縁	ロクロナデ。底部ロクロヘラキリのちロクロナデ。	ロクロナデ	良。やや粉性。長石微量含む。	5Y8/1 ～ 7/1 灰白色	良 やや軟質	
404	SX548	須恵	壺 M	－	底径 3.8 (5.05)	底部 1/4	E	ロクロナデ。部分的にヨコナデ。	ロクロナデ	精良。やや粉性。長石を微量含む。	表面：N7/0 灰白色，断面：N8/0 灰白色	良好 硬質	
405	SX548	須恵	壺 M	－	底径 4.5 (3.35)	底部 1/3	G	ロクロナデ。底部回転糸切り痕。	ロクロナデ	良。やや砂質。長石・石英・金雲母微量含む。	表面：7.5Y6/1 灰色，断面：5Y7/1 灰白色	良好 やや硬質	内外面の底部から体部にかけて煤か墨付着。
406	SX548	須恵器	甕 B	－	18.8 (4.9)	口縁 1/4	口縁端部外側に肥厚する	やや細い平行タタキ	同心円文	良。やや粘性。長石多量含む。	N6/0 灰色	良好 極めて硬質	
407	SX507 SD510 SX548	須恵器	甕	－	- (14.75)	底部片	内湾して立ち上がる底部	格子状タタキ	同心円文	やや粗粒。砂質。長石（φ2～3mm）・石英多量含む。	表面：5PB5/1 青灰色，断面：N5/0 灰色	良好 硬質	
408	SX548 SE670	灰釉陶器	小鉢	－	15.8 4.2	口縁 2/5	口縁端部外側に肥厚する	ロクロナデ	施釉のため不明	精良。砂質。長石・石英少量含む。	2.5Y8/1 ～ 7/1 灰白色，釉：10Y6/2 オリーブ灰色	良好 硬質	内面に3条凹線が巡る。
409	101D	須恵器	甕	－	- (4.2)	頸部片	頸部わずかに外反	ロクロナデ	ロクロナデ	精良。やや粉性。長石・石英を微量含む。	表面：N6/0 灰色，断面：2.5Y7/2 灰黄色	良好 硬質	内面にしぼり痕。
410	SD532	土師器	杯 A	Ⅰ	17.25 3.55	ほぼ完形	B	c	ナデ	やや精良。砂質。長石・赤色粒・雲母を微量含む。	表面：2.5Y8/2 灰白色，断面：7.5YR7/6 橙色	良好 軟質	

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
411	SD3194	須恵器	杯B	Ⅲ	底径 9.5 (2.0)	底部 1/4	台形高台	ロクロナデ。底部ヘラキリのちロクロナデ。	ロクロナデ	やや精良。やや砂質。長石を少量含む。	N6/0 灰色	良好 硬質	転用硯。
412	P566	須恵器	杯蓋	−	つまみ部径 2.4 (1.65)	つまみ部含む頂部片	平坦な頂部	頂部ヘラキリのちロクロナデ	ナデ	やや精良。長石・石英を微量含む。	外面：5Y5/1 灰色・内面：2.5Y6/1 黄灰色	良好 硬質	転用硯か。
413	SK507	須恵器	杯B蓋	Ⅲ	13.2 3.1	口縁 1/4	口縁端部外下方へ突出する。	ロクロナデ	ロクロナデ	精良。やや砂質。長石を微量含む。	表面：N6/0 灰色，断面：5BG5/1 青灰色	良好 硬質	
414	P575	須恵器	杯蓋	−	− (2.7)	つまみ部 1/2 含む頂部片	平坦な頂部	頂部ヘラキリのちロクロナデ	ナデ	やや精良。長石・石英を微量含む。	10Y7/1 灰白色	良好 硬質	
415	SD141	須恵器	壺L	−	底径 8.8 (15.9)	底部完形，体部 2/3	台形高台	ロクロヘラケズリ，底部ロクロヘラキリ	ロクロ水挽き	やや粗粒。長石を多量含む。	N8/0 灰白色	やや良	体部上半と底部内面に釉が付着。
416	SD3194	須恵器	甕B	−	19.6 (5.9)	口縁部 1/3	口縁端部は丸みを帯びる。	平行タタキ	同心円文	良。粉性。長石を中量含む。	10Y7/1 灰白色	良 やや硬質	
417	SD768	灰釉陶器	壺	−	底径 12.8 (2.8)	底部 1/4	底部円盤高台風	体部下端ロクロケズリ。底部回転ヘラキリ。	ロクロナデとユビオサエ	精良。	5Y7/1 灰白色，釉：10Y6/2 オリーブ灰色	良	外面施釉。
418	SK337	青磁	合子蓋	−	15.0 (2.9)	1/8	やや丸味のある頂部に直立する縁部	ロクロナデ。口縁部ヨコナデ。	ロクロナデ	精良。	7.5Y7/1 灰白色，釉：7.5Y5/2 灰オリーブ色	良好	頂部外面に花弁文あり。
419	SD440	須恵器	鉢	−	− (7.6)	体部片	やや扁平な球形	下半部ロクロヘラケズリ。上半部ロクロナデ。	不明	粗粒。砂質。長石多量含む。	表面：N9/0 灰色，断面：N7/0 灰白色	良 やや硬質	器壁厚い。

十町宅地内出土土器

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量区分	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
420	SD665	土師器	杯A	Ⅱ	13.95 3.6	1/2	B	e − c	ナデ	良。粉性。雲母・長石・赤色粒を微量含む。	2.5Y7/2 灰黄色	良好 硬質	
421	SD665	土師器	Ⅲ A	Ⅱ	16.4 3.3	ほぼ完形	B	c	ナデか（不明瞭）	良。やや粘性。雲母・赤色粒・長石を微量含む。	7.5YR7/4 にぶい橙色	やや不良	
422	SD665	土師器	Ⅲ A	Ⅱ	17.8 2.6	1/8	C	c	ナデ 見込ナデ	良。やや粉性。雲母・長石・石英を微量含む。	2.5Y7/2 灰黄色	良好	口縁の一部黒斑化。
423	SD665	土師器	高杯	−	脚部径 約 4.75 (22.2)	脚部〜裾部 2/3	面取り 7 分割	脚部ケズリ 裾部ミガキ	脚部未調整 裾部ヨコナデ	やや精良。砂質。雲母・長石・石英・チャートを微量含む。	10YR8/4 浅黄橙色	良好	裾部内面の一部に煤付着。
424	SD665	土師器	甕A	Ⅱ	26.0 (6.45)	口縁部 1/3	A	タタキ	不明	良。砂質。雲母・長石・石英・チャート少量含む。	外面：7.5YR6/4 にぶい橙色 内面：7.5YR7/3 にぶい橙色	やや不良	
425	SD665	土師器	甕A	Ⅳ	15.3 (6.2)	口縁部 1/2	A	タタキのちハケメ	当て板痕のちハケメ口縁部タタキ工具によるヨコナデ	やや精良。粉性。雲母・長石・赤色粒・石英を微量含む。	2.5Y7/2 灰黄色	良	外面の一部に煤吸着。
426	SD665	土師器	甕A	Ⅳ	13.2 (9.25)	1/4	B	タタキのちハケメ	無文当て板痕のちハケメ	やや精良。粉性。雲母・長石・チャートを微量含む。	10YR6/2 灰黄褐色	良	内外面，口縁の一部に煤付着。
427	SD665	須恵器	杯A	Ⅲ	13.0 3.75	1/3	直線的に外方にのびる口縁	ロクロナデ，底部ヘラキリのちナデ	ロクロナデ	良。粉性。長石・雲母を微量含む。	5Y8/1 灰白色	やや不良 軟質	
428	SD665	須恵器	杯B	Ⅱ	15.4 5.4	1/2	外反する口縁，台形高台	ロクロナデ，底部回転ヘラキリのちナデ	ロクロナデのち底部ナデ	やや精良。やや砂質。長石を微量含む。	表面：N6/0 灰色，断面：7.5YR6/1 褐灰色	良好 硬質	底部に二条の線刻あり。
429	SD665	須恵器	杯B蓋	−	− (3.1)	1/3 縁部端部を欠く	平坦な頂部に屈曲する縁部	頂部回転ヘラキリのちロクロナデ	ロクロナデ	良。長石を微量，雲母をごく微量含む。	2.5Y8/1 灰白色	やや不良 軟質	
430	SD665	須恵器	鉢	−	底径 13.0 (5.8)	底部 1/4	逆台形高台	ロクロナデ，底部ヘラキリのちナデ	ロクロナデ	精良。黒色粒・長石・石英を少量，雲母微量含む。	5Y7/1 灰白色	不良 軟質	

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量	口径 器高	残存率	形態	外面調整 手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
431	SD665	須恵器	甕 B	−	最大 径 22.6 (7.15)	肩部の 1/4	肩部に長方形で穿孔のある耳がつく。	ロクロナデとヨコナデ	ロクロナデ	やや良。長石・石英を中量含む。	外面：5Y7/1 灰白色，内面・断面：2.5Y7/1 灰白色	良 硬質	肩部に灰が被る。
432	SD665 SR4200	須恵器	甕 A	−	− (16.5)	頸部〜肩部	長頸，口縁部が外反する	平行タタキ	同心円文	やや精良。長・石英を少量含む。	外面：5Y7/1 灰白色・内面：5Y7/2 灰白色	良好	
433	SD666	土師器	杯 A	I	16.5 3.7	1/2	B	不明	不明	やや良。砂質。雲母・長石を少量，石英・赤色粒を微量含む。	7.5YR6/6 橙色〜2.5Y8/2 灰白色	やや良	口縁部に炭素吸着。
434	SD4334	緑釉陶器	皿か？	−	底径 7.4 (1.9)	底径 1/2	高台A	粗いヘラミガキ	粗いヘラミガキ	精良。長石・石英・雲母を微量含む。	2.5Y8/2 灰白色，釉：10GY3/1 暗緑灰色	良好 軟陶	全面施釉。
435	SD4340	土師器	椀 A	I	12.0 3.1	口縁 1/3	E	磨滅のため不明瞭	ナデ	やや精良。砂質。長石・石英・雲母を微量含む。	7.5YR7/3 にぶい橙色	良	
436	SD4340	土師器	皿 A	II	16.0 2.2	口縁 3/5	B	c／c'	ナデ	やや精良。砂質。長石・石英・雲母を少量含む。	10YR8/3 浅黄橙色	良好	
437	SD4340	土師器	皿 C	−	8.8 2.15	口縁 1/3	C	e	ナデ	精良。粉性。長石・石英・雲母を微量含む。	2.5Y8/2 灰白色	良好	灯明皿
438	SD4340	土師器	甕 E	−	11.2 (4.5)	口縁 1/6	内上方へ突出する口縁	ミガキ	ヨコナデ	精良。やや粉性。赤色粒・雲母を微量含む。	7.5YR6/4 にぶい橙色	良 やや軟質	
439	SD4340	黒色土器	杯 A	−	24.0 6.6	口縁 1/3	平らな底部。口縁端部は丸くおわる。	口縁部ヨコナデのちヘラミガキ	ヘラミガキ	やや精良。粉性。長石・石英・角閃石を微量含む。	内面：2.5Y3/1 黒褐色，外面：2.5Y8/2 灰白色	良好	A類
440	SD4340	須恵器	杯B 蓋	IV	12.4 (2.5)	1/7	端部やや外反し丸くおわる。	上半ロクロヘラケズリ。下半ロクロナデ。	ロクロナデ	精良。雲母微量含む。	内面：7.5Y7/1 灰白色・外面：N6/0 灰色	やや良好	内面に煤付着。
441	SD4340 SD4349	須恵器	杯 B	IV	12.0 4.4	1/2	直線的に外方へのびる口縁	ロクロナデ	ロクロナデ	精良。やや粉性。雲母を微量含む。	内面：N7/0 灰白色・断面：N6/0 灰色，断面：2.5Y6/2 灰黄色	良好 硬質	内面全体に朱？付着。
442	SD4340	須恵器	杯 B	III	13.2 (4.4)	口縁 1/2	直線的に外方へのびる口縁	ロクロナデ	ロクロナデ	やや精良。砂質。長石・雲母を微量含む。	5B6/1 青灰色	良好 硬質	
443	SD4340	須恵器	杯 B	II	14.0 4.0	1/2	直線的に外方へのびる口縁	ロクロナデ。底部ヘラキリのちナデ。	ロクロナデ	精良。砂質。長石・雲母を微量含む。	5Y6/1 灰色	良好	十字のヘラ記号
444	SD4340	須恵器	杯 B	−	底径 9.4 (1.2)	底部 1/2	−	底部ヘラキリのち粗いナデ	ロクロ水挽き	精良。やや粉性。雲母微量含む。	表面：5Y7/1 灰白色，断面：7.5Y6/1 灰色	良 硬質	判読不能の墨書あり。
445	SD4340	須恵器	鉢	−	22.7 (15.6)	2/3	外反する短い口縁	ロクロナデ	ロクロナデ	精良。長石・雲母を微量含む。	5Y7/1 灰白色	良 やや軟質	体部に工具痕残る。
446	SD4340	須恵器	短頸壺	−	底径 13.0 (7.2)	底部 1/2	長胴	ロクロナデ。下端ロクロヘラケズリ。底部ヘラキリのちナデ。	ロクロ水挽き	精良。やや粉性。雲母を微量含む。	10Y6/1 灰色	良好 硬質	
447	SD4340	須恵器	壺 M	−	− (5.3)	体部 1/3	A	ロクロ水挽き	ロクロ水挽き	精良。やや砂質。長石・雲母を微量含む。	N6/0 灰色	良好	
448	SD4340	須恵器	壺 M	−	底径 4.2 (4.5)	底部 1/2	G	ロクロ水挽き。底部糸切り痕。	ロクロ水挽き	精良。	2.5Y7/1 灰白色	良 やや軟質	
449	SD4340	須恵器	長頸壺	−	底径 9.6 (2.7)	底部 1/2	台形で幅の広い高台	底部回転糸切り痕	ロクロ水挽き	精良。雲母微量含む。	N7/0 灰白色	良好	
450	SD4340	須恵器	平瓶	−	底径 12.2 (8.3)	体部〜底部 1/3	台形の高台	ロクロナデ。底部ヘラキリのち不定方向のナデ。	ロクロ水挽き。底部一定方向のナデ。	精良。石英・雲母を微量含む。	N7/0 灰白色	良好	
451	SD4340	須恵器	甕	−	基部 径 15.9 (9.4)	体部片	卵形の体部	平行タタキ	同心円文の当て具痕	やや粗粒。砂質。黒色粒をやや多量，長石・石英・雲母を少量含む。	外面：N7/0 灰白色，内面・断面：N5/0 灰色	良 やや硬質	頸部外面自然釉付着。
452	SD4340	須恵器	甕	−	最大 径 30.0 (10.3)	底部片	やや尖り気味の丸底	格子状タタキ	平行の当て具痕。一部同心円文。	やや砂質。黒色粒を均一に，長石・雲母を微量含む。	N6/0 灰色	良	

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
453	SD4340	須恵器	甕A	－	25.0 (8.2)	口縁 1/4	頸部でくの字に折れ口縁端部上方へ突出	体部タタキのちナデ消し。口縁部ヨコナデ。	体部同心円文の当て具痕。口縁部ヨコナデ。	やや粗粒。やや砂質。φ～6mmの石粒多量含む。	表面：N7/0 灰白色，断面：5YR6/2 灰褐色	良	
454	SD4340 SD4342	須恵器	甕	－	53.0 (10.0)	口頸部 1/4	口縁端部は下方へ大きく突出	体部格子状タタキ。口頸部ヨコナデ。	体部同心円文の当て具痕。口頸部ヨコナデ。	やや精良。長石・φ 3mmの石粒を多量含む。	表面：5RP5/1 紫灰色，断面：N5/0 灰色・5PB5/1 青灰色	良	
455	SD4340	緑釉陶器	椀	－	9.6 3.15	口縁 1/6	高台A	ヘラミガキ	ヘラミガキ	精良。	5Y8/1 灰白色，釉：10Y5/2 オリーブ灰色	良好	全面施釉。
456	SD4340	緑釉陶器	椀	－	18.6 5.9	口縁 2/5	撥形高台。口縁端部外反。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	精良。石英を微量含む。	7.5YR8/1 灰白色，釉：10Y6/2 オリーブ灰色	良好	三叉トチン痕あり。全面施釉。
457	SD4340	灰釉陶器	椀	－	底径 5.85 4.85	底径 1/2	三日月状の高台	ロクロナデ。下部ロクロヘラケズリのち粗いロクロナデ。底部ヘラキリ。	ロクロナデ	やや精良。長石・石英を微量含む。石英を少量含む。	10Y7/1 灰白色，釉：7.5Y6/2 灰オリーブ色	良好	口縁部内外面に施釉。
458	SD4340	灰釉陶器	皿	－	底径 7.6 (1.55)	底径 4/5	台形の高台	底部ヘラキリのち粗いロクロナデ	施釉のため不明	やや精良。長石・石英を微量含む。	7.5Y7/1 灰白色，釉：7.5Y6/2 灰オリーブ色	良好	三叉トチン痕。内面施釉。
459	SD4334	灰釉陶器	皿	－	15.2 2.35	底径 1/5	逆台形の高台。口縁端部小さく外反。	ヘラケズリのちナデ	施釉のため不明	精良。長石・石英を極微量含む。	2.5Y7/2 灰黄色，釉：5Y7/2 灰白色	良好	内面施釉。
460	SD4350	土師器	杯A	I	15.5 3.1	口縁 1/2	B	e	ナデ	やや精良。砂質。雲母微量含む。	10YR8/3 浅黄橙色	良好	
461	SD4350	須恵器	短頸壺	－	基部径 6.6 (2.0)	頸部片	－	ロクロナデ	ロクロ水挽き	精良。雲母を極微量含む。	内面：N6/0 灰色・外面：5Y7/1 灰白色，断面：7.5Y7/1 灰白色	良 硬質	三段構成か？
462	SD4350	須恵器	甕B	－	18.2 (6.8)	口縁 1/4	口縁短く外反。端部は水平な面をなす。	体部平行タタキ。口縁部ヨコナデ。	体部ナデのち同心円文の当て具痕。口縁ヨコナデ。	やや精良。1～3mmの長石を含む。	表面：5B6/1 青灰色，断面：N5/0 灰色・7.5YR5/1 褐灰色	良	
463	SD4350	緑釉陶器	椀	－	13.6 3.95	底径 1/2	高台A	ヘラミガキ	ヘラミガキ	精良。砂粒を極微量含む。	2.5Y8/2 灰白色，釉：2.5Y2/1 黒色	良好	
464	SD4350	灰釉陶器	椀	－	15.4 4.1	底径 1/2	口縁端部外反。台形の高台。	ロクロナデ	施釉のため不明	やや精良。長石・石英・砂粒を微量含む。	5Y8/1 灰白色，釉：7.5Y6/3 オリーブ黄色	良好	内面と口縁外面に施釉。
465	SD4350	灰釉陶器	皿	－	15.0 1.6	口縁 1/8	扁平な器形。碁笥底。	底部ヘラケズリ	施釉のため不明	やや精良。長石・石英・砂粒を微量含む。	7.5Y7/1 灰白色，釉：7.5Y6/2 灰オリーブ色	良好 硬質	連弁文輪花
547	SE1846	土師器	椀A	I	17.4 (3.1)	1/4	A	c／e	ヨコナデ	精良。粉性。長石・雲母を微量含む。	7.5YR8/3 浅黄橙色	良好	
548	SE1846	土師器	－	－	－	小片	－	ケズリ	ケズリ	精良。粉性。赤色粒をやや多量、長石を微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	判読不能の墨書
549	SE1846	土師器	壺G	－	8.6 (8.3)	体部 1/4	平底で体部は卵形を呈する。	底部回転糸切り痕。体部はロクロナデ。	ロクロ目を強く残す。	良好。やや粉性。長石を微量含む。	表面：N7/0 灰白色，断面：2.5Y8/2 灰白色、N7/ 灰白色	良好	
550	SK2077	須恵器	壺G	－	底径 4.8 (13.1)	体部完形	Dに類似	ナデ，底部回転糸切り痕	頸部ナデ	やや精良。粉性。	N4/0 灰色	不良 軟質	
551	SD2625	須恵器	平瓶	－	底径 2.8 (3.5)	肩部～底部 1/2	平底，肩部の折れ曲がりが強く稜をなす	ロクロナデとロクロヘラケズリ	ロクロ水挽きとナデ	砂質。長石をやや多量含む。	表面：N8/0 灰白色，断面：N4/0 灰色	良 硬質	
552	2C1S	須恵器	杯蓋	－	12.0 3.5	－	丸みのある頂部にほぼ直立する縁部	ロクロナデ，頂部ロクロヘラケズリ	ロクロナデ	やや精良。砂質。長石をやや多量，白色少量含む。	N5/0 灰色	良 硬質	
553	2F1Y	緑釉陶器	椀	－	21.3 7.4	口縁 1/8	高台A	ヘラミガキ	ヘラミガキ	良。やや砂質。長石・石英を微量含む。	10YR8/2 灰白色～2.5Y8/2 灰白色	良好 軟陶	

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
554	2B2 A 2C2 A	灰釉陶器	皿	-	底径 6.9 (1.9)	底部片	高台 b	底部ヘラキリのち粗いナデ。	ナデ	良。砂質。長石・石英を少量含む。	2.5Y8/1 灰白色	良好 硬質	
555	1L2 A 1M2 A	灰釉陶器	壺	-	底径 7.9 (1.6)	底径 2/5	外反する短い高台がつく	底部回転ヘラキリ	ロクロナデ	精良。長石を少量含む。	2.5Y8/1 灰白色	良好	
556	2C1R	灰釉陶器	蓋	-	- (2.7)	縁部を欠く	宝珠つまみ	施釉のため不明	ロクロナデ	精良。	表面：2.5Y8/1 灰白色，断面：N8/0 灰白色，釉：7.5Y6/2 灰オリーブ色	良好	外面施釉。
557	SD2429	土師器	高杯	-	底径 10.3 (2.15)	裾部のみ完形	端面は内傾する	ミガキ	ユビオサエ	やや精良。やや砂質。長石を微量，雲母をごく微量含む。	2.5Y8/3 淡黄色～5YR6/4 にぶい橙色	良好	端部の一部に煤付着。
558	SD2429	須恵器	壺	-	-	把手部片	三角形折曲把手	ケズリとナデ	ナデ	やや精良。やや粘性。長石を微量含む。	表面：N5/0 灰色，断面：N7/0 灰白色	良好 硬質	

S E 1842 上層出土土器

遺物番号	種別	器形	法量区分	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
466	土師器	杯 A	I	18.15 5.0	ほぼ完	A	e－c	板ナデのちナデ	精良。粉性。石英・赤色粒・雲母を微量含む。	7.5YR8/3 浅黄橙色	良好	
467	土師器	杯 A	I	18.85 3.2	3/4	B	c	ナデ	やや精良。粉性。長石・石英・チャート・雲母を少量含む。	10YR8/2 灰白色	やや良好	
468	土師器	杯 A	I	17.0 (3.6)	3/4	E（部分的につまみ上げる）	c	ナデ	精良。粉性。石英・赤色粒・雲母を微量含む。	7.5YR8/2 灰白色	やや良好	
469	土師器	杯 A	I	18.85 2.2	1/2	A	e－c	ヨコナデ	精良。粉性。赤色粒をやや多量，雲母を微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	墨書あり。
470	土師器	皿 A	I	18.45 2.35	1/8	B	c	不明瞭	やや精良。粉性。石英・チャート・赤色粒・雲母を微量含む。	10YR8/3 浅黄橙色	やや良好	
471	土師器	皿 A	II	16.05 2.4	ほぼ完	C	c	ヨコナデ	精良。やや砂質。石英・赤色粒雲母を少量含む。	7.5YR8/2 灰白色	良好	
472	土師器	皿 A	II	15.6 2.4	1/4	C	c	ヨコナデ	やや精良。粉性。石英・雲母を微量含む。	10YR8/3 浅黄橙色	やや良好	
473	土師器	皿 A	II	15.7 2.2	ほぼ完	C	c	ヨコナデ	やや精良。砂質。雲母を多量，石英・チャート・赤色粒を少量含む。	7.5YR8/3 浅黄橙色	良好	底部に「二」の墨書残る。
474	土師器	皿 A	II	17.15 2.6	ほぼ完	A	c	ナデ	精良。粉性。石英・雲母を少量含む。	7.5YR8/2 灰白色	良好	底部ユビオサエのちヘラケズリ
475	土師器	皿 A	II	17.5 2.2	1/2	C	c／e	ヨコナデ	精良。やや粉性。雲母を微量含む。	10YR8/2 灰白色	やや良好	底部ユビオサエのちヘラケズリ
476	土師器	皿 A	-	- -	-	-	ケズリ	ナデ	精良。粉性。雲母を少量，石英を微量含む。	10YR8/2 灰白色	良好	墨書あり。
477	土師器	椀 A	I'	14.65 3.9	ほぼ完	B	c	ヨコナデ	精良。やや粉性。石英・雲母を微量含む。	表面：10YR8/3 浅黄橙色，断面：7.5YR7/6 橙色	やや良好	
478	土師器	椀 A	I	13.6 3.2	1/3	B	c	ヨコナデ	精良。粉性。石英・雲母を微量含む。	10YR8/4 浅黄橙色	良好	墨痕のようなものあり。
479	土師器	椀 A	I	13.35 3.6	ほぼ完	E	c／c'	ヨコナデ	精良。粉性。長石・赤色粒・雲母を微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	墨書あり。
480	土師器	椀 A	I	13.0 3.2	3/4	E	c	ナデ	やや精良。やや粘性。石英・赤色粒・雲母を微量含む。	7.5YR7/4 にぶい橙色	良好	底部に「一」の墨書残る。

遺物番号	種別	器形	法量区分	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
481	土師器	椀A	I	12.5 3.5	1/2	C	c／c'	ナデ	やや精良。やや粉性。石英・赤色粒・雲母を微量含む。	5YR7/6 橙色	やや不良	外面に指頭圧痕が多く残る。
482	土師器	椀A	I	13.3 3.2	1/2	E	c	ナデ	やや精良。やや粉性。石英・赤色粒・雲母を微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	やや良好	
483	土師器	椀A	I	13.7 3.9	1/2	B	c	ナデ	精良。やや砂質。石英・赤色粒・雲母を微量含む。	10YR8/3 浅黄橙色	やや良好	口縁内面煤付着。
484	土師器	椀A	I	13.5 3.5	1/2	B	c／c'	ナデ	やや精良。やや砂質。赤色粒・黒色粒を中量，石英・雲母を微量含む。	内面：7.5YR7/6 橙色，外面：10YR7/4 にぶい黄橙色	やや良好	底部ユビオサエのちヘラケズリ。
485	土師器	椀A	I	13.8 3.6	完形	B	c／e	ナデ	やや精良。砂質。雲母を微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	やや良好	口縁部に「二」の墨書あり。
486	土師器	椀A	－	底径 6.5 (1.4)	底部片	－	ケズリ	板ナデのちナデ	精良。やや粉性。長石・石英・チャートを少量，雲母を微量含む。	10YR8/2 灰白色	やや不良	板ナデ痕が残る。底部「○に一」の墨書あり。
487	土師器	甕	Ⅳ	16.75 (12.7)	底部欠損	A	タタキのちナナメのハケメ	無文当て具痕	精良。粉性。雲母を多量含む。	10YR7/2 にぶい黄橙色	良好	肩部に墨痕あり。内外面部分的に煤付着。
488	土師器	甕	Ⅳ	17.0 (7.0)	口縁 1/4	C	無文タタキ	当て板痕あり	精良。粉性。長石・石英・黒色粒・赤色粒を多量含む。	外面：N1.5/0 黒色，内面：10YR8/2 灰白色	良好	外面は二次的な炭素吸着。
489	土師器	甕	Ⅳ	16.9 (9.7)	口縁 1/2	B	無文タタキ	当て板痕あり	精良。粉性。長石・石英・チャート・黒色粒・赤色粒を多量含む。	外面：N2/0 黒色，内面：10YR8/3 浅黄橙色	良好	外面は二次的な炭素吸着。
490	土師器	甕	Ⅳ	13.6 (5.1)	口縁 1/6	A	タタキのちハケメ	ヨコ方向のハケメ	精良。砂質。雲母を多量含む。	10YR6/2 灰黄褐色	良好	外面一部に煤付着。
491	土師器	甕	Ⅳ	13.8 (5.2)	口縁部 1/4	D	不明瞭	不明瞭	精良。砂質。長石・石英・チャート・赤色粒を多量含む。	表面：黒色，断面：10YR8/2 灰白色	良好	内外面とも炭素吸着。
492	須恵器	杯A	Ⅱ	13.0 3.7	1/3	直線的に外方へのびる口縁	ロクロナデ底部ヘラキリ未調整	ロクロナデ	精良。やや砂質。	5Y7/1 灰白色	やや不良	口縁端部一部煤付着。灯明か？
493	須恵器	杯A	Ⅱ	12.2 3.85	1/2	丸みをもって内湾する口縁	ロクロナデ	ロクロナデ	精良。やや粉性。	2.5Y8/1 灰白色	不良	
494	須恵器	杯A	Ⅱ	13.4 4.2	4/5	丸みをもって内湾する口縁	ロクロナデ底部ヘラキリ未調整	ロクロナデ	精良。やや粉性。	5Y8/2 灰白色	やや不良	口縁部重ね焼きによる黒色化。
495	須恵器	杯A	Ⅱ	12.7 3.9	1/2	直線的に外方へのびる口縁	ロクロナデ底部ヘラキリ未調整	ロクロナデ	精良。やや粉性。	10Y7/1 灰白色	不良	
496	須恵器	杯A	Ⅱ	13.1 4.1	1/2	内湾して立ち上がり上半で外反する口縁	ロクロナデ底部部分的にヘラキリ痕残る	ロクロナデ	精良。やや粉性。	表面：2.5Y3/1 黒褐色，断面：10YR6/1 褐灰色	不良	口縁端部一部煤付着。灯明か？
497	須恵器	杯A	－	－ －	底部片	－	不明瞭	不明瞭	精良。やや粉性。	N8/0 灰白色	やや不良	墨書あり。
498	須恵器	杯B	Ⅳ	11.9 4.35	1/3	内湾して立ち上がり上半で外反する口縁	ロクロナデ底部ヘラキリのちナデ	ロクロナデ	精良。長石を微量含む。	N6/0 灰色	良好	
499	須恵器	杯B	Ⅱ	15.5 4.9	1/4	直線的に外方へのびる口縁	ロクロナデ底部ヘラキリのち一部ナデ	ロクロナデ	精良。やや砂質。	N6/0 灰色	良好	
500	須恵器	杯B	Ⅱか Ⅲ	底径 8.9 (2.3)	1/3	－	ロクロナデ底部ヘラキリのちロクロナデ	ロクロナデ	精良。長石を微量含む。	N6/0 灰色	良好	
501	須恵器	杯B蓋	Ⅲ	14.0 (1.0)	1/8	平坦な頂部に屈曲する縁部	ロクロナデ頂部ヘラキリのちナデ	ロクロナデ	精良。やや粉性。	10Y7/1 灰白色	良好	墨書あり。
502	須恵器	壺M	－	底径 4.7 (7.9)	1/2	B	ロクロケズリのちロクロナデ。底部回転糸切り痕。	ロクロ水挽き	精良。砂質。長石・石英・金雲母を微量含む。	5Y6/1 灰色	良好	

遺物番号	種別	器形	法量区分	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
503	須恵器	甕M	－	底径 4.15 (9.4)	ほぼ完 (口縁部欠損)	A	ロクロケズリのちロクロナデ。底部回転糸切り痕。	頸部ロクロナデ	精良。長石・石英を微量含む。	N6/0 灰色	良好	
504	須恵器	短頸壺	－	10.0 25.5	底部完形	B	ロクロ水挽き	ロクロ水挽き	良。やや粉性。長石を多量含む。	N3/0 暗灰色	良好	底部に白色微砂状のものが全面に付着。
505	須恵器	長頸壺	－	底径 10.6 (4.2)	底部 1/6	細長い撥形の高台がつく。	ロクロナデ	ロクロナデ	精良。粉性。	表面：7.5Y4/3 暗オリーブ色，断面：2.5Y6/2 灰黄色	良好	
506	須恵器	長頸壺	－	底径 9.4 (4.6)	1/2	丸みのある長方形の高台がつく。	ロクロナデ	ロクロナデ	精良。長石をやや多量含む。	表面：N4/0 灰色，断面：5YR4/6 赤褐色	良好	
507	須恵器	甕A	－	27.3 (9.55)	口頸部 1/7	口縁端部外下方に突出する	タタキのちロクロナデ	ロクロナデ	精良。やや粉性。長石を微量含む。	5Y5/1 灰色	良好	二段構成
508	須恵器	盤	－	底径 14.2 (5.7)	底部片	－	平行タタキのちヘラケズリ	ナデ	精良．	表面：N6/0 灰色，断面：10Y5/1 灰色	やや良好	
509	須恵器	甕A	－	最大 経 36.0 (37.3)	体部 1/3	－	平行タタキ	体部上半同心円文タタキのちナデ。平行タタキのちナデ	精良。	内面：N5/0 灰色，外面・断面：5PB4/1 暗青灰色	やや良好	

ＳＥ 1842 中層出土土器

遺物番号	種別	器形	法量区分	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
510	土師器	杯A	Ⅰ	18.9 4.0	完形	B	c／e	板ナデのちナデ	精良。やや粘性。石英・雲母を微量含む。	7.5YR7/4 にぶい橙色	良好	灯明皿。
511	土師器	杯A	Ⅰ	17.05 (3.8)	3/4	B	e－c	ナデ	精良。やや粘性。雲母を微量含む。	7.5YR8/2 灰白色	良好	外面全体と内面一部に炭素吸着。灯明皿。
512	土師器	皿A	Ⅰ	18.75 2.7	1/6	C	a	ナデ	やや精良。粉性。石英・雲母を微量含む。	5YR7/6 橙色～10YR7/3 にぶい黄橙色	やや良好	見込みに灯明の芯の痕？あり。
513	土師器	皿A	Ⅰ	18.95 2.7	ほぼ完形	A	c／e	板ナデのちナデ	精良。粉性。雲母を微量，赤色粒を極微量含む。	10YR6/3～6/4 にぶい黄橙色	良好	底部のヘラケズリは工具痕が明瞭に残る。
514	土師器	皿A	Ⅰ	19.1 2.1	ほぼ完形 底部一部欠損	A	c／e	ナデ	精良。粉性。黒色粒・赤色粒を多量，雲母を中量，長石を少量含む。	5YR7/4 にぶい橙色	良好	比較的ケズリが丁寧。
515	土師器	皿A	Ⅰ	18.25 2.4	ほぼ完形	A	e－c	板ナデのちナデ	精良。やや粘性。長石・石英・雲母を中量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	全体的にゆがみが大きい。
516	土師器	皿A	Ⅱ	15.6 2.9	1/4	B	e－c	板ナデのちナデ	精良。粉性。石英・赤色粒・雲母を微量含む。	7.5YR7/6 橙色～10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	底部に丸みを持つ。
517	土師器	皿C	－	8.3 1.6	1/2	口縁端部は丸くおわる。	e	ナデ	精良。粉性。雲母を微量，石英を極微量含む。	10YR7/4 にぶい黄橙色～7.5YR5/6 明褐色	良好	
518	土師器	椀A	Ⅰ	13.15 3.4	完形	B	c／c'	ナデ	精良 やや粘性	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	外面の 1/2 煤付着。灯明皿。
519	土師器	椀A	Ⅰ'	14.1 3.5	2/3	B	c／e	ナデ	精良。粉性。雲母を微量含む。	7.5YR7/4 にぶい橙色	良好	ユビオサエの痕が強く残る。
520	土師器	椀A	Ⅰ	14.05 3.3	4/5	B	c	ナデ	精良。粉性。雲母を微量含む。	10YR7/4 にぶい黄橙色	やや不良	
521	土師器	椀A	Ⅰ	13.2 3.6	ほぼ完形	C	e	ナデ	精良。やや粘性。石英・チャート・雲母を微量含む。	7.5YR6/3 にぶい褐色	良好	口縁 1/4 に煤付着。底部に墨書あり。穿ったような穴が２カ所ある。
522	土師器	椀A	Ⅰ	12.65 3.2	ほぼ完形	C	e－c	ナデ	精良。粉性。雲母を微量含む。	10YR7/4 にぶい黄橙色	良好	口縁内外面に煤付着。底部に墨書残る。
523	土師器	甕	Ⅳ	15.9 13.6	ほぼ完形	A	タタキのちハケメ	上部ハケメのち板ナデ 下部当て具痕	良。粉性。長石・石英を微量含む。	7.5YR8/1 灰白色	良好	内外面とも全体的に煤が付着。

遺物番号	種別	器形	法量区分	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
524	土師器	甕	Ⅳ	15.0 (12.6)	1/4	A	平行タタキ	当て板のち下部にハケメ	精良。やや砂質。金雲母を多量含む。	10YR6/2 灰黄褐色	良好	内外面の体部下半と口縁に炭素吸着。
525	黒色土器	杯B	-	16.9 5.15	1/4	口縁端部は内側に内傾する面を持つ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	精良。粉性。長石・チャート・雲母を極微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	内面に暗文を施す。
526	須恵器	杯A	Ⅱ	13.2 4.0	2/5	丸みをもって内湾する口縁	ロクロナデ	ロクロナデ	精良。やや砂質。	5Y8/1 灰白色	やや不良	底部に「十」の墨書あり。
527	須恵器	杯A	Ⅱ	13.1 4.35	完形	丸みをもって内湾する口縁	ロクロナデ	ロクロナデ	精良。砂質。長石・石英・チャート・金雲母を微量含む。	2.5Y8/1 灰白色	やや良好	
528	須恵器	杯A	Ⅱ	13.3 3.8	ほぼ完形	丸みをもって内湾する口縁	ロクロナデ	ロクロナデ	精良。やや粉性。	表面：10YR7/3 にぶい黄橙色　断面：2.5Y7/2 灰黄色	やや良好	灯明皿。
529	須恵器	杯B蓋	Ⅳ	11.85 2.45	完形	屈曲縁部縁端部は外下方へ突出する	ロクロナデ頂部はヘラキリのちロクロナデ	ロクロナデのち頂部一定方向のナデ	精良。やや粉性。	5Y7/1 灰白色	やや良好	つまみがつく。
530	須恵器	壺M	-	底径 4.0 (8.9)	体部 1/2	B。断面長方形の高台がつく。	ロクロ水挽きのち下半部ヘロクロラケズリ。底部回転糸切り痕を残す。	不明（しぼり痕）	精良。やや砂質。長石・石英を微量含む。	10Y5/1 灰色	良好	
531	須恵器	壺M	-	底径 3.3 (6.2)	口頸部欠損	D	ロクロ水挽きのち下半部ヘロクロラケズリ。回転糸切り痕を残す。	不明（しぼり痕）	精良。やや砂質。長石を微量含む。	N6/0 灰色	良好	
532	須恵器	壺G	-	底径 5.15 (5.7)	底部片	A	ロクロ水挽き。底部回転糸切り痕を残す。	ロクロ水挽き	粗粒。粉性。長石・チャートを中量含む。	表面：N4/0 灰色, 断面：2.5GY7/1 明オリーブ灰色	良好	
533	須恵器	壺	-	8.0 (2.9)	口縁 1/6	口縁端部は平坦な面を持つ	ヨコナデ	ヨコナデ	精良。やや粉性。長石を少量含む。	10YR6/1 褐灰色	良好	内面に自然釉付着。
534	須恵器	壺	-	高台径 8.6 (6.3)	体部下半片	長胴	ロクロ水挽きのちロクロナデ	ロクロ水挽き	精良。粘性。長石を微量含む。	表面：N5/0 灰色, 断面：5YR4/3 にぶい赤褐色	良好	転用硯。
535	須恵器	長頸壺	-	高台径 8.6 (4.6)	底径 1/3	撥状の高台がつく。	ロクロヘラケズリ	ロクロナデ	やや粗粒。やや砂質。長石を少量含む。	表面：淡黄灰色, 断面：灰色	良好	底部内面自然釉付着。
536	灰釉陶器	小形壺蓋	-	3.1 1.5	完形	球形のつまみがつき縁部は直立する	不明瞭	ヨコナデ	精良。砂質。長石・黒色粒を少量含む。	表面：深い緑色, 断面：N7/0 灰白色	良好	外面に厚く釉が施される。
537	灰釉陶器	長頸壺	-	- (6.6)	口縁部片	頸部は外反しながら立ち上がる	ロクロナデ	ヨコナデ	精良。砂質。長石・微砂粒を含む。	表面：緑色,　断面：5Y7/1 灰白色	良好	二段構成。
538	灰釉陶器	浄瓶	-	- (9.2)	頸部片	まっすぐにのびる頸部	ロクロナデ	不明	精良。やや砂質。	表面：緑色,　断面：10Y7/1 灰白色	良好	下部内面にしぼり痕。

ＳＥ 1842 下層出土土器

遺物番号	種別	器形	法量区分	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
539	土師器	杯B	-	底径 11.8 (1.8)	底径 1/2	平らな底部に断面三角形の高台がつく。	底部ロクロケズリのちロクロナデ	ロクロナデ	やや精良。やや粘性。金雲母を多量含む。	2.5Y7/2 灰黄色	良	ロクロ土師
540	土師器	皿A	I	19.75 2.7	4/5	A	e－c	ナデ。板ナデ痕わずかに残る。	精良。やや砂質。石英・雲母を微量含む。	10YR8/3 浅黄橙色	良好	底部に「十」の墨書あり。
541	土師器	椀A	I	13.3 3.4	完形	E	c	ナデ	やや精良。粘性。赤色粒・雲母を微量含む。	2.5Y7/3 浅黄色	良好	底部に「一」の墨書あり。
542	土師器	椀A	I	13.8 3.7	3/4	B	c	ナデ。板ナデ痕が残る。	精良。粉性。赤色粒・雲母を微量含む。	7.5YR8/4 浅黄橙色	良好	外面全体煤吸着。灯明皿。
543	土師器	椀A	I	13.6 3.9	1/2	B	c	ナデ	精良。やや砂質。石英・雲母を微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	灯明皿。

遺物番号	種別	器形	法量区分	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
544	須恵器	杯A	Ⅱ	12.35 3.3	ほぼ完形	直線的に外方へのびる口縁	ロクロナデ	ロクロナデ	精良。やや砂質。	2.5Y8/1 灰白色	やや良好	灯明皿。
545	須恵器	杯A	Ⅱ	13.1 4.35	4/5	内湾して立ち上がり上半で外反する口縁	ロクロナデ	ロクロナデ	精良。やや砂質。長石・石英・金雲母を微量含む。	5Y7/1 灰白色	やや良好	
546	須恵器	壺M	－	底径 4.2 (7.0)	頸部欠損	A	ロクロ水挽きのち下部をロクロヘラケズリ	ロクロ水挽き	精良。長石・石英を微量含む。	N6/0 灰色	良好	底部回転糸切りのちナデ。

SR 4200 東西部砂礫層出土土器

	出土位置	種別	器形	法量区分	口径	残存率	形態	調整手法	胎土	色調	焼成	備考
観察	0X1H	土師器	杯A	Ⅱ	約13	口縁1/4	B	c	精良。黒色粒・雲母を少量，長石・石英を微量含む。	表面：10YR5/3 にぶい黄褐色 断面：10YR6/2 灰黄褐色	良好	煤付着
観察	0T1H	土師器	杯A	I	約20	口縁1/8	B	内面ナデ。外面ミガキ。	やや精良。長石・雲母を少量含む。	表面：5YR6/3 にぶい橙色 断面：5YR7/3 にぶい橙色	やや良	
観察	1A1H	土師器	杯A	I	約18	口縁1/8	B	e－c	やや精良。黒色粒・雲母を少量，長石を微量含む。	10YR7/4 にぶい橙色（やや赤味）	良	
観察	0V1H	土師器	杯A	I	約18	口縁1/6	A	e－c	精良。長石・雲母を多量，石英を微量含む。	2.5YR5/3～5YR5/3 にぶい橙色	良好	
観察	1B1H	土師器	杯B	－	底径約10	底部1/4	やや内側に肥厚する細い輪高台を持つ。	底部外面ケズリ。高台部貼付ナデ。見込みハケメ後外周のみナデ。	やや粗粒。長石・黒色粒・雲母を少量含む。	2.5Y6/4 にぶい黄色（やや黄味強）	やや良	9世紀末
観察	0V1H	土師器	杯	I	約18	口縁1/6	A	c	精良。長石・雲母を少量含む。	表面：10YR4/1 褐灰色 断面：10YR7/2 にぶい黄橙色	良	内外面とも煤付着
観察	0W1H	土師器	皿A	I	約20	口縁1/5	A	c'	黒色粒・赤色粒・雲母を少量，長石・白色粒を微量含む。	表面：7.5YR8/4 浅黄橙色 断面：7.5YR7/4 にぶい橙色	良好	9世紀前半
観察	0X1H	土師器	皿A	I	約20	口縁1/4	C	c'	黒色粒・白色粒を少量，長石・石英・雲母を微量含む。	10YR8/2 灰白色	良好	灯明皿。 9世紀前半
観察	0W1G 0W1H	土師器	皿A	I	約20	口縁1/5	A	c'	雲母を多量，赤色粒・白色粒を微量含む。	10YR8/2 灰白色	良好	9世紀前半
観察	1B1H	土師器	皿A	I	約19?	口縁1/8	A	c／e	長石・白色粒・赤色粒を微量含む。	7.5YR6/6 橙色	良好	9世紀前半
観察	0W1H	土師器	椀A	I	約13	口縁1/6	C	c'	精良。雲母を多量，長石を少量含む。	表面：7.5YR6/4 にぶい橙色（やや赤味） 断面：10YR8/1 灰白色	良	
観察	0X1H	土師器	椀A？	I	約13	口縁1/4	C	e－c	精良。長石・雲母を少量含む。	表面：10YR5/4 にぶい黄褐色 断面：10YR7/2 にぶい黄橙色	良好	内外面煤付着
観察	0Y1H	土師器	椀A	I	約12	口縁1/6	C	c'	やや精良。雲母を多量，長石・黒色粒を少量含む。	7.5YR6/4 にぶい橙色（やや赤味）	良	
観察	0R1H 0S1H	土師器	椀	I	約12	口縁1/8	C	e	やや精良。黒色粒を少量，長石・雲母を微量含む。	表面：7.5YR6/3 にぶい褐色（やや赤味） 断面：10YR8/2 灰白色	やや良	
観察	0W1H	土師器	蓋	－	約2	つまみ片	ボタン状のつまみ	ナデ	精良。長石・雲母を微量含む。	7.5YR7/4 にぶい橙色（やや白）	良好	
観察	0X1T	土師器	壺E	－	底径約7	底部1/8	撥状の輪高台	内面ナデ。外面ナデ後ミガキ。	やや精良。長石を多量，黒色粒を少量，雲母を微量含む。	表面：10YR7/1 灰白色 断面：2.5YR5/4 にぶい赤褐色	良	
観察	1B1H	土師器	甕	Ⅲ	約20	口縁1/6	端部は内外に肥厚。	口縁内面ハケメ後ナデ。口縁外面ナデ。体部外面タテのハケメ。	やや粗粒。黒色粒を多量，長石・石英・雲母を微量含む。	10YR7/4 にぶい黄橙色	良	他地域からの搬入か？近江？
観察	0R1G 0R1H 0S1G 0S1H	土師器	甕	Ⅳ	約13	口縁1/5	A	b	雲母をやや多く，黒色粒・赤色粒を微量含む。	表面：10YR8/1 灰白色 断面：5YR8/3 淡橙色	良	
観察	0W1H	土師器	甕	Ⅳ	約16	口縁1/8	B。内面基部に稜を持つ。	内外面ナデ	やや精良。黒色粒・雲母を多量，長石を少量含む。	表面：10YR6/2 灰黄褐色 断面：10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	
観察	0Y1H	土師器	甕	Ⅱ	約22	口縁1/8	A	b	赤色粒・雲母を少量，石英・白色粒を微量含む。	7.5YR7/3 にぶい橙色	良	煤付着

	出土位置	種別	器形	法量区分	口径	残存率	形態	調整手法	胎土	色調	焼成	備考
観察	0X1H	土師器	甕	Ⅲ	約18？	口縁1/15	A	b	石英・黒色粒・白色粒・雲母を微量含む。	10YR8/3浅黄橙色	良	煤付着
観察	1B1H	土師器	甕	Ⅲ	約21	口縁1/8	A	b	石英・黒色粒・白色粒・雲母を微量含む。	7.5YR8/3にぶい橙色	良	煤付着
観察	0T1H	土師器	甕	Ⅲ	約20	口縁1/4	B。基部にナデによる凹みを持つ。	口縁外面ナデ。口縁内面ヨコのハケメ。体部外面ナデ。体部内面雑なナデ。	精良。雲母を多量，長石・黒色粒を微量含む。	表面：10YR7/2にぶい黄橙色 断面：10YR8/1灰白色	良	外面部分的に煤付着
観察	0U1H	土師器	甕	Ⅲ	約19	口縁1/3	A。基部にナデによる凹みを持つ。	口縁外面タテのハケメ後ナデ。口縁内面ヨコのハケメ。体部外面タテのハケメ。体部内面ナデ。	精良。雲母を少量，長石・黒色粒・赤色粒を微量含む。	表面：10YR3/2黒褐色 断面：10YR8/1灰白色	良好	外面全体に煤付着
観察	1A1H	土師器	甕	Ⅱ	約24	口縁1/10	A	口縁外面タテのハケメ後ナデ消し。口縁内面ヨコのハケメ後ナデ消し。肩部ヨコのカキメ。体部内面ナデ。	やや粗粒。長石・石英・黒色粒・雲母を少量，石英・赤色粒を微量含む。	表面：5YR6/6橙色 断面：7.5YR7/4にぶい橙色	やや良	
観察	0U1H	須恵器	杯B	－	高台径15	底部1/4	不明	外面回転ヘラケズリとナデ	白色粒・黒色粒・雲母を微量含む。	表面：5Y7/1灰白色 断面：5Y8/1灰白色	良軟質	断面層状
観察	0W1H	須恵器	杯B	Ⅱ	18	1/6	外反する口縁	ロクロナデのち口縁部ナデ。底部不明。	白色粒・黒色粒を微量含む。	表面：5Y6/1灰色 断面：5Y7/1灰白色	良軟質	煤付着。灯明具？
観察	0W1H	須恵器	杯	Ⅲ	約15	口縁1/10	直線的に外方へのびる口縁	ロクロナデ後口縁端部ナデ	黒色粒・雲母を微量含む。	10YR8/1灰白色（やや白）	良好 軟質	墨書あり。
観察	0W1H	須恵器	杯B蓋	Ⅲ	約16	口縁1/5	A	頂部回転ヘラケズリ。内面・口縁端部ナデ。	白色粒を微量含む。	5PB6/1青灰色	良好 硬質	
観察	0U1H	須恵器	杯B蓋	Ⅳ	約14	口縁1/6	A	頂部回転ヘラケズリ。内面・口縁端部ナデ。	白色粒を少量，黒色粒・長石を微量含む。	表面：5PB6／1青灰色 断面：10YR6/1褐灰色	良好 硬質	口縁端部に自然釉付着。
観察	0V1H	須恵器	椀？	Ⅳ	約14	口縁1/4	丸味を持って内湾する口縁	ロクロナデのち口縁端部ナデ	白色粒を少量，黒色粒・石英を微量含む。	5Y7/1灰白色	良 硬質	煤付着。灯明具？
観察	0U1H	須恵器	平瓶	－	高台径約11	体部1/8	肩部に稜をなす。輪高台。	外面回転ヘラケズリ。指頭圧痕有り。	黒色粒・白色粒を少量含む。	表面：N8/0灰白色 断面：N7/0灰白色	良好 硬質	
観察	0V1H	須恵器	壺M	－	－	底部1/2	胴部イチジク形。無高台。	ロクロ形成。底部糸切り未調整。外面ロクロナデ。内面底部～胴部水引痕あり。	精良。白色粒を極微量含む。	内面：5B6/1青灰色（やや灰色がかる）外面：10BG6/1青灰色（やや灰色がかる） 断面：5B6/1青灰色	良好	内面1ヶ所火ぶくれあり
観察	0T1H	須恵器	有蓋短頸壺	－	10	口縁と体部1/5	イチジク形の器体	ロクロ水挽き後外面を回転ヘラケズリ。内面の水挽き痕は弱く残る。	白色粒を多量，長石・黒色粒を少量，石英を微量含む。	表面：10GB5/1青灰色 断面：N7/0灰白色	良好	肩部に多量の自然釉が付着する。
観察	0R1G 0R1H 0S1G 0S1H	土師器	壺	－	－	底部	平底	内外面ナデ	やや粗粒。長石・石英・黒色粒を多量含む。	10YR7/2にぶい黄橙色	良	古墳時代。
観察	0V1H	土師器	壺？	－	約16	口縁1/8	やや外反気味に立ち上がる。口縁端部は面を持ちきざみ目を持つ。	口縁外面ナデ。口縁内面ハケ状の物で左斜め上へナデ上げる。	やや精良。石英を多量，雲母を微量含む。	表面：7.5YR6/2～5/2灰褐色 断面：7.5YR7/2明褐灰色	良	弥生
観察	0Y1H	土師器	甕	Ⅳ	約14	口縁1/8	ほぼまっすぐな口縁。端部下にわずかにナデによる凹みを持つ。	内外面ともナデ	やや粗粒。長石・黒色粒を少量，φ1～3mmの長石粒を含む。	10YR8/1灰白色	やや不良	外面一部に煤付着。古墳時代？
観察	0X1H	土師器	甕	－	－	口縁部片	二重口縁。口縁一段目に刺突文あり。	不明	やや精良。長石・石英・他砂粒を多量含む。	10YR8/3浅黄橙色	やや不良	弥生後期近江系

S R 4200 南北部砂礫層出土土器

	出土位置	種別	器形	法量区分	口径	残存率	形態	調整手法	胎土	色調	焼成	備考
観察	X 軸 1T ～ 1Y	土師器	杯 A	I	約 18	口縁 1/6	B	e － c	精良。黒色粒を少量，長石を微量含む。	10YR6/4 にぶい黄橙色	良	
観察	1F1M	土師器	杯 A	I	約 18	口縁 1/16	B	e － c	やや粗粒。長石・黒色粒を多量，雲母を微量含む。	表面：7.5YR6/3 にぶい褐色～6/4 にぶい橙色 断面：7.5YR7/4 にぶい橙色	やや良	口縁立ち上がり部にせん孔あり。
観察	1F1L	土師器	杯 B	－	底径約 9	底部 1/6	方形状の輪高台	ナデ	やや粗粒。長石を微量含む。	10YR8/3 浅黄橙色	やや良	内面に煤付着。
観察	1I1V 1J1V	土師器	杯 B	－	底径約 12	底部 1/8	方形の輪高台	ナデ	精良。雲母を多量，長石・黒色粒を少量含む。	表面：10YR7/4 にぶい黄橙色（やや赤味） 断面：10YR7/3 にぶい黄橙色	良	
観察	1J1Y	土師器	杯 B	－	底径約 10	底部 1/3	台形状の低い輪高台。端部内側が接地。	ナデ	やや精良。長石・石英・黒色粒を少量含む。	表面：2.5YR6/8 橙色 断面：7.5YR6/6 橙色	良	
観察	X 軸 1T ～ 1Y	土師器	杯 B	－	底径約 12	底部 1/10	やや高い三角形状の輪高台。	ヘラケズリ後ミガキ。	やや精良。長石・黒色粒を微量含む。	7.5YR6/4 にぶい橙色（やや明）	良	
観察	1F1L	土師器	杯 B	－	底径約 12	底部 1/6	幅が狭く高い方形の輪高台。	ナデ	やや精良。長石を少量含む。	5YR6/6 橙色	やや良	
観察	X 軸 1T ～ 1Y	土師器	皿 A	I	約 20	口縁 1/6	A	e － c	雲母をやや多く，石英・黒色粒・赤色粒・白色粒を微量含む。	表面：10YR7/4 にぶい黄橙色 断面：10YR8/1 灰白色	良好	9 世紀前半。
観察	X 軸 1T ～ 1Y	土師器	皿 A	I	約 21	口縁 1/4	A	e － c	白色粒をやや多量，石英・黒色粒・赤色粒・雲母を微量含む。	7.5YR6/6 橙色	良好	9 世紀前半。
観察	1I1W	土師器	椀 A	I	約 13	口縁 1/4	B	e － c	精良。黒色粒を多量，雲母を少量，長石を微量含む。	表面：7.5YR6/4 にぶい橙色 断面：10YR7/4 にぶい黄橙色	良好	
観察	1F1K	土師器	椀 A	I	約 13	口縁 1/4	A	c	やや精良。長石・黒色粒を少量含む。	7.5YR6/4 にぶい橙色	良	
観察	1G1O 1G1S	土師器	椀 A	I	約 12	口縁 1/4	B	c	やや精良。黒色粒・雲母を多量，長石・石英を微量含む。	表面：10YR7/4 ～ 6/4 にぶい黄橙色 断面：10YR8/1 灰白色	やや良	
観察	1D1J 1E1J	土師器	椀 A	II	約 9	口縁 1/5	C	不明	やや粗粒。長石を多量，石英・チャート・雲母・黒色粒・白色粒を微量含む。	表面：10YR7/3 にぶい黄橙色 断面：10YR6/3 にぶい黄橙色	良	
観察	1D1J 1E1J	土師器	椀？	－	－	－	C	a か b	やや粗粒。長石・黒色粒を少量含む。	表面：7.5YR5/3 にぶい褐色 断面：10YR7/3 にぶい黄橙色	やや良	ロクロ土師器？
観察	1C1H	土師器	蓋	－	約 3.2	つまみ部	宝珠状のつまみ。頂部の突起以外は平坦。	ナデ	やや精良。長石・黒色粒を微量含む。	10YR7/4 にぶい黄橙色（やや赤味）	良好	
観察	1E1L 1F1L	土師器	壺 E	－	肩径約 11	肩部 1/8	肩部の屈曲が強く，上面に凹みを持つ。	ナデ後ミガキ	やや精良。雲母を多量，黒色粒を少量，長石を微量含む。	表面：10YR6/3 にぶい黄橙色 断面：10YR7/3 にぶい黄橙色	やや良	
観察	1F1L	土師器	高杯 A	－	約 25	口縁 1/8	口縁端部折り曲げ気味にかすかに突出させる。口縁部外反。	底部部分的にヘラケズリ。口縁端部ナデ。内面ナデ。	長石をやや多く，石英・黒色粒・白色粒・雲母を微量含む。	表面：5YR8/4 淡橙色 断面：7.5YR8/2 灰白色	良	
観察	1D1K 1D1H X 軸 1T ～ 1Y	土師器	高杯 B	－	約 24	口縁 1/6	口縁端部巻き込み。口縁部大きく外方に開きながら直線的に立ち上がる。	口縁内面ナデ。口縁外面ヘラ削り。	黒色粒・赤色粒・白色粒・雲母を少量，長石・石英を微量含む。	表面：7.5YR7/4 にぶい橙色 断面：10YR8/3 浅黄橙色	良好	
観察	1D1I 1E1I	土師器	甕	IV	約 16	口縁 1/8	A	内外面ナデ	やや精良。黒色粒を少量，長石・石英を微量含む。	表面：5YR6/3 ～ 6/4 にぶい橙色 断面：7.5YR7/2 明褐灰色	やや良	
観察	1G1Q 1G1R 1J1U 1J1V	土師器	甕	III	約 21	口縁と体部 1/4	A	c	雲母をやや多く，石英・黒色粒・白色粒を微量含む。	表面：10YR8/1 灰白色 断面：7.5YR8/2 灰白色	良	

	出土位置	種別	器形	法量区分	口径	残存率	形態	調整手法	胎土	色調	焼成	備考
観察	X軸1T～1Y	土師器	甕	Ⅱ	約26	口縁1/10	A	内外面ナデ。	やや粗粒。長石を少量含む。	10YR7/3にぶい黄橙色	やや良	
観察	1I1V 1I1Y	土師器	甕	Ⅳ	約18	口縁1/5	A	c	石英・黒色粒・白色粒・雲母を微量含む。	10YR8/2灰白色	良	
観察	X軸1T～1Y	土師器	甕	Ⅳ	約18	口縁1/8	A	c	石英・黒色粒・白色粒・雲母を微量含む。	7.5YR8/4にぶい橙色	良	煤付着。
観察	1F1M	土師器	甕	Ⅲ	約22	口縁1/8	D	b	石英・黒色粒・白色粒・雲母を微量含む。	表面：10YR8/3浅黄橙色 断面：7.5YR8/2灰白色	良	
観察	1C1H 1D1I 1F1L	土師器	甕	Ⅱ	25.8	口縁1/3	A	b調整。外面の体部上半から口縁部下半にタタキ痕がある。	長石・石英・雲母・黒色粒を多量含む。	10YR7/3にぶい黄橙色	良好	
観察	1I1W	土師器	甕	Ⅳ	約14	口縁1/5	B。基部にナデによる強い凹みを持つ。	口縁外面はタテのハケメ後ナデ消し。内面ナデ。体部外面は右上がりのタテの細いハケメ。	やや精良。長石・雲母を少量含む。	表面：10YR5/1褐灰色 断面：10YR6/1褐灰色	良	全体に煤付着。
観察	1I1Y	土師器	甕	Ⅳ	約18	口縁1/6	A。基部にナデによる凹みを持つ。	外面ナデ。内面ヨコのハケメ。	やや精良。雲母を少量，長石を微量含む。	表面：10YR7/1灰白色 断面：10YR8/1灰白色	良	
観察	1F1K	土師器	甕	－	－	口縁	口縁端部は内側上方につまみ上げられる。端面に凹線を持つ。	外面タテのハケメ，口縁部のみナデ消し。内面口縁部ナナメのハケメ後ナデ消し。体部ヨコのハケメ後ナデ。	粗粒。長石ほか砂粒を多量含む。	10YR6/4にぶい黄橙色	やや良	外面に煤付着。平安の甕，特殊な胎土。
観察	1D1I	土師器	甕	Ⅳ	約10	口縁1/8	口縁は直線的にのびる。端部は丸くおわる。	内外面ナデ	やや粗粒。長石を多量，黒色粒をやや多く，雲母微量含む。	5Y6/4にぶい橙色（やや暗）	やや不良	河内・和泉系。
観察	1D1I 1D1K 1E1I 1E1K	黒色土器	杯A	－	約18	1/4	－	底部ヘラケズリ。内面と外面口縁部にミガキ。口縁端部ヨコナデ。	石英・雲母・黒色粒を微量含む。	表面：N2/0黒色 断面：2.5Y3/2黒褐色	良	
観察	1C1J 1D1J	須恵器	杯A	Ⅲ	約10	底部1/5	直線的に外方へのびる口縁	口縁端部弱いヨコナデ。	長石・白色粒・黒色粒を微量含む。	表面：N7/0灰白色 断面：5Y6/1灰色	良	墨書有り。判読不明。
観察	1C1H	須恵器	杯A	Ⅱ	約14	口縁と底部1/5	丸みをもって内湾する口縁	ロクロナデのち口縁端部ナデ。	白色粒・黒色粒・石英を微量含む。	表面：2.5Y6/1黄灰色 断面：2.5Y7/1灰白色	良好 硬質	口縁端部に重ね焼の煤付着。
観察	1J1U	須恵器	杯A	－	高台径約6	底部1/2	不明	ロクロナデ。内面ヨコナデ。	白色粒をやや多量，長石・黒色粒・石英を微量含む。	表面：N5/0灰色 断面：N5/0灰色・2.5Y5/1赤灰色	良好 硬質	
観察	1F1M	須恵器	杯A	Ⅱ	約12.5	口縁1/4	直線的に外方へのびる口縁	ロクロナデのち口縁端部ナデ	白色粒を少量，黒色粒・長石を微量含む。	表面：不明 断面：7.5YR7/1明褐灰色	良 軟質	灯明具？
観察	1E1J 1D1J	須恵器	杯	Ⅱ	約13	口縁1/4	直線的に外方へのびる口縁	内外面ロクロナデ後口縁端部ナデ	黒色粒を少量，雲母を微量含む。	10YR8/1灰白色	良好 軟質	
観察	X軸1T～1Y	須恵器	杯B	Ⅰ	約18	1/6	－	ロクロナデのち口縁部ナデ。底部不明。	白色粒・黒色粒を微量含む。	N7/0灰白色	良好 硬質	
観察	1F1K	須恵器	杯B	－	高台径12	底部1/5	不明	外面回転ヘラケズリとナデ	黒色粒をやや多量，白色粒・赤色粒・長石を微量含む。	表面：N5/0灰色 断面：2.5Y7/1灰白色	良 軟質	
観察	1E1K	須恵器	杯B	－	底径約9	底部1/5	方形の輪高台にやや内湾する口縁部。底部と口縁部の境は稜を持つ。	内外面ロクロナデ	やや精良。黒色粒・長石を微量含む。	表面：5BG6/1青灰色 断面：10G6/1緑灰色	良	
観察	1E1J 1D1J	須恵器	杯	Ⅳ	約13	口縁1/4	直線的に外方へのびる口縁	内外面ロクロナデ後口縁端部ナデ	黒色粒を少量，雲母を微量含む。	10YR8/1灰白色	良好 軟質	
観察	－	須恵器	杯	Ⅲ	約16.5	口縁1/4	直線的に外方へのびる口縁	ロクロナデのち口縁端部ナデ	白色粒・黒色粒を微量含む。	5Y6/1灰色	良 硬質	口縁端部に重ね焼の煤付着。

	出土位置	種別	器形	法量区分	口径	残存率	形態	調整手法	胎土	色調	焼成	備考
観察	1F1K	須恵器	杯	Ⅳ	約 13	口縁 1/8	直線的に外方へのびる口縁	ロクロナデ後口縁端部ナデ。	雲母を少量，黒色粒・白色粒を微量含む。	10YR6/1 褐灰色	良好 硬質	口縁外面に重ね焼き痕がある。
観察	1E1L 1F1L	須恵器	杯Ｂ蓋	－	約 2.3	つまみ部のみ	擬宝珠状のつまみ	－	白色粒を少量，石英・黒色粒を微量含む。	N7/0 灰白色	良好 硬質	
観察	1C1H	須恵器	杯Ｂ蓋	Ⅲ	約 17	口縁 1/5	A	－	白色粒・黒色粒・石英を微量含む。	7.5Y6/1 灰色	良好 硬質	ハリツケのナデ調整痕あり。
観察	1F1K	須恵器	杯Ｂ蓋	Ⅲ	約 18	口縁 1/5	A	頂部回転ヘラケズリ。内面・口縁端部ナデ。	赤色粒・白色粒を微量含む。	7.5YR6/2 灰褐色	良好 硬質	内外面に煤付着。口縁外面に重ね焼き痕がある。
観察	1D1I 1C1H	須恵器	壺Ｌ	－	底径約 11	底部 1/4	卵形の体部，擬上の高台を持つ。	内外面ロクロナデ。底部ヘラケズリのちナデ。	精良。黒色粒を多量，長石を少量含む。	5B6/1 青灰色	良好	外面に自然釉付着。
観察	1J2A 1K2A	須恵器	甕Ａ	－	15	口頸部 1/4	口縁端部は外下方へ突出する。	外面格子タタキ。内面は同心円文後ナデ消す。	長石・雲母・黒色粒・白色粒を微量含む。	表面：10YR3/1 黒褐色 断面：5Y6/1 灰色	やや良	播磨産。口縁部内面と肩部に少量の自然釉付着。頸部外面は還元焔焼成化されておらず赤褐色を呈す。
観察	1F1M 1F1N 1G1O 1G1S	須恵器	甕	－	－	体部	－	タテの細かいタタキ目。その上からナナメの平行タタキ。内面は同心円文。	やや精良。長石を多量，黒色粒を微量含む。	5YR6/1 黄灰色	良好	特徴的なタタキ。
観察	1C1H	須恵器	高杯	－	－	脚部片	透し窓がある	ロクロ水挽き痕が弱く残る。	黒色粒をやや多く，石英，白色粒を微量含む。	表面：N5/0 灰色 断面：5Y7/1 灰白色	良	古墳時代。
観察	1D1K	須恵器	高杯Ｃ	－	底径約 15	裾部 1/6	裾部はゆるやかに外下方に広がり，端部に面を持つ	内外面ロクロナデ	やや精良。黒色粒を多量，長石・石英を微量含む。	表面：2.5Y7/3 浅黄色 断面：2.5Y6/3 にぶい黄	良	古墳時代。
観察	1D1J 1E1J	土師器	甕	－	約 18	口縁 1/10	ほぼまっすぐに立ち上がる。口縁端部に水平な面を持つ。外面にナデによる凹みを持つ。	内外面ナデ	やや精良。長石・石英・黒色粒を多量含む。	10YR6/3 にぶい黄橙色	やや良	古墳時代。
観察	1D1K 1F1K	土師器	甕	－	約 26	口縁 1/10	口縁はやや内湾気味で端部は面を持ち内側に肥厚。	体部内外面，左上がりのナナメのハケメ。口縁はナデ消し。口縁内面はヨコのハケメ後ナデ。	やや精良。長石・石英・雲母をやや多量含む。	10YR6/4 にぶい黄橙色	やや良	古墳時代。
観察	1C1H 1E1H	須恵器	甕	－	－	頸部	頸部に２条の凹線が２段あり，その間にナナメの線刻がある。	内外面ロクロナデ	やや精良。長石を多量，黒色粒を微量含む。	表面：5B5/1 青灰色 断面：5B6/1 ～ 5/1 青灰色	良好	古墳時代。
観察	1D1J	土師器	壺	－	約 9.5	底部 1/1	円盤高台状の底部	内外面ともナデ	やや粗粒。長石・石英他砂粒を極多量，チャートを少量含む。	表面：10YR6/3 にぶい黄橙色（やや灰味） 断面：10YR5/1 ～ 4/1 褐灰色	やや良	弥生時代。
観察	1E1L 1F1L	土師器	甕	－	約 13	口縁 1/3	口縁端部は素直におわる。	外面は非常に細かいハケメ，口縁端部のみナデ消し。内面は口縁部右上がりのハケメ後ナデ，体部ナデ。	精良。長石・雲母を少量含む。	表面：10YR6/2 褐灰色 断面：10YR8/1 灰白色	良	弥生時代。

S R 0001 東西部中層出土土器

	出土位置	種別	器形	法量区分	口径	残存率	形態	調整手法	胎土	色調	焼成	備考
観察	0V1I 1D1V	土師器	高杯A	−	−	脚部不明	面取り三面のみ確認できる。	芯棒巻き付け技法	石英・白色粒をやや多く，長石・蛍母を少量，赤色粒を微量含む。	表面：7.5YR8/3 浅黄橙色 断面：7.5YR8/2 灰白色	良	
観察	1D1I	土師器	甕	−	−	基部	不明	体部にカキメ痕あり	白色粒を多量，長石・チャートを少量含む。	表面：5YR7/2 明褐灰色 断面：2.5YR7/4 淡赤橙色	やや良	河内・和泉系
観察	1D1I	須恵器	杯B蓋	−	約18	口縁径1/8	A。ほぼ平らでわずかに屈曲する縁部を持つ。端部は下方に突出する。	ロクロナデ。頂部ヘラキリ後ナデ。	やや密。長石を少量，石英・黒色粒を微量含む。	10G6/1 緑灰色	良	9世紀前半？
観察	1D1H	須恵器	杯B	−	受部径約14	口縁部不明	体部中程に外方にのび上がる受部を持つ。有蓋杯，高杯？	底部回転ヘラケズリ後ナデ。	長石・白色粒を多量，チャートを少量含む。	表面：5B5/1 青灰色 断面：5P5/1 紫灰色	硬質良	古墳時代。
観察	−	須恵器	杯B	−	底部径約11	底部1/6	方形状の輪高台	ロクロナデ。底部ヘラキリ後ナデ。	やや密。長石・黒色粒を微量含む。	N6/0 灰色（やや明るい）	良	
観察	0U1I 0U1J	須恵器	杯	−	約14.5	口縁部1/6	丸味を持って内湾する口縁	ロクロナデ	精良。長石を多量，石英を微量含む。	10BG5/1 青灰	良好	
観察	1A1H	須恵器	皿	−	約18	口縁部1/10	直線的に外方へのびる口縁。端部素直におわる。	ロクロナデ。底部ヘラキリ後ナデ。	やや粗粒。長石・黒色粒を少量，石英を微量含む。	表面： 10Y6/1 灰色 断面：5Y7/2 灰白色	やや不良	器高2.5cm 底部の内外面に煤付着。
観察	0X1I	須恵器	壺	−	高台径約16？	底部1/10	貼り付け輪高台	外面に自然釉付着	黒色粒・白色粒を微量含む。	表面：N7/0 灰白色 断面：N8/0 灰白色	硬質良	
観察	0X1I 0U1I	須恵器	壺	−	底部径約11	底部1/4	平らな底部にわずかに内湾しながら立ち上がる。	ロクロナデ。底部ヘラキリ後ナデ。外面ヘラケズリ後ナデ。	精良。長石・黒色粒を少量含む。	10BG6/1 青灰色	良	
観察	0V1I	須恵器	甕	−	約33	口縁部1/10	口縁部がほぼまっすぐに立ち上がり端部が水平な面をもつ。	ロクロナデ。口縁外面にヨコの様なクシメの様な痕あり。	やや密。長石・黒色粒を少量含む。	表面： 外側 7.5YR5/3 にぶい褐色 内側 5GB6/1 青灰色 断面：10G6/1 緑灰色	良	
観察	0T0I 0T1J	須恵器	甕	−	約24	口縁部1/10	口縁部がほぼまっすぐに立ち上がり端部が二段になり水平な面を持ち内外面に張り出す。	ロクロナデ	やや密。長石を少量，黒色粒を微量含む。	表面：N7/0 灰白色 断面：5Y8/1 灰白色	やや良	口縁内外面自然釉。 長岡京期か？
観察	1B1F 1C1G 1D1H 1E1I	須恵器	甕	−	約23	−	丸底。口縁は外にほぼまっすぐのび，端部はわずかに外反し外へつまみ出す。端部にくぼみを持つ面がある。	内面：底部付近平行。上部弓状の当て具。外面：格子タタキ。	やや粗粒。長石・黒色粒を多量，石英を少量，蛍母を微量含む。	表面：N7/0 〜8/0 灰白色 断面：2.5YR6/2 灰赤色	やや良	肩部に自然釉。内面一部に煤付着。
観察	0T1I	須恵器	平瓶	−	肩径約21	肩部1/8	−	ロクロナデ	やや密。黒色粒を多量，長石を少量含む。	表面：5B6/1 青灰色 断面：5RP6/1 紫灰色	良	
観察	0V1I 0W1I	灰釉陶器	椀	−	高台径6.5	底部1/2	方形の輪高台を貼り付ける。底部にやや丸みを持つ。	内面ロクロナデ。外面底部ヘラケズリ。	白色粒を少量，黒色粒を微量含む。	表面：7.5Y7/1 灰白色 断面：N7/0 灰白色	良好	K−90。体部内面は無釉。
観察	0Y1I	灰釉陶器	食膳具	−	底部径約9	底部1/8	三日月高台を貼り付ける。高台外側と底部付け根に凹線を持つ。	回転ヘラケズリ後ナデ。	やや粗粒。長石・黒色粒を微量含む。	N8/0 灰白色	やや良	K−90。9世紀前半？
観察	0S1I	灰釉陶器	皿	−	底部径約4	底部1/4	無高台（取れたのか？）	外面，回転ヘラケズリ後ナデ。	やや精良。長石・黒色粒を微量含む。	N8/0〜 7/0 灰白色 釉：7.5Y5/2 灰オリーブ色	良	
観察	0W1I	灰釉陶器	食膳具	−	底部径約7	底部1/6	細く短い輪高台（貼り付け）	外面ナデ	やや精良。黒色粒を少量，長石を微量含む。	N8/0 灰白色 釉：7.5Y5/2 灰オリーブ色	やや良	内面施釉
観察	0S1H	灰釉陶器	椀	−	底部径約9	底部1/8	三日月高台（貼り付け）。高台外側と底部付け根に凹線を持つ。	外面：回転ヘラケズリ後ナデ。内面：ナデ。	やや精良。黒色粒を少量，長石を微量含む。	N8/0 灰白色	良	O−53。10世紀前半？

	出土位置	種別	器形	法量区分	口径	残存率	形態	調整手法	胎土	色調	焼成	備考
観察	0X1I	灰釉陶器	椀	−	底部径約7	底部1/4	高く少し外傾する輪高台を持つ。	外面ヘラケズリ後ナデ。	やや精良。長石・黒色粒を微量含む。	N8/0灰白色（やや灰色）	良	H－72
観察	0T1I	灰釉陶器	食膳具	−	底部径約6	底部1/6	三日月高台を貼り付ける。	ロクロナデ	やや精良。長石・黒色粒を微量含む。	N8/0灰白色（やや緑）釉：7.5Y6/2灰オリーブ色	やや良	O－53。10世紀前半？内面施釉
観察	0V1I	灰釉陶器	壺	−	底部径約9	底部1/4	外傾する輪高台	内外面，ロクロナデ。底部ヘラキリ後ナデ。	やや粗粒。黒色粒を多量，長石を微量含む。	N8/0灰白色（やや灰色）	良	
観察	0R1I	灰釉陶器	皿	−	底部径約8	底部1/6	三日月高台を貼り付ける。	回転ヘラケズリ後ナデ。底部ヘラキリ後ナデ。	やや精良。長石・黒色粒を微量含む。	釉：5Y6/3オリーブ黄色 N8/0灰白色	良	K－90。9世紀前半？内面施釉。
観察	0V1I 0W1I	灰釉陶器	椀	−	底部径約6.5	底部1/4	高く少し外傾する三角形状の高台。	内外面，回転ヘラケズリ後ナデ。	やや粗粒。黒色粒を少量，長石を微量含む。	表面：N8/0灰白色（やや灰色強）断面：5Y8/3淡黄色	やや良	K－90。
観察	0V1I	灰釉陶器	壺	−	口頸部径約7	口頸部1/5	−	口頸部接合後ナデ	黒色粒をやや多く，白色粒を少量含む。	表面：5Y5/2灰オリーブ色 断面：2.5Y7/1灰白色	良	自然釉多量付着。
観察	0Yライン	灰釉陶器	椀	−	高台径8.2	底部1/3	方形の輪高台を貼り付ける。	−	白色粒を少量，黒色粒を微量含む。	表面：10Y5/2オリーブ灰色 断面：2.5Y7/2灰黄色	良好	K－90。体部内面は無釉。
観察	0U1I	灰釉陶器	壺	−	−	−	−	−	やや粗粒。黒色粒を多量，長石・石英を少量含む。	断面：10BG6/1青灰色 釉：10BG7/1明青灰色	良 硬質	猿投産。
観察	0T1I	緑釉陶器	皿	−	高台径6	底部1/2	円盤高台	高台ケズリだし	やや精良。長石を多量，黒色粒を少量含む。	表面：5GY3/1暗オリーブ灰色 断面：7.5YR8/1灰白色	良好 軟質	洛北系。
観察	0U1I	緑釉陶器	皿	−	底部径約9	底部1/8	台形状の輪高台を貼り付ける。端部外側が接する。	ナデ	やや精良。長石を多量，黒色粒を少量含む。	断面：N7/0灰白色 釉：7.5Y5/3灰オリーブ色（暗い）	やや良 硬質	内外面施釉。
観察	0W1I	緑釉陶器	食膳具	−	底部径約7	底部1/6	円盤高台	−	やや精良。長石をやや多く，黒色粒を少量含む。	N8/0灰白色 釉：7.5Y7/2灰白色	やや良 硬質	内面施釉。
観察	0S1I	緑釉陶器	皿	−	底部径約9	底部1/6	輪高台（貼り付け）	−	やや精良。長石・石英・黒色粒を微量含む。	N8/0灰白色（やや緑）釉：10Y6/2オリーブ灰色	良 硬質	内外面施釉。除刻あり。9世紀中葉以降。
観察	0U1I	緑釉陶器	食膳具	−	底部径約6	底部1/6	円盤高台。外側が接する。	底部回転ヘラケズリ後ナデ。内外面ヘラミガキ。	精良。長石・黒色粒を微量含む。	表面：N7/0灰白色（やや緑）断面：2.5Y7/3浅黄色	良 硬質	素地
観察	0V1I	緑釉陶器	皿	−	底部径約6	底部1/4	円盤高台	回転ヘラミガキ	粗粒。長石・石英・黒色粒を少量含む。	7.5Y8/1灰白色 釉：7.5Y5/2灰オリーブ色	やや良 硬質	内外面施釉
観察	0V1I	緑釉陶器	椀	−	底部径約10	底部1/6	高い台形　外傾輪高台（貼り付け）。外側が接する。	内外面ナデ	やや精良。長石・黒色粒を少量含む。	7.5YR8/3浅黄橙色 釉：7.5Y5/2灰オリーブ色	良 硬質	内外面施釉
観察	0R1I	青磁	椀？	−	−	−	−	−	精良。黒色粒を微量含む。	断面：N8/0灰白色 釉：10Y6/2オリーブ灰色	良好 硬質	晩唐。越州窯。
観察	0W1I	青磁	皿	−	約14	口縁部1/10	まっすぐな口縁。わずかに外反する端部。	−	精良。黒色粒を微量含む。	断面：N8/0灰白色 釉：10Y6/2オリーブ灰色	良好 硬質	晩唐。越州窯。
観察	0Y1I	青磁	椀	−	約17	口縁部1/10	わずかに内湾する口縁	−	やや精良。長石・黒色粒を微量含む。	断面：10Y6/1灰色 釉：10Y5/2オリーブ灰色	良好 硬質	越州窯？
観察	0Y1I	黒色土器	椀か杯	−	底部径約8	底部1/6	三角形の輪高台	内面ミガキ	やや精良。長石・黒色粒を微量含む。　B群	7.5YR7/3にぶい橙色	良	A類
観察	0W1I	土師器	甕	−	−	口縁部	二重口縁	口縁内外面ナデ	やや密。長石・黒色粒を多量，石英を少量含む。	表面：10YR8/2灰白色（やや黄色気味）断面：5GB4/1暗青灰色	やや良	古墳時代

S D 655 出土土器

	層序	種別	器形	法量区分	口径	残存率	形態	調整手法	胎土	色調	焼成	備考
観察	3層	土師	杯B	−	高台径約9	高台部	丸味を持って内湾する口縁か？口縁部欠損のため不明	外面にヘラケズリ。内面にヨコナデ。	やや密。長石(φ1mm)・石英(φ0.5mm)を2,3粒，後は少量含む。	7.5YR8/2 灰白色	良	
観察	3層	土師	杯？	−	約17	1/8	体部は内湾し口縁部でやや外反。口縁端部は内側に若干肥厚し直下が浅くくぼむ。	内・外面とも全体的にヨコナデ	良。赤色粒を少量，雲母を微量。	内面 7.5YR7/4 にぶい橙色 外面 10YR2/1 黒色 断面 10YR8/3 浅黄橙色（赤味がかる）	良	
観察	2層	土師	Ⅲ	Ⅱ	15.5	1/4	E。口縁端部わずかに外反。素直におわる。	e	やや密。長石・黒色粒を少量，石英・金雲母を微量含む。	表面：5YR8/2 灰白色・5YR7/4 にぶい橙色 断面：5YR7/4 にぶい橙色	やや良	
観察	3層	土師	ⅢA	Ⅰ	約18	1/12	体部内湾。口縁部外面は強いヨコナデにより著しくくぼむ。口縁端部は内側に肥厚し内面直下が著しくくぼむ。	口縁部：ヨコナデ，以下不調整 内面：ヨコナデ	精良。含有物なし	7.5YR8/2 灰白色（黄味がかる）	良	
観察	2層	土師	ⅢA	Ⅱ	約15	1/8	体部は丸味を帯びて立ち上がり，中頃で外反する。口縁部外面は強いヨコナデによりくぼむ。口縁端部は肥厚し，内面は内上方に突出。	外面：口縁部ヨコナデ，以下不明 内面：ヨコナデ	やや粗粒。雲母中量，長石・石英を少量，赤色粒微量含む。	表面 10YR8/1 灰白色。 断面 10YR7/4 にぶい黄橙色	やや不良	
観察	3層	土師	ⅢA	Ⅱ	約15	1/6	口縁部若干外反。口縁外面はヨコナデにより著しくくぼむ。口縁端部は素直におわる。	外面：口縁部ヨコナデ，以下不明。指頭圧痕残す。 内面：ヨコナデ	やや粗粒。長石・石英を多量，赤色粒・黒色粒微量含む。	7.5YR8/1 灰白色（黄味がかる）	やや不良	
観察	3層	土師	甕	Ⅱ	約24	1/16（口縁〜頸部）	頸部は外反し口縁部で内湾する。口縁端部は内側へ肥厚する。	内・外面ともヨコナデ	やや粗粒。長石・石英・チャート(φ〜1.5mm)を多量，雲母を中量含む。	2.5Y8/2 灰白色	良好	
観察	1層	土師	甕	Ⅰ	約30	1/12	頸部で「く」の字状に屈曲する。口縁端部内面は巻き込むように突出する。	外面：体部を斜めにタタキの後頸部から口縁端部までヨコナデ 内面：頸部以下不明，頸部〜口縁部はヨコナデ	粗粒。長石・石英（φ〜3mm）細砂粒を多量，角閃石を少量，雲母を微量含む。	表面 2.5Y8/2 灰白色 断面 2.5Y8/3 淡黄色	良	
観察	3層	土師	甕	Ⅲ	約19	1/4	体部は内湾し，頸部で「く」の字状に屈曲，口縁部に至る。口縁端部内面は内上方へ突出する。	外面頸部以下一部ハケメ残存 外面頸部以上ナデ 内面ヨコナデ	良。雲母を多量，赤色粒を微量含む。	表面 10YR2/1 黒色 断面 10YR8/1 灰白色	良	
観察	2層？	土師	甕	Ⅳ	16.6	1/12	体部はやや丸味を帯び，頸部で「く」の字状に屈曲。口縁端部内面は巻き込むように突出する。	外面：ヨコハケ後ナデ消し，内面：頸部以下ヨコハケ後ナデ調整頸部以上不明	やや粗粒。雲母を多量，長石を微量，角閃石を極微量含む。	表面 10YR6/3 いぶい黄橙色 断面 10YR7/4 いぶい黄橙色	良	
観察	1層 3層	土師	甕	Ⅱ	約23	1/12	体部は内湾し，頸部で「く」の字状に屈曲，口縁部に至る。口縁端部は内側に出折り返され突出する。	体部外面：ヘラケズリ？ 口縁部から頸部：ヨコナデ 内面：ヨコナデ頸部以下不明 体部外面ハケメ残存	良。雲母を多量，赤色粒を極微量含む。	内面 7.5YR8/3 浅黄橙色 外面 10YR2/1 黒色 断面 7.5YR8/1 灰白色（黄味がかる）	やや不良	
観察	1層	土師	甕	−	約38	口縁〜体部破片	口縁端部は平坦な面をなし，内傾する。端部内面はわずかに突出。外面は口縁部で若干外反するが，以下は直線的に続く。	外面：口縁部端部から体部にかけて縦方向のハケメあり 内面：ナデ調整	粗粒。長石・石英（φ〜3mm）多量，赤色粒微量含む。	表面 10YR4/3 いぶい黄褐色 断面 10YR8/1 灰白色	良好	

	層序	種別	器形	法量区分	口径	残存率	形態	調整手法	胎土	色調	焼成	備考
観察	3層	土師	甕	Ⅱ	約24	1/12	体部は内傾し，頸部で「く」の字状に屈曲する。口縁部は内側へ屈曲し口縁端部は丸くおわる。	外面：口縁部ヨコナデ，体部に斜めにハケメ調整 内面：ヨコハケ後口縁部ヨコナデ	粗粒。長石・石英・細砂粒（φ～1.5mm）を極多量含む。	表面 10YR5/2 灰黄褐色 断面 2.5Y8/1 灰白色	良	
観察	2層	瓦器	椀	－	口縁径約16 高台径約6	1/3	口縁端部外傾。平坦な底部で口縁部との境が無く全体が丸味を帯び内湾する。逆台形の高台を貼り付ける。	ロクロ形成。口縁端部指頭圧痕。	黒色粒をやや多く，長石・石英を少量含む。	外面：N4/0 灰色 内面及び断面：N8/0 灰白色より白に近い	良	
観察	2層？	瓦器	椀	－	高台径約5.5	高台部のみ	貼付高台方形のやや外傾するものを持つ。底部内面に連続長楕円形の暗文あり。	底部内面ヨコナデ調整の後ミガキ	長石・雲母を少量，石英を微量含む。	外面：N4/0 灰色 断面：外側 2.5Y8/1 灰白色 内側 N4/0 灰色	良	
観察	1層	瓦器	椀	－	約16	口縁1/8	口縁端部内側に内傾する面を持つ。	ロクロ形成。口縁端部内面をヨコナデ。	黒色粒をやや多く，長石・石英を少量含む。	外面：N4/0 灰色 内面及び断面：N8/0 灰白色より白に近い	良	
観察	1層	須恵	杯B身	－	高台底部径約9	高台部の1/5	底部は内湾し，撥状の高台が付く。	ロクロナデ。底部はヘラキリ。貼り付け高台の先端内・外面にナデ調整。	やや粗粒。長石・石英を少量含む。	N7/0 灰白色	良	
観察	－	須恵	杯B	Ⅱ	約15	1/6	底部は平坦で断面方向の高台が付く。体部はやや内湾し，口縁部に至る。口縁端部は素直におわる。	ロクロナデ。高台は貼付。	やや粗粒。長石を多量含む。	表面 N7/ 灰白色（青味がかる） 断面 N7/ 灰白色	良好	
観察	2層	緑釉陶器	皿	－	高台径約7	高台部1/6	円盤高台	高台ケズリだし	長石を多量，黒色粒を少量，石英を微量含む。	表面：N7/0 灰白色 断面：10Y7/1 灰白色	良 硬質	
観察	3層	緑釉陶器	皿	－	高台径約6.5	高台部2/3	円盤高台	高台ケズリだし	黒色粒を少量，長石を微量含む。	底部内面：10Y4/2 オリーブ灰色 底部外面：10Y7/2 灰白色 断面：7.5YR8/1 灰白色	良 硬質	
観察	3層	緑釉陶器	皿	－	高台径約6.5	高台部1/4	円盤高台	高台ケズリだし	黒色粒を多量，長石・石英を微量含む。	表面：5YR8/1 灰白色 断面：10Y7/1 灰白色	やや良 軟質	
観察	2層	緑釉陶器	皿か椀	－	－	口縁不明	輪花	口縁端部に外面にタテナデとヨコナデ調整痕あり	長石・黒色粒を微量含む。	表面：N7/0 灰白色　釉 5GY6/1 オリーブ灰色 断面：N7/0 灰白色	良好 硬質	
観察	1層	緑釉陶器	食膳具	－	底径6.0 (1.0)	底部1/2	高台A	外面底部ヘラケズリ。内面ミガキ。	やや精良。	2.5Y8/2 灰白色，釉：5Y7/2 灰白色	良	高台底部を除き施釉。
観察	1層 2層	灰釉陶器	耳皿	－	高台径約6.5，口縁径約13（長径）	口縁1/5 高台部1/2	底部内面の中心部に凹みあり。貼付高台撥形水平	内面のみ施釉。高台内面に爪痕あり。	黒色粒をやや多く，長石を微量含む。	表面（釉）：5Y6/3 オリーブ黄色 断面：5Y8/2 灰白色	良好	
観察	1層	灰釉陶器	広口短頸・蓋？	－	鈕直径約3	鈕1/1	宝珠形	貼付後ナデ調整	黒色粒を少量，長石を微量含む。	表面：5Y5/3 灰オリーブ色 断面：5Y8/2 灰白色	良好	

S D 663 出土土器

	層所	種別	器形	法量区分	口径	残存率	形態	調整手法	胎土	色調	焼成	備考
観察	下層	土師器	杯 A	Ⅱ	約 15	1/4	B	e－c (c／e?)	長石・石英・雲母・チャートを微量含む。	10YR8/3 浅黄橙色	良好	
観察	中層	土師器	皿 A	Ⅱ	約 16	約 1/5	C	c／e	長石・黒色粒・雲母を多量，石英・赤色粒を微量含む。	5YR7/4 にぶい橙色	良	
観察	－	土師器	皿 A	Ⅰ	約 19	約 1/4	A	c'	雲母を多量，長石・黒色粒を少量含む。	表面：10YR7/2 にぶい黄橙色 断面：7.5YR7/4 にぶい橙色	良好	
観察	－	土師器	皿 A	Ⅱ	約 16	約 1/5	D	c	黒色粒・雲母を多量，長石を微量含む。	表面：7.5YR8/2 灰白色 断面：7.5YR8/1 灰白色	良	
観察	下層	土師器	皿 A	Ⅱ	約 16	約 1/6	D	c	長石・黒色粒・雲母を多量，石英を微量含む。	10YR8/1 灰白色	良	
観察	－	土師器	皿 A	Ⅱ	約 15	約 1/6	D	c	長石・黒色粒・雲母を多量，石英を微量含む。	表面：7.5YR7/2 明褐灰色 断面：7.5YR8/3 浅黄橙色	良	
観察	下層	土師器	皿 A	Ⅱ	約 17	約 1/5	C	c／e	長石・雲母を多量，石英・黒色粒を微量含む。	10YR8/1 灰白色	良	
観察	中層	土師器	皿 A	Ⅱ	約 14	口縁 1/8	E	e	長石・黒色粒・雲母を多量，石英を微量含む。微量含む。	7.5YR8/3 浅黄橙色	良	
観察	－	土師器	椀 A	Ⅰ	約 14	約 1/4	B	e	やや粗流。金・銀雲母をやや多く，長石・石英・角閃石・黒色粒・赤色粒を少量含む。	表面：7.5YR8/2 灰白色 断面：7.5YR8/1 灰白色	良	
観察	－	土師器	椀 A	Ⅰ'	約 16	約 1/4	B	e－c	長石・石英・角閃石・黒色粒・赤色粒・雲母を少量含む。	表面：7.5YR8/2 灰白色 断面：7.5YR8/2 灰白色	良	
観察	－	土師器	椀 A	Ⅰ	約 13	約 1/5	B	c'	長石・黒色粒・雲母を多量，石英・角閃石を微量含む。	表面：5YR7/4 にぶい橙色 断面：.5YR8/3 浅黄橙色	良	
観察	－	土師器	杯 B	－	高台径約 9	高台部 1/4	逆台形の高台を貼り付ける。	不明	黒色粒を多量，長石を少量，石英・雲母を微量含む。	表面：10YR6/2 灰黄褐色 断面：5YR7/2 明褐灰色	良	
観察	－	土師器	椀？	Ⅰ？	約 12	小片のため不明	C	外面：ケズリ？ 内面：ナデ	やや粗粒。黒色粒・雲母をやや多く，長石・赤色粒・チャートを微量含む。	7.5YR8/2 灰白色	やや良	
観察	一括	土師器	高杯 A	－	約 26	杯部口縁の約 1/8	大きく外方にひらく浅い杯部。口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部外反。	ヘラケズリ後ナデ	黒色粒・赤色粒を少量，長石・石英・雲母を微量含む。	7.5YR8/1 灰白色	良	
観察	上層	土師器	高杯 A	－	約 16	杯部口縁の約 1/8	大きく外方にひらく浅い杯部。口縁端部は上方につまみ上げる。	ヘラケズリ後ナデ	黒色粒・赤色粒を多く，長石・石英・雲母を微量含む。	7.5YR8/2 灰白色	良	
観察	下層	土師器	高杯 A	－	約 24	杯部口縁の約 1/8	大きく外方にひらく浅い杯部。口縁端部は上方につまみ上げる。	ヘラケズリ後ナデ	長石を少量，石英・黒色粒・雲母を微量含む。	表面：7.5YR6/2 灰褐色 断面：5YR8/2 灰白色	良	
観察	中層	土師器	高杯 A	－	約 26	杯部口縁の約 1/8	大きく外方にひらく浅い杯部。口縁端部は上方につまみ上げる。	ヘラケズリ後ナデ	雲母を多量，長石・黒色粒を少量含む。	表面：7.5YR7/2 明褐灰色 断面：7.5YR7/3 にぶい橙色	良	
観察	－	土師器	高杯 A	－	－	小片のため不明	－	面取り痕あり	長石をやや多く，石英を少量，黒色粒を微量含む。	表面：2.5YR7/1 明赤灰色 内面：2.5YR7/6 橙色 断面：7.5YR8/3 浅黄橙色	やや良	

	層所	種別	器形	法量区分	口径	残存率	形態	調整手法	胎土	色調	焼成	備考
観察	−	土師器	高杯 A	−	−	脚部・杯部小片のため不明	脚部面取り痕２面確認できる。杯部不明。	不明	黒色粒を多量，長石を少量含む。	脚部：7.5YR8/2 灰白色 一部 N7/0 灰白色	良	
観察	上層	土師器	高杯 A	−	−	脚部小片のため不明	面取り痕４面確認できる。	面取り痕あり。芯棒巻き付け技法	長石・黒色粒を多量，石英・雲母微量含む。	表面：2.5Y8/1 灰白色 内面：7.5YR8/3 浅黄橙色 断面：7.5YR8/2 灰白色・N7/0 灰白色	良	
観察	−	土師器	高杯 A	−	−	小片のため不明	面取り痕２面確認できる。	面取り痕あり。芯棒巻き付け技法	石英をやや多く，長石・黒色粒を少量，雲母を微量含む。	表面：7.5Y8/3 浅黄橙色 断面：7.5Y8/2 灰白色・N6/0 灰	良	
観察	下層	土師器	高杯 A	−	−	小片のため不明	面取り痕４面確認できる。	面取り痕あり。芯棒巻き付け技法	長石・石英を少量，黒色粒・雲母を微量含む。	表面：N7/0 灰白色・5YR8/3 淡橙色 内面：7.5YR8/3 浅黄橙色・5YR8/4 淡橙色 断面：2.5YR7/4 淡黄橙色	良好	
観察	中層	土師器	高杯 A	−	−	脚部・杯部小片のため不明	脚部面取り痕２面確認できる。杯部不明。	不明。	黒色粒を多量，長石・石英・雲母を少量含む。	表面：7.5YR8/2 灰白色 断面：7.5YR8/3 浅黄橙色 一部 N7/0 灰白色	良	
観察	−	土師器	高杯 脚部	−	−	脚部	−	−	精良。長石・石英・赤色粒・チャートを少量含む。	2.5Y8/2 灰白色 (やや赤みがかる)	良好	
観察	−	土師器	高杯 脚部	−	脚部径約 5.4 (内径約 2.3)	脚部	面取り７面	芯棒巻き付け技法。下部の切断面は５方向から面鋸を入れ中心部を切り残して折り取る。	やや精良。長石・石英・赤色粒を少量含む。	10YR8/3 浅黄橙色	良	
観察	−	土師器	高杯 脚部	−	脚部径約 4.7 (内径約 1.6)	脚部	面取り７面	芯棒巻き付け技法。下部の切断面は５方向から面鋸を入れ中心部を切り残して折り取る。	やや精良。長石・赤色粒・雲母を微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	
観察	−	土師器	甕 A	Ⅱ	約 23	口縁 1/5	A	体部上方にタタキ痕あり。基部外面ヨコナデ調整。	長石・雲母・黒色粒を多量，石英を少量，角閃石を微量含む。	表面：10YR7/1 灰白色 断面：7.5YR7/2 明褐灰色	良	
観察	−	土師器	甕 A	Ⅳ	約 17	口縁 1/6	A	体部外面にカキ目調整。基部外面ヨコナデ調整。	黒色粒・雲母を多量，長石を少量，石英を微量含む。	表面：7.5YR8/2 灰白色 断面：7.5YR8/1 灰白色	良	
観察	中層 下層	土師器	甕	−	−	体部小片４片	不明	外面，綾杉状のタタキ。内面，ナデ調整。	長石・黒色粒・赤色粒・雲母を少量含む。	表面：10YR7/3 にぶい黄橙色 断面：7.5YR7/4 にぶい橙色	良	
観察	−	土師器	甑	−	−	底部	直径約２．３ｃｍの円形の穴一個。	外面ハケ目後ナデ。内面ナデ調整。	石英を多量，長石・黒色粒を少量，赤色粒を微量含む。	表面：外 7.5YR6/4 にぶい橙色 内 10YR7/2 にぶい黄橙色 断面：7.5YR7/3 にぶい橙色	良	
観察	中層	黒色土器	Ⅲ	−	約 15	口縁 1/6	口縁部外反	外面ヘラケズリ。口縁部ナデ。	長石・黒色粒を多量，石英を少量，角閃石・雲母を微量含む。	釉：5YR1.7/1 黒色 2.5YR7/4 淡赤橙色	良 軟質	A類。
観察	下層	黒色土器	Ⅲ	−	高台径約 9	高台部 1/6	貼り付け高台	外面ヘラケズリ。口縁部ナデ。	長石・黒色粒を多量，石英を少量，角閃石・雲母を微量含む。	表面：2.5YR5/4 にぶい赤褐色 断面：2.5YR5/4 にぶい赤褐色	やや良好	A類。
観察	砂礫層	黒色土器	椀	−	約 15cm	口縁 1/8	緩やかに内湾する口縁。端部はすなおにおわる。	内面ミガキ	やや精良。長石を少量，黒色粒を微量含む。	表面：2.5YR5/4 にぶい赤褐色 断面：2.5YR5/4 にぶい赤褐色	やや良好	9世紀前半？A類。
観察	砂礫層	黒色土器	椀	−	底径約 7cm	底部 1/6	小さな三角形状の輪高台。緩やかに内湾する口縁。	−	やや精良。長石，石英，雲母を微量に含む。	表面：10YR7/3 にぶい黄橙色 断面：10YR8/1 灰白色	やや良好	A類。

	層所	種別	器形	法量区分	口径	残存率	形態	調整手法	胎土	色調	焼成	備考
観察	砂礫層上層	黒色土器	椀	－	底径約7cm	底部1/6	小さな三角形状の輪高台。緩やかに内湾する口縁。	－	やや精良。長石，石英，雲母を微量に含む。	表面：10YR7/3にぶい黄橙色 断面：10YR8/1灰白色	やや良好	A類。
観察	－	須恵器	杯A	－	底部径約9強	1/2弱	底部は丸みをもつ。口縁部と体部の境が無くなだらかに立ち上がる。	底部ヘラキリ後粗いナデ	長石・黒色粒を少量，石英を微量含む。	7.5Y7/1灰白色	やや軟質良	
観察	中層	須恵器	杯A	－	底部径約9強	1/2弱	底部は丸みをもつ。口縁部と体部の境が無くなだらかに立ち上がる。	底部ヘラキリ後粗いナデ	長石・黒色粒を少量，石英を微量含む。	7.5Y7/1灰白色	やや軟質良	
観察	－	須恵器	杯A	Ⅱ	約14	1/4	体部は内湾しているが，口縁部はやや外反して斜直におわる。底部と口縁部の境に稜をなす。	ロクロナデ。口縁端部にナデあり	長石を多量，黒色粒をやや多く含む。	表面：7.5Y8/1灰白色 断面：7.5YR7/1明褐灰色	やや軟質やや不良	
観察	－	須恵器	杯B蓋	Ⅲ	約13	1/3	頂部が平坦でなだらかに口縁部に至る。口縁端部はケズリだしによって下方に突出。	ロクロナデのち頂部内面にナデ	長石を多量，黒色粒を少量，石英を微量含む。	N8/0灰白色	軟質良	
観察	中層	須恵器	杯B蓋	Ⅱ	約16	1/6	頂部が平坦。器高が低く口縁部にかけてなだらかである。口縁端部は下方に突き出す。	頂部ヘラキリ後ナデ。ロクロナデ。	長石を多量，石英・黒色粒を少量含む。	表面：5PB5/1青灰色 断面：5PB7/1明青灰色	硬質良	
観察	－	須恵器	杯B	－	高台径約7	高台部2/3	口縁部と底部の境に稜をなす。	高台貼り付け後外面のみナデ。	長石を多量，黒色粒をやや多く含む。	表面：5PB6/1青灰色 断面：5P4/1暗紫灰色	硬質良好	
観察	－	須恵器	壺L	－	底部径約6.5	底部1/6	卵形体部に撥状の高台	ロクロナデ	黒色粒を多量，長石を少量，石英を微量含む。	表面：N5/0灰色 断面：2.5YR6/1赤灰色	良	
観察	下層	須恵器	壺L	－	高台径約8	高台部1/5	卵形体部。輪高台	ロクロナデ。貼り付け高台。	長石を多量，黒色粒を少量，石英を微量含む。	表面：5PB7/1明青灰色 断面：N8/0灰白色・N6/0灰色	硬質良	
観察	－	須恵器	壺M	－	底部径約3.9	底部1/5	C群？底部回転糸切り痕を残す。円盤高台。	内・外面ともロクロナデ	黒色粒を多量，長石・石英を少量含む。	表面：5PB6/1青灰色 断面：5P7/1明紫灰色	硬質良	
観察	下層	須恵器	壺M	－	底部径約3.8	底部1/3	底部回転糸切り痕。円盤高台。	ロクロナデ後丁寧にナデている。	長石を少量，黒色粒を微量含む。	表面：N7/0灰白色 断面：2.5YR6/1赤灰色	硬質良好	
観察	－	須恵器	甕B	－	約15.5	頸部1/3	内湾気味口縁部を持ち，口縁端部をやや外につまみ上げている。		長石を多量，黒色粒をやや多く含む。	頸部内面表面：2.5GY4/1暗オリーブ灰色 頸部外面表面：N7/1灰白色 断面：N7/1灰白色 断面中心部：2.5YR6/1赤灰色	良	
観察	－	須恵器	平瓶	－	復元口径約6？口縁高約5.4	頸部1/3	なだらかな下すぼまりの体部にやや丸味を帯びた頂部を持ち，外反する広口の口縁を持つ。口縁貼り付け。	ロクロナデ	長石をやや多く，黒色粒を少量，石英を微量含む。	表面：5PB5/1青灰色 断面：2.5YR6/1赤灰色	硬質良好	
観察	－	須恵器	平瓶把手	－	－	－	－	内外面をケズリ外面をナデ	長石・黒色粒を多量，石英を微量含む。	表面：N8/0灰白色 断面：5YR7/1明褐灰色・N8/0灰白色	硬質良	取手内側に指頭圧痕あり。頂部に自然釉。
観察	中層	緑釉陶器	Ⅲ	－	高台径約6	高台部1/4	円盤高台	ケズリだし	黒色粒を多量，長石を少量含む。	釉：7.5Y7/3浅黄色 表面：7.5YR8/2灰白色	軟質良	
観察	中層	緑釉陶器	Ⅲ	－	約14	口縁1/8	口縁部外反	ロクロ成形。口縁端部ナデ。	長石・角閃石・黒色粒を少量含む。	釉：10Y8/2灰白色 7.5YR8/1灰白	軟質やや良	

	層所	種別	器形	法量区分	口径	残存率	形態	調整手法	胎土	色調	焼成	備考
観察	–	緑釉陶器	耳皿	–	長径約15.5	口縁 1/8	不明	ロクロ成形後ナデ調整	長石・黒色粒を多量，石英を微量含む。	釉：7.5Y6/2灰オリーブ 表面：5YR8/1灰白色 断面：7.5YR8/2灰白色	軟質良好	
観察	–	緑釉陶器	椀	–	高台径約10	高台部1/5	円盤高台	ケズリだし	長石・黒色粒を少量，石英・角閃石・雲母を微量含む。	釉：7.5Y6/3オリーブ黄色 7.5Y8/3浅黄橙色	軟質良	
観察	中層	緑釉陶器	椀	–	高台径約9	高台部1/4	円盤高台	ケズリだし	長石・黒色粒を少量，雲母を微量含む。	釉：10Y5/2オリーブ灰 7.5YR8/1灰白色	軟質良	
観察	–	緑釉陶器	椀	–	約15	口縁 1/8	口縁部外反	ロクロ成形。口縁端部ナデ調整。	長石を多量，角閃石・黒色粒を少量含む。	釉：7.5Y6/3オリーブ黄色 表面：7.5YR8/1灰白色	軟質やや良	
観察	–	緑釉陶器	椀	–	約12	口縁 1/5	口縁部外反	ロクロ成形。口縁端部ナデ調整。	長石・黒色粒を少量，角閃石を微量含む。	釉：10Y4/2オリーブ灰色 7.5YR8/1灰白色	軟質やや良	
観察	–	緑釉陶器	椀？	–	約16	口縁 1/5	口縁部外反	ロクロ成形。口縁端部ナデ調整。	長石・黒色粒を少量，角閃石を微量含む。	釉：10Y5/2オリーブ灰色 7.5YR8/1灰白色	軟質やや良	
観察	–	緑釉陶器	椀	–	約14	口縁 1/8	口縁部外反	ロクロ成形。外面ヘラケズリ。内面「の」の字ナデ。	長石を多量，黒色粒を少量含む。	表面（釉）：7.5Y4/1灰色 断面：7.5Y6/1灰色	硬質良好	
観察	–	緑釉陶器	椀	–	約18	口縁 1/10	口縁部外反	ロクロ成形後ナデ調整	長石を多量，黒色粒を少量，角閃石を微量含む。	釉：10GY4/1暗緑灰色 7.5YR8/1灰白色	硬質良好	
観察	–	緑釉陶器	椀	–	約16	口縁 1/12	口縁部外反	ロクロ成形。口縁端部ナデ調整。		釉：10Y6/2オリーブ灰色・10Y3/1オリーブ黒色 断面：7.5YR8/1灰白色	軟質良	
観察	–	緑釉陶器	椀？	–	約13	口縁 1/8	口縁部外反	ロクロ成形。口縁端部ナデ調整。	長石・黒色粒を少量，石英を微量含む。	釉：5Y5/4オリーブ 7.5YR8/3浅黄橙	軟質やや良	
観察	–	緑釉陶器	不明	–	–	小片	–	–	–	釉：N4/0灰色 断面：2.5Y8/1	軟質良	
観察	–	緑釉陶器	緑折皿	–	-	口縁 1/10以下	口縁部外反。平坦な底部。	口縁部ナデ	–	表面：2.5Y5/3黄褐色，釉7.5GY2/1緑黒色 断面：2.5Y8/2灰白色	軟質やや良	京都産。
観察	–	緑釉陶器	皿	–	13.5	1/4	円盤高台。口縁部外反。	底部ヘラケズリ。高台ケズリだし。	–	表面：10Y6/2オリーブ灰色 断面：5Y7/1灰白色	硬質良好	
観察	–	緑釉陶器	壺	–	高台径4	底部 1/2	–	回転糸切り痕。	–	表面：10Y6/2オリーブ灰色 断面：2.5Y8/3淡黄色	軟質やや良	京都産。
観察	–	緑釉陶器	壺？	–	–	体部片	–	–	–	表面：2.5Y8/3淡黄色 断面：10YR8/3浅黄橙色	軟質やや不良	
観察	–	灰釉陶器	皿	–	7.6	底部 1/2	方形の輪高台を貼り付ける。	底部回転ヘラケズリ後ナデ。	長石・黒色粒・白色粒を微量含む。	表面：10Y6/2オリーブ灰色 断面：N8/0灰白色	良好	K－14。トチン痕がある。
観察	–	灰釉陶器	椀	–	底部 6.0	底径 1/4	外側に稜を持つ三日月高台	外面回転ヘラケズリ後ナデ内面ナデ	やや精良。長石，黒色粒を多量含む。	表面：7.5Y7/1灰白色 断面：7.5Y7/1灰白色	やや不良	O－10。9世紀末

SK 5429 出土土器

	種別	器形	法量区分	口径	残存率	形態	調整手法	胎土	色調	焼成	備考
観察	土師器	杯？	－	約 15	口縁部 1/8	B	－	やや粗粒。長石・石英・黒色粒を微量含む。	2.5Y8/2 灰白色	やや不良	9 世紀前半か？
観察	土師器	杯 A	Ⅱ	約 15	口縁部 1/6	C	－	やや精良。黒色粒を少量，雲母・長石・石英を微量含む。	表面：10YR8/3 浅黄橙色，断面：10YR8/3 浅黄橙色（やや白）	やや良	
観察	土師器	杯	－	15	口縁部 1/6	C	e－c	やや精良。石英・黒色粒・雲母を少量含む。	表面：10YR8/2 灰白色，断面：5YR7/6 橙色	良	
観察	土師器	杯	－	約 15	口縁部 1/6	C	c	やや精良。黒色粒・長石を少量，石英を微量含む。	表面：10YR8/4 浅黄橙色（やや赤い），断面：7.5YR8/2 灰白色	やや良	
観察	土師器	杯 A	Ⅱ	約 14	口縁部 1/6	C	－	やや精良。黒色粒・長石を少量，石英を微量含む。	表面：10YR7/3 にぶい黄橙色（やや明），断面：10YR8/1 灰白色（やや白）	やや不良	
観察	土師器	杯 A	Ⅰ	約 17	口縁部 1/5	B	c'	やや精良。黒色粒を多量，長石・石英を微量含む。	表面：10YR8/2 灰白色，断面：7.5YR7/4 にぶい橙色（やや暗）	やや不良	
観察	土師器	杯	－	約 16	口縁部 1/8	B	e	やや精良。黒色粒を少量，石英を微量含む。	10YR8/2 灰白色	良	
観察	土師器	杯 B 蓋	Ⅱ	約 18	口縁部 1/6	ゆるやかに盛り上がる笠形の蓋。口縁端部は素直におわる。	内面ナデ。外面ヘラケズリ後ナデ。口縁端部ヨコナデ。	やや精良。黒色粒・雲母を多量，長石・石英を微量含む。	10YR8/2 灰白色（やや赤味）	やや良	
観察	土師器	杯 B	－	底径 約 13	底部 1/4	低い方形の輪高台	内外面ナデ	やや精良。雲母を少量，長石・石英を微量含む。	2.5Y8/2 灰白色（やや黄味）	やや不良	
観察	土師器	杯	－	15	口縁部 1/7	B	c'	やや精良。黒色粒を少量，石英を微量含む。	表面：10YR7/4 にぶい黄橙色，断面：2.5Y8/1 灰白色	やや良	
観察	土師器	Ⅲ A	Ⅰ	約 20	口縁部 1/8	B	e－c	やや精良。黒色粒を多量，雲母を少量，長石・石英を微量含む。	10YR8/3 浅黄橙色	良	
観察	土師器	Ⅲ B	－	約 10	底部 1/8	細い三角輪高台	－	やや精良。雲母を多量，黒色粒・赤色粒を少量，長石を微量含む。	10YR8/3 浅黄橙色	やや不良	10 世紀初頃？
観察	土師器	Ⅲ	Ⅱ	約 16	口縁部 1/8	C	c'	やや精良。雲母を多量，黒色粒を少量，長石を微量含む。	10YR8/2 灰白色（やや白）	やや良	
観察	土師器	椀 A	Ⅰ	約 14	口縁部 1/4	C	c／c'	黒色粒・赤色粒・白色粒を微量含む。	10YR8/2 灰白色	良	9 世紀前半 灯明皿
観察	土師器	高杯 A	－		脚部不明		芯棒巻き付け技法。面取り 3 面確認できる	黒色粒・赤色粒・白色粒・雲母を微量含む。	表面：7.5YR8/3 浅黄橙色 断面：7.5YR8/1 灰白色	良好	フイゴに転用？
観察	土師器	高杯	－	裾部径約 16	裾部 1/8	－	手づくね後ナデ	雲母を少量，石英・赤色粒・白色粒を微量含む。	表面：7.5YR8/1 灰白色（やや白） 断面：7.5YR8/1 灰白色	良	
観察	土師器	高杯	－	約 31	口縁部 1/5	－	内面ヘラケズリ後ナデ。底部ヘラケズリ。	赤色粒を少量，白色粒・雲母を微量含む。	7.5YR8/2 灰白色	良好	
観察	土師器	高杯 A	－	約 16	口縁部 1/10	－	内面ヘラケズリ後ナデ。底部ヘラケズリ。	黒色粒・赤色粒・白色粒・雲母を微量含む。	7.5YR8/2 灰白色	良好	
観察	土師器	甕	Ⅳ	約 17	口縁部 1/8	C	c	黒色粒・赤色粒・白色粒・雲母を微量含む。	7.5YR8/3 浅黄橙色	良	
観察	土師器	甕	Ⅲ	約 21	口縁部 1/8	A	b	赤色粒を少量，白色粒・雲母を微量含む。	7.5YR8/1 灰白色（やや白）	良	
観察	土師器	甕	Ⅲ	約 18	口縁部 1/8	A	b	黒色粒・赤色粒・白色粒・雲母を微量含む。	表面：2.5YR7/4 淡赤橙色，断面：5YR8/3 淡橙色	良	

	種別	器形	法量区分	口径	残存率	形態	調整手法	胎土	色調	焼成	備考
観察	土師器	甕	Ⅲ	約19	口縁部1/8	A	b	雲母を少量，石英・赤色粒・白色粒を微量含む。	7.5YR8/1 灰白色（やや白い）	良	
観察	黒色土器	甕	－	基部径約14	基部1/3	丸い体部に直線的に外方へのびる口縁。基部内側に稜をもつ。	内面ミガキ。外面ナデ。	やや精良。黒色粒をやや多量，長石・石英・雲母を少量含む。	7.5YR7/4 ～ 6/4 にぶい橙色	やや良	A類。
観察	黒色土器	甕	－	約13	口縁部1/6	丸い体部に外反する短い口縁がつく。口縁端部はつまみ出される。	内外面ナデ	やや精良。長石・石英を多量含む。	表面：5YR4/3 にぶい赤褐色 断面：5YR6/4 にぶい橙色	やや良	A類。外面煤付着。
観察	須恵器	杯Ｂ蓋	Ⅱ	約18	口縁部1/6	A	頂部回転ヘラケズリ。内面と口縁端部ナデ。	黒色粒・白色粒を微量含む。	表面：5BG7/1 明青灰色，断面：10BG6/1 青灰色	良 硬質	
観察	須恵器	杯Ｂ蓋	Ⅰ	約20	口縁部1/5	平らな頂部。屈曲する口縁部。口縁端部は下外方に肥厚する。	内外面ロクロナデ。頂部ヘラキリ後ナデ。	やや精良。長石・黒色粒を少量含む。	表面：10BG6/1 ～ 5/1 青灰色 断面：10BG6/1 ～ 5/1 青灰色	良	
観察	須恵器	杯Ｂ	－	底径約9	底部1/4	太い半円形の輪高台。口縁部は高台つけ根より急に立ち上がる。	－	やや精良。黒色粒を少量含む。	2.5GY8/1 灰白色（やや白い）	不良 軟質	
観察	須恵器	鉢Ｄ	－	約22	口縁部1/6	肩の張った体部。短く直線的に外へ開く口縁部。口縁端部は外傾する面をもつ。	内外面ロクロナデ	やや精良。長石・石英・黒色粒を微量含む。	表面：10BG5/1 青灰色 断面：N8/0 灰白色（やや青み）	不良 軟質	
観察	須恵器	鉢Ｄ	－	約25.5	口縁部1/8	外反する短い口縁部と肩の張る体部。	ロクロナデ後丁寧なナデ。	黒色粒・白色粒を微量含む。	5B7/1 明青灰色	良 硬質	同一個体か？
観察	須恵器	鉢Ｄ	－	高台径約10	底部1/2	平らな高台	接地部に糸切り痕あり。	黒色粒・白色粒を微量含む。	5B7/1 明青灰色	良 硬質	
観察	須恵器	鉢Ｄ	－	約26	1/10	肩の張った体部。外反する短い口縁部。口縁端部は上外方につまみ出される。	－	やや精良。黒色粒を少量，長石を微量含む。	N8/0 灰白色	不良 軟質	
観察	須恵器	甕	－	－	底部～体部	丸底で卵形の体部	外面長方形の格子状のタタキ。内面当て具痕のち全体をナデ消し。	やや精良。長石・黒色粒を多量，石英・雲母を微量含む。	表面：5BG6/1 青灰色，断面：5YR6/4 にぶい橙色	やや良	
観察	瓦器	小壺	－	－	体部不明	緩やかに内湾する体部	－	やや精良。黒色粒を少量，長石を微量含む。	表面：5BG3/1 暗青灰色，断面：5Y8/1 灰白色	良	
観察	緑釉陶器	椀か皿？	－	約14	口縁部約1/7	口縁端部強く外反。	－	やや粗粒。黒色粒を少量，長石・石英を微量含む。	2.5Y8/2 灰白色	不良 軟質	
観察	緑釉陶器	椀	－	約16	口縁部1/6	口縁部なだらかに内湾し口縁端部わずかに外反しすなおにおわる。	外面ヘラミガキ？	やや精良。黒色粒を少量，長石・石英を微量含む。	2.5Y8/2 灰白色 釉：7.5Y6/3 オリーブ黄色（緑がかる）	不良 軟質	内外面施釉。9世紀前半？
観察	緑釉陶器	椀	－	底径約5.5	底部ほぼ1/1	円盤高台。高台部と口縁部の境ははっきりしており口縁部はなだらかに内湾し立ち上がる。	－	やや粗粒。黒色粒を少量，長石・石英を微量含む。	2.5Y8/1 灰白色（黄味がかる）	不良 軟質	内面施釉。
観察	緑釉陶器	椀	－	底径約7	底部1/4	円盤高台。高台部と口縁部の境ははっきりしており付け根から急に立ち上がる。	外面ヘラミガキ	やや精良。黒色粒を多量，石英を微量含む。	5Y7/1 灰白色，釉：2.5Y7/2 灰黄色	良 軟質	外面施釉。
観察	緑釉陶器	椀	－	高台径約8	底部1/2	円盤高台	高台ケズリだし	φ1mm 大の長石，角閃石・黒色粒を少量，白色粒・雲母を微量含む。	表面：10YR8/1 灰白色（やや白い） 断面：10YR8/1 灰白色（やや白い） 釉：10Y8/2 灰白色	やや不良 軟質	
観察	緑釉陶器	椀	－	底径約12	底部1/6	やや高い輪高台	－	やや粗粒。長石・黒色粒を多量含む。	7.5YR8/1 灰白色 釉：10YR7/2 灰白色	不良 軟質	
観察	緑釉陶器	Ⅲ	－	底径約5	底部1/1	円盤高台。高台部と口縁部の境はなだらか。	－	やや精良。石英などの砂粒をやや多量含む。	5Y8/1 灰白色（黄味がかる）	不良 軟質	

ＳＸ820 Ⅰ・Ⅱ区３層出土土器

	出土位置	種別	器形	法量区分	口径	残存率	形態	調整手法	胎土	色調	焼成	備考
観察	1D1H	土師器	杯A	I	約18	口縁1/8	A	e／c	雲母をやや多く，赤色粒を少量，白色粒を微量含む。	10YR8/2灰白色	良好	9世紀前半
観察	1C1G 1D1G 1C1H 1D1H	土師器	杯A	I	約17	口縁1/8	D	c	赤色粒を多量，雲母をやや多く，長石・石英・白色粒を微量含む。	7.5YR8/4 浅黄橙色	良好	灯明皿。9世紀前半
観察	1C1F 1C1G 1D1G	土師器	杯A	I	約19	口縁1/10	B	e／c	赤色粒を多量，長石・石英・白色粒・雲母を微量含む。	表面：7.5YR8/3 浅黄橙色 断面：7.5YR8/2 灰白色	良好	9世紀前半
観察	1A1D	土師器	杯B	－	高台径9	底部1/10	台形（やや外傾）の高台	不明	赤色粒をやや多く，石英・白色粒・雲母を微量含む。	7.5YR8/2 灰白色	良	
観察	1A1E	土師器	皿A	II	約17	口縁1/5	E	c／b	長石・石英・黒色粒・白色粒・雲母を微量含む。	表面：7.5YR7/3 にぶい橙色 断面：10YR8/1 灰白色	良	9世紀前半
観察	1C1G 1C1H 1D1G 1D1H	土師器	椀A	I	約13	口縁1/8	C	c	雲母をやや多く，石英・長石・白色粒を少量，黒色粒を微量含む。	表面：7.5YR6/2 灰褐色 断面：7.5YR7/2 明灰褐色	良好	断面層状。9世紀前半
観察	1A1D	土師器	高杯A	－	約28	杯部1/3	－	芯棒巻き付け技法？底部ヘラケズリ。	赤色粒をやや多く，長石・チャート・雲母を微量含む。	表面：7.5YR8/3 浅黄橙色 断面：7.5YR8/2 灰白色	良	9世紀前半
観察	1A1D 1B1E	土師器	高杯A	－	約26	杯～脚部片	－	芯棒巻き付け技法？底部ヘラケズリ。	黒色粒・白色粒・雲母を微量含む。	7.5YR8/2灰白色	良	9世紀前半
観察	1A1D 1B1D	土師器	甕A	－	約30	口縁1/8	端部は平坦な面を持つ。口縁内面中程に浅い凹線を持つ。	口縁内外面ともナデ	やや精良。長石・雲母を多量，黒色粒を少量含む	2.5Y7/2灰黄色	やや良	内外面ともに煤付着。古墳時代。
観察	1A1D	土師器	甕	－	約23	口縁1/8	A。口縁端部に垂直な面を持つ。	口縁外面ナデ。口縁内面ヨコのハケメ後ナデにより消す。体部外面タテのハケメ。体部内面ナデ。	やや精良。雲母を多量，長石を少量，石英を微量含む。	表面：10YR7/2 にぶい黄橙色 断面：7.5YR7/3 にぶい橙色	やや良	
観察	1D1H	土師器	甕	－	約20	口縁1/6	A。端部に面を持つ。浅い凹線を持つ。	口縁内面ハケメのちナデ。外面ナデ。	やや精良。長石・黒色粒・雲母を少量含む。	10YR8/3浅黄橙色	やや良	
観察	1A1D	土師器	高杯A	－	約28	杯部1/3	－	芯棒巻き付け技法？底部ヘラケズリ	赤色粒をやや多く，長石・チャート・雲母を微量含む。	表面：7.5YR8/3 浅黄橙色 断面：7.5YR8/2 灰白色	良	9世紀前半
観察	1A1D 1B1E	土師器	高杯A	－	約26	杯部と脚部不明	－	芯棒巻き付け技法？底部ヘラケズリ	黒色粒・白色粒・雲母を微量含む。	7.5YR8/2 灰白色	良	9世紀前半
観察	1C1G 1C1H 1D1G 1D1H	土師器	高杯	－	－	脚部1/3	－	全体にナデか？外面わずかに面を持つ。	やや粗粒。長石・石英を少量，黒色粒を微量含む。	10YR7/2にぶい黄橙色	やや良	断面層状
観察	1B1D	黒色土器	甕	－	－	口縁	頸部で「く」の字に折れ曲がり短い口縁がつく。端部は丸くおわる。	内外面ナデ	やや精良。雲母を多量，長石を少量含む。	10YR5/2 灰黄褐色	やや良	A類。
観察	1C1H	黒色土器	食膳具	－	底部径約6.5	底部1/4	外傾する輪高台	内外面ナデ	やや精良。雲母を多量，長石を微量含む。	10BG2/1青黒色	やや良	10世紀初頭？B類。
観察	1A1D	須恵器	平瓶	－	肩部径約18	肩部	－	内外面ともロクロナデ	やや精良。長石・石英・黒色粒を少量含む。	表面：5B5/1 青灰色 断面：5R5/1赤灰色	良好	外面に自然釉。
観察	1D1H	須恵器	杯B蓋	III	約18	口縁1/10	A。頂部が厚みがあり口縁は短く屈曲し端部は丸味を持って下方につまみ出す。	内外面ともロクロナデ	精良。長石を少量，石英・黒色粒を微量含む。	表面：5BG5/1 青灰色 断面：10G5/1 緑灰色	良好	

	出土位置	種別	器形	法量区分	口径	残存率	形態	調整手法	胎土	色調	焼成	備考
観察	1B1D	須恵器	平瓶か壺K	-	底部径約16	底部1/8	平底。稜をなす肩。	内面ロクロナデ。外面回転ヘラケズリ後ナデ。	やや精良。黒色粒を多量，長石・石英を少量。	5BG6/1 青灰色	良	
観察	1B1F 1C1E 1C1F	須恵器	壺L？	-	-	体部片	イチジク形か？	ロクロ水挽き。底部回転ヘラケズリ。	φ0.5～1mmの長石を少量，石英・白色粒を微量含む。	表面：7.5YR4/1 褐灰色・10YR6/2 灰黄褐色 断面：7.5YR7/2 明褐灰色	やや不良	肩部に多量の自然釉付着。底部が還元焔焼成化されておらず赤褐色を呈す。
観察	0S0V 1C1D 1C1F 1C1G 1D1H	須恵器	壺	-	底部径約16	体部不明	卵形で平底	外面回転ヘラケズリ後ナデ	黒色粒を多量，白色粒を少量，石英を微量含む。	N 7/0 灰白色 釉：10Y4/2 オリーブ色	良好 硬質	多量の自然釉が付着。
観察	1C1F	須恵器	短頸壺	-	約20	口縁1/16	肩が張っており直立する短い口縁。肩と口縁の間は比較的狭い。	内外面ロクロナデ	やや精良。長石・黒色粒を微量含む。	5BG6/1 青灰色	やや良	外面に煤付着。
観察	1B1E	須恵器	鉢D	-	約22	口縁1/10	口縁部がくの字に外へ曲がる。端部は面を持ち内外に肥厚。	内外面ロクロナデ	やや精良。長石・黒色粒を微量含む。	2.5Y8/1 灰白色	やや不良	
観察	1A1D	須恵器	甕	-	底部径約11	底部1/4	平底	体部外面タテの平行タタキ。体部内面ナデ。	やや精良。長石を多量，石英・黒色粒を少量含む。	表面：10BG6/1 青灰色 断面：5B6/1 青灰色	良	底部内面に付着物。
観察	1C1F	須恵器	甕	-	不明	口縁	口縁外反。端部強く外反し付け根に凹線を持つ。	体部外面にタテの平行タタキ後ヨコのカキメ。体部内面に同心円文。	やや精良。長石（φ2mmの粒を含む）を少量含む。	10BG6/1～5/1 青灰色	良	
観察	1B1E	灰釉陶器	食膳具	-	底部径約6.5	底部1/3	外傾の輪高台。（細く短い）	底部外面回転ヘラケズリ。底部内面ヘラミガキ。	精良。長石を微量含む。	表面：7.5YR8/1 灰白色 断面：5Y7/1 灰白色	良好	K－14の1形式か？
観察	1D1H	灰釉陶器	椀	-	底部径約8	底部1/6	外傾する輪高台。外端接地。	底部外面回転ヘラケズリ後ナデ。	やや精良。長石・黒色粒を微量含む。	表面：5Y7/1 灰白色 断面：10Y7/1 灰白色 釉：10Y6/2 灰オリーブ色	良好	内面施釉。K－14の2形式？
観察	1C1G	緑釉陶器	皿	-	高台径約9	底部1/4	削り出し輪高台	底部内面ナデ。外面ケズリ出し。	やや粗粒。黒色粒を少量，長石・石英を微量含む。	7.5YR8/1 灰白色	やや良 軟質	釉薬確認できず。
観察	1A1D	緑釉陶器	皿	-	高台径約7	底部1/4	円盤高台	外面ケズリ出し	精良。白色粒を微量含む。	表面（釉）：7.5Y4/1 灰色 断面：10Y8/1 灰白色（やや白）	良好 軟質	
観察	1C1G	緑釉陶器	椀	-	高台径約9？	底部1/6	ケズリ出し輪高台	底部内面ナデ。外面ケズリ出し。	やや粗粒。黒色粒を少量，長石・石英を微量含む。	7.5YR8/1 灰白色（やや白）	やや良 軟質	釉薬確認できず。
観察	1B1E	緑釉陶器	椀	-	口縁径約13.5 高台径約8.5	口縁と底部1/6	蛇の目高台。口縁部外反。	外面ケズリ出し	精良。長石・石英を少量含む。	表面（釉）：7.5GY3/1 暗緑灰色 表面：不明 断面：10Y8/1 灰白色	良 軟質	
観察	1A1D	緑釉陶器	椀	-	約13.5	口縁1/15	口縁部外反	口縁端部ナデ	やや精良。長石・石英・黒色粒を微量含む。	表面（釉）：2.5GY3/1 暗オリーブ灰色 断面：10YR8/1 灰白色（やや白）	良 軟質	

ＳＸ820 Ⅲ区２層出土土器

	出土位置	種別	器形	法量区分	口径	残存率	形態	調整手法	胎土	色調	焼成	備考
観察	0S0X 0S0W	土師器	椀A	Ⅰ	約13	口縁部 1/8	B	c	雲母をやや多く，石英を少量，白色粒を微量含む。	表面：7.5YR7/4 にぶい橙色，断面：7.5YR8/2 灰白色	良	9世紀前半
観察	0V1A	土師器	杯B	－	高台径 9	底部 1/10	三角形状の低い輪高台	不明	雲母をやや多く，黒色粒・赤色粒・白色粒を微量含む。	10YR8/2 灰白色	良	
観察	0V1A	土師器	杯B	－	高台径 7	底部 1/10	三角形状の低い輪高台。外端接地。	不明	石英を少量，白色粒・雲母を微量含む。	7.5YR8/2 灰白色	良	
観察	0V1A	土師器	杯B	－	高台径 6	底部 1/10	台形の低い輪高台。	不明	雲母を少量，長石・石英を微量含む。	表面：7.5YR8/2 灰白色，断面：7.5YR7/3 にぶい橙色	やや良	
観察	0V0Y	土師器	Ⅲ A	Ⅱ	約17	口縁部 1/8	B	e－c	雲母をやや多く，黒色粒・赤色粒・白色粒を微量含む。	10YR8/1 灰白色	良好	9世紀前半
観察	1E0R	土師器	蓋	Ⅲ	14.0 (2.15)	口縁 1/5	頂部は丸みを持つ。端部は丸くおわる。	不明瞭	やや精良。粉性。長石・石英を少量含む。	5YR6/6 橙色	良好 やや軟質	
観察	0U0Y	土師器	高杯	－	基部径 約3	基部	－	－	やや粗粒。φ1～3mm 程度の石粒が多い。長石を多量，石英を微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	やや良	
観察	0T0Y	土師器	甕	－	－	把手	三角形で内湾しつつ上に反り上がる。	手づくね。	やや精良。長石を多量，石英・雲母を微量含む。	表面：10YR8/2 灰白色（やや赤味），断面：7.5YR8/3 浅黄橙色	やや良	
観察	0S0Y	土師器	甕	－	－	把手	付け根を押さえ絞り込む。長方形の断面を持つ。	手づくね。ナデ。	やや精良。黒色粒を多量，長石・石英・雲母を少量含む。	表面：10YR8/2 灰白色，断面：2.5Y8/1 灰白色	やや良	
観察	0U0Y-0U1F	土師器	甕	－	－	把手	三角形で内湾しつつ上に反り上がる。	手づくね。	やや精良。長石・石英を多量含む。	表面：10YR7/3 にぶい黄橙色（やや明），断面：N 4/0 灰色	やや良	
観察	0U0Y	土師器	甕	－	－	把手	三角形でやや上に反り上がる。	手づくね。	やや粗粒。長石を多量，石英を少量含む。	7.5YR7/3 にぶい橙色	やや不良	
観察	0U0Y	土師器	甕	－	－	把手	三角形でやや上に反り上がる。端部は面をを持つ。	手づくね。	やや精良。長石・石英・雲母を少量含む。	2.5Y8/2 灰白色	やや良	
観察	1F0N 1G0N	土師器	甕A	Ⅱ	－(18.4)	体部片	球形の体部	内外面無文タタキのち粗いハケメ	良。やや粘性。長石・石英を少量含む。	10YR8/3 浅黄橙色	良好 やや軟質	外面一部煤付着。
観察	0V1F	黒色土器	椀	－	約18	口縁部 1/4	口縁端部がわずかに外反。素直におわる。	外面口縁部ナデ。内面ミガキ。	やや粗粒。雲母を多量長石をやや多く，石英を少量含む。	表面：10YR7/2～7/3 にぶい黄褐色，断面：10YR7/3 にぶい黄褐色（やや赤）	やや不良	9世紀初頭？A類。
観察	0U0Y 0U1A	黒色土器	椀	－	底部径 約8	底部 1/5	三角形状の小さい輪高台。体部の立ち上がりが急。貼り付け高台。	外面ナデ。内面ミガキ。	やや精良。雲母を多量，長石・石英を少量含む。	7.5YR6/4 にぶい橙色（やや明）	やや良	10世紀初頭？A類。
観察	0U0Y 0U1A	黒色土器	供膳具（杯A）	－	－	底部不明	無高台。器厚が厚い。	外面ヘラケズリ後ナデ。内面ミガキ。	やや精良。雲母を多量，長石・石英を微量含む。	表面：10YR4/2 灰黄褐色，断面：7.5YR6/4 にぶい橙色	やや良	9世紀初頭？A類。
観察	0V1A	黒色土器	杯B	－	底部径 約8	底部 1/3	三角形状の小さい輪高台	外面ナデ，底部に指頭圧痕あり。内面ミガキ。	やや精良。雲母を多量，長石・石英を少量含む。	表面：7.5YR5/3 にぶい褐色，断面：7.5YR6/4 にぶい橙色	やや良	9世紀末～10世紀初頭？A類。
観察	0T1A	須恵器	杯A	Ⅰ	約22	口縁部 1/10	丸みをもって内湾する口縁。端部は素直におわる。	内外面ともロクロナデ。	やや精良。黒色粒を多量，長石を少量含む。	5BG6/1 青灰色	良	

	出土位置	種別	器形	法量区分	口径	残存率	形態	調整手法	胎土	色調	焼成	備考
観察	0V0Y	須恵器	杯B	−	底部径約10	底部1/4	方形輪高台。内湾しつつ立ち上がる体部。	貼り付け高台内外面ともロクロナデ。底部外面ヘラケズリ後ナデ。	やや精良。長石を少量，黒色粒を微量含む。	5B6/1 青灰色	良好	
観察	0T0X	須恵器	杯蓋	Ⅳ	約12	口縁部1/8	屈曲する口縁。端部はわずかに外反し素直におわる。器厚がうすい。	内外面ともロクロナデ。	やや精良。長石を多量含む。	表面：5B6/1 青灰色，断面：5B5/1 青灰色	良	6世紀末～7世紀
観察	0U1A	須恵器	杯蓋	Ⅳ	約12	口縁部1/8	強く内湾する口縁。端部は素直におわる。器厚がうすい。	内外面ともロクロナデ。	やや精良。長石を多量含む。	5B6/1 青灰色	良	6世紀末～7世紀。
観察	0S0Y	須恵器	高杯Ⅰ	−	底部径約11	脚部1/6	たて長の長方形の透し窓が入る。	内外面ともロクロナデ。	やや精良。長石を少量，黒色粒を微量含む。	表面：5BG4/1 暗青灰色，断面：5P5/1 紫灰色	良好	
観察	0T0Y 0T0X	須恵器	壺L	−	頸部径約6	体部1/5	イチジク形？	ロクロ水挽き痕あり	黒色粒・白色粒を微量含む。	表面：N7/0 灰白色，断面：5Y6/1 灰色	良好	肩部に多量の自然釉付着。東海系か？
観察	0V1A	須恵器	壺G	−	高台径約6.5	底部1/3	円盤状の高台を作り出す。	底部回転糸切り痕。外面の水挽き痕はナデ消される。	白色粒をやや多く，長石・石英・黒色粒を微量含む。	表面：N5/0 灰色，断面：N5/0 灰色・5YR5/2 灰褐色	良好	断面縞目あり。
観察	0U0Y	須恵器	短頸壺？	−	約20	口縁部1/8	やや外反するが直立気味の短い口縁。端部外側は肥厚。	内外面ロクロナデ。	やや粗粒。黒色粒を多量，長石を微量含む。	7.5Y8/1 灰白色	軟質不良	
観察	0U0Y	須恵器	壺	−	底部径約17	口縁部1/10	端部は面を持ち，内外に肥厚。	内外面ロクロナデ。	やや精良。長石を多量含む。	5BG6/1 青灰色（やや赤味）	良	
観察	0T0Y	須恵器	鉢	−	約20	口縁部1/16	口縁端部水平で内側に肥厚。口縁下部にナデによるくぼみを持つ。	内外面ロクロナデ。	やや精良。長石を多量，黒色粒を微量含む。	表面：5B5/1 青灰色，断面：5B6/1 青灰色	やや良	
観察	0T0X 0U0Y 0V0Y 0W1A	須恵器	甕	−	−	体部不明	不明	外面格子状のタタキ文を少しナデ消している。内面は同心円文当て具痕。	白色粒をやや多く，長石を少量，石英・黒色粒・赤色粒を微量含む。	表面：N6/0 灰色，断面：N8/0 灰白色	軟質やや良	瓦質に近い
観察	0T0X	須恵器	甕	−	約20	口縁部1/4	口縁外反。中程より徐々に肥厚。端部内側わずかに肥厚。	体部外面タテの平行タタキ。体部内面同心円文当て具痕。	やや精良。長石・黒色粒を多量含む。	表面：10BG7/1 明青灰色～10BG6/1 青灰色，断面：10BG 6/1 青灰色	良	
観察	0V1A	須恵器	甕	−	約11	口縁部1/5	口縁外反。端部外周に面を持つ。	体部外面格子タタキ後ナデ。体部内面同心円文当て具痕。	やや精良。長石を多量，黒色粒をやや多く含む。	表面：5BG5/1 青灰色，断面：5BG6/1 青灰色	やや良	
観察	0U0Y	須恵器	甕	−	約20	口縁部1/8	口縁外反。端部から1cm程肥厚。帯状を呈す。	内外面ナデ。	やや粗粒。長石・黒色粒を多量，石英を少量含む。	10BG5/1 青灰色	良	
観察	0T0X	須恵器	甕	−	約24	口縁部1/10	口縁やや外反。端部は内湾するようにつまみ上げられ外側下部が肥厚しつまみ下げられている。	体部外面平行タタキ。体部内面同心円文当て具痕。	やや精良。長石を多量，石英を微量含む。	10BG6/1 青灰色	良	
観察	0V1A	須恵器	甕	−	約24	口縁部1/8	口縁外反。端部に凹線のある面を持つ。	内外面ロクロナデ。	やや精良。長石を多量，石英を微量含む。	10BG6/1 青灰色	やや良	
観察	0T0Y	須恵器	甕A	−		体部不明	卵形の体部に外反する口縁。口縁端部は肥厚し外傾する面をなす。	体部外面に平行のタタキ後ヨコ向きのカキメと口縁部はナデ。体部内面に同心円文当て具痕あり。	長石・白色粒をやや多く，黒色粒を微量含む。	表面：5PB7/1 明青灰色，断面：5R8/1 赤灰色	良好	9世紀前半
観察	0V0X	緑釉陶器	皿	−	約15	口縁部1/4	口縁部外反	口縁端部ナデ		7.5YR8/1 灰白色（やや白）	硬質良	釉薬確認できず。
観察	0S0V	緑釉陶器	皿	−	高台径約7	底部1/6	ケズリ出し輪高台	外面ケズリ出し		表面：2.5Y 8/3 淡黄色，断面：N 8/0 灰白色，釉：10Y 7/2 灰白色	硬質良好	断面縞目あり。

	出土位置	種別	器形	法量区分	口径	残存率	形態	調整手法	胎土	色調	焼成	備考
観察	0V1A	灰釉陶器	平瓶	−	基部径約7	口縁部1/6	口縁貼り付け。	ロクロナデ。	やや精良。黒色粒をやや多く，長石を微量含む。	N8/0 灰白色（やや緑）	良好	
観察	0R1A 0S1A	土師器	甕A	Ⅲ	約18	口縁部1/6	口縁端部は平坦な面を持つ。やや全体的に内面肥厚。	口縁内外面ともナデ。体部外面タテ方向の粗いハケメ。	やや粗粒。長石・雲母を多量，石英をやや多く含む。	10YR6/3 にぶい黄橙色	やや良	古墳時代。
観察	0T0X 0U0X 0U0Y	土師器	甕G	−	−	−	−	内外面ともハケメ。基部にナデによる凹線を持つ。	やや精良。長石を多量，石英・雲母を少量含む。	内面：2.5Y6/2 灰黄色・外面：2.5Y7/2 灰黄色，断面：2.5Y7/2 灰黄色	やや良	古墳時代。
観察	0T0Y	土師器	甕G	−	−	−	−	口縁外面ナデ。内面ハケメ後ナデによる消し。	やや精良。長石・石英を多量含む。	2.5Y7/2 ～ 6/2 灰黄色	やや良	古墳時代。
観察	0S1B	土師器	高杯	−	底部径約14	底部1/10	端部に凹線を持つ。	内外面ともにナデ。	やや粗粒。長石を多量，石英を微量含む。	2.5YR7/4 淡赤橙色	やや良	古墳時代
観察	0R1A 0S1A	土師器	高杯	−	底部径約12	底部1/6	端部に面を持つ。	全体にナデ。内面にユビオサエの痕。	やや粗粒。長石を多量，石英を少量含む。	10YR7/2 にぶい黄橙色	やや良	古墳時代
観察	0V1A 0W1A	土師器	高杯	−	底部径約8	底部1/6	端部素直におわる。	不明	やや粗粒。長石を多量，石英を少量含む。	7.5YR8/2 灰白色	やや不良	古墳時代
観察	0T0Y	土師器	壺	−	−	−	内湾する口縁。端部は内傾。	口縁外面タテ方向のハケメ後ナデ。口縁内面ヨコ方向へのハケメ。体部内外面ともにハケメ。	やや精良。長石を多量，石英・雲母を少量含む。	2.5Y8/1 灰白色	やや良	古墳時代。
観察	0T0X	土師器	壺	−	約18	口縁部1/10	口縁の屈曲部に明確な稜を持つ。端部は折り曲げにより突出させる。	内外面ナデ調整	長石（φ1～2mm）を多量含む。	表面：10YR8/2 灰白色，断面：10YR8/1 灰白色（やや白）	良	端部二次焼成。弥生・古墳時代。
観察	0R1A 0S1A	土師器	長頸壺	−	頸部径約11	頸部不明	ラッパ状にひらく頸部。	外面ナデ調整。内面指頭圧痕あり。	φ1～2mmの長石・角閃石・チャートを多量含む。	表面：7.5YR8/3 浅黄橙色，断面：7.5YR8/2 灰白色	良好	弥生時代。
観察	0S0Y	土師器	甕C	−	約11	口縁部1/8	頸部でややすぼまる。長手丸底の器体に斜め上にひらく短い口縁部からなる。	体部外面ハケメ調整。内面は基部より上はハケメ，下はユビオサエ。	黒色粒をやや多く，長石・石英・白色粒を少量含む。	表面：5YR7/3 にぶい橙色 断面：N7/0 灰色	良好	弥生時代。

ＳＤ4340出土土器

	出土位置	種別	器形	法量区分	口径	残存率	形態	調整手法	胎土	色調	焼成	備考
観察	1S2A	土師器	甕A	−	約17	口縁部1/4	A	口縁部内外面ヨコナデ	長石・赤色粒・白色粒・雲母を微量含む。	10Y8/2 灰白色	良	
観察	1Y2A	須恵器	杯B	Ⅳ	12.4	底部～体部1/5 口縁部1/12	高台は内湾し，体部は緩やかに外反する。口縁端部は尖り気味におわる。	内外面ロクロナデ	精良。	内面・断面：N7/0 灰白色 外面：N6/0 灰色	良好	
観察	2A2A	須恵器	杯B	Ⅴ	10.2	1/5	貼り付け高台。体部は緩やかに外反する。口縁部は丸くおわる。	内外面ロクロナデ	密。雲母，長石を微量含む。	内面・断面：N7/0 灰白色 外面：7.5Y7/1 灰白色	良好	口縁から高台にかけて，一部に自然釉が付着する。
観察	1Q1Y 1R1Y 1Q2A 1R2A	須恵器	杯B	−	底径7.4	底部1/3	貼り付け高台。断面は半円状の形を呈す。	内面ロクロナデ。外面は摩滅のため調整不明瞭。	密。雲母を微量に含む。	内面：5Y7/1 灰白色 断面・外面：5Y6/1 灰色	やや軟質	
観察	1T2A 1U2A	須恵器	杯B	−	底径9.7	底部1/5	貼り付け高台。体部は緩やかに外反する。	内外面ロクロナデ	密	5Y8/2 灰白色	やや軟質	
観察	1T2A 1U2A	須恵器	杯B	−	底径11.0	底部1/6	高台は貼り付けで，真直ぐに立ち上がる。	内面はロクロナデ	密。雲母を微量含む。	N7/0 灰白色	良好	
観察	1W2A 1X2A	須恵器	杯B	−	底径8.8	底部約1/6	断面方形の高台。体部は緩やかなふくらみをもって立ち上がる。	内外面ロクロナデ	密。雲母を少量含む。	N7/0 灰白色	良好	

	出土位置	種別	器形	法量区分	口径	残存率	形態	調整手法	胎土	色調	焼成	備考
観察	1X2A	須恵器	杯B	−	底径11.8	底部～体部1/5	貼り付け高台。	内外面ロクロナデ	密。雲母含む。長石を微量含む。	N7/0 灰白色	良好	
観察	1V2A 1U2A	須恵器	杯A	Ⅱ	13.0	1/2	底部は平らで，体部は緩やかに外反して立ち上がり，口縁端部は丸くおわる。	調整は不明瞭	精良	7.5Y8/1 灰白色	軟質でもろい	
観察	1T1Y 1T2A	須恵器	杯	−	底径約10	底部1/4	−	底部にヘラキリ痕が残る。	精良。	7.5Y8/2 灰白色	軟質でもろい	
観察	1V1Y 1V2A 1T2A 1Y2A	須恵器	杯	−	−	底部1/3	−	内外面ロクロナデ	密。雲母を少量，断面に3mm大の長石を含む。	7.5Y7/1 灰白色	やや軟質	
観察	1V1Y 1V2A	須恵器	杯	−	底径10.8	底部1/12	−	内外面ロクロナデ。底部に工具痕あり。	密。断面に雲母を微量含む。	2.5Y8/2 灰白色	やや軟質	
観察	1W1Y 1W2A 1X1Y 1X2A	須恵器	杯A	−	−	底部1/2	−	底部ヘラキリ	精良。雲母微量含む。	7.5YR8/1 灰白色	良 軟質	
観察	1X2A	須恵器	Ⅲ A	−	底径9.6	底部1/5	−	内面ロクロナデ。外面は磨滅が著しく調整不明瞭。	密。1mm大の礫を含む。	10Y8/1 灰白色	やや軟質	
観察	1X2A	須恵器	蓋	−	11.8	口縁～頂部1/3弱	頂部はほぼ水平。口縁端部を丸くつまみあげる。	−	密。雲母を少量含む。	外面・断面：7.5Y7/1 灰色 内面：N6/0 灰色	良好	頂部にヘラによる刻みあり。内面は磨かれており，墨のようなものが付着している。
観察	1T1Y 1T2A	須恵器	蓋	−	14.4	口縁～頂部1/9	口縁端部は丸みを持って尖り気味におわる。	ロクロナデ。外面の一部にロクロケズリ。	雲母，長石を微量含む。	外面：N7/0 灰白色・内面：5Y6/1 灰色 断面：7.5Y6/1 灰白色	良好	内面に墨が付着。硯に転用か。
観察	1V1Y 1V2A	須恵器	蓋	−	15.2	口縁～頂部1/9	口縁端部の内外面に沈線状の凹みを持つ。	内外面ロクロナデ。頂部はロクロケズリ後にナナメ方向にナデ。	密。外面に雲母を微量含む。	内面：N6/0 灰色 外面・断面 N7/0 灰白色	良好	内面に墨付着。
観察	1T2A 1U2A	須恵器	蓋	−	13.5	口縁～頂部1/5	口縁端部はほぼ真直ぐに立ち上がり，頂部との境で沈線状に凹む。頂部は緩やかに内湾する。	内外面ロクロナデ	密。雲母を微量含む。	N7/0 灰白色	良好	
観察	1U2A 1V2A	須恵器	蓋	−	14.6	口縁1/12	宝珠状つまみを持つ。口縁端部丸く収まり，外面は沈線状の凹みを持つ。頂部はやや凹む。	ロクロナデ。外面に一部未調整部分がある。	密。雲母，長石を微量含む。	外面・内面：7.5Y5/1 灰色 断面：7.5Y6/1 灰色	良好	
観察	1X2A	須恵器	杯B蓋	Ⅲ	17.6 (1.4)	口縁1/8	口縁外反し端部は下方に折れる	ロクロナデ	精良。やや砂質。長石を微量含む。	5Y8/1 灰白色	やや不良 やや軟質	
観察	1T2A 1U2A	須恵器	杯蓋	−	16	口縁部1/5	口縁端部は沈線状の凹みがある。	内外面ロクロナデ	精良。雲母を微量含む。	7.5YR8/1 灰白色	やや不良	
観察	1Q1Y 1R1Y 1Q2A 1R2A	須恵器	杯蓋	−	12	口縁部1/6	口縁は内湾のち外反する。口縁端部は内側へ折り曲げ気味に突出する。	内外面ロクロナデ	精良。雲母微量含む。	N7/0 灰白色	良好	
観察	1S2A	須恵器	壺G？	−	底径4.8	−	−	内外面ロクロナデ	密。雲母を微量含む。	内面：10YR7/1 灰白色 外面・断面：5Y8/1 灰白色	やや軟質。	外面に工具痕。自然釉が一部付着する。
観察	1S1X 1S2A	須恵器	壺	−	底径14.6	底部1/7	−	内外面ロクロナデ。ケズリだし高台。底部に回転糸切り痕が残る。	密。雲母を微量含む。	内面：5Y5/1 灰色 外面・断面：7.5Y6/1 灰色	やや良	内面に墨のようなものが付着。硯に転用か。

	出土位置	種別	器形	法量区分	口径	残存率	形態	調整手法	胎土	色調	焼成	備考
観察	1T1Y 1T2A	須恵器	壺	－	14.2	口縁～底部 1/6	口頸部は中央付近で凹むが，ほぼ垂直。口縁端部は丸みを持って収まり，先端は水平な面を持つ。	ロクロナデ	密。雲母と 2～3mm の長石を含む。	表面：N6/0 灰色 断面：2.5YR6/1 黄灰色	やや良	
観察	1T1Y 1T2A	須恵器	壺？	－	－	－	平底	ナデ	やや密。雲母と 2～3mm 大の礫を少量含む。	N5/0 灰色	良好	
観察	1U2A	須恵器	壺	－	－	－	－	内面ロクロナデ。外面摩滅により不明瞭。		7.5Y8/1 灰白色	軟質	
観察	1T2A 1U2A	須恵器	甕	－	－	体部	－	外面格子タタキ。内面当て具痕。	精良。長石を少量含む。	表面：5B4/1 暗青灰色 断面：5YR5/2 灰褐色	良好	内面に煤付着
観察	1U2A 1T1Y 1T2A 1V2A	須恵器	甕 A	－	約 52	口縁部 1/8	口縁部外反。端部下方に鋭く長く引き出され外傾する広い帯状の面を持つ。	口縁内外面ナデ。	精良。長石を多量（最大φ 6mm）含む。	表面：10BG4/1 暗青灰色 断面：5R5/1 赤灰色	良好	内面自然釉付着。同一個体か？
観察	1U1Y	須恵器	甕 A	－	約 52	口縁部 1/8	口縁部外反。端部下方に鋭く長く引き出され外傾する広い帯状の面を持つ。	口縁内外面ナデ。	精良。長石を多量（最大φ 6mm）含む。	表面：10BG4/1 暗青灰色 断面：5R5/1 赤灰色	良好	
観察	1Q1Y 1Q2A 1R1Y 1R2A 1S2A	須恵器	甕	－	約 24	口縁部 1/4	口縁部外反。端部内側を上方へつまみ上げ外傾する。	口縁内外面ナデ。体部内面平行の当て具痕。	やや精良。長石・赤色粒を多量含む。	表面：5B6/1 青灰色（明るい） 断面：7.5YR6/2 灰褐色	良	
観察	1T2A	須恵器	甕	－	約 24	口縁部 1/10	口縁部外反。端部内側に肥厚し外側につまみ出され上部に平坦な面を持つ。端部外面下部に稜を持つ。	口縁内外面ナデ。	やや精良。長石・黒色粒を少量，雲母を微量含む。	表面：10G6/1 緑灰色（明るい） 断面：10YR7/1 灰白色	良	
観察	1T2A	須恵器	甕 C ？	－	21	口縁 1/5	口縁端部は内外面をつまみあげ，内側に沈線状の稜を持つ。	ロクロナデ。	やや粗。雲母，長石を少量含む。	N6/0 灰色	良	内面の摩滅が著しい。
観察	1U2A 1V2A	須恵器	甕	－	約 19	口縁部 1/8	口縁部外反。端部内側を上方へつまみ上げ外傾するくぼみを持つ面を持つ。	口縁内外面ナデ。体部外面ヨコの平行タタキ。	精良。長石を多量含む。	表面：5B5/1 青灰色（やや暗） 断面：5YR5/2 灰褐色	良好	
観察	1U2A 1V2A	須恵器	甕	－	約 48	—	口縁部は外側下方に折り曲げ，端部で外反し尖り気味におさまる。	ロクロナデ。	やや粗粒。長石（φ 1mm）・石英（φ 2mm）・チャート（φ 2～6mm）・雲母を多量含む。	表面：N5/0 灰色 断面：7.5YR5/1 赤灰色	良好	口縁内面に自然釉が点状に付着。
観察	1T1Y 1T2A	須恵器	甕	－	約 46	口縁部 1/8	口縁部外反。端部下方に鋭く長く引き出され外傾する広い帯状の面を持つ。	口縁内外面ナデ。	精良。長石を少量含む。	表面：5B6/1 青灰色 断面：5R5/1 赤灰色	良好	
観察	1T2A 1U2A	須恵器	甕	－	約 36	口縁部	口縁部外反。端部外側わずかに肥厚し上部に外傾する面を持つ。	口縁内外面ナデ。	やや精良。長石をやや多く，黒色粒を微量含む。	表面：5BG6/1 青灰色 断面：N7/0 灰白色	良好	
観察	1T1Y 1T2A 1V1Y 1V2A 1Y2A 他	須恵器	甕	－	約 18	口縁部 1/8	まっすぐな口縁。端部外側は上方に，内側は内側につまみ出され内傾する凹面を持つ。	体部外面格子タタキ。内面同心円文タタキ。	精良。長石・黒色粒を微量含む。	N7/0 灰白色	良好	
観察	1Q1Y 1Q2A 1R1Y 1R2A 1M1W	須恵器	甕	－	－	口縁部	ほぼまっすぐな口縁端部は内側上方に少し，外側下方に大きくつまみ出し外傾する面を持つ。	内面ナデ。外面端部下に５条の波状紋，その下に２条の凹線，その下に３条の波状紋，その下に２条の凹線。	やや精良。長石を少量，黒色粒を微量含む。	表面：10YR4/1 褐灰色 断面：10YR7/2 にぶい黄橙色	良	
観察	1M1W	須恵器	甕	－	－	口縁部	ほぼまっすぐな口縁端部は内側上方に少し，外側下方に大きくつまみ出し外傾する面を持つ。	内面ナデ。外面端部下に５条の波状紋，その下に２条の凹線，その下に３条の波状紋，その下に２条の凹線。	やや精良。長石を少量，黒色粒を微量含む。	表面：10YR4/1 褐灰色 断面：10YR7/2 にぶい黄橙色	良	

観察	－	須恵器	甕	－	約 28	口縁部	口縁部外反。端部外側が肥厚し外傾する面を持つ。	内外面ナデ。	やや精良。長石・黒色粒を多量，石英を微量含む。	表面：5BG6/1 青灰色（やや暗） 断面：N7/0 灰白色	良	
観察	1 T 2 A	緑釉陶器	皿	－	高台径約 5.5	底部 1/4	円盤高台	外面ヘラケズリ	やや精良。	表面：10Y4/1 灰色 断面：2.5Y8/2 灰白色	やや不良軟質	9 世紀前半

S E 1842 上層出土土器

	種別	器形	法量区分	口径	残存率	形態	調整手法	胎土	色調	焼成	備考
観察	土師	杯 B 蓋	Ⅱ	約 22	口縁 1/8	平坦な頂部となだらかな縁部を持つ口縁端部はやや下方に肥厚する。つまみのとれた痕あり。	外面ヘラケズリ後ミガキ 4 分糸切（確認できる）。内面ヨコナデ。	やや良。雲母を多量，長石を少量，黒色粒を微量含む。	表面：10 Y R 7/3 にぶい黄橙色 断面：10 Y R 6/3 にぶい黄橙色	やや良	表面に煤付着。
観察	土師	皿 A	Ⅱ	約 16	1/24	体部内湾。口縁端部は外側に外傾する面をもつ。	内外面口縁部ヨコナデ。底部外面は不調整で指頭圧痕残す。	良。赤色粒を少量，長石を微量含む。	表面：5YR7/6 橙色 断面：7.5YR7/4 にぶい橙色・2.5Y6/1 黄灰色	不良	
観察	土師	甕 A	－	約 14	口縁 1/6	A	外面摩滅により調整不明瞭。内面ナデのちユビオサエ。	良。長石を微量，雲母を多量含む。	外面：7.5YR5/2 灰褐色・内面：10YR5/2 灰黄褐色，断面：5YR6/4 にぶい橙色	良好	内面に煤付着。
観察	土師	甕 A	－	約 25	1/8	体部は頸部部で「く」の字状に屈曲。口縁端部は巻き込むように上方へ突出する。	外面口縁部から体部にかけて縦方向にハケメ調整。内面摩滅により調整不明瞭。	やや粗粒。長石・石英（φ～1mm）・雲母を中量，赤色粒を微量含む。	表面：7.5YR8/4 浅淡赤橙色 断面：7.5YR8/3 淡黄橙色（明るめ）	不良	
観察	土師	甕 A	－	約 18	1/8	体部は頸部で外方に屈曲。頸部の強いヨコナデにより，口縁部外面が著しくくぼむ。口縁端部内面は内側へ巻き込むように肥厚。	外面ヨコナデ。内面ナデ。頸部以下はハケメ残存。	良。雲母を少量，長石・角閃石を微量，赤色粒を極微量含む。	表面：7.5YR8/1 灰白色 断面：10YR5/1 褐灰色及び 5YR8/3 淡橙色	不良	
観察	土師	甕 B	－	約 19	1/16	体部はわずかにふくらみを持ち，頸部で「く」の字に屈曲する。口縁部外反。端部は巻き込むように上方に突出する。	外面体部の調整不明。頸部以上はヨコナデ。内面ヨコハケのちナデ。	良。長石を微量，雲母を中量，赤色粒を極微量含む。	内面：7.5YR8/2 灰白色 外面：2.5YR7/4 淡赤橙色	不良	
観察	土師	高杯 A	－	約 13	口縁部小片	体部はゆるやかに外反。口縁端部は垂直な面をなし，上端がわずかに突出する。	ナデ	やや粗粒。雲母を中量，赤色粒を少量，黒色砂粒を微量含む。	表面：7.5YR8/3 浅黄橙色 断面：7.5YR8/2 灰白色	やや不良	外面口縁部わずかに煤付着。
観察	土師	高杯	－	脚部径約 15	脚部	脚部断面は摩滅のため三面のみ確認できる。芯棒巻き付け技法。	ケズリ	やや粗粒。長石（φ～0.5mm）・雲母を中量，赤色粒を少量，石英を微量含む。	表面：10YR8/2 灰白色 断面：10YR8/3 浅黄橙色	不良	外面にわずかに煤付着。.
観察	黒色土器	食膳具	－	－	体部小片	内湾する口縁	外面ナデ。内面細かいヘラミガキ	やや粗粒。雲母を多量，長石・石英を少量含む。	内面：黒色 外面：7.5YR6/3 にぶい褐色・10YR7/1 灰白色	良	A 類。暗文あり。
観察	須恵	蓋	－	約 16	1/6	口縁部は屈曲し，口縁端部は外下方へ突出する。天井部と口縁部との境は明瞭である。	外面頂部はヘラキリのち丁寧なナデ。内面頂部は不定方向のナデ。口縁部との境を強めにヨコナデ。	良。黒色粒を少量，長石を微量含む。	N8/0 灰白色	軟質良	
観察	須恵	鉢	－	高台径約 10.5	底部 1/4	方形の輪高台。	－	黒色粒・白色粒を少量含む。	10Y8/1 灰白色	軟質やや不良	
観察	須恵	甕	－	高台径約 14	底部 1/5	平底の底部	タタキ痕あり	黒色粒を少量，長石・白色粒を微量含む。	表面：5PB6/1 青灰色 断面：5 R 7/1 明赤灰色	硬質良	底部内面に自然釉。
観察	須恵	壺 G	－	－	体部 1/5	B	外面ロクロ水挽きのちナデ。内面ロクロ水挽き。	黒色粒を多量，白色粒を少量含む。	表面：5PB7/1 明青灰色 断面：N 8/0 灰白色	硬質良	体部外面一部に淡灰緑色の自然釉。
観察	褐釉陶器	壺	－	底部径約 13	底部 1/6	不明	ロクロ水挽きのちナデ	長石・白色粒をやや多く，黒色粒を微量含む。	表面：5YR4/2 灰褐色 断面：5 Y R 7/3 にぶい橙色	硬質良好	体部外面一部に淡灰緑色の自然釉。 断面層状。

観察	灰釉	蓋	－	約 12	1/9	天井部はやや丸味を持つ。口縁部は天井から直角に折れ曲がり，直立する。口縁端部は丸くおさめる。	ロクロナデ	良。角閃石を多量，長石を微量，含む。	表面：10YR7/1 灰白色， 断面：N8/0 灰白色， 釉：10Y6/2 オリーブ色	良好	外面及び口縁部内面に施釉する。

SE 1842 中層出土土器

	種別	器形	法量区分	口径	残存率	形態	調整手法	胎土	色調	焼成	備考
観察	土師	Ⅲ A	Ⅱ	約 17	1/6	体部内湾。口縁端部は素直におわる。	外面：口縁端部ヨコナデ後体部から口縁端部にかけてヘラケズリ。ヨコナデをケズリのこす。内面ヨコナデ。	良。雲母を多量，赤色粒を中量，黒色砂粒を極微量含む。	表面：10YR7/3 にぶい黄橙色 断面：10YR8/2 灰白色	良好	
観察	土師	甕	－	約 26	口縁部 1/6	B。端面に凹線を廻らす。	内面ヨコナデ。外面口縁端部近くまでタテのハケ目を持つが口縁端部はヨコナデにより消されている。	やや良。長石を少量，石英・黒色粒を微量含む。	表面：10 Y R 6/3 にぶい黄橙色 断面：10 Y R 8/2 灰白色	良	内外面とも煤付着。
観察	土師器	－	－	－	小片	不明瞭	ナデ	精良。雲母微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	やや不良	釈読不能の墨書。
観察	須恵	杯	－	約 14	1/12	体部は内湾し，口縁部でわずかに外反する。口縁端部は素直におわる。	全体的にロクロナデ。底部欠損により，以下不明。	良。長石（P 0.5mm）を多量含む。	表面：N6/0 灰色（黄味がかる） 断面：5Y4/1 灰色	良好	
観察	須恵	杯A	－	高台径 約 10	底部 2/3	丸みをもって内湾する口縁	ロクロ成形。その他不明。	黒色粒・白色粒を微量含む。	N 8/0 灰白色	軟質良	灯明皿？
観察	須恵	杯B 蓋	Ⅲ	約 17	口縁部 1/8	平坦な頂部に屈曲する縁部	回転ヘラケズリ後ナデ。	白色粒を少量含む。	5 B 6/1 青灰色	硬質良好	
観察	須恵	甕	－	－	不明	不明	外面にタタキ痕あり。	長石をやや多く，石英・黒色粒を少量，赤色粒を微量含む。	表面：10 Y R 4/1 褐灰色 断面：10 Y R 8/3 浅黄橙色	硬質良好	自然釉付着。

人形観察表

遺物番号	遺構	層序，出土地点	地区・グリッド	頭部形状	全長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	手の表現	墨痕	股部形態	備考
65	SR 4200	西肩	1J1V	その他	476	57	5	○	−	∧	大型　頭髪表現残る
66	SR 4200	砂礫層	1G1R，1G1Q	円	(463)	(44)	4	○	○	⊓	大型　半円形で残る
67	SR 4200	西肩	1J1V	円	384	30	3	○	○	∧	大型
68	SR 4200	最下層	1K2A	円	163	16	2	○	○	∧	六体で出土
69	SR 4200	最下層	1K2A	台形	154	21	2	○	○	∧	六体で出土
70	SR 4200	最下層	1K2A	圭	158	19	2	−	○	∧	片足欠損　六体で出土
71	SR 4200	最下層	1K2A	その他	165	20	2	○	○	∧	六体で出土
72	SR 4200	最下層	1K2A	円	162	17	2.5	○	○	∧	六体で出土
73	SR 4200	最下層	1K2A	圭	155	19	3	○	○	∧	六体で出土
74	SR 0001	3層	1D1I	円	(94)	14	2	−	−	∧	小型
75	SR 4200	砂礫層上層	1J1Y	円	(58)	(12.5)	2	−	○	−	頭〜肩半のみ
76	SR 4200	最上層	1J1W，1J1V	円	172.5	(19.5)	2	−	○	∧	−
77	SR 4200	砂礫層	1D1J	円	192	20	2.5	−	−	∧	−
78	SR 4200	西肩	1J1V	円	226	25	2	−	○	∧	背面に墨痕
79	SR 4200	西肩	1J1V	円	261	38	4	○	○	⊓	大型
80	SR 4200	最上層〜砂礫層	1G1Q〜1G1U	その他	185	23	3	−	−	−	頭髪表現残る 股部形状は⊓の可能性あり
81	SR 4200	西肩	1J1W	台形	(156)	(27)	5	−	○	−	脚欠　墨痕薄く残る
82	SR 4200	西肩	1J1V	台形	(107)	(21)	2	−	○	−	−
83	SR 0001	3層	1D1I	台形	(115)	23	3	−	○	−	−
84	SD 4185	−	1K1W	台形	(104)	28	2.5	−	○	−	脚欠
85	SR 4200	西肩	1J1V	台形	194	25	3	○	○	∧	4文字判読不可， 背面にも墨痕あり
86	SR 4200	西肩	1J1V，1K1V	台形	190	(14)	4	○	○	−	半身欠
87	SR 4200	砂礫層	1J1Y	台形	136	22	2.5	○	○	∧	−
88	SR 4200	砂礫層	1I1T	台形	180.5	22	3	○	○	∧	−
89	SR 4200	砂礫層上層	1G1N	台形	158	17	2	○	○	∧	−
90	SR 4200	砂礫層上層	1J1V	台形	192	26	2	○	○	∧	−
91	SR 4200	西肩	1J1V，1K1V	台形	167	24	2	○	−	∧	−
92	SR 4200	最上層〜砂礫層上層	1H1T	台形	(132)	23	1	−	○	∧	脚欠
93	SR 0001	3層	1D1I	台形	242	27	2	−	−	⊓	一部欠け
94	SR 4200	西肩	1J1V，1K1V	台形	165	23	2.5	○	○	∧	片脚欠　頭髪表現のみ残る
95	SR 4200	砂礫層〜最下層	1D1I	台形	(149)	(14)	1.5	○	○	−	頭髪表現残る，壺Bと供伴
96	SR 4200	西肩	1I1U，1J1U	台形	124	20	2	−	−	∧	−
97	SR 4200	西肩	1I1U，1J1U	台形	159	27	2	−	○	∧	脚一部欠　表，裏に墨痕あり
98	SR 4200	西肩	1J1V	台形	(156)	26	2	○	○	∧	足先欠　墨痕ネガ状に残る
99	SR 4200	西肩	1J1V	台形	192.5	22.5	3	○	○	∧	片腕欠
100	SR 4200	西肩	1J1V	圭	(106)	27	2	−	○	−	脚欠　墨痕一部残る
101	SR 4200	西肩	1J1V	圭	173	23	4	−	−	∧	頭一部欠
102	SR 4200	西肩	1I1U，1J1U	圭	(150)	22	2	○	○	∧	身のみ
103	SR 4200	西肩	1J1V	圭	(83)	22	2	−	○	−	下半身欠
104	SR 4200	砂礫層上層〜砂礫層	1J1Y	圭	146	19	1.5	−	○	∧	一部欠
105	SR 4200	西肩	1J1V，1K1V	圭	(81)	22.5	2.5	−	○	−	下半身欠　木簡付近埋土
106	SR 4200	西肩	1J1V，1K1V	圭	168	29	3	○	○	∧	−
107	SR 4200	西肩	1K1W	圭	114	20	2	−	○	⊓	−
108	SR 4200	最上層〜砂礫層	1G1Q〜1G1U	圭	154	17	1	○	○	∧	−

〔凡例〕

丸：丸頭，圭：圭頭，台形：台形頭，その他：その他の形状

股部形状　∧：逆v字形，⊓：コの字形

遺物番号	遺構	層序，出土地点	地区・グリッド	頭部形状	全長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	手の表現	墨痕	股部形態	備考
109	SR 4200	最上層～砂礫層	1G1Q～1G1U	圭	(104)	(16)	2	－	○	－	－
110	SR 4200	最上層～砂礫層上層	1I1X	圭	157	21	2	－	○	∧	－
111	SR 4200	砂礫層上層	1D1I，1C1I	圭	(128)	29	3	－	－	－	半身欠
112	SR 4200	砂礫層	1G1Q～1G1U	圭	161	(11)	2	○	○	－	半身欠
113	SR 4200	砂礫層上層	1K2A	圭	151	22	1.5	○	○	∧	－
114	SR 4200	最上層～砂礫層	1G1Q～1G1U	圭	165	26	2	○	○	∧	－
115	SR 4200	最上層～砂礫層	1G1Q～1G1U	圭	(84)	17	2	－	－	－	脚欠
116	SR 4200	砂礫層上層	1K2A	圭	(117)	26	4	－	－	－	脚欠
117	SR 4200	西肩	1J1V，1K1V	圭	(125)	(13)	2	－	－	－	脚欠
118	SR 4200	最上層	1K1W	－	(72)	18	1.5	－	○	－	脚欠
119	SR 4200	砂礫層	1C1I	－	(200)	(23)	2.5	－	－	－	片足のみ
120	SR 4200	最上層～砂礫層	1G1U	－	(102)	12	2	－	－	－	片半身
121	SR 4200	西肩	1J1V，1K1V	－	(317)	(44)	5	－	－	∧	大型
200	SR 4200	西肩	1I1U，1J1U	－	(33)	(15)	1.5	－	○	－	身に墨痕
－	SR 4200	西肩	1K1W	－	(105)	(17)	1.5	－	－	－	上下破損
－	SR 4200	西肩	1J1V	－	(56)	(11)	1	－	○	－	身のみ
－	SR 4200	西肩	1J1V	－	(80)	(13)	1	－	－	－	片足のみ

斎串観察表

遺物番号	型式分類	遺構	層序	地区・グリッド	全長	幅	厚	備考
122	AI	SR 0001	3層	0W1H	(96)	(15)	3.5	－
123	AI	SX 820	2層	1D1H	(146)	(14)	5	－
124	AI	SD 4185	－	1K1W	(170)	12	1.5	－
125	A	SD 4185	－	1K1W	(150)	24	3	－
126	B	SR 4200	西肩	1J1V	(58)	(15)	6	－
127	BI	SR 4200	西肩	－	(122)	18	4.5	－
128	BI	SR 0001	3層	1D1I	(182)	12	5	－
129	BI	SR 0001	3層	掘下中	(193)	9	4	－
130	BI	SR 4200	西肩	－	198	13	4	－
131	BI	SR 4200	砂礫層	1I1V	190	11.5	1.5	－
132	C	SR 4200	西肩	1J1V	(88)	17	5	－
133	C	SX 820	2層	0U0Y，0U1A	(70)	22	4.5	－
134	C	SR 4200	最上層～砂礫層	1G1Q～1G1U	(73)	17	2	－
135	C	SR 4200	西肩	－	(92)	19	3	－
136	C	SR 4200	最上層～砂礫層	1G1Q～1G1U	115	19.5	2.2	－
137	C	SR 4200	西肩	1J1V	120	18.5	2.5	－
138	C？	SR 4200	最上層～砂礫層	1G1Q～1G1U	(122)	21.5	3	－
139	C	SR 4200	西肩	1J1V	(146)	26	4	－
140	C	SD 4185	－	1K1W	(191)	13.5	5	－
141	D	SR 4200	西肩	1J1V，1K1V	177	(16)	1.5	A，Cの要素を持つ
142	CI	SR 4200	西肩	1J1V	170	12.5	4	－
143	CII	SR 4200	最上層～砂礫層	1G1Q～1G1U	(136)	(20)	3.5	
144	CII	SR 4200	西肩	－	(205)	17	2	－
145	CII	SR 4200	西肩	1J1V	139	14.5	2	－
146	CII	SR 4200	最上層～砂礫層	1J1Y	174.5	17	2	－
147	CII	SR 4200	砂礫層	1D1H	(139)	(15)	1.2	
148	CII	SD 4185	－	1K1W	(181)	18	2	－
149	CII	SR 4200	西肩	1G1N	203	24	4	
150	CV	SR 4200	最上層～砂礫層	1I1W	175	17	1	－
151	CV	SR 4200	西肩	1J1V，1K1V	(159)	16	2	－
152	CV	SR 4200	西肩	1J1V	(373)	19	5	－

遺物番号	型式分類	遺構	層序	地区・グリッド	全長	幅	厚	備考
153	C？Ⅵ	SX 820	2層	1D1H	(147)	18	2.5	−
154	C？Ⅵ	SR 4200	西屑	1J1V，1K1V	(68)	23	4	−
155	C？Ⅵ	SD 4185	−	1K1W	(225)	20	2	−
156	CⅥ	SR 4200	西屑	1J1V，1K1V	370	28	2	大型
157	D	SR 4200	西屑	1J1V	240.5	12	2.5	−
158	CⅥ？	SR 4200	西屑	1J1V，1K1V	(231)	19.5	6	「×」刻みあり
159	DI？	SD 4185	−	1K1W	238	17.5	4	−
−	AI	SR 4200	西屑	1J1V	−	−	−	−
−	B	SR 0001	3層	1G1Q～1G1U	−	−	−	一部破損
−	BI	SR 4200	西屑	1J1V	−	−	−	−
−	BI	SR 4200	西屑	1J1V	−	−	−	−
−	BI	SR 4200	西屑	1J1V，1K1V	−	−	−	−
−	B？	SR 4200	西屑	1J1V，1K1V	−	−	−	先端部のみ
−	C	SR 0001	3層	1G1Q～1G1U	−	−	−	先端部のみ
−	CI	SX 820	2層	1C1G	−	−	−	−
−	CV	SR 0001	3層	1D1I	−	−	−	−
−	−	SR 0001	北屑	1O1H	−	−	−	−
−	−	SR 4200	最上層～砂礫層	1G1Q～1G1U	−	−	−	−
−	Ⅱ？	SR 4200	西屑	1J1V	−	−	−	−
−	−	SR 4200	西屑	1J1V	−	−	−	−
−	−	SR 4200	西屑	1I1V・1J1V	(112)	9	4	斎串の可能性あり
−	B？	SX 820	2層	1C1G	(203)	13.5	7	
−	B？	SR 4200	西屑	−	177	8.5	7	

祭祀関連遺物

遺物番号	グリッド	遺構名	種別	器形	口径 器高	残存率	形態	製作技法	外面調整手法	内面調整	口縁部	胎土	色調	焼成	備考
1	0R1H 0S1H	SR4200	土師器	壺B	－	小片	－	－	ユビオサエ	オサエ	－	精良。やや粘性。雲母，石英を微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好 硬質	外面に墨痕あり。
2	1J1U	SR4200	土師器	壺B	13.8 4.6	ほぼ完形	A	I	ユビオサエ	不定方向のナデ	ヨコナデ。端部を上につまみあげる	精良。やや粘性。雲母，石英を微量含む。	7.5 Y R 8/4 淡黄橙色	良好 硬質	
3	1J1V	SR4200	土師器	壺B	14.5 6.9	1/8	A	II	ユビオサエ	オサエ。下半をヨコナデ。	ヨコナデ。端部を上につまみあげる	精良。やや砂質。雲母，石英を微量含む。	10YR7/2 にぶい黄橙色	やや良好やや硬質	
4	1J1V	SR4200	土師器	壺B	15.8 6.4	1/8	A	II	ユビオサエ	オサエ。下半をナナメナデ。	ヨコナデ。端部を上につまみあげる	精良。やや粘性。雲母，石英を微量含む。	7.5YR7/4 にぶい橙色	良好 硬質	
5	1J1V	SR4200	土師器	壺B	14.5 (2.9)	1/2	A	I	ユビオサエ	オサエ。下半をナナメナデ。	ヨコナデ。端部を上につまみあげる	やや精良。やや粘性。雲母を微量含む。	10YR6/4 黄橙色	良好 硬質	2面の人面墨書が外面の対称位置にある。
6	1J1V	SR4200	土師器	壺B	16 (5.3)	1/7	B	－	ユビオサエ	オサエ。下半をヨコナデ。	ヨコナデ。端部を上につまみあげる	精良。やや砂質。雲母，石英，チャートを微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好 硬質	外面に墨書あり。
7	1J1V	SR4200	土師器	壺B	14.7 (3.8)	1/9	－	－	ユビオサエ	オサエ。ヨコナデ。	ヨコナデ。端部を上につまみあげる	精良。雲母，石英を微量含む。	10YR8/3 淡黄橙色	良好	外面に墨書あり。
8	1J1V	SR4200	土師器	壺B	－	小片	－	－	ユビオサエ	－	－	やや精良。粉性。雲母を微量含む。	5YR6/6 橙色，内面：10YR8/4 淡黄橙色	良好 硬質	外面に墨書あり。
9	1J1V	SR4200	土師器	壺B									7.5YR7/4 にぶい橙色，内面：10YR7/2 にぶい黄橙色		
10	1J1V	SR4200	土師器	壺B	－	小片	－	－	ユビオサエ	オサエ。ナデ。	－	やや精良。粉性。雲母を微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好 硬質	外面に墨書あり。
11	1J1V	SR4200	土師器	壺B						－					
12	1J1V	SR4200	土師器	壺B	－	小片	－	－	ユビオサエ	ヨコナデ。粗いハケ。	ヨコナデ。端部を上につまみあげる	良。やや砂質。雲母，石英，長石を微量含む。	5YR7/6 橙色	やや良好やや硬質	外面に墨痕あり。
13	1D1I	SR4200	土師器	壺B	13.65 (5.1)	2/5	A	I	ユビオサエ	ヨコナデ	ヨコナデ。端部を上につまみあげる	精良。やや砂質。雲母，石英を微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	やや良好やや硬質	非常に薄い成形。口縁外面2ヶ所に焼成時の黒斑あり。
14	1E1J	SR4200	土師器	壺B	－	－	C	－	ユビオサエ	ハケメ	－	やや精良。雲母，石英を微量含む。	10YR8/2 灰白色	良好やや硬	外面に墨痕あり。
15	1F1L	SR4200	土師器	壺B	－ (2.4)	1/10 以下	－	－	ユビオサエ	－	ヨコナデ	やや粗粒。雲母，石英，長石を少量含む。	7.5YR6/4 にぶい橙色，内面：10YR7/2 にぶい黄橙色	やや不良やや硬質	墨書あり。
16	1F1L	SR4200	土師器	壺B											
17	1E1L	SR4200	土師器	壺B	15.4 (2.8)	1/10 以下	－	－	ユビオサエ	ナデ。オサエ。	ヨコナデ。端部を上につまみあげる。	精良。雲母を微量含む。	7.5YR7/6 橙色	やや良好硬質	墨書あり。
18	1E1L	SR4200	土師器	壺B	15.2 (2.8)	1/10	－	－	－	不定方向のナデ	ヨコナデ。端部を上につまみあげる。	精良。雲母を微量含む。	7.5YR7/4 にぶい橙色	良好 硬質	墨痕あり。
19	1F1L	SR4200	土師器	壺B	－	－	－	－	ヨコナデ。オサエ。	－	－	精良。雲母，石英，長石を微量含む。	5YR7/6 橙色，内面：7.5 Y R 7/4 にぶい橙色	やや良好やや硬質	墨書あり。
20	1J2A 1K2A	SR4200	土師器	壺B	16.05 (5.3)	1/4	A	II	オサエ	ヨコナデ。板ナデ。	ヨコナデ。端部を上につまみあげる。	精良。雲母を含む。	7.5 Y R 6/4 にぶい橙色	良好 硬質	
21	1E1J	SR4200	土師器	壺B	14.95 6.2	ほぼ完形	A	I	ユビオサエ	薄い板ナデ。ヨコナデ。ナナメ。方向のナデ。	ヨコナデ。端部を上につまみあげる。	精良。雲母，石英，長石を微量含む。	7.5 Y R 7/4 にぶい橙色	やや良好硬質	
22	1D1H	SR4200	土師器	壺B	14.2 5.3	ほぼ完形	A	II	ユビオサエ	不定方向のナデ	ヨコナデ。端部を上につまみあげる。	精良。雲母，石英，長石を微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	やや良好やや硬質	

遺物番号	グリッド	遺構名	種別	器形	口径 器高	残存率	形態	製作技法	外面調整手法	内面調整	口縁部	胎土	色調	焼成	備考
23	1D1I	SR4200	土師器	壺B	14.5 5.2	1/4	A	II	−	オサエ。一部ナデ。オサエ。ヨコナデ。	ヨコナデ	精良。雲母，石英，チャートを微量含む。	7.5YR7/4 にぶい橙色	良好	
24	1E1J	SR4200	土師器	壺B	14.5 −	1/4	A	I	ユビオサエ	ヨコナデ。オサエ。タテナデ。	ヨコナデ。端部を上につまみあげる。	精良。長石，チャート，石英を微量含む。	10YR7/4 にぶい黄橙色	良好	内面にヘラ記号あり。
25	1E1J	SR4200	土師器	壺B	14.3 (4.6)	1/5	A	−	ユビオサエ	オサエ	ヨコナデ。端部を上につまみあげる。	精良。雲母，石英を微量含む。	7.5YR6/4 にぶい橙色	やや良好やや硬質	人面墨書あり。
26	1D1J 1E1J	SR4200	土師器	壺B	14.4 −	1/6	A	I	ユビオサエ。オサエ。	細く短いヨコハケ，細いヨコハケのち下部にナナメハケ	ヨコナデ。端部を上につまみあげる。	精良。粉性。雲母，石英を微量含む。微量含む。	7.5YR8/4 淡黄橙色	良好やや硬質	
27	1F1K	SR4200	土師器	壺B	9.75 3.5	ほぼ完形	C	II	ユビオサエ	ヨコナデ。下部はタテナデ。	ヨコナデ。端部は素直におさまる。	やや精良。砂質。雲母，石英，長石を微量に含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	やや良好やや硬質	
28	1D1I 1E1I	SR4200	土師器	壺B	12.1 (3.75)	1/4	C	II	ユビオサエ	タテナデ	ヨコナデ。端部を上につまみあげる。	精良。雲母を微量含む。	10YR7/4 にぶい黄橙色	良好硬質	
29	1C1H	SR4200	土師器	壺B	−	体部片	−	−	オサエ	ナデのちハケ	−	精良。雲母を微量含む。やや粉性。	10YR6/4 にぶい黄橙色	やや良好やや硬質	外面に墨書あり。
30	1I1U 1I1W	SR4200	土師器	壺B	−	小片	−	−	ユビオサエ	不定方向のナデ	−	精良。やや砂質。雲母，赤色粒子を微量含む。	7.5YR6/4 にぶい橙色	良好硬質	墨書あり。
31	1J1Y 1K1Y	SR4200	土師器	壺B	−	小片	−	−	ユビオサエ	オサエ	−	精良。雲母を微量含む。	外面：10YR8/2 灰白色，内面：10YR8/3 淡黄橙色	やや良好やや硬質	墨書あり。
32	1J1Y 1K1Y	SR4200	土師器	壺B	−	小片	−	−	ユビオサエ	オサエ	−	やや精良。石英を少量，チャートを微量含む。	外面：7.5YR8/4 淡黄橙色，内面：10YR8/2 淡黄橙色	やや良好やや硬質	墨書あり。
33	1E1J	SR4200	土師器	壺B	−	小片	−	−	ユビオサエ	ナデ	−	やや精良。砂質。雲母，石英，チャートを微量に含む。	外面：7.5YR6/6 橙色，内面：10YR7/3 にぶい黄橙色	やや良好硬質	外面に墨書あり。
34	1A1H	SR4200	土師器	壺B	−	小片	−	−	ユビオサエ	ヨコナデ。オサエ。	−	精良。雲母を微量含む。	外面：10YR8/2 灰白色，内面：10YR8/3 淡黄橙色	やや良好やや硬質	外面に墨書あり。
35	1J1Y 1K1Y	SR4200	土師器	壺B	−	小片	−	−	ユビオサエ	ナデ	−	精良。雲母を微量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	やや良好	外面に墨痕あり。
36	1I1X	SR4200	土師器	壺B	13.8 (5.1)	1/10 以下	A	I	ユビオサエ	不明瞭	ヨコナデ。端部は素直におさまる。	やや粗粒。砂質。石英，長石，雲母，赤色粒子を少量含む。	10YR4/3 淡黄橙色	やや不良軟質	外面に墨書あり。
37	1I1U 1I1W	SR4200	土師器	壺B	15.9 (4.4)	1/4	A	−	ユビオサエ（下から上へ）	不定方向のナデ	ヨコナデ。端部を上につまみあげる。	やや精良。やや粉性。雲母，赤色粒子，チャートを微量に含む。	10YR7/4 にぶい黄橙色	良好硬質	
38	1D1I	SR4200	土師器	壺B	14.8 5.5	2/3	A	I	ユビオサエ（下から上へ）	不定方向のナデ。一部ナナメナデ	ヨコナデ。端部を上につまみあげる。	精良。雲母，長石，赤色粒子を微量含む。	7.5YR7/4 にぶい橙色	やや良好硬質	
39	1J1U 1J1W 1I1U 1I1W	SR4200	土師器	壺B	13.85 −	1/4	A	I	ユビオサエ（下から上へ）	板ナデ。オサエ。一部ナナメナデ。	ヨコナデ。端部を上につまみあげる。	精良。雲母を微量含む。	7.5YR6/4 にぶい橙色	良好硬質	
40	1J1U 1J1W 1I1U 1I1W	SR4200	土師器	壺B	13.4 6.6	1/8	A	I	ユビオサエ	丁寧なヨコナデ。オサエ。ナナメナデ。	ヨコナデ。端部を上に強くつまみあげる。内側に肥厚する。	粗粒。砂質。長石をやや目立って含む。雲母，石英を微量含む。	5YR7/6 橙色	やや良好やや硬質	産地が異なる可能性あり。
41	1J1U 1J1W 1I1U 1I1W	SR4200	土師器	壺B	13.5 (4.65)	1/2	A	I	ユビオサエ（下から上へ）	ヨコナデ	ヨコナデ。端部を上につまみあげる。	精良。やや粉性。雲母，石英を微量含む。	7.5YR7/4 にぶい橙色	良好硬質	

遺物番号	グリッド	遺構名	種別	器形	口径 器高	残存率	形態	製作技法	外面調整手法	内面調整	口縁部	胎土	色調	焼成	備考
42	1D1I	SR4200	土師器	壺B	15.4 5.4	ほぼ完形	A	I	ユビオサエ(下から上へ)	オサエ。ヨコナデ。ナナメナデ。	ヨコナデ。端部を上につまみあげる。	やや精良。やや砂質。雲母，石英，チャートを微量に含む。	7.5YR7/4にぶい橙色	良好 硬質	2面の人面墨書が外面のほぼ対称位置にあり。見込み部分にヘラ状の痕跡あり。
43	1J1U 1J1W 1I1U 1I1W	SR4200	土師器	壺B	13.5 4.8	1/4	A	II	ユビオサエ	オサエ。ナデ。	ヨコナデ。内側に肥厚し丸くおさまる。	精良。やや粉性。雲母，石英を微量含む。	7.5YR7/4にぶい橙色	良好 硬質	
44	1J1U 1J1W 1I1U 1I1W	SR4200	土師器	壺B	14.5 (4.9)	1/6	A	−	ユビオサエ(下から上へ)	板ナデ	ヨコナデ。端部を上につまみあげる。	精良。粉性。雲母，石英を微量含む。	7.5YR7/5にぶい橙色	やや良好 やや硬質	外面に墨書あり。
45	1J1U 1J1W 1I1U 1I1W	SR4200	土師器	壺B	14 (4.7)	1/4	B	−	ユビオサエ	板ナデのちオサエ	ヨコナデ。端部を上につまみあげる。	精良。砂質。雲母，石英，チャートを微量に含む。微粒子が目立つ。	5YR7/6橙色，内面：10YR8/3淡黄橙色	やや良好 やや硬質	
46	1D1H	SR0001	土師器	壺B	14.2 (5.1)	1/3	A	−	ユビオサエ	不定方向のナデ	ヨコナデ。端部を上につまみあげる。	精良。粉性。雲母，石英を微量含む。	10YR8/2灰白色	良好 硬質	
47	1D1H	SR0001	土師器	壺B	−	体部小片	−	−	ユビオサエ	−	−	精良。雲母を微量含む。粘性。	2.5Y6/1黄灰色	やや良好 やや硬質	外面に墨痕あり。
48	1D1I	SR0001	土師器	壺B	−	体部小片	−	−	ユビオサエ	ナデ	−	精良。やや砂質。雲母を微量含む。	外面：7.5YR 8/4淡黄橙色，内面：10YR8/2灰白色	やや良好 やや硬質	外面に墨痕あり。
49	1D1I	SR0001	土師器	壺B	−	体部小片	−	−	ユビオサエ。ヨコナデ。	−	−	精良。やや粉性。雲母を微量含む。	外面：10YR8/2灰白色，内面：2.5YR8/1灰白色	やや良好 やや硬質	外面に墨痕あり。
50	1C1F	SX820	土師器	壺B	12.65 (3.9)	1/2	C	−	ユビオサエ	ヨコナデのちタテナデ	ヨコナデ。端部は素直におさまる。	精良。粉性。雲母，石英を微量含む。	10YR8/1灰白色	良好 硬質	外面に人面墨書あり。
51	1B1G	SE1842	土師器	壺B	−	体部小片	A	−	ユビオサエ	ナデ	ヨコナデ。端部を上につまみあげる。	精良。	2.5Y8/2灰白色	良好	外面に墨痕あり。

旧河川出土土器

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量区分	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
1	0S0U	弥生土器	甕	-	底径 3.1 (6.6)	底部を含む体部片	平底でやや内湾気味に立ち上がる	磨滅により不明瞭	磨滅により不明瞭	やや良好。石英・角閃石多量含む。	10YR6/2 ～ 5/2 灰黄褐色	良好	
2	0U1U	弥生土器	高杯	-	底径 9.9 (8.4)	脚部 1/2	杯部の底に椀形の粘土を充填する	杯部ミガキ。脚部ナデ。	杯部ミガキ。脚部ケズリ。	やや精良。長石多量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	良	
3	0T1O 0S1O	土師器	高杯	-	20.8 (7.8)	1/2	外反する杯部	ナデ	ヨコナデ。工具の当たり痕あり。	やや粗粒。粉性。長石・石英・雲母多量，チャート少量含む。	10YR6/2 灰黄褐色	良好	
4	1L2A 1M2A	土師器	小壺	-	9.1 8.85	口縁 1/2	やや肩の張る球形の体部。頸部はくの字に折れ端部は丸くおわる。	ナデのちハケメ。口縁部ヨコナデ。	ケズリ。口縁部ヨコナデ。	良。やや砂質。長石・石英雲母を少量含む。	2.5Y6/2 灰黄色	良	
5	1A1H	土師器	高杯	-	- (8.1)	脚部片	面取りは不明瞭。	不明瞭	しぼり痕残る	粗粒。やや砂質。長石・石英・チャート・角閃石多量含む。	10YR6/3 にぶい黄橙色	良好	
6	0R1L	土師器	甕	-	14.7 (7.0)	口縁 1/6	頸部で「く」の字に折れ端部は外傾する面をもつ。	体部不定方向のハケメ。肩部より上位ヨコナデ。	不明瞭。口縁部ヨコナデ。	粗粒。砂質。長石・石英・チャート・赤色粒多量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	
7	1C1N	土師器	椀	-	12.0 3.2	1/4	直立する口縁部。端部は丸くおわる。	ユビオサエ。口縁部ヨコナデ。	ヨコナデ	精良。砂質。長石・赤色粒・雲母微量含む。	10YR8/3 浅黄橙色	良好	
8	1C1L	土師器	杯C	-	14.55 3.35	ほぼ完形	C	ヨコナデ。底部指頭圧痕のこる。	ナデ	精良。粉性。	10YR6/3 にぶい黄橙色	良好	ナナメ放射状暗文。
9	0T0Y 0U0Y	土師器	杯C	-	16.0 (5.25)	2/3	端部外反	ヨコナデのちミガキ。底部ケズリ。	ミガキ	精良。粉性。長石・石英・チャートを少量含む。	7.5YR7/6 橙色	良好	ナナメ放射状暗文。
10		土師器	高杯	-	(5.4) (6.1)	脚部 4/5	脚部の面取りは不明瞭。	下から上のケズリ	ユビオサエ	やや粗粒。長石・雲母多量，チャートを微量含む。	表面：10YR7/3 にぶい黄橙色，断面：5YR6/6 橙色	良好	
11	1C1L	土師器	高杯	-	底径 9.25 (8.5)	脚部～裾部完形	脚部の面取りは不明瞭。	裾部ヨコナデ。	裾部ユビオサエ。脚部しぼり痕あり。	精良。やや粘性。長石少量含む。	表面：10YR7/2 にぶい黄橙色，断面：5Y5/1 灰色	良好	基部にハケメ。
12	1B1L 1C1L	土師器	甕	-	20.9 (38.1)	3/5（底部欠損）	長胴の体部。端部は丸くおわる。	体部下半ヘラケズリ	ハケメのち粗いタテ方向のナデ	良。砂質。	10YR7/2 にぶい黄橙色	良好	
13	1A1L	須恵器	杯身	-	11.55 4.7	1/2	平らな底部に内湾して立ち上がる口縁。端部は直立する。	底部ロクロヘラケズリ，口縁部・立ち上がり部ヨコナデ。	ロクロナデ	精良。	N6/0 灰色	良好	
14	1A1N	須恵器	杯身	-	9.7 4.45	口縁 1/5	平らな底部に内湾して立ち上がる口縁。端部はやや内傾する。	底部ロクロヘラケズリ，口縁部・立ち上がり部ヨコナデ。	ロクロナデ。底部内面一定方向のナデ。	精良。長石・石英・少量含む。	5Y6/1 灰色	良好	
15	1C1N	須恵器	杯蓋	-	12.15 4.35	ほぼ完形	頂部に丸みがあり縁部がやや外反。端部は丸くおわる。	ロクロナデ	ロクロナデ	良。長石・石英・少量含む。	2.5GY7/1 明オリーブ灰色	やや良好	
16	1A1J	須恵器	杯蓋	-	10.2 3.15	ほぼ完形		ロクロナデ，頂部ヘラキリ痕。	ロクロナデ	良。長石・石英・少量含む。	7.5Y7/1 灰白色	良好	外面灰をかぶる。
17	0T0X 0U0X	須恵器	杯身	-	13.1 4.1	1/3	丸みのある底部に内湾気味に開く口縁部。受け部はやや低く内傾する。	ロクロナデ，底部ロクロヘラケズリ。	ロクロナデ。底部ロクロ水挽きのちナデ。	良。砂質。黒色粒・微砂粒を多量，長石を少量含む。	内面：N7/0 灰白色・外面：N5/0 灰色，断面：5YR5/2 灰褐色	良好 硬質	外面灰をかぶる。
18	1A1D	須恵器	杯身	-	10.8 3.45	9/10		ロクロナデ	ロクロナデ	良。やや粘性。長石・石粒少量含む。	N5/0 灰色	良好 硬質	
19	1A1G	須恵器	杯蓋	-	9.0 3.05	4/5	内面にかえりをもち端部は下方にのびる。	ロクロナデ。頂部ヘラキリのちナデ？	ロクロナデ	やや精良。砂質。長石・石英を多量含む。	表面：N5/0 灰色，N3/0 暗灰色	良好	外面全体に自然釉かかる。
20		須恵器	杯A	II	11.5 3.6	口縁 2/3	G	ロクロナデ，底部ヘラキリ痕。	ロクロナデ	良。長石・石英・少量含む。	2.5Y7/2・6/1 灰黄色	不良	

遺物番号	出土位置	種別	器形	法量区分	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
21	0U0X	須恵器	杯B	Ⅱ	14.9 3.75	完形	底部と口縁の間に稜をもつ。口縁端部外反。	ロクロナデ	ロクロナデ。見込みはロクロ水挽きのち一定方向のナデ。	精良。やや砂質。長石・石英・チャートを中量含む。	表面：5Y5/1 灰色，断面：N4/0 灰色	良好 硬質	
22	1A1L 1B1C	須恵器	高杯	－	(10.2) (6.1)	杯～脚部片	－	ロクロナデ	灰をかぶり不明瞭	やや精良。	表面：2.5Y8/1 灰白色・10YR7/3 にぶい黄橙色・N5/0 灰色，断面：10YR6/2 灰黄褐色	良好	長脚二段透し彫り。
23	0T0X 0T0Y 0U0X 0U0Y	須恵器	高杯	－	底径 12.4 (3.3)	裾部 1/4	－	ロクロナデ	ロクロナデ	精良。長石少量含む。	N6/0 灰色	良好	外面全体に自然釉かかる。
24		須恵器	高杯	－	底径 9.4 (5.15)	脚部片	脚端部は下方に突出する	ロクロナデ。基部下カキメ。	ナデ	やや粗粒。砂質。長石多量含む。	表面：5Y6/1 灰色，断面：10Y6/1 灰色	良	3ヶ所に円孔。
25	1C1L	須恵器	甕	－	底径 5.3 (7.45)	体部完形 脚端部 1/2	脚端部は外側に肥厚する	ロクロナデ・ロクロヘラケズリ。	不明瞭	良。やや粉性。長石多量，石英少量，チャート微量含む。	表面：5B5/1 青灰色，断面：2.5Y6/1 黄灰色	良好	
26	0S1D 0S0V	須恵器	壺	－	(14.9) (10.8)	体部 7/8	球形の体部	ロクロナデ。上半部カキメ。底部ロクロヘラケズリ。	ロクロナデ	やや精良。砂質。長石をやや多量含む。	表面：5B6/1 青灰色，断面：N5/0 灰色	良好	
27	0T0X 0T0Y 0U0X 0V0Y	須恵器	甕	－	26.7 (13.7)	口縁 1/6	外反してのびる口頸部	体部タテ方向のタタキ。頸部タテ方向のハケメ。口縁部ヨコナデ。	体部同心円文。口頸部ロクロナデ。	精良。やや砂質。長石・石英・チャートを少量含む。	外面：5YR5/1 褐灰色・内面：10YR5/1 褐灰色，断面：5YR6/2 灰褐色	良好	
観察	1A1I	土師器	食膳具	－	－ －	底部片	－	ケズリ	ナデ	精良。砂質。長石・石英・チャート・赤色粒・雲母を微量含む。	10YR6/3 にぶい黄橙色	良好 硬質	内面に放射状および螺旋状の暗文あり。
観察	0S0Y	土師器	高杯	－	－ (2.5)	裾部 1/2	脚端部下方にわずかに肥厚	タテナデ。端部ヨコナデ。	ユビオサエ	精良。粉性。雲母少量，長石・石英・チャート・赤色粒微量含む。	表面：10YR7/2 にぶい黄橙色，断面：7.5YR6/6 橙色	良好	
観察	0T0X 0T0Y 0V0X 0V0Y	土師器	高杯	－	－ (2.5)	基部片	－	摩滅のため不明瞭	摩滅のため不明瞭	粗粒。砂質。長石・チャート多量含む。	10YR8/4 浅黄橙色	やや良好	
観察	0T0X	土師器	高杯	－	－ (1.3)	杯部底部片	－	摩滅のため不明瞭	摩滅のため不明瞭	精良。砂質。長石・チャート少量含む。	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	
観察	0U0Y	土師器	高杯	－	－ (2.0)	杯部底部片	－	摩滅のため不明瞭	摩滅のため不明瞭	精良。粉性。長石・石英・雲母微量含む。	表面：2.5Y7/2 灰黄色，断面：7.5YR7/4 にぶい橙色	やや良好	2次的な穿孔あり。
観察	1C1N	土師器	甕	－	(3.75)	把手片	上向きの把手	ユビオサエのちナデ。	ハケメ	やや精良。粉性。長石・石英・少量含む。	2.5Y7/3 浅黄色	良好	2ヶ所ナナメの穿孔。
観察	1A1H	須恵器	杯蓋	－	－ (2.1)	頂部 1/2	平らな頂部	ロクロヘラケズリ。頂部ロクロヘラキリ未調整。	ロクロナデ。頂部一定方向のナデ。	やや精良。長石・石英微量含む。	表面：N4/0 灰色・2.5Y8/1 灰白色，断面：2.5GY8/1 灰白色	良	内面全体に煤付着。
観察	2C1S	須恵器	杯蓋	－	12.0 3.5	ほぼ完形	口縁部で下方へ折れ端部はわずかに外反。	ロクロナデ。頂部ロクロヘラケズリ。	ロクロナデ	やや精良。砂質。長石やや多量，白色粒微量含む。	N5/0 灰色	良	
観察	0V0Y 0T0Y	須恵器	杯蓋	－	9.0 (2.0)	1/2 つまみを欠く	頂部は平坦で口縁部との境は屈曲する	ロクロナデ，頂部ロクロヘラケズリ	ロクロナデ	良。長石を中量，チャートを少量含む。	表面：N6/0 灰色，断面：N7/0 灰白色	良好	
観察	0T0Y	須恵器	杯身	－	10.8 3.45	ほぼ完形	受け部が小さい	ロクロ水挽きとロクロナデ，底部ロクロヘラケズリ	ロクロナデとナデ	良。長石を少量含む。	N5/0 灰色	良好 硬質	

S D 4206 出土土器

遺物番号	出土位置	種別	器形	口径 器高	残存率	形態	外面調整手法	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
28	0U0X	弥生土器	壺	－ (3.65)	口縁 1/10以下	口縁下部に突帯がつく。	ヨコナデ	ヨコナデ	良。長石・石英多量含む。	2.5Y7/3 浅黄色・2.5Y3/2 黒褐色	良好	
29	0T0X 0U0X	弥生土器	甕	底径 9.0 (7.5)	底部を含む体部片	円盤高台	ハケメ。	ナデ。底部内面ユビオサエ。	やや粗粒。φ～2mm の石英・角閃石を多量含む。	2.5Y7/2 灰黄色	良好	内外面煤付着。
30	0T0X 0U0X	弥生土器	甕	24.0 (10.6)	口縁 1/10	口縁部外反。端部は丸くおわる。	体部下半タテナデ。上半ヨコナデ。	体部下半タテナデ。上半ヨコナデ。	良好。石英多量含む。	表面：5Y2/1 黒色，断面：10YR5/3 にぶい黄褐色	良好	体部上位に5条の沈線がめぐる。
31	0T0X 0U0X 0V0Y 0V1A	土師器	杯C	11.3 4.3	口縁 1/3	丸みを持つ口縁部，端部は内傾する面を持つ。	ヘラミガキ。口縁部ヨコナデ。	ヘラミガキ	精良。	7.5YR6/6 橙色	良好	放射状暗文。
32	0V0Y 0T0X	土師器	壺	11.0 (4.7)	口縁 1/4	頸部で「く」の字に折れ口縁端部は内側に肥厚する。	ナデ。	ナデ。	良。石英を少量含む。	2.5Y6/3 にぶい黄色	良好	外面煤付着。
33	0T0X	須恵器	杯蓋	－ (3.35)	頂部のみ	丸みを持つ頂部。	ロクロナデ。上位はロクロヘラケズリ。	ロクロナデ。	やや精良。長石・石英少量含む。	5B6/1 青灰色	良	
34	0T0X 0U0X	須恵器	杯A	12.5 3.8	口縁 1/2	やや外反気味に開く口縁。	ロクロナデ。	ロクロナデ。	やや精良。長石・石英少量含む。	10BG7/1 明青灰色・N7/0 灰白色	良好	

縄文土器の観察表

遺物番号	グリッド遺構名	部位	器種	時期	口径底径	残存率	胎土	色調	焼成	縄文撚方向	備考
1	2FIR SX3401	口縁部	深鉢A	中期末	口径 26.6	口縁 1/6	長石・石英・雲母・チャートを多量に含む。	表面：10YR6/2 にぶい黄橙，内面：10YR3/4 暗褐	良好	RL	口唇部縄文
2	2FIR SX3401	口縁部	深鉢C	中期末	–	口縁 1/3	長石・石英・チャート・雲母含む。	表面:10YR3/2 黒褐，内面:10YR3/4 暗褐	良好	–	
3	2FIR SX3401	口縁部	深鉢A	中期末	–	–	長石・石英を多量に含む。	表面：7.5YR5/4 にぶい褐，内面：10YR8/3 浅黄橙	軟	LR	口唇縄文 隆帯剥離
4	2FIR SX3401	口縁部	深鉢A	中期末	–	–	長石・石英を多量に含む。	表面：10YR7/2 にぶい黄橙，内面：10YR4/3 にぶい黄橙	良好	–	
5	2GIS SX3401	口縁部付近	有文深鉢	中期末	–	–	長石・石英を多量に含む。	表面：7.5YR5/3 にぶい褐，内面：7.5YR7/2 明褐灰	やや良好	–	
6	2FIR SX3401	口縁部	深鉢A	中期末	–	–	長石・石英を含む。	表面:10YR3/2 黒褐，内面:7.5YR4/6 褐	良好	–	
7	2FIR SX3401	口縁部付近	有文深鉢	中期末	–	–	長石・石英・チャートを含む。	表面：10YR5/2 灰黄褐，内面：7.5YR4/3 褐	やや軟	LR	
8	2FIR SX3401	把手部	深鉢B	中期末	–	–	石英・長石・チャートを多量に含む。	表面：5YR3/2 暗赤褐，内面：5YR2/1 黒褐	やや良好	–	
9	2FIR SX3401	突起部	深鉢B	中期末	–	–	石英・長石・チャートを多量に含む。	表面：5YR3/2 暗赤褐，内面：5YR5/8 明赤褐	やや良好	–	
10	2FIR SX3401	口縁部	深鉢C	中期末	–	–	石英・長石・チャートを多量に含む。	表面:5YR4/2 灰褐，内面:5YR5/1 褐灰	軟	LR	風化著しい
11	2FIR SX3401	口縁部	深鉢C	中期末	–	–	石英・長石・チャート・雲母を多量に含む。	表面：7.5YR5/2 灰褐，内面：7.5YR5/6 明褐	良好	LR	
12	2FIR SX3401	口縁部	深鉢C	中期末	–	–	石英・長石・チャートを多量に含む。	表面：10YR7/3 にぶい黄橙，内面：10YR4/3 にぶい黄褐	軟	磨滅	風化著しい
13	2FIR SX3401	口縁部	深鉢C	中期末	–	–	石英・長石・赤色斑粒を多量に含む。	表面：10YR7/3 にぶい黄橙，内面：10YR6/6 明黄褐	軟	LR	
14	2FIR SX3401	口縁部	深鉢C	中期末	–	–	長石・石英を多量に含む。	表面：7.5YR3/1 黒褐，内面：7.5YR4/1 褐灰	良好	–	
15	2FIR SX3401	胴部	有文深鉢	中期末	–	–	石英・長石・チャートを含む。	表面：7.5YR3/3 暗褐，内面：7.5YR3/2 黒褐	良好	–	
16	2FIR SX3401	胴部	有文深鉢	中期末	–	–	石英・長石を含む。	表面:10YR3/2 黒褐，内面:10YR3/3 暗褐	良好	–	
17	2FIR SX3401	胴部	有文深鉢	中期末	–	–	石英・長石・チャート・雲母を少量含む。	表面：10YR7/2 にぶい黄橙，内面：7.5YR6/6 橙	やや良好	–	
18	2FIR SX3401	胴部	有文深鉢	中期末	–	–	石英・長石・チャートを含む。	表面：7.5YR8/6 浅黄橙，内面：7.5YR3/2 黒褐	やや良好	–	風化著しい
19	2FIR SX3401	胴部	有文深鉢	中期末	–	–	長石・石英・雲母を含む。	表面:5YR2/1 黒褐，内面:5YR3/1 黒褐	やや軟	LR	
20	2FIR SX3401	胴部	有文深鉢?	中期末	–	–	長石・石英を含む。	表面:2.5Y7/3 浅黄，内面:2.5Y5/2 暗灰黄	良好	LR	
21	2GIR SX3401	胴部	有文深鉢	中期末	–	–	石英・長石・チャートを含む。	表面：5YR3/2 暗赤褐，内面：5YR3/1 黒褐	良好	LR	沈線描出の圧痕が、内面にまで突出
22	2FIR SX3401	胴部	有文深鉢	中期末	–	–	石英・長石・雲母・チャートを多量に含む。	表面:5YR7/4 にぶい赤褐，内面：5YR6/3 橙	やや軟	L	
23	2FIR SX3401	胴部	有文深鉢	中期末	–	–	長石・石英・雲母を含む。	表面：7.5YR4/3 褐，内面：7.5YR7/4 にぶい橙	良好	LR	沈線描出の圧痕が、内面にまで突出
24	2FIR SX3401	胴部	有文深鉢	中期末～後期初頭	–	–	長石・石英・チャートを少量含む。	表面：2.5YR5/6 明赤褐，内面：5YR4/3 にぶい赤褐	良好	LR	
25	2FIQ SX3401	胴部	有文深鉢	中期末～後期初頭	–	–	石英・長石・チャートを少量含む。	表面：7.5YR4/3 褐，内面：7.5YR5/3 にぶい褐	良好	LR	
26	2FIR SX3401	胴部	有文深鉢	中期末～後期初頭	–	–	長石・石英・雲母を多く含む。	表面：10YR5/2 灰黄褐，内面 10YR4/2 灰黄褐	良好	LR ?	
27	2FIR SX3401	胴部	有文鉢?	中期末～後期初頭	–	–	長石・石英を少量含む。	表面：7.5YR4/2 灰褐，内面：7.5YR3/1 黒褐	良好	LR	
28	2FIR SX3401	口縁部	無文深鉢	中期末	–	–	長石・チャート・赤色斑粒を多量に含む。	表面：10YR7/3 にぶい黄橙，内面：10YR5/4 にぶい黄橙	やや軟	LR	
29	2FIR SX3401	口縁部付近	無文深鉢	中期末	–	–	長石・石英・雲母を含む。	表面:2.5Y8/1 灰白，内面:10YR4/4 褐	やや軟	LR	
30	2GIR SX3401	口縁部	無文深鉢	中期末	口径 12.6	口縁 1/5	長石・石英を少量含む。	表面：7.5YR3/3 暗褐，内面：7.5YR5/2 灰褐	良好	–	
31	2FIR SX3401	口縁部	無文深鉢	中期末	–	–	長石・石英を少量含む。	表面：10YR7/2 にぶい黄橙，内面：10YR4/4 褐	良好	磨滅	
32	2GIS SX3401	胴部	無文深鉢	中期末	–	–	長石・石英・赤色斑粒を多量に含む。	表面:10YR8/2 灰白，内面:10YR8/1 灰白	良好	付加条 LR+R・R	
33	2FIR SX3401	胴部	無文深鉢	中期末	–	–	長石・石英・雲母を含む。	表面：7.5YR7/2 明褐灰，内面：7.5YR4/4 褐	やや良好	LR	
34	2FIR SX3401	胴部	無文深鉢	中期末	–	–	石英・長石・チャートを少量含む。	表面:5YR4/2 灰褐，内面:5YR6/2 灰褐	良好	LR	

遺物番号	グリッド遺構名	部位	器種	時期	口径底径	残存率	胎土	色調	焼成	縄文撚方向	備考
35	2GIR SX3401	底部	不明	中期末	底径7.6	底部1/5	長石・石英を多量に含む。	表面:10YR3/2黒褐,内面:10YR3/2黒褐	良好	−	
36	2FIR SX3401	底部	不明	中期末	底径9.6	底部1/5	長石・石英・チャート・赤色斑粒を多量に含む。	表面：5YR6/6橙，内面：5YR6/6橙	軟	−	
37	2FIR SX3401	底部	不明	中期末	底径不明	底部1/5	長石・石英・赤色斑粒・チャートを多量に含む。	表面：:5YR6/6橙，内面:5YR5/2灰褐	良好	−	
38	2FIR SX3401	底部	不明	中期末	底径15.0	底部1/5	長石・石英を少量含む。	表面：5YR6/6橙，内面：.5YR3/6暗赤褐	良好	LR？	
39	2FIR SX3401	底部	不明	中期末	底径9.6	底部1/5	長石・石英・雲母を含む。	表面：10YR5/2灰黄褐,内面：10YR6/3にぶい黄橙	良好	−	
40	2GIR SX3402	口縁部付近	深鉢C？	中期末	−	−	長石・石英・金雲母を多量に含む。	表面:7.5YR7/3橙，内面:7.5YR7/2明褐灰	良好	LR	
41	2GIR SX3402	口縁部	深鉢A	中期末	−	−	長石・石英・チャートを含む。	表面：10YR7/2にぶい黄橙，内面：10YR7/2にぶい黄橙	軟	LR？	
42	2GIS SX3402	口縁部	有文土器	中期末	−	−	長石・石英・雲母・チャートを含む。	表面:7.5YR6/3にぶい褐,内面：7.5YR5/2灰褐	良好	摩滅	口唇部縄文
43	2GIR SX3402	口縁部	有文浅鉢	中期末～後期初頭	−	−	長石・石英を少量含む。	表面：10YR7/3にぶい黄橙，内面：10YR8/3浅黄橙	良好	LR	
44	2GIR SX3402	口縁部	有文深鉢	中期末	−	−	長石・石英・雲母を少量含む。	表面：5YR3/2暗赤褐，内面：5YR5/1褐灰	良好	−	
45	2GIS SX3402	口縁部付近	有文土器	中期末	−	−	長石・石英・チャートを含む。	表面:7.5YR7/4にぶい橙,内面：10YR7/3にぶい黄橙	良好	−	
46	2GIR SX3402	胴部	有文深鉢	中期末	−	−	長石・石英・雲母・チャートを含む。	表面：10YR7/4にぶい黄橙，内面：10YR7/4にぶい黄橙	やや軟	−	
47	2GIR SX3402	胴部	有文深鉢	中期末	−	−	長石・石英・赤色斑粒を含む。	表面：10YR7/2にぶい黄橙，内面：5YR7/6橙	良好	付加条LR+L・L	
48	2GIR SX3402	胴部	有文深鉢	中期末	−	−	長石・石英・雲母・チャートを少量含む。	表面：10YR7/3にぶい黄橙，内面：7.5YR5/8明褐	良好	LR	
49	2GIR SX3402	胴部	有文深鉢	中期末	−	−	長石・石英・チャート多く含む。	表面：10YR7/3にぶい黄橙，内面：10YR6/4にぶい黄橙	良好	−	
50	2GIR SX3402	胴部	無文深鉢	中期末	−	−	長石・石英・雲母・赤色斑粒多く含む。	表面:10YR3/2黒褐,内面:10YR7/3にぶい黄褐	良好	LR	
51	2GIR SX3406	胴部	有文深鉢	中期末	−	−	長石・石英を含む。	表面:5YR4/2灰褐，内面:5 YR4/1褐灰	良好	LR	
52	2GIT 2GIU	口縁部	深鉢A	中期末	−	−	長石・石英・雲母を含む。	表面:5YR3/1黒褐，内面:5YR4/1褐灰	やや良好	LR	
53	2GIP P2441	口縁部	有文土器	中期末	−	−	長石・石英・チャートを多く含む。	表面：10YR8/4浅黄橙,内面：2.5YR7/6橙	軟	−	
54	2GIR	口縁部	有文浅鉢？	中期末～後期初頭	−	−	長石・石英・チャート・赤色斑粒を含む。	表面:7.5YR7/4にぶい橙,内面：7.5YR6/4にぶい橙	良好	LR	口唇部縄文
55	2FIR SD2477	突起部	浅鉢？	中期末	−	−	長石・石英・チャートを少量含む。	表面：10YR7/2にぶい黄橙，内面：10YR7/3にぶい黄橙	軟	−	
56	2GIR	胴部	有文深鉢	中期末	−	−	長石・石英を含む。	表面：7.5YR3/2黒褐，内面：7.5YR5/2灰褐	良好	−	
57	2FIR SD2474	底部	不明	中期末	底径9.2	底部1/4	長石・石英を多量に含む。	表面:10YR5/1褐灰,内面:7.5YR3/1黒褐	やや軟	−	
58	0Y2K P5631	口縁部	深鉢A	中期末	−	−	長石・石英・チャート少量含む。	表面：10YR5/2灰黄褐,内面：10YR4/6褐	良好	付加条LR+L・L？	
59	0Y2K P5631	突起部	深鉢B	中期末	−	−	長石・石英・赤色斑粒少量含む。	表面:7.5YR7/4にぶい橙,内面：7.5YR6/2灰褐	良好	LR	
60	0Y2K P5631	胴部	有文深鉢	中期末	−	−	長石・石英少量含む。	表面：10YR4/3にぶい黄褐，内面：10YR4/2灰黄褐	良好	−	
61	0Y2K P5631	胴部	有文深鉢	中期末	−	−	長石・石英・チャート含む。	表面：10YR7/3にぶい黄橙，内面：10YR7/2にぶい黄橙	やや軟	LR	
62	0Y2K P5633	口縁部	深鉢A	中期末	−	−	長石・石英・チャート多量に含む。	表面：5YR7/4にぶい橙,内面：10YR7/2にぶい黄橙	やや軟	LR	
63	0Y2K P5633	口縁部付近	有文深鉢	中期末	−	−	長石・石英・チャート・赤色斑粒含む。	表面：10YR7/4にぶい黄橙，内面：5YR6/2橙	やや軟	−	
64	0T0X	口縁部	深鉢	晩期後葉	−	−	長石・石英・角閃石を微量含む	表面：10YR4/2灰黄褐,内面：10YR3/2黒褐	−	−	口唇部キザミ
65	1D1N 旧河川	口縁部	深鉢C	中期末	−	−	長石・石英・雲母多量に含む。	表面：10YR6/2灰黄褐,内面：10YR6/2灰黄褐	軟	摩滅	風化著しい

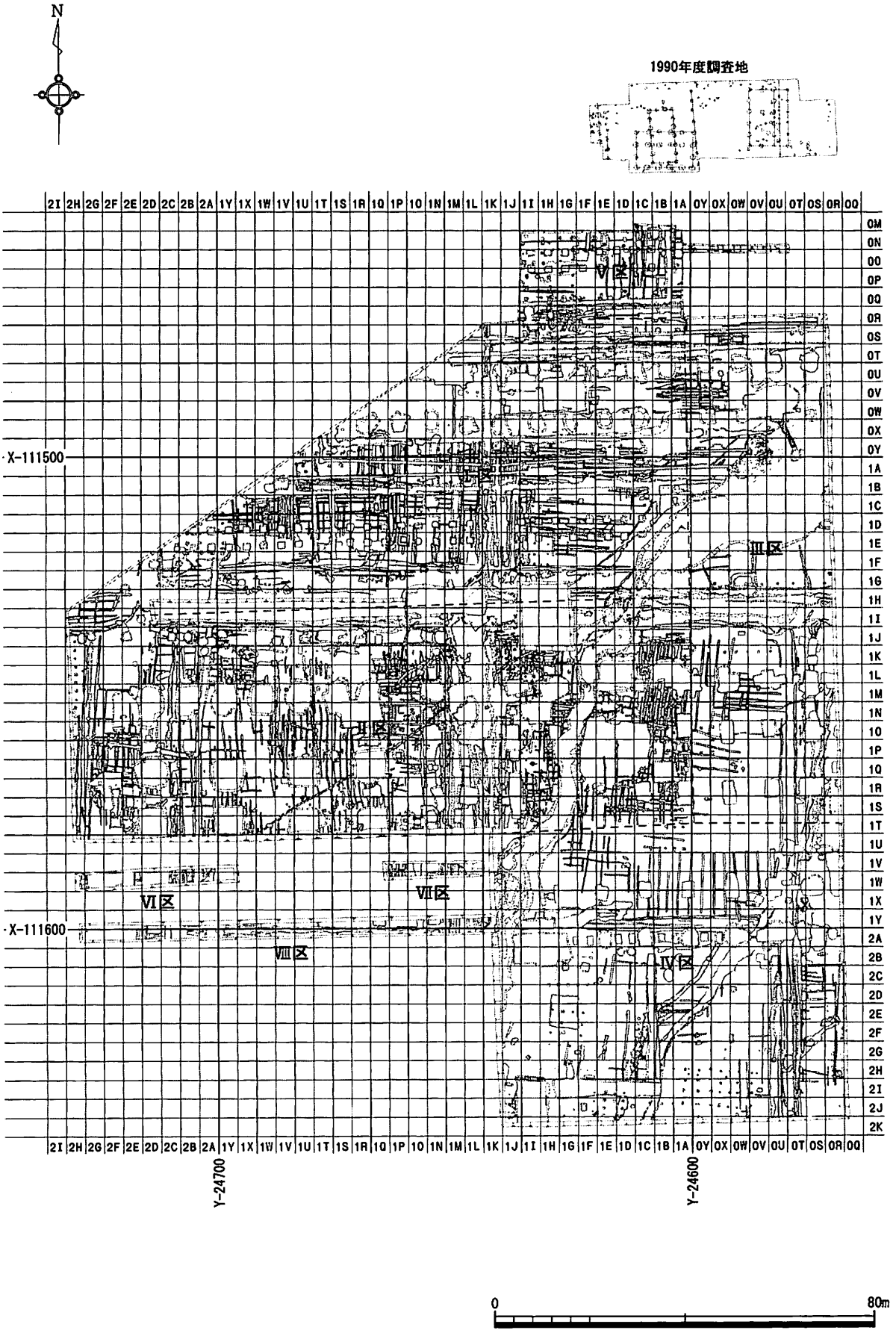
遺物番号	グリッド遺構名	部位	器種	時期	口径底径	残存率	胎土	色調	焼成	純文撚方向	備考
66	1G1M 1G1N 旧河川	口縁部	無文深鉢	中期末	–	–	長石・石英・雲母含む。	表面：7.5YR5/3 にぶい褐，内面：7.5YR7/4 にぶい橙	やや良好	–	風化著しい
67	1C1N 旧河川	口縁部	有文土器	中期末	–	–	長石・石英・雲母少量含む。	表面：5YR7/8 橙，内面：5YR7/8 橙	軟	–	風化著しい
68	0U1A SX820	口縁部	深鉢	晩期後葉	–	–	長石・石英・チャートを少量含む。	表面：7.5YR7/3 にぶい褐，内面：10YR7/2 にぶい黄橙	良好	–	
69	0R1H 0S1H SR4200	口縁部	深鉢	晩期後葉	–	–	角閃石・長石・石英・雲母含む。	表面：7.5YR4/2 灰褐，内面：7.5YR4/1 褐灰	やや良好	–	
70	1D1H SR4200	口縁部	深鉢	晩期後葉	–	–	角閃石・長石・石英含む。	表面：7.5YR4/2 灰褐，内面：7.5YR4/1 褐灰	良好	–	
71	0V1H 0V1J SR4200	口縁部	深鉢	晩期後葉	–	–	長石・石英含む。	表面：10YR8/3 浅黄橙，内面：10YR8/3 浅黄橙	軟	–	
72	0V1G SR4200	胴部	深鉢	晩期後葉	–	–	長石・石英含む。	表面：10YR4/3 にぶい黄褐，内面：10YR3/2 黒褐	やや良好	–	
73	0U1H SR4200	胴部	深鉢	晩期後葉	–	–	長石・石英含む。	表面：10YR6/3 にぶい黄橙，内面：10YR5/2 灰黄褐	軟	–	風化著しい
74	0U1H SR4200	胴部	深鉢	晩期後葉	–	–	長石・石英含む。	表面：10YR5/2 灰黄褐，内面：10YR4/1 褐灰	軟	–	
75	1C1N 旧河川	胴部	深鉢	晩期後葉	–	–	石英・長石・角閃石含む。	表面：10YR6/3 にぶい黄橙，内面：10YR7/4 にぶい橙	やや軟	–	
76	1A1M 旧河川	胴部	深鉢	晩期後葉	–	–	長石・石英・角閃石を含む。	表面：10YR4/3 にぶい黄褐，内面：10YR3/3 暗褐	やや軟	–	
77	0V1H 0V1J SR4200	胴部	深鉢	晩期後葉	–	–	長石・石英含む。	表面：10YR7/2 にぶい黄橙，内面：10YR8/2 灰白	軟	–	
78	0X1H SR4200	底部	深鉢？	晩期後葉？	底径 9.4	底部 1/4	長石・石英・雲母少量含む。	表面：7.5YR4/2 灰褐，内面：7.5YR4/2 灰褐	軟	–	
79	0Y1H SR4200	底部	深鉢	晩期後葉	底径 8.0	–	角閃石・長石・石英・雲母多量に含む。	表面：7.5YR3/1 黒褐，内面：7.5YR3/1 黒褐	やや軟	–	
80	1B1N 1B1O 旧河川	底部	深鉢？	晩期後葉？	底径 7.6	底部 1/5	長石・石英・チャート含む。	表面：10YR6/2 灰黄褐，内面：10YR7/2 にぶい黄橙	良好	–	
81	1A1R 旧河川	底部	深鉢？	晩期後葉？	底径 8.2	底部 1/5	長石・石英・チャート多量に含む。	表面：7.5YR4/1 褐灰，内面：7.5YR5/2 灰褐	やや良好	–	
82	1K2C 1K2D	胴部	有文深鉢	中期末	–	–	長石・石英多く含む。	表面：10YR5/3 にぶい黄褐，内面：10YR3/3 暗褐	やや良好	LR	
83	1H1T 1H1U 1I1U SR4200	胴部	有文深鉢	中期末	–	–	長石・石英・チャート多く含む。	表面：10YR5/3 にぶい黄褐，内面：10YR6/2 灰黄褐	良好	–	
84	1A1H SR4200	口縁部	深鉢	晩期後葉	–	–	長石・石英・チャート含む。	表面：2.5Y4/1 黄灰，内面：2.5Y5/2 暗灰黄	良好	–	
85	2G1O 2G1P SD2329	口縁部付近	有文深鉢	中期末	–	–	長石・石英多く含む。	表面：2.5Y7/3 浅黄，内面：2.5Y5/1 黄灰	軟	–	

石器

図版番号	遺物番号	グリッド / 遺構名	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	残存率	備考
48		2H1W / SK4351	磨製石斧	(11.02)	5.76	2.58	292.6	砂岩	刃部欠	
67	1	1O1L ～ 1V1L	国府形ナイフ形石器	(5.74)	1.63	0.73	(8.6)	サヌカイト	基部欠	
67	2	1C0O	石鏃	(2.74)	1.65	0.35	(1.2)	チャート	先端欠	
67	3	0T2J / SD5401	石鏃	2.60	(1.41)	0.35	(0.8)	サヌカイト	片脚欠	風化
67	4	0W1H / SR0001	石鏃	2.51	1.80	0.29	1.0	サヌカイト	完形	風化
67	5	1M1E / SD141	石鏃	2.09	1.85	0.33	1.0	サヌカイト	完形	風化
67	6	1I1T	石鏃	3.37	1.55	0.50	1.8	チャート	完形	
67	7	2B1R	石鏃	1.97	(1.52)	0.23	(0.5)	チャート	片脚欠	
67	8	1S1T	石鏃	2.83	1.75	0.42	(1.7)	サヌカイト	片脚欠	
67	9	0U1I / SR0001	石鏃	2.56	1.21	0.45	1.4	サヌカイト	完形	
67	10	1B1D	石鏃	1.92	(1.24)	0.36	(0.6)	チャート	片脚欠	
67	11	1N1K/SD1646	石鏃	(2.76)	1.22	0.38	(1.4)	サヌカイト	先端欠	
67	12	1C2F / SD5426	石鏃	2.78	1.27	0.48	1.6	サヌカイト	完形	
67	13	0W1N / SD5038	石鏃	1.82	1.31	0.37	0.7	サヌカイト	完形	
67	14	0T1P	石鏃	1.51	1.05	0.23	0.1	サヌカイト	完形	風化
67	15	1E1V	石鏃	2.51	2.09	0.55	1.4	サヌカイト	完形	
67	16	1I1U・1I1V / SR4200	石鏃	(1.73)	1.68	0.38	(1.1)	サヌカイト	先端欠	風化
67	17	0T2A / SD5401	石鏃	(1.62)	1.59	0.40	(0.8)	サヌカイト	先端欠	
67	18	1L1E	石鏃	2.00	1.56	0.48	1.0	サヌカイト	完形	
67	19	0U2E / SD5415	石鏃	2.59	1.53	0.29	1.0	サヌカイト	完形	
67	20	1C1R / SD3054	石鏃	3.20	(1.36)	0.60	(1.9)	サヌカイト	片脚欠	
67	21	0S0X / 旧河川	石鏃	2.44	1.31	0.35	1.0	サヌカイト	完形	
67	22	1C1P / 旧河川	石鏃	2.41	1.53	0.49	1.1	サヌカイト	完形	
67	23	1A2F / SD5161	石鏃未製品	2.75	1.60	0.69	2.9	サヌカイト		
67	24	2C1R	石器の先端部	(2.01)	(0.86)	(0.33)	(0.6)	サヌカイト		
67	25	1Y1J	石器の先端部	(1.77)	(0.90)	(0.42)	(0.9)	サヌカイト		
67	26	1I2H	石槍	(6.50)	2.85	0.96	(15.2)	サヌカイト	先端欠	
67	27	1B1X	石槍	(4.57)	2.02	0.72	(4.3)	サヌカイト	基部欠	
67	28	1X1N	石匙	3.78	(3.44)	(0.52)	(4.1)	チャート	片側欠	
68	29	2B1R / SD1306	使用痕のある剥片	6.51	3.11	0.90	19.2	サヌカイト		
68	30	2E1Q	使用痕のある剥片	4.03	1.27	0.48	2.4	サヌカイト		
68	31	0X2C	2次加工のある剥片	5.47	3.35	0.96	13.9	サヌカイト		
68	32	1S1D	2次加工のある剥片	2.45	1.99	0.30	1.3	サヌカイト		
68	33	0R2B / P5603	2次加工のある剥片	2.41	2.57	0.53	2.5	サヌカイト		
68	34	0U2E / SK5586	剥片	4.03	2.12	1.14	8.3	サヌカイト		
68	35	1X1D	剥片	3.03	1.93	0.98	4.0	チャート		
68	36	1C1F	剥片	4.80	3.35	0.96	13.9	サヌカイト		
68	37	1C1D	剥片	5.23	5.23	1.10	27.1	サヌカイト		
68	38	0T2F / SD5401	剥片	2.95	2.67	1.17	6.3	サヌカイト		
68	39	1V1D	剥片	2.13	2.13	0.47	1.8	サヌカイト		
68	40	1F2D	剥片	3.98	2.68	1.04	9.7	チャート		
68	41	1T1F・1T1G	剥片	3.11	2.68	0.88	5.4	サヌカイト		
68	42	0T2C / SD5083	剥片	2.76	2.73	0.78	4.7	サヌカイト		
68	43	2H1T	剥片	1.95	2.08	2.13	3.5	サヌカイト		
68	44	1B2A / SDS433	剥片	2.01	2.08	0.54	1.6	サヌカイト		
68	45	0R2B / P5603	剥片	2.60	3.26	0.61	5.0	サヌカイト		
68	46	2F1R	剥片	1.98	1.58	0.46	1.5	サヌカイト		
68	47	1C2G	剥片	2.54	4.85	0.62	10.0	サヌカイト		
68	48	1A2F / SD5162	剥片	4.30	2.74	1.08	11.6	サヌカイト		
68	49	2F1R	剥片	2.44	1.47	0.43	1.2	サヌカイト		
69	50	0R2B / P5603	楔形石器	2.30	2.39	0.52	3.5	サヌカイト		
69	51	1B2A / SD5433	楔形石器	2.69	2.09	0.74	4.6	サヌカイト		
69	52	0S2C / SX5403 表採	楔形石器	1.94	2.69	0.56	2.7	サヌカイト		
69	53	1D2T / SX5302	石核	7.17	5.78	4.52	228.2	サヌカイト		
69	54	1F1F	石核	4.88	3.96	2.27	30.1	サヌカイト		
69	55	1C1K・1C1L・1C1M	磨製石斧	(8.08)	4.85	2.51	(166.5)	砂岩	基部欠	
69	56	0T2J / P5602	磨製石斧	(4.72)	(4.98)	(4.01)	(102.6)	砂岩	刃部のみ残存	側面に敲打痕
69	57	1P1F / SX550	石製品	(7.29)	4.60	0.94	(35.6)	砂岩		両面からの穿孔
69	58	1C1X	磨石・敲石	8.88	8.80	5.20	539.3	砂岩		
70	59	1B1N・1B1O	磨石・凹石	(8.97)	11.82	5.70	(970)	安山岩		
70	60	1B2G	磨石	10.00	8.43	(2.61)	(287.1)	砂岩		
70	61	1X1S	磨石・敲石	10.29	5.46	4.26	377.5	砂岩		

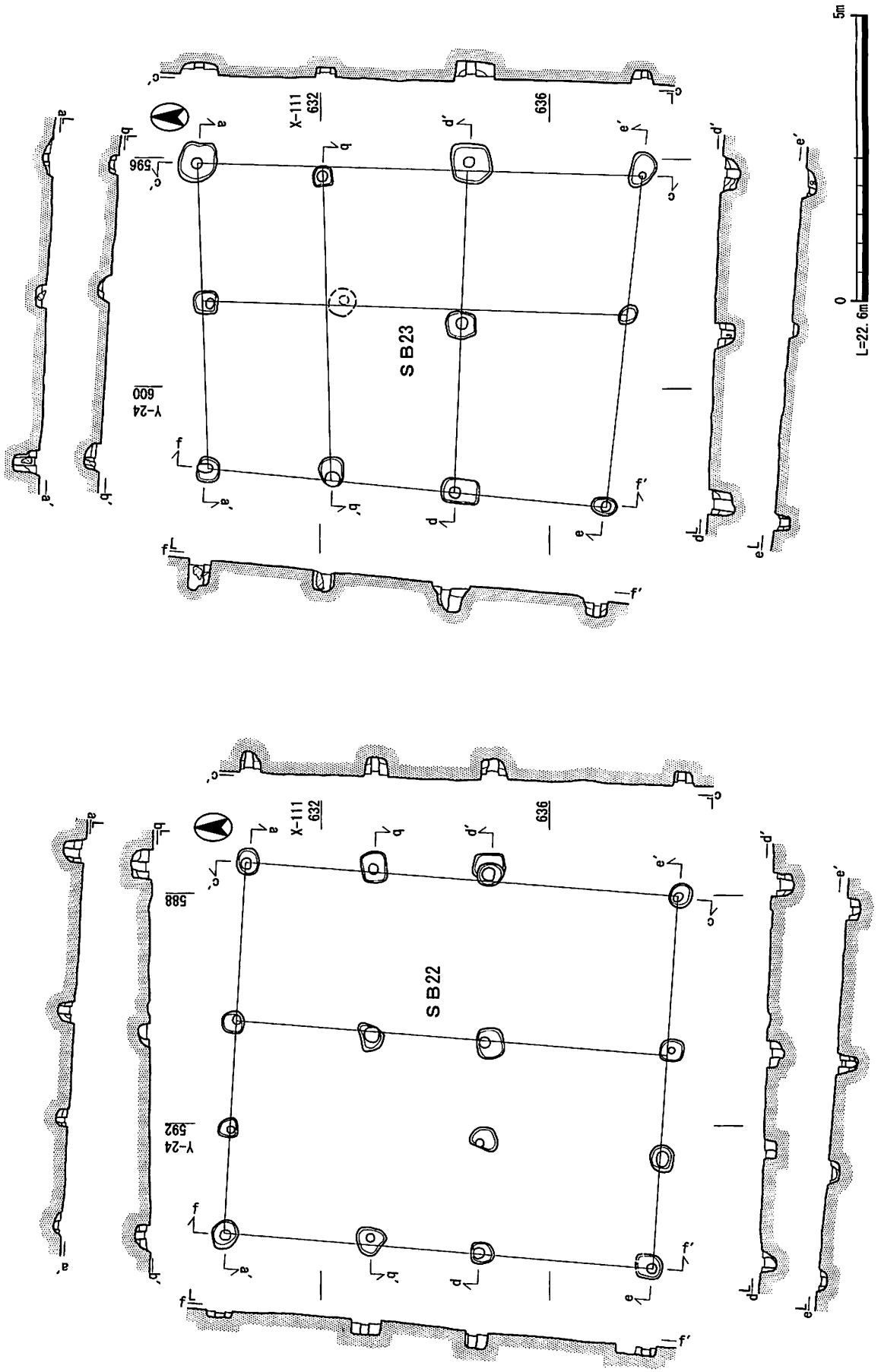
図　　版

図版第一

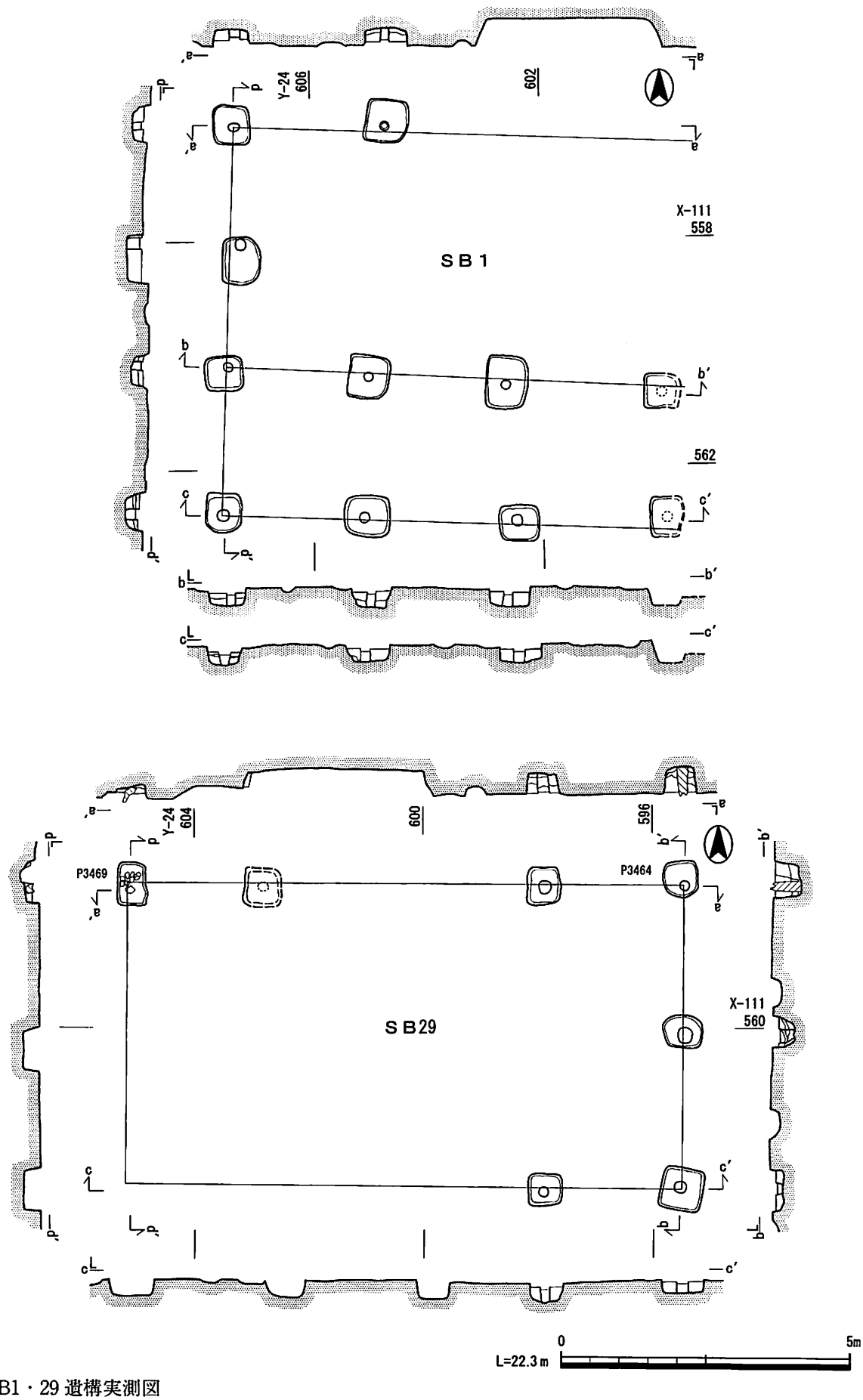


調査区地区割図

図版第二

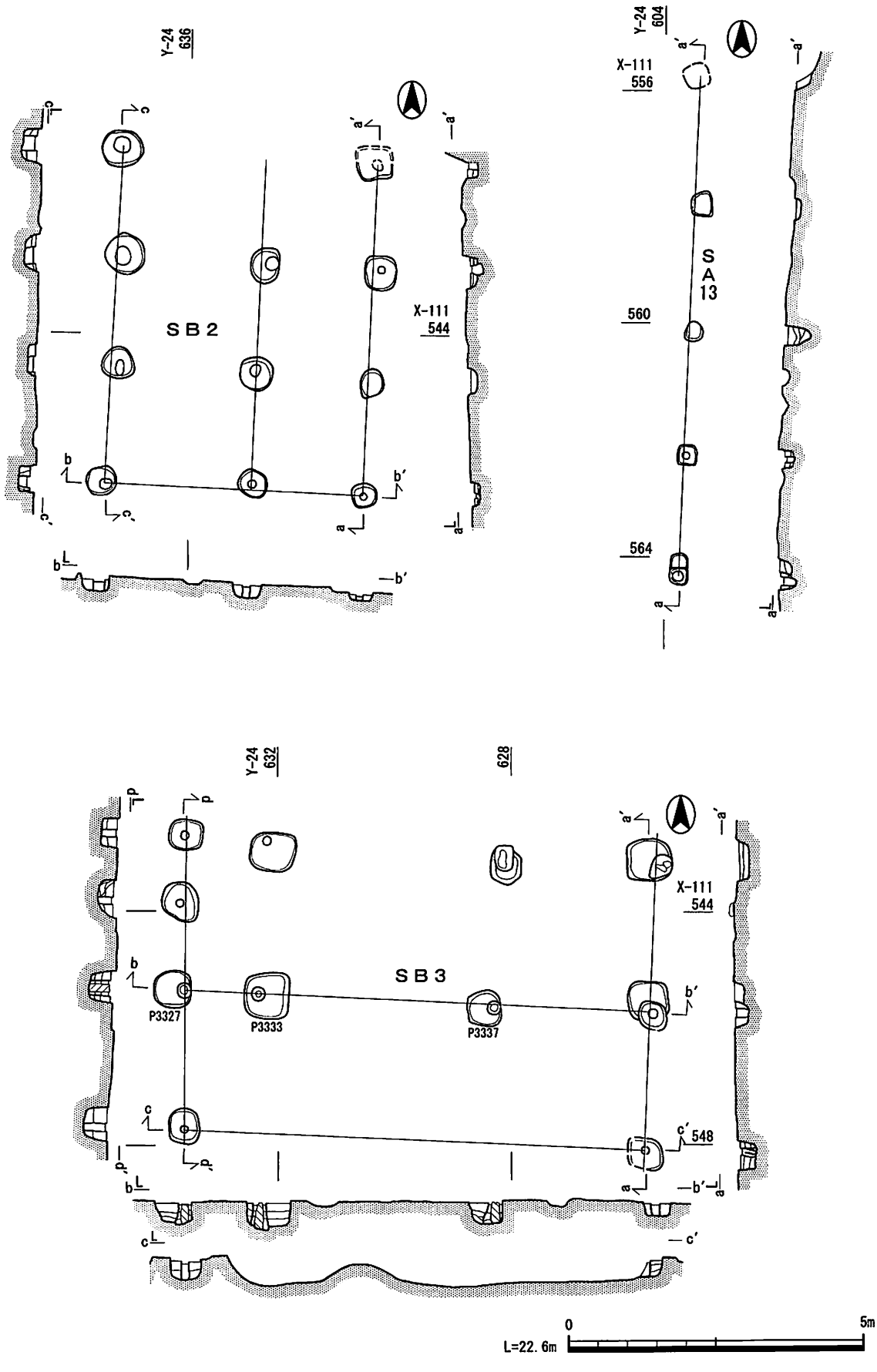


SB22・23 遺構実測図

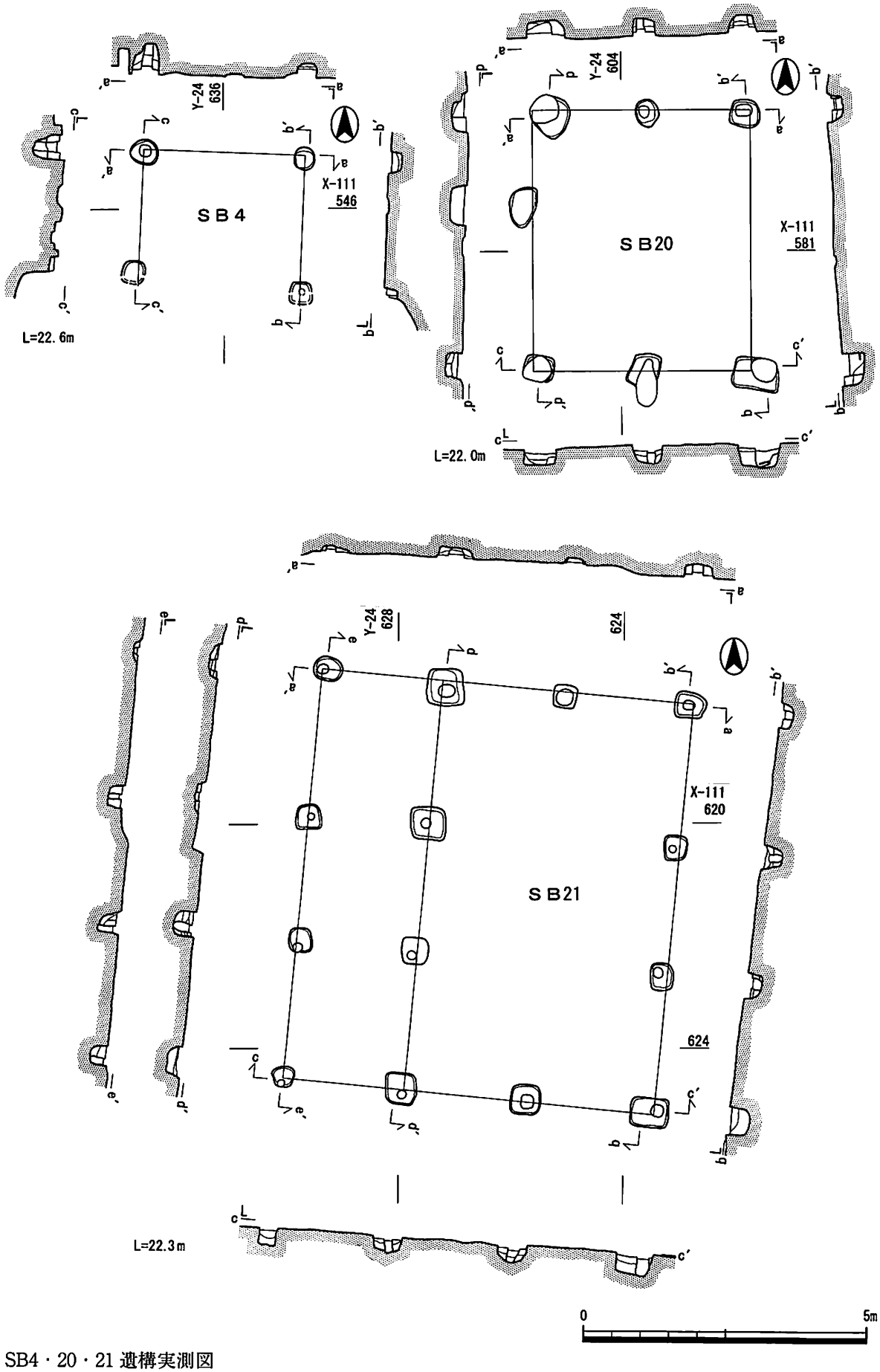

Y-24
606
602
X-111
558
SB1
562
604
600
596
P3469
P3464
SB29
X-111
560
0
5m
L=22.3m

SB1・29 遺構実測図

図版第四

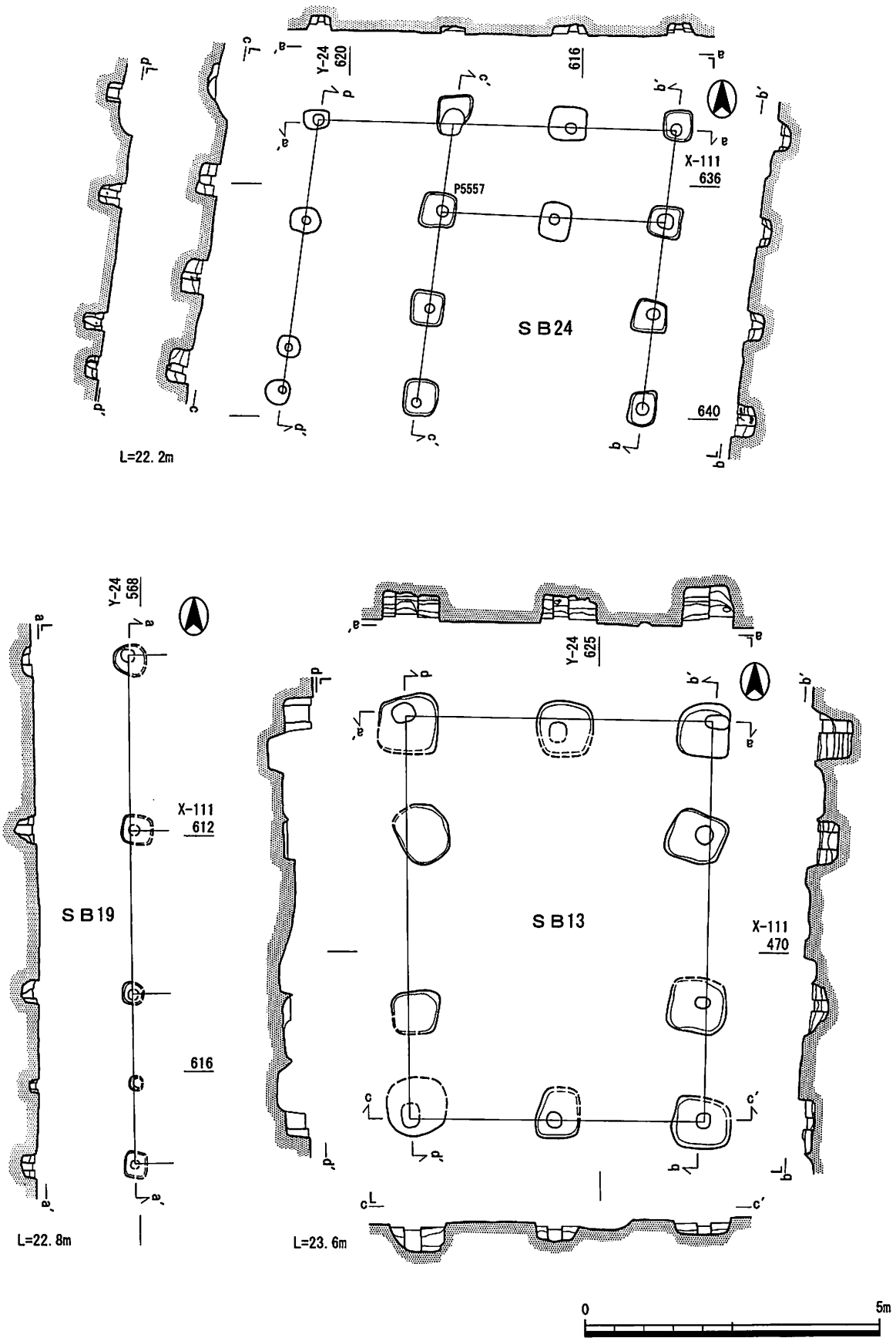


SB2・3，SA13 遺構実測図



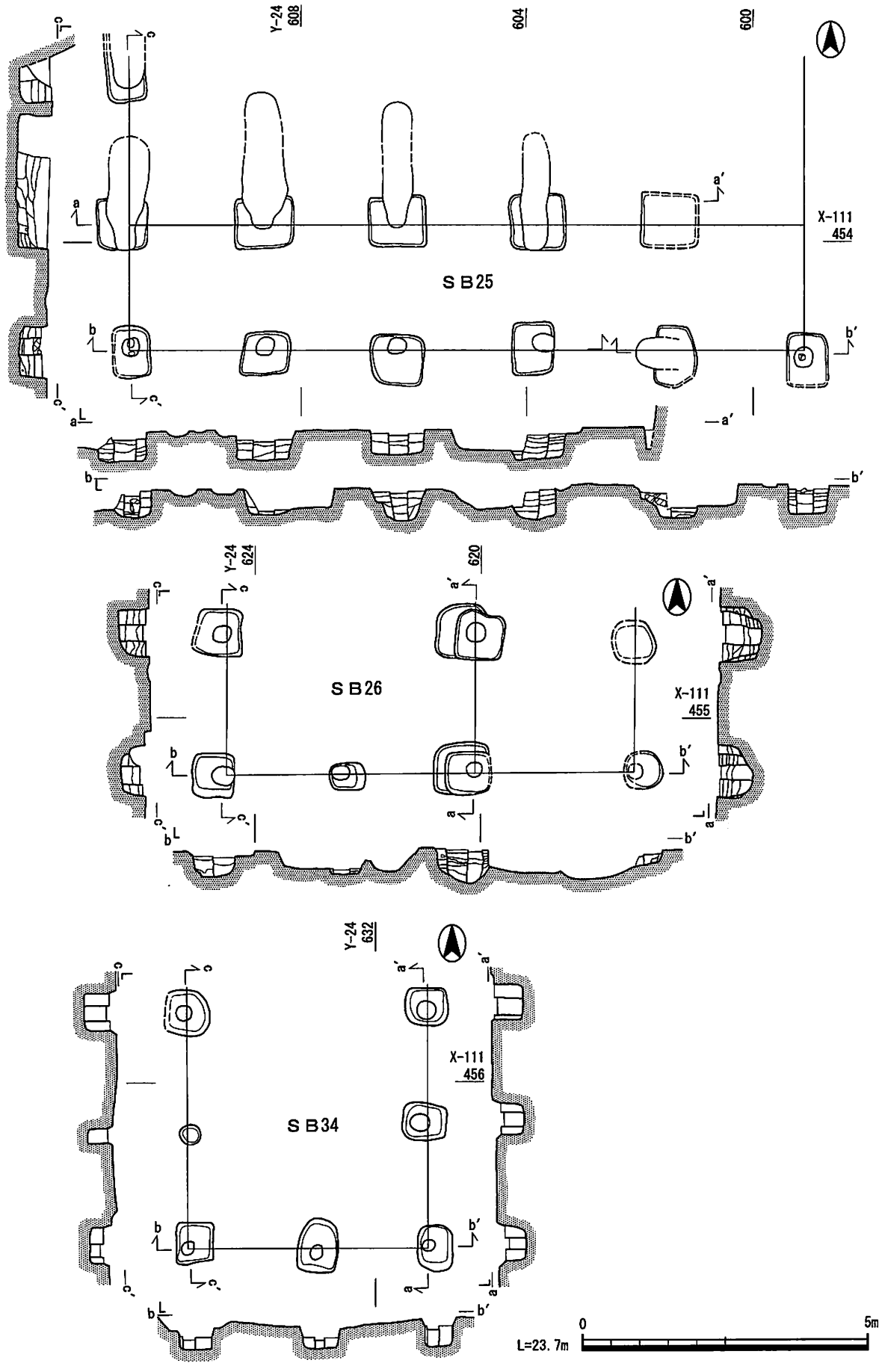
SB4・20・21 遺構実測図

図版第六



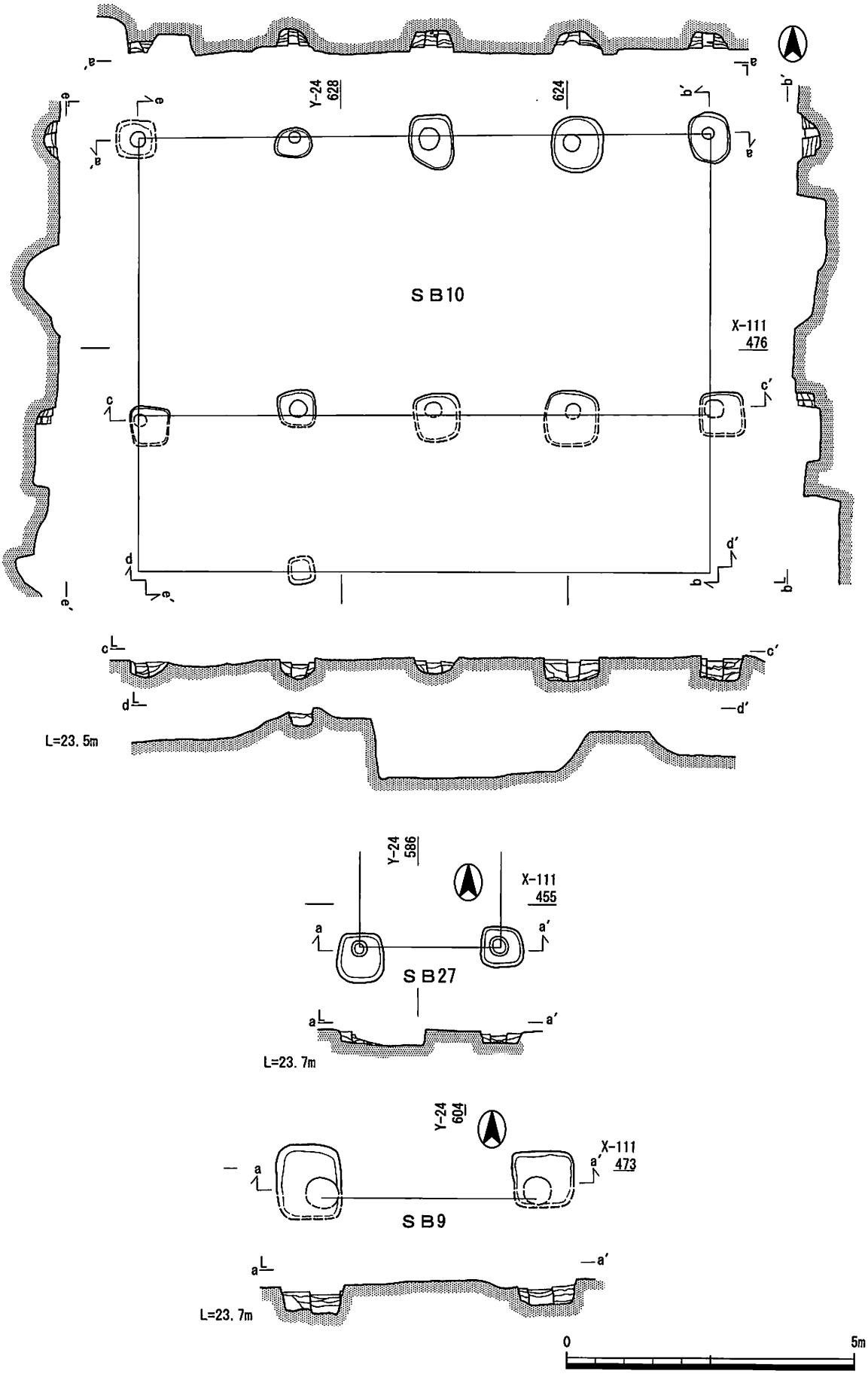
SB13・19・24 遺構実測図

図版第七



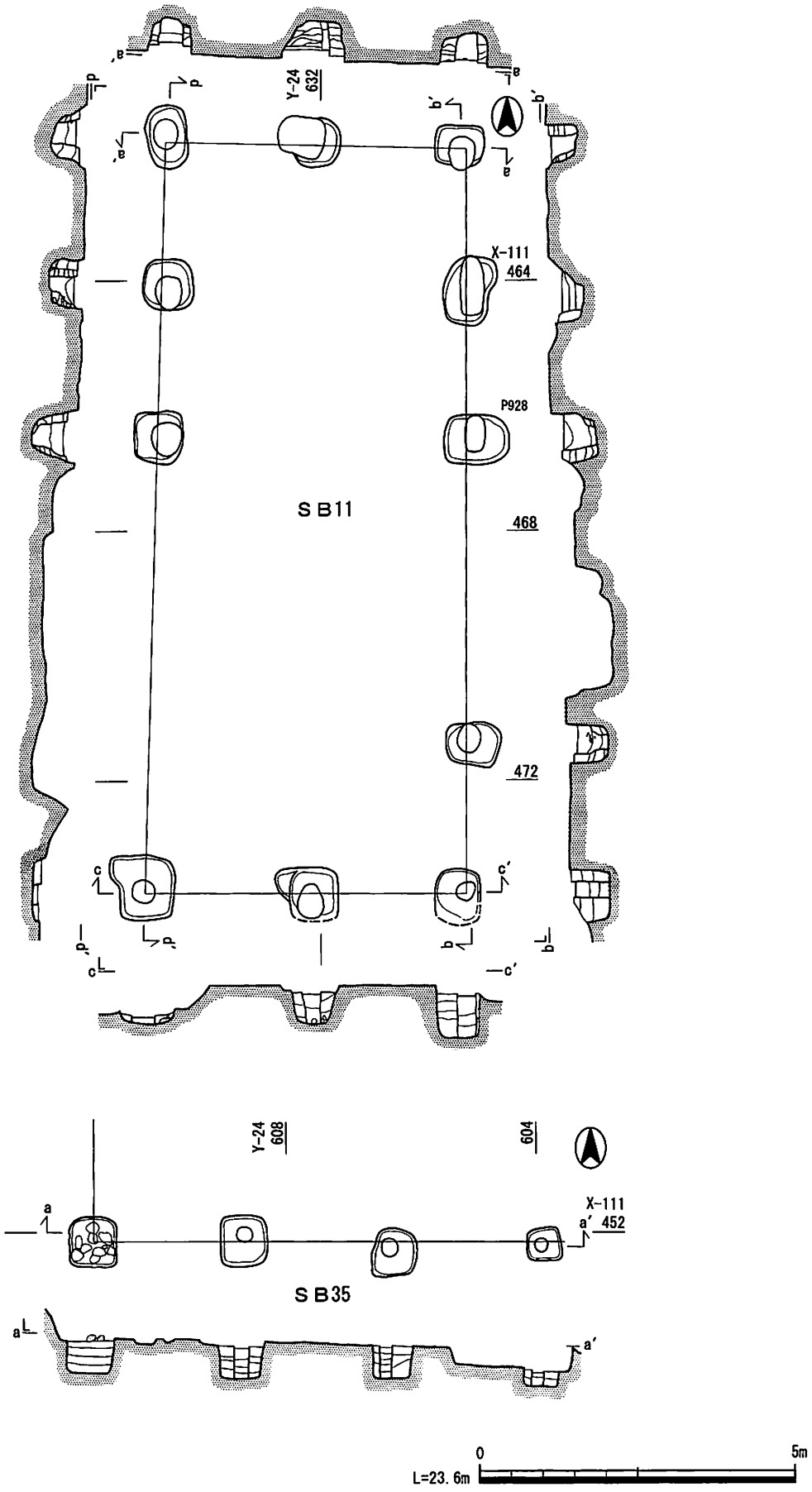
SB25・26・34 遺構実測図

図版第八



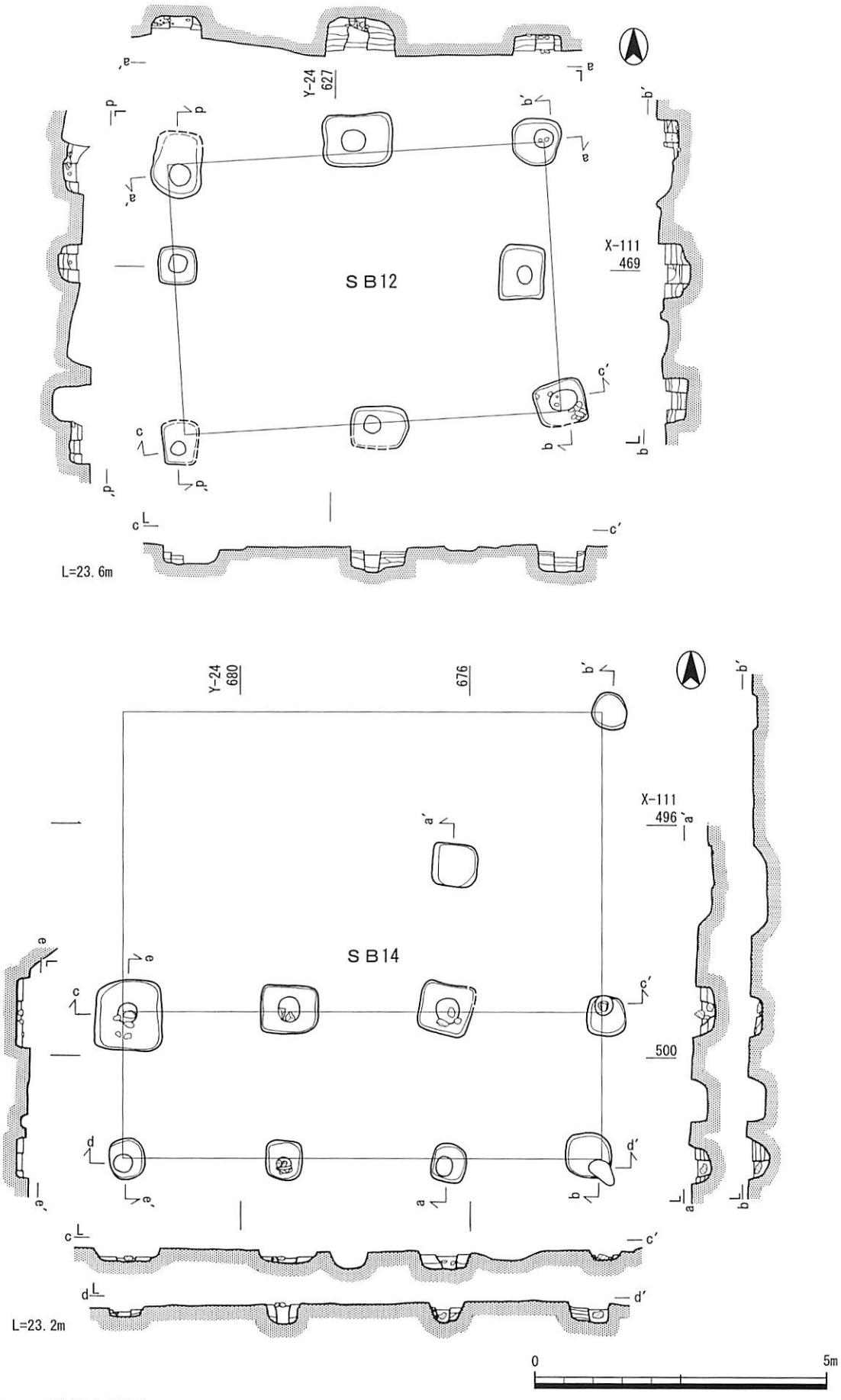
SB9・10・27 遺構実測図

図版第九

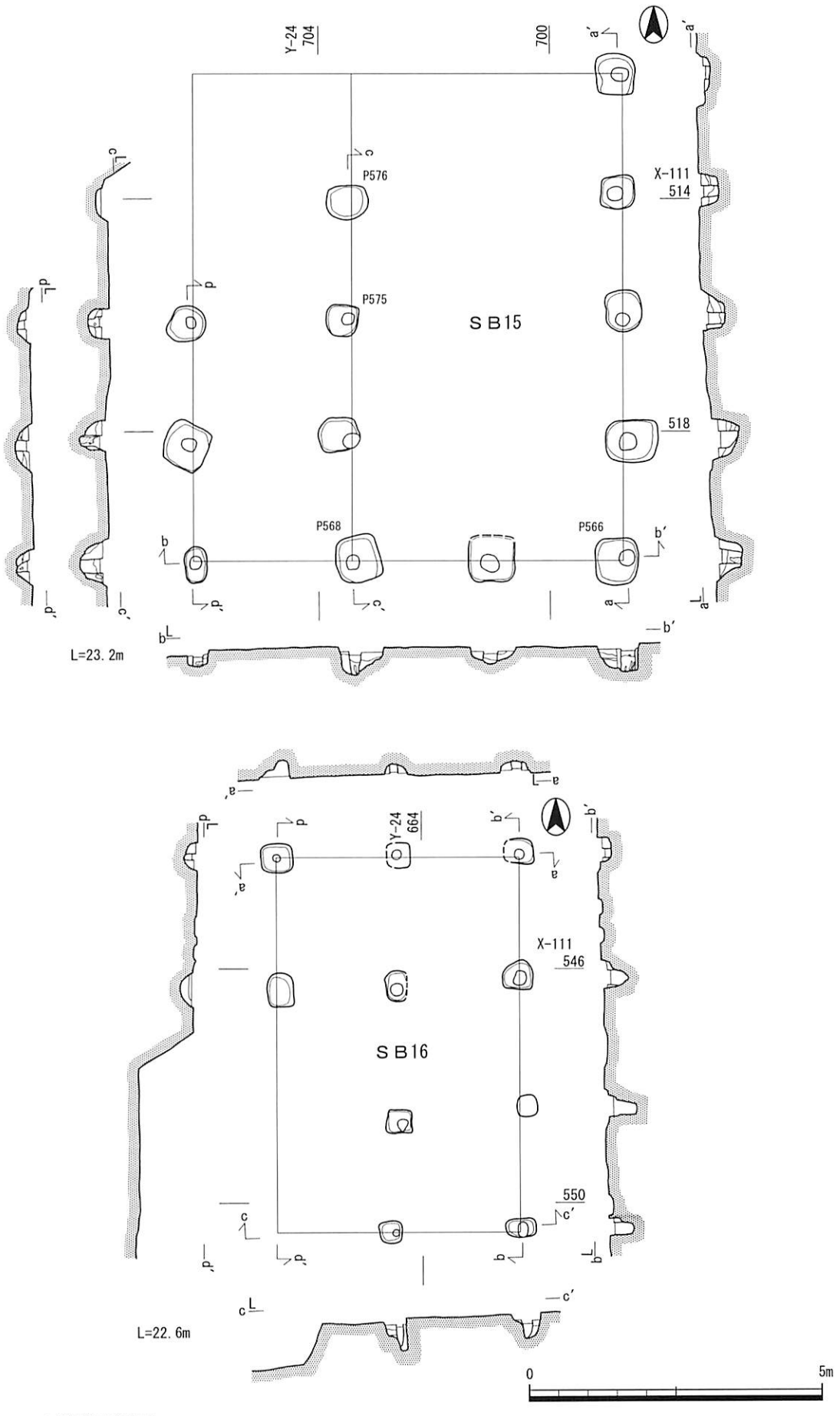


SB11・35 遺構実測図

図版第十

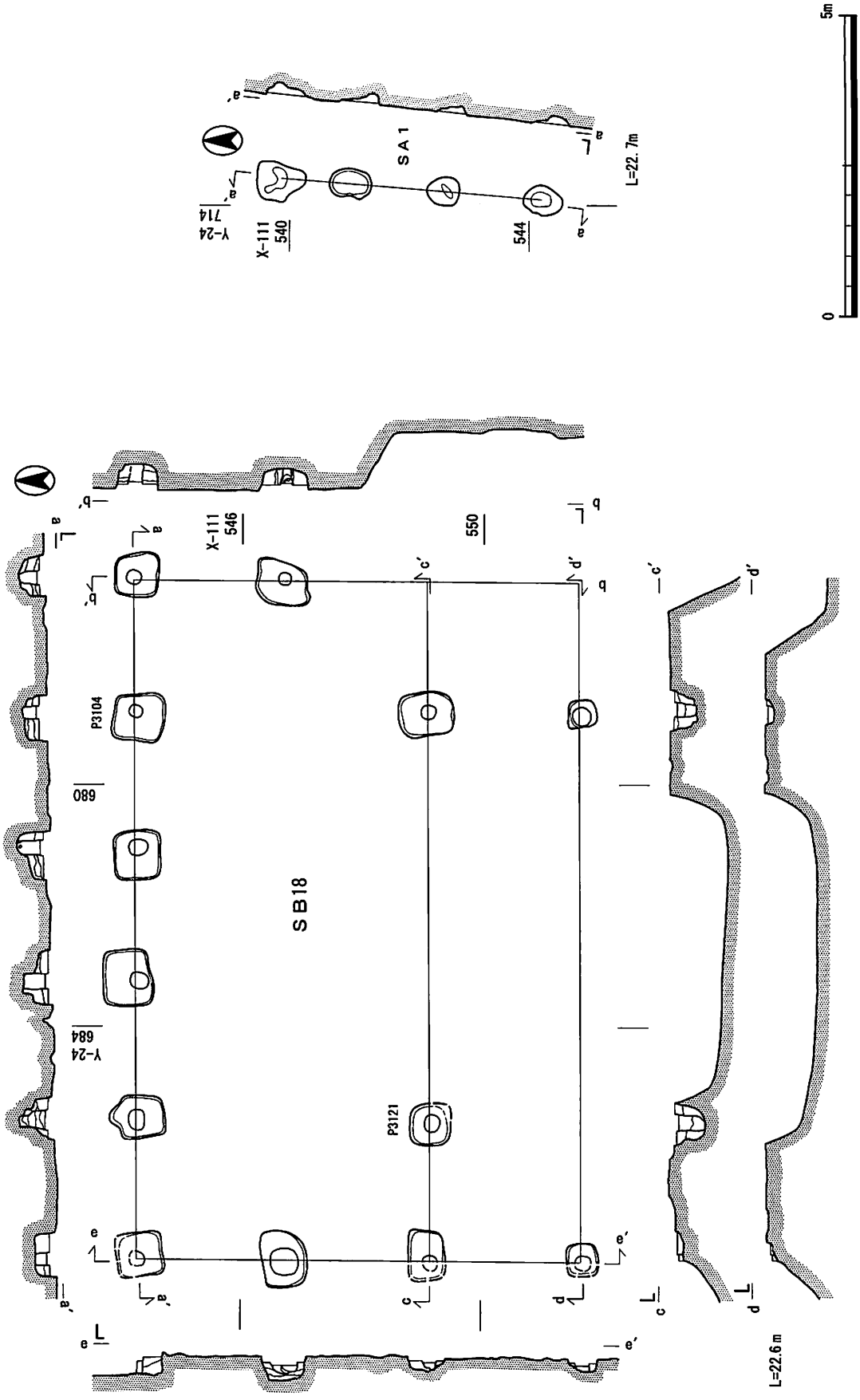


SB12・14 遺構実測図

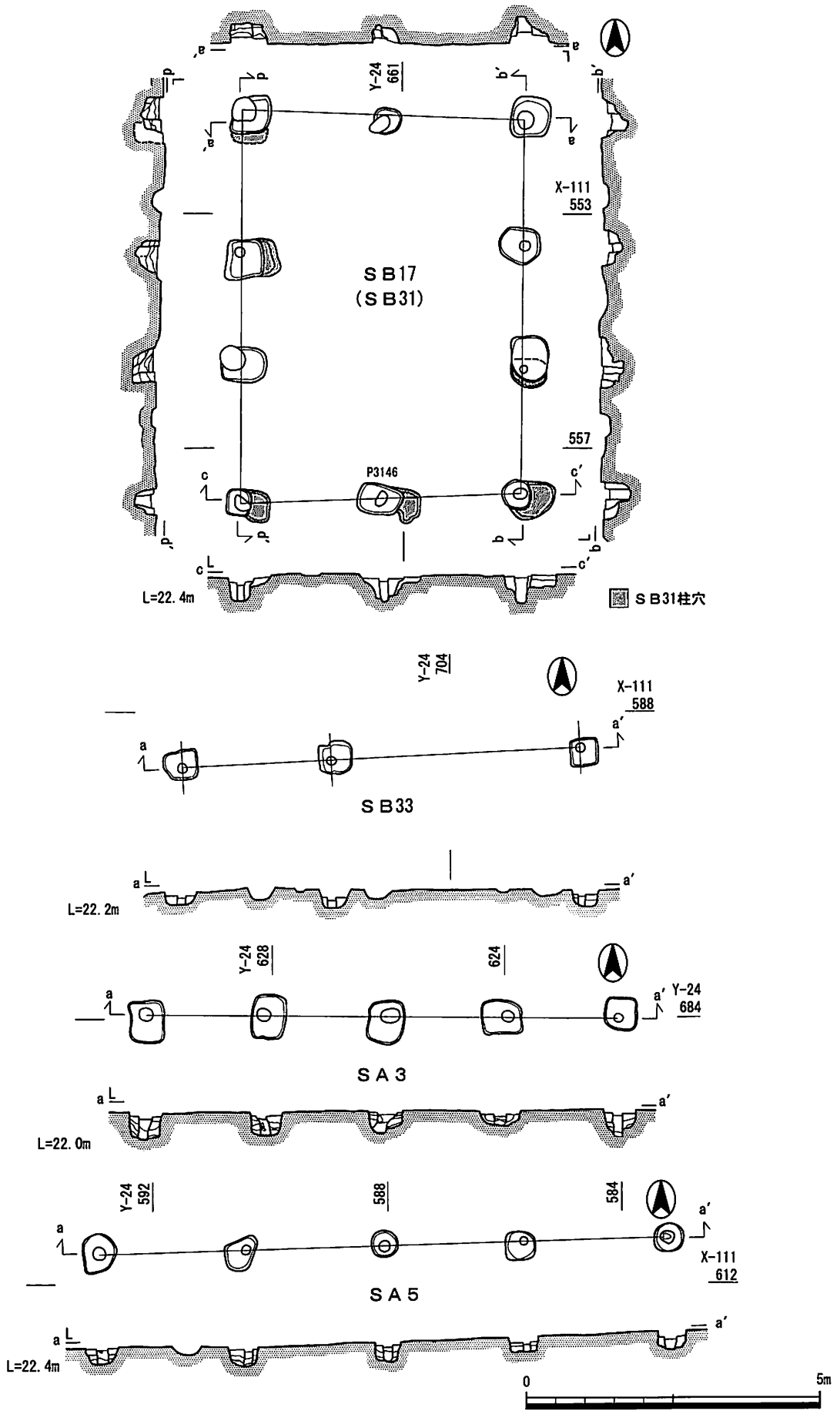


SB15・16 遺構実測図

図版第十二

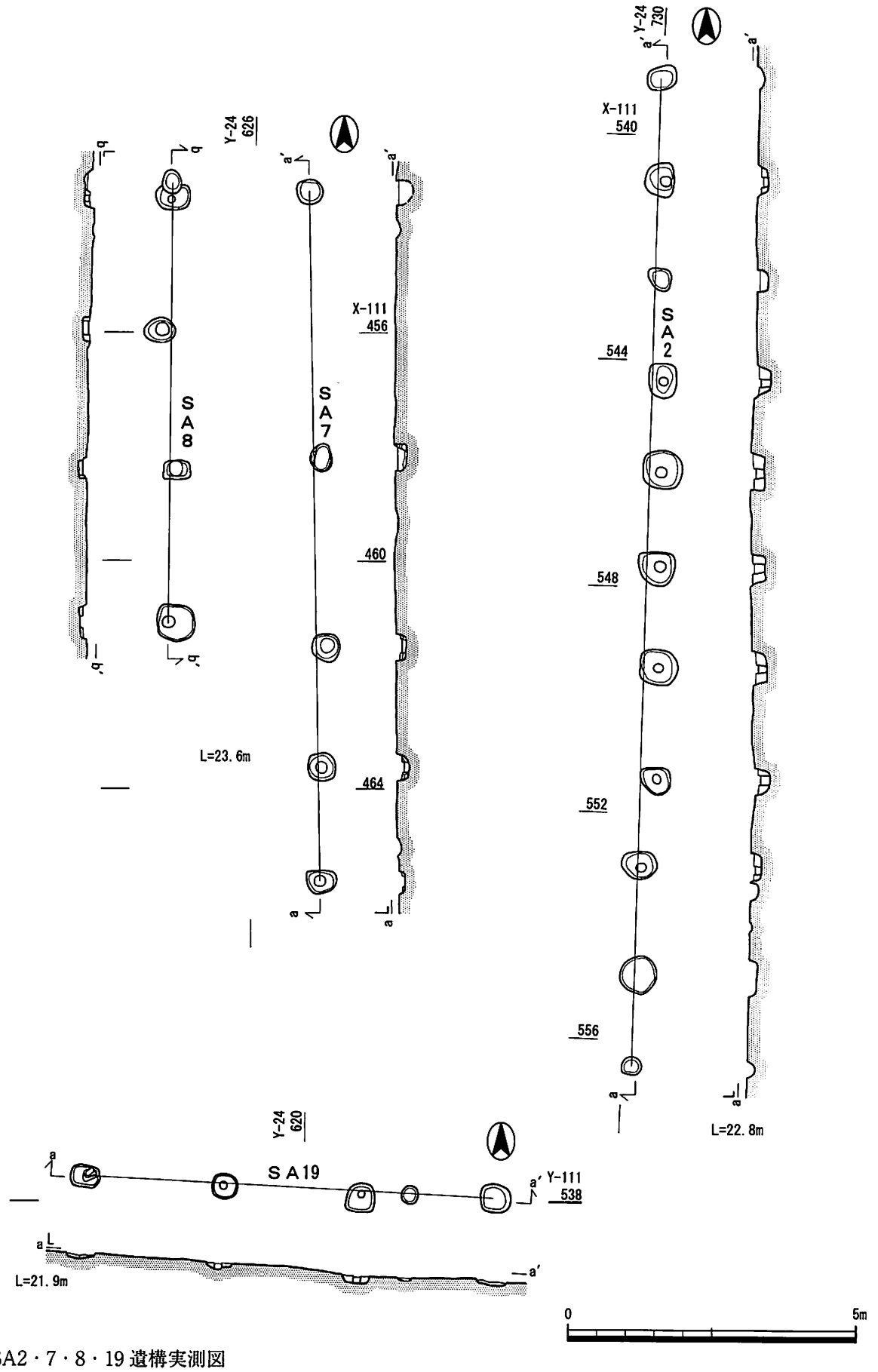


SB18, SA1 遺構実測図



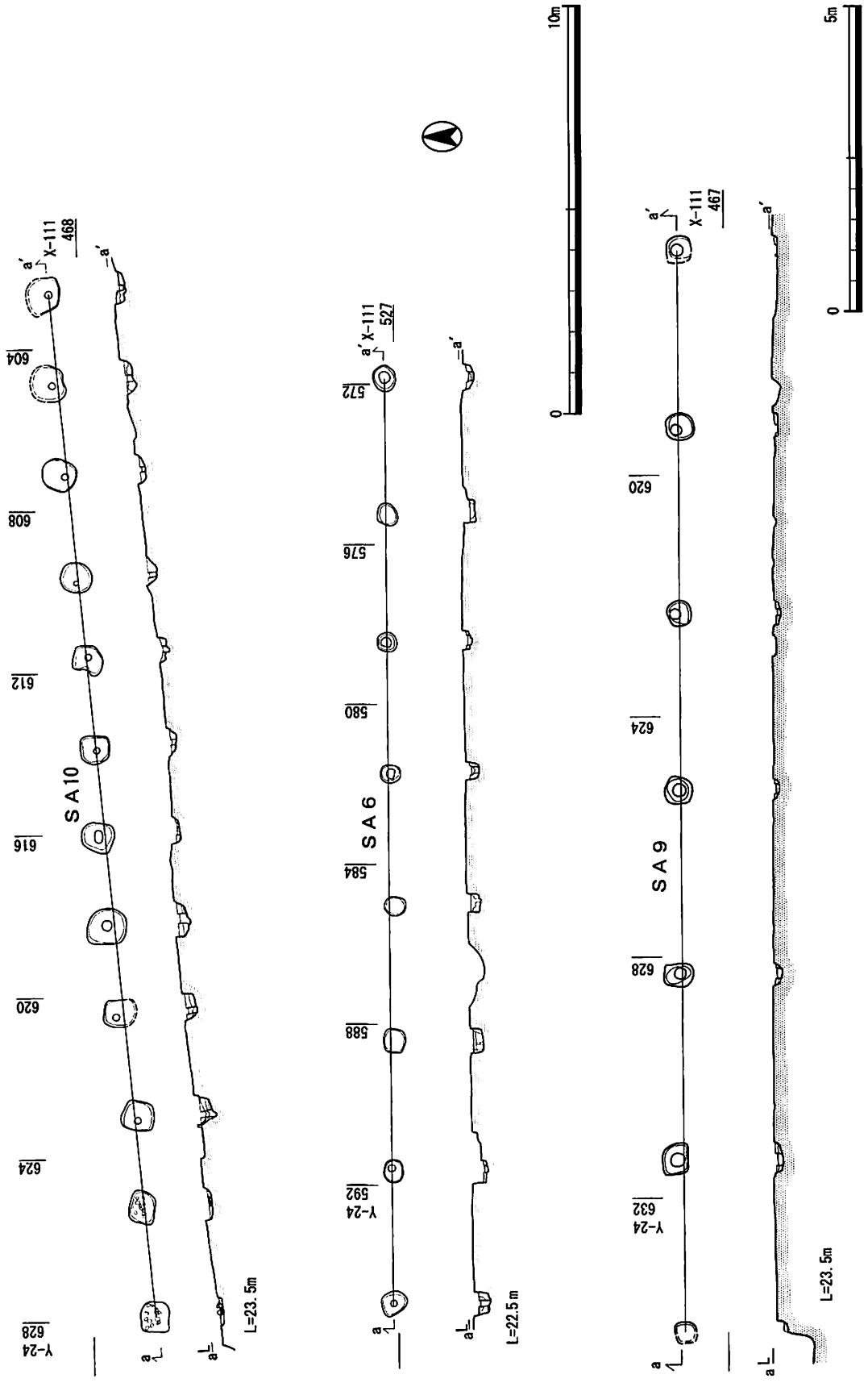
SA3・5, SB17・31・33 遺構実測図

図版第十四



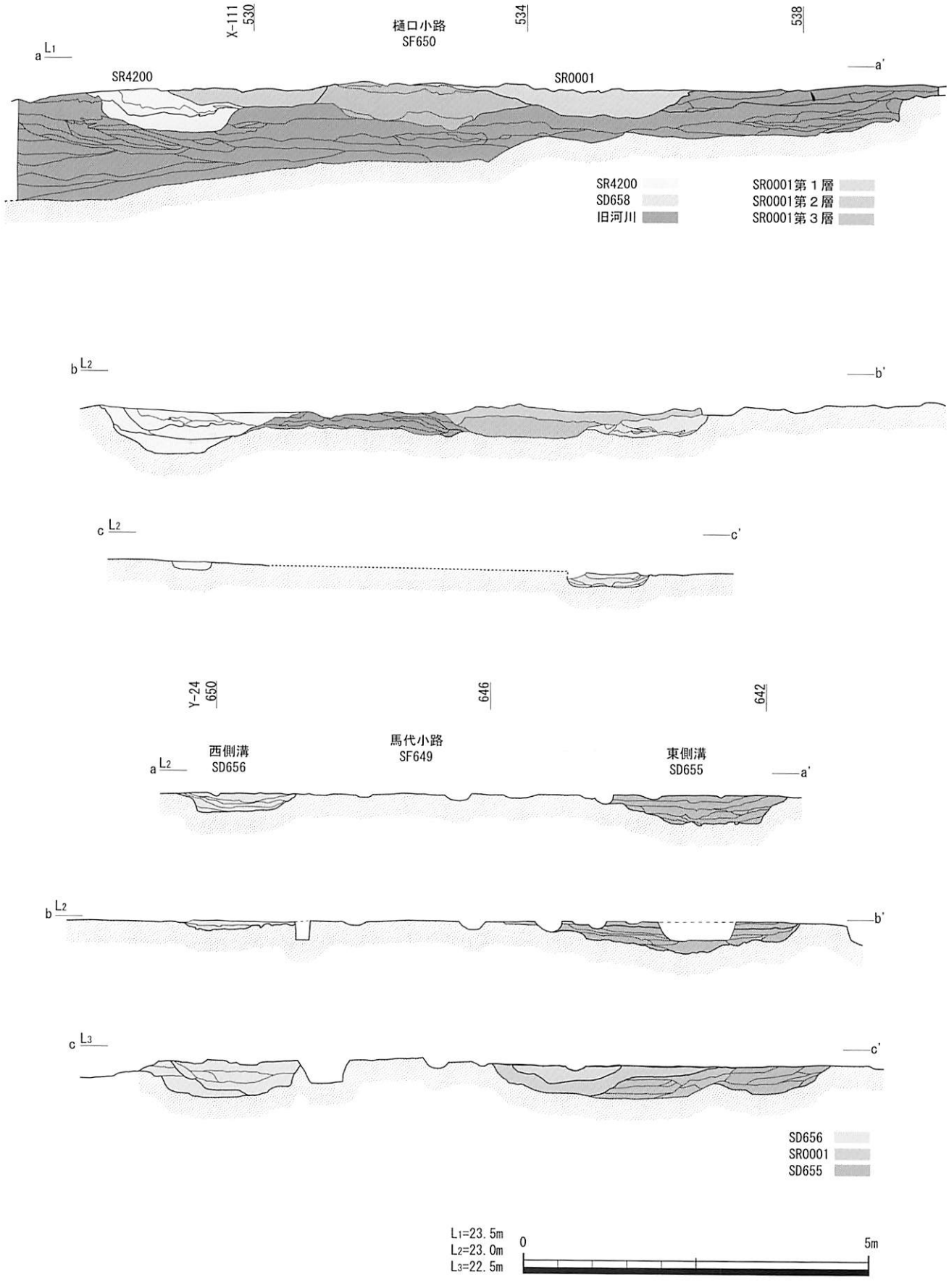
SA2・7・8・19 遺構実測図

図版第十五

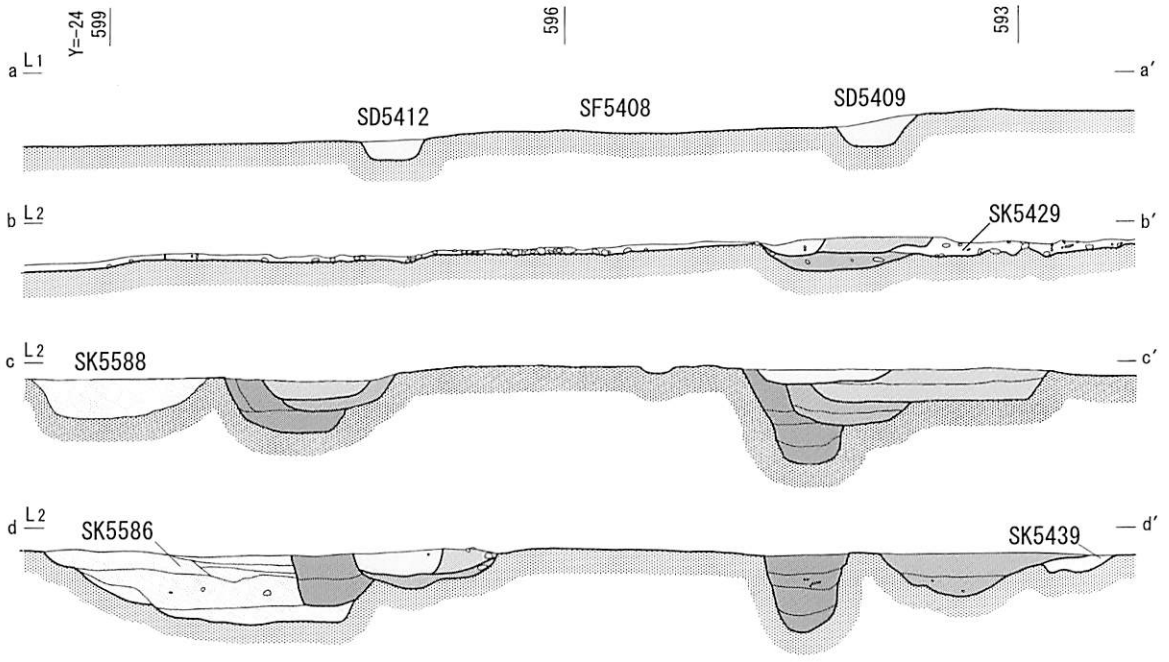


SA6・9・10 遺構実測図

図版第十六



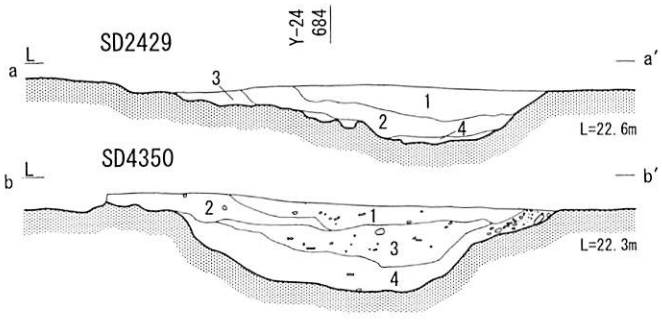
条坊側溝・ＳＲ 0001・4200 断面図



L1=22.6m
L2=22.7m

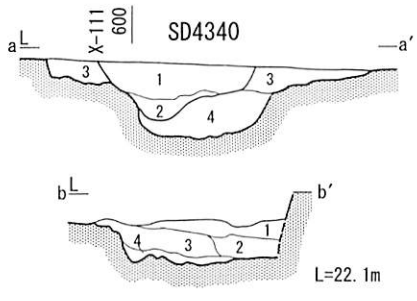
SD5412A
SD5412B
SD5412C
SD5412D

SD5409A
SD5409B
SD5409C
SD5409D



SD2429
1　10YR3/2 黒褐色砂泥
2　10YR3/2 黒褐色砂泥に
　10YR6/6 明黄褐色砂泥を
　斑状に含む
3　10YR3/2 黒褐色砂泥
4　10YR4/2 灰黄褐色砂泥

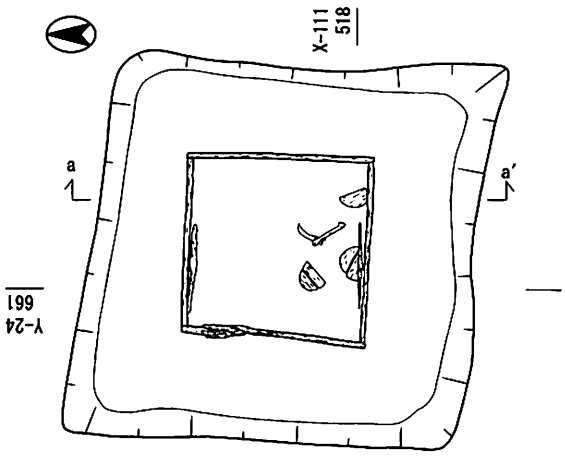
SD4350
1　10YR4/2 灰黄褐色砂泥
2　2.5YR4/2 暗灰黄色砂泥
3　10YR4/1 褐灰色砂泥
4　10YR3/1 黒褐色砂泥



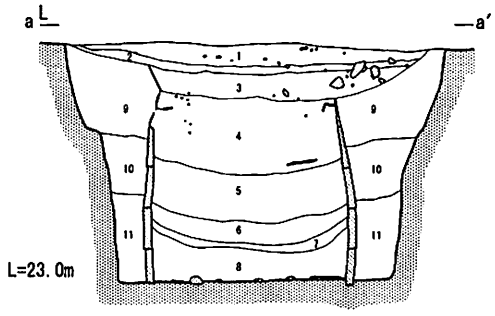
1　10YR5/3 にぶい黄褐色泥砂
2　10YR3/3 暗褐色泥砂
3　10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂
4　10YR3/2 黒褐色泥砂に2.5Y3/3
　暗オリーブ褐色砂泥を斑状に含む

SD2429・4340・4350・5409・5412 断面図

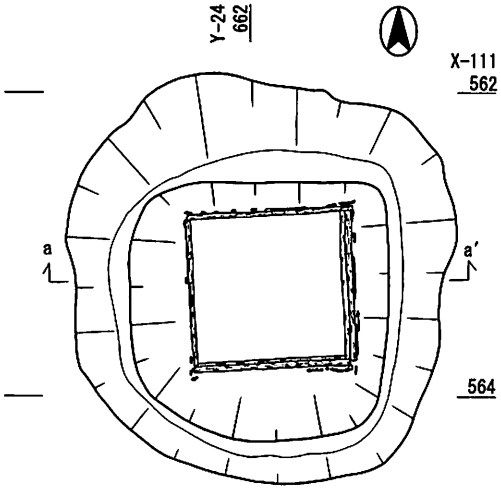
図版第十八



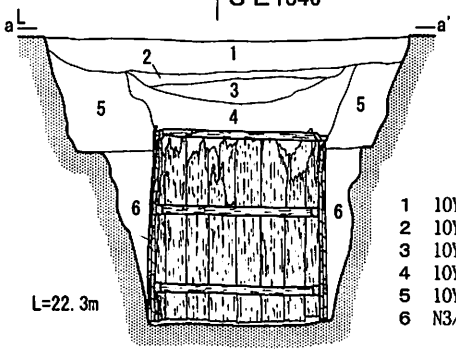
SE670



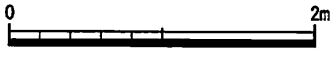
1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
2 2.5YT4/3 オリーブ褐色砂泥
3 2.5YR3/2 黒褐色砂泥
4 10YR3/1 黒褐色シルト
5 2.5YR3/2 黒褐色シルト.
径～3cmの礫を少量含む
6 2.5Y3/1 黒褐色シルトに
10YR5/2 オリーブ灰色泥砂を含む
7 5Y3/1 オリーブ黒色腐植土に
植物遺体を少量含む
8 5Y3/2 オリーブ黒色シルト
9 2.5Y5/4 黄褐色泥砂に
2.5Y4/1 黄灰色砂泥を斑状に含む
10 5Y3/1 オリーブ黒色泥砂に5GY5/1
オリーブ灰色シルトを斑状に含む
11 10G6/1 緑灰色シルト



SE1846

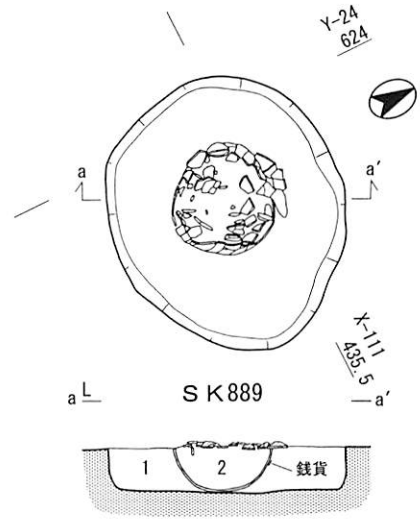


1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
3 10YR3/1 黒褐色泥砂
4 10YR3/1 黒褐色泥土
5 10Y7/1 灰白色微砂
6 N3/0 暗灰色泥土



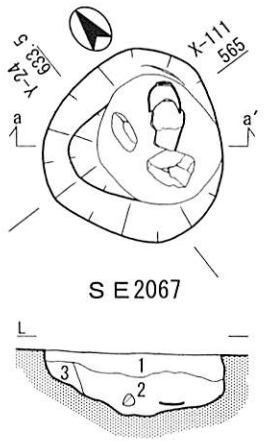
SE670・1846 遺構実測図

図版第十九



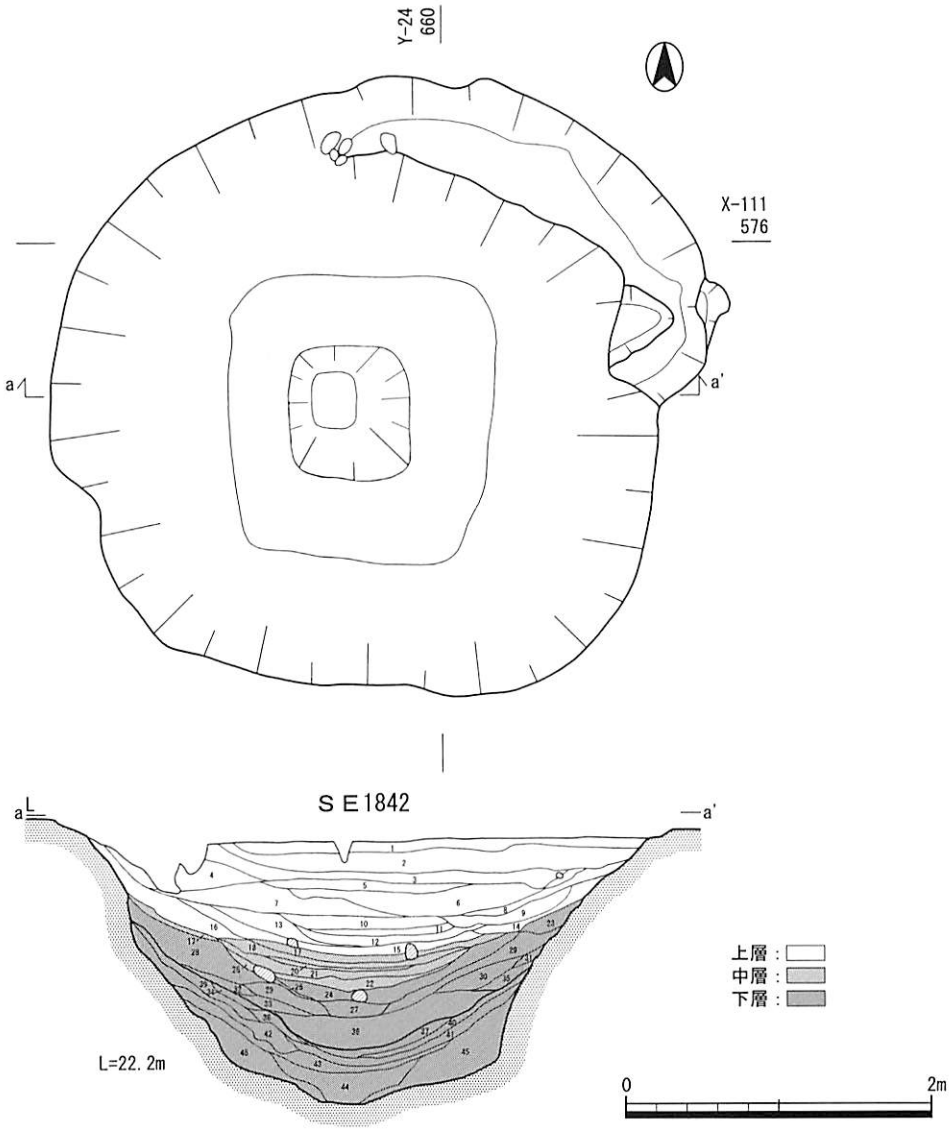
1　2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥，微量の炭化物を含む
2　2.5Y3/2 黒褐色砂泥

0　2m
L=23.7m



1　2.5YR3/3暗オリーブ褐色泥砂
2　2.5Y3/1黒褐色泥土
3　2.5Y3/1黒褐色砂泥

0　1m
L=22.1m

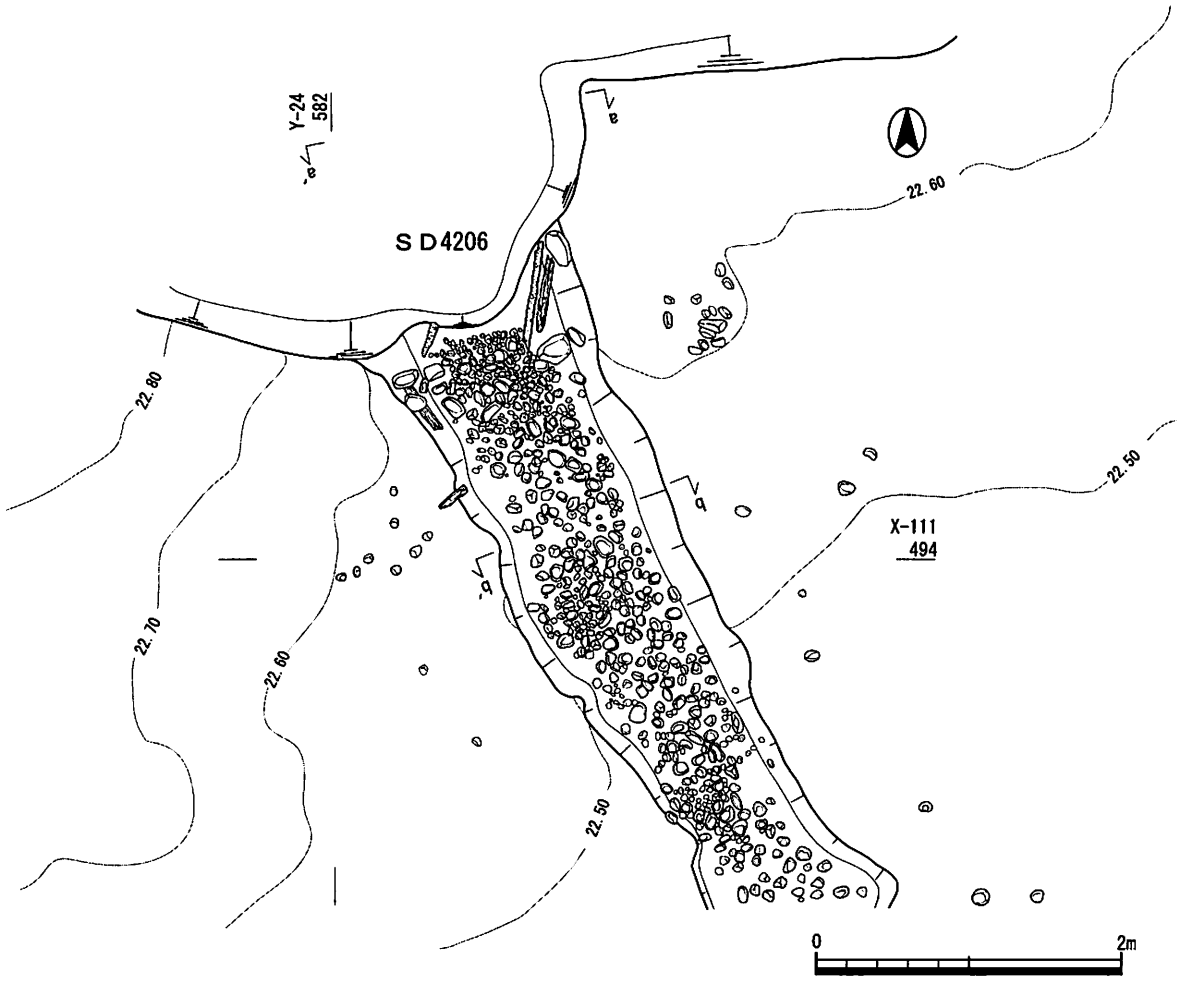


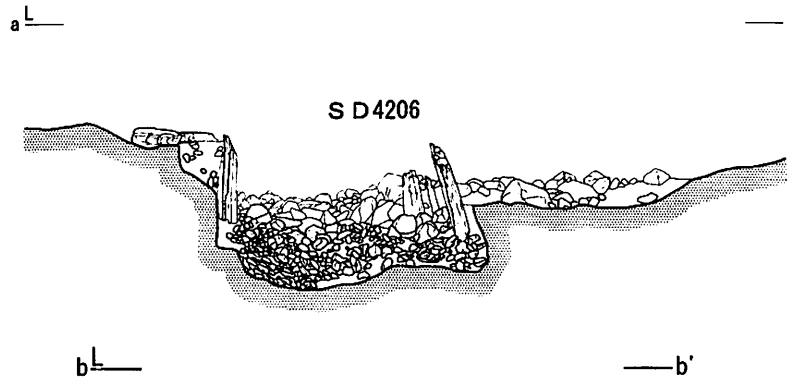
SE2067,SK889・1842 遺構実測図

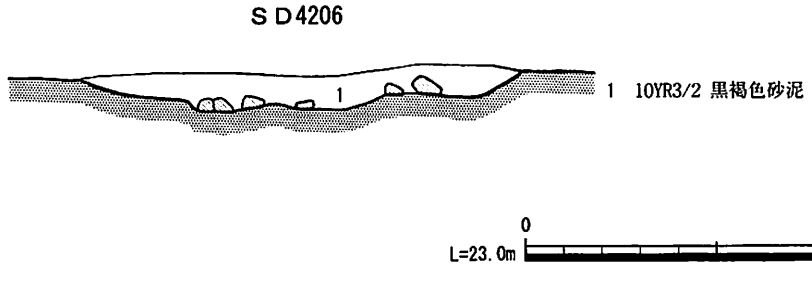
図版第二十

SX820 遺構実測図

図版第二十一

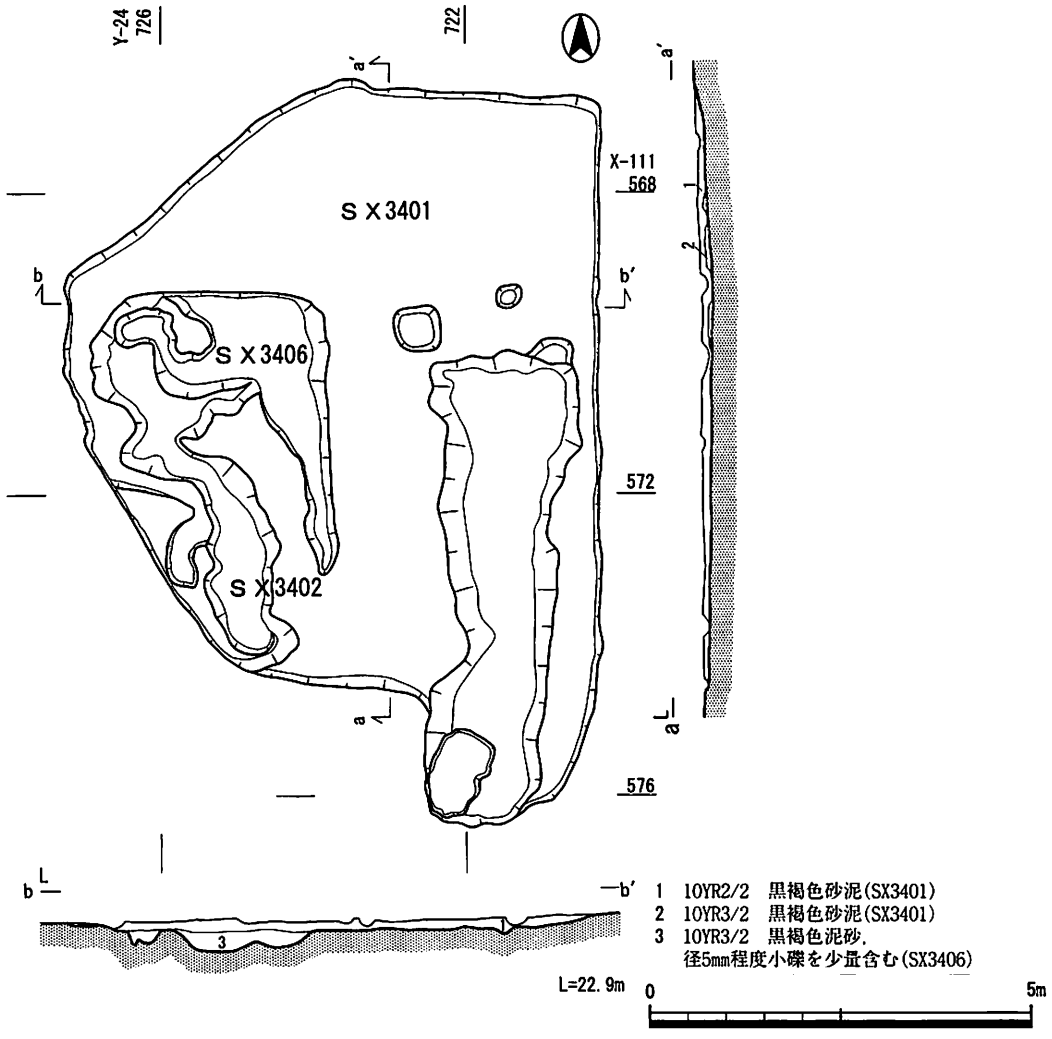


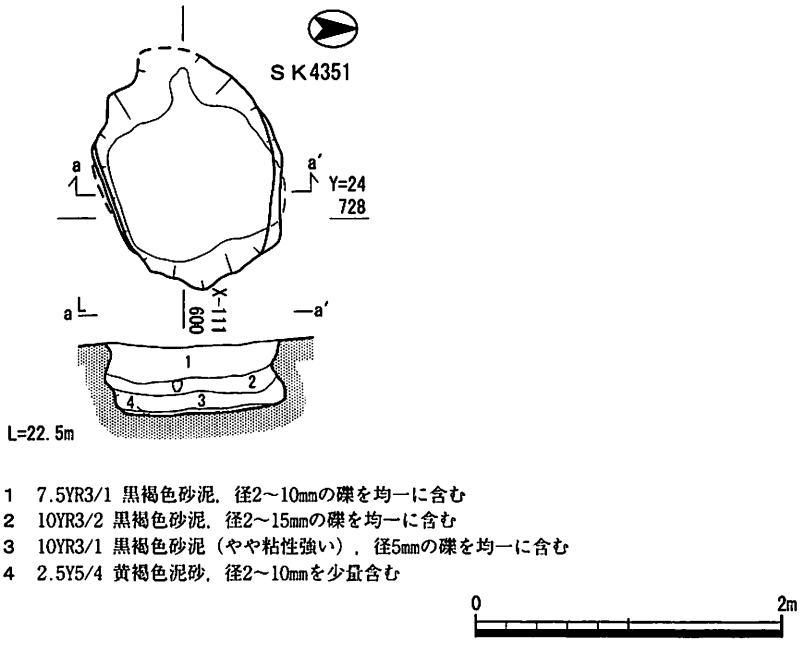




SD4206 遺構実測図

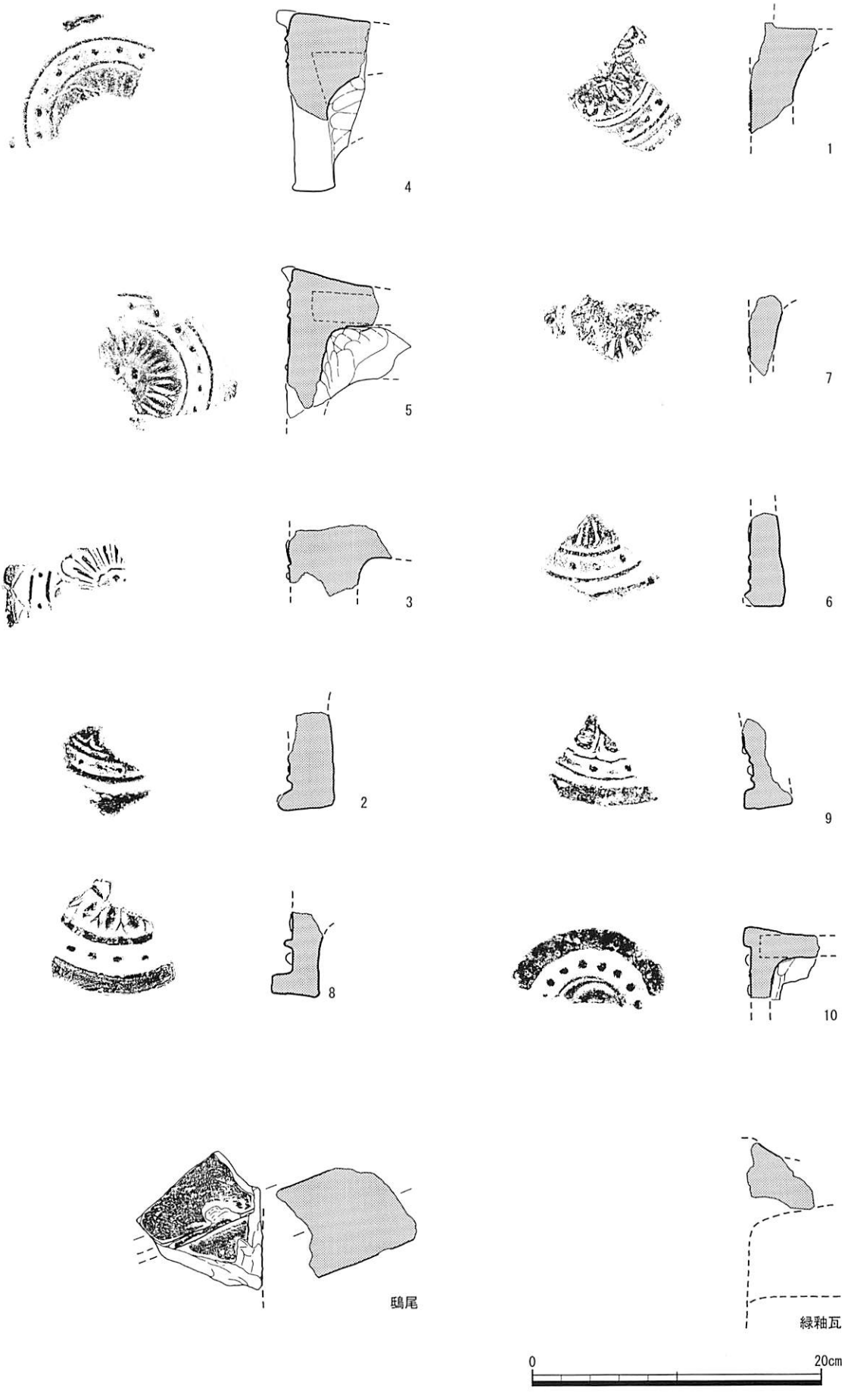
図版第二十二





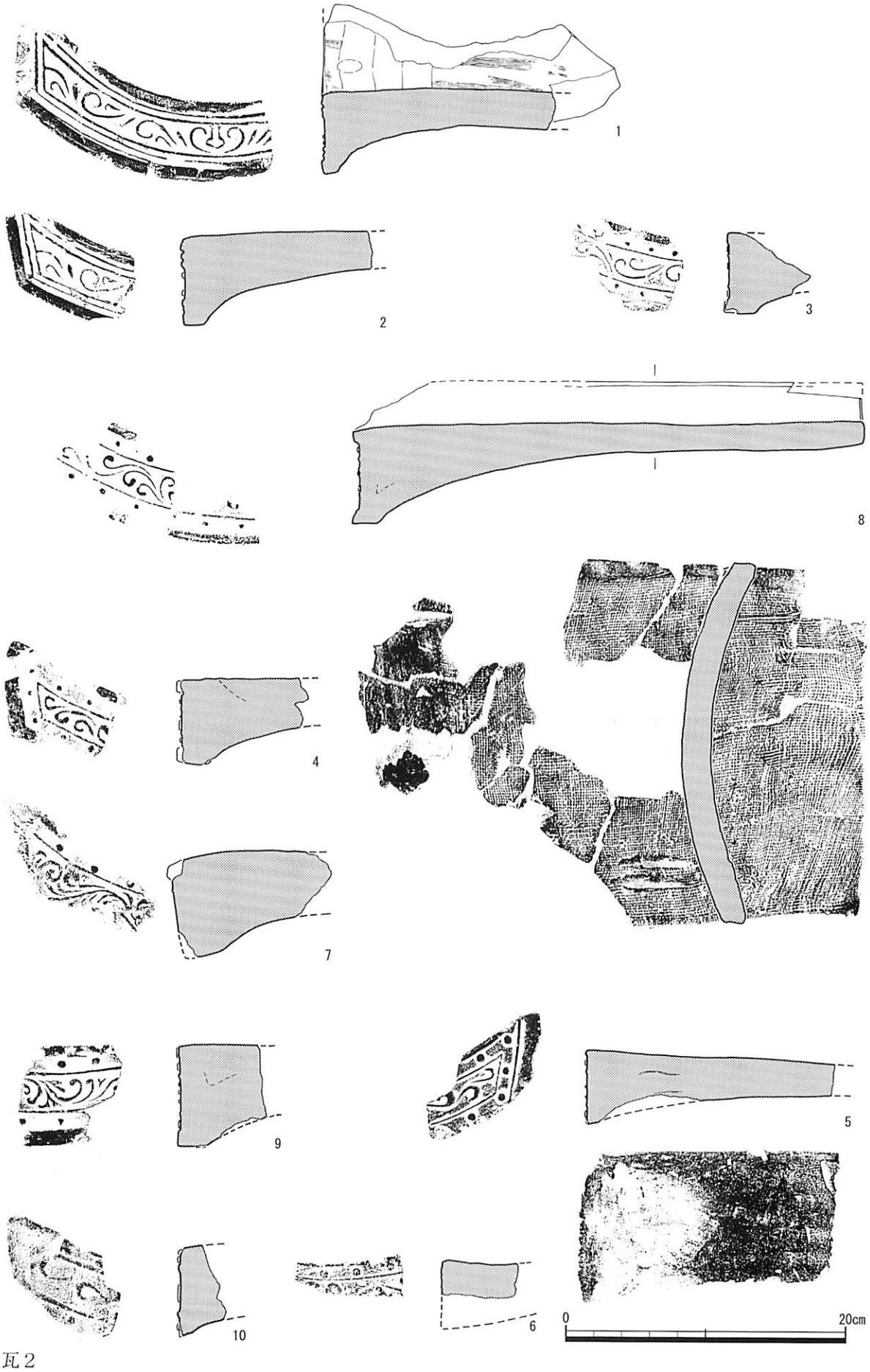
SK4351, SX3401・3402・3406 遺構実測図

図版第二十三

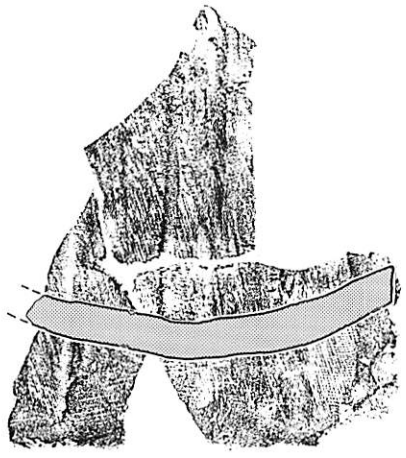


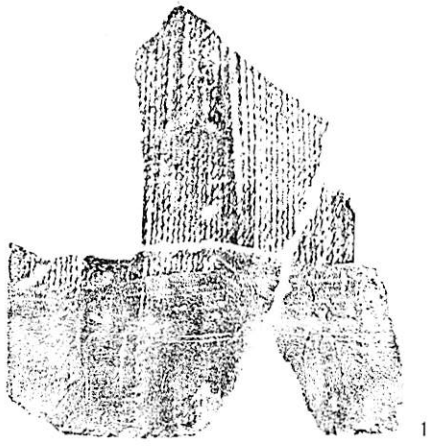
瓦1

図版第二十四

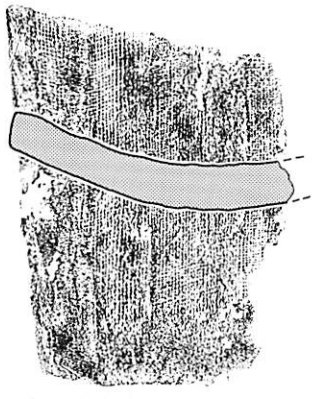


瓦2

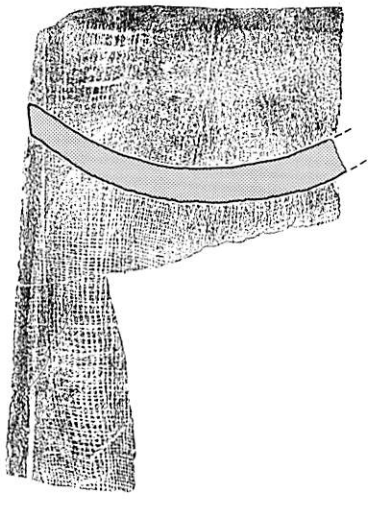


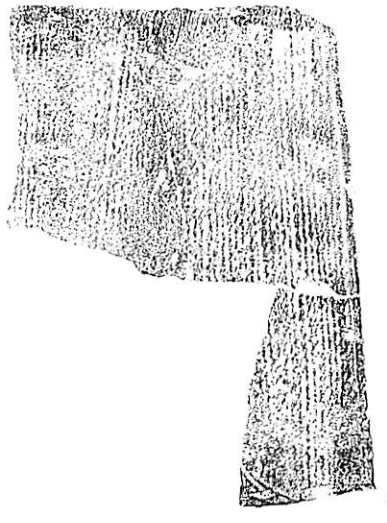


1



2

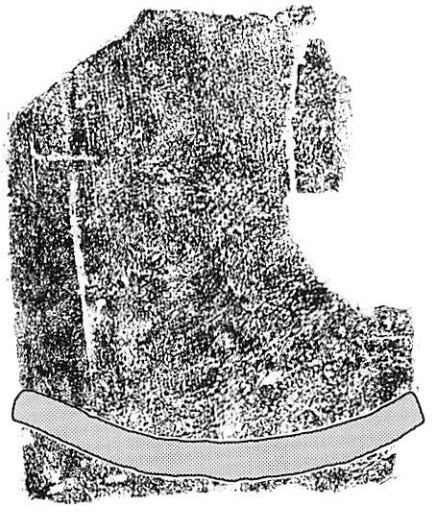




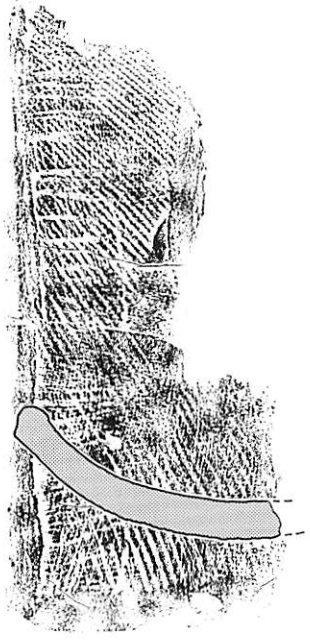
3

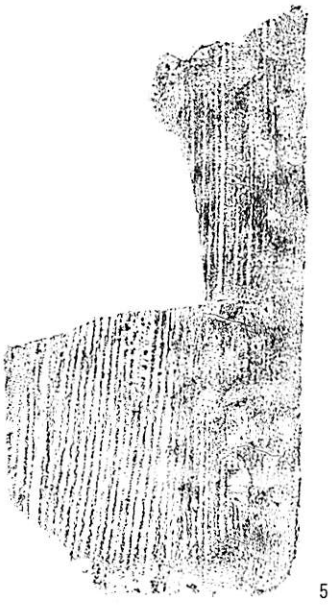
瓦３

図版第二十六

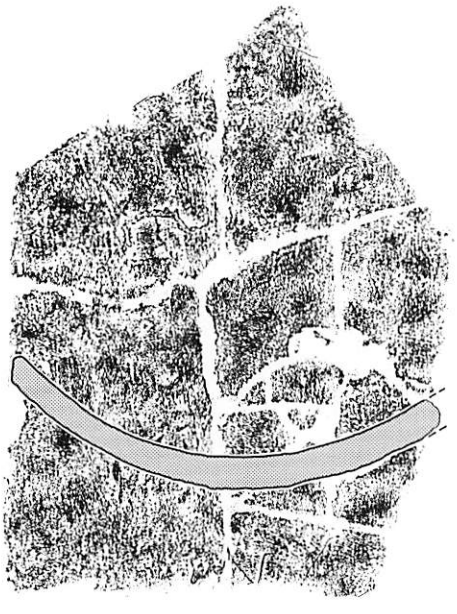


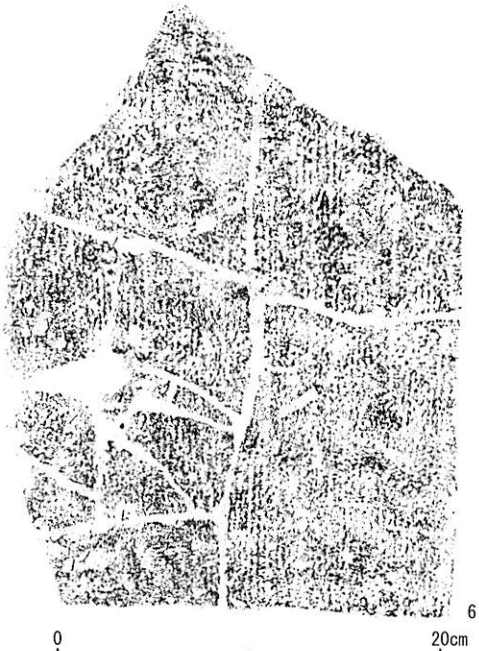
4





5



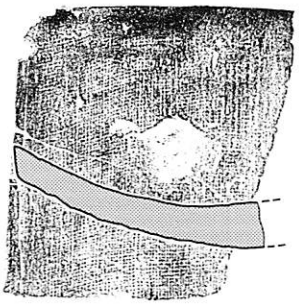


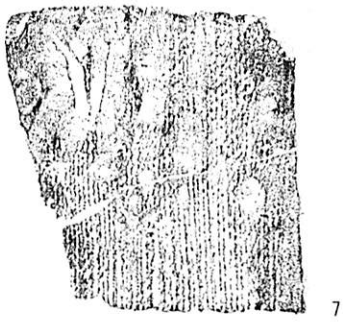
6

0 20cm

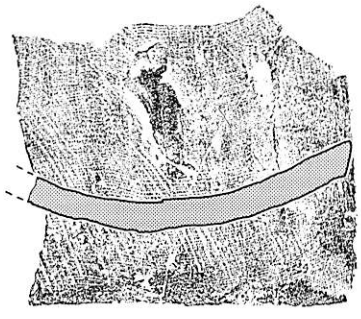
瓦4

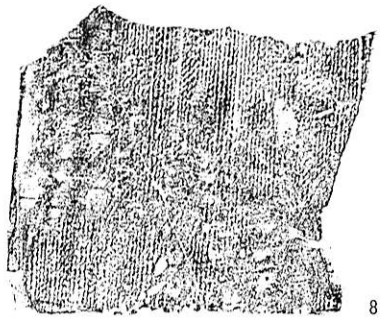
図版第二十七



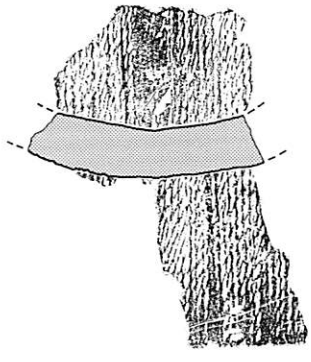


7





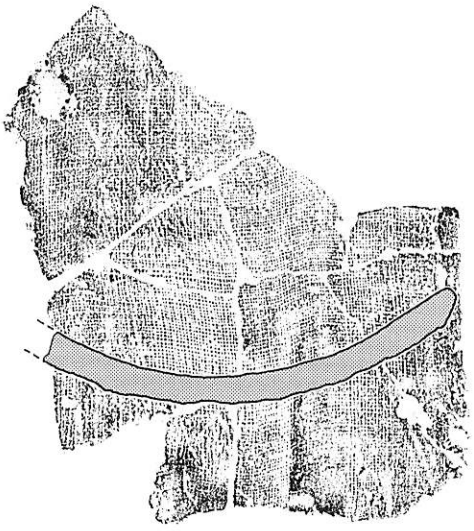
8

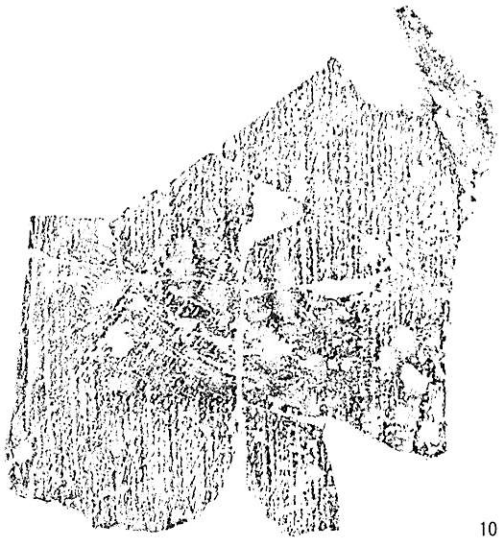


9

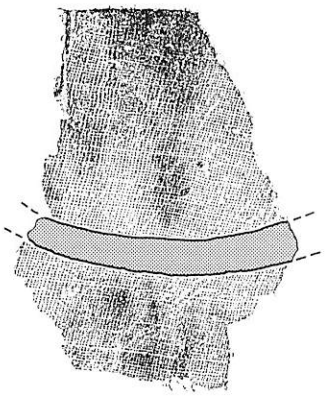
瓦5

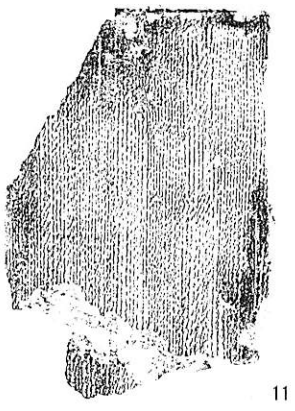
図版第二十八



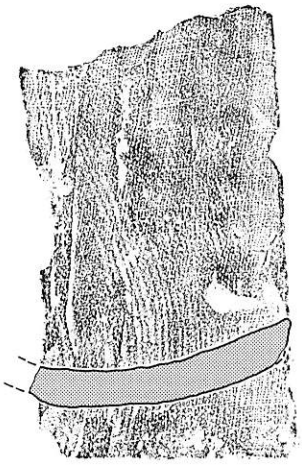


10





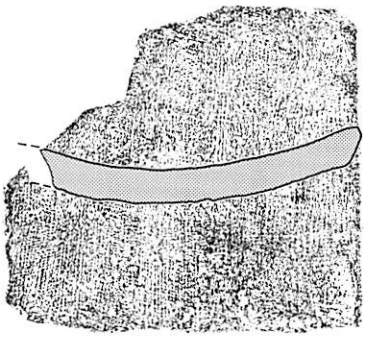
11

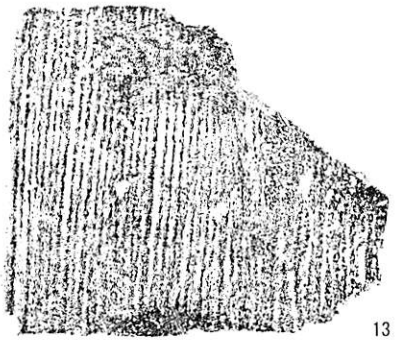


12

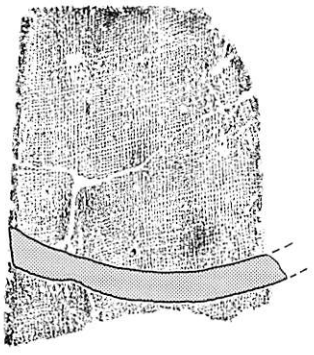
0 20cm

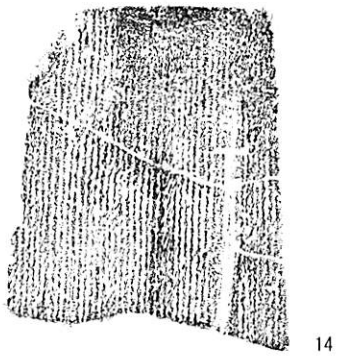
瓦6



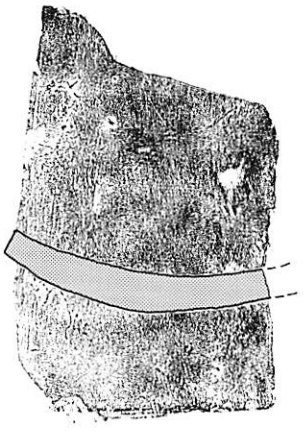


13





14

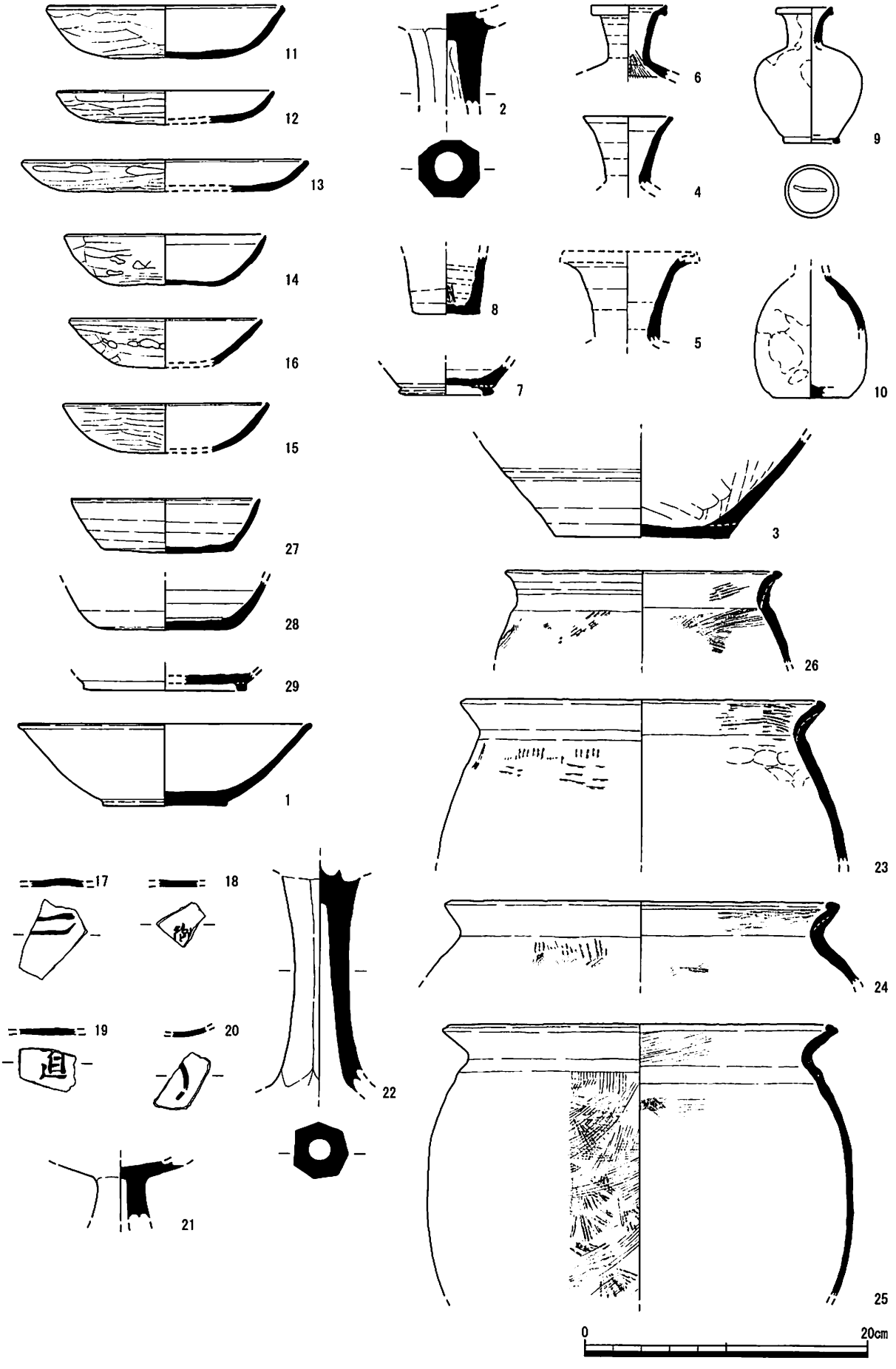


15

0 20cm

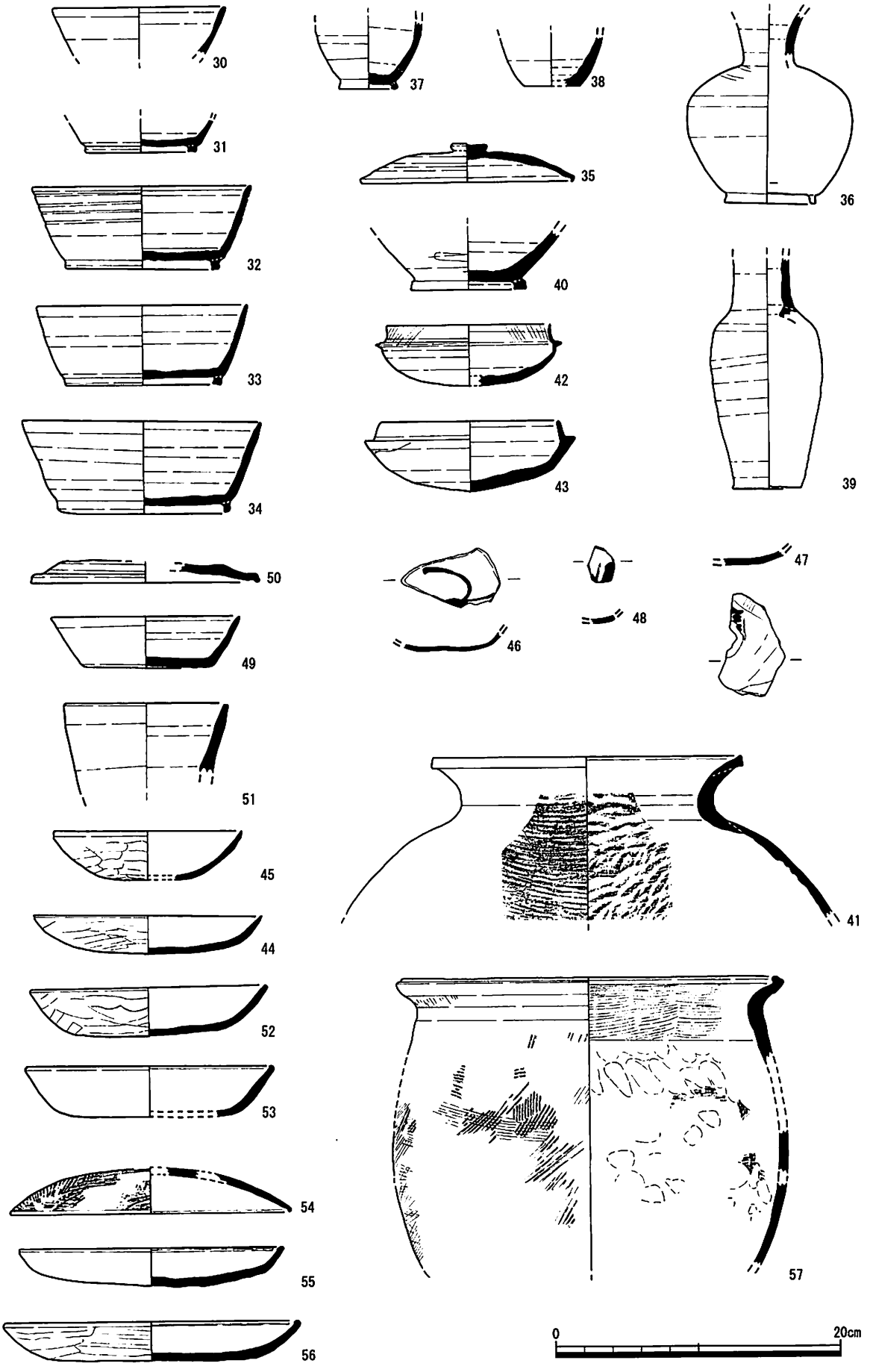
瓦 7

図版第三十



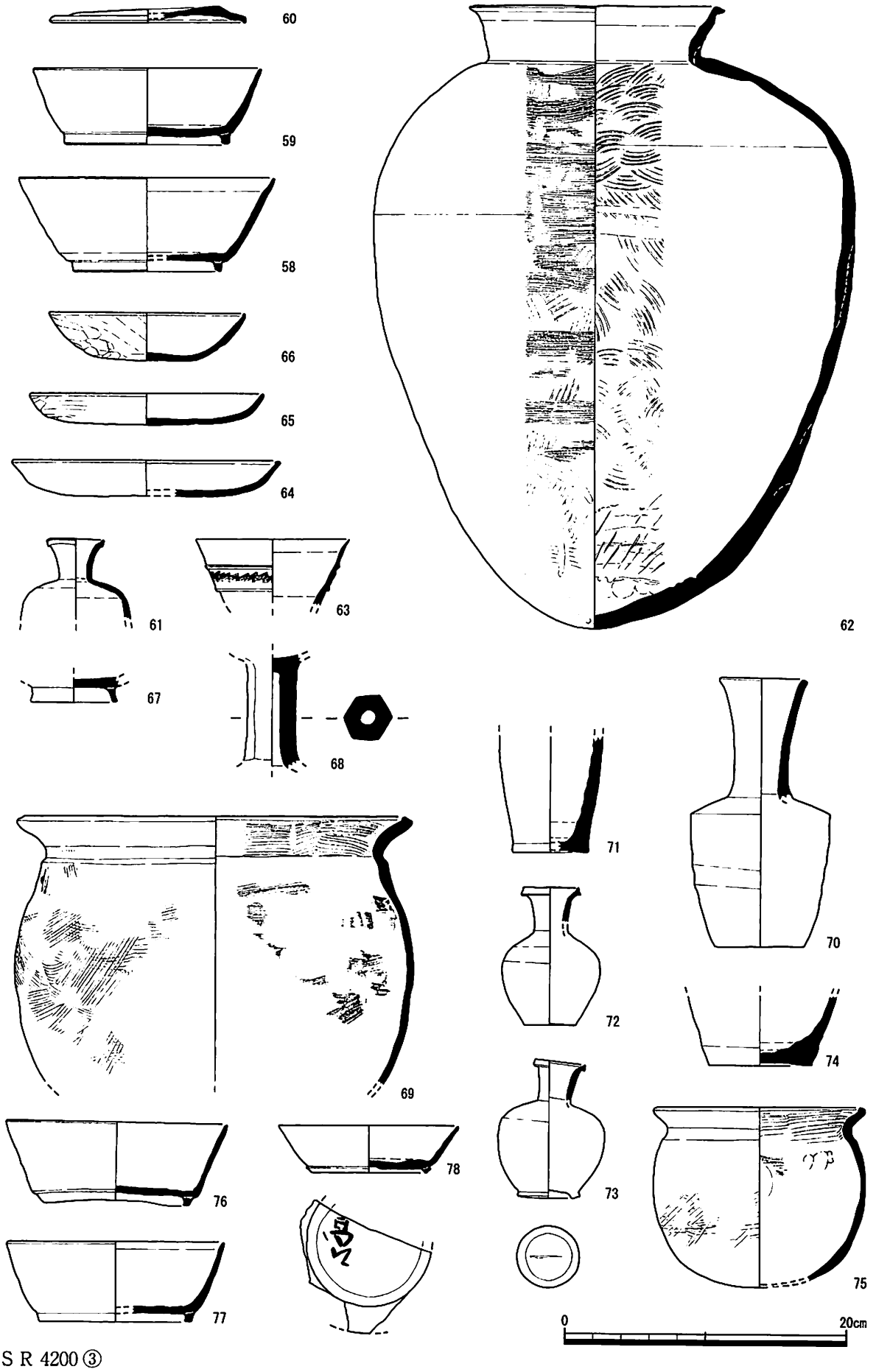
S R 4200 ①

図版第三十一



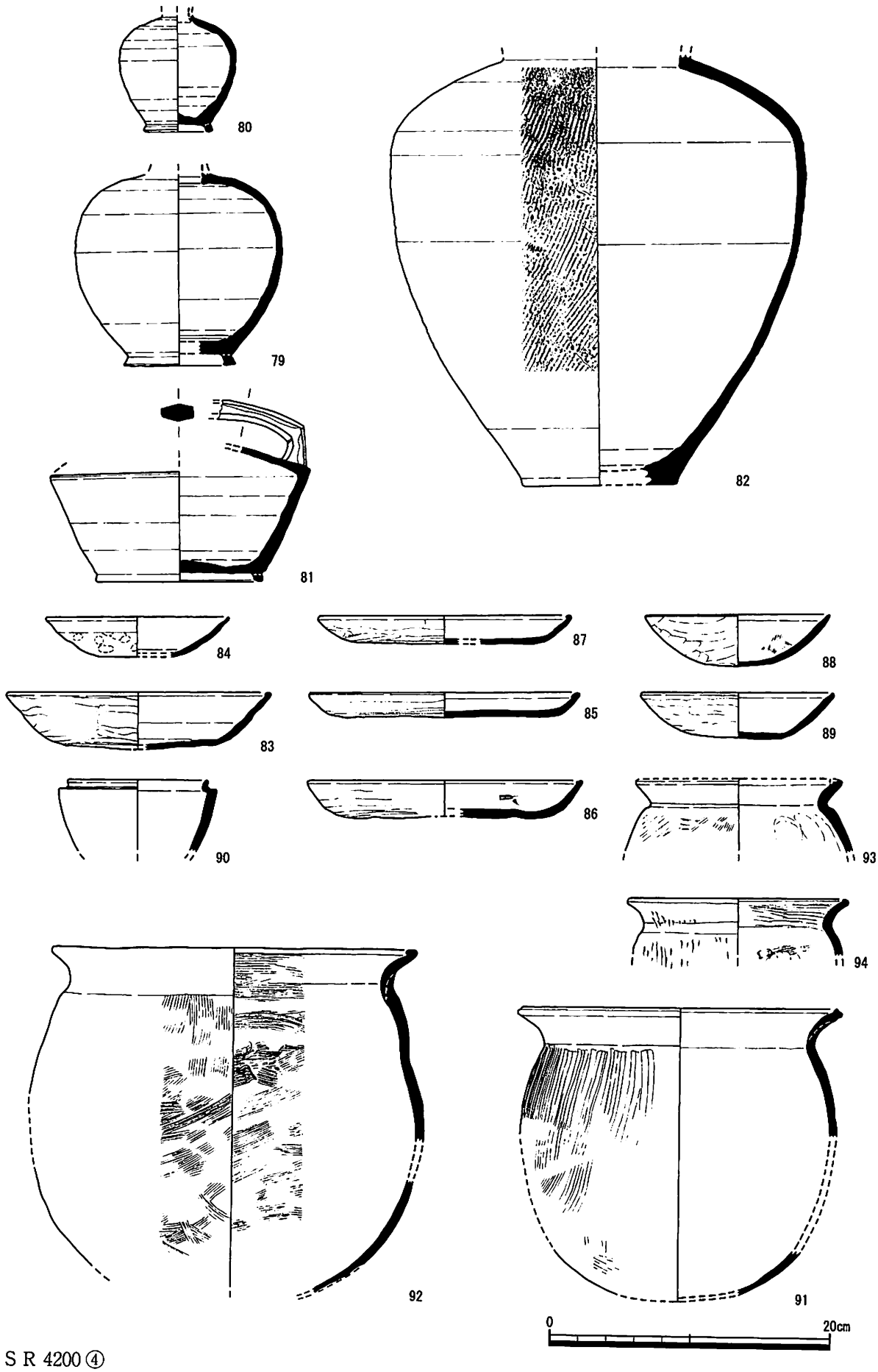
S R 4200 ②

図版第三十二



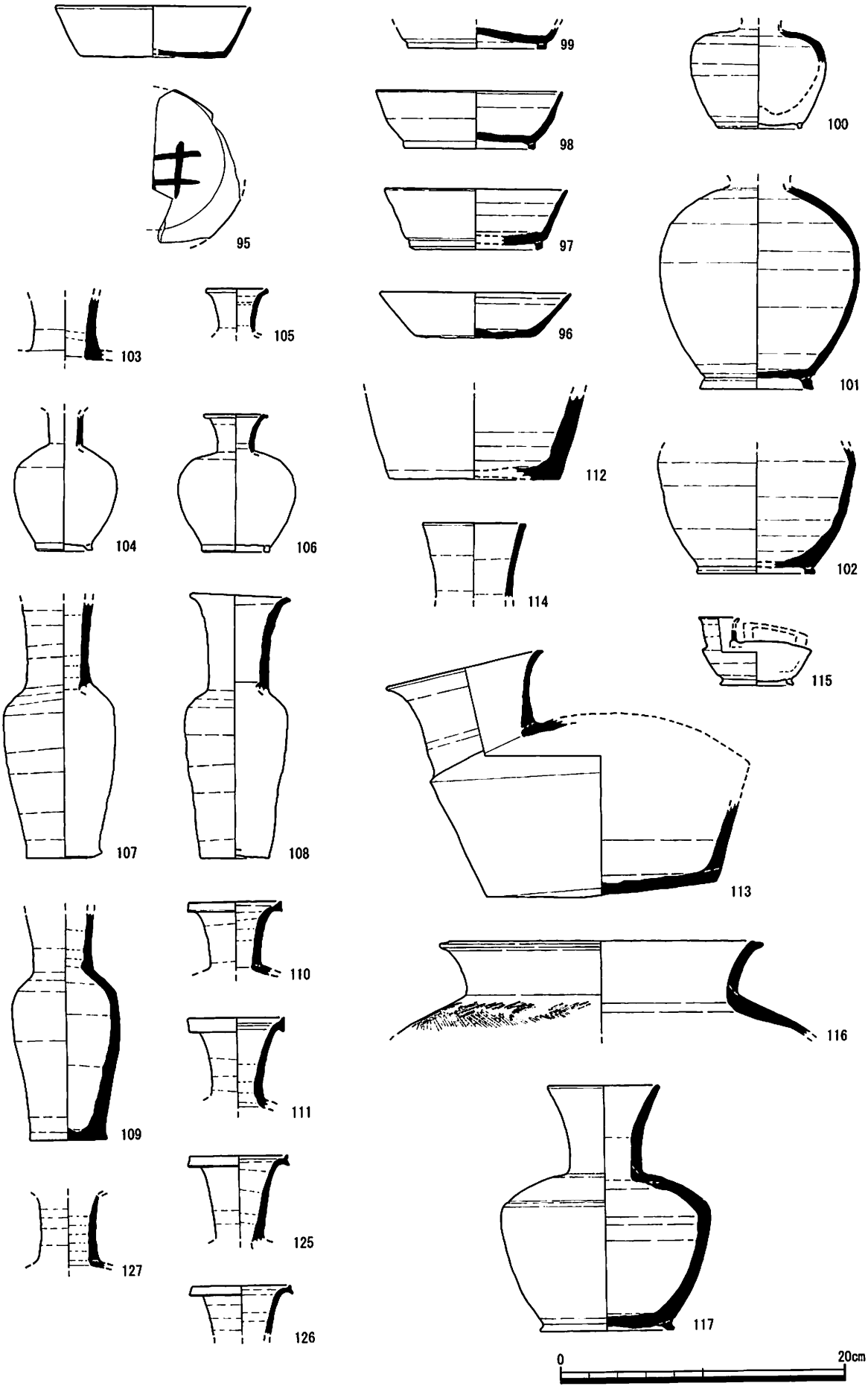
S R 4200 ③

図版第三十三



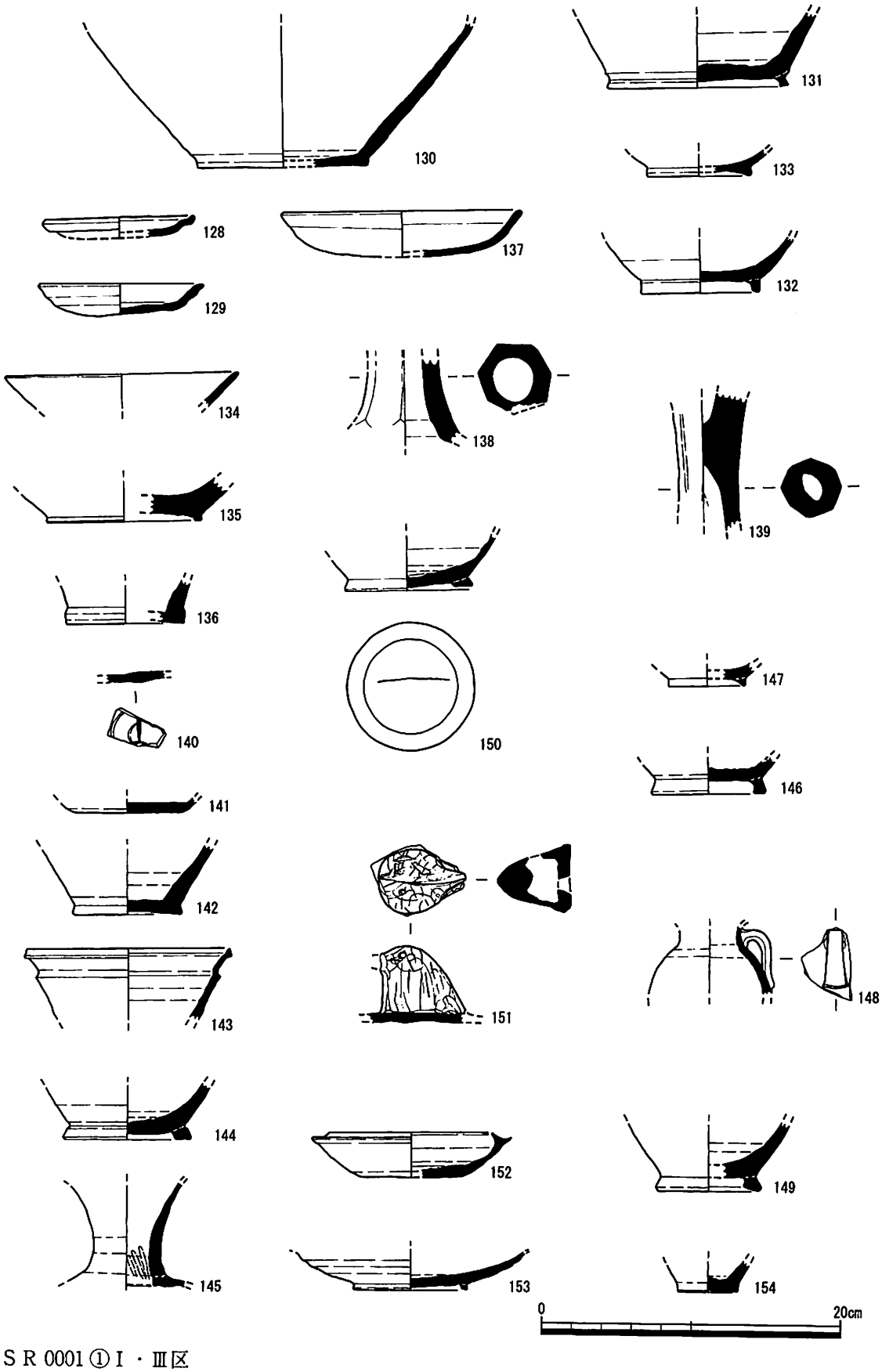
S R 4200 ④

図版第三十四



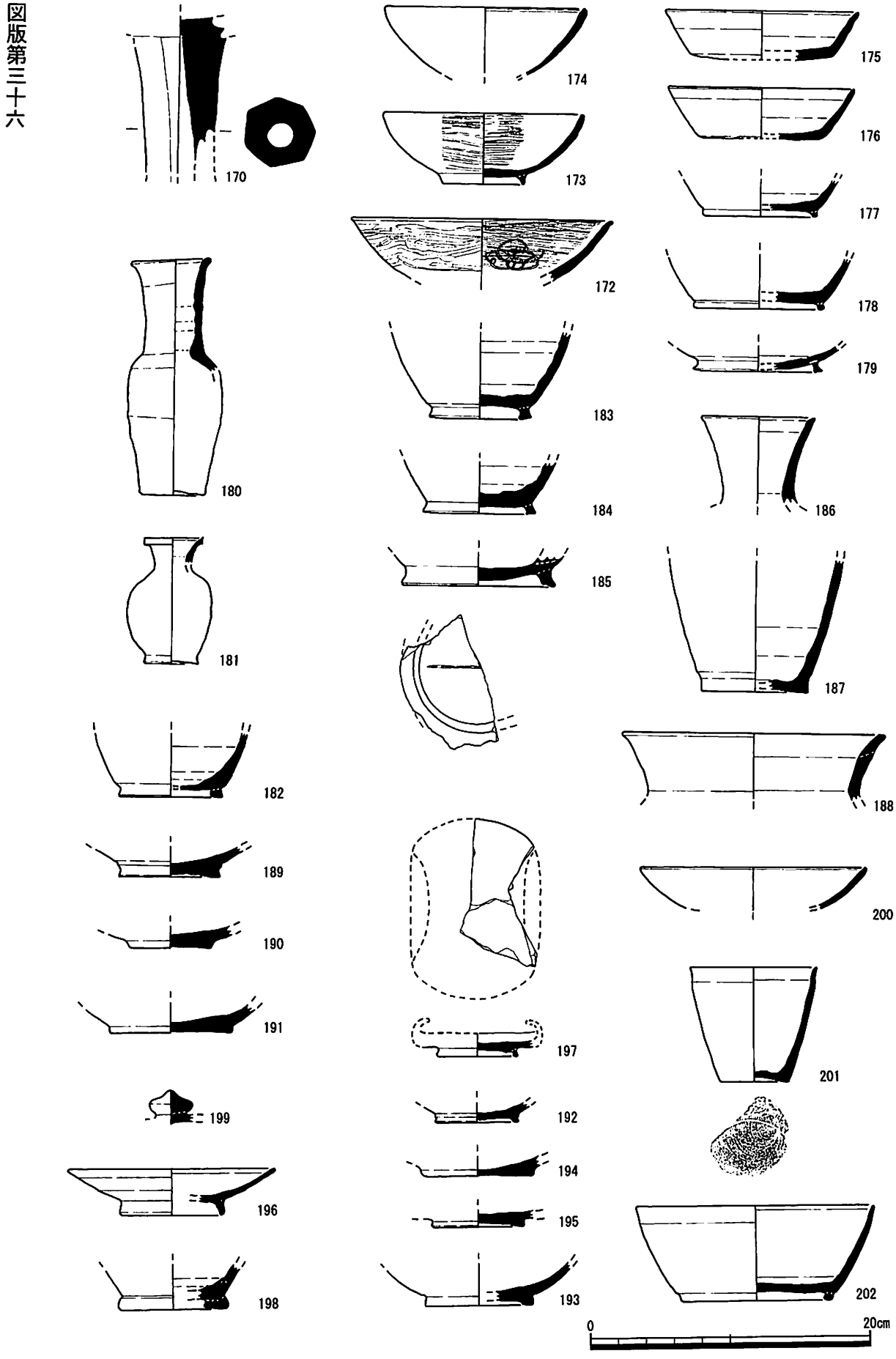
S R 4200 ⑤

図版第三十五



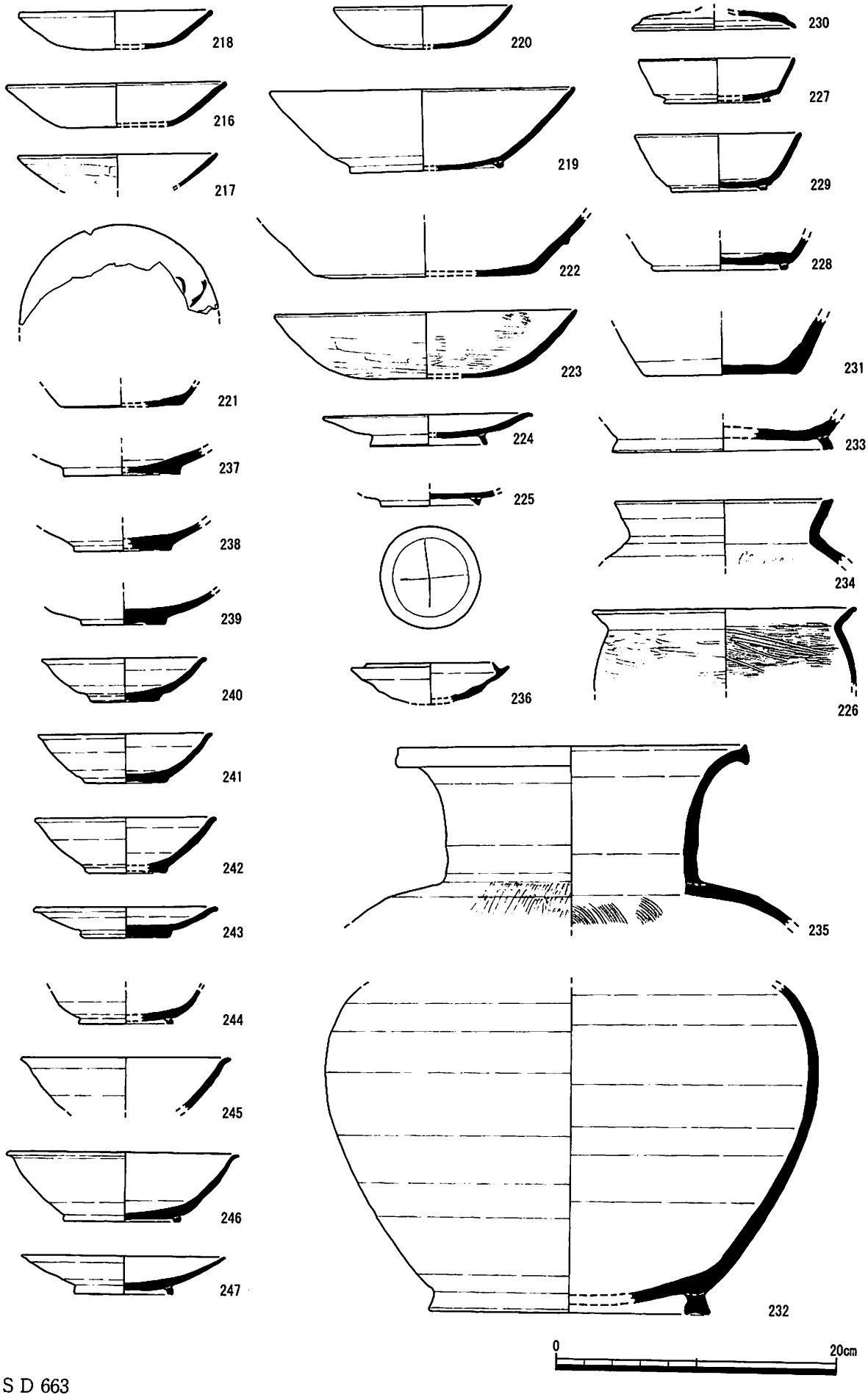
S R 0001 ① I ・ Ⅲ区

図版第三十六



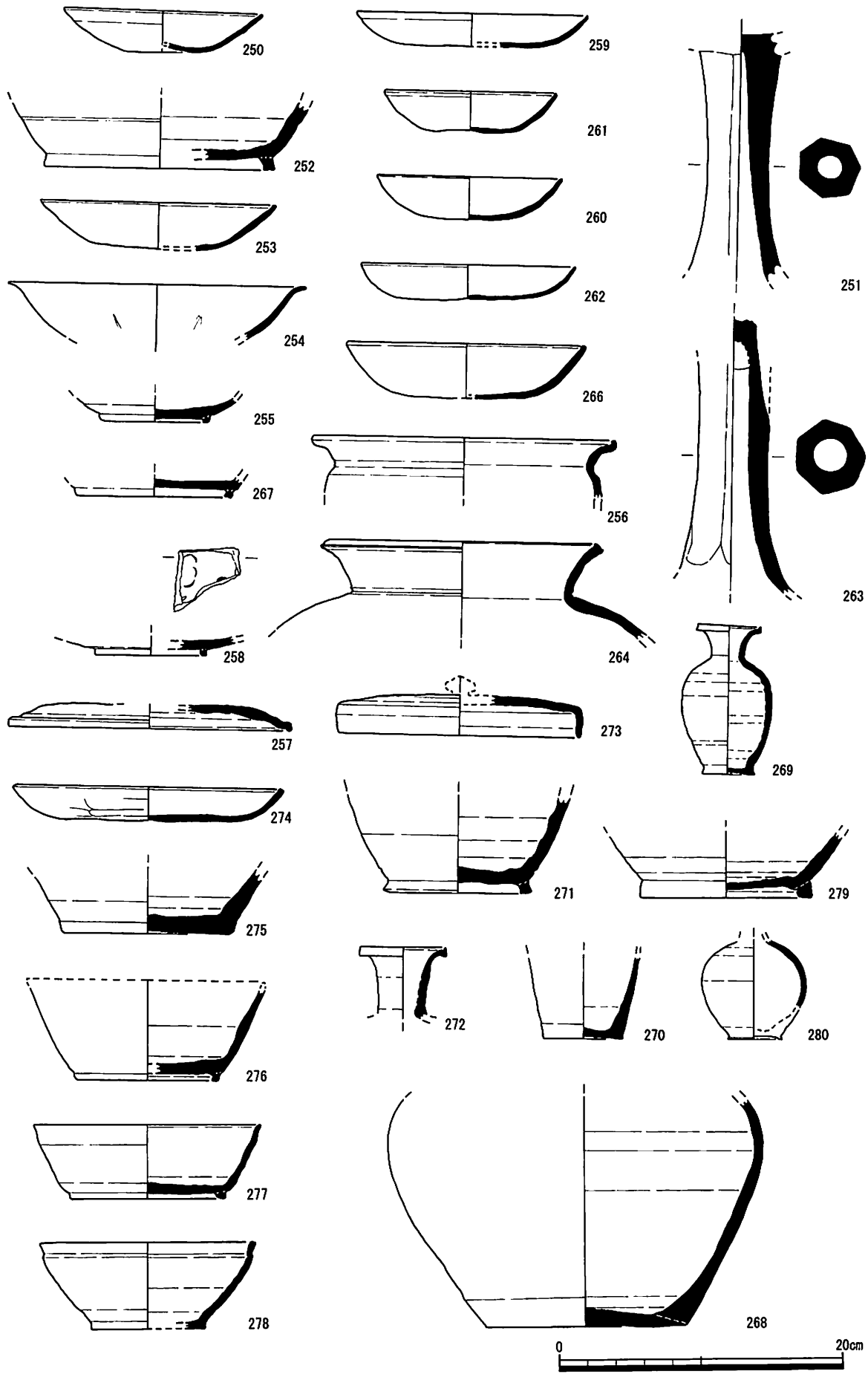
S D 655・656

図版第三十七

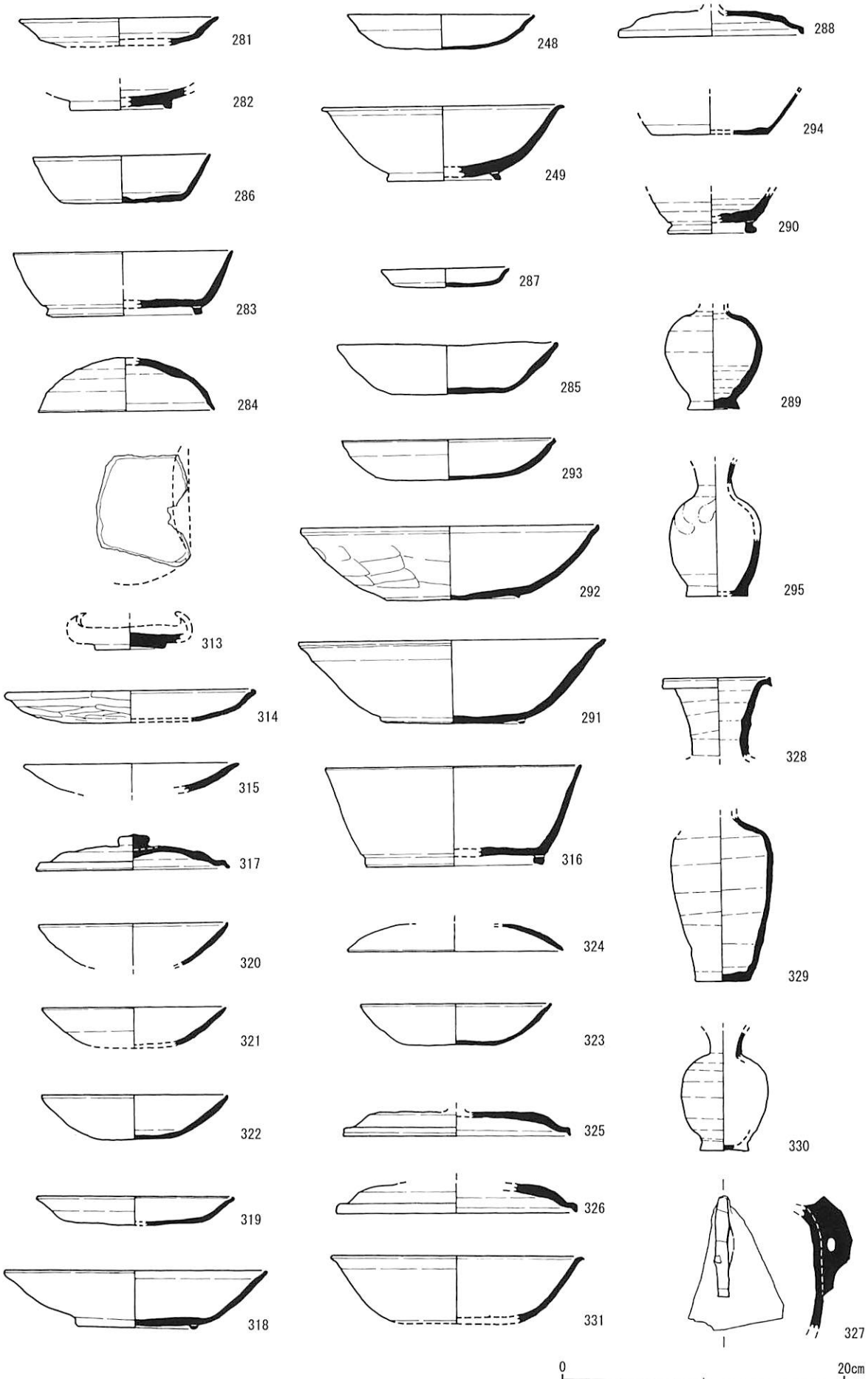


S D 663

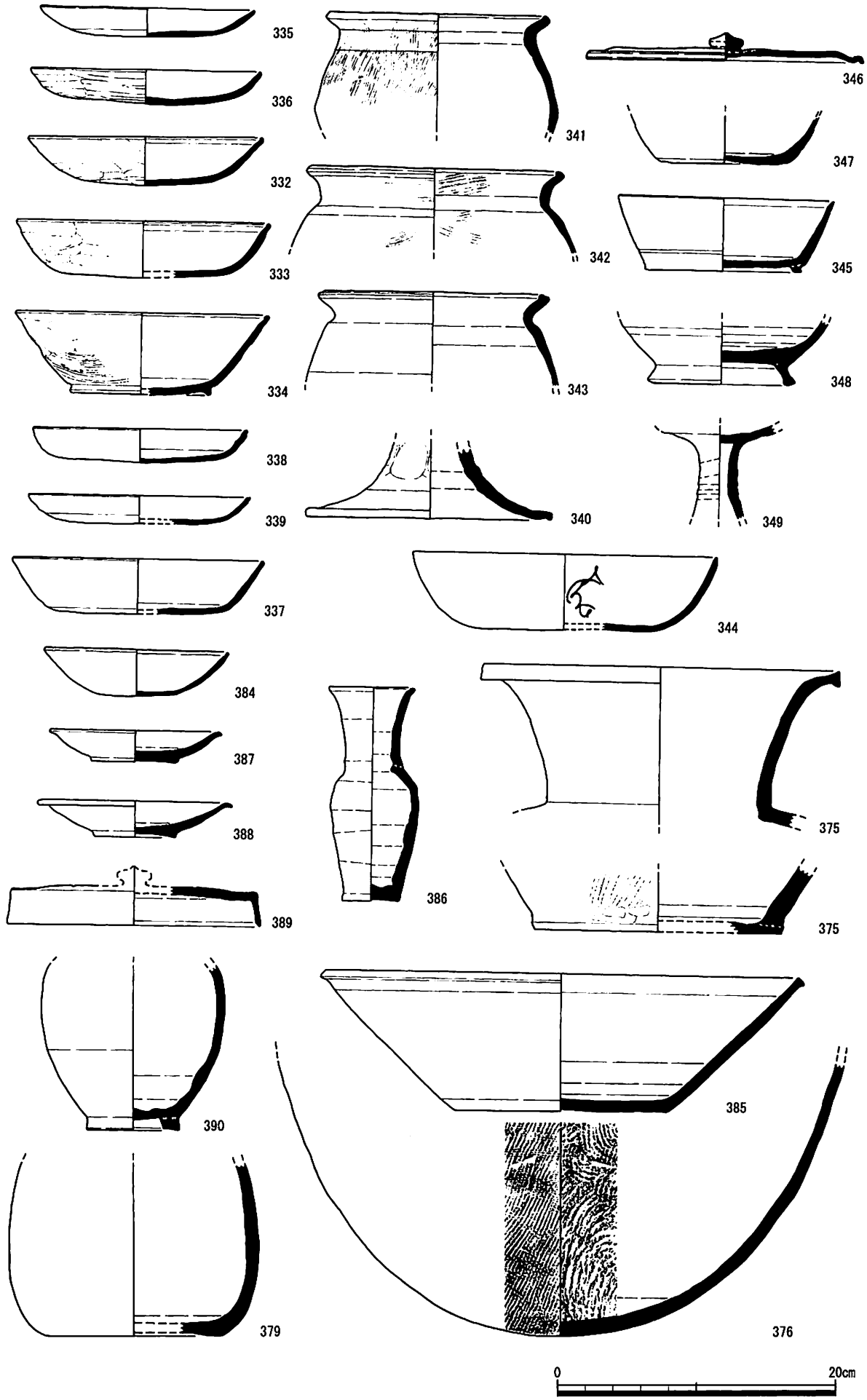
図版第三十八

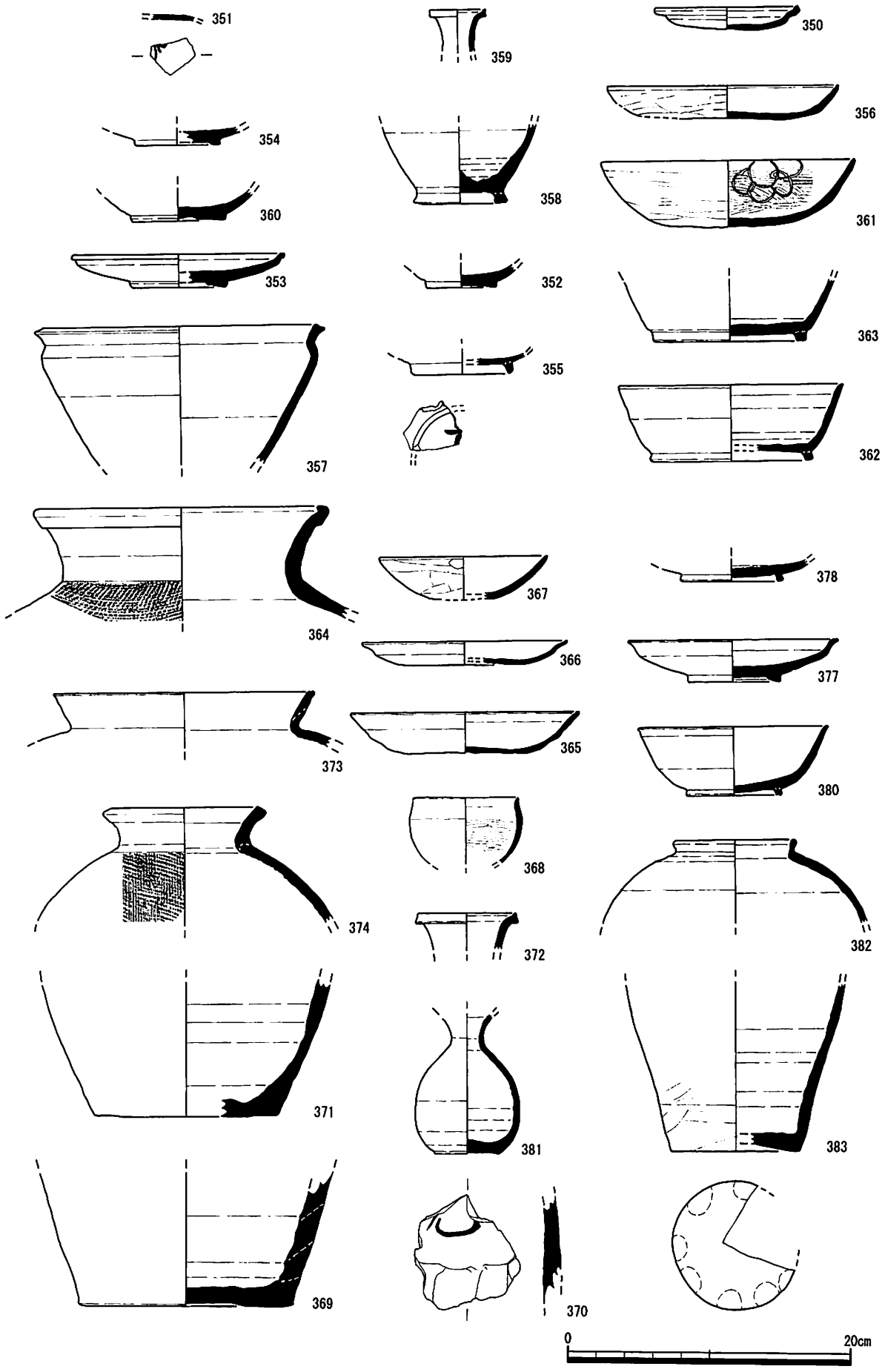

250
252
253
254
255
267
258
257
274
275
276
277
278
259
261
260
262
266
256
264
273
271
272
270
268
251
263
269
279
280
0
20cm

図版第三十九


281
282
286
283
284
313
314
315
317
320
321
322
319
318
248
249
287
285
293
292
291
316
324
323
325
326
331
288
294
290
289
295
328
329
330
327
0
20cm

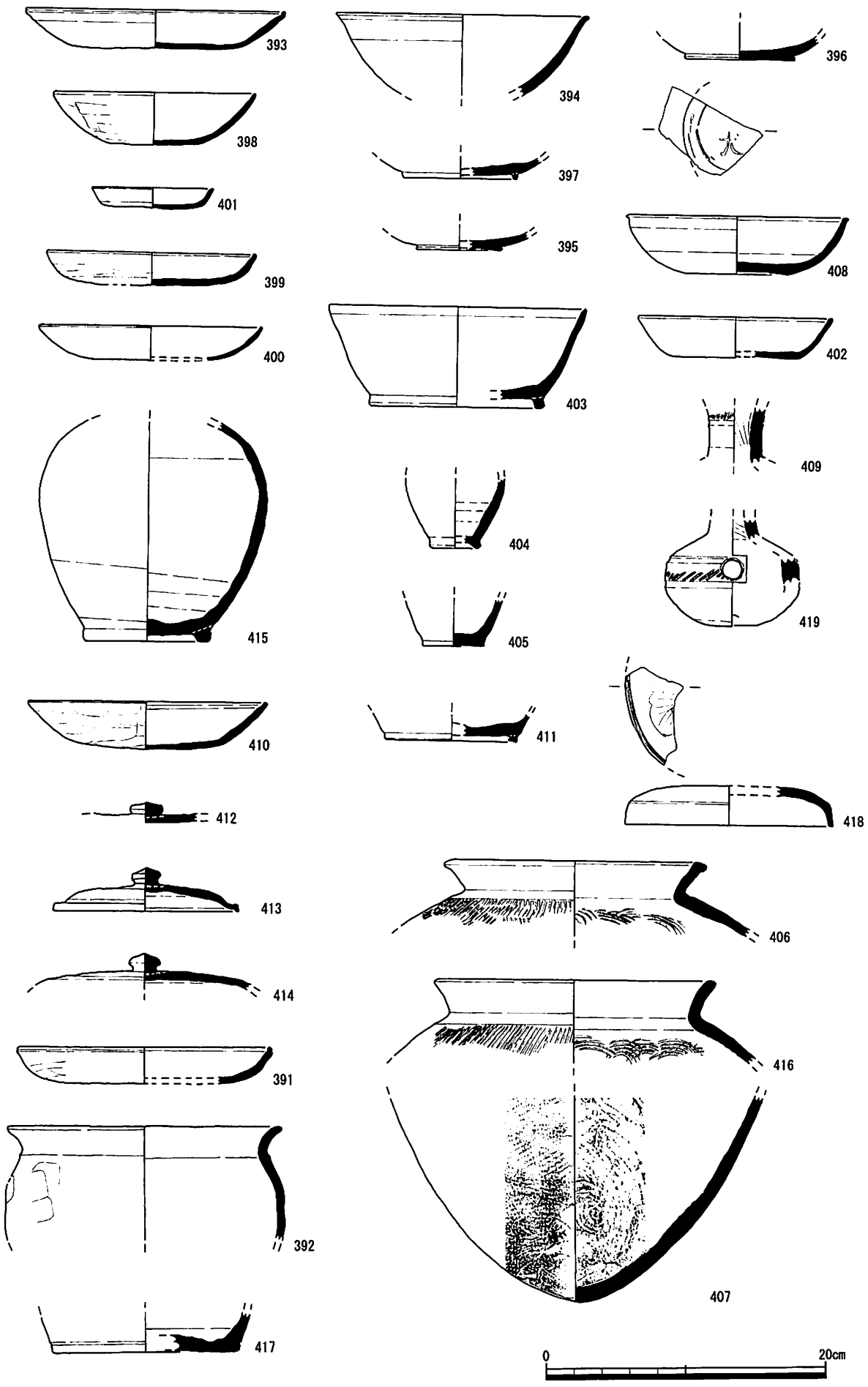
図版第四十


335
336
332
333
334
338
339
337
384
387
388
389
390
379
341
342
343
340
346
347
345
348
349
344
386
375
375
385
376
0
20cm


351
359
350
354
356
358
360
361
353
352
363
355
357
362
364
367
378
366
377
373
365
380
368
374
372
382
371
381
383
369
370
0
20cm

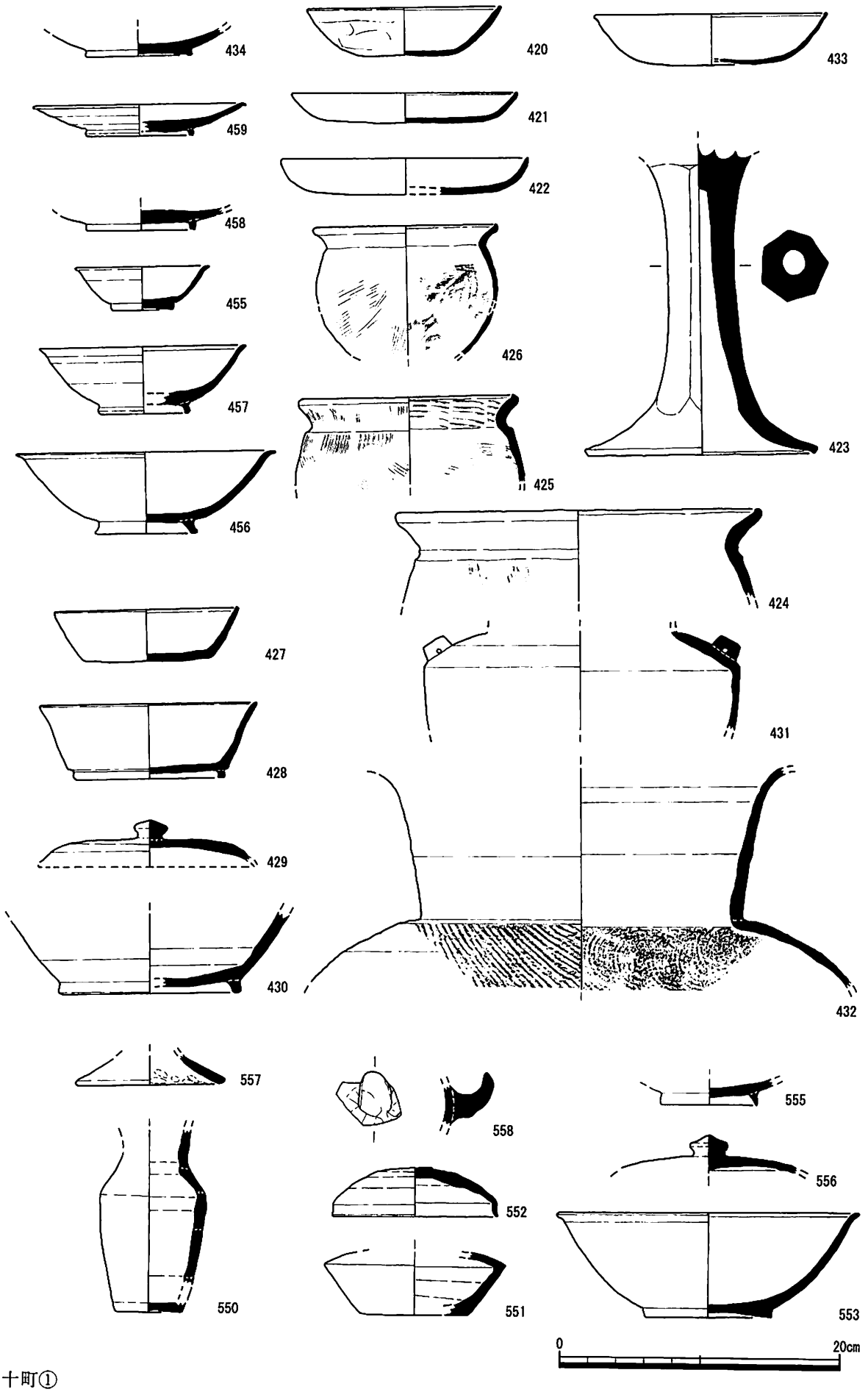
S X 820

図版第四十二


393
398
401
399
400
415
410
412
413
414
391
392
417
394
397
395
403
404
405
411
396
408
402
409
419
418
406
416
407
0
20cm

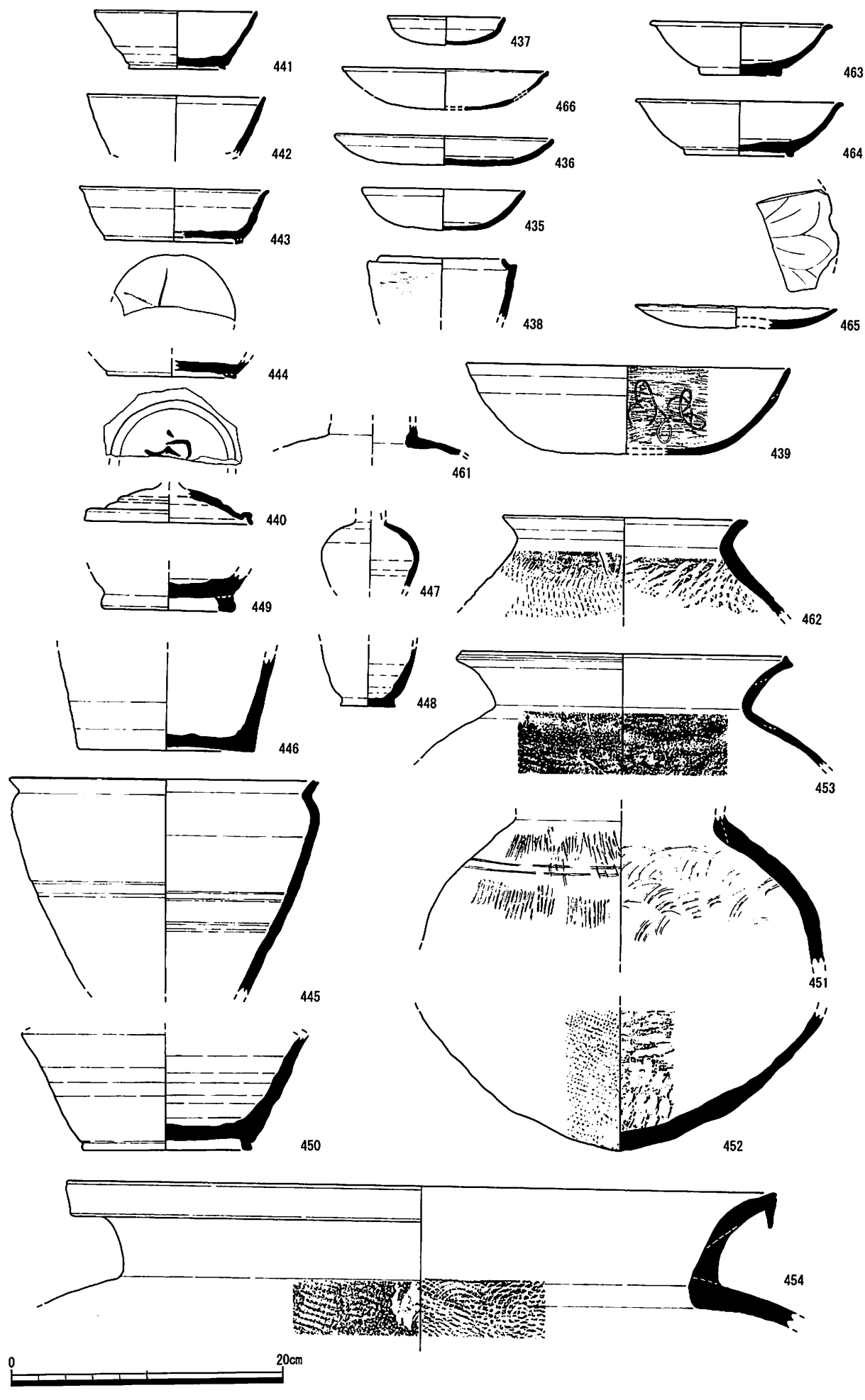
九町

図版第四十三


434
420
433
459
421
422
458
455
426
423
457
425
456
424
427
431
428
429
430
432
557
558
555
556
552
550
551
553
0
20cm

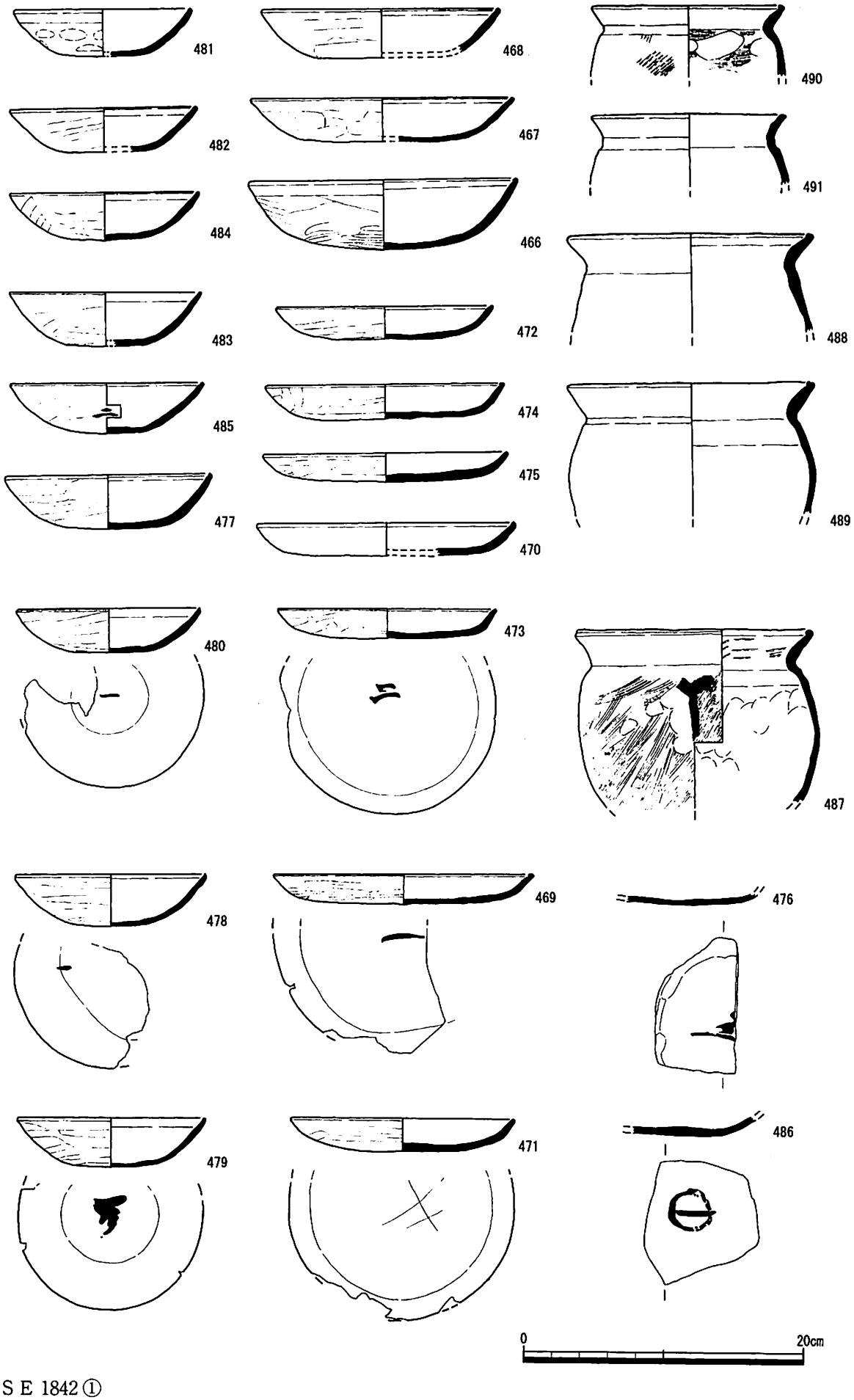
十町①

図版第四十四


441
442
443
444
440
449
446
445
450
437
466
436
435
438
461
447
448
463
464
465
439
462
453
451
452
454
0
20cm

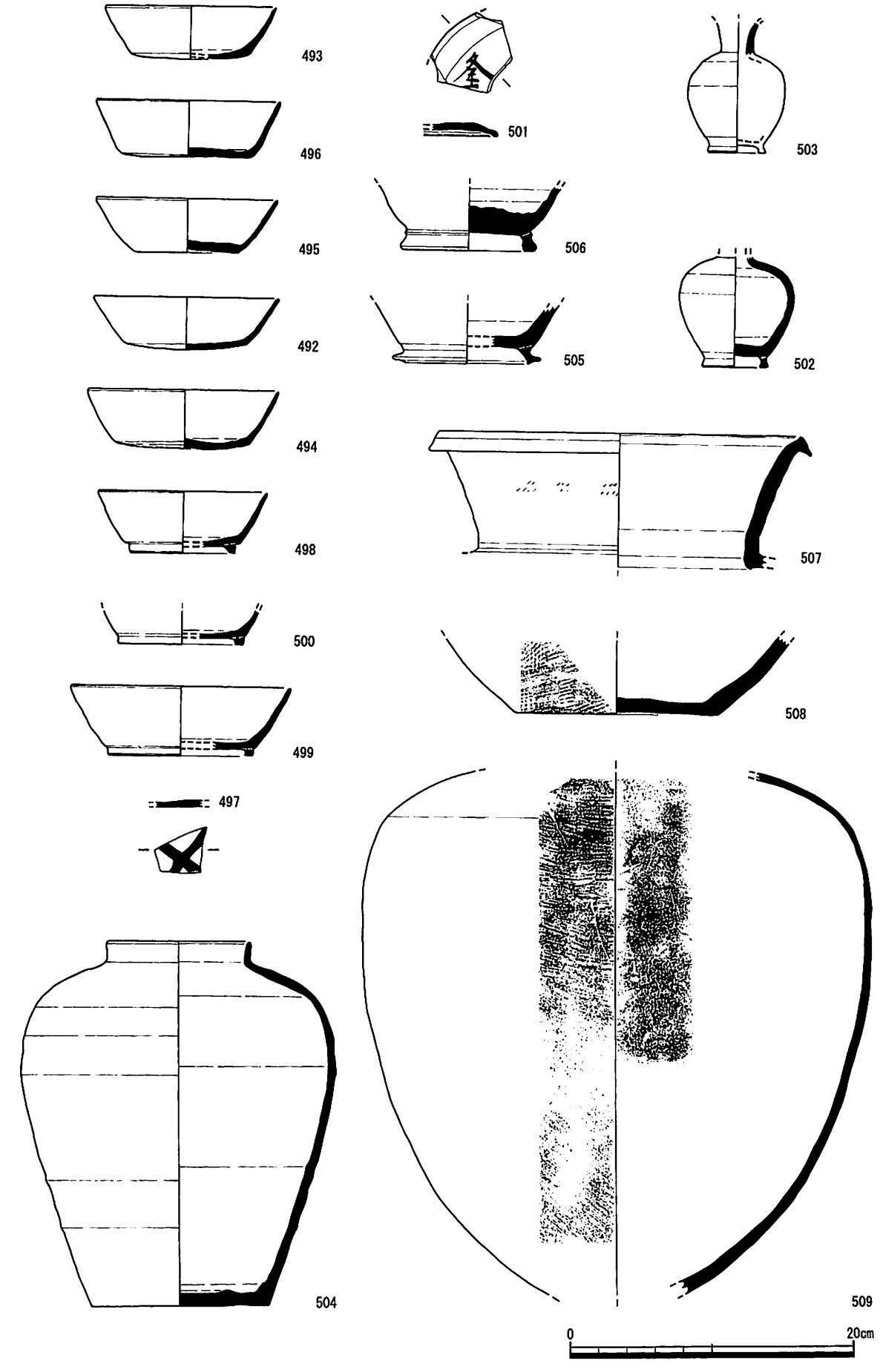
十町②

図版第四十五



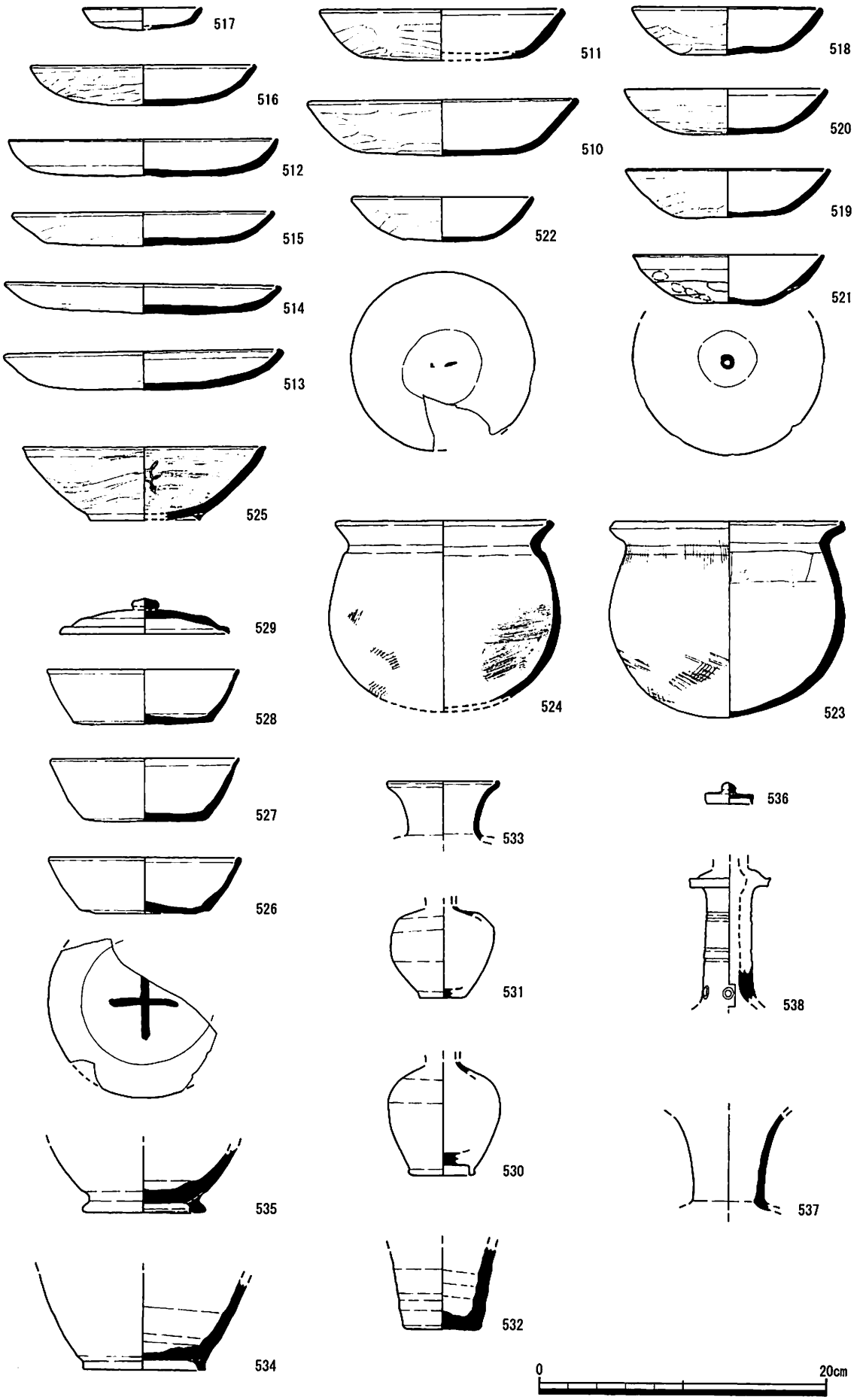
S E 1842 ①

図版第四十六



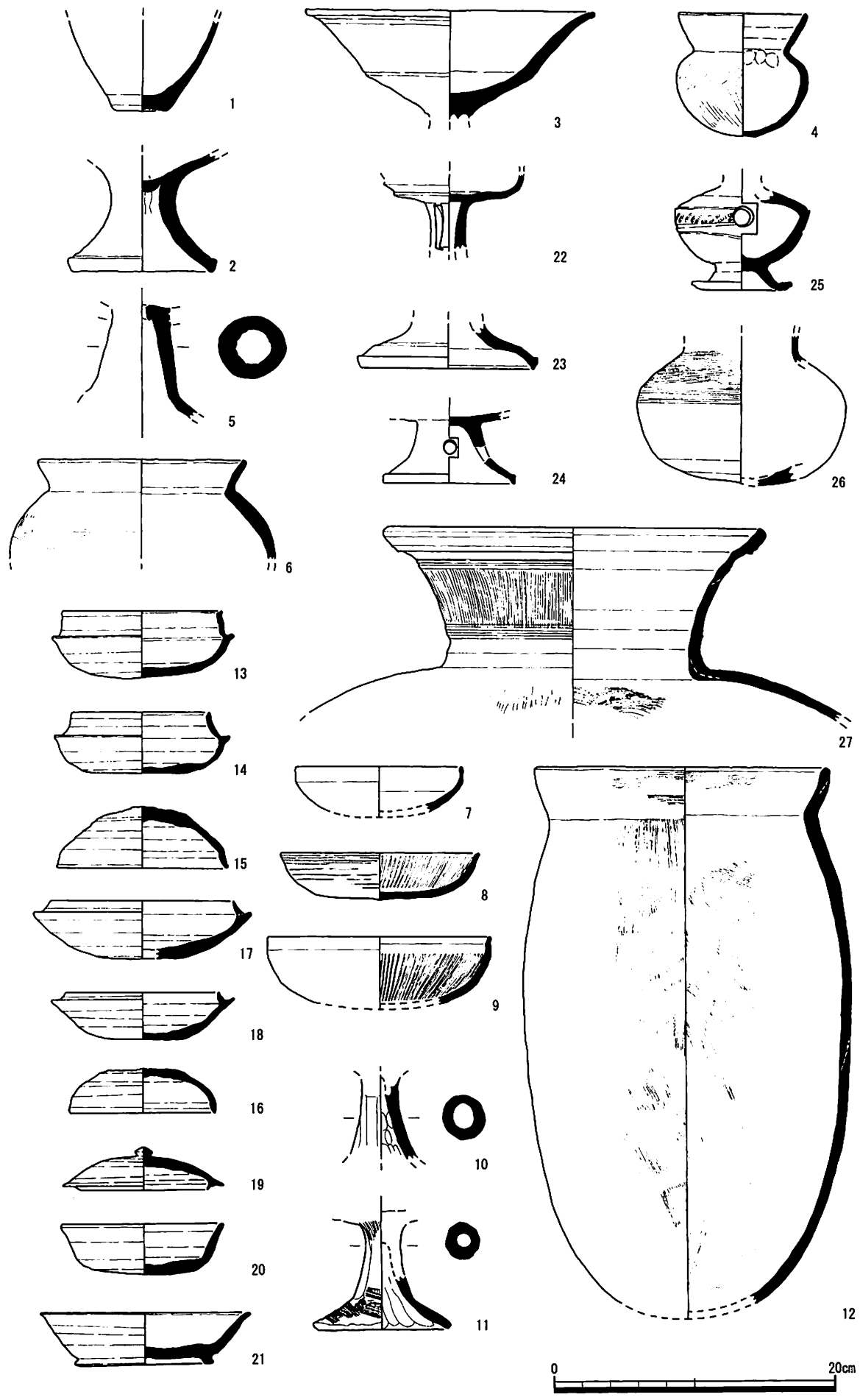
S E 1842 ②

図版第四十七



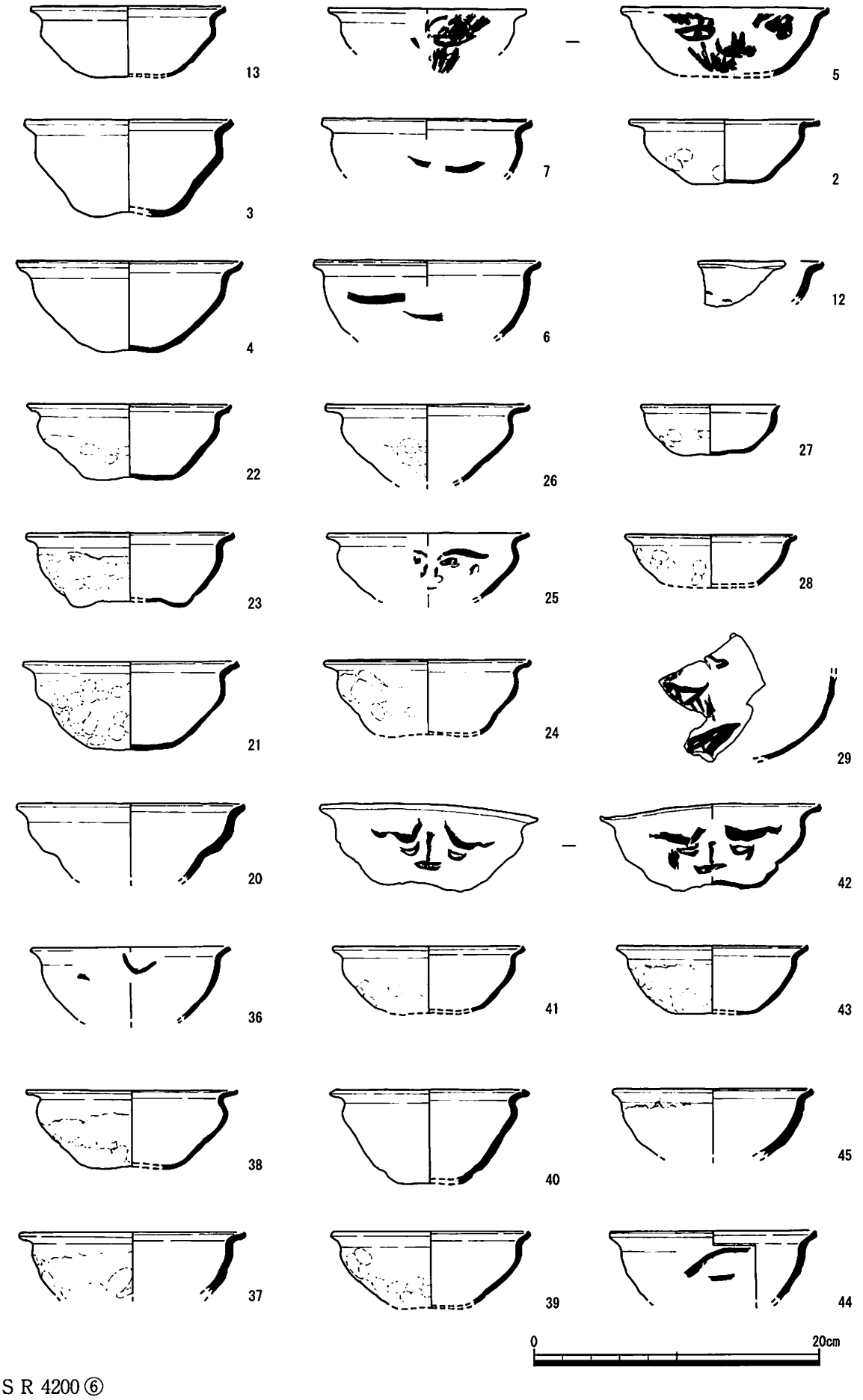
S E 1842 ③

図版第四十八


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0
20cm

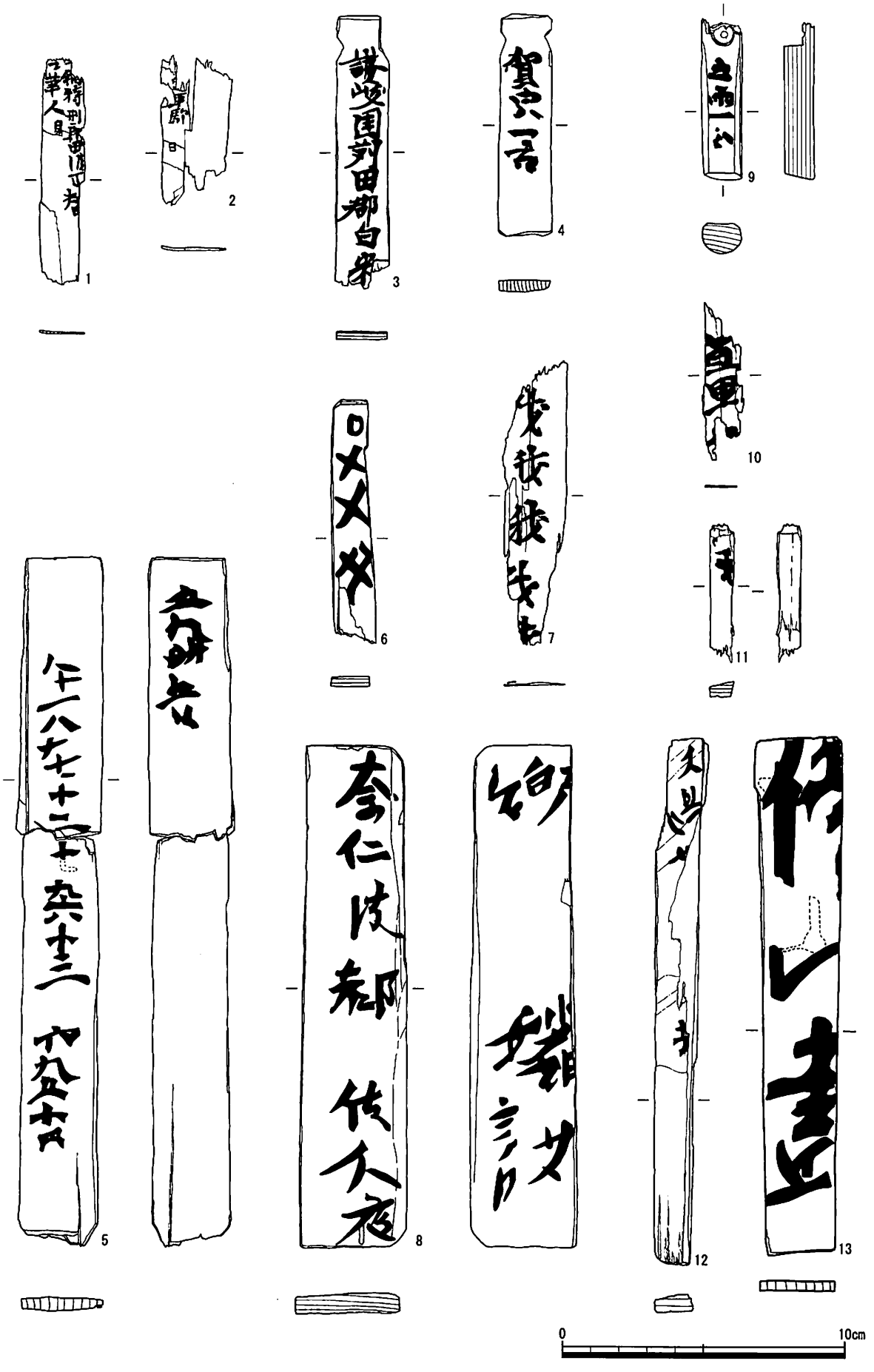
旧河川

図版第四十九



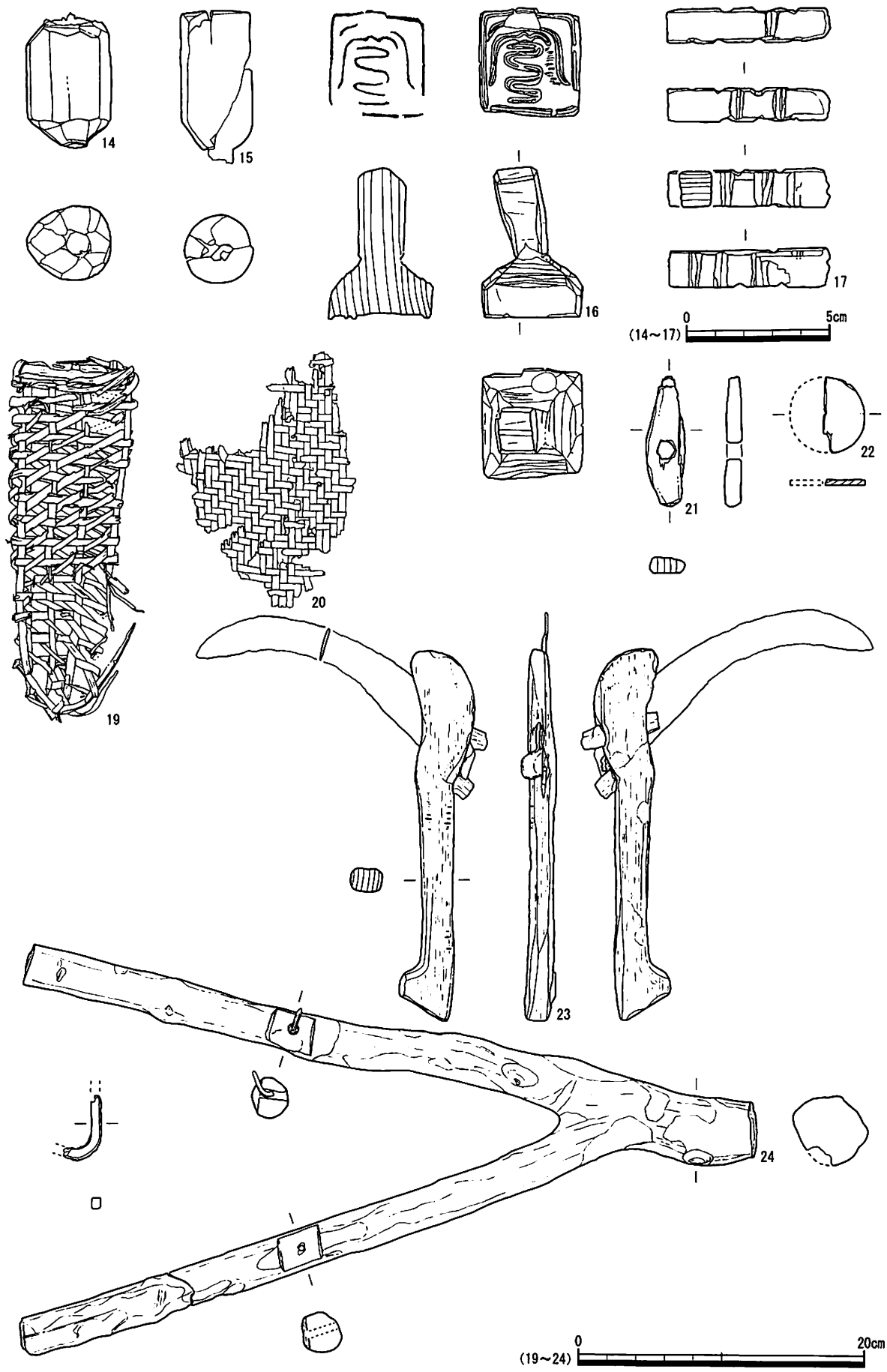
S R 4200 ⑥

図版第五十



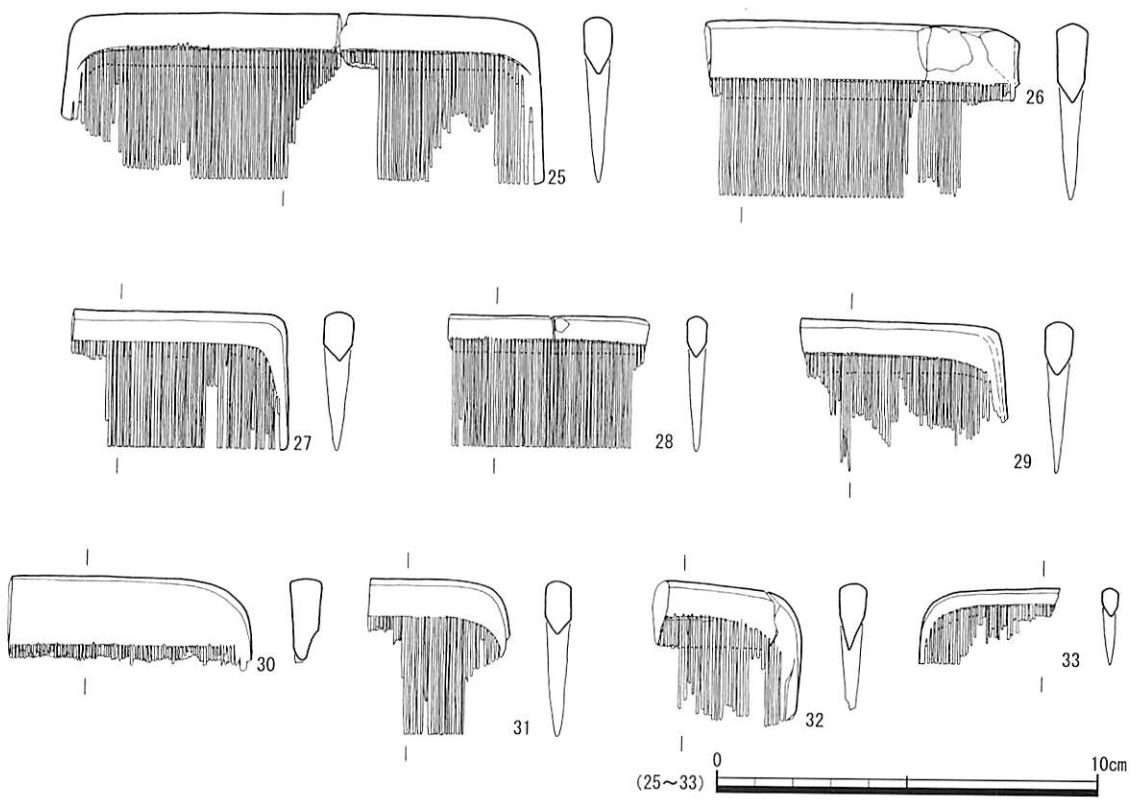
木器 1

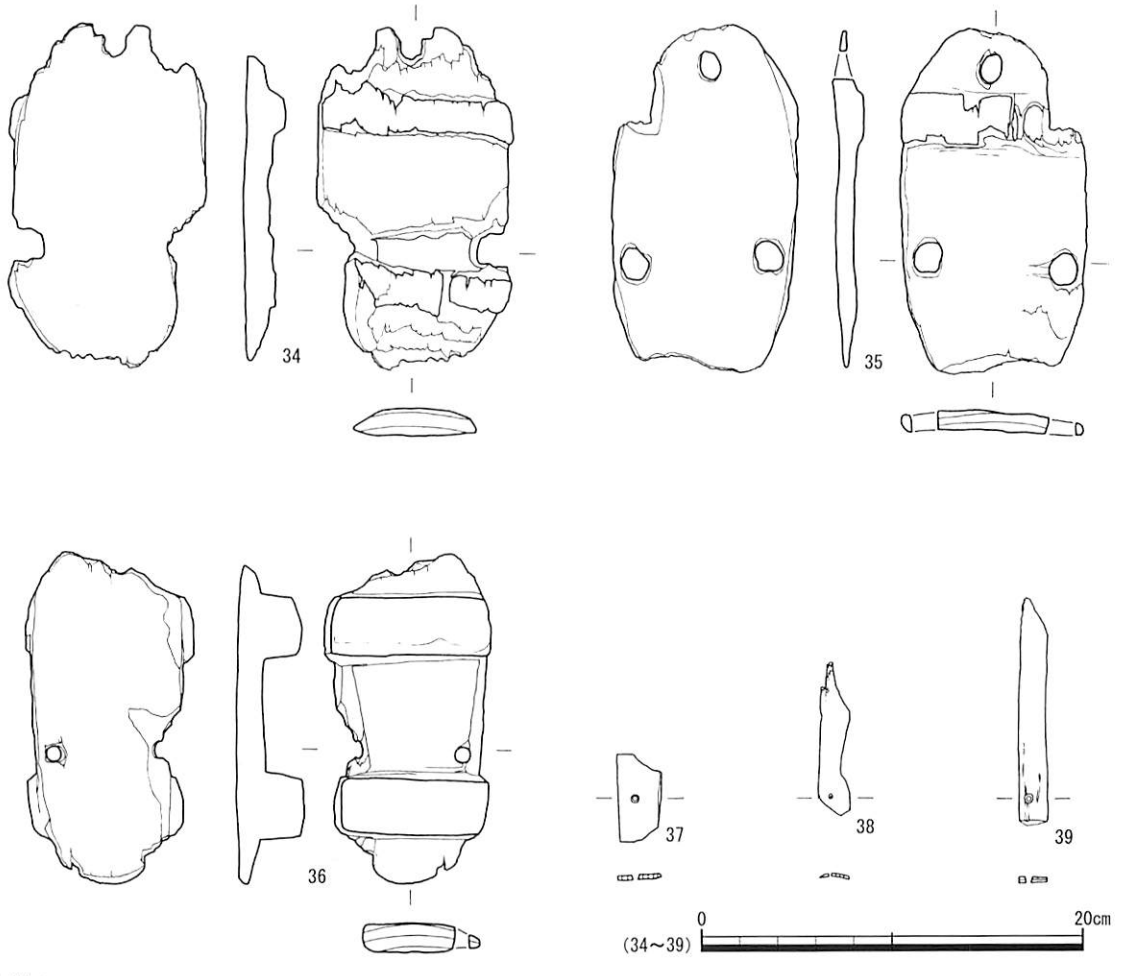
図版第五十一



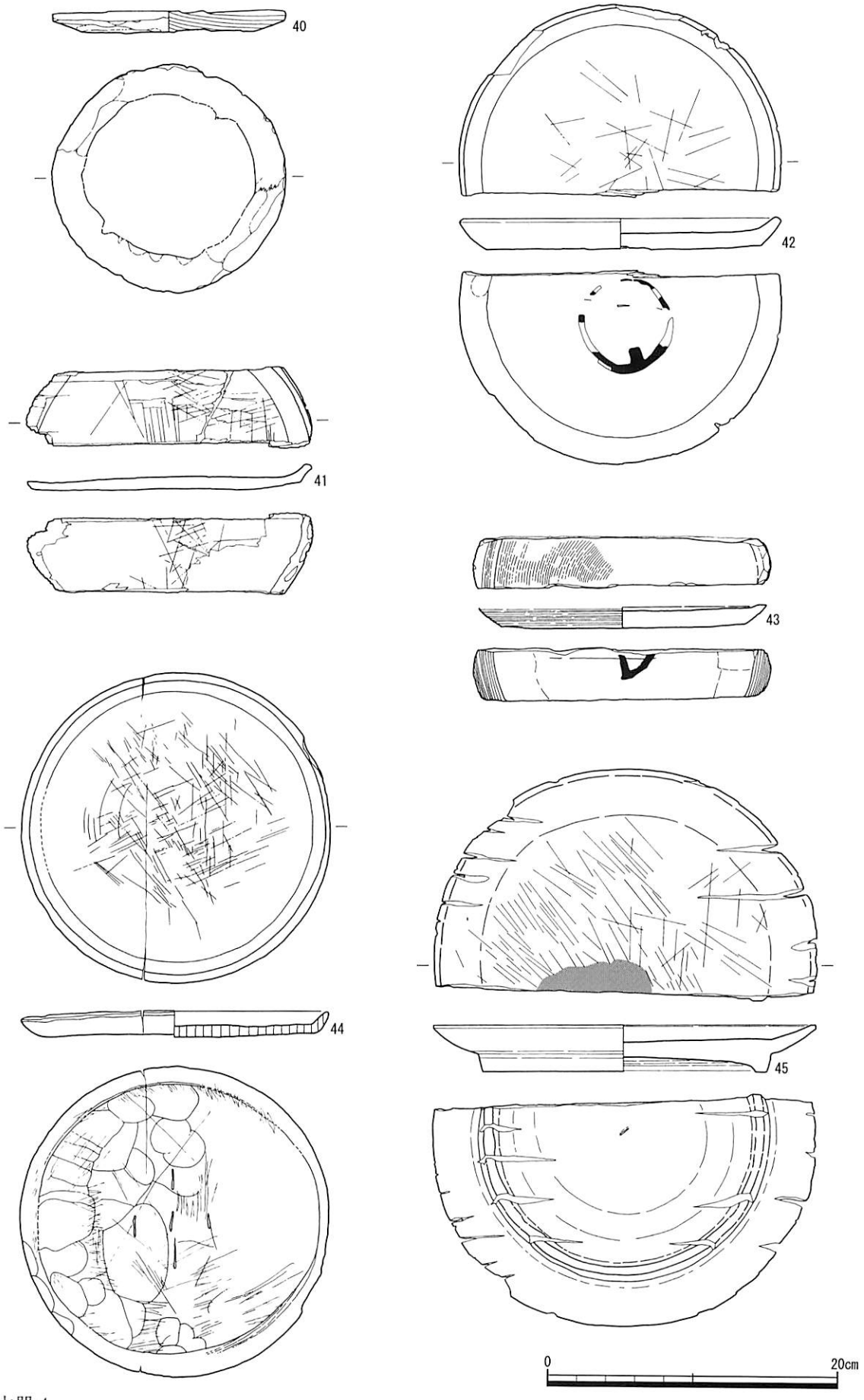
木器２

図版第五十二



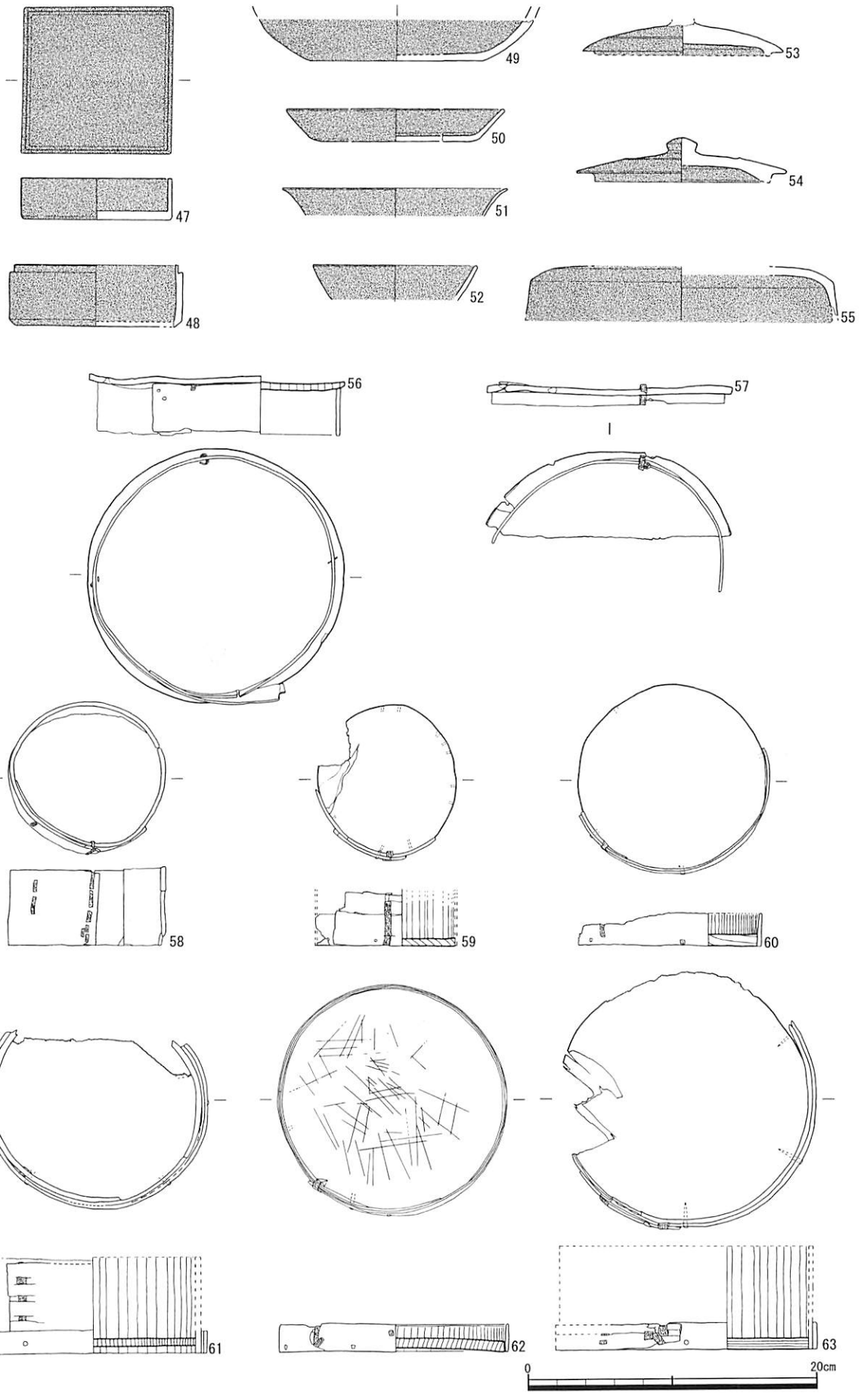


木器３



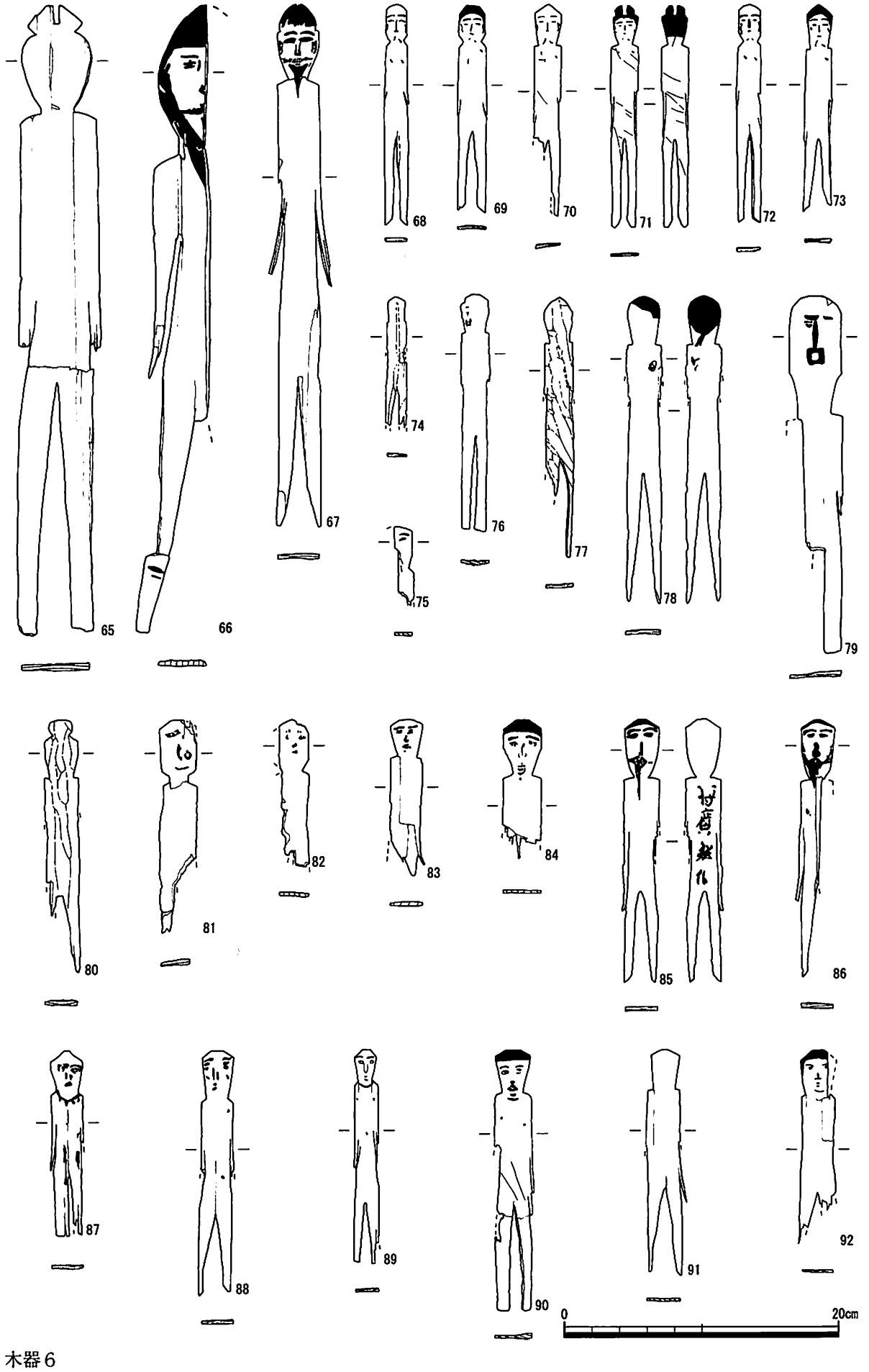
木器４

図版第五十四



木器５

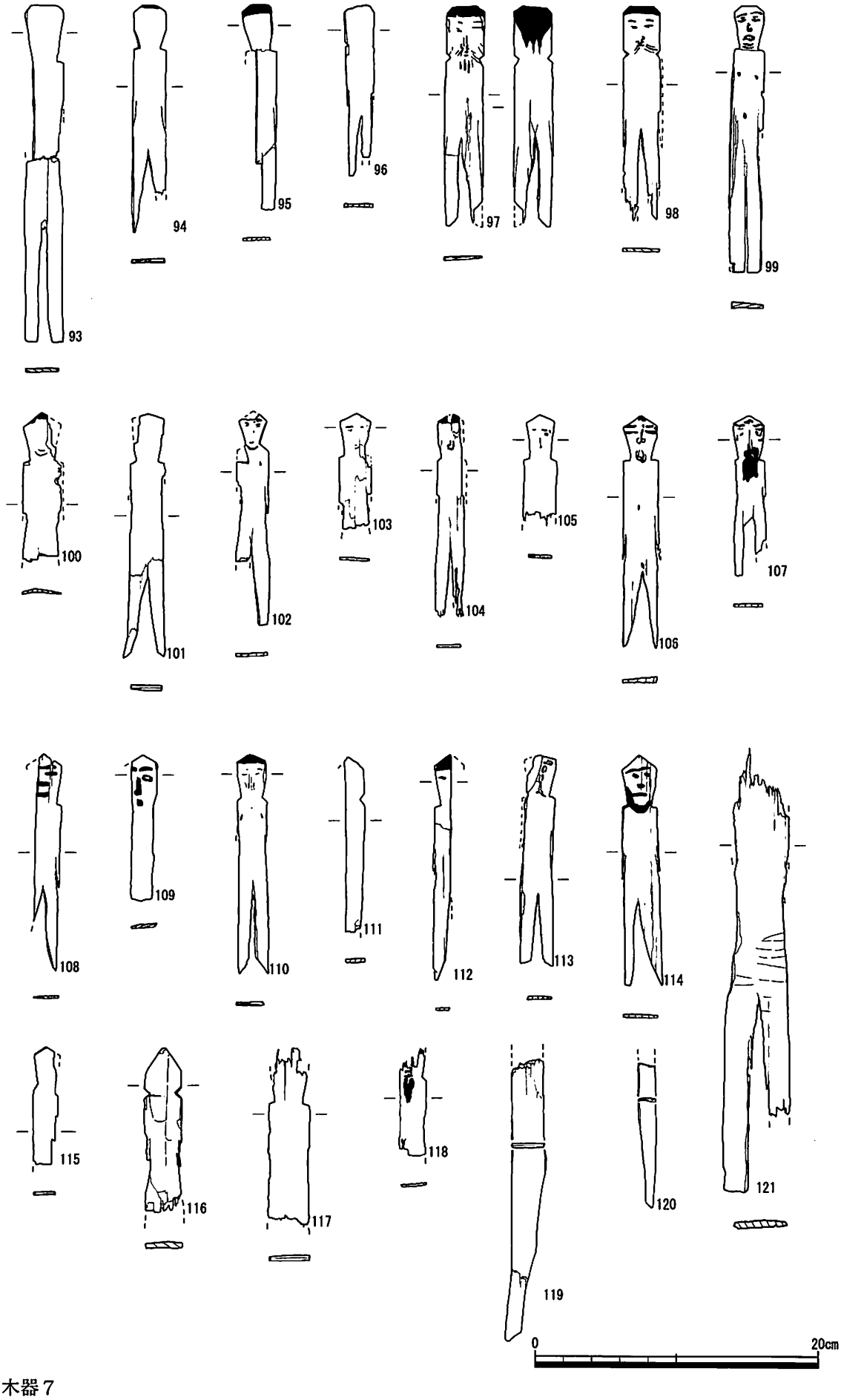
図版第五十五


65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
0
20cm

木器6

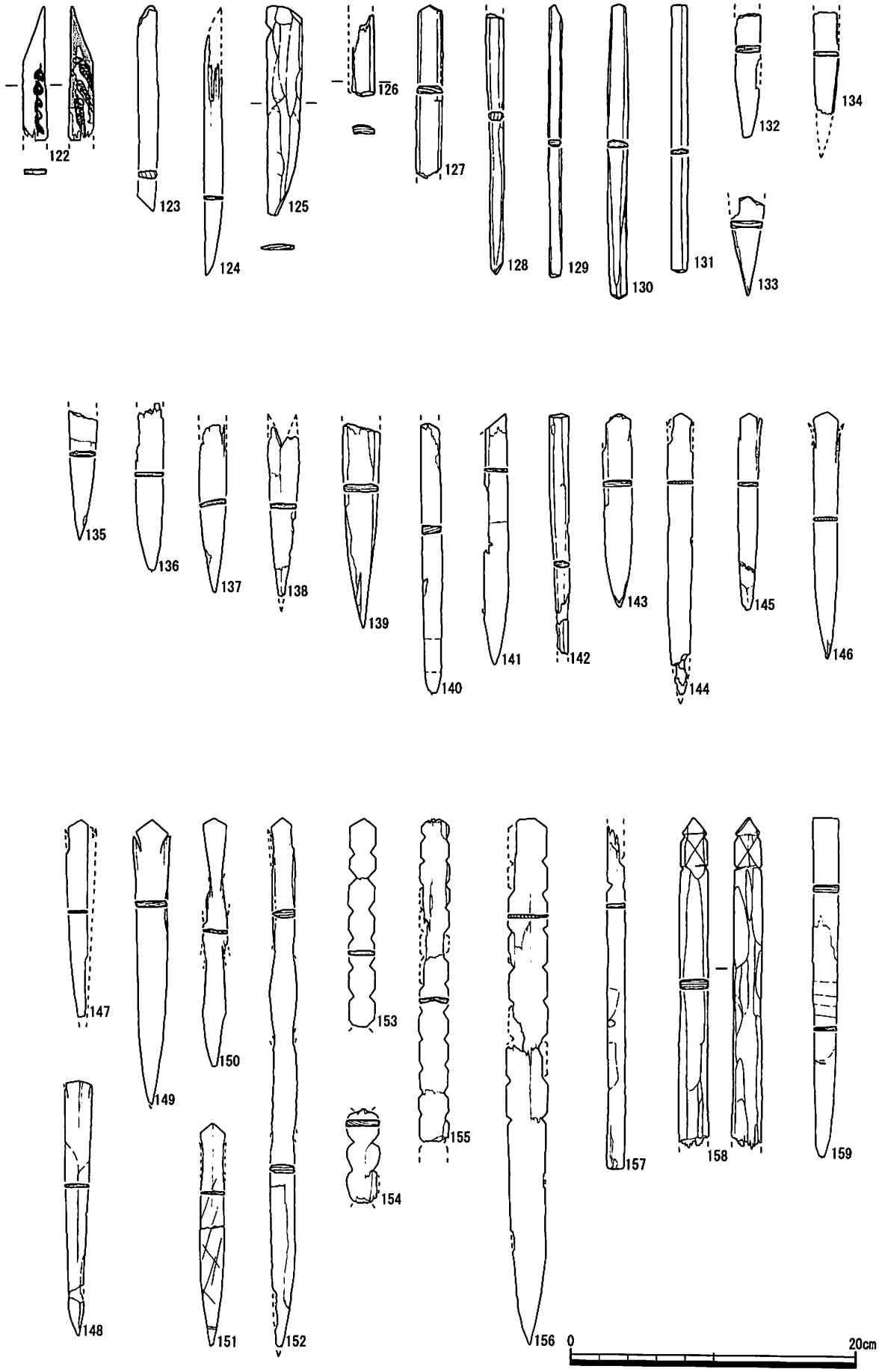
PL. LVI

図版第五十六



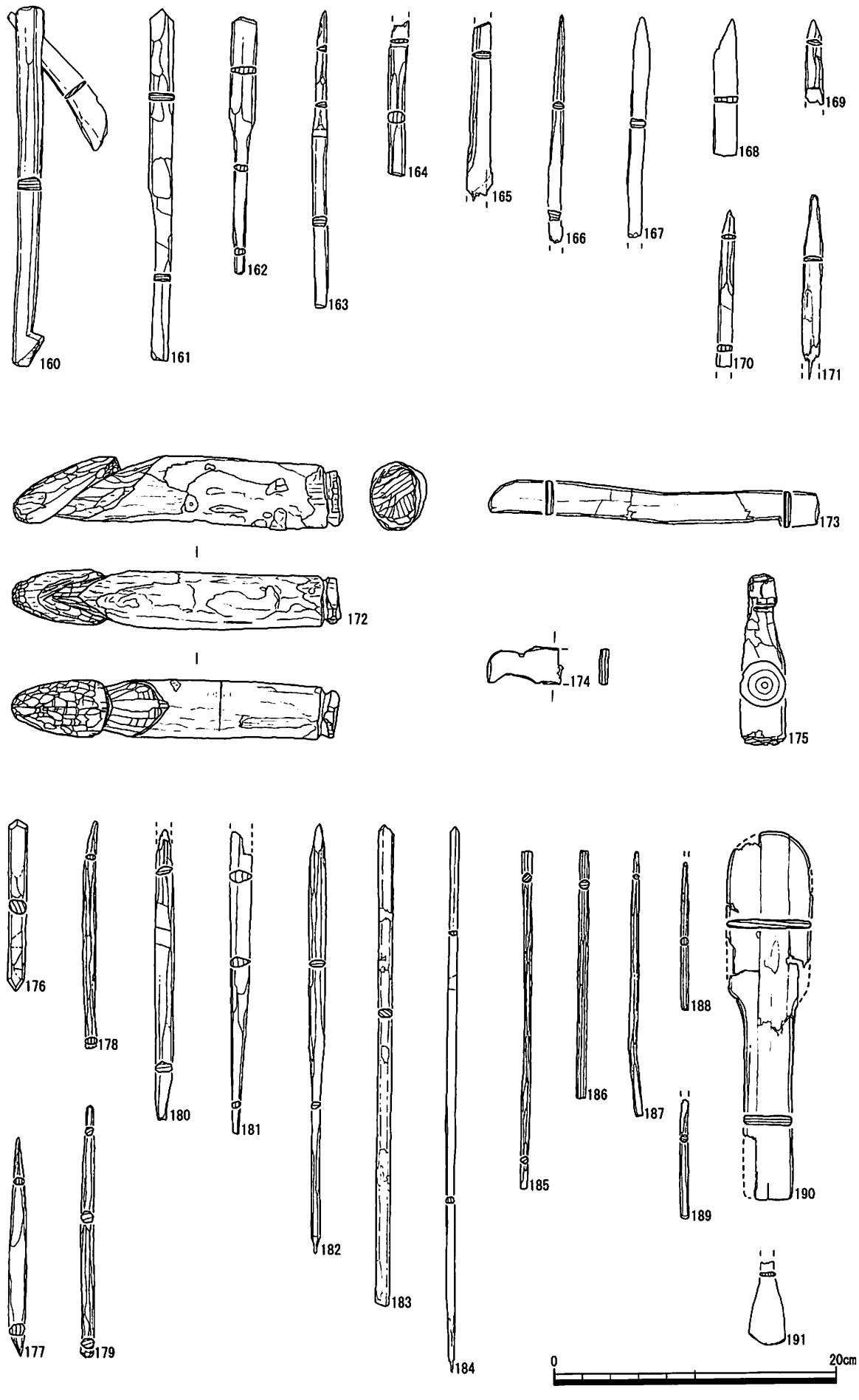
木器７

図版第五十七


122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
0
20cm

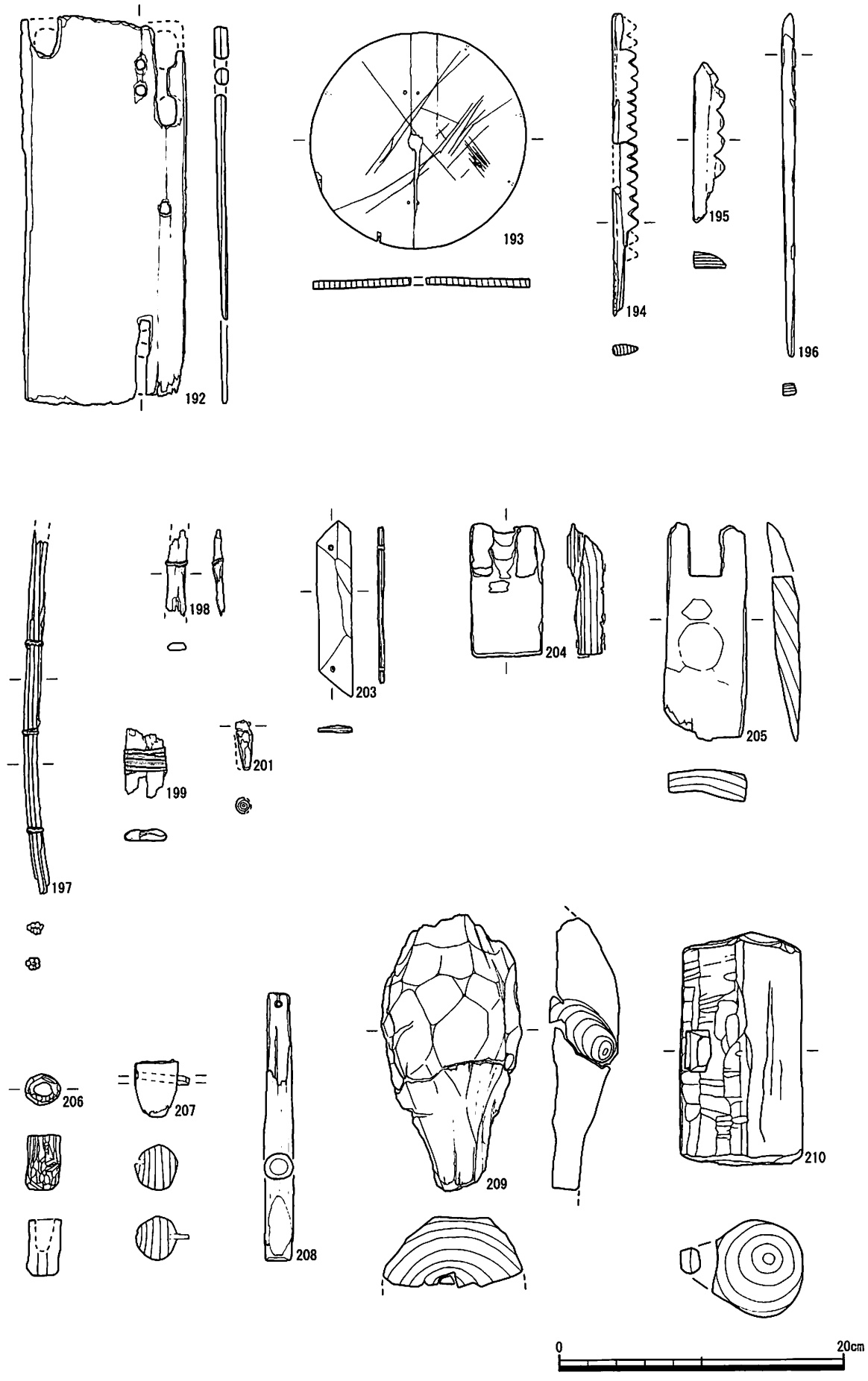
木器８

図版第五十八

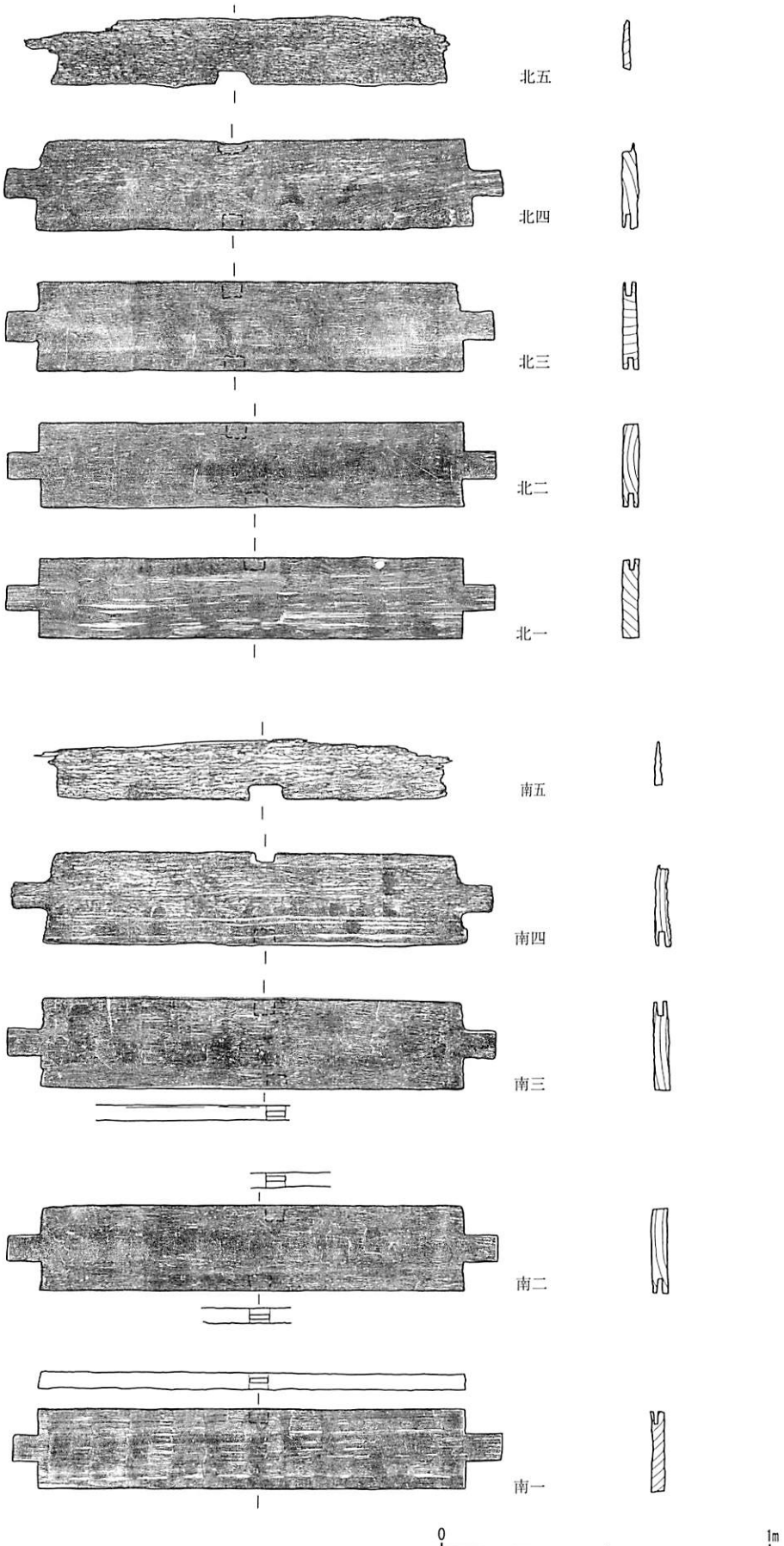

160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
0
20cm

木器9

図版第五十九

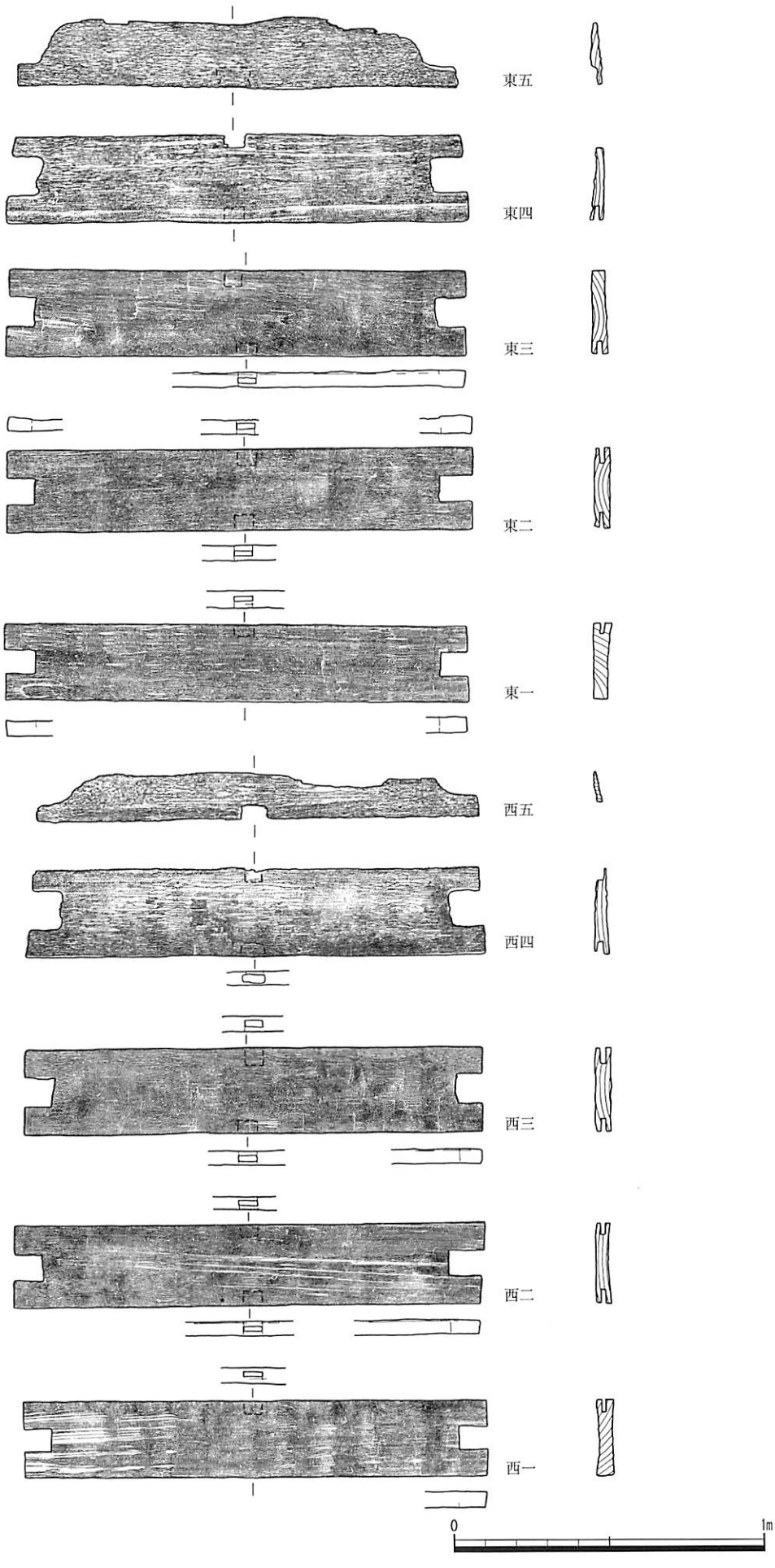

192
193
194
195
196
197
198
199
201
203
204
205
206
207
208
209
210
0
20cm

図版第六十



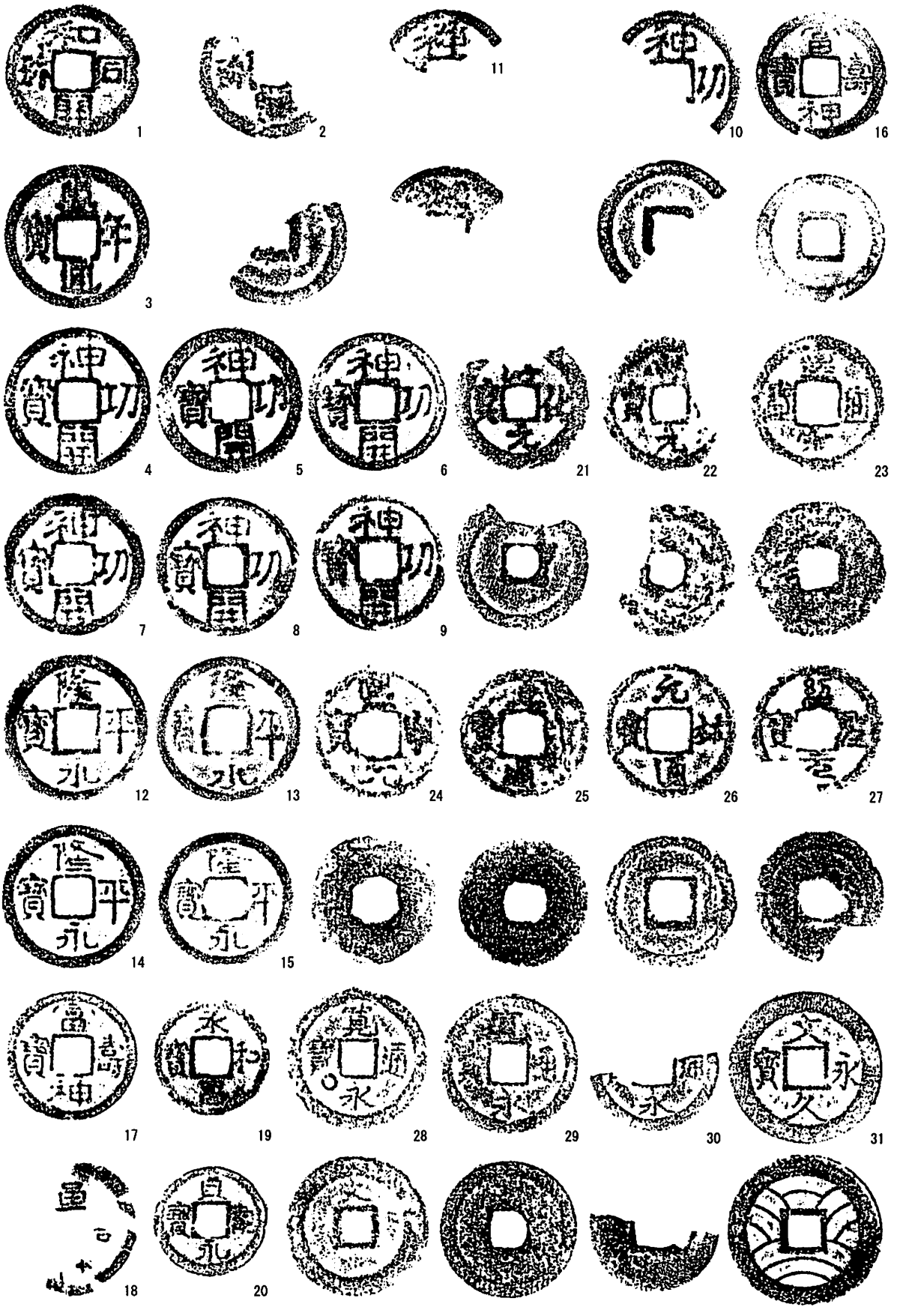
木器 11　井戸枠

図版第六十一

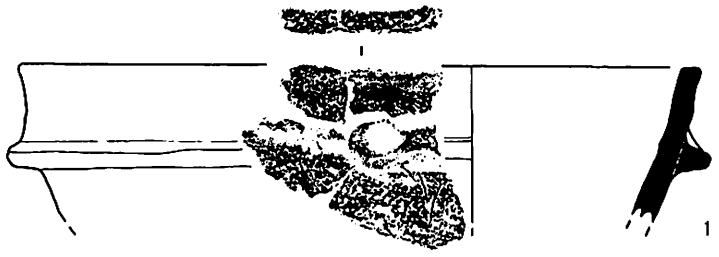


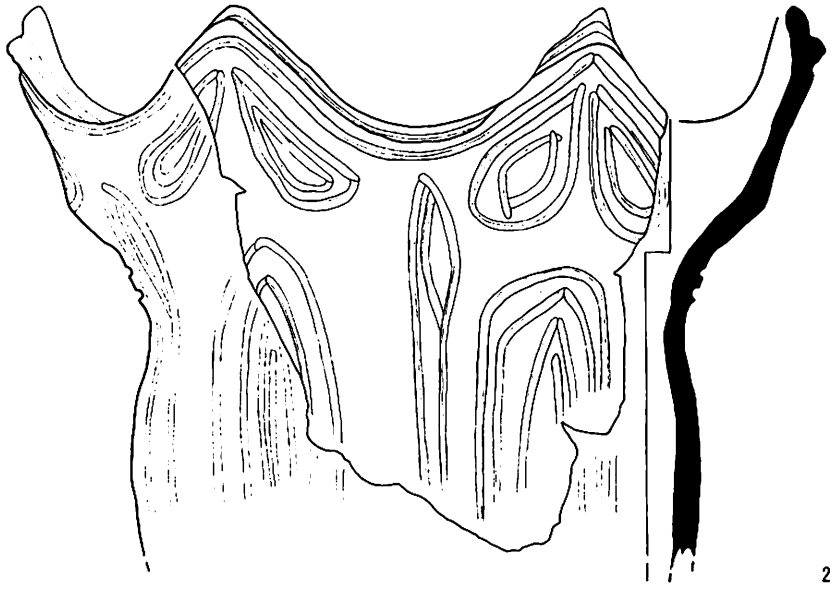
木器 12　井戸枠

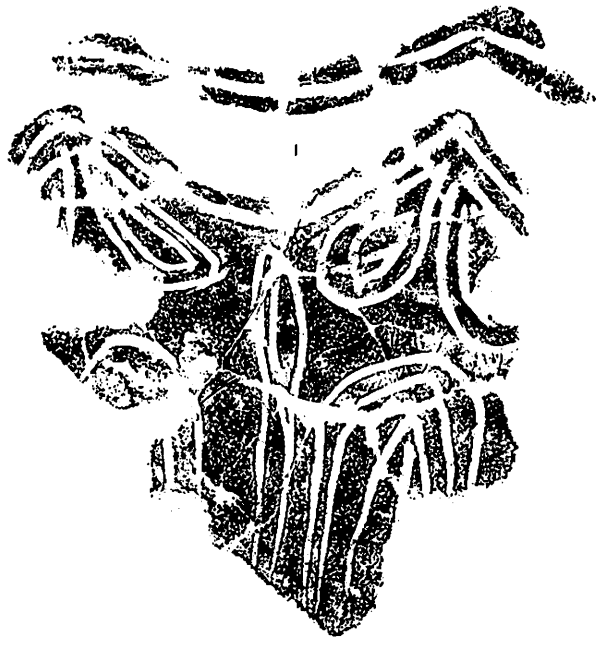
図版第六十二

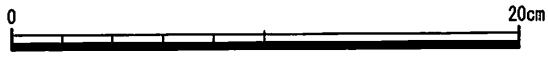


古銭





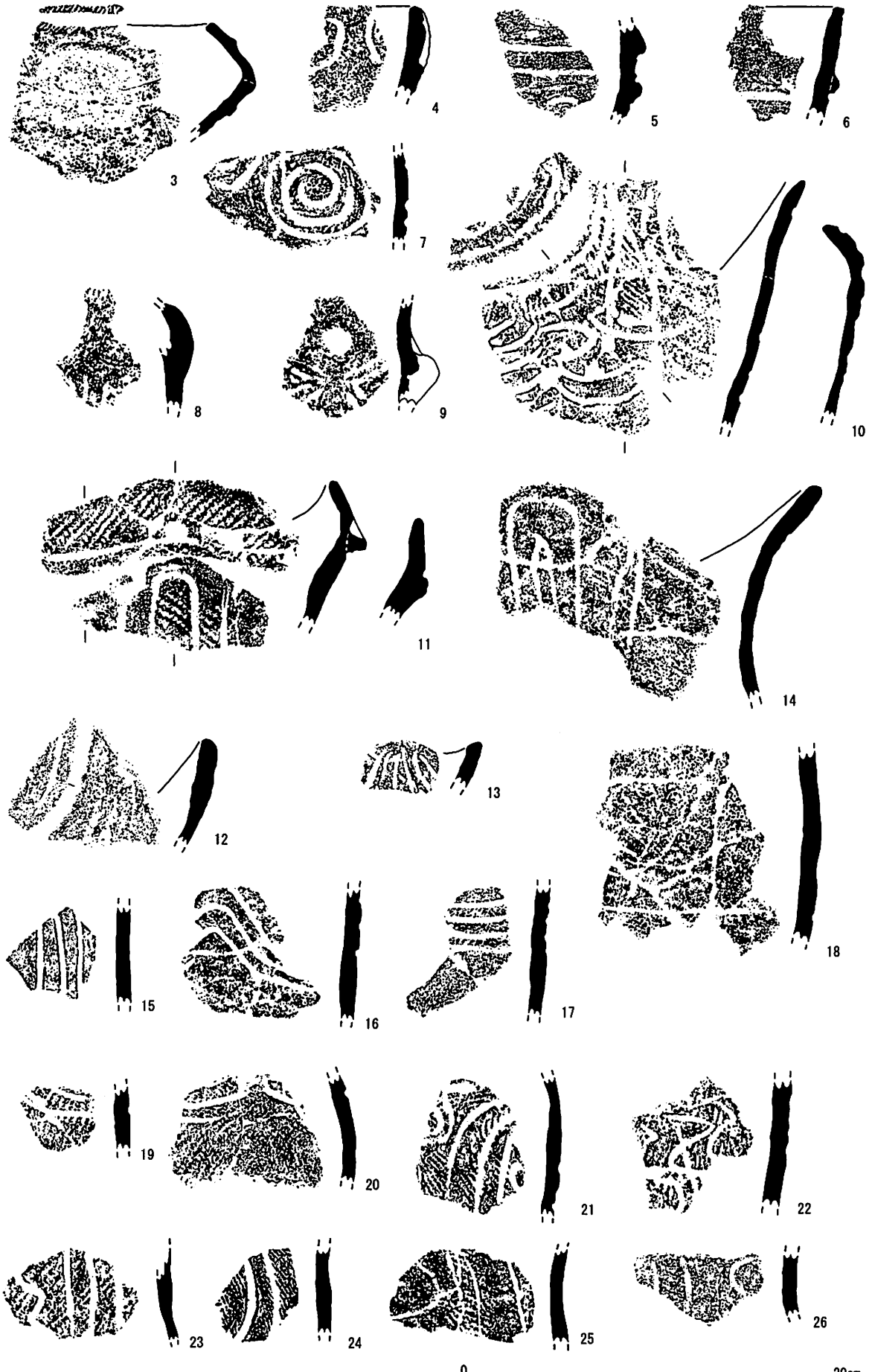




縄文土器 1

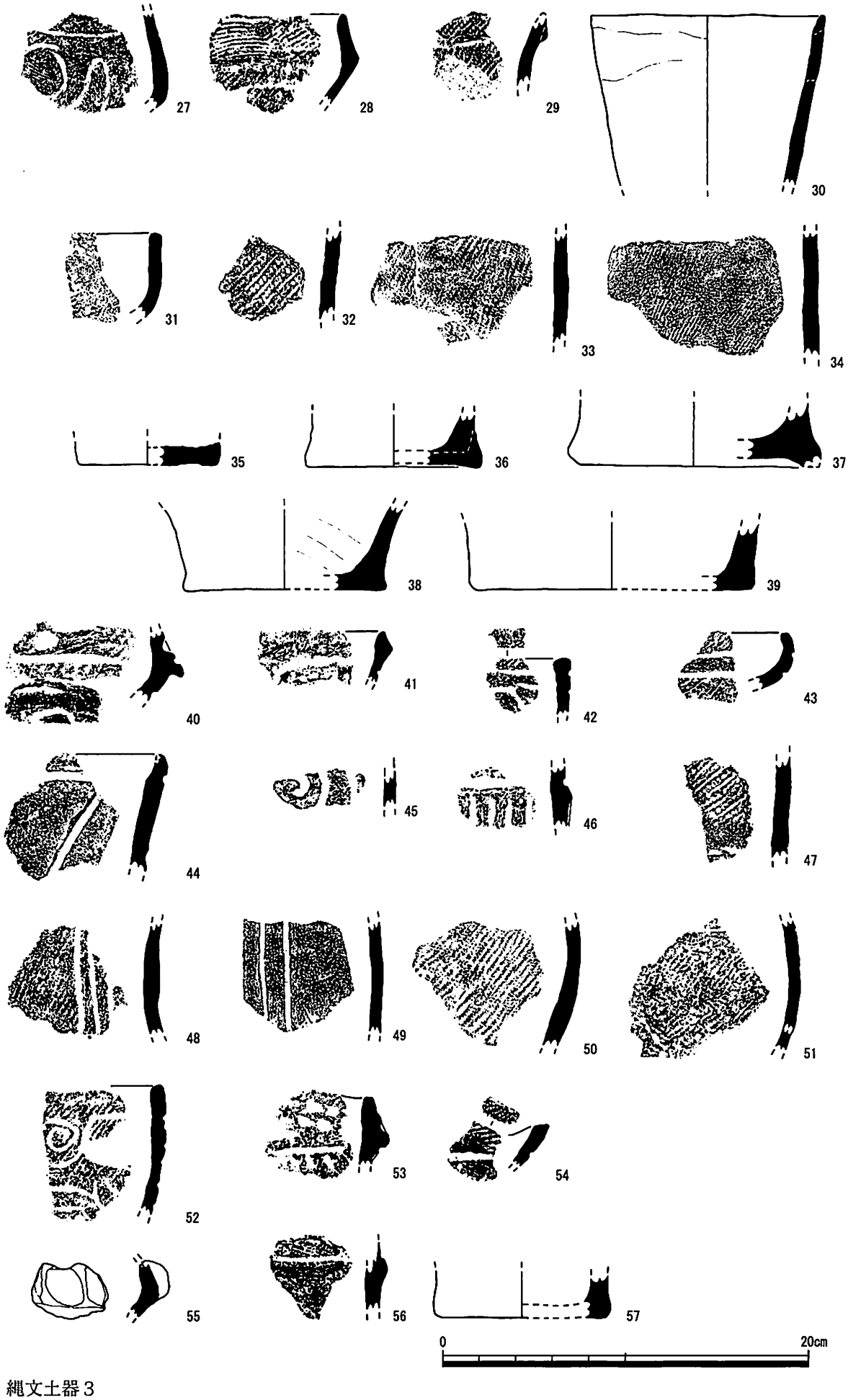
PL. LXIV

図版第六十四



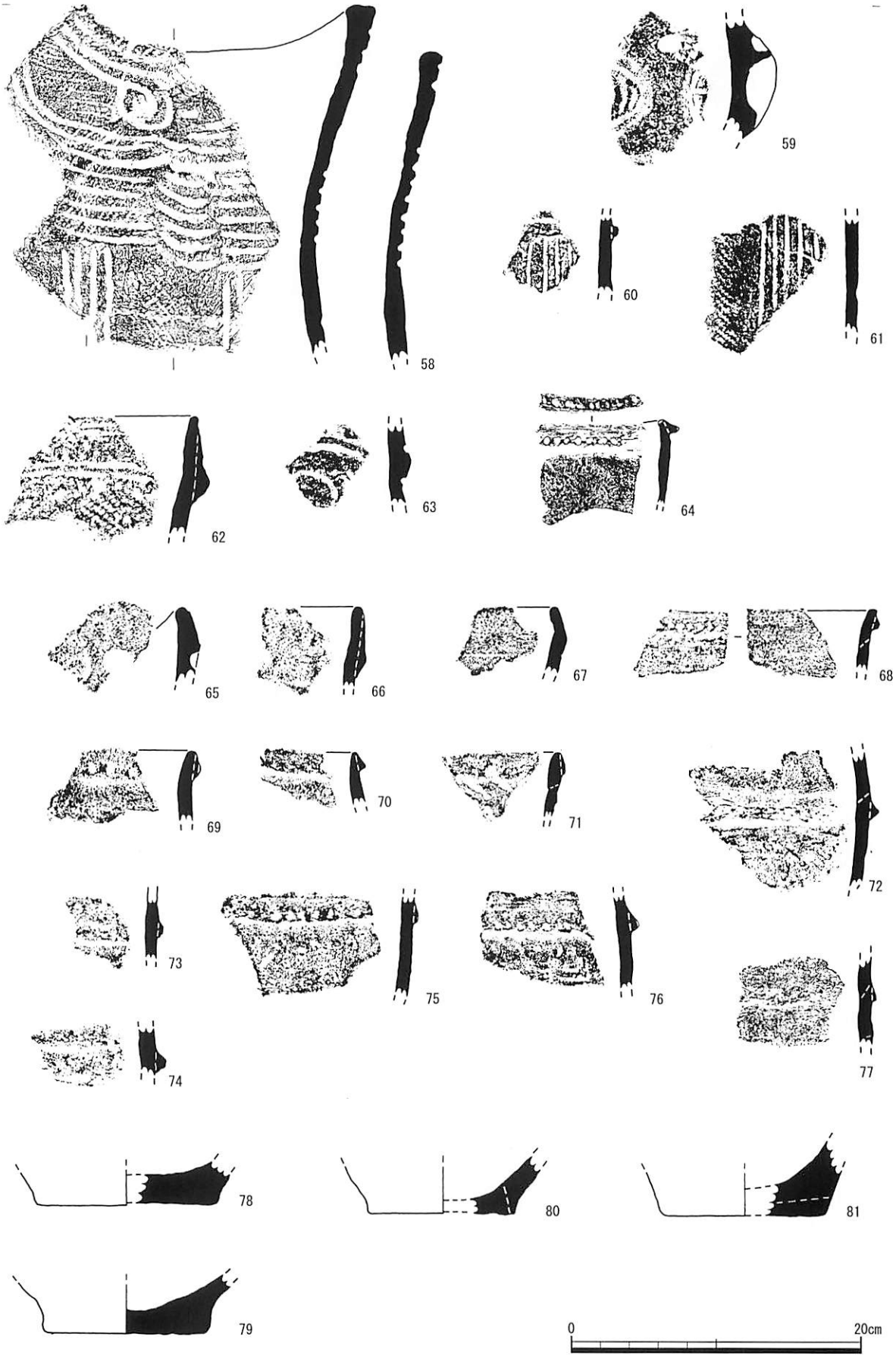
縄文土器２

図版第六十五



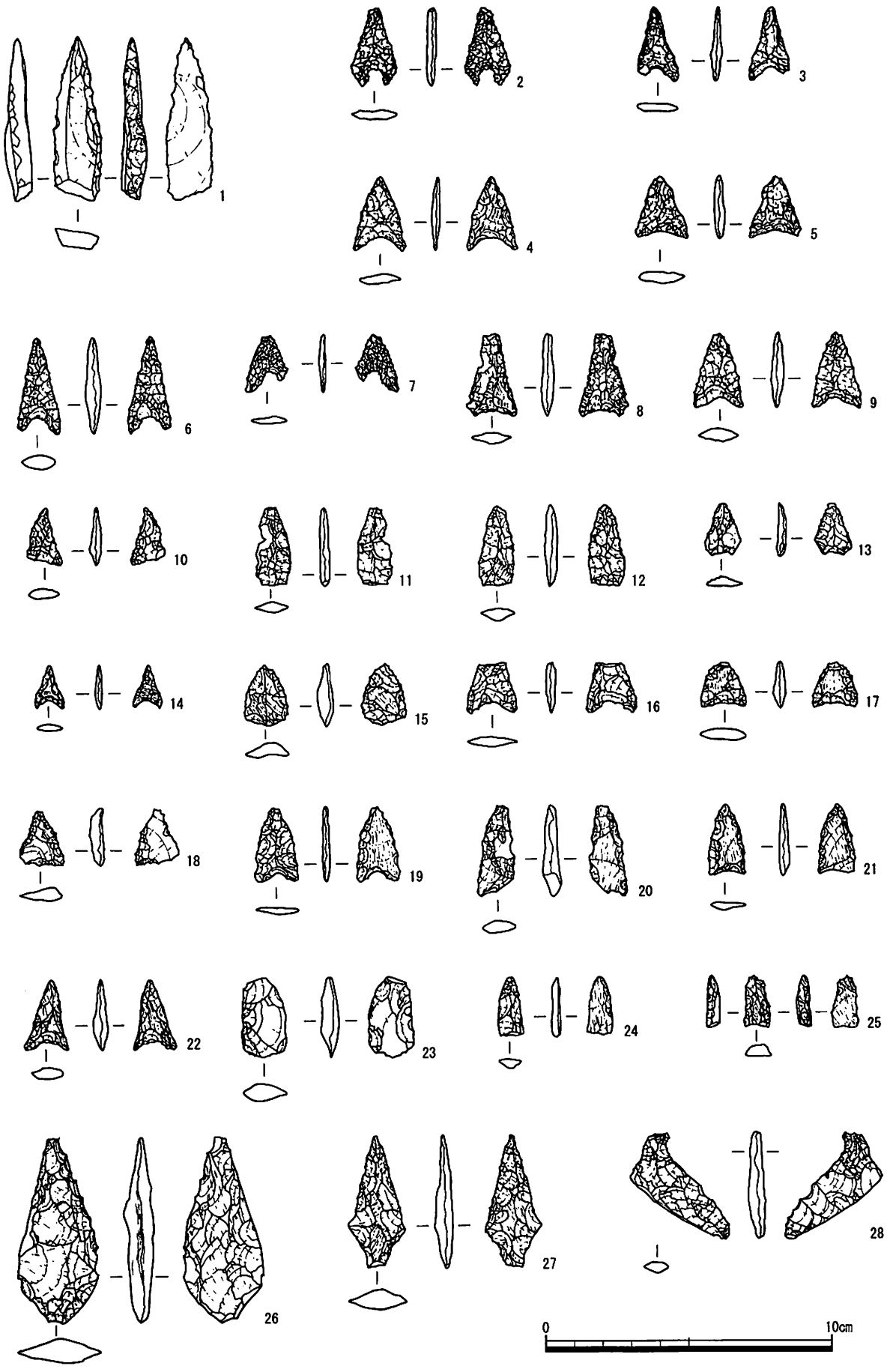
縄文土器３

図版第六十六



縄文土器4

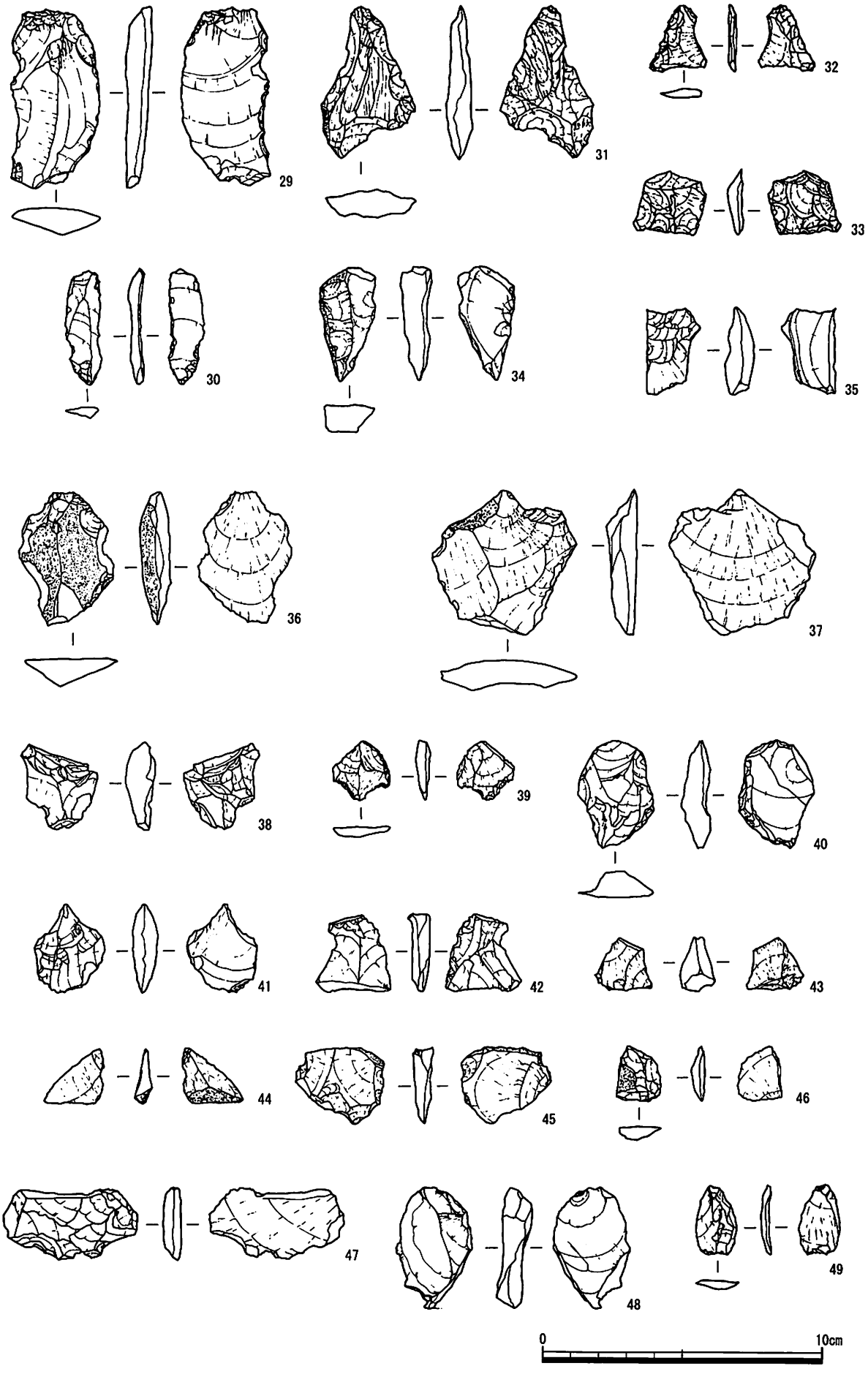
図版第六十七


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
10cm

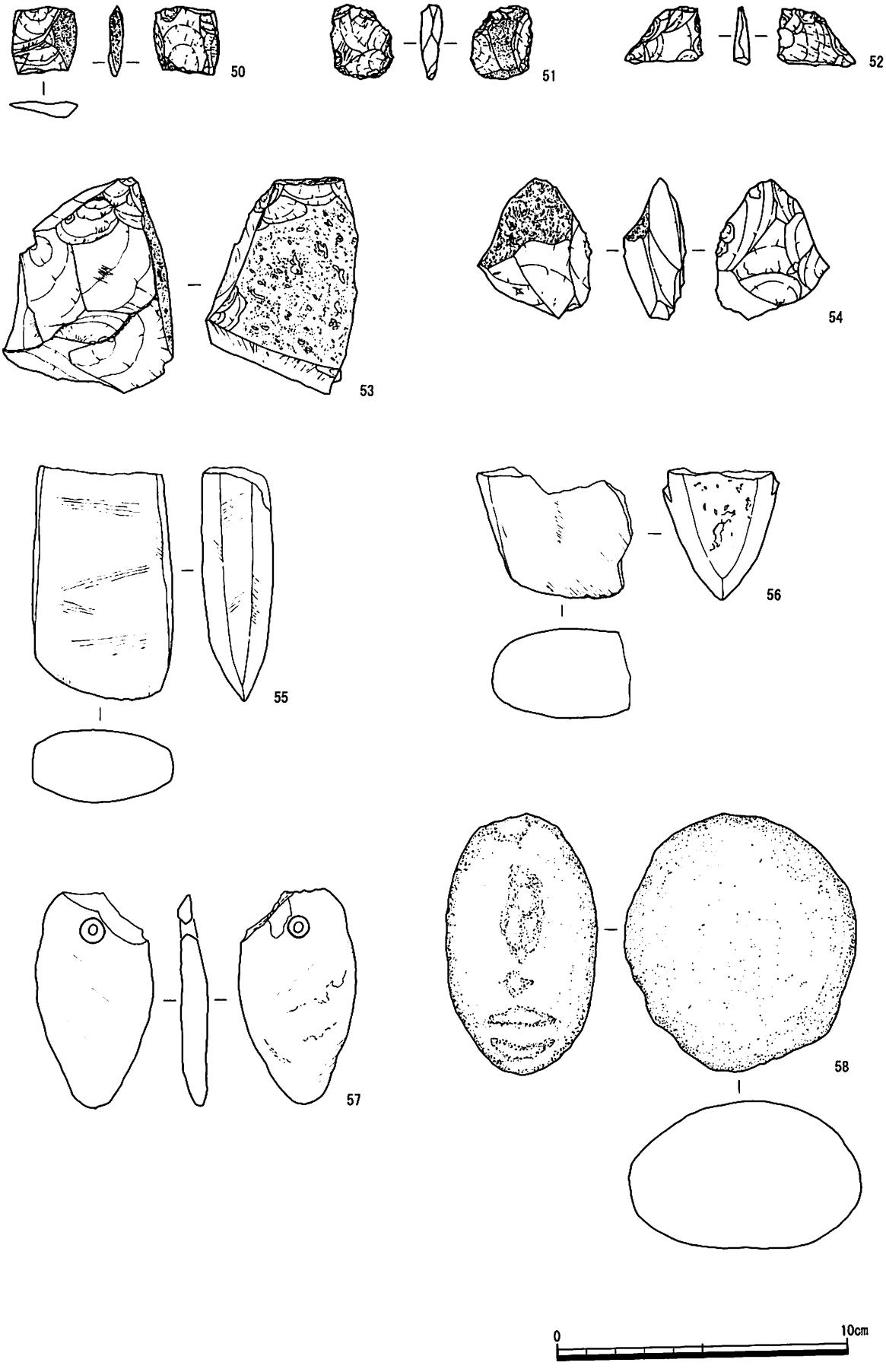
石製品1

PL. LXVIII

図版第六十八

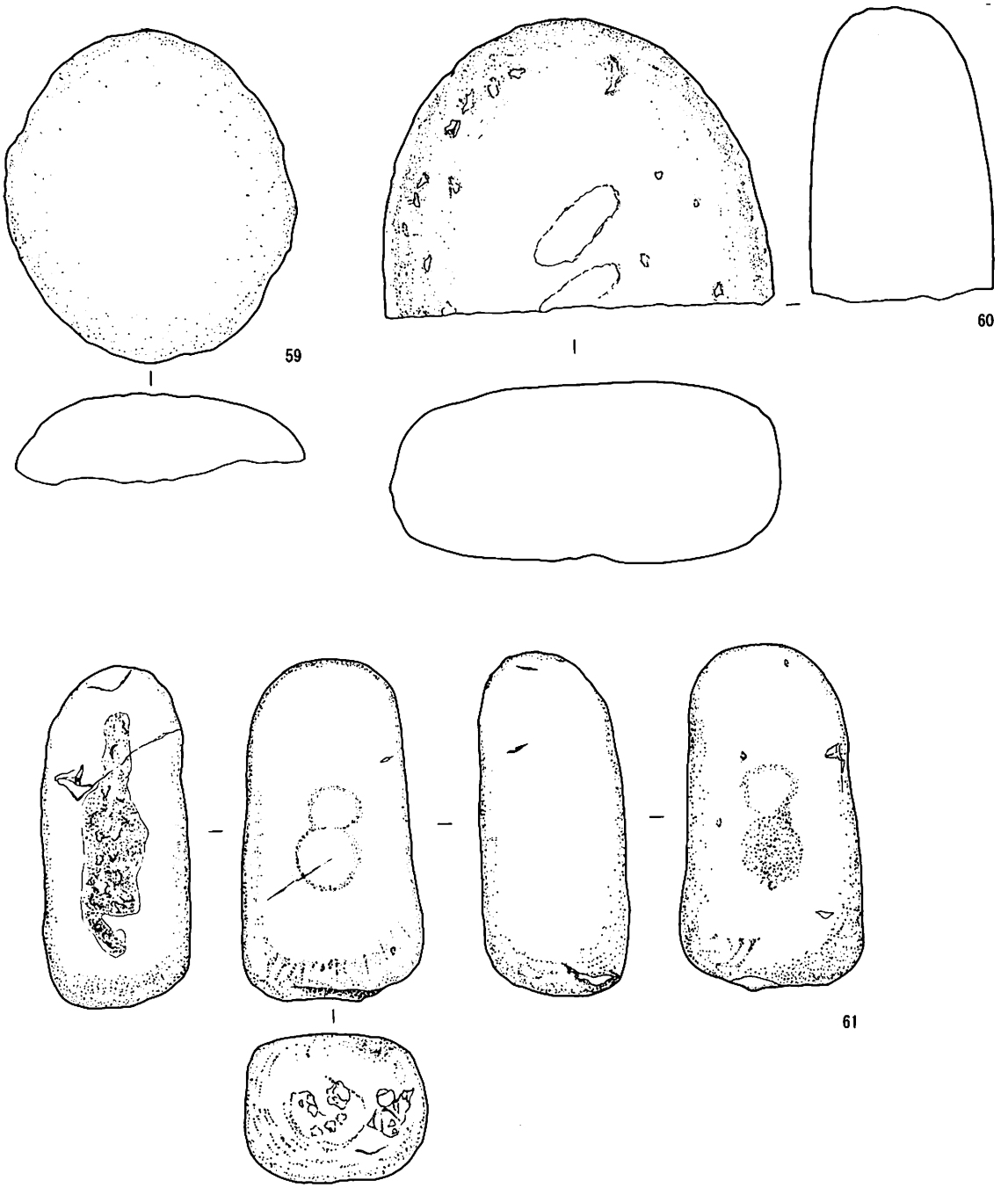


図版第六十九



石製品3

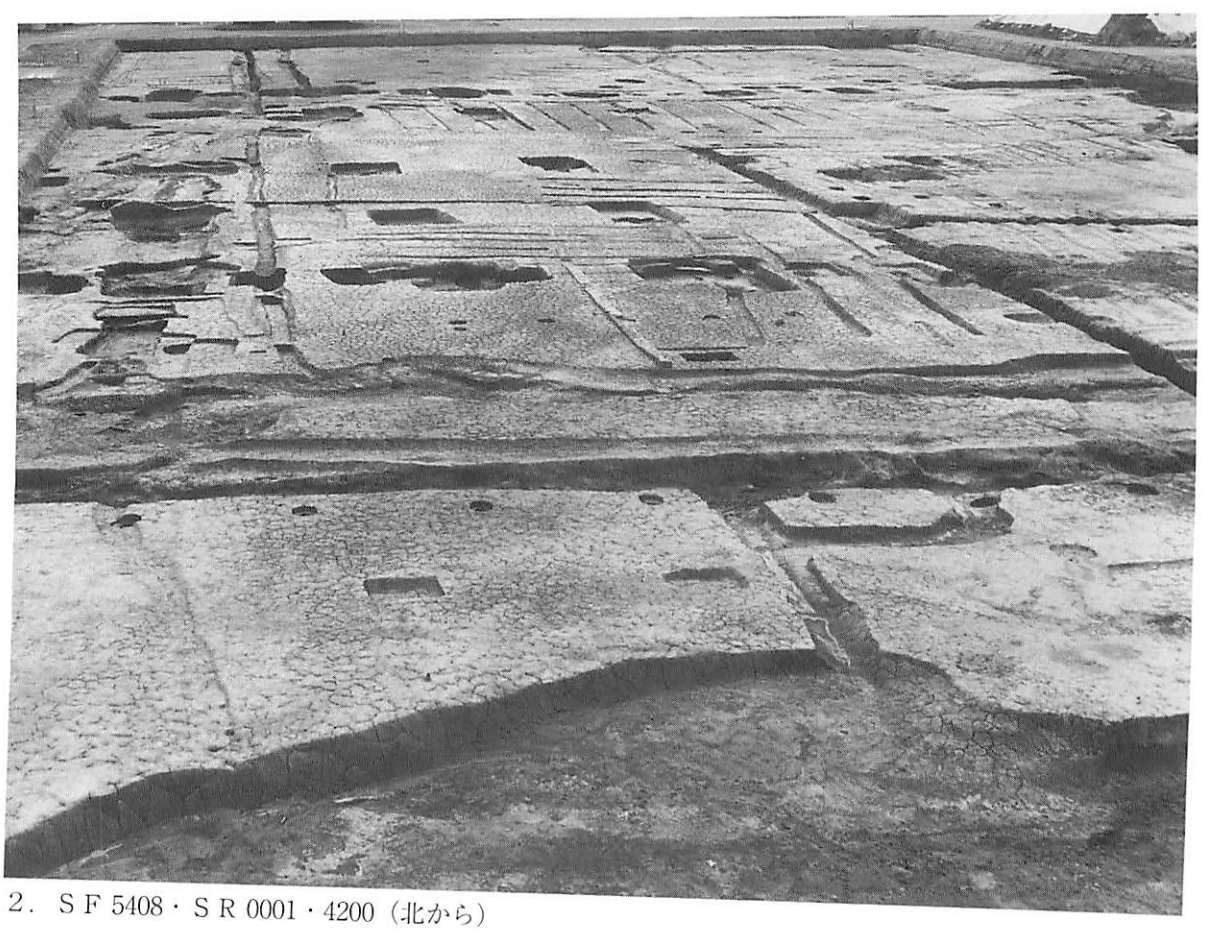
図版第七十



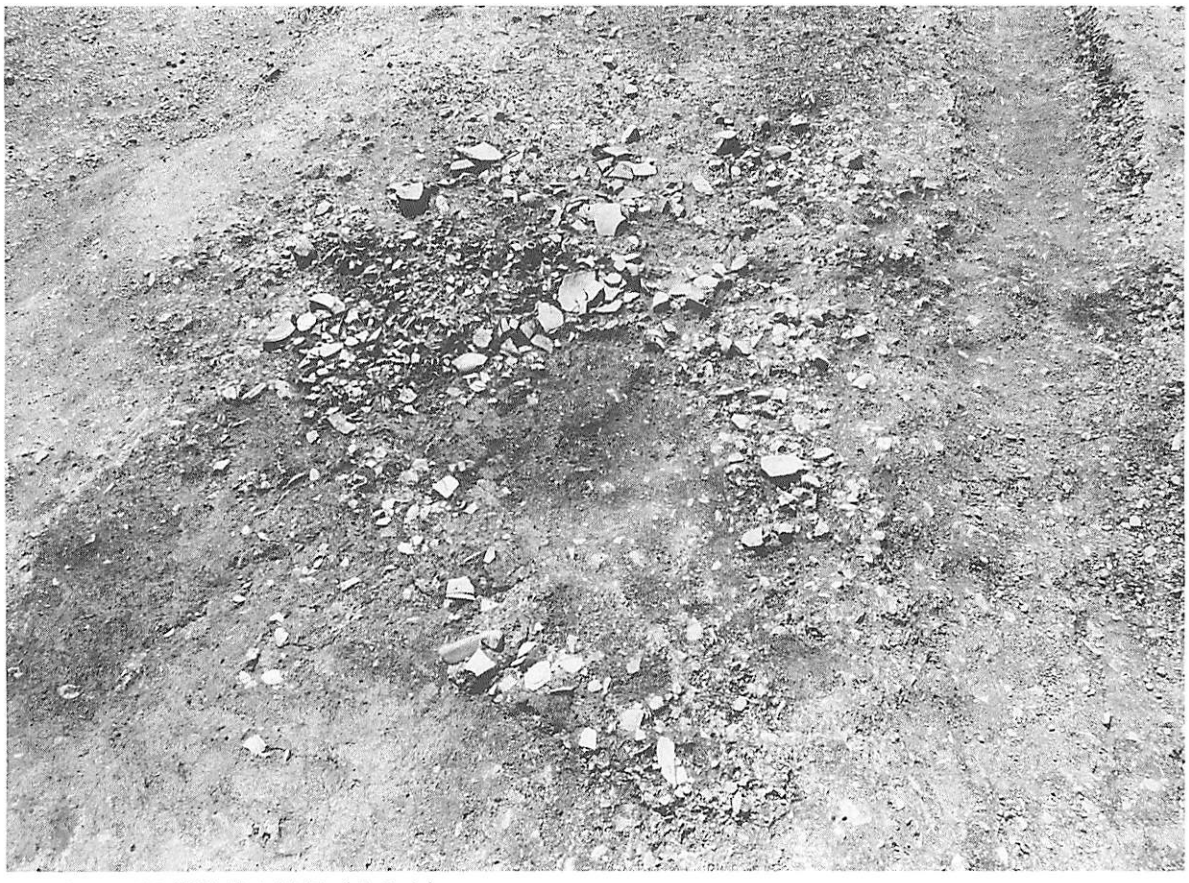
石製品４

1．七町全景（北から）

1．ＳＦ 5408・ＳＫ 5429 遠景（北から）



2．ＳＦ 5408・ＳＲ 0001・4200（北から）



1．ＳＫ 5429 遺物出土状況（北から）

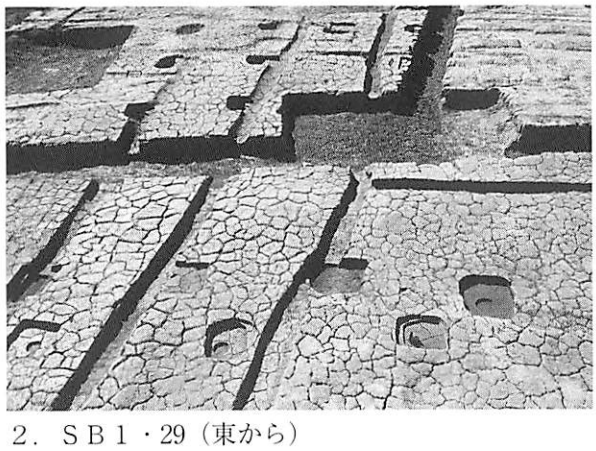
2．ＳＫ 5429 遺物出土状況近景（北から）

図版第七十四

1．七町北端建物群・ＳＤ 663 遺物出土状況（東から）

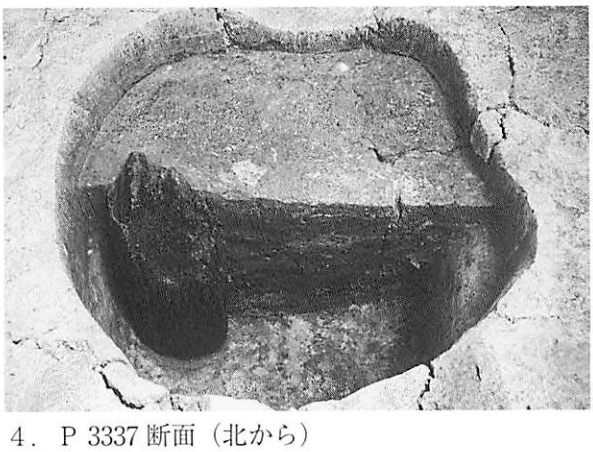
2．ＳＢ 21・ＳＡ３（北から）

1．ＳＢ 24（東から）



2．ＳＢ１・29（東から）

3．ＳＥ 2067 遺物出土状況（北西から）



4．Ｐ 3337 断面（北から）

5．Ｐ 674 遺物出土状況（真上から）

1．SX4001 出土状況　（東から）

2．SX4001 出土状況　（北から）

3．SX4001 遺物出土状況　（北東から）

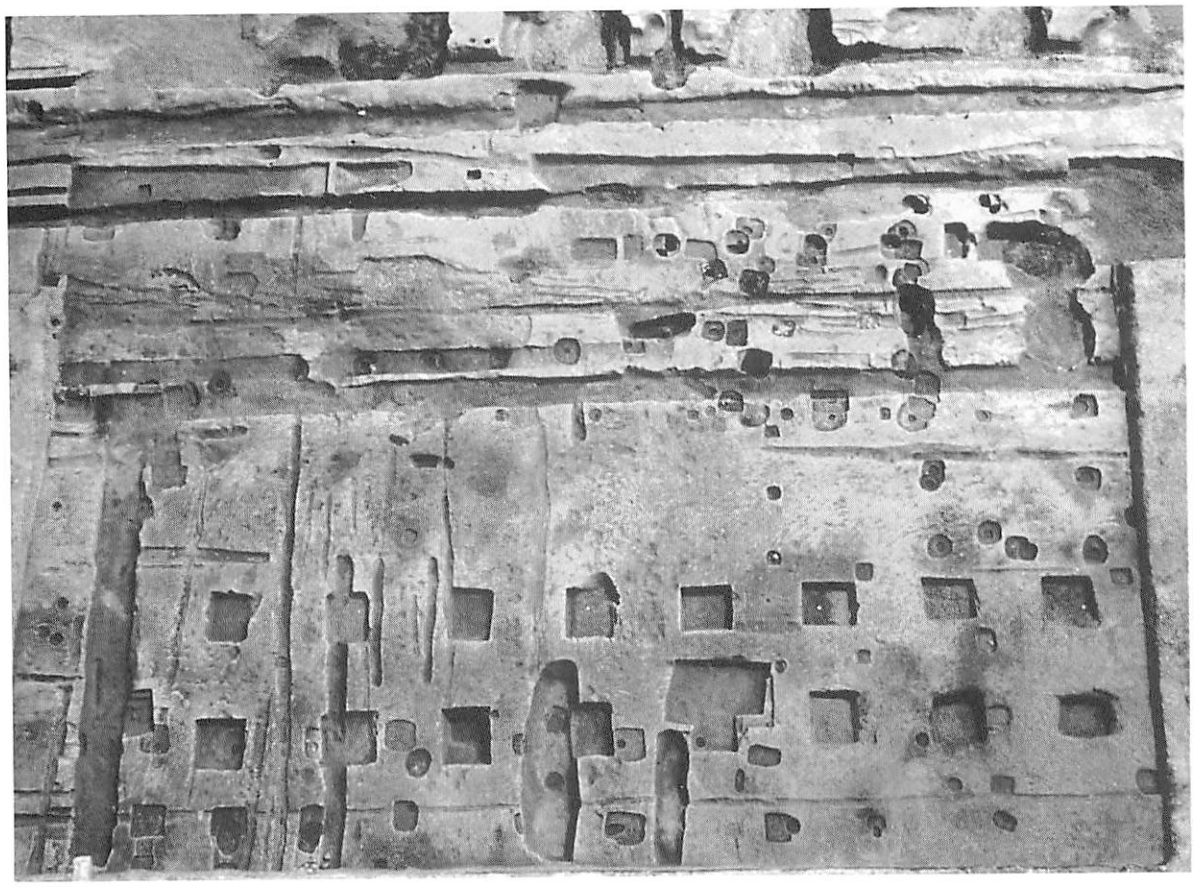
4．SX4001 棺台検出状況　（東から）

1．ＳＥ 3365（真上から）

2．ＳＥ 3365 断割（北から）

1．Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区　七・八町遠景（北から）

2．Ⅰ・Ⅱ区　七・八町西側遠景（北から）

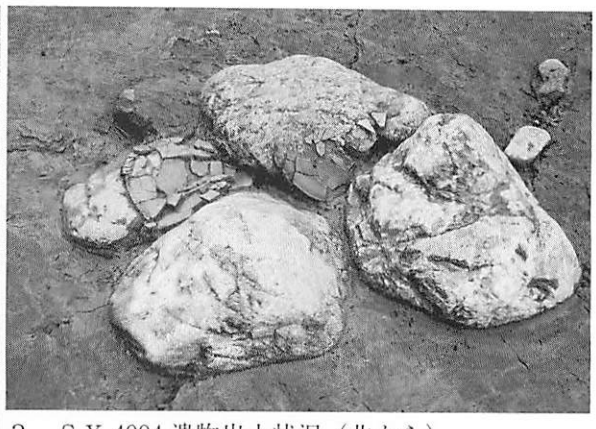


1. 八町建物群（真上から）

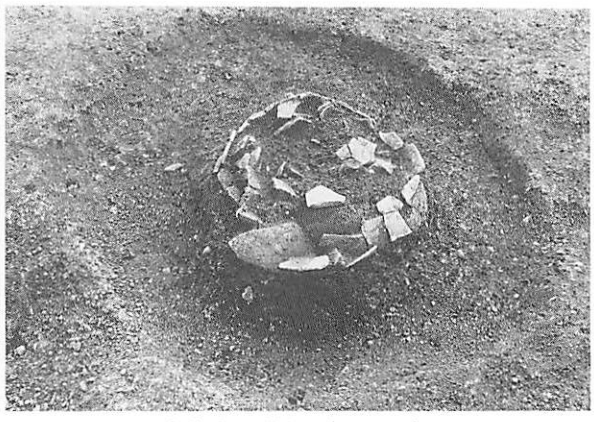
2. 八町建物群（西から）

1．ＳＢ10（南から）

2．ＳＢ９（東から）



3．ＳＸ4004遺物出土状況（北から）



4．ＳＫ889遺物出土状況（北から）

1．ＳＸ820南半（北東から）

2．ＳＸ820池尻（北から）

1．Ⅰ・Ⅲ区　ＳＸ 820 遠景（東から）

2．ＳＸ 820 西肩洲浜・ＳＤ 4206（北東から）

1．ＳＤ 4206 近景（北から）

2．ＳＤ 4206 全景（北から）

3．ＳＤ 4206 近景（西から）

1．ＳＢ７（東から）

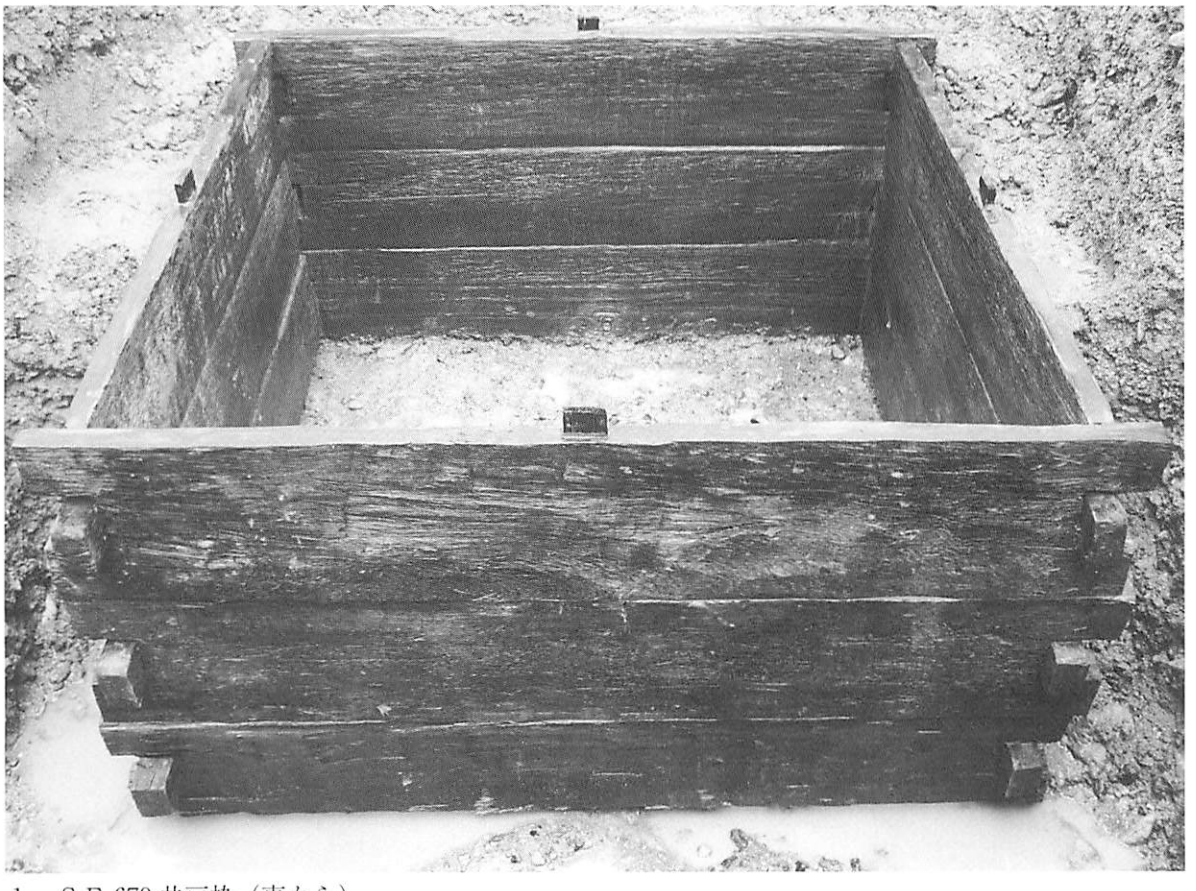
2．ＳＢ８（北から）

1．馬代小路・樋口小路交差点部遠景（北から）

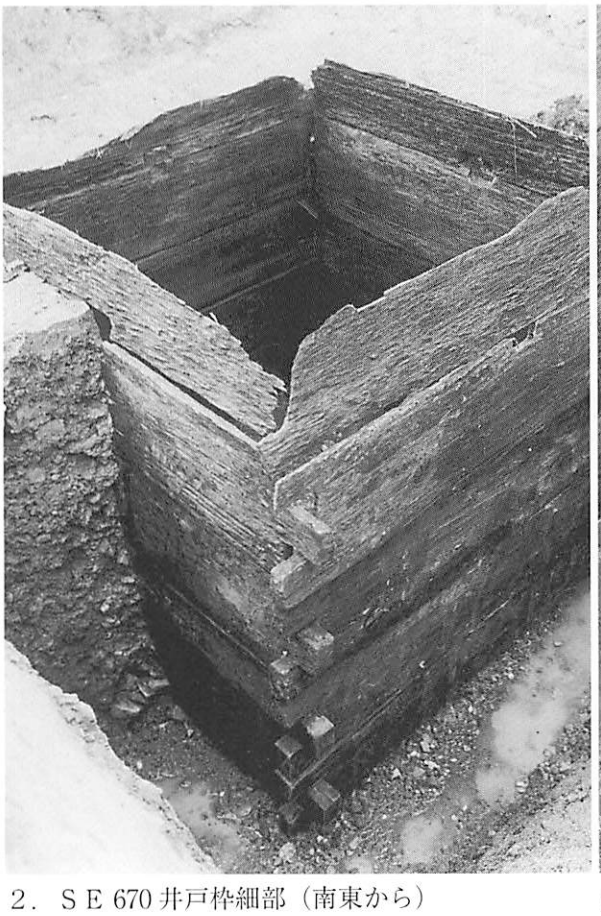
2．馬代小路・ＳＲ 0001 南北部（北から）

1．ＳＥ 670（北から）

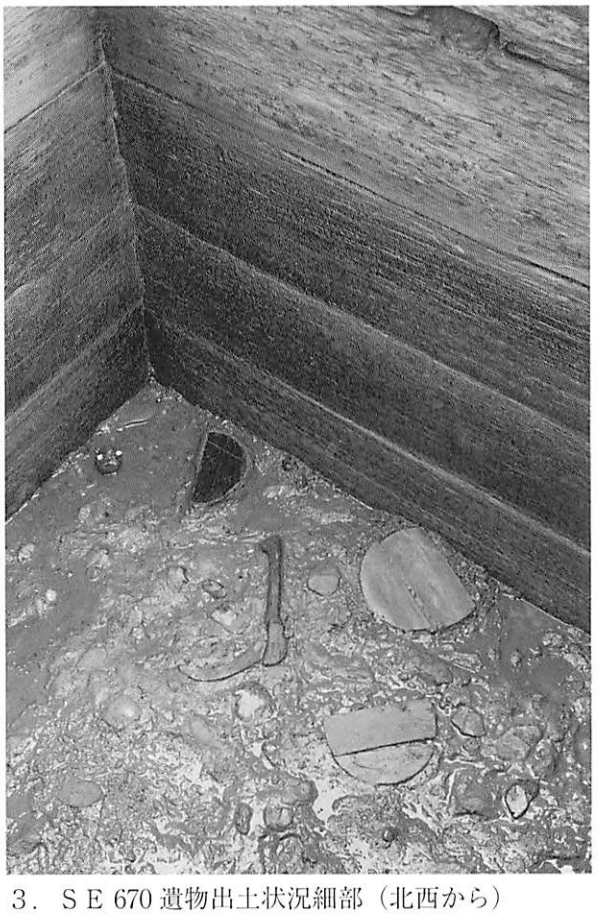
2．ＳＥ 670 遺物出土状況（北から）



1．ＳＥ670井戸枠（東から）



2．ＳＥ670井戸枠細部（南東から）



3．ＳＥ670遺物出土状況細部（北西から）

図版第八十八

1．ＳＢ 15（北から）

2．ＳＢ 14（東から）

1．十町全景１（西から）

2．十町全景２（西から）

1．ＳＤ658・2429（西から）

2．ＳＢ18（南から）

1．ＳＸ 3400（西から）

2．Ⅷ区　ＳＲ 0001・ＳＤ 4340（東から）

3．Ⅵ区　ＳＢ 33（東から）

1．ＳＥ 1842 遺物出土状況（北西から）

2．ＳＥ 1842 完掘状況（北から）

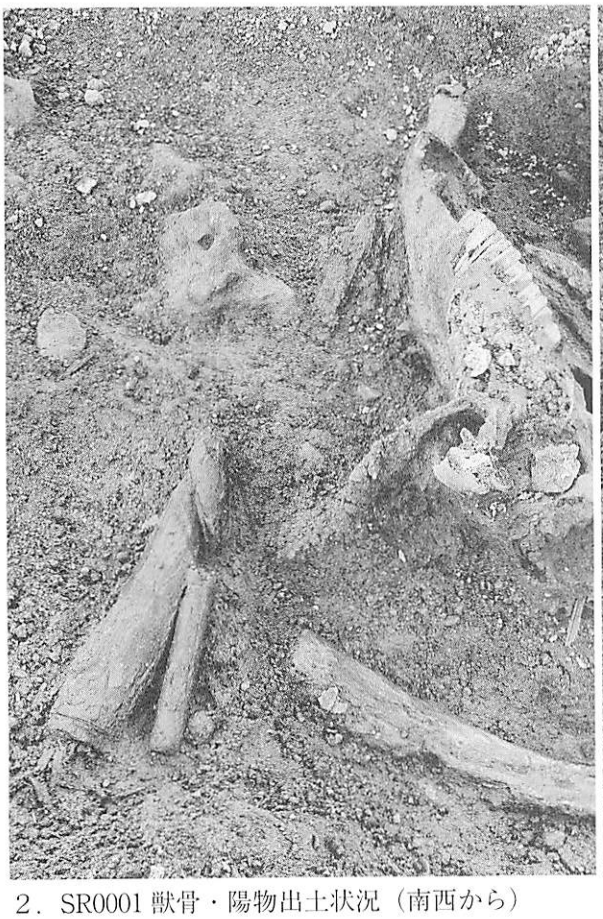
1．ＳＥ 1846（南から）

2．ＳＥ 1846 断割（南西から）

1．SR0001 東西部遠景（西から）

2．SR0001 東西部北肩土器出土状況（南西から）

1．SR0001 東西部獣骨出土状況（北から）

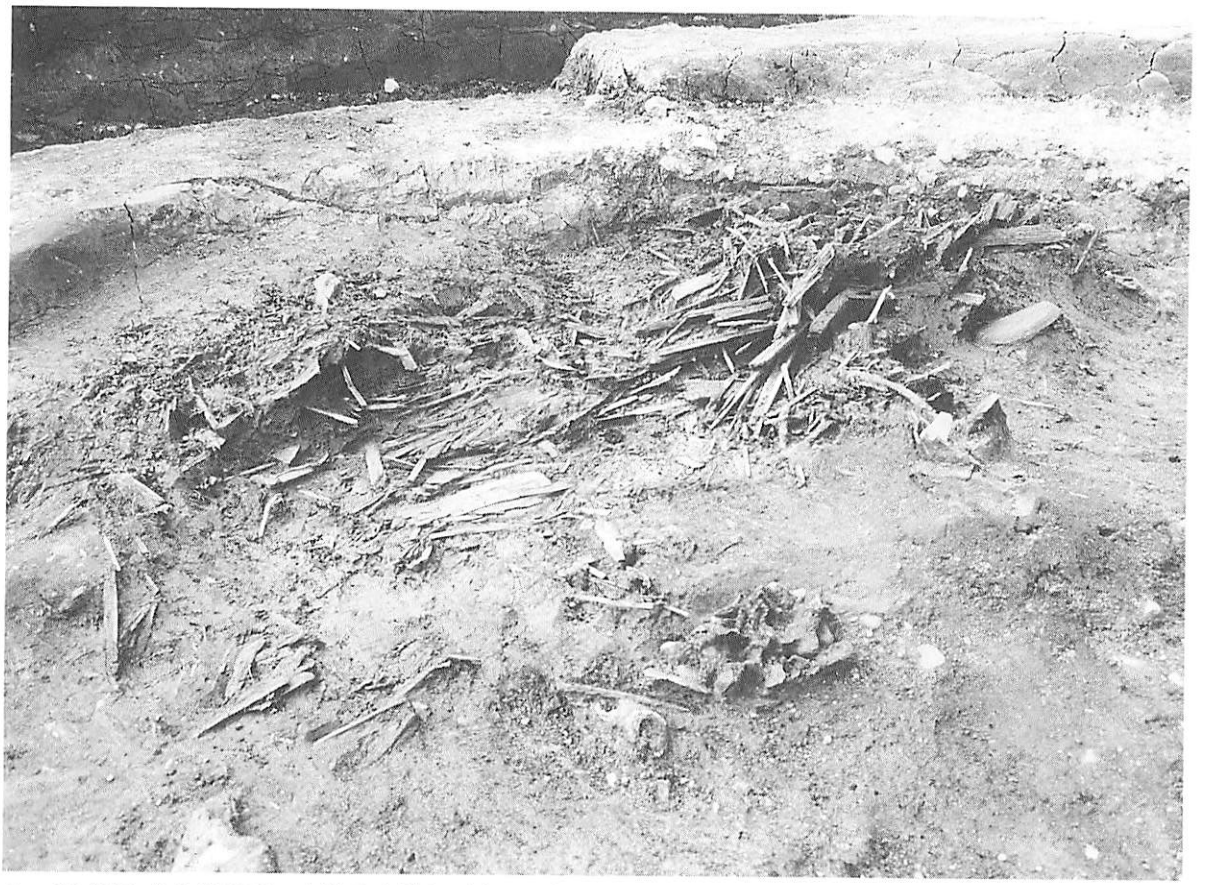


2．SR0001 獣骨・陽物出土状況（南西から）

3．SR0001 獣骨・木簡出土状況（南から）

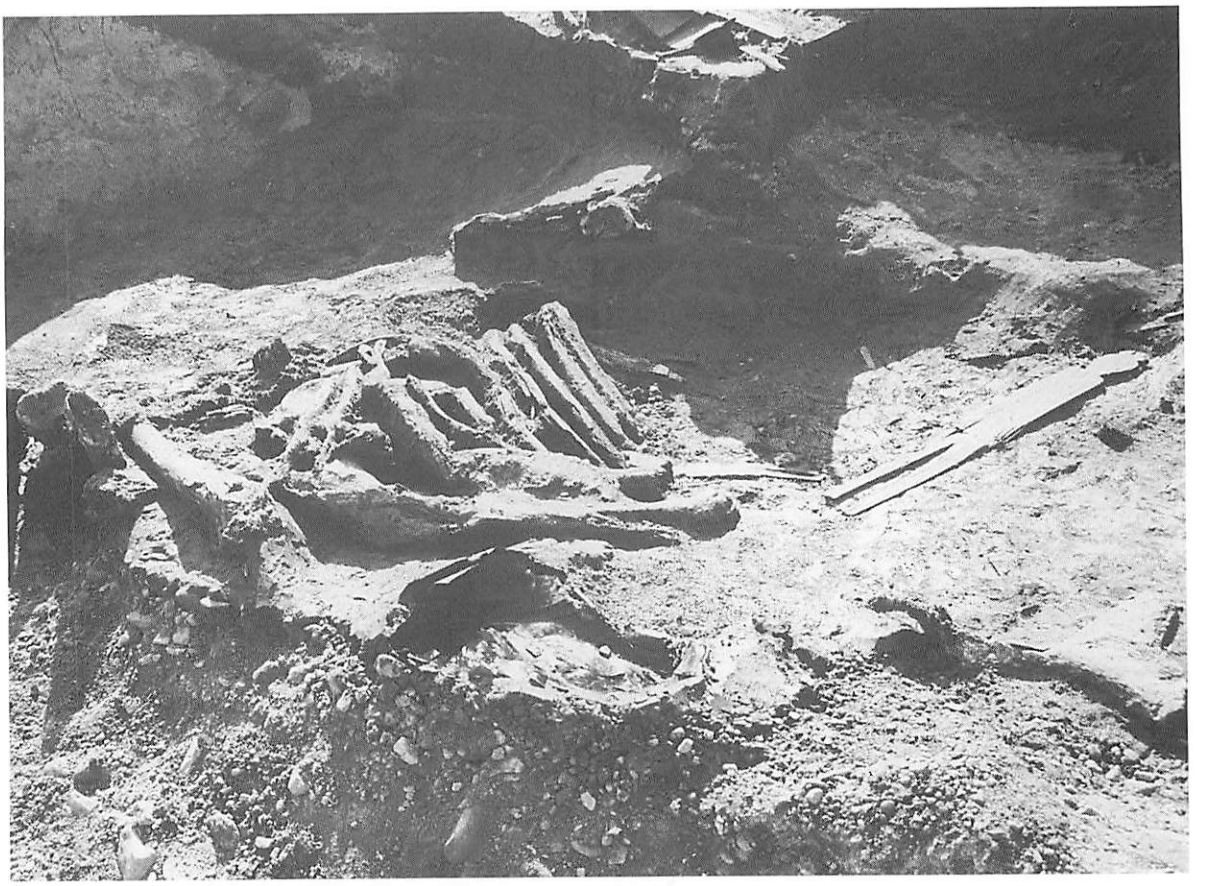
1．Ⅲ区　SR0001・4200 東西部（東から）

2．SR4200 南北部北端　獣骨出土状況（北から）

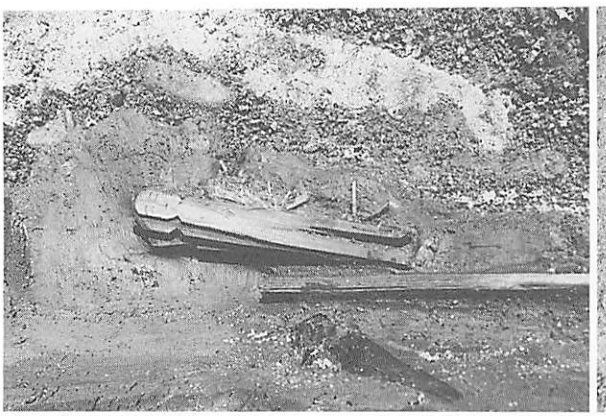


1．SR4200 南北部西肩　木器出土状況（東から）

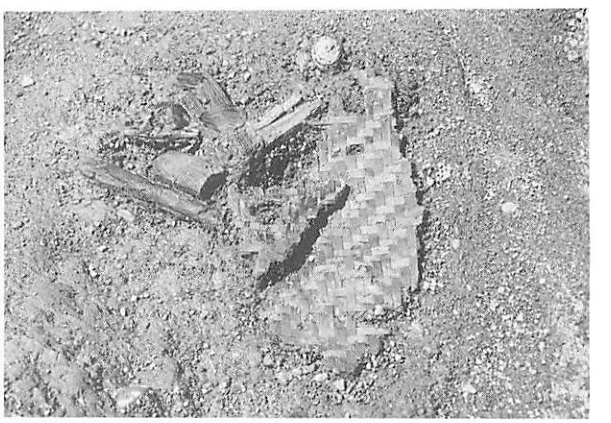
2．SR4200 南北部西肩　獣骨・土器出土状況（北東から）



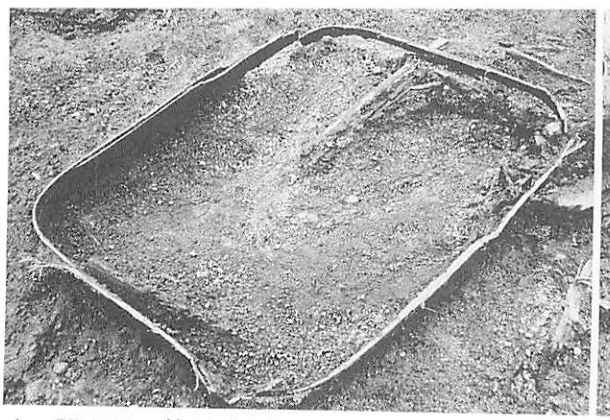
1．SR4200 南北部西肩　大型人形・手箱・獣骨出土状況（北東から）



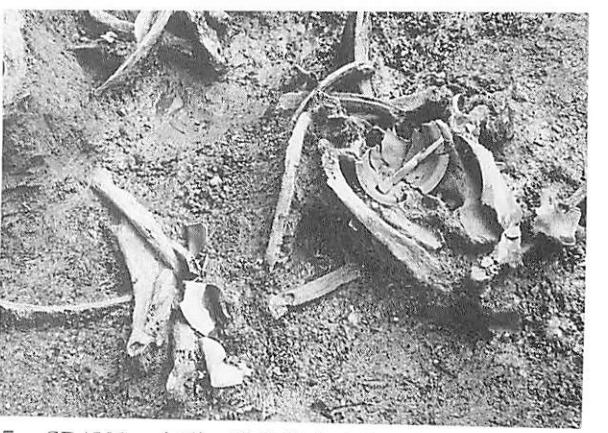
2．SR4200　人形六体出土状況（西から）



3．SR4200　籠編物出土状況（南から）



4．SR4200　楕円形曲物出土状況（南西から）



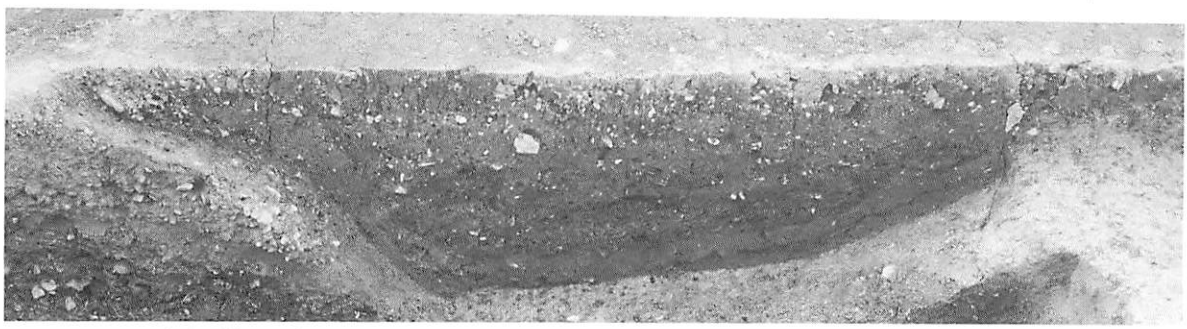
5．SR4200　人形・獣骨等出土状況（北から）

1．馬代小路西側溝 SD656 断面 A（南から）

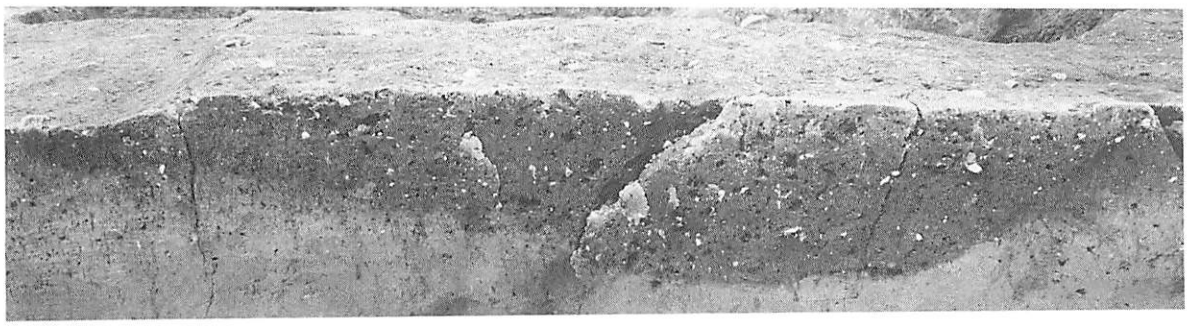
2．馬代小路東側溝 SD655 断面 A（南から）

3．馬代小路西側溝 SD656 断面 B（南から）

4．馬代小路東側溝 SD655 断面 B（南から）



5．SD2429 断面（南から）

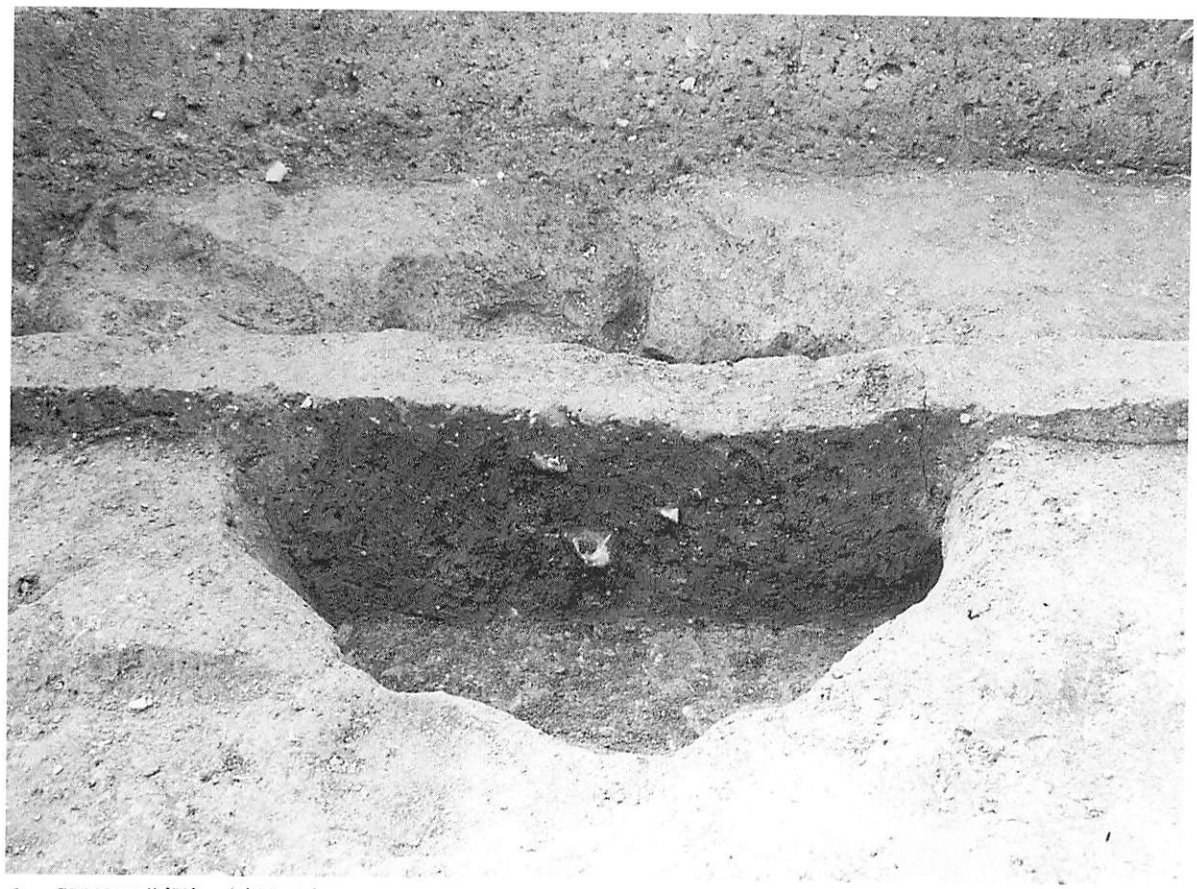


6．SD4350 断面（北から）

7．SR4200 南北部中央断面　（北から）

1．SX3401 遺物出土状況　（南から）

2．SX3401 遺物出土状況細部　（西から）



1．SK4351 断面　（東から）

2．SK4351 完掘状況　（北東から）

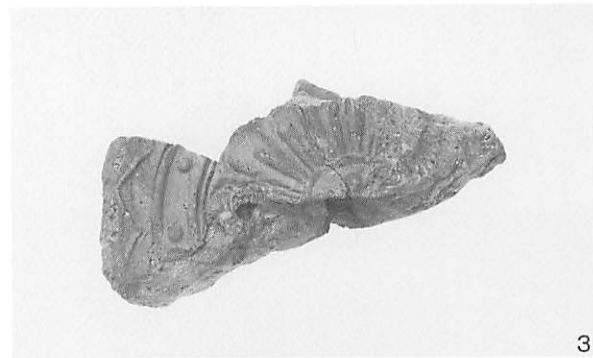
図版第百二

4

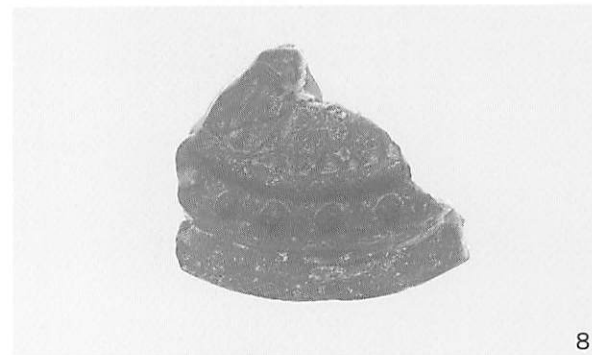
1

5

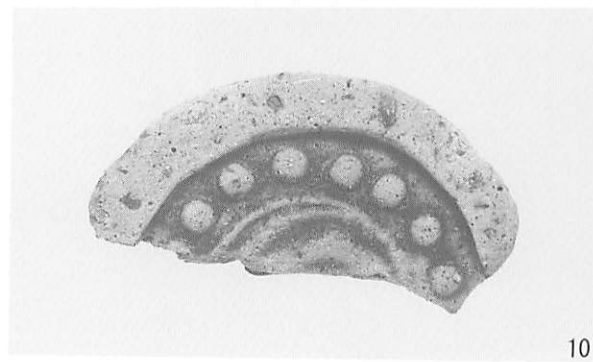
7


3

6


8

9


10

11

軒丸瓦

1

5

2

3

8

4

7

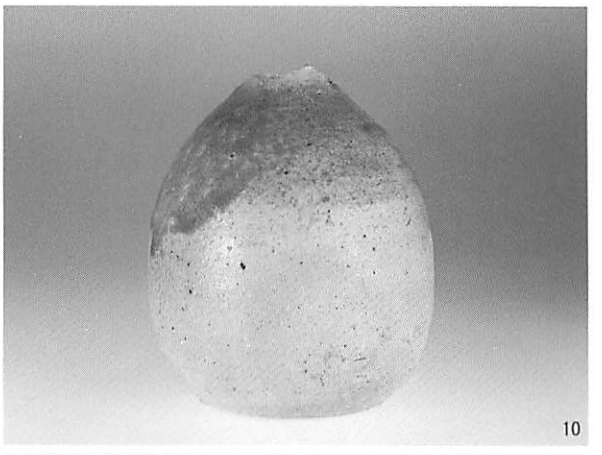
10

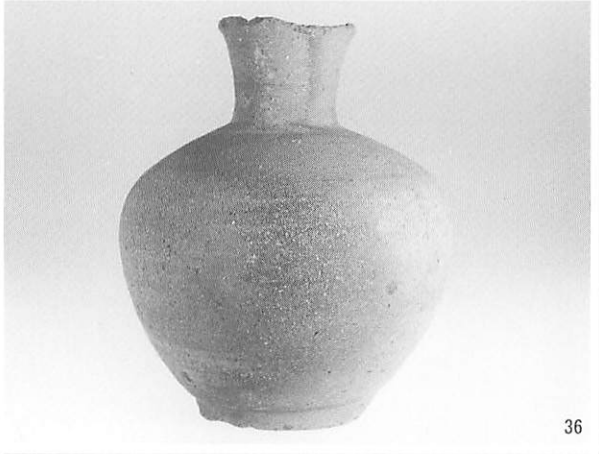
9

軒丸瓦

図版第百四

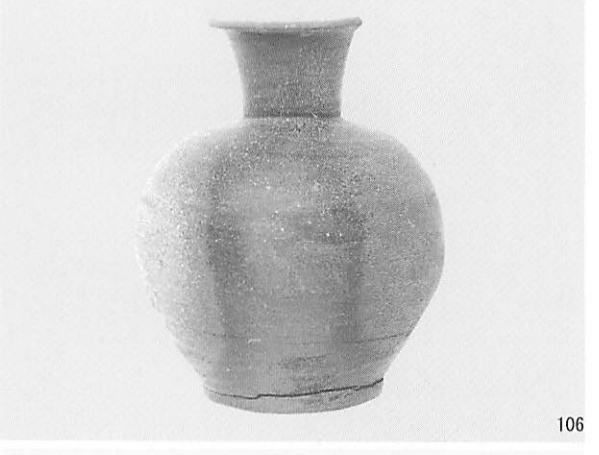
9


10


36

73

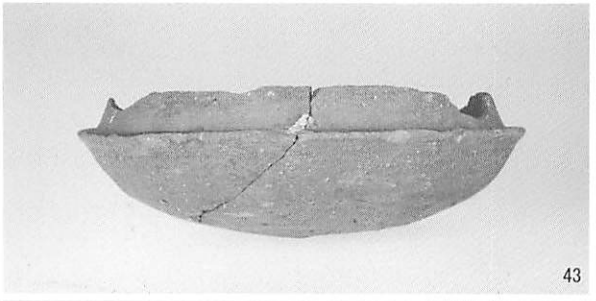
101


106

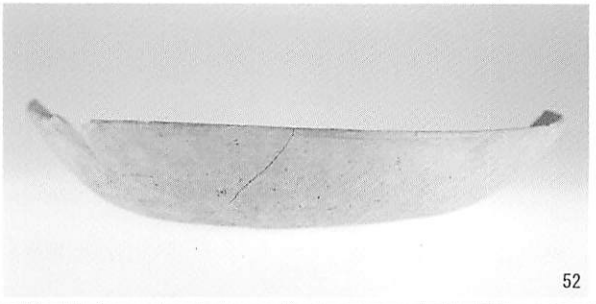
100

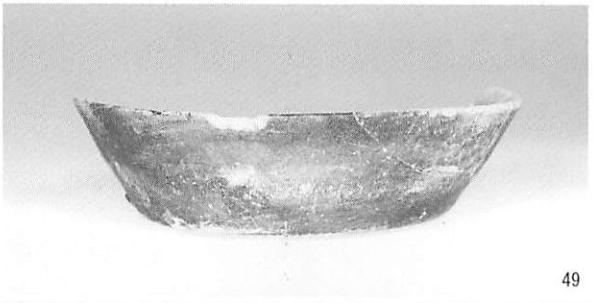
104

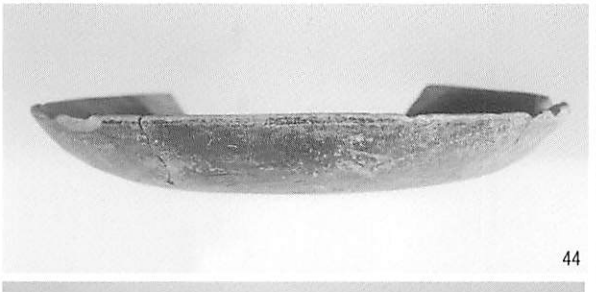
S R 4200 ①

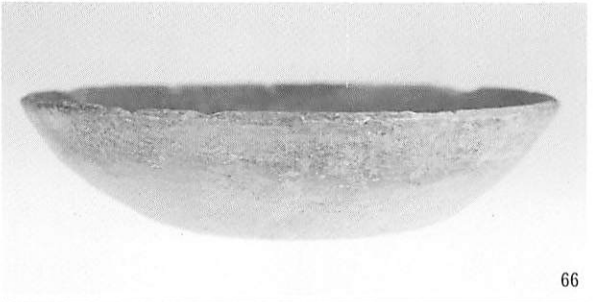

43

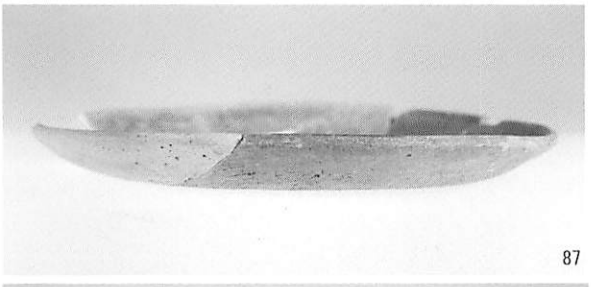
32

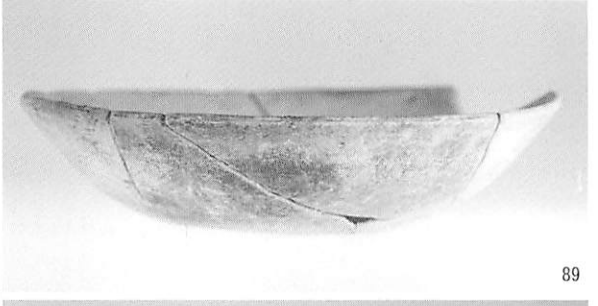

52

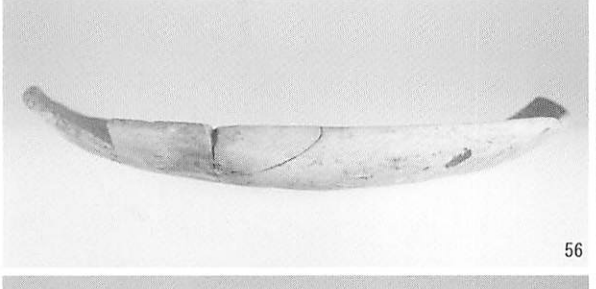

49

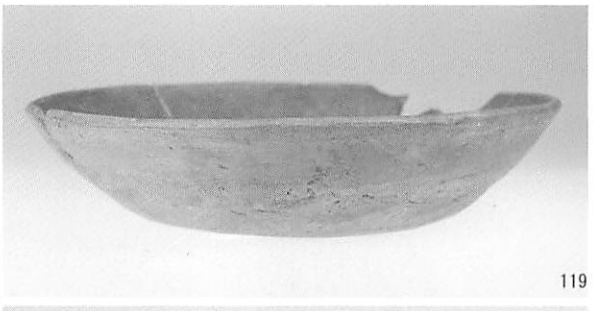

44


66


87


89


56

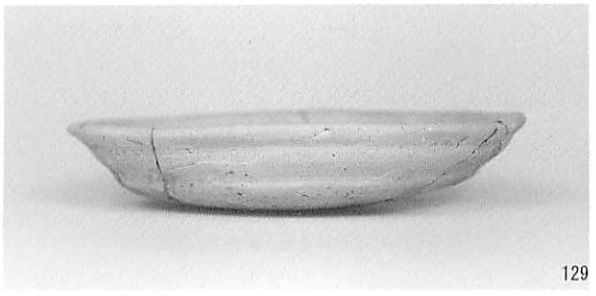

119

113

115

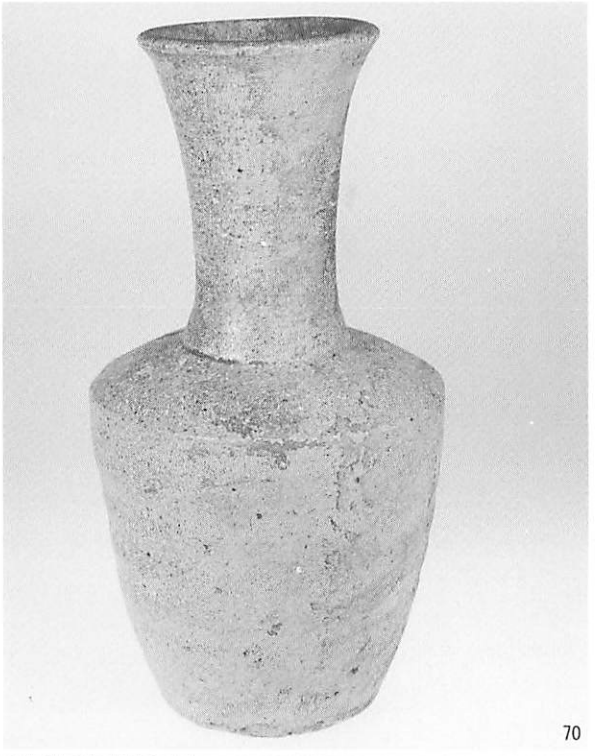
S R 4200 ②

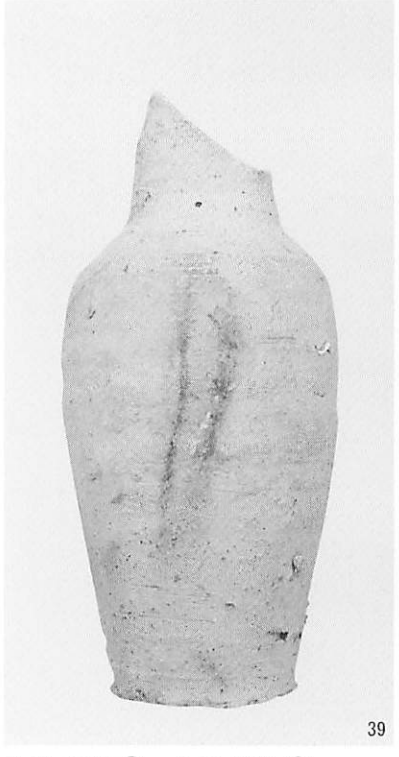
図版第百六

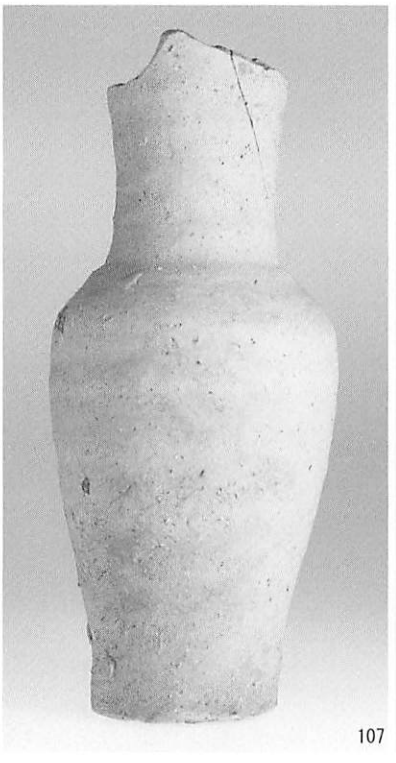

129

156

108


70


39


107

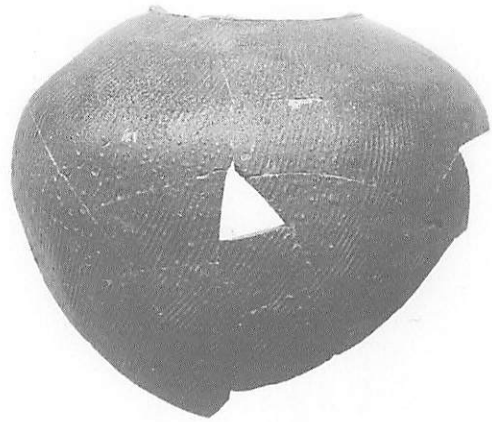
109

S R 4200 ③ · S R 0001 ①

124

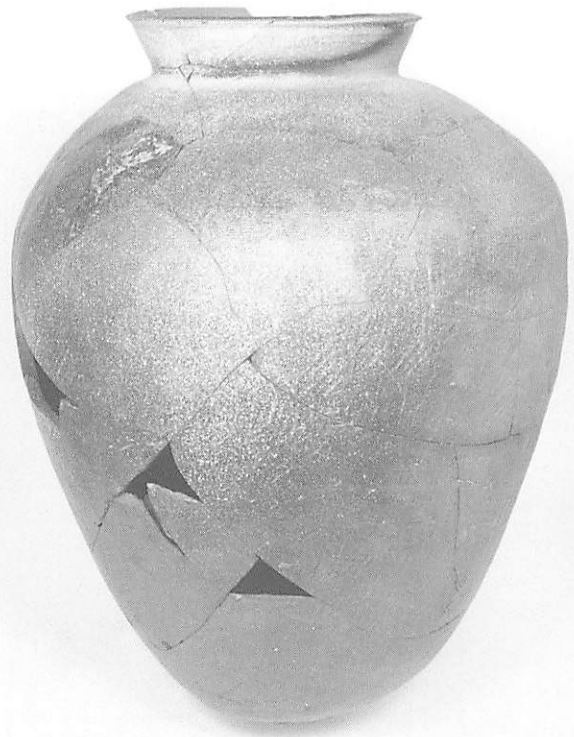
92

25



82

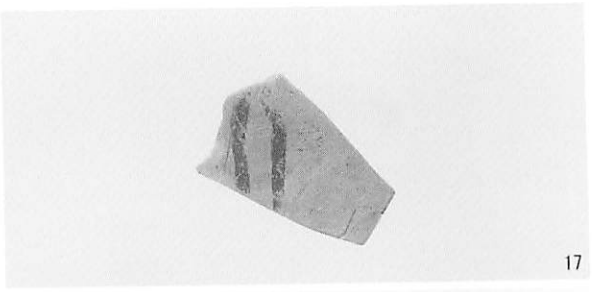
91



62

図版第百八

19

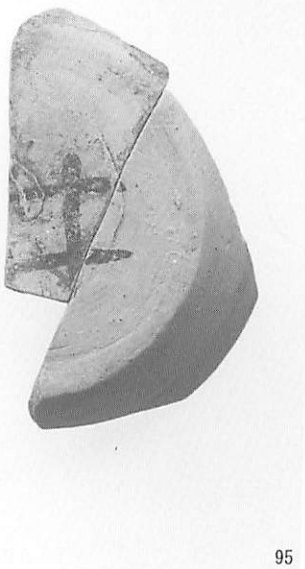

17

18

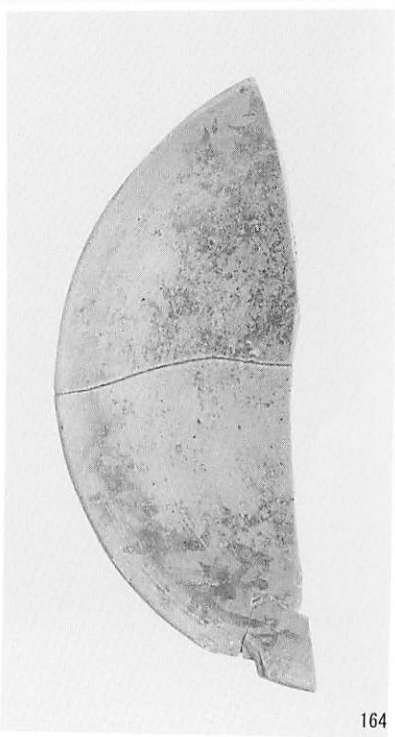
78

46

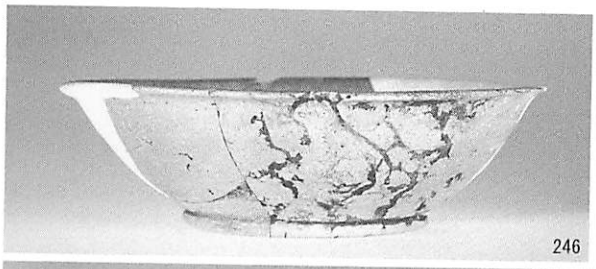
169

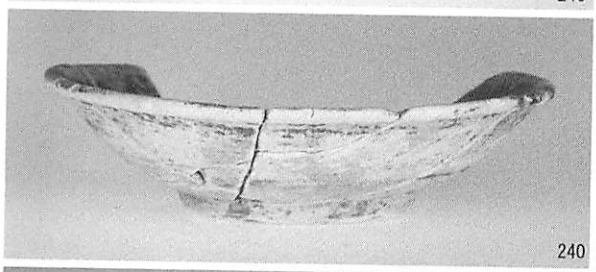

95

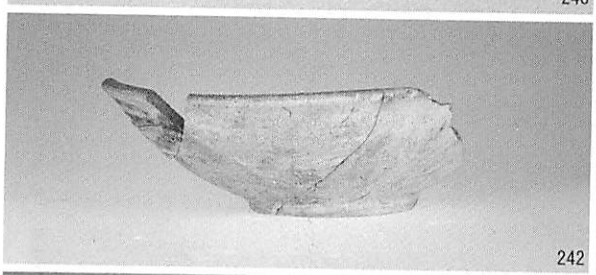
47

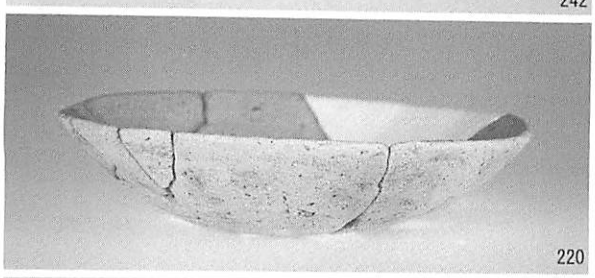

164

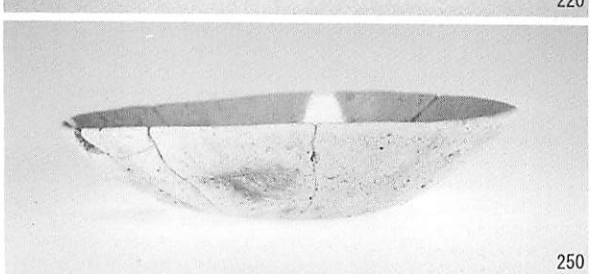
S R 4200 ⑤ · S R 0001 ②

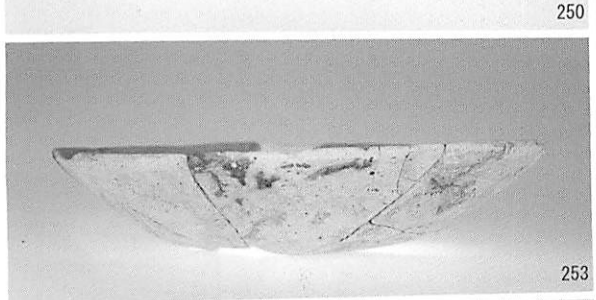

246

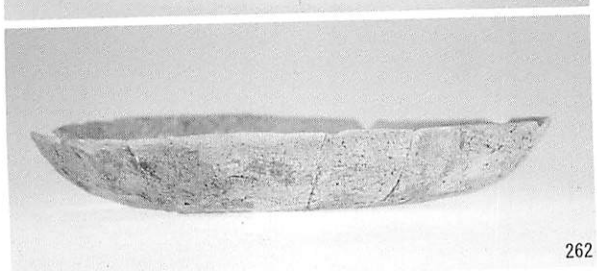

240


242

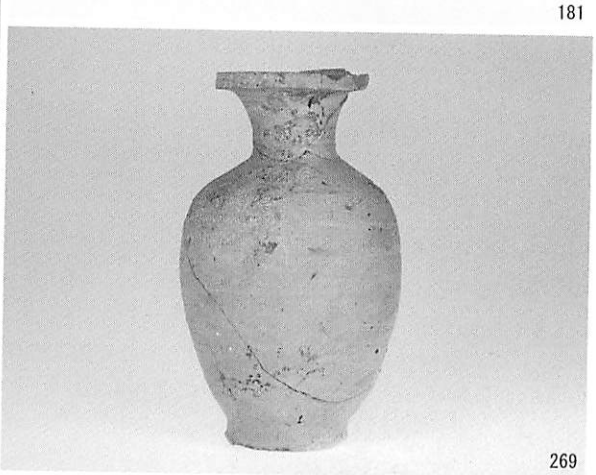

220


250


253


262

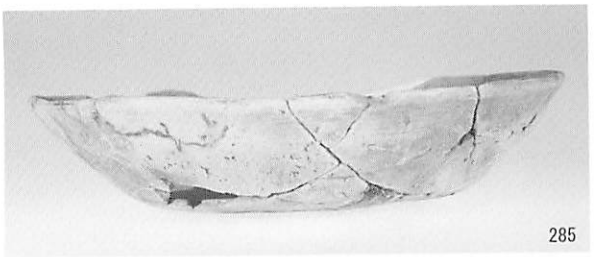
181

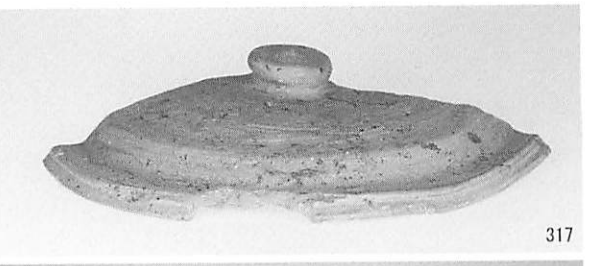

269

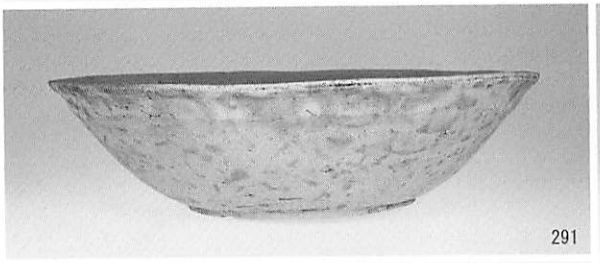
280

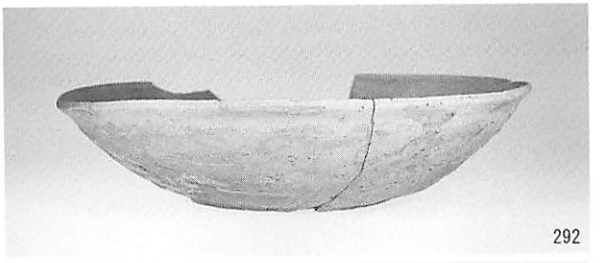
180

S D 655・663・七町①


285


317


291


292

386

330

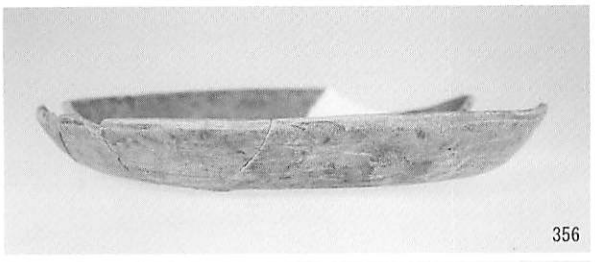
381

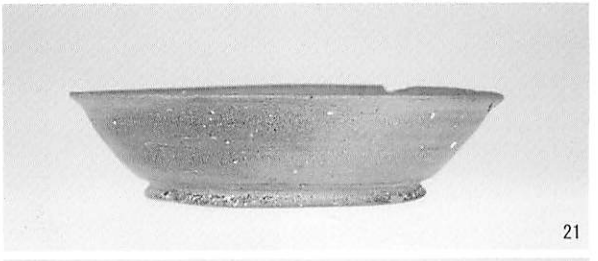
295

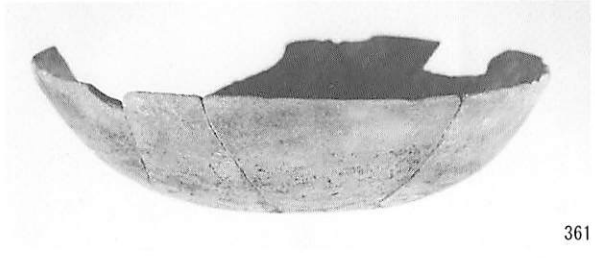
26

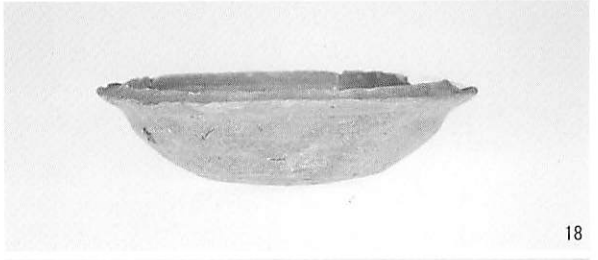
379

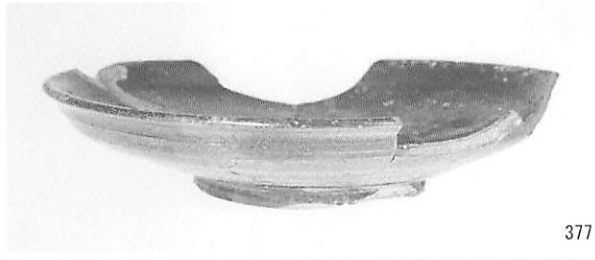
七町②・八町①・ＳＸ820①・旧河川①

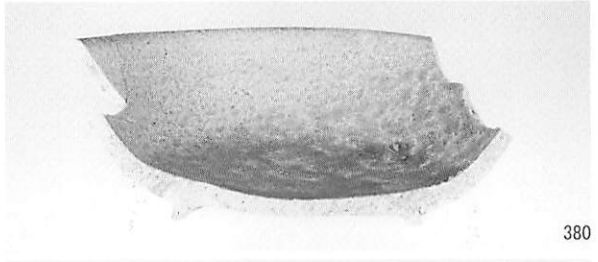

356

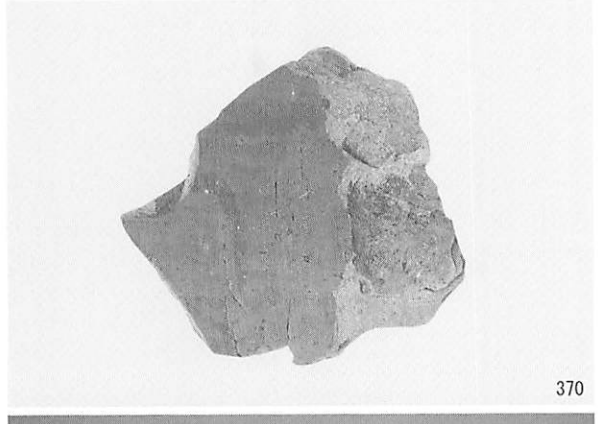

21


361


18

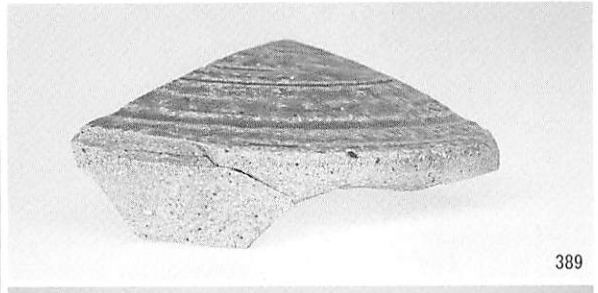

377


380


370

368

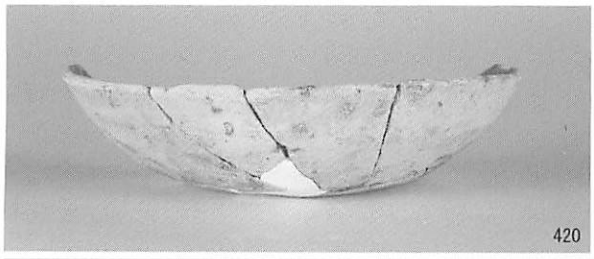
415

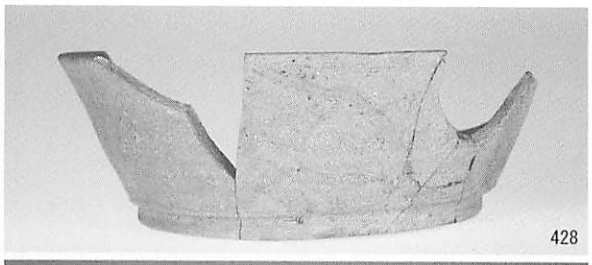

389

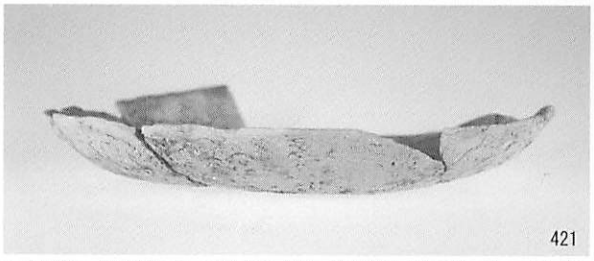
309

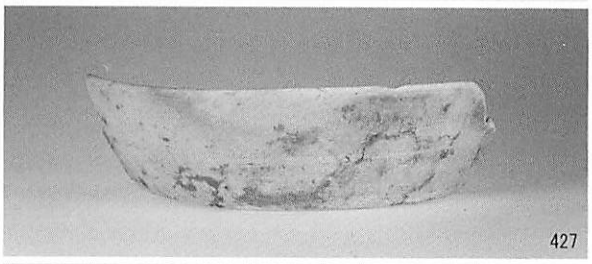
七町③・八町②・九町・ＳＸ820②・旧河川②

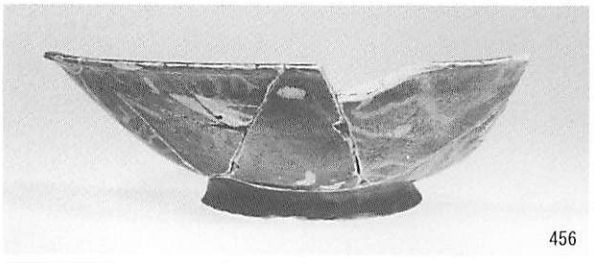
図版第百十二


420

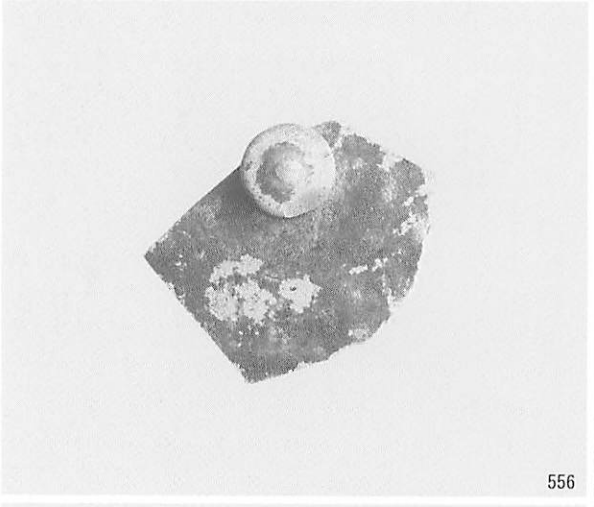

428

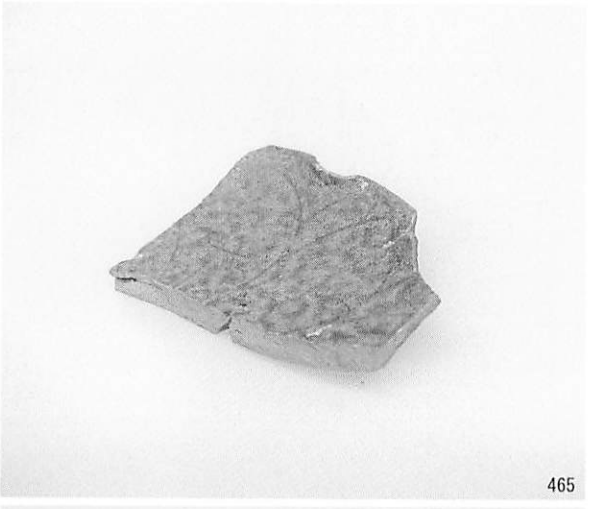

421


427


456

455


556


465

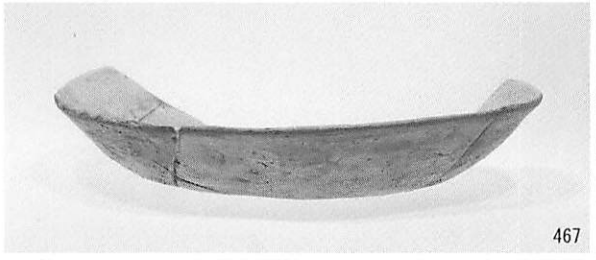
550

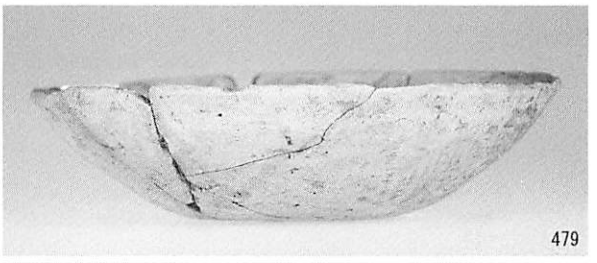
549

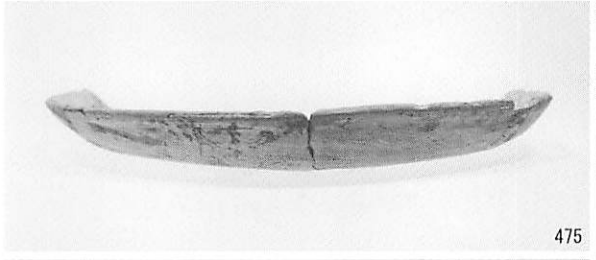
十町①

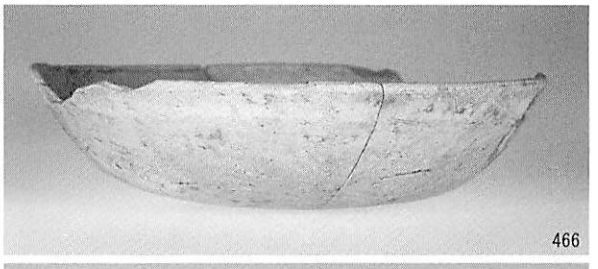
468

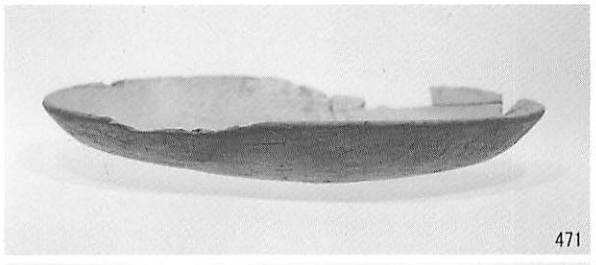
484

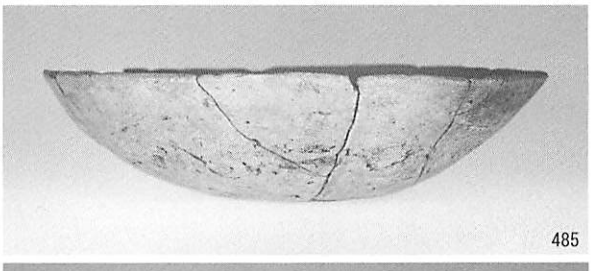

467

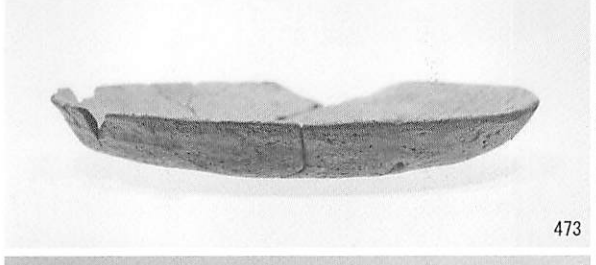

479

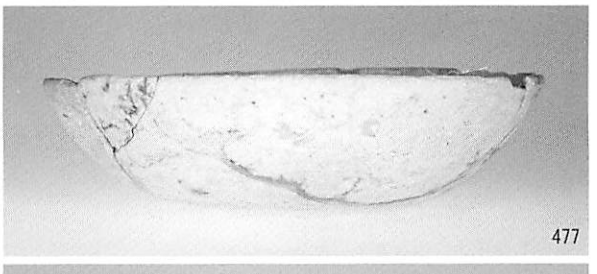

475

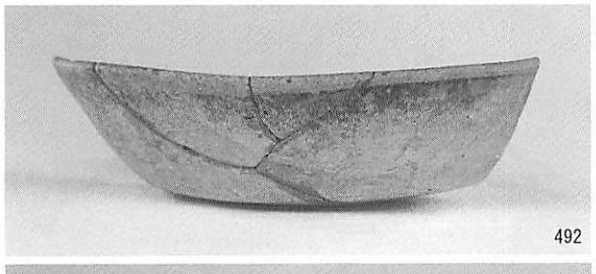

466

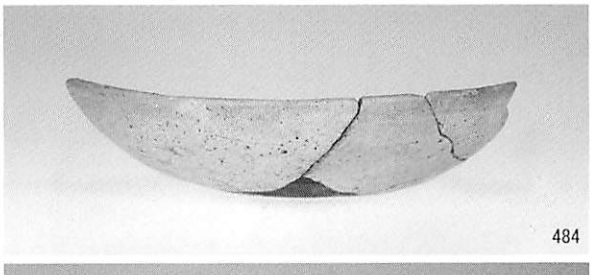

471


485

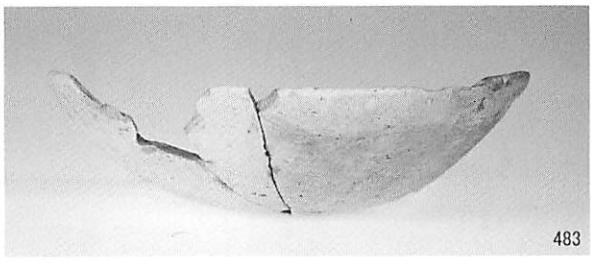

473


477


492


484

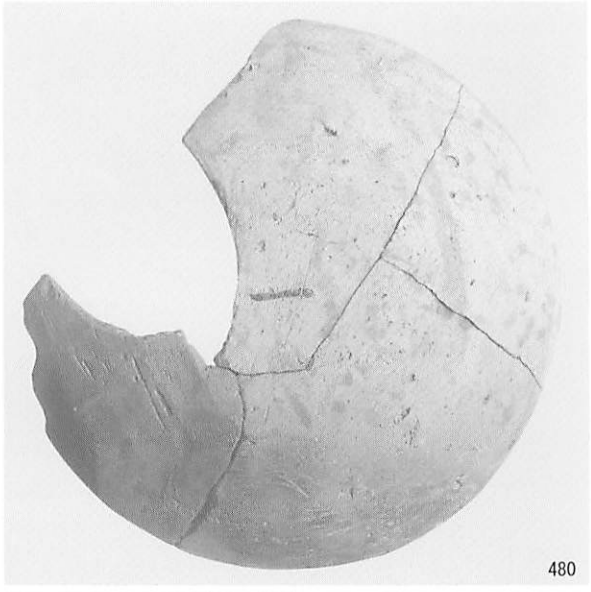
494


483

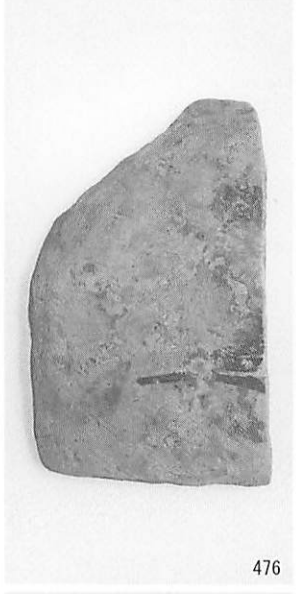
十町②

図版第百十四

473


480

479


476

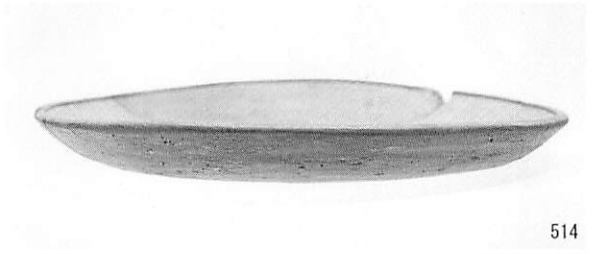
486

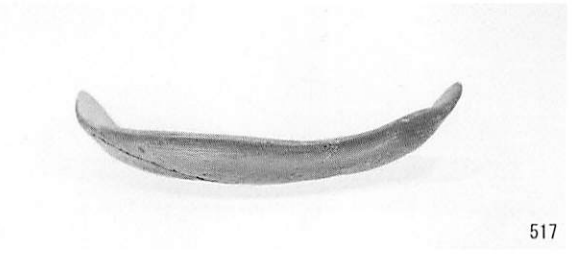
487

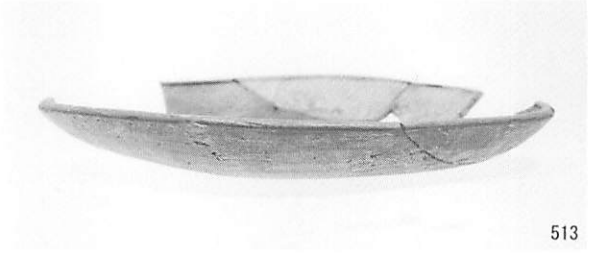
503

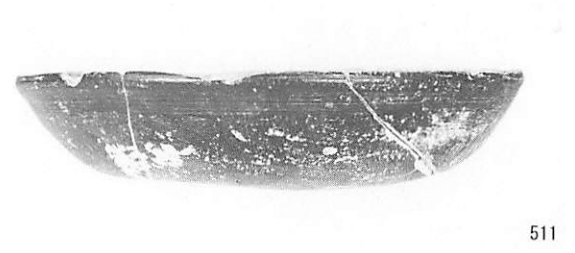
502

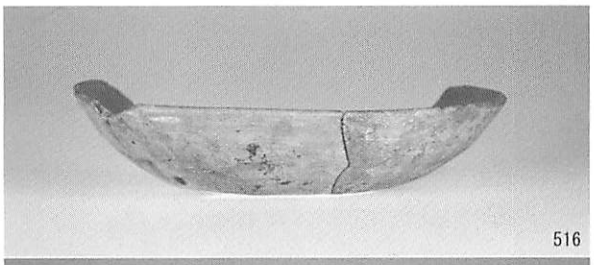
十町③


514


517

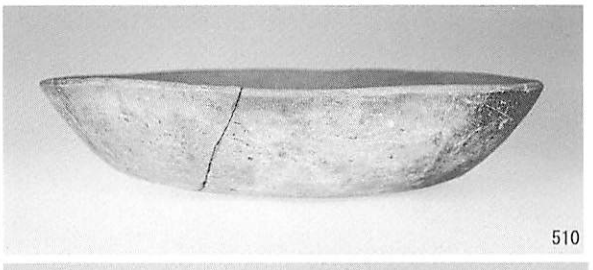

513

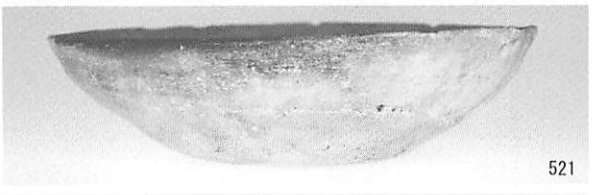

511


516

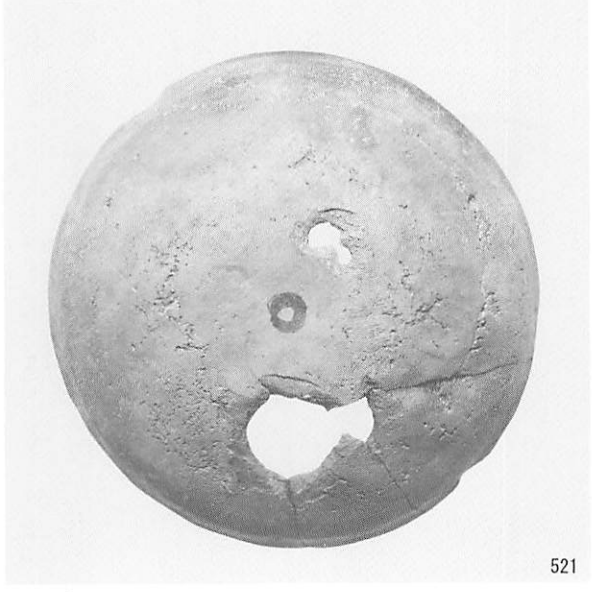
518

517


510

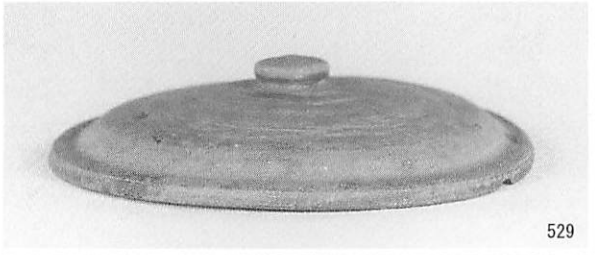

521

522

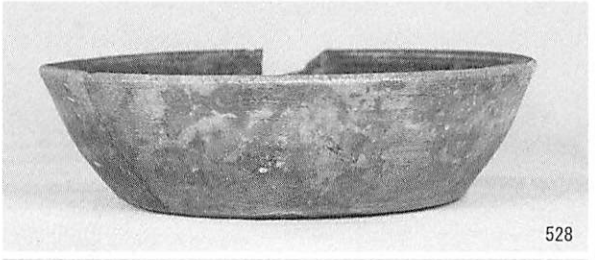

521

522

図版第百十六


529

536


528

527

538

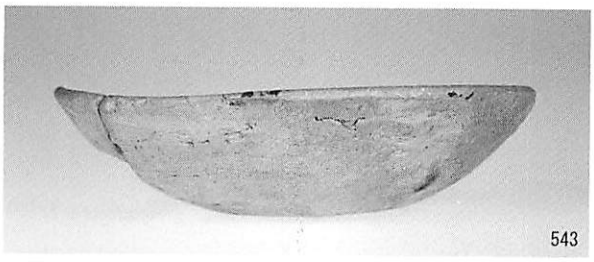
526

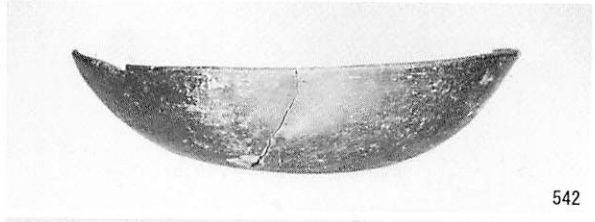
531

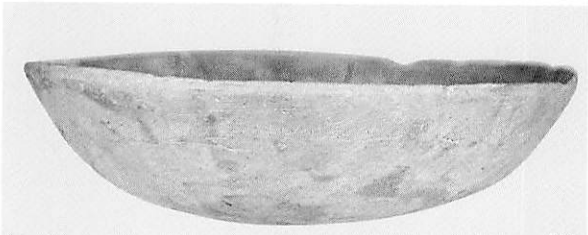
534

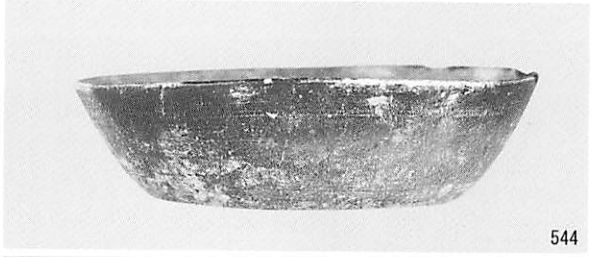
523

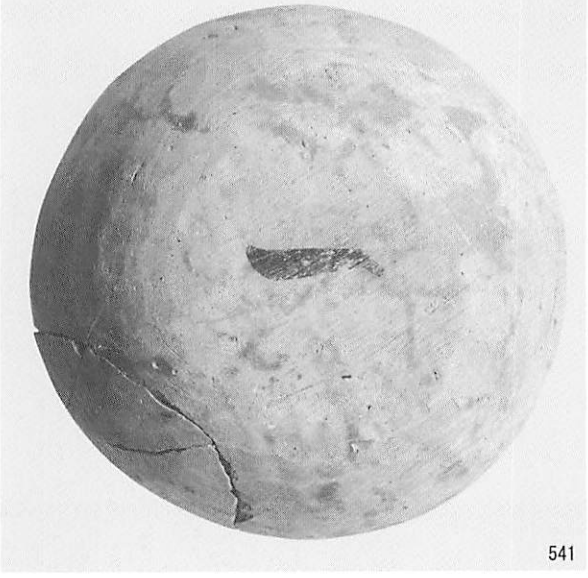
十町⑤

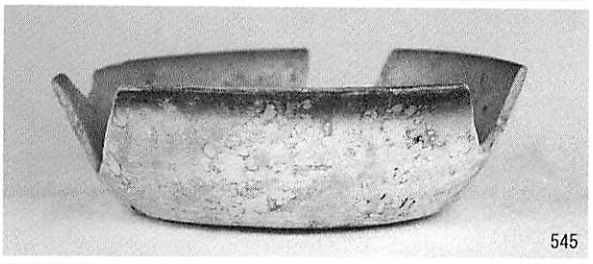

543


542


541

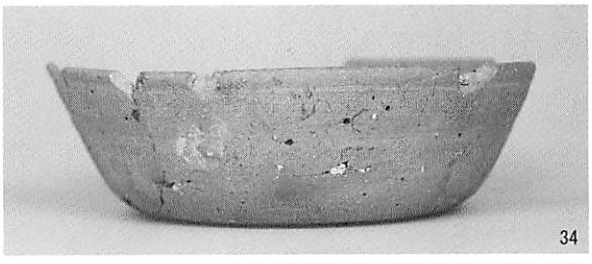

544


541


545

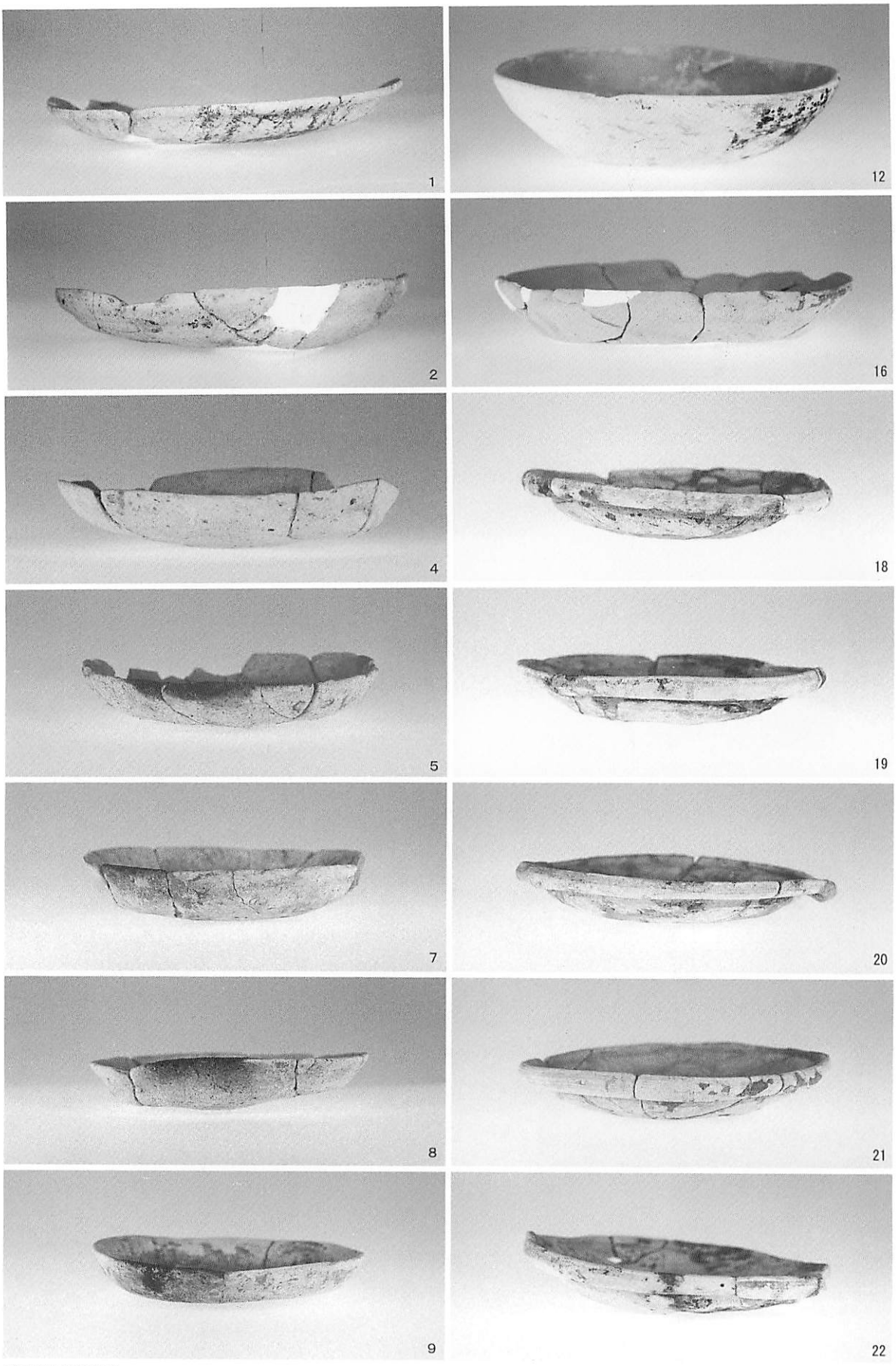
546

30

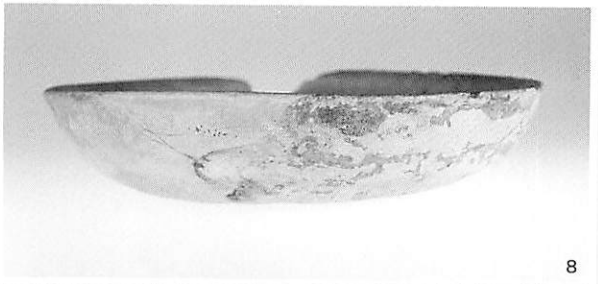

34

28

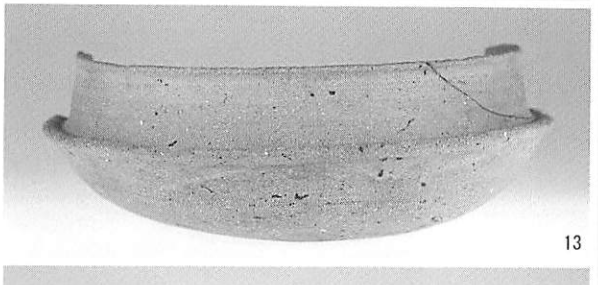
図版第百十八

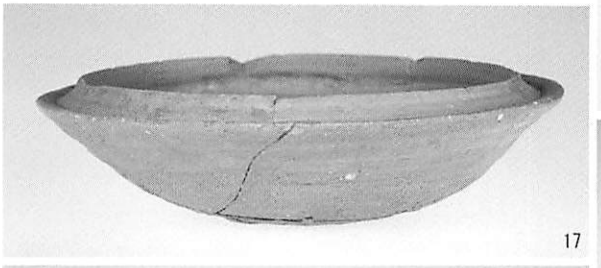


平安時代以降


8

9


13


17

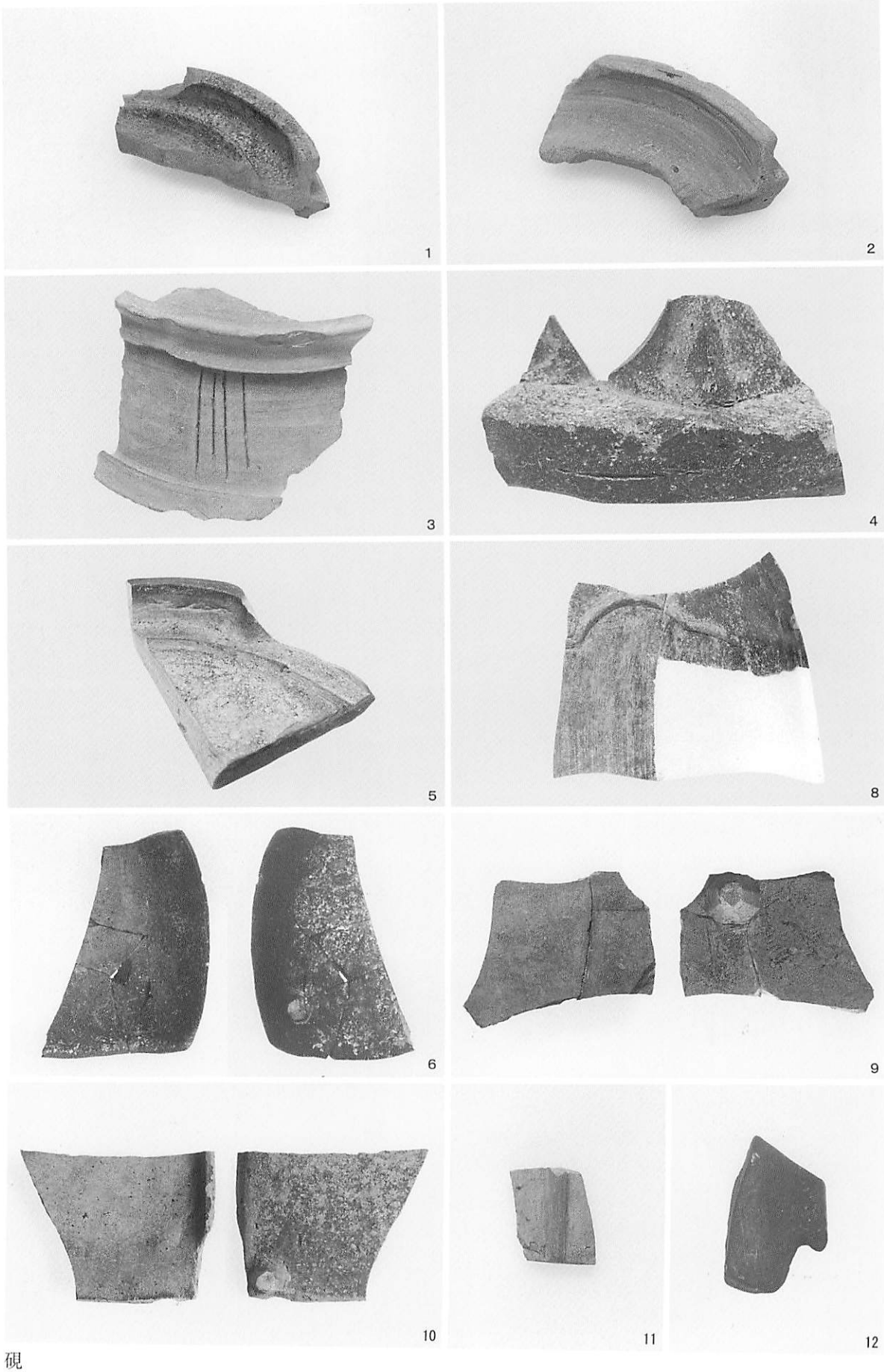
11

1

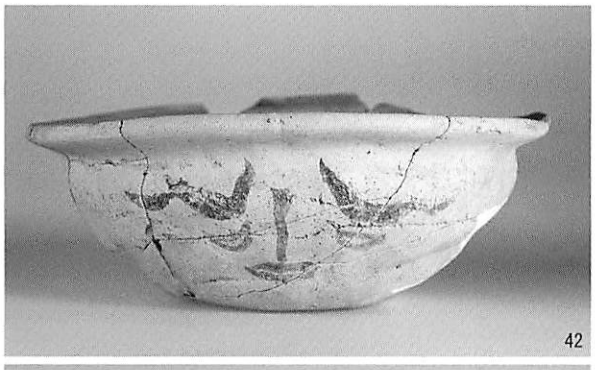
25

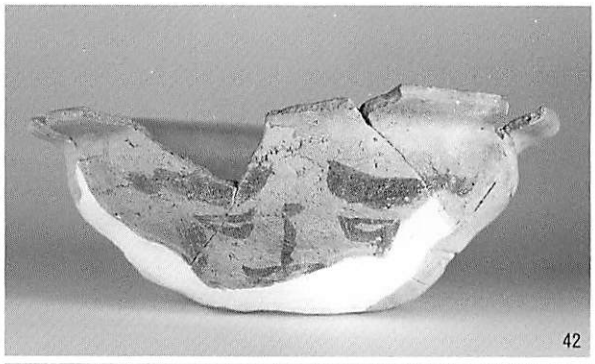
4

12



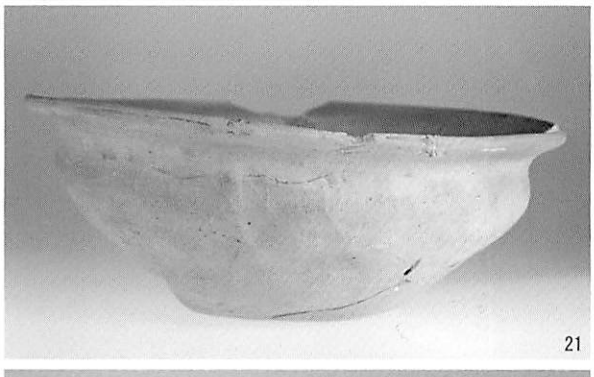
硯


42


42

5

2

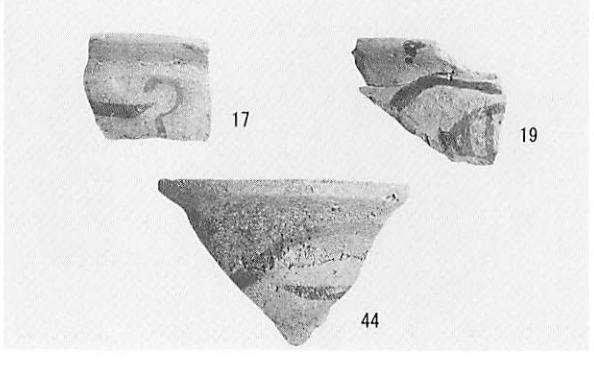

21

38

52

22

27

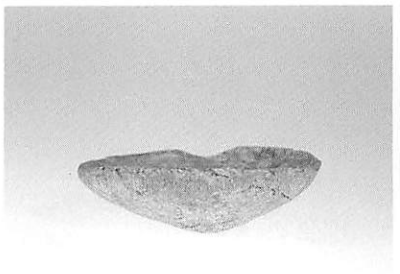

17

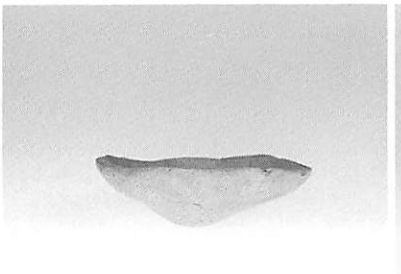
19

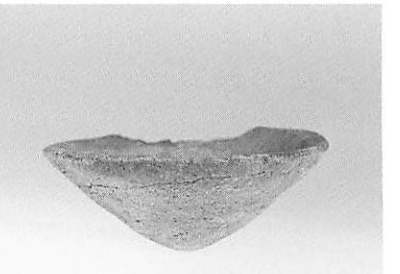
44

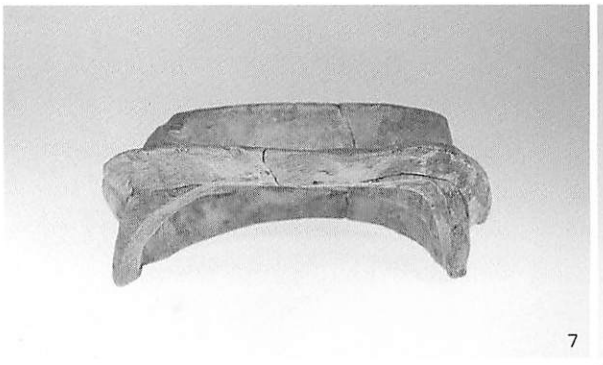
土製品（祭祀関連遺物）

図版第百二十二


9


11


13

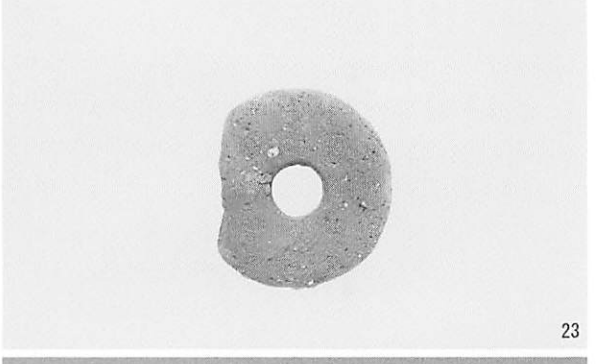

7

8

1

1

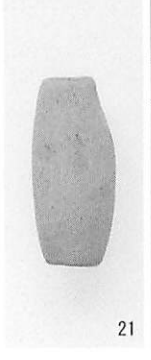
4

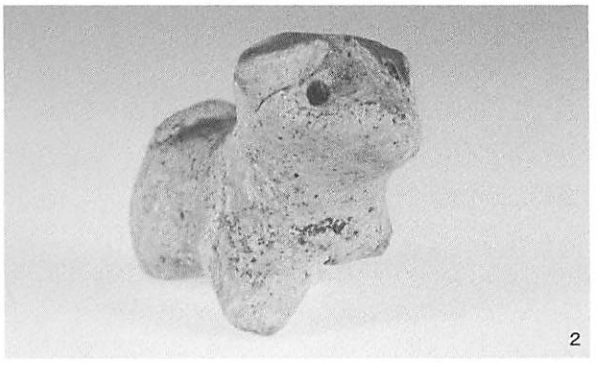

23

22

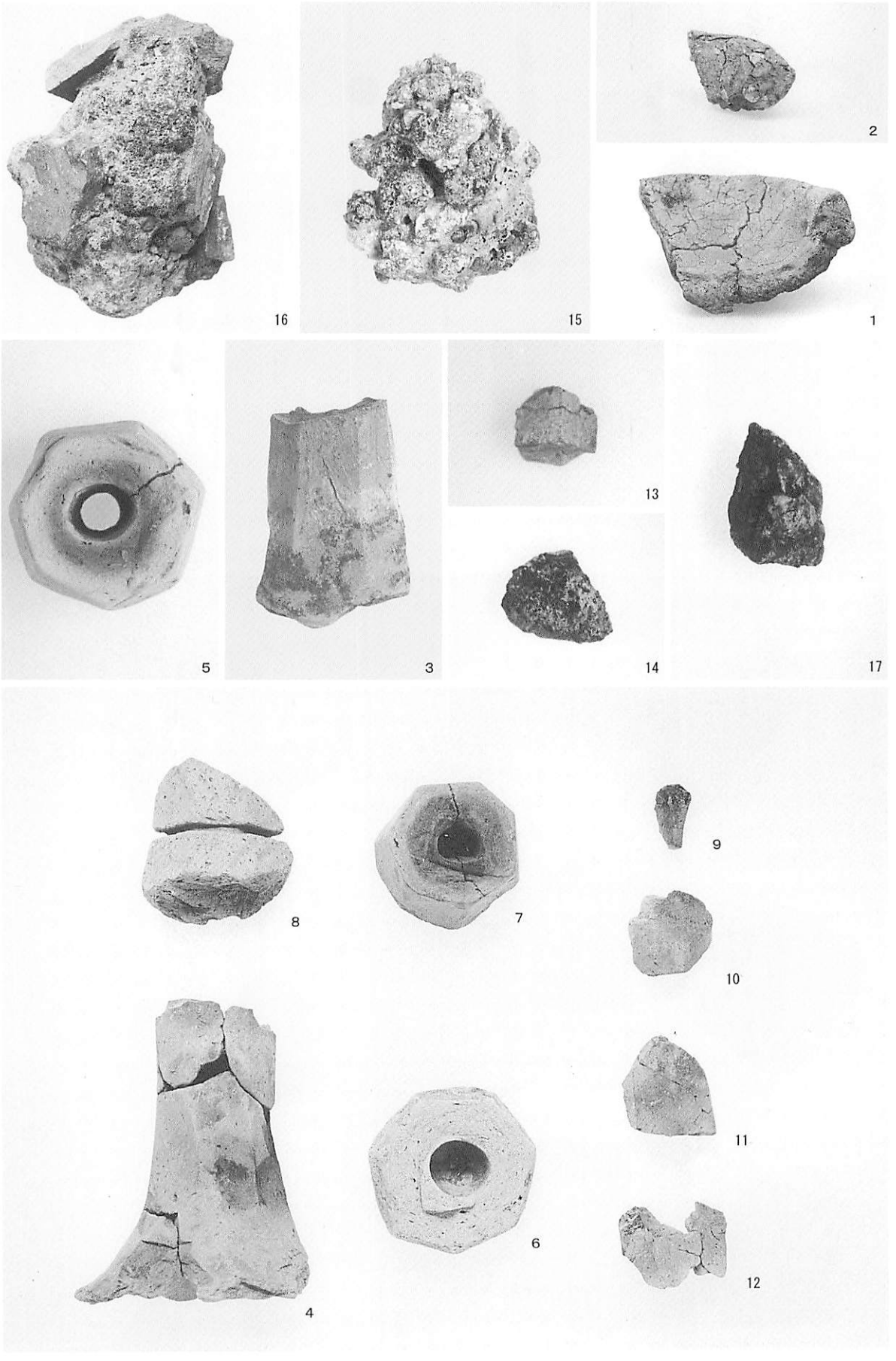
20

19


21

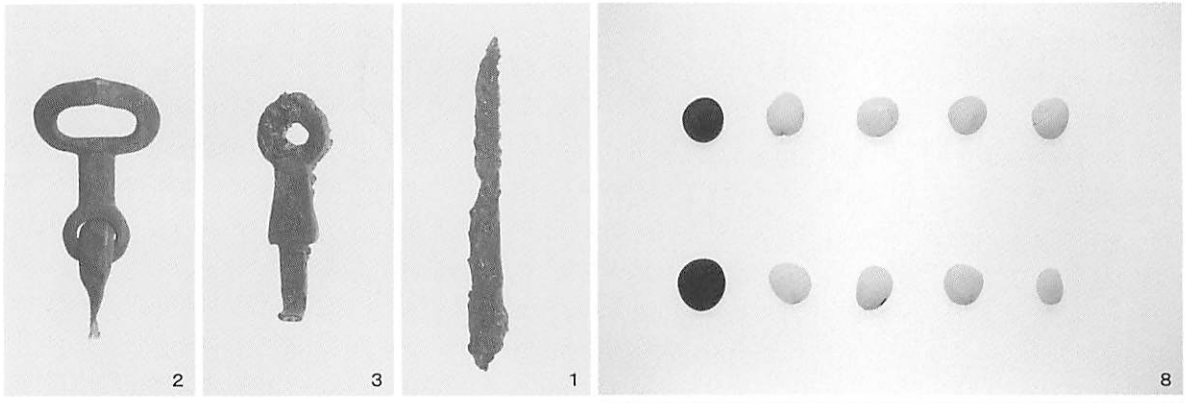

2

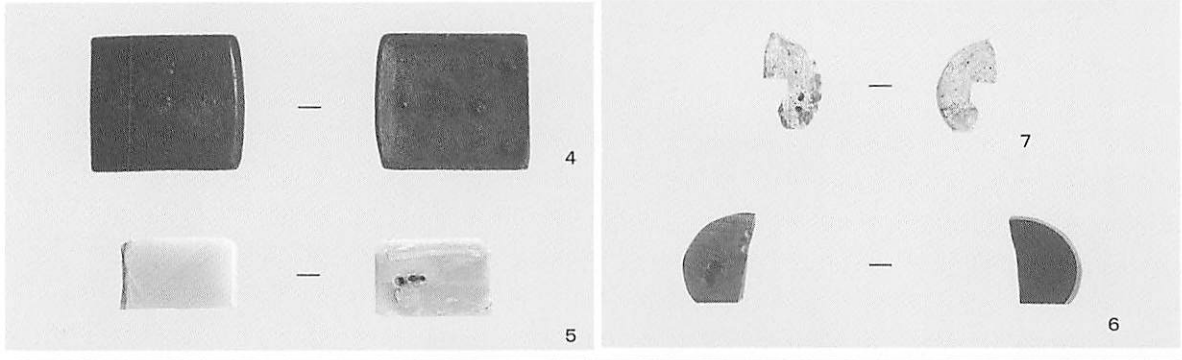
土製品（その他）

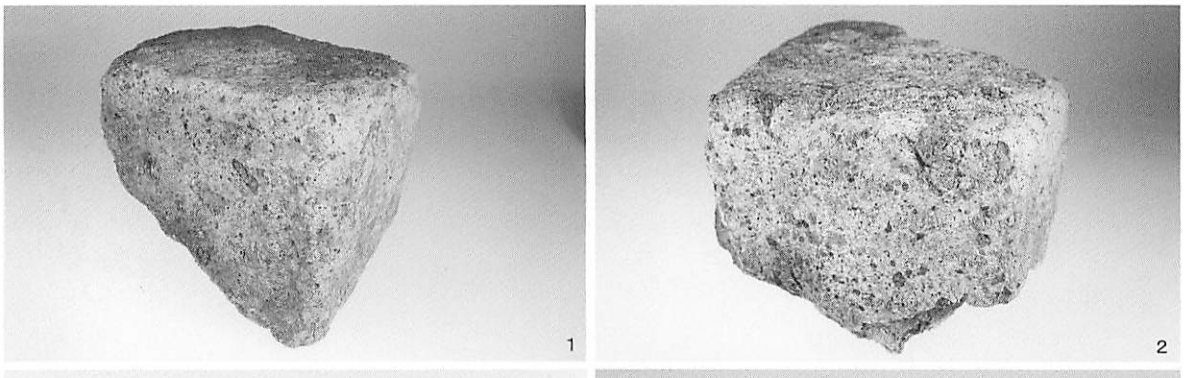


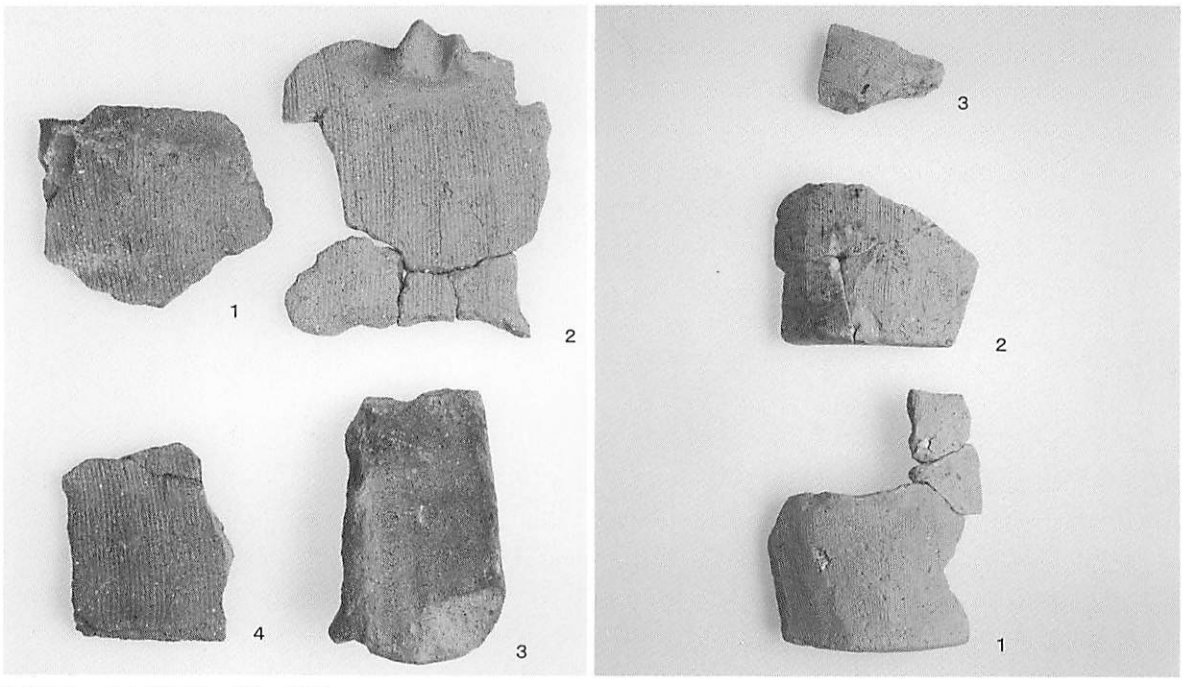
金属加工関連遺物

図版第百二十四



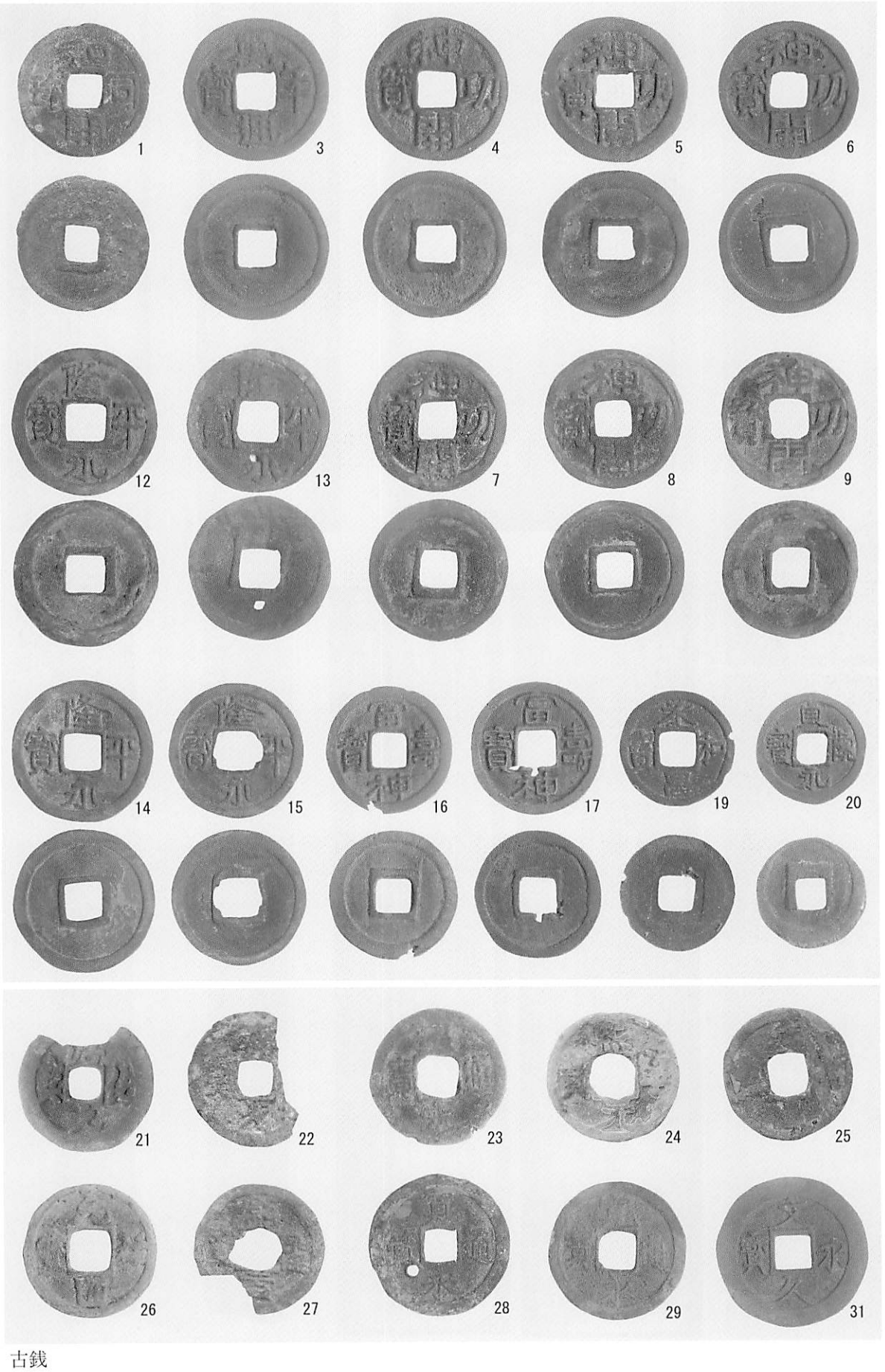






石製品・金属製品・竈・埴輪

図版第百二十五



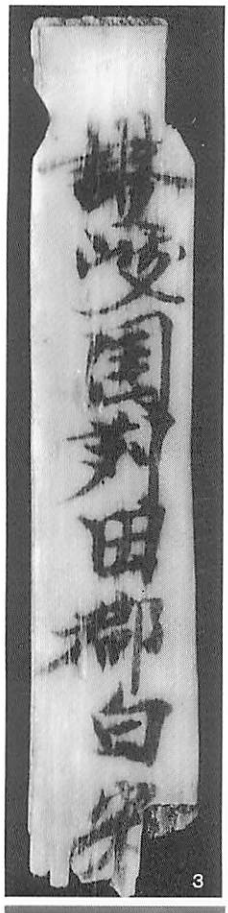
古銭

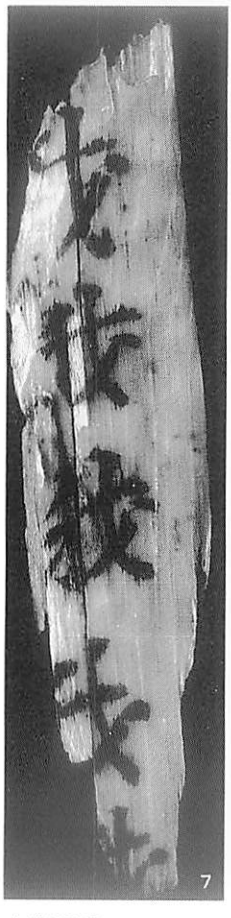
図版第百二十六

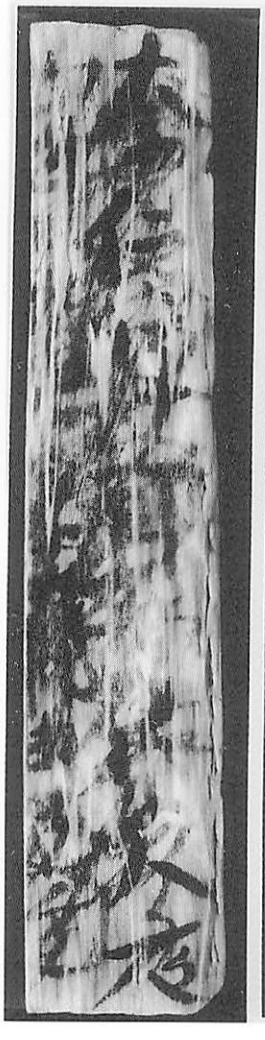
1 2

4

9


3

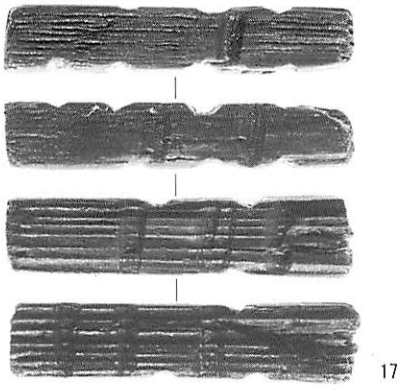

7


8

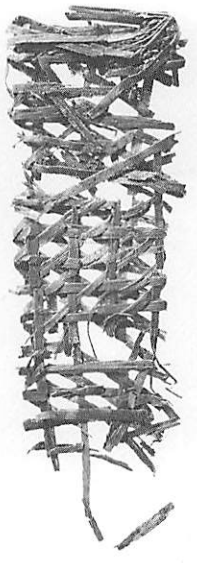
5

木製品①

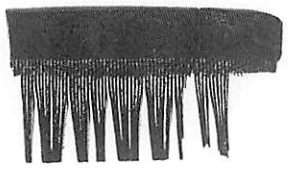
図版第百二十七

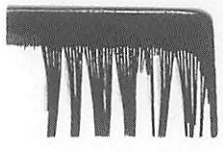

17

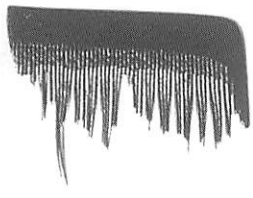
25

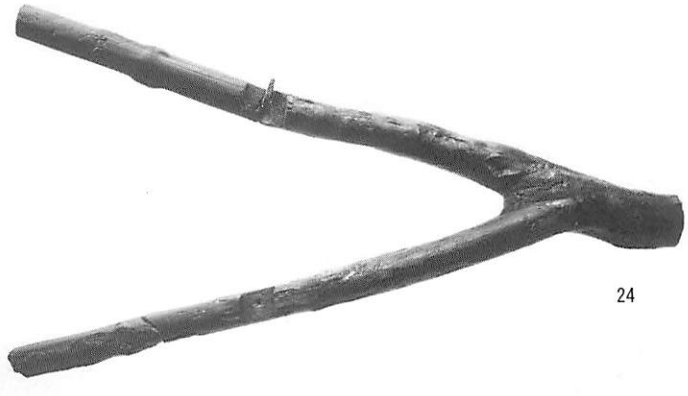

19

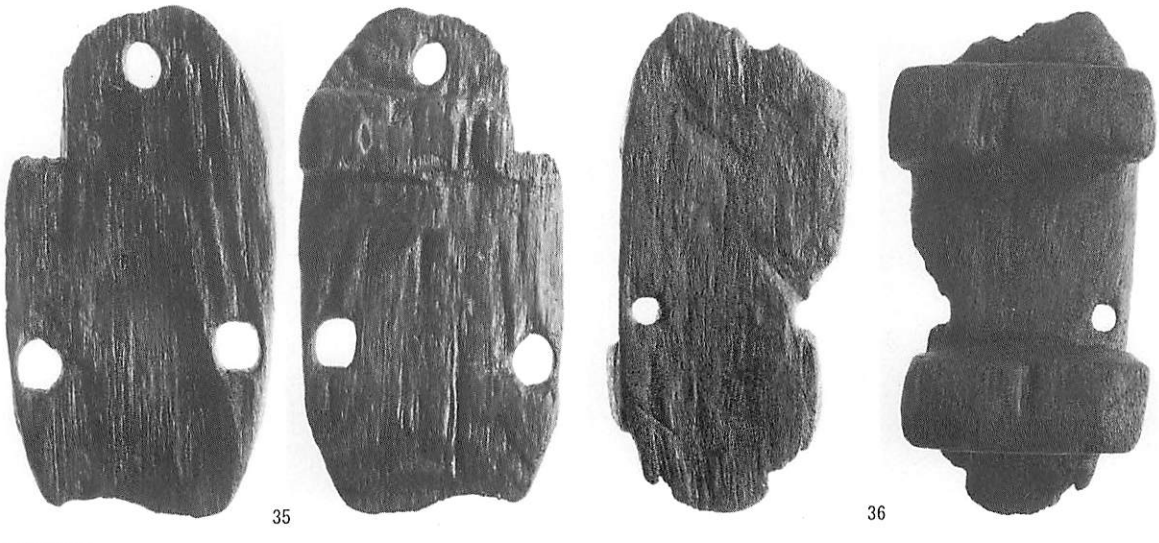
20


26


27

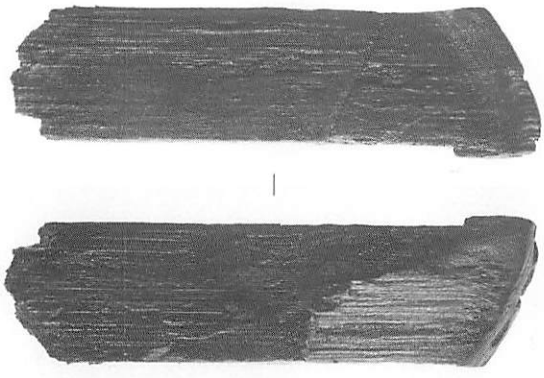

29


24


35 36

木製品②

図版第百二十八



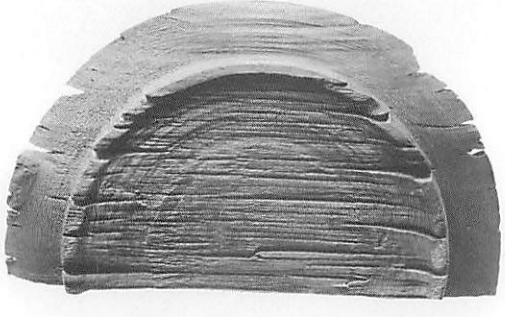
41

42

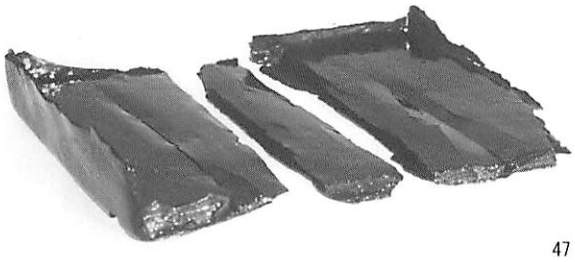
43

44

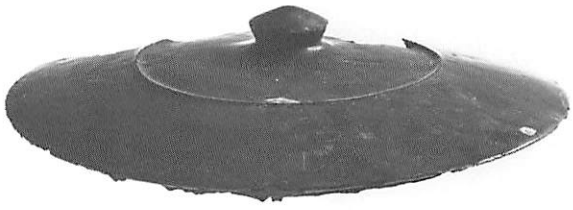
45



木製品③



47

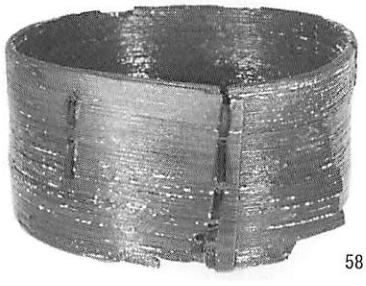


54

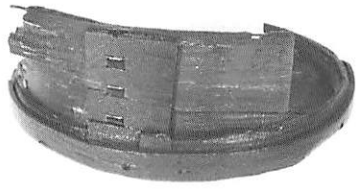
49

55

48

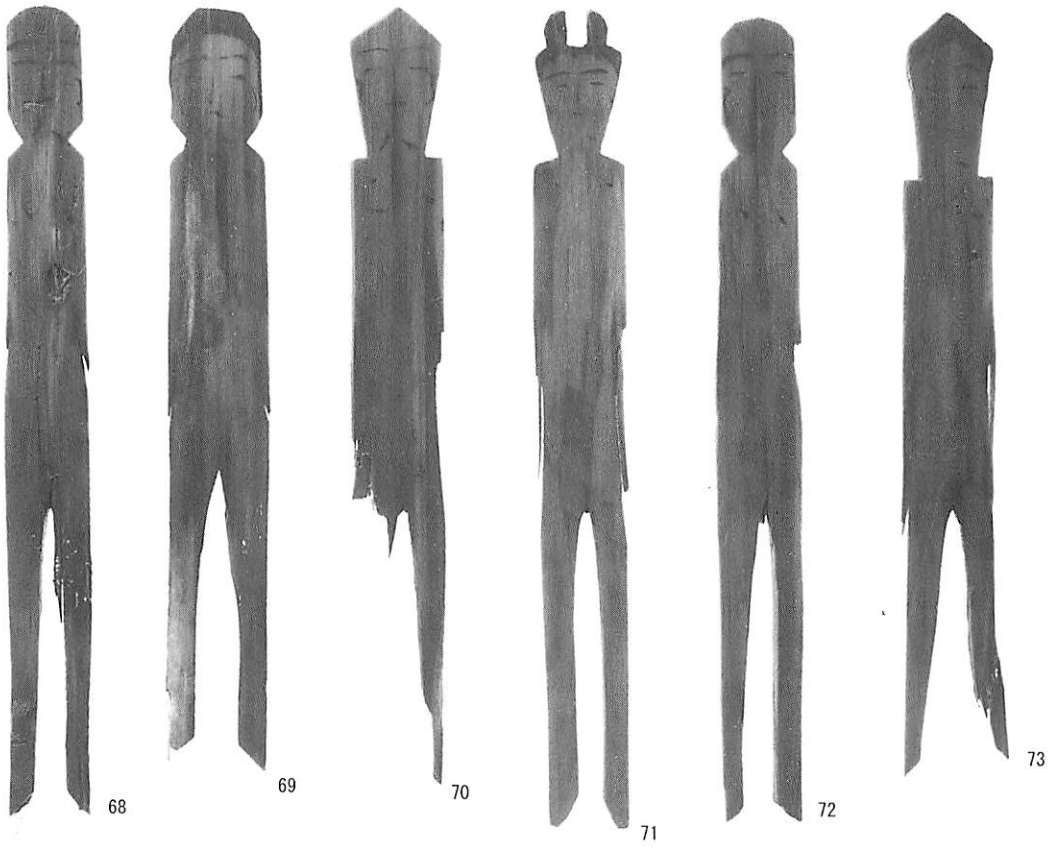


58



59

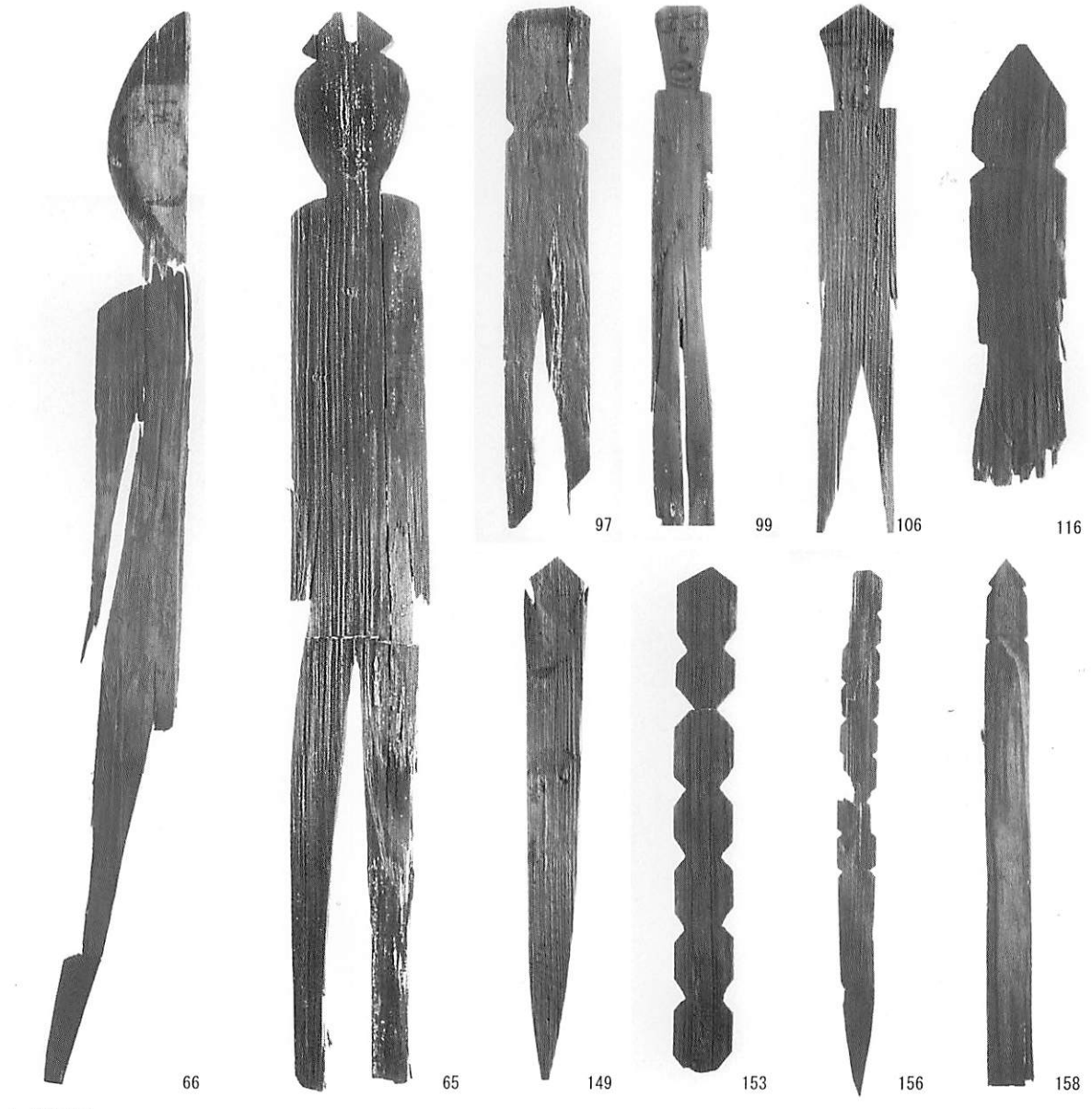
62



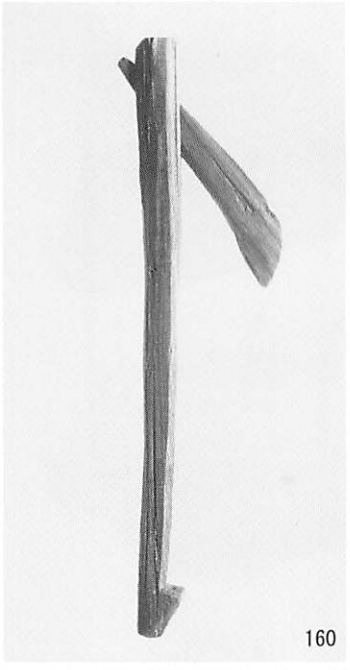
68 69 70 71 72 73

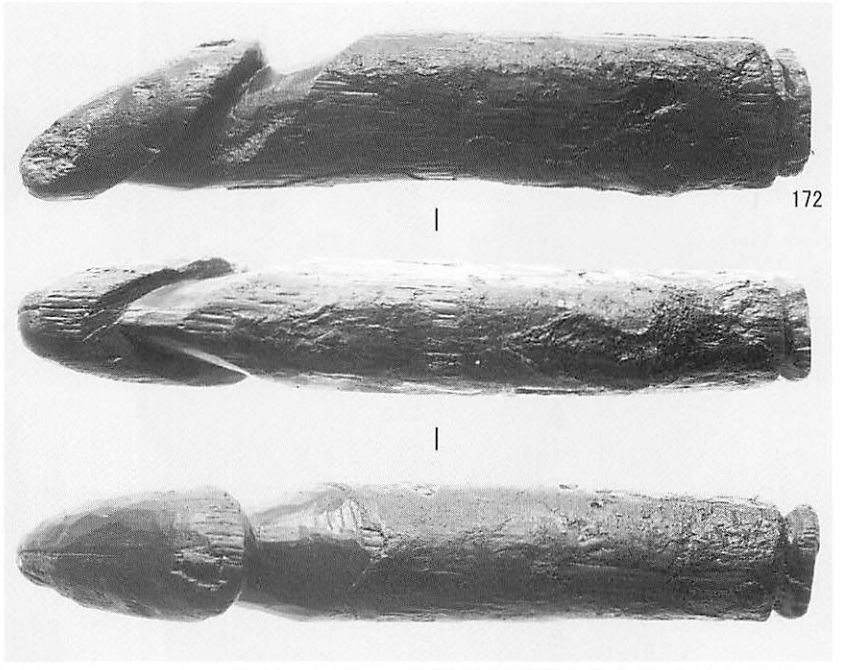
木製品④

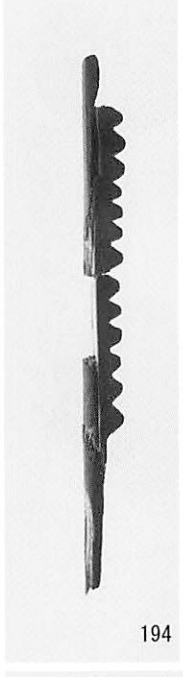
図版第百三十



木製品⑤

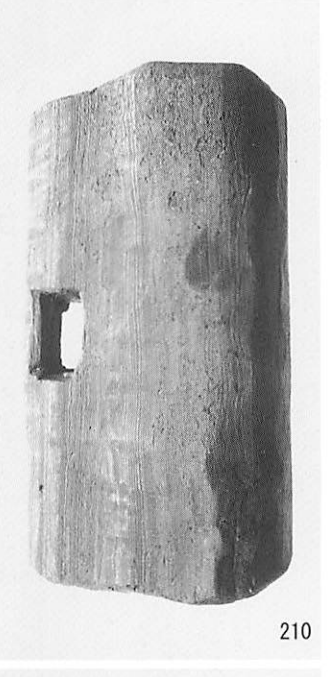

160

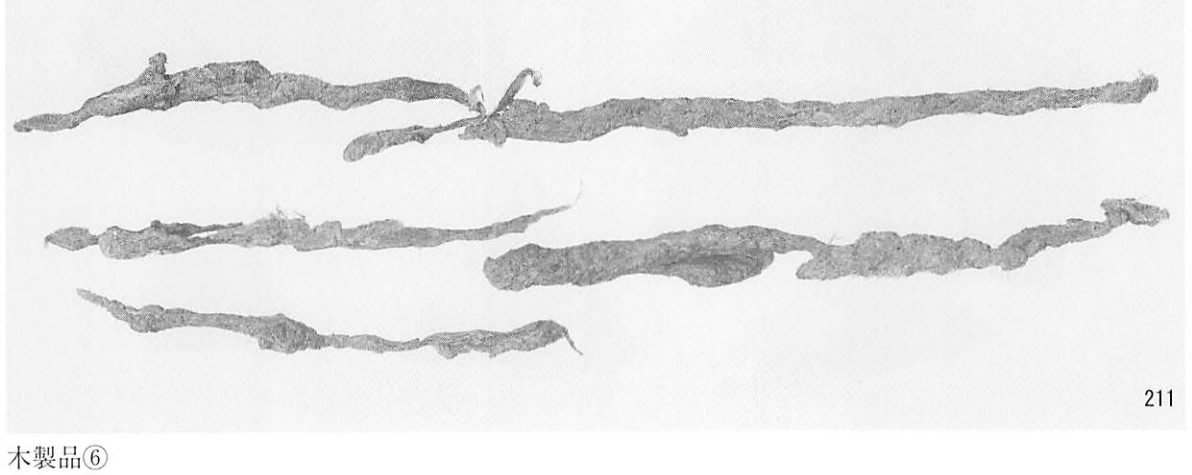

172


194

18

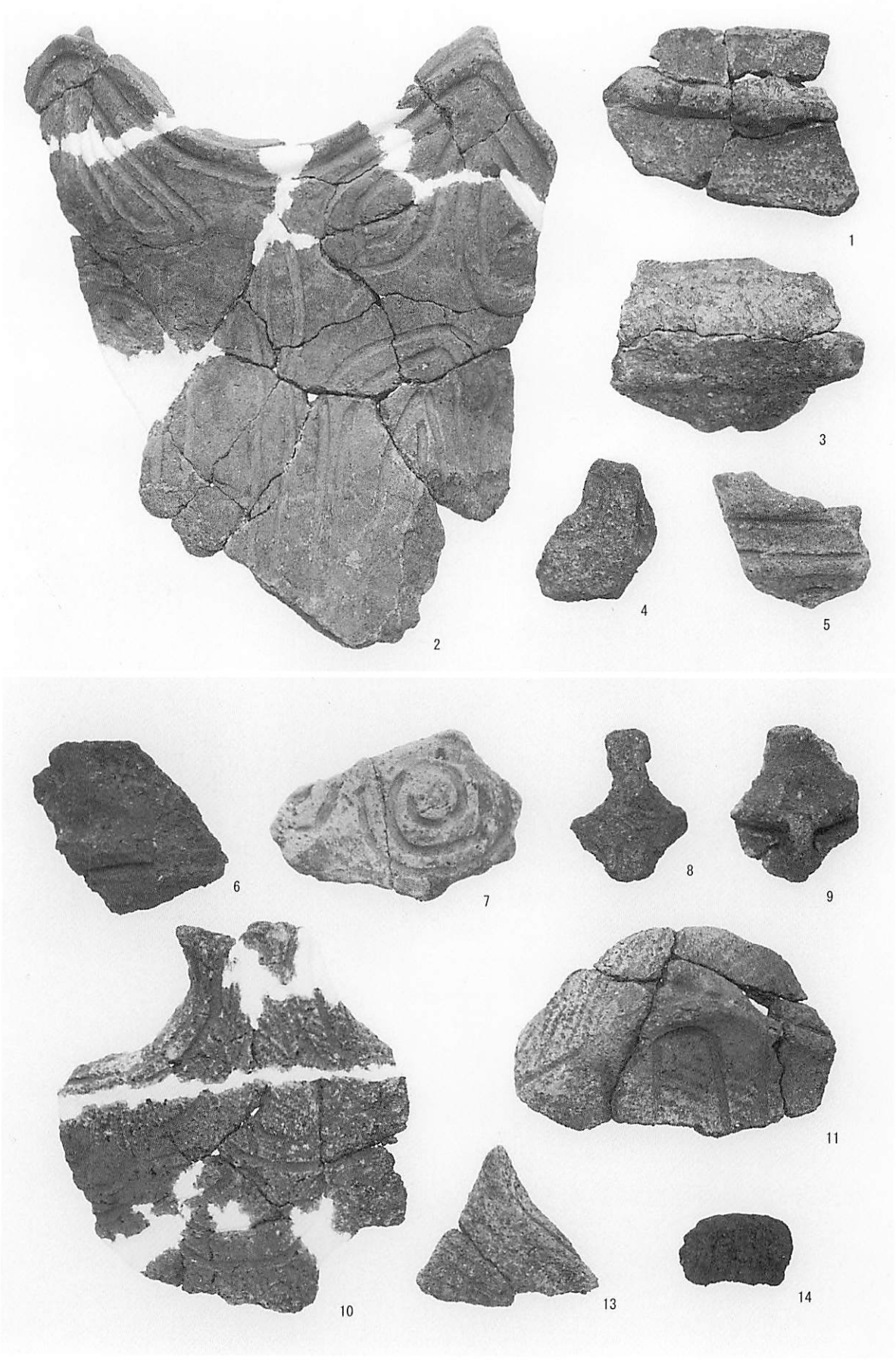
209


210

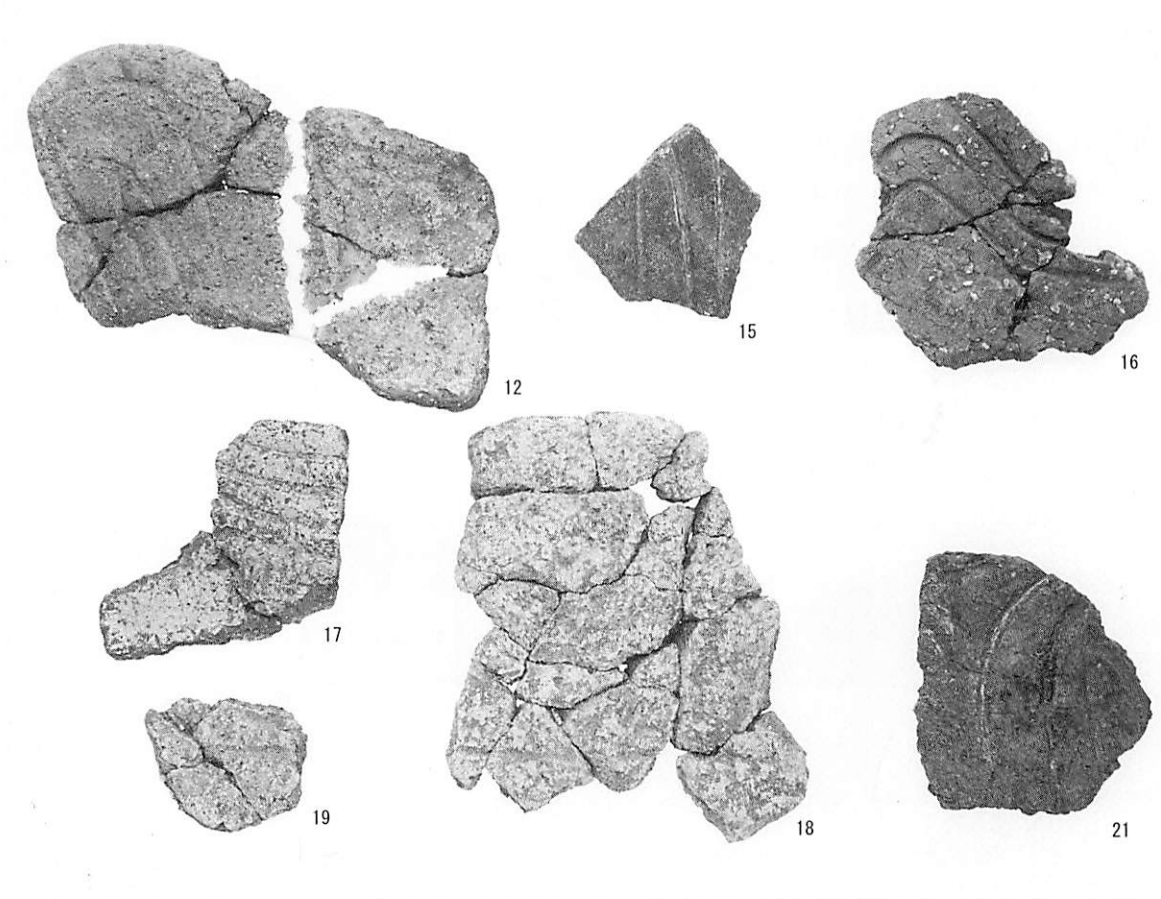

211

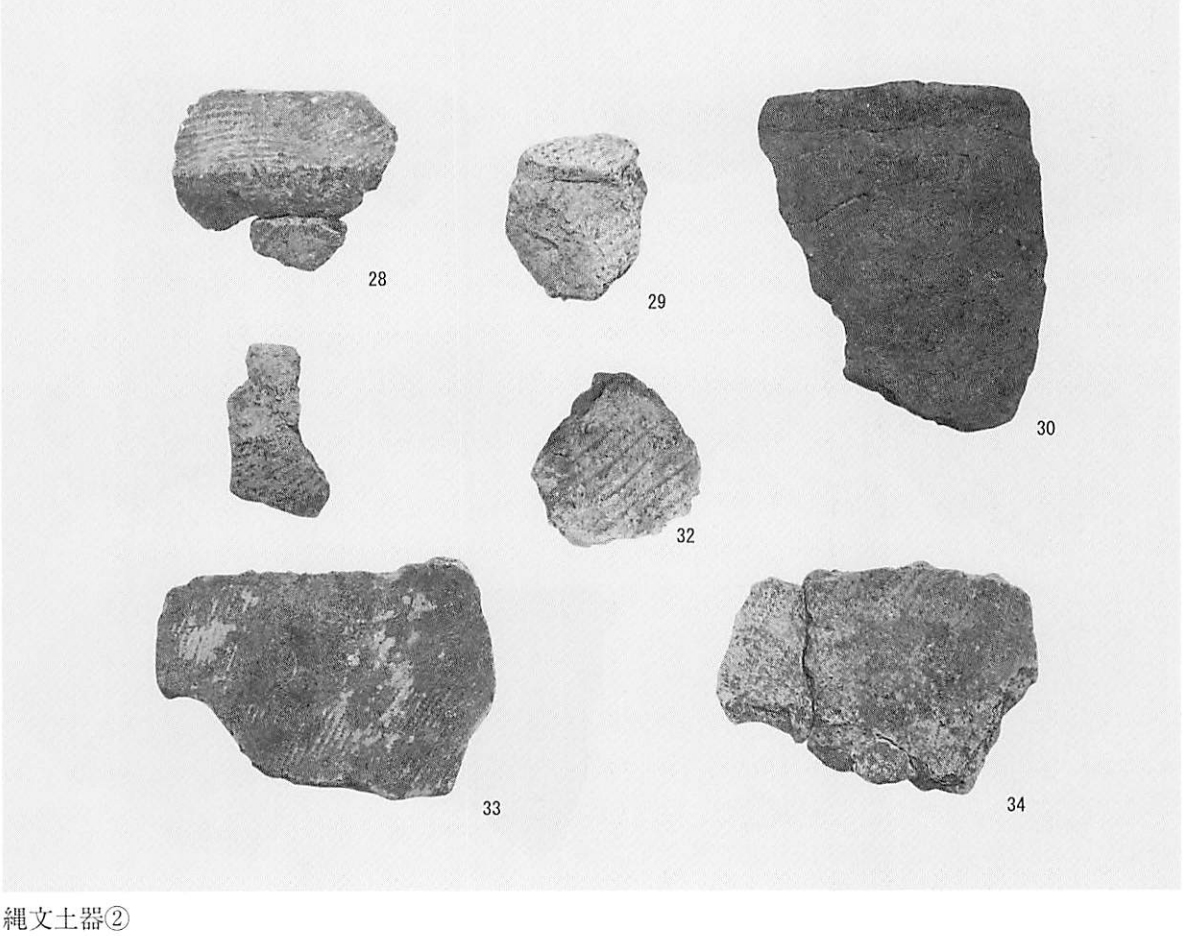
木製品⑥

図版第百三十二



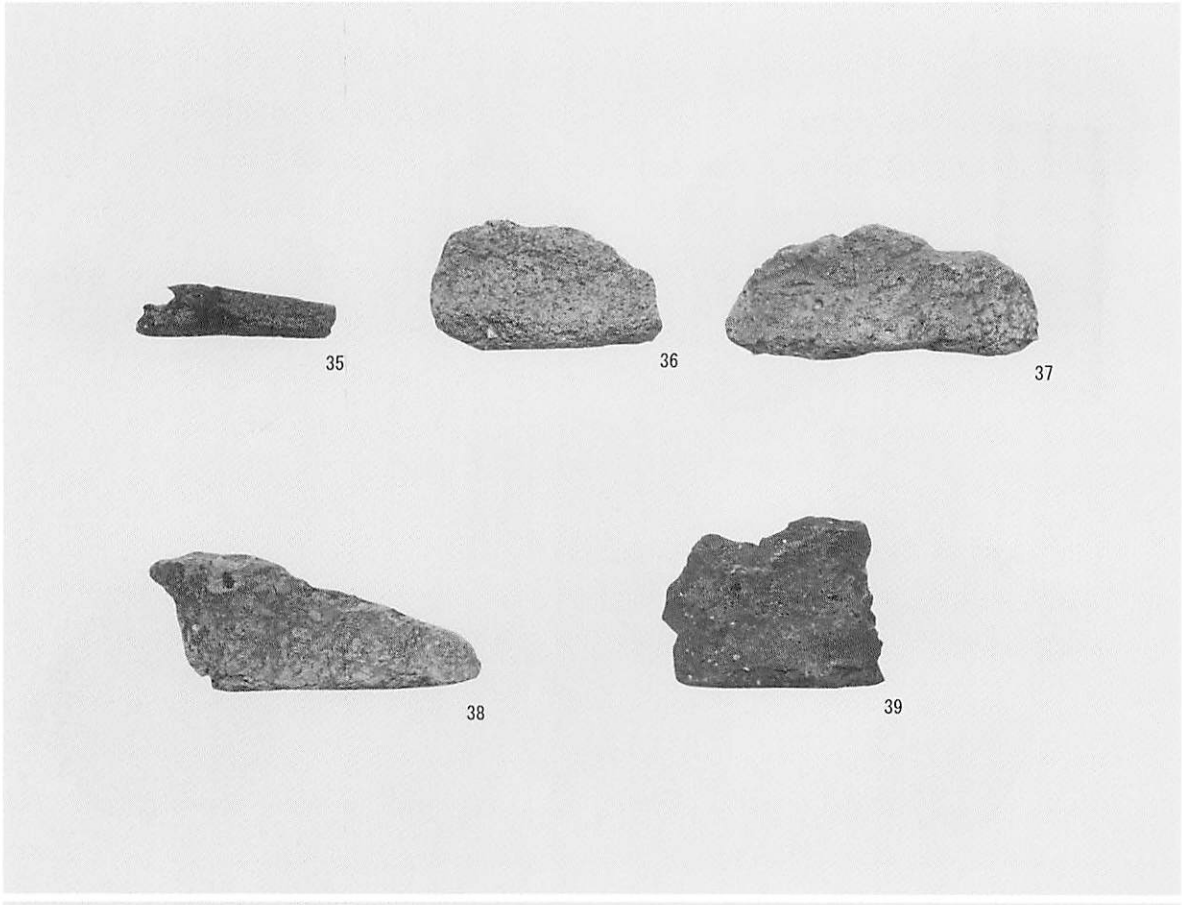
縄文土器①

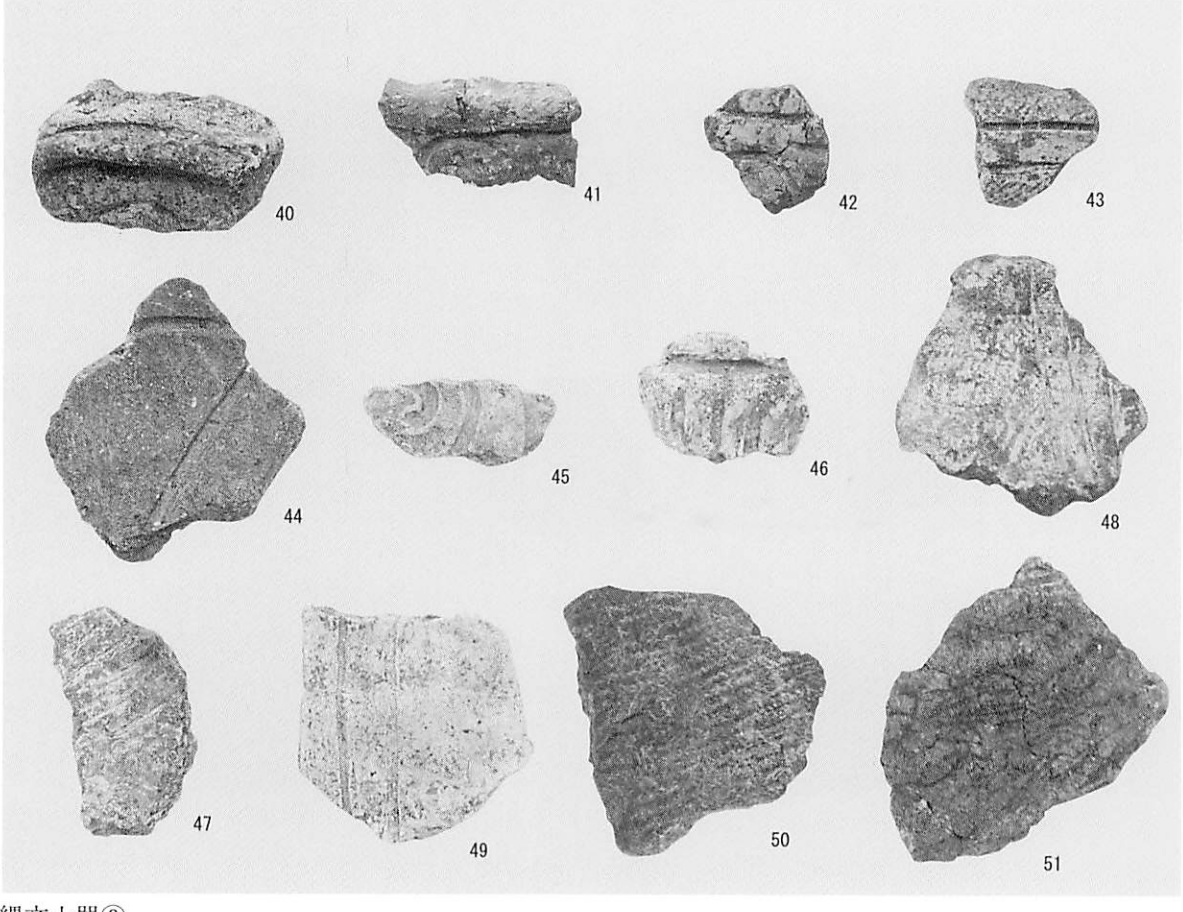




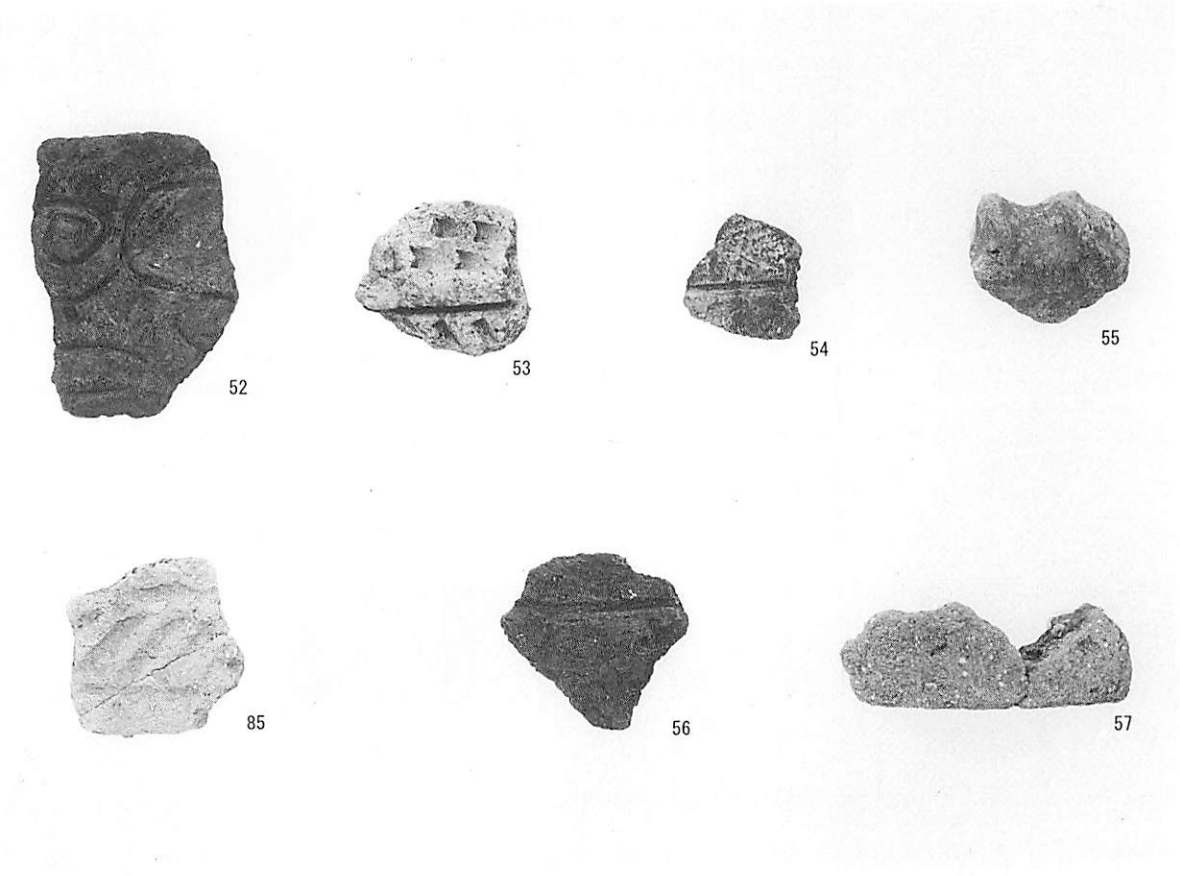
縄文土器②

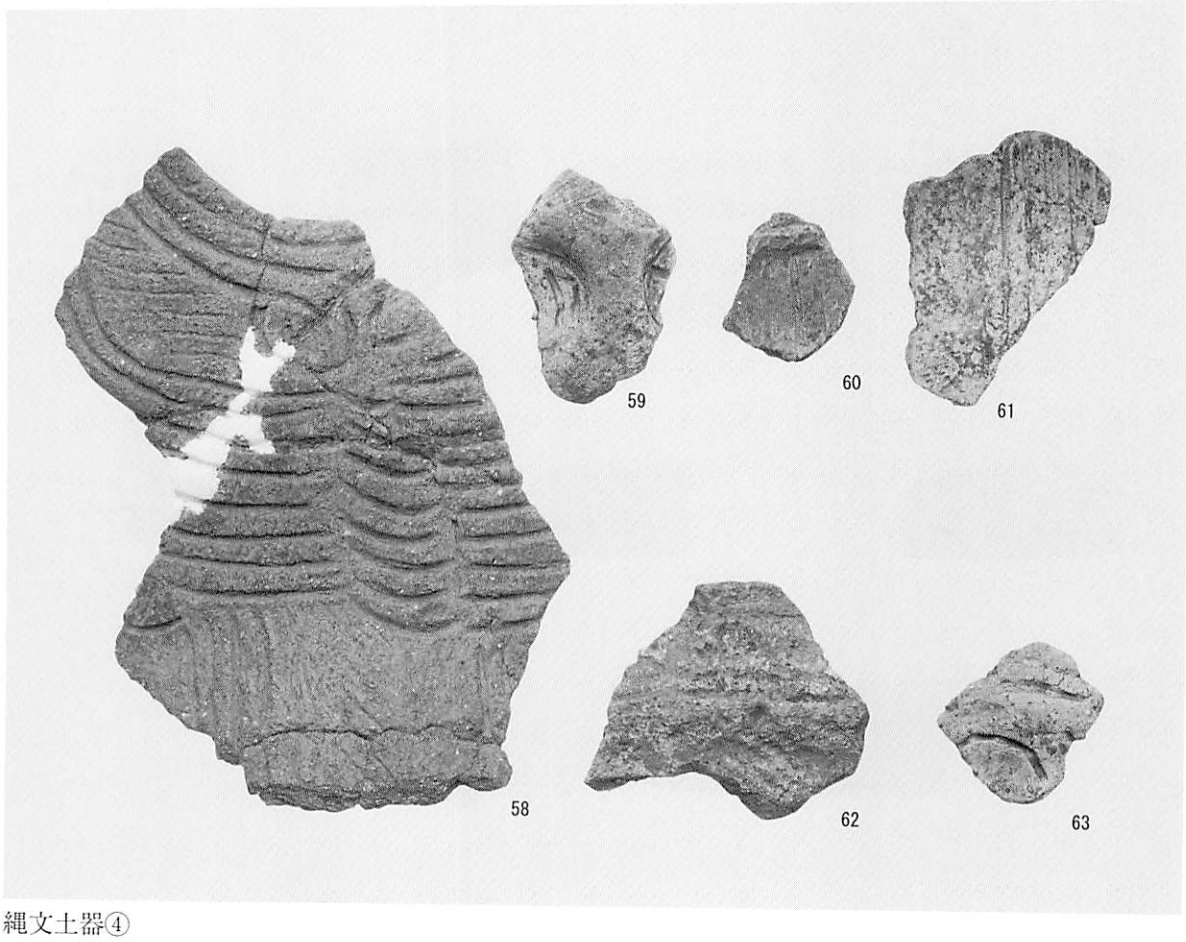
図版第百三十四





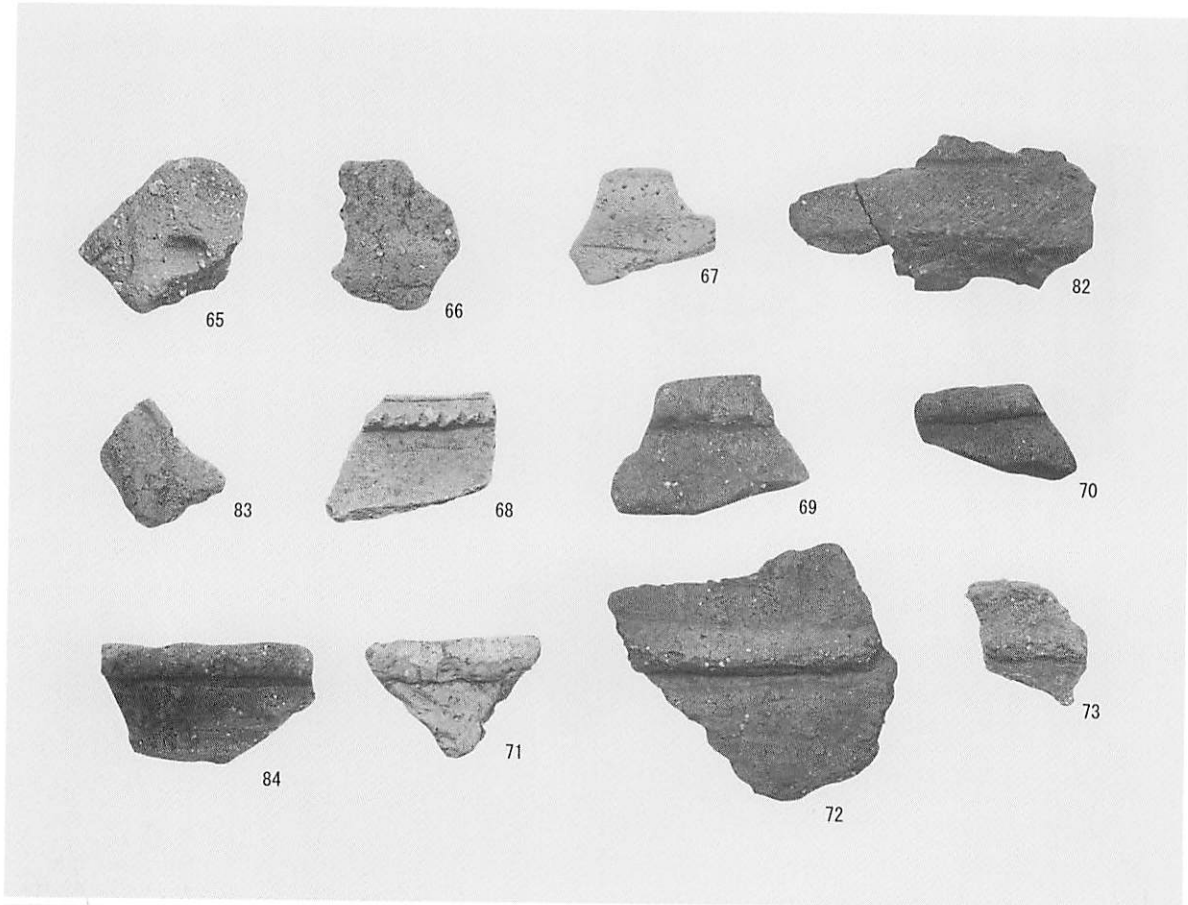
縄文土器③

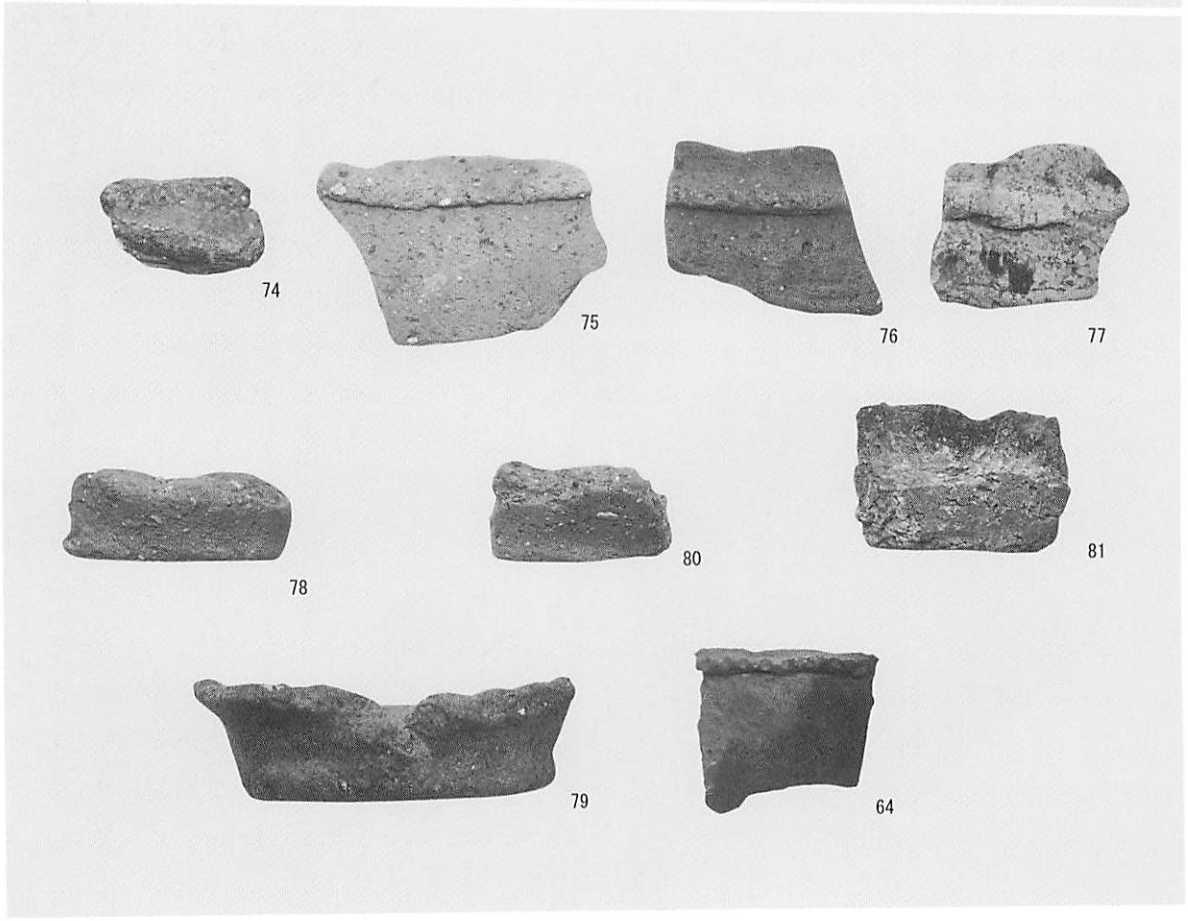




縄文土器④

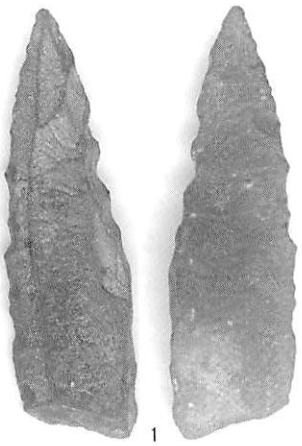
図版第百三十六





縄文土器⑤

図版第百三十七


1

2

4

5

7

9

10

6

15

19

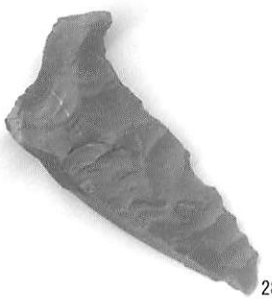
27

26

14

21

23


28

29

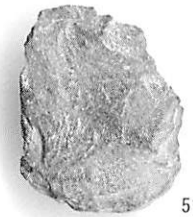
31

石器①

図版第百三十八

37

50


51

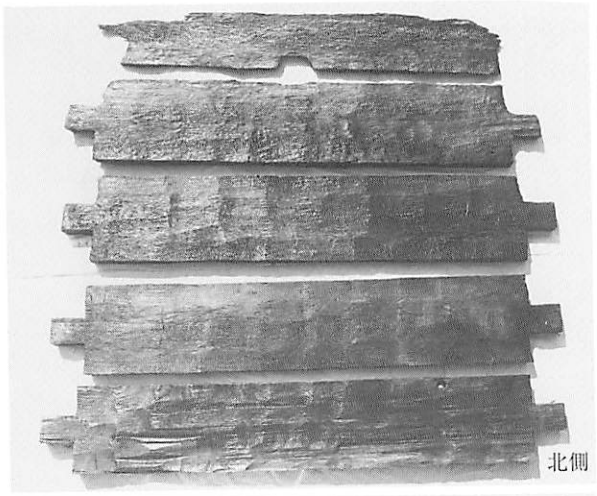
54

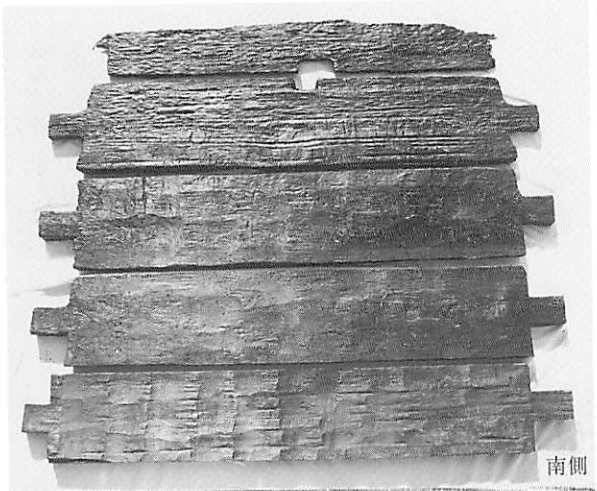
57

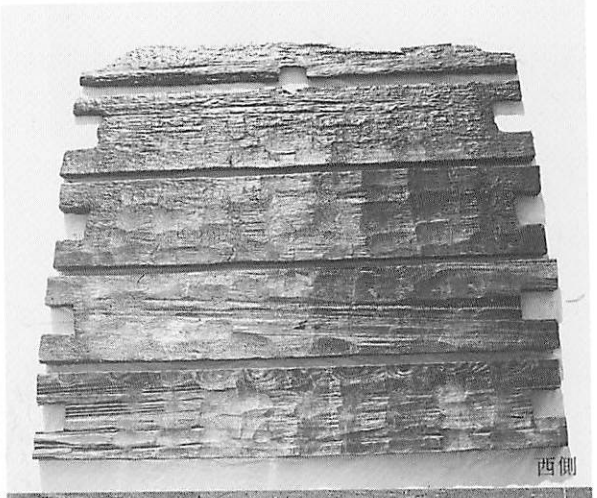
56

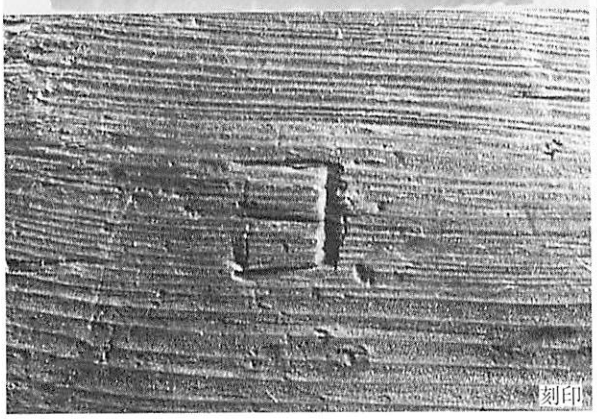
53

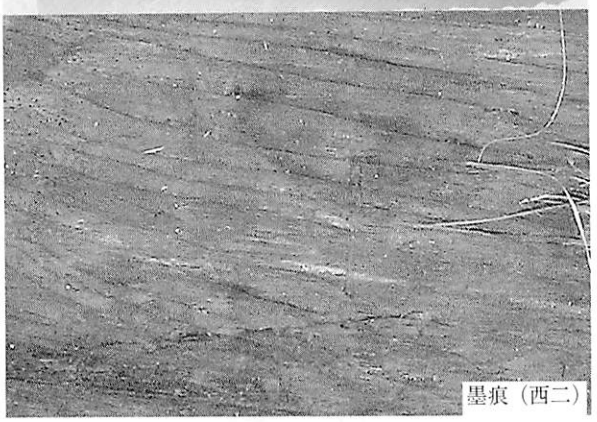
55

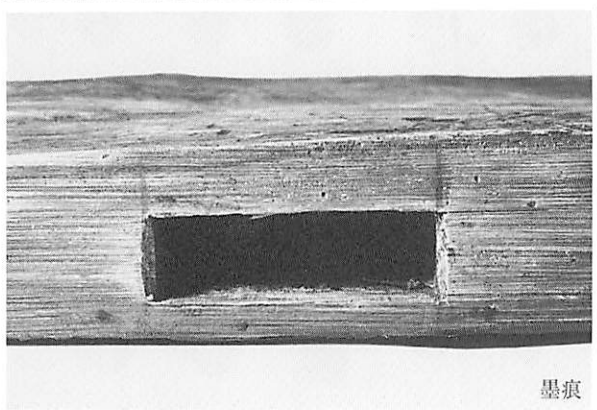


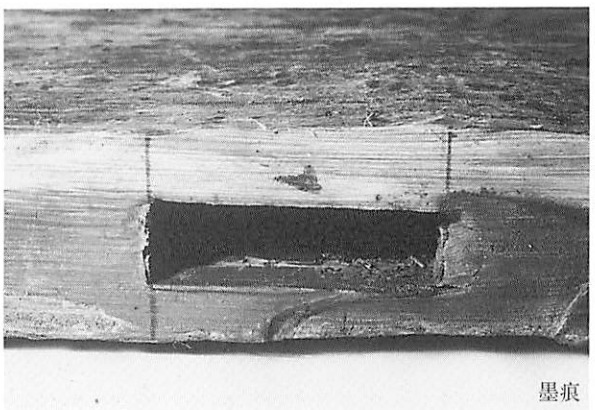






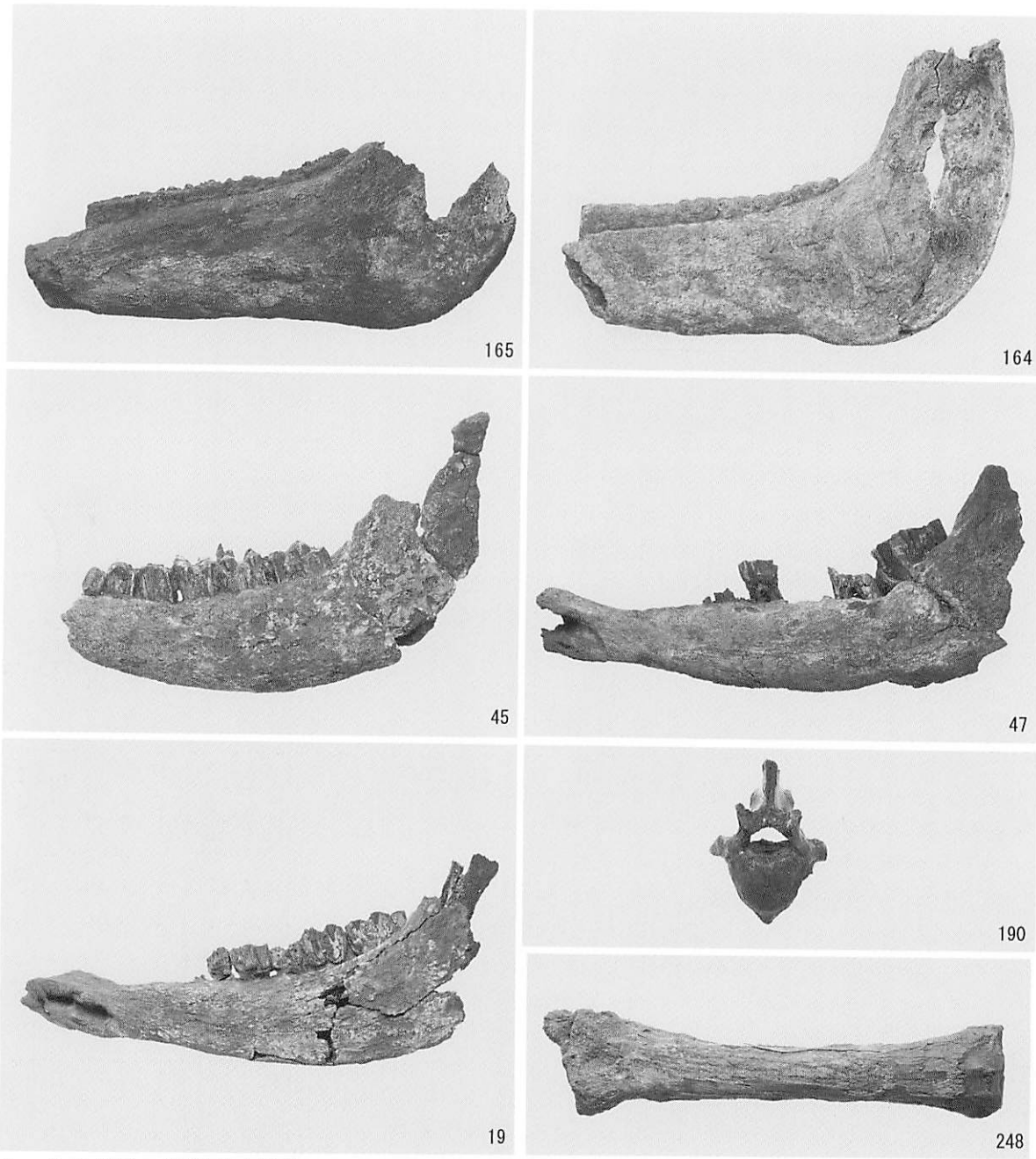




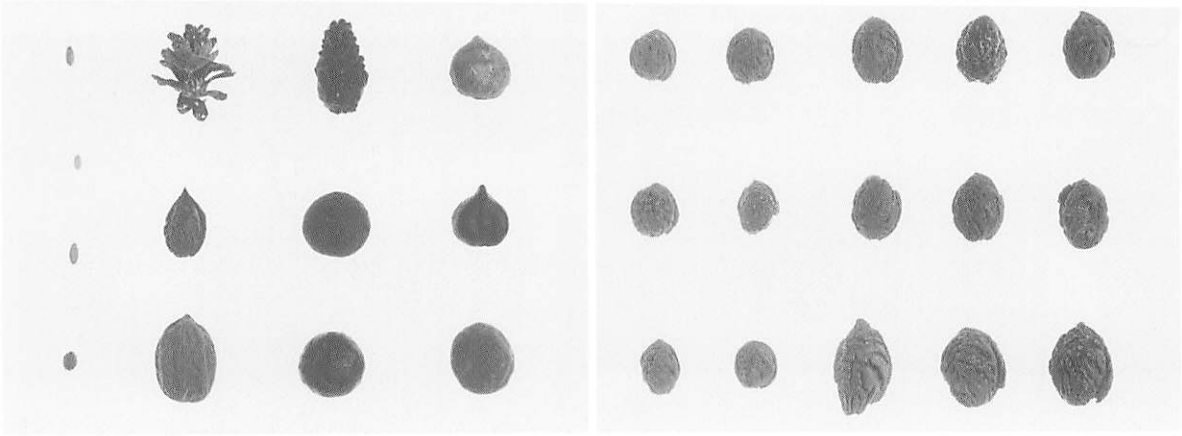


ＳＥ 670 出土井土枠

図版第百四十



1　S R 0001・4200 出土獣骨



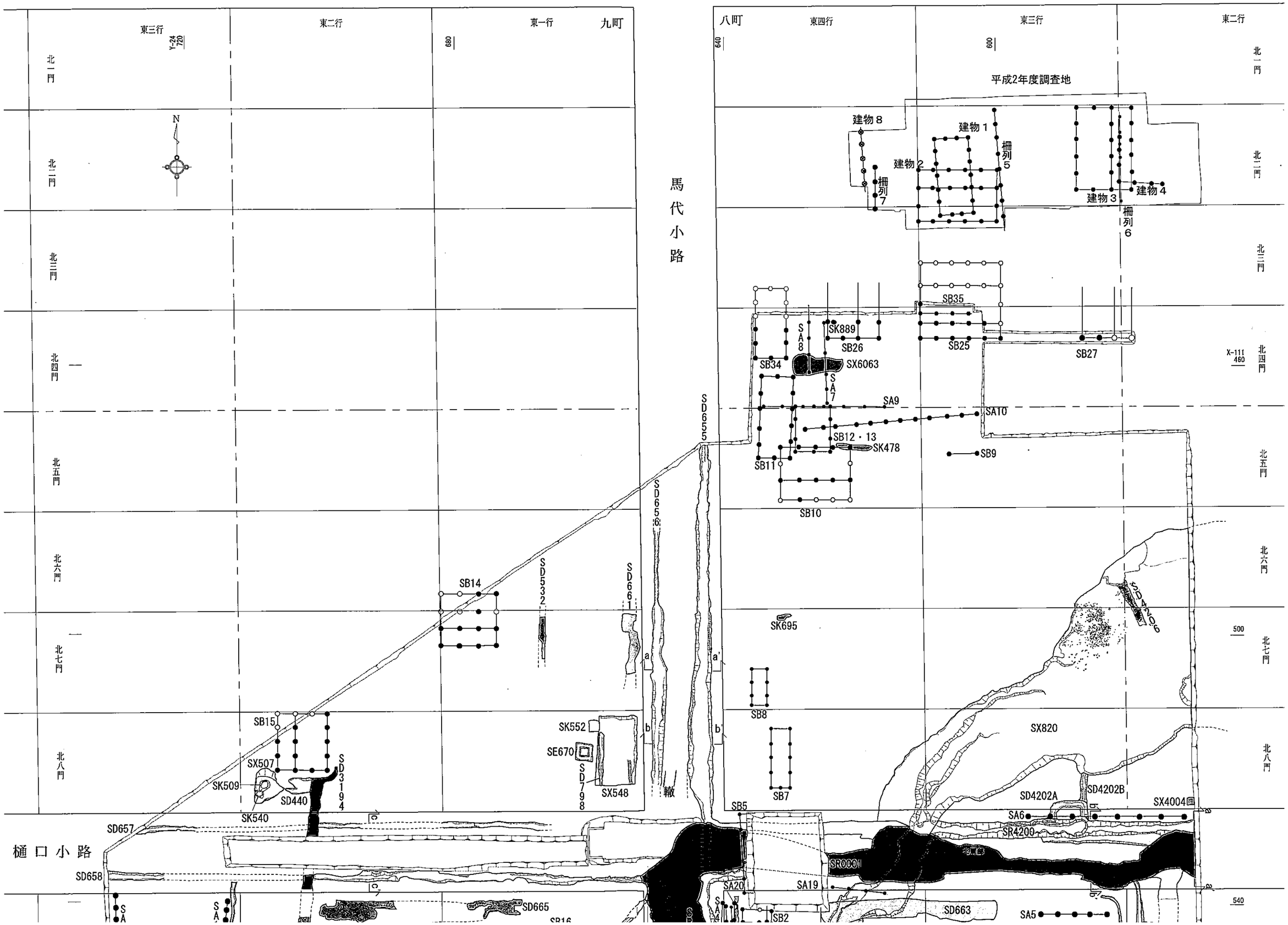
2　S R 4200 出土種子

報告書抄録

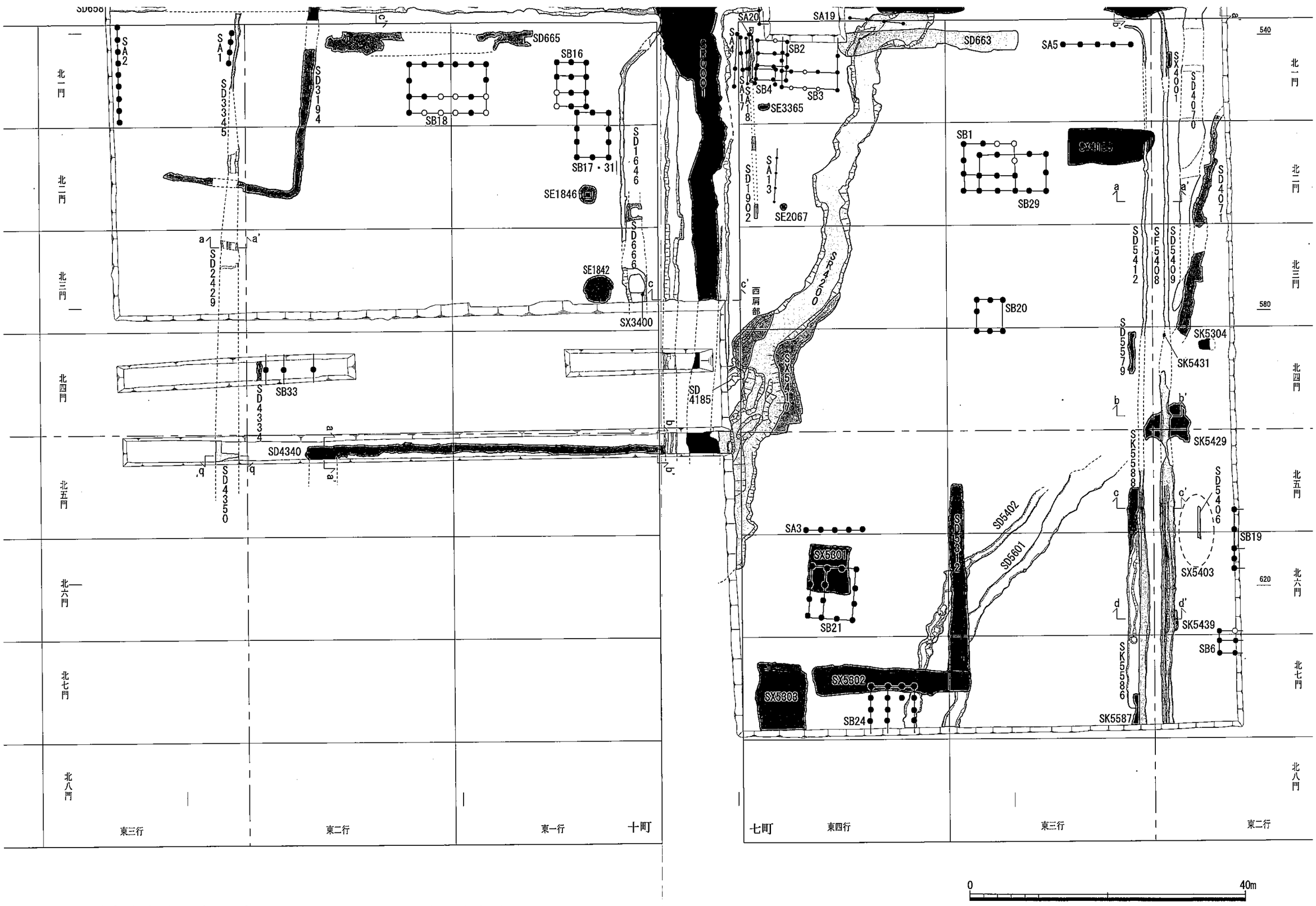
ふりがな	へいあんきょうあとけんきゅうちょうさほうこく
書名	平安京跡研究調査報告
副書名	平安京右京六条三坊
巻次	
シリーズ名	平安京跡研究調査報告
シリーズ番号	第20輯
編集者名	堀内明博
編集機関	財團法人古代學協會・古代學研究所
所在地	〒604-8131 京都市中京区三条高倉西入菱屋町48　TEL 075-252-3000
発行年月日	2004年3月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″		㎡	
平安京跡（へいあんきょうあと） 平安京右京六条三坊 七・八・九・十町	京都市右京区西院（きょうとしうきょうくさいいん） 追分町（おいわけちょう）25-1,25-2	26100		34° 59′ 38″	135° 43′ 47″	20001106 ～ 20011015, 20020914 ～ 20021108	20,880	商業施設 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京跡 平安京右京六条三坊 七・八・九・十町	宮都	中世	南北・東西小溝，柵列，建物跡	土師器，白磁，青磁，瓦器椀，瓦器，陶磁器	平安時代前期の建物群，園池，金属加工関連施設，獣骨を含む多量の祭祀関連遺物
		平安時代	溝，路，木棺墓，柵・塀，建物跡，川跡，池，井戸，炉跡，導水施設	土師器，須恵器，灰釉陶器，鳥形瓶の鳥紐蓋，風字硯，蹄脚硯，宝珠硯，緑釉椀，越州窯系青磁毛彫合子蓋，黒色土器，墨書人面土器，瓦，陽物，木印，漆器，獣骨，鉄鏃，銭貨，石製丸鞆，銅製帯金具，金属加工連遺物，獣骨	
		古墳時代	流路，建物跡，溝，土壙	須恵器，土師器	
		縄文	土壙，小穴	突帯文土器，波状口縁の深鉢・浅鉢，石鏃，石槍，磨製石斧	



九町
東一行
東二行
東三行
北一門
北二門
北三門
北四門
北五門
北六門
北七門
北八門
N
八町
東四行
東三行
東二行
平成2年度調査地
馬代小路
樋口小路
建物1
建物2
建物3
建物4
建物8
柵列5
柵列6
柵列7
SB35
SB25
SB27
SB26
SB34
SB11
SB10
SB12・13
SB9
SB14
SB15
SB8
SB7
SB5
SB2
SA9
SA10
SA6
SA5
SA19
SA20
SK889
SX6063
SK478
SK695
SK552
SE670
SX548
SX507
SK509
SK540
SD440
SD657
SD658
SD665
SD663
SD4202A
SD4202B
SX4004
SR4200
SR0001
SX820
SD655
SD656
SD661
SD532
SD3194
SD798
SD4206



平安京右京六条三坊七・八・九・十町　平安時代遺構平面図

平安京右京六条三坊

平安京跡研究調査報告　第20輯

発行日　平成16年3月30日

編集
発行　財團法人 古代學協會

604-8131　京都市中京区三条高倉
振替 01080-4-850
Tel. 075-252-3000

印刷　中西印刷株式会社

602-8048　京都市上京区下立売通
小川東入
Tel. 075-441-3155

PALAEOLOGICAL STUDIES

IN THE CAPITAL HEIAN, VOL. XX

EXCAVATIONS OF THE REGIO Ⅲ, DECUMANUS VI IN THE PARS OCCIDENTALIS OF THE CAPITAL HEIAN

THE PALAEOLOGICAL ASSOCIATION OF JAPAN, INC.

KYOTO, MMIV